東方七人録～ある七人の物語～

連夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方七人録～ある七人の物語～

【Ｎコード】
Ｎ２９８５Ｌ

【作者名】
連夜

【あらすじ】
凡人、怪力娘、帝国軍の将軍、召喚士、反乱軍の兵士、魔物になる女、剣豪…それぞれ全く違う立場、異なる世界にいる者達。それらが幻想郷にて交わる…。彼らはそこで何に出会い、何を得るのか…。作者のご都合主義で書かれる、エロあり、レズあり、ハーレムあり、変態あり、キャラ崩壊（徐々に）ありの幻想入りストーリー。
＊この小説は、原作を追わずに全てオリジナルの異変やら事件やらでお送りいたします。
＊修正完了しました！所々変更したり加筆してたりしますので、見

て頂けるとありがたいです。
そんな訳で１５歳未満は見ない方が良いかもしれない。

第零話　幻想の中心で（前書き）

今更プロローグっていうね。

第零話　幻想の中心で

『幻想郷』

様々な世界の幻想が流れ着く世界

忘れ去られた者達の桃源郷・・・それがこの世界

その世界が壊されようとしている

他の世界の者達の手によって…

我々が愛した世界が壊れていく

心無い者達の身勝手によって・・・

世界の終わりを告げようとしたその時

異界より招かれし七人が現る

一人は幻想を否定していた
一人は幻想を夢見ていた
一人は幻想を叶えようとした
一人は幻想の中に答えを見出そうとした
一人は幻想に打ち勝とうとした
一人は幻想の救いを行おうとした
一人は幻想と共に生きてきた

七人には、必ず『幻想』が付き纏っていた

『幻想』に対する思いは違えど、七人には必ず『幻想』があった

生きた時代も、生きた世界も、人生も、何もかも違ったが

七人は、幻想郷を救おうとした

そこに友人が居るから、

そこに恩人が居るから、

そこに愛人が居るから、

そこに仲間が居るから、

そして…

真に幻想郷を愛していたから、

七人は戦う道を選んだ

生と死の狭間

七人は常にその狭間で戦っている

何時死んでもおかしくない

だが死なぬ

何故なら七人は互いに協力し、連携し、庇い合い、救い合い、

助け合っているからだ

それは容易な事では無い

だが七人はそれを行っている

まるで大昔前からずっと行ってきたかの様に・・・

この世界を暗黒に閉ざそうというのならば

七人は動き、暗黒の訪れを告げる者を打ち滅ぼそうとするだろう

これは平行された無数の幻想郷の中の一つの『幻想郷』の物語

幻想の中心で生きた者たちの物語

まずは一人の人間に目を向け、この世界を知る

そう、これは序章・・・

始まりに過ぎないのだ

全ての歯車が噛み合う時、世界は動き出す

さあ。物語の始まりだ

第零話　幻想の中心で（後書き）

というわけでプロローグ。これで色々と矛盾消えたかな・・・

ここから読み始める人が多くなると思うので、改めて挨拶。

文章力が低い小説となりますが、これからよろしくお願いします。

第一話　ある夏の日

世の中はこの「夏」という季節をどう思うのだろうか？

自分としてはただ暑くて、熱中症になりやすくて、かったるいだけの季節と思っている。

講習で学校に行かなきゃならんし。

一人、猛暑の中を歩く自分は何なんだろう…

言えることはただひとつ。

暑い…

「はぁ…コンビニでも寄ろうかな…」

講習に行かずに。

そうでもしないと死ぬ、本当に死ぬ。

うつむきながら猛暑の中を歩いていたら、

ふと、道の脇の草むらに何か光っているものを見つけた。

何かは分からないが、興味本位で覗いて見ることにした。

時間潰したかったのが本当の目的だったんだけどね。

草むらを覗いて見ると、指輪があった。

草むらにあったにしては妙に綺麗だった。

「何でまたこんな所に？」

謎に思いつつも、とりあえず拾った。

近くで見ると尚綺麗さが際立った。

「綺麗だな…」

・・・

・・・・

・・・・・

貰っちゃおうかな。

そんな欲が出て、指輪をポケットに入れようとしたら、

目の前の空間が裂け、

目玉だらけの小さな空間が現れた。

「えっ、ちょ、な、何事！？」

動揺している最中、目玉だらけの空間から女性が姿を現した。

「物を拾ったらネコババしてはいけないと、習わなかったかしら？」

突然そんなことを言われた。

てゆうかこいつまさか…

「あんたひょっとしてゆかｒ」

「悪い子にはお仕置きしないとねぇ」

俺の言葉を遮り、突然空間に潜っていった。

そして、俺はその空間に引きずりこまれた。

第一話　ある夏の日（後書き）

初投稿なので、至らぬ点があるかもしれませんが、何とぞよろしくお願いします。

第二話　スキマ内部にて

空間の中、とゆうか相手が「あいつ」と分かったので、「スキマ」と呼ぶことにする。
まぁとにかくスキマの中に俺はいた。
周りは目玉ぐらいしか無い。
んでもって俺を引っ張ってってる「あいつ」。
俺が気絶してると思っているのか、こっちを気にする様子も無い。
だったら声を掛けて、気付かせてやる。

「おい」

相手に聞こえるように言った。

「あら、起きたの？」
「最初から起きてたわ」

「あいつ」は気絶してなかったことに驚いてはいなかったが、何か色々と呟いていた。
スキマを見たショックで気絶したもんだと思ってたらしい。
悪いが見たことがあったから、ぜんぜん問題なかったぜ。

主に動画とゲームでな。

「それでも、もう遅いわ。もう自力で戻ることなんて出来ないもの」

そう言って「あいつ」は微笑した。

「いや、戻る必要は無い」

「それは何故？」
「これから行く場所に興味があるからさ」
「好奇心旺盛なのね」

「あいつ」は動き続ける。

「だってそうだろう？人や妖怪や神まで受け入れる『幻想郷』に行くんだ。興味が湧かないはず無いだろう…なぁ、八雲紫さん？」

「あら？私の事知ってたの？」
「まぁな」
「ふぅん？」

八雲紫幻想郷内ではトップレベルの実力を持つ大妖怪。『境界を操る程度の能力』を所持している。幻想郷の創立を行ったスキマ妖怪。常人じゃ、とても理解出来ない位に頭が良い。式神に八雲藍がいる。あっ橙も忘れてないよ？バbげふんげふん！

紫は止まり、興味深そうにこちらを見てきた。

やっと止まったか…。

これでやっと質問が出来る。

「いくつか質問したいんだが、良いか？」
「良いわよ」

意外とあっさり了承してくれたな？

まぁこちらとしてはありがたい事なんだが。

「じゃあまずは、何で直ぐに幻想郷に行かないんだ？」

紫の『境界を操る程度の能力』があれば、一瞬にして幻想郷に行く事が出来るからだ。

「理由なんて無いわ。ただの気紛れよ」

聞く程のものじゃなかった…

まぁいい次の質問だ。

「何で指輪で人を釣った？暇と退屈をもてあましてたのか？」

「正解」

「いや、そういう理由で人を幻想入りさせるのは不味いだろ」

思わずため息が出る。

「何かお前ってさぁ、寝ぼけて人を連れてきそうだよな」

「えっ、い、いや、そんなことは無いわよ？」

図星かよ！

まぁいいか。後は…

「こっちからも聞きたい事があるのだけれど、良い？」

質問？何だろうね、まぁ別に良いが。

「良いが…何だ？」
「貴方、名前は何ていうの？」
「名前？ただの人間の名前を聞いてどうすんの？あんた妖怪なのに。」
「それもそうなんだけどね。でも、相手が自分の名前を知っていて、私があなたの名前を知らないのはフェアじゃないでしょ？」

…まぁそれもそうか。

「分かったよ」
「俺の名前は高宮蓮也（たかみやれんや）、ただの高校生だ」
「面白みに欠ける名前ねぇ」
「余計なお世話じゃぼけ」

「ふふっ♪ごめんなさいね」

そう言って紫は笑いかけてくる。

「お詫びにその指輪はあげるわ」

そう言って俺の指輪を握った右手を見た。

「そうかい」

俺は指輪をズボンのポケットに突っ込む。

「つーか、早く幻想郷に行けよ」
「せっかちねぇ」

紫はスキマを開き、幻想郷までの道を開いたようだ。

最初からやれよ…

「それでは此処からは一人で行ってね」

「あっ、おい、俺をどこで降ろすつもりd」

「それでは良い旅を♪」

また言葉を遮られ、外に投げ出された。

今回はヤバイ所から放り出された。

…森の上空だ。

「えっ、ちょ、おいぃぃぃぃ！！！」

俺は落下し、森めがけて突撃する。

「紫ぃぃぃぃ！！てめえ謀ったなぁぁぁ！！」

声も虚しく、俺は森の中に吸い込まれていった…

――ｓｉｄｅ　紫――

…これでようやく五人目ね。まったく、幾ら自分が大っぴらに動けないからって、ここまで酷使しなくても良いじゃない……

…まぁ『あの人』だから別に良いんだけども。

それでも大変な事に変わり無い。お陰でこんなに肩凝っちゃったのよ？どうしてくれるのよ全く。

私は軽く文句を言いながらも、『あの人』の居た世界へのスキマを開く。コンクリート状の大きな建物が立ち並び、大きな道――道路には、人間が開発した乗り物の「車」が走っている。

幻想郷の外と何ら変わらない世界だが、ここにはちゃんと妖怪が存在している。人の目に見える所に当たり前の様に馴染んでいる。

まるで幻想郷みたいなこの世界、そのとある町にあるとある学校に、最後の一人が居る。

『あの人』の子孫でもある。『彼女』が。

「ふふ♪」

『あの人』に似ていると聞いただけで、とてもワクワクしてくる。

『あの人』が指名した人間……どんな奴か楽しみね。

私はスキマに潜り込み、『彼女』の居る学校へと向かった。

第二話　スキマ内部にて（後書き）

次回、蓮也能力覚醒

第三話　能力覚醒（前書き）

時間が無くて投稿が遅れてしまいました…誠に申し訳ありません。

第三話　能力覚醒

紫の野郎、今度あったら絶対に文句言ってやる。

あの後、木の枝に引っかかりなんとか死なずにすんだ。

が、結局落ちて痛い思いをした。

「まぁ死ななかっただけましか」

取り敢えず持ち物の確認をしよう。できるだけ迅速に。

背負っていたバッグを下ろし、中身を確認した。

今ある物は、

筆記用具、教科書や講習用のテキスト数冊、ポテチやクッキーなどのお菓子、ゲーム機（〇ＳＰとかＤ〇）、ゲームソフト、財布、携帯電話、サイダー二本、後、スタンガンや催涙スプレー、そして竹刀を入れる袋に入ってる鉄パイプ

筆記用具や教科書はもちろん講習のため、お菓子は小腹が空いた時の為、ゲームは休み時間の暇つぶし、財布は買い物をするため（ちなみに１５万入ってる）、携帯は連絡用、サイダーは喉が渇いたときの為、スタンガンや催涙スプレー、鉄パイプは護身用だ。

ちなみに鉄パイプは親父の友達の鍛冶屋が特別に作ってくれたものだ。
なかなか扱いやすく、振り回しても飛んでかないように滑り止めもついている。

こんな感じだな。まぁこれなら大丈夫だろ。

……多分

「取り敢えず森を出るか」

長居してたら妖怪に襲われちまう。

俺は取り敢えず、光の射してる方向に進み始めた。

―――――――――――――

森を抜ける事が出来た。
目の前には湖が広がっている。
これが噂の『霧の湖』だろう。

と、なると…

俺は付近を見回した。

そうすると俺の視界に、水色のワンピを着た羽の生えた幼女と、緑色の髪の羽の生えた幼女を捉えた。

「チルノに大妖精ハケーン。」

『チルノ』は霧の湖に住む妖精で、『冷気を操る程度の能力』を所持している。妖精の中では最強で、普通の人間ならまず勝てない。別名？

『大妖精』は、妖精の中では強い部類に入る妖精である。二次じゃＤＩＥちゃんとか言われてるよね。あだ名は大ちゃん

幸い二人とも遊んでいてこちらに気付いて無い様なので、俺はばれないように二人の居る所の逆の道を行く事にした。

「これで、取り敢えず安全に人里に向かえそうだ」

人里何処にあるのか知らねぇけど。

だが、それがいけなかった。

安心しきって忘れてはならない存在を忘れてしまっていた…

歩き出したその直ぐに、黒い球体の形をしたものが、森から出て来たのである。

冷や汗が出た。
直ぐに森に逃げ込もうとした。
だが遅かった。
球体はこちらに気付き、接近してきたのだ。

不味い非常に不味い。
森に逃げ込もうか、でも向かって来てるヤツのテリトリーに逃げるのはまずいよなぁ。
湖に飛び込むか？でも濡れるのは嫌だなぁ、後々を考えると。
じゃあ道は一つしかねぇな…

直ぐさま振り返り、チルノ達が居る方向に全力で走り出した。

兎に角走る…けど

現実は非情である。

簡単に追い越された。

そうだよなぁ、相手は飛び慣れてるんだよなぁ。
そりゃ抜かされるわ。

「逃げないでよー」

そう言って黒い球体から幼女が出てきた。

「お前がルーミアだと知ってたから逃げたんだよ」
「そーなのかー。じゃあ納得～」

軽いなおい。

こいつはルーミア。『闇を操る程度の能力』を所持している妖怪。
そーなのかーが口癖の様に思われてるけど、実際そんなに言ってなかったりする。ＥＸ化は二次だから多分大丈夫。

「ねぇねぇ、あなたは食べても良い人ｒ「良いわけ無いだろ！」えー？」

喰われて死ぬなんて最悪すぎんだろ.ｊｋ…

「あっルーミアじゃない」
「あっチルノちゃんだ。おーい！」

チルノと大妖精まで来ちまったよ…

マジでどうしよう

「あれっルーミアその人間誰？」
「私が食べようとしてる人ｇ「喰わせねぇって言ってんだろ！」え

ー」

えーじゃねぇよあほ

「そういえばあんたアタイのなわばりに入ってるじゃない！いい度胸してるわね！」

「てめえのモンじゃねぇだろ。」

「なに、あんたアタイに喧嘩売ってるの！？」

そんなつもりねぇよ。

取り敢えず、今の状況を何とかしないと…

と言っても何も思い付かないんだけどさ。

「ちょっとあんた！アタイの話を無視しないでよ！」

チルノが怒っているが、無視する方向で。

「あーもう！いいかげんにしろー！」

チルノの怒声と共に、氷弾が飛んで来た。

「危ね！」

反射的に身を引いて、ギリギリのところをかわせた。

だけど、何てことすんだ当たったらどうする！

「もー怒った！ルーミア！大ちゃん！こいつをぼこぼこにするわよ！」

「「分かったよ～」」

「ちょ！おま！」

いやいや、複数で一人を集中砲火は卑怯だろ！
ましてや俺は一般的凡人だぞ！？死んでしまうわ！

「おいちょっと待ｔ」
「くらえ！氷符『アイシクルフォール―ｅａｓｙ―』！」
「人の話を聞けえぇ！！」

叫んだが聞き入れられず、チルノの構えた紙、『スペルカード』から氷の弾が飛んで来た。

だけどあのスペルカードって確か…

チルノの真正面にさっと移動すると、面白いくらいに氷弾が当たらない。

「何で当たんないのよ！」
「目の前が安地とか馬鹿だろ」

東方は二コニコ動画で見尽くしているし、尚且つ全シリーズプレイ済みなので、ある程度の弾幕は何とかなる。

けど覚えてるからって避けられる要因にはならないけどな！

「ムキー！バカって言うなー！」

チルノがプンスカ怒っている。

「チルノちゃん落ち着いて！」

それを大妖精が宥める。うーん良いね、可愛い感じがして。

「お兄さん、余所見してたら危ないよ。」

「えっ？」

俺がチルノ達に気を取られてる隙にルーミアが俺の背後にまわっていたらしい。

俺が振り向く前に弾を撃ってきて、俺の体は宙に吹っ飛ばされてしまった。

間一髪鉄パイプでガードしたが、良い勢いで地面に激突してしまった。

が、その時に左腕を折ってしまった。

「うおぉ…痛え…左腕が左腕が…。」

だが痛がっている場合ではない。三人が今にも襲ってきそうなのだ。

マズイ、くそっ逃げられねぇ…

ならやるしかねぇ…！

鉄パイプを構え、迎撃する体勢をする。

三人は飛び上がり、弾幕を撃ってくる。それを見極めながら徐々に三人に近づく。そして鉄パイプを一旦捨て、小石を大量に拾い三人に向かって思いっきり投げつけた。ルーミアとチルノはそれに気付き避けたが、大妖精は気付くのに遅れて小石が当たった。

頭にクリーンヒットしたらしく、ふらふらしながら落ちて来た。

直ぐ様鉄パイプを拾い、湖に向かって殴り飛ばす。胴体にヒット。

あれは痛い。

かわいそうな事をしたが、これも生きるためだ、許せ。

「あっあんたよくも大ちゃんを！」

チルノが怒りを顕にし、弾幕を撃ちながらこちらに突っ込んで来る。

俺は弾幕を避けながら、バックから催涙スプレーを取り出す。

因みにバックの中身は左腕で受け身を取ったおかげで無事だった。

チルノが俺の近寄れる範囲に降りて来た。

弾幕を避けつつ催涙スプレーの射程範囲内まで接近する。

チルノは怒りで我を忘れているようだ。本当に馬鹿だ。

そしてスプレーの射程範囲内まで接近した。

よしっいける！

だが

「それは使わせないよ！」

ルーミアの放った弾が俺の右手に直撃し、スプレーを湖に落としてしまった。

そして体のバランスを崩し、チルノの弾が体に直撃してしまった。

体が吹っ飛び、木に激突する。真正面からぶつかり体中が折れる音がした。

「やった！」

チルノの感嘆の声が聞こえ、同時に大妖精が湖から現れた。「大丈夫！？」とか「あの人間をやった！」とか聞こえるが頭が朦朧としていてはっきりと聞き取れ無い。

このまま死ぬのかな俺…

死にたくねぇ…こんな所で死にたくねぇ…

俺の体が再生するとかそんな事ねぇと思うが、こんな所で死にたくねぇ…

「……うぅ」

俺の声を聞き、三人はこっちを見る。

「あれ？生きてるよあの人間」

「まだ生きてるの！？なら私が止めをさしてやるわ！」

「えー私に食べさせてよ～」

てめえら好き勝手言いやがって…

俺は喰われるつもりも止めを刺されるつもりも断じてねぇ…！

あぁ出来るならあいつらを炎で燃やしてやりてぇ…

まぁ…そんな事…出来ない…けど…な…

「だから私が止めを…」

「ルーミアちゃん！チルノちゃん！危ない！」

「えっ……きゃあああぁぁ！」

えっな、何事？

顔を上げ三人の方を見ると、火柱がルーミアとチルノを襲っていた。

Ｗｈａｔ？何故に……あれ？何か体中の痛みが無いんだけど？

立ち上がり左腕を動かす。折れてるはずなのに普通に動く。ついでに言うと、弾を受け、破れたはずのワイシャツが直ってる。

どういうことなの…全く持って意☆味☆不☆明。

ふと自分の右手に何か持っていることに気付く。
紙…？いや…これは…！
スペルカードじゃ！スペルカードじゃ！えーとスペル名は、

怒符「怒りの炎」

なんちゅう名前だ、怒符って何よ？

あっそういえば…

三人の方を見る。ルーミア、チルノ共に仲良く燃えてます。大ちゃん大慌て。
そういえばスペルカードを非殺傷に出来るんだっけ？でもやり方分かんねぇ。

取り敢えず念じてみる。

すると、チルノとルーミアを取り巻いていた炎が弾幕に変わり、
その直ぐ後に二つのピチューンという音が聞こえた。

―――――――――――

その後、復活したルーミアとチルノ、大ちゃんを何とか説得し友好関係を築く事に成功した・・・・・けど

「食べちゃ駄目？」

ルーミアの俺に対する食欲は変わらなかった。

だがこのおかげではっきりした事があった。

食欲旺盛なルーミアは、人の腕に噛み付き、腕一本まるごと喰いやがった。

が、俺の腕は直ぐに生えてきやがった。どうやら俺も何か能力を得たらしい。

だが出来た事に共通点が無い。いったい何なんだか…

考えるのは後にしよう。

俺は三人に別れを告げ、人里に向かった。

第三話　能力覚醒（後書き）

感想、意見などを気軽に書いてもらえるとありがたいです。

第四話　竹林～永遠亭にて～

皆さんお元気ですか？どうも、蓮也です。

実は一つ問題が出ちゃったんですよ…

それは…

人里何処だ…？

いやー前に人里何処か分かんねぇって言ってたのに、何やってんだ俺。

取り敢えず、ポテチとサイダー飲み食いしながら適当に道を進む。

まぁ適当に歩いてたらどっかに着くだろ。

――――――――――――――――

しばらくして、気になる場所を見つけた。

『迷いの竹林』である。

これがそうかと言える自信は無いが、幻想郷で竹林といえば『迷いの竹林』以外に思い付くものが無いので、多分そうだろう。

でも入る気にはなれんな…これを知ってるだけに。

取り敢えずスルーしとこう。

そう思い歩き出した時、一人の女性を見つけた。
若い風貌だが髪の色が白く、もんぺを着ている。

とすれば『藤原妹紅（ふじわらのもこう）』以外にいないだろう。

『藤原妹紅』っていうのは『老いることも死ぬこともない程度の能力』を所持している、要は不老不死。実力はかなりのもので並の妖怪では手も足も出ないらしい。通称もこたん。…ｉｎしたお！

しかし、何か様子がおかしい、竹林に入ろうとしたり、入んなかったりしてる。
何か箱のような物を持っているようで、それを見ながらぶつぶつ呟いているのが見受けられる。

何やってんだ？まぁ行き先は『永遠亭』だろうけど、何故行かない？

……話しかけてみるか。

話しかけた理由は……まぁ適当で良いか。
取り敢えず近づいて話しかける。相当考え込んでたらしく、真横まで近づいてやっと気付いた。

「あのー…藤原妹紅さんですか？」
「えぇそうだけど…何で私の名前を？」
「人里であなたの名前を聞いたのですよ。竹林を案内してくれる人だと」

「あぁそうなの、でっ何の用かしら？」

理由は取り敢えず薬が必要とでも言っておくか。

「旅をしていて持病の薬を切らしてしまいまして、薬屋を尋ねたのですが、無くて、他に薬屋はな　いのかと聞いたら、永遠亭の事を聞きまして、場所も聞いたのですが、人が竹林に入るのは危険だと言われまして…案内してくれる人がいるからその人に頼むと良いと言われて、その際に貴方の事を聞きました。」

よくもまぁ即席でここまで口が回るものだ。つーかよく噛まなかったな俺。

「あぁ、そうだったの。ふーん…」

妹紅がまじまじと俺のことを見る。里で見たことが無いからだろう

「貴方…何処から来たの？」

「東から旅をしていましてたまたま此処に来ました」

「……」

不味い、怪しまれたか？

「…まぁ良いわ。案内してあげる」

「ありがとうございます」

あー…何とかなった…

―――――――――――――――

さて、妹紅に案内されて永遠亭まで来ることが出来た。
竹林の中は、本当に迷いそうな構造になっていた。一人で来たら真面目にヤバかったな…

そういえば、妹紅の持っている箱は何なんだ?誰に渡す物なんだろう…?

「ちょっといい?」

妹紅に呼び掛けられ、考えるのをやめる。

「何でしょうか?」

「この箱を『輝夜(かぐや)』って奴に渡して欲しいの」

そう言って、手に持っていた箱を差し出す。
取り敢えず受け取る。

「お願いできる?」
「良いですよ。送ってもらった礼も有りますし」

そう言うと、妹紅はふっと息を吐き、「ありがとう」と言ってきた。
それで、俺が永遠亭に入ろうとした時に、俺を呼び止め、紙を渡して去っていった。
渡された紙の内容を読んで、ある事を確信した。

てるもこフラグｋｔｋｒ

俺は思わず笑顔をこぼしながら、永遠亭の中に入っていった。

―――――――――――――

さて、永遠亭の中に来ました。外に「営業中」って書いてあったから大丈夫だと思ったが、待合席と思われる所には誰もいなく、しーんとした雰囲気が漂っていた。

あれーいないのかな…そんな事は無いと思うけど…

「すみませーん、誰かいませんかー」

……へんじがないただのしかばねのようだ。

いや誰も死んでねぇよ。

そんなボケを心の中でしていたら、奥から赤と青で構成された奇抜な格好をした女性が現れた。

この女性の名は『八意永琳(やごころえいりん)』、『あらゆる薬を作る程度の能力』を所持している。…まぁ要は天才だ。色々あって『蓬莱山輝夜(ほうらいさんかぐや)』や『鈴仙(れいせん)・優雲華院(うどんげいん)・イナバ(いなば)』、『因幡てゐ』らと共に過ごしている。元月の民で通称えーりん。えーりん！えーりん！

「今日は『営業休止』にしているって出てなかったかしら？」

「『営業中』ってなってましたけど…」

「…てゐ…またやってたのね…今は大事な時期なのに…」

てゐってことは、書き替えてたのかあの兎詐欺、余程暇なのか…。

てゐってのは『因幡てゐ』の事。妖怪兎のリーダーで、『人間を幸福にする程度の能力』を所持している、嘘つきな性格なので兎詐欺。某動画のてゐはマジでやべえ。

何か大事な時期って言ってたけど、まぁ新たな薬の実験か何かだろう。

「はぁ…来てしまったものは仕方ないわね…どんなご用事で？」

永琳はため息混じりに問い掛けてくる。

「あー…持病の薬を処方して貰えないかと思いまして」

そう言うと不思議そうな顔してこちらを見てくる。

あれ？変な事言ったかな？

「へぇ…それだけの『力』を持ちながら、自力で治さず、薬に頼るなんて…私はてっきり襲って来るものかと」

は？……何言ってんだ？『力』って何ぞ？つーか何故襲うって思考になった？

「あの…言ってる事がさっぱり分かんないのですが…」

「あら…自分の『力』に気付いて無いの？以外ね…」

「いや、何を言ってるんですか！？確かに色々（と言ってもそこまでなかったけど）出来ましたけど、強いわけないと思いますよ！」

「ふーん…あくまでシラをきるつもりなの。まぁそういう事にしたいなら、そういう事にしてあげるわ」

いやそういう事も何も、あれぐらい幻想郷じゃ当たり前だからなぁ…それだけじゃ強いとは言えないと思うんだけどなぁ。

ん？もしかして一般基準でか？

「まぁいいわ、本当に薬が必要かどうか検査しましょう。その時に『力』についても教えてあげるわ」

永琳は手招きをし、付いてくるように言った。

何だかなぁ…まぁいいや自分の能力を知りたいと思ってたとこだったからちょうど良いや、このままホイホイ付いて行ってやるぜ。

――――――――――

とゆう訳で永琳に付いて行き、来たのは「診察室」、様々な機械類が置いてあり、俺の世界で見た事がある物もあった。まぁ多分これ全部月の技術で作った物なんだろうけど。

部屋に入った後、永琳は検査の手順を説明した。レントゲン検査や身体検査、視力・聴力の検査、貧血検査等々、そして魔力・霊力・妖力・神力の検査までされた。

検査をしている時にどうやって幻想郷に来たのかとか、初めて力を使ったのはいつかとか、幻想郷について知っているかとか、色々聞かれた。嘘をついてもバレる気がしたので、洗いざらい全て話した。

永琳や他の永遠亭住人についても話した。能力、スペルカード、過去など、とにかく話した。

聴いてる時の永琳無口だったんでむっさ怖かった…。

まぁそんな感じで、三・四時間くらいで検査は終わった。今永琳から結果を聞くところだ。

結果はどうだったんだろうね。

「さて、あなたの検査結果だけど…」

「どうだったんですか？」

「あなたの身体は健康そのもの、だから詳しい話は省くわ。それであなたの『力』についてだけど…」

永琳はそこで言葉を切る。

「確かついさっき『力』を初めて使ったのよね？」

「えぇそうですけど…。」

「ふぅん…。」

……何か考え込みだしたんだけど、結局結果はどうだったんだよお！

「……良い実験体になりそうね…」

…あれ？今嫌な言葉を聞いたような…？実験体って言ってたような…。

「…あ、ごめんなさい、考え事をしていたもので。」

「はぁ…？」

早くしてくれ…早くしないと、俺の我慢が有頂天になるぞ！？

「結果は…、霊力・大、妖力・大、魔力・大、神力・小、という感じよ」

……へ？何その結果、怖い。つーか神力って…何でそんなもん宿ってるん？

「どうゆう能力なのかは…まぁ、客間ででも話しましょ。長くなるかもしれないし」

「…へ？あぁはい。」

客間って…何か急にもてなされたな…？

「…ふふふ♪良い実験体が見つかったわ♪」

……あれ？永琳さん永琳さん貴女は何を言ってはるんですか？あれフラグ建っちゃった？ちょw永琳さん顔が！顔がにやついてますよ！ねぇちょっと永琳！えいりーん！！

第四話　竹林～永遠亭にて～（後書き）

また…期間が…空いてしまった…。すいませんもう少し早く出来る様にしますｏｒｚ。意見、感想を書いて頂けると有難いです。

第五話　客間にて

今、俺は永遠亭の客間にいる。畳の匂いと中庭の景色が、日本人の俺を刺激する。それに加えテーブルの上にある緑茶と煎餅が更に俺を興奮させる。ビルばかりの俺の世界じゃあまり見ないものだからとても嬉しい。

緑茶を飲みつつ、テーブルを挟んだ向こうにいる永琳に目を向ける。さっきから一時間程話が進んでいない。いい加減話を進めてほしいものだ。

…そういえばもこタン（妹紅）から箱を預かっていたな。これをきっかけに聞き出してやろう。

「そういえば永琳さん」
「呼び捨てで良いわよ」
「へ？…はぁ、じゃあ永琳。貴女のとこの姫様に渡してほしいものがある」

そう言って渡された箱と手紙をテーブルの上に出す。

「これは？」
「妹紅から預かった物です。中は見てません」
「ふぅん……ちょっと見せて貰うわね」

そう言うと永琳は箱を手に取り、ぱっぱと外装を外し、箱を開け中身を取り出した。
出てきたのは数冊程の本で、全て仕事に関するものだ。表紙から外の世界の物だとすぐに分かった。

…ん？仕事に関する本…？つーことは永琳の言ってた『大事な時期』ってまさか…。

「あー…永琳？永琳が言ってた『大事な時期』って…『輝夜』の就職活動の事なのか？」

「えぇ、そうよ」

…うそーん、二次が入ってない？いったいどうゆう事なの…

「ふふ、彼女も気が利くわね。でも、もう殺し合いを止めたのだから直接渡しに来れば良いのにねぇ…」

そう言って流し目でこちらを見てくる。

俺に同意を求めているのか？まぁ何にせよ返事をしとくか。

「まぁ仲直りしたとはいえ、今までの事を考えれば会いづらい部分はあると思いますよ。それに、自分の目が正しければ妹紅は輝夜に対して特別な感情を抱いているから、余計会いづらいのではないでしょうか」

「確かにそうかもしれないかもね…。ちなみに特別な感情ってどうゆう事？」

「へ？…あー、いやそれは…」

永琳が微笑んでいる。絶対分かってるよこの人…。

「まぁ良いわ、これは姫様に渡しておくから」

そう言って永琳は、本を箱にしまい横によけた。

「つーか永琳！いい加減俺の能力について話してくれよ！」

思わず素が出てしまった。が、んな事はどうでも良い、溜めが長いよ永琳！

「ふふ、素が出たわね。その方が話し安くて良いわ♪」

…へ？話し安いって……もしかしてその為に溜めてたん？何じゃそりゃ。

「話し安くなったから話してあげるわ。よく聞いて」

その言葉を聞き俺は真面目に聞く体勢になる。

「あなたの能力は…『幻想を実現する程度の能力』よ」

……

……

……

…はい？

何そのチート能力、ないわーそれはないわー。

「あー…どうゆうものかは解るけど…発動条件って何？」

「条件？それは考えればすぐに解るはずよ」

「んな事言われても…。」

…条件。そういえば、初めて能力が発動したのってルーミア達と

戦闘した時だよな…確かあの時は死に掛けていて、この傷が治るはずが無いって思ってた…そして、炎をで燃やしてやろうとか思ってて、でも出来ないって思っていた…。そしたら、傷が治ったり、炎が出たりした。

…出来ない？そういえばこれらは出来ないと思っていた事だ。…ということは…。

「発動条件は…俺が出来ないと思う事。違うか？」
「…ふふ、正解よ」

永琳は満面の笑みを見せている。

…が、実感が沸かん。出来ない事をやりたいと思うだけで出来るってゆうなら分かるが、出来ないと思うって…意味が解らん。

「なんつーか…変な能力だって事は分かった。が、どう使えばいいか解らないんだけど…」
「簡単なことよ。やりたい事を否定的に考えればいいのよ」
「否定的に考えるって事自体が解りずらいんだって。普通そんな事ぽんぽん考えられないって」
「ふむ…確かにそうね…」

永琳は顎に手を当て、考え始めたようだ。
俺はどうすりゃ良いか何も思い付かないので、煎餅を食いながらぼけーっとする。

――――――――――

十分くらい経った。

俺は何も思い付かず（つーか考えて無い）煎餅をかじっていた。

「…この方法ならいけそうね」

おっ？永琳が何か思い付いたようだ。何だろう？出来れば痛くない方法であって欲しい…。

「ちょっと待ってて」

そう言うと、永琳は部屋を出てってしまった。

何だかよく分からないが、取り敢えず緑茶でも飲んでマターリしてよう。

とか思ってたら、五分も経たずに戻ってきた。

ウサ耳付けてブレザー＋スカートを身に着けた少女を連れて。

こいつは『鈴仙・優曇華院・イナバ』、『狂気を操る程度の能力』を所持している。元月の兎。永琳は彼女の師匠である。人によって呼び方が違う。新参ホイホイ言うな！

つーか鈴仙連れてきてなにする気だ？あーもう嫌な予感しかしねぇ。

「あの…師匠、この人は誰ですか？何を目的に私を連れてきたのですか？」

「二つも一度に質問しない。まぁいいわ、彼についてだけど…」

薬師説明中…

「取り敢えずこの人については解りました…けど、私は何をすれば

いいのですか？」

それは俺も気になってた。

「まぁ簡単なことよ」

そう言って、俺と鈴仙を見る。

「…あなた達に『スペルカード戦』をやって貰いたいのよ。」

……

「「はい？」」

俺と鈴仙、揃って気の抜けた返事をする。

何故そうなる。意味が解らん。それでどうやって俺の能力を理解しろというのだ？

「しっ師匠どうゆう事ですか？」

「言葉通りの意味だけど？」

「いや、する事に何の意味が有るんだよ！」

「やっていくうちに解るわ。さぁ今すぐ始めなさい。」

「そんな～、勝手に決めないで下さいよ～。」

「そうだ！それに俺はスペルカード一枚しかねぇんだぞ！」

「あら…本当に『持ってない』の？」

「あー本当だとも！今見せてやる！」

すぐさまカードを入れたポケットを探る。一枚しかないのは事実だから、二、三枚もある筈がない。

…だが、他のカードがあったのだ。どうゆう事なんだ…一体いつこのカードが…？

…まさか能力か？能力によって『たった今』生み出されたのか？

「ふふ、どう、他にカードはなかった？」

「…あった」

「そうなら問題ないわね？それじゃあ二人共付いて来て」

永琳め、俺に『ありえない』と思うように誘導しやがった。まんまと永琳の策にはまっちまった。

鈴仙はもう諦めたという顔をして、肩をすくめている。

…はぁ、もうどうにでもなーれ。

第五話　客間にて（後書き）

やっと忙しい時期が過ぎ去って、時間が出来ました。これから、少しか更新ペースがあがると思います。遅れて申し訳ございませんでしたｏｒｚ

質問・意見・感想など、書いて頂けるとありがたいです。

第六話前編　ｖｓ鈴仙～竹林にて～（前書き）

今回は、話が長くなってしまったので前・後編に分けました。

第六話前編　ｖｓ鈴仙～竹林にて～

竹林を進んだ先にある広い場所。そこに俺は居た。俺の目線の先には鈴仙がいる。準備は良いようだ、つーかむっさ気合い入ってるよ…。

――――――――――

少し前、永琳は勝負に勝った方に『褒美』を与えると言った。

その褒美とは…

対戦相手に一つだけ命令する事が出来るというものだ。ちなみに相手が許す範囲内で、だそうだ。

それを聞いた後、鈴仙は凄いやる気になった。切り替え早ぇなおい、まぁ俺もだけどな。

ちなみに鈴仙が勝った場合、俺が代わりに永琳の薬の実験台になる、だそうだ。ひでぇ、別にいいけど。

俺が勝った場合は……鈴仙に俺の事を『ご主人様』と呼ばせる…ＤＡ！

一度で良いから東方キャラにご主人様って呼ばれたかったんだよね。

それらをお互い同意の下、お互い位置に着いた。

―――――――――――

何だかねぇ…成り行きでやる気になっちゃったけど大丈夫かな…？

そういえば、永琳が勝負が終わったら俺に話があるって言ってたな、まぁろくな事じゃねぇだろうけど。

俺は鉄パイプを構え、準備良しの合図をした。

―――――――――――

まず通常弾、赤と青の弾が交差しながら迫ってくる。これは基本的に弾の間を交互に避けるだけで何とかなる。飛んで来る弾を集中を切らさないよう、落ち着いて避ける。意外に避けれているが、喜んではいられない。こちらは通常弾を出すことが出来ない、それ故にスペルカードのみで落とさねばならない。辛いものだ。

鈴仙はまだスペルカードを使う気配を見せない。さっさと使って欲しいんだがな、使おうとした瞬間に一気に真下まで踏み込んで、スペルカード使う予定なんだけどなぁ…早使えっての。あっ、ちなみに鈴仙は飛んでるよ。畜生、俺は凡人だから飛べねぇんだぞ！

そんなこんなしてたら、突然弾幕が止んだ。

ついにスペカか？

「…あなた、何で弾幕を撃たないの？」

へ？質問？えーと…答えるべき？

「単純に通常弾が出せないだけだ。」
「通常…？」

あっ通じんかった。それもそうか、俺居た世界じゃ通常弾って呼んでるけど、幻想郷じゃそう呼ばないんだっけ。

「使えないなら能力で使えるようにすれば良いじゃない？」
「そんな上手くいくわけねぇだろ、常識的に考えて…。」
「ふぅん…まぁ良いけど。」

鈴仙はまた弾幕を出し始める。今度は派手に見える３ｗａｙ。これは落ち着いて引き付けて、出来た隙間に入って避ける。…しかし弾幕っていっても、そんな簡単にだせねぇよ…。そう…例えばこう鉄パイプを振ったら出るとか、そんな事あるわけねぇよ。

そんな事を考えながら、無意識に鉄パイプを振る。すると、振った後に弾が出たのだ。無意識に、それもがめしゃらに振ってたもんだから、四方八方に弾がバラけて飛んでいった。

鈴仙は突然飛んできた弾幕に驚いていたが、難なく避けていた。

「出せるじゃない。それも能力？」
「あー…多分そうだと思う、うん。」
「色々出来るのね、その能力。もしかして、飛ぶ事も出来るんじゃない？」
「いや…ねーよ絶対。」

そんな簡単に飛んでしまったら、鳥さん達に失礼だろうが。…って何でさん付け？

まぁ良いや、飛べって言うなら飛んでやろうじゃねぇか！見てろ、今に笑いの渦が出来るぞ！

一呼吸おいて、思い切り地面を踏み、垂直に飛ぶ。さぁここからだ、このまま何事もなく俺は着地するは、は、はるぇー？

浮いている。落ちる事無く浮いている。やべぇ鳥さん達すいません、飛べちゃいました。

「…あぁそうか、師匠の狙いはこういう事だったのね。」

ふぇ？何を理解したんだ一体？

「…良し大体把握したわ。なら攻めないとね。」

え？何？スペカ来るの？来ちゃうの？

「懶符『生神停止（アイドリングウェーブ）』！」

鈴仙がスペカを使用すると、俺を囲む様に使い魔が四鬼位置に着く。そして直ぐ、波の様な弾幕が飛んで来る。

あれ？しょっぱなからそれ？『マインドシェイカー』が先じゃねぇの？ゲームの流れからしたら。

ってんな事考えている場合じゃねぇ！しゅ、集中せねば。

落ち着け…これは知っているスペカだ…確か避け方は…。

まず中央で兎に角弾を撃つ。そして鈴仙が幻視をした時に後方に下がる。んでボムを使う…ってのがゲームでの攻略法。

だが、これは現実。ボムをポンポン使えるわけでは無いし、こちらが撃った弾は無論避けられる。

それ故にこの攻略法はあまり通用しないものだと思う。一応他に考えはあるが、正直面倒臭い。取り敢えず増えてたスペカを使ってみるか。

動きながらスペカを構える。使い方はルーミア達との戦闘で大体把握しているので問題無い。

新しく手に入ったスペカは二枚。まずその一枚を使う。…ふー…いくぜ。

吹雪「ノースブリザード」

スペカを発動した瞬間、縦に並んだ弾幕と横に並んだ弾幕が出現し、交差して碁盤の目の様な形を描く、その時に出来た空間は大体人二人分は入る程度の大きさだ。弾幕は縦列は右と左に、横列は上と下にバラバラのタイミングで交互に動く、そして米弾が多方向から飛んで来る（ゲーム的に表すと）。

さらに、俺が右や左に動くことで一部の縦列の弾幕が同じ方向に動く。

これにより、空間が狭まったり広がったりするため、最悪の場合物凄く狭い空間に閉じ込められる…というものだ。

まぁ、弾幕の列に隙間はあるから避けようと思えば避けられ無い事も無いだろう。つーか訓練された幻想郷住人なら避けられるだろうなぁ。

予想通り鈴仙は苦戦しながらも、見極めながら避けている。鈴仙のスペカはこの際に時間切れで止んだ。

流石だよ…いやマジで。

「なかなかやるじゃない。」

「…それ程でも。」

スペカの耐久時間が0になり、弾幕が止む。このままじゃ不味いな…。長引かせるのはこっちが不利になるだけだ。なら一気に接近するか？しかし近づけば鈴仙の『瞳』の餌食になるだけだ。あの瞳は恐ろしい…使われたら狂気に陥ってしまう…。あれが通じ無いなら一気に行けるんだけどなぁ。まぁ無理だろうな。

……あれ、そういえば今のって『否定的な考え』じゃないか？なら能力発動したのか今？…いや待てそんな簡単に能力が発動するわけが無い。…しかし、もしそうだとしたら…。

…一気に攻めてみるか。もし可能性があるなら、俺はそれに賭けてみたい。

「どうしたの？もう手の内が尽きた？」
「…尽きた？…いや、まだ『とっておき』が残っている！」

ポケットから最初に手に入れたスペカを取り出す。

チャンスは一回だけだ。一気にケリを付けてやる。

怒符「怒りの炎」

スペカ発動後、鈴仙を取り囲む様に炎状の弾幕が出現する。弾幕は鈴仙の周りを高速に回転しだし、視界を塞いだところで米弾の嵐が降り注ぐ。

鈴仙は避ける事に必死になっている為此方に意識がいっていない様だ。

今がチャンス。一気に攻めて終わらせる！

力一杯空を蹴り、鈴仙の方まで一気に行く。そして、近くまで行ったら直ぐにスペカを解除する。

鈴仙は俺の接近に驚いて後ろに下がるが、俺の接近スピードの方が速く、目の前まで近付く事が出来た。

ここまでは予定通り。重要なのは次だ。

「これで終わりだ！このまま落としてやｒ「えぇ確かに終わりよ…貴方がね！」！」

鈴仙の瞳が紅に光る。これは鈴仙が、狂気を操る力を発動させる時に出る。

「不用意に近付きすぎたわね！最早逃げられ無いわ！このまま狂気に堕ちなさい！」

「…！」

完全に瞳を見た。普通の人間なら、簡単に狂気に陥る筈だ。

……が、

「残念だったな…俺にはその瞳は『通じ無い』ぜ？」

「…え、嘘…。」

鈴仙は俺に能力が通じなかった事に驚きを隠せ無いでいる。

俺は、最後のスペカを取り出し鈴仙に向けて構える。

「チェックメイトだ。」

迅雷「駆け抜ける衝撃」

雷の様に素早い弾幕が鈴仙に向かって飛んで行く。目の前だった為、鈴仙は避ける事が出来無いまま弾に被弾した。

そして、竹林一帯にピチューンという音が鳴り響いた。

第六話前編　ｖｓ鈴仙～竹林にて～（後書き）

スペカの名称の由来

怒符「怒りの炎」
これは、人が怒りを覚えた時に表現される炎をイメージして付けました。
…まんまですね。

吹雪「ノースブリザード」
簡単に言えば、北海道の稚内に起きる吹雪をイメージして付けました。
…単純だｏｒｚ

迅雷「駆け抜ける衝撃」
人に雷が落ちたら凄い衝撃が駆け抜けるんだろうというイメージで付けました。
…最早何も言うまい。

って感じです。

取り敢えず後編に続きます。

第六話後編　ｖｓ鈴仙～決着…そして～（前書き）

という訳で後編です。

第六話後編　ｖｓ鈴仙～決着…そして～

スペカ戦の後、俺は気絶した鈴仙の看病をしていた。

当たりどころが良かったのと、思ってたよりスペカの威力が高かったのが原因らしい。すまん鈴仙。

あっ、ちなみに鈴仙は今俺の膝の上で寝てます。可愛い寝顔しよってこいつ。頭を撫でてやる、目一杯な。

「撫でてるとこ悪いけど、話をして良いかしら？」

「んぁ？…あぁ良いよ」

そういえば話があるって言ってたな。何だろね？良い話であると願いたい。…つーかそうであって。

「貴方…住む宛てはあるの？」

「…あ」

そういえばその事をすっかり忘れてた。今から人里に行くのは不味いよなぁ。もう日が落ちてるし。

「その顔だと何も考えて無かった様ね…」

「…えぇまぁ」

永琳が呆れ顔で溜め息をする。

…ていうか、あんたが長い事俺を引き止めてたんでしょうが！何で溜め息を吐かれなきゃならんのか…。

「まぁ計画通りなんだけどね（ぼそ」
「へ？今何て？」
「別に何でも無いわ」

いや絶対何かあるよね？聞こえなかったけど、嫌な事呟いてたような気がするよ？

「…そうね、なら永遠亭（ここ）に住まない？」
「…え？」

おいおいマジか？こんな素性も知れない男を住ませて良いのか？

「良いのか？」
「えぇ。その方が貴方にも私にも利益があるしね」

…俺の利益は解るとして、永琳の利益って何だ？…まさか実験体って意味か！？

「おいあんたの利益ってまさk「えいりーん、一体さっきから何が起きてるの？」へ？」

声のした方を振り向くと、重そうな動きづらそうなを服を来た女性と、人参のアクセサリーを身に着けたウサ耳の幼女が居た。

『蓬莱山輝夜（ほうらいさんかぐや）』と『因幡（いなば）てゐ』だ。

『蓬莱山輝夜』は竹取物語でも出てくるかぐや姫その人で、永琳と同じく元月の民。しかも姫。
『永遠と須臾を操る程度の能力』を所持している。ニートって言わ

れてるけど、それは二次。

てゐは、前に詳細を思い出したからスルーで。

「あっ姫様、後てゐも、丁度良かったわ。紹介しますこちら…」

「高宮蓮也です。宜しく『蓬莱山輝夜』さんと『因幡てゐ』さん？」

「え…どうして私の名前を…？」

姫戸惑う。

「どういう事ウサ？師匠、私と姫様の名前教えましたか？」

兎驚く。

「いいえ…教えて無いわ。彼は私達や幻想郷について、最初から知っていたみたいね。」

「へぇ…それは興味深いわね。」

「何だか気持ち悪いですねー。」

興味深いも気持ち悪いも、分からん事も無いなぁ…知らない人間が、自分の事を知ってたら、そういう気持ちになるかなぁ…。

…興味深いは無いか。

「取り敢えず、話したい事があるから鈴仙にも起きて欲しいのだけれど…」

「…しばらくは起きないと思うぞ」

「そうなのよね…。あっ、貴方の能力で起こせない？」

「俺に頼んな。つーかあんたが薬使って起こせば良いじゃねぇか」
「早めに済ませたいから薬を取って来る時間が惜しいのよ。ねぇ…頼めない？」

笑顔で頼むな。つーか後ろに怖ぇオーラが見えるんだけど…どう考えても脅してるよね？

…はぁ、分かったよやりゃ良いんでしょ全く…

しかし、気絶した人間ってどう起こしゃ良いのよ。やっぱ能力か？んんと…『俺が気絶した人間を起こせる筈が無い』

…これで良いんだっけ？

さて、後は実行だが…チョップでいくか。

俺は右手を振り上げ、鈴仙のデコに向かってチョップを振り下ろす。結構良い勢いで入った。

「痛！」

鈴仙が悲鳴を上げて起き上がる。本当に起きちゃったよ…。

まぁ、取り敢えず挨拶しとく。

「おはよう鈴仙、良い夢は見たか？」

「ふぇ？あっ、あれ？高宮さんに師匠？それに姫様にてゐも…えぇと、私どうしたんだっけ？」

どうやら状況が理解できずに混乱している様だ。

つーか鈴仙って地上の人間を、さん付けで呼んだっけ？

色々疑問が積るなぁ。何か俺の知ってる幻想郷と違うような…。

取り敢えず事情説明。かくかくしかじかってな。

「あぁ…そうだった…私負けたんだっけ」

やはり負けた事がショックだった様だ。何か申し訳ねぇ…。

「落ち込むのは後にしなさい鈴仙」

「…はい師匠。ところで話って何ですか？」

「大事だけど簡単な話よ。」

「？変な言い回しするわね。ぱっぱと話してくれるとありがたいのだけれど」

「…そうですね。実は彼を永遠亭（ここ）に住ませようかと思いまして」

……

「ふぇ？」「はい？」「ウサ？」

各々から驚きの声が漏れる。まぁその反応は正しいんだけどさ。

「…ちょっと永琳こっち来て。鈴仙もてゐも」

「解りました」「了解です」「了解ウサ」

永遠亭メンバーが輪になって集まる。

「あっ、蓮也だっけ？ちょっと待っててくれない？」
「んぁ？…別に良いけど」
「ありがとうね」

…軽く会議始まちゃったよ。

――――――――――――――
永遠亭会議（蓮也には聞こえていません。）
――――――――――――――

輝「永琳、一体どうゆうつもり？」

永「どうゆうつもりも何も、今言った通りですよ？」

鈴「いや！何で、会って間もない人を永遠亭（ここ）に住ませるんですか！？」

て「今回はいつもより意味が分からないですよ？」

永「まぁ私の私的な理由もあるのだけれどね」

鈴「…それって、薬の実験台の事ですか？」

永「正解」

輝「永琳が薬の実験台に選ぶって事は、余程のものなの？」

永「えぇそうです。彼は不死では無いですが、超再生能力を身に付けています。それに様々な能力を身に付けている事も興味の一つで

すね。しかもまだまだ能力が増える可能性があります故、近くで観察・解剖を行いたいのですよ」

て「それってあっち(蓮也)は了承してるんですか？」

永「えぇ。そうでなくてはあの『条件』を飲むはずが無いわ」

輝「『条件』？」

鈴「えぇと、それは…」

永「先程、スペルカード戦があったのは聞きましたよね」

輝「えぇ…確か勝った方は、相手の許す範囲で一つだけ命令ができるんだったっけ？」

永「そうです。その際に、鈴仙は勝った際には薬の実験を代わりに受けてもらうというものでした」

て「…鈴仙、一人だけ逃げるのはズルイんじゃない？」

鈴「う…」

永「全く…弟子としてあるまじき行為ね」

鈴「だ、だってそれ言ったら、あっちが良いって言うんですよ！冗談のつもりだったのに真に受けちゃって…引くに引けなくなっちゃったんですよ！」

て「見苦しい言い訳はやめな。鈴仙の事だから凄く張り切ってたん

じゃない？」

永「えぇその通りよ。」

鈴「ちょ、し、師匠！余計な事言わないで下さい！」

輝「鈴仙ちょっと静かにして。まぁ大体把握したわ、私は住むのに賛成よ」

て「わたしも良いですよ」

鈴「（う…何か賛成しなきゃいけない流れ…。）」

永「鈴仙は？」

鈴「…良いです」

永「決まりね。それでは会議終了」

鈴「（…どうしてこうなった…？）」

―――――――――――

―蓮也視点―

何か輪になって話してる姿がシュールだな、

そして、話してる彼女達を見て満足してる俺がいる。どうなのよそれは。

…あっ終わったみたい。

「待たせたわね」
「いんや、別に良いすよ」
さて…どうなったんだろうね？取り敢えず願っとくか。
「貴方を住ませる事は全員賛成よ。」
「はぁ……てマジで！？」
許可下っちゃったよ。良いのか本当に？
「但し、条件があります」
やっぱりねぇ。しかも内容は…多分あれだ。
「…大体予想はつく…薬の実験台・俺の体の解剖・雑用ってとこだろ？」
「理解が早くて助かるわ。それで？やってくれるの？」
「ｏｋ、別に良いぞ。俺の能力も大体把握したし、その位なら問題無い」
「そう…理解したのね？それならば、鈴仙と戦った事は無駄では無かったでしょう」
何だかなぁ。まぁ良いけど。
…あっそういえば。
「れいせ～ん？お前何か忘れてない？」

「ふぇっ？ナ、ナンデシタッケ？」

声が裏返ってますよ鈴仙さん？

「忘れた振りはいかんぞ？さっそく言ってもらおうか、ん？しらばっくれるつもりなら……どうなるか分かってるな？」

「（ビクッ）わ、分かったわよ！言えば良いんでしょ！言えば！」

鈴仙は深く息を吸い、大きく息を吐く。何かぶつぶつ呟いてるが、まぁ無視の方向で。

「うどんげ、ちゃんとはっきり呼ぶのよ」

「ちゃんと相手の目を見て言うのよ」

「（色んな意味で）期待してるウサ」

「ハードルを上げないで下さい！」

そう言った後、俺をじっと見る。よせよ照れるじゃねぇか。

つーか別にこっち見なくても良いんだよ？

「…人様」

「聞こえんなぁ～。ワンモアセイ！」

鈴仙の顔が赤くなっていく。

「ご、ご…」

……

「…ご主人様…」

……

……

……

……き

「し、しーんとなってないで何かいっｔ「きたーーーーー！！！」ふぇ！？」

きた！きたよ！ついに！ついに夢が！夢が叶った！コスプレじゃなくて、モノホンに言われた！

ひゃっほおおおおおお！！岡〇最高おおおおおおおお！！あっ関係ねぇ。

何か周りがポカンとしてるが関係ねぇ！

ヒャッハーー！！最高にハイってやつだぁぁぁぁ！！！

「あ、あの蓮也？ちょっと落ちついｔ「永琳！仕事だ！仕事を寄越せ！」ええ？！」

今のテンションならどんな仕事でもこなせる気がするぜぇーーー！

「え、ええとじゃあ姫様の就職の手伝いを…」

「おｋ任せな！じゃあ早速行こうぜ！ヒャッハーーー！！」

全員ポカンとしていたが、直ぐに切り替え、案内してくれた。

色々あったが良い生活を送れそうだ！

第六話後編　ｖｓ鈴仙～決着…そして～（後書き）

やっと次で、他の幻想入り者を登場出来そうです。一ヶ月も掛かったよｏｒｚ

東方キャラクターの性格と口調は、基本的に原作設定です。ただ、一部変更が有るかもしれませんが、そこのところは、余り不快感を与え無い程度に設定していこうと思います。

質問・意見・感想を書いて頂けるとありがたいです。

第七話　凡人と怪力娘（前書き）

今回はやっと二人目の登場です。

第七話　凡人と怪力娘

・・・・・うーん、マ、マタンゴ～・・・はっ！もう朝？
ええとここは何処だ？・・・うん冗談なんだ分かってるよ。
ここは永遠亭だ、うん。まぁ良いや着替えよう。

幻想入りしてからもう一週間が経った。
その間に色々あったが、まぁ後で日記でも見ながら思い出すか。
一週間前のあのテンションは忘れたい…黒歴史決定だなこりゃ。

そういえば、あれから自分の能力を研究してみたが、
かなり多くの事が出来る様になった。

リストアップするとこんな感じ
・ゲームや漫画の技が使える。尚且つ道具の実体化ができる。
・身体能力が凄い上がる。魔力・霊力・妖力・神力の向上はできてない。
・道具の修理や製作、料理、裁縫ｅｔｃ…などの日常で役立つ能力がプロ級になった。
・骨折や脱臼などの怪我を簡単に治せるようになった。
・携帯やパソコンなどに必要なアンテナを立たせた（霊力で）。
・鉱石や繊維を別の種類に変えられる。
・オリジナルの幽波紋（スタンド）が発生した。名はメタル・オブ・ガードナー

…本当にチートだよなぁ。おお、怖い怖い。
まだまだ出来る事はあるが、これ以上上げてたらきりが無いから保留。
能力の研究を続けていて、弱点も見つけた。気持ちが昂ると能力の

制御がまともに出来なくなるらしい。
平常心を保っていれば制御出来るのだが、昂ってしまうと喋るだけでも能力が発動してしまう。なので常に平常心を保つ必要があるのよ。…正直辛い。戦闘の時も、死にかけてる時も、どんな時も平常心。常人じゃ耐えられんよ実際。…まぁこんな感じ。

そういや輝夜が就職した。場所は人里、団子屋に就職が決定した。
別に永遠亭で良い思うのだが、それだと甘えが出るから駄目らしい。それもそうか。

んで、永琳の実験・解剖に付き合わされたり、てゐの罠に殺されかけたりしたが
まぁ、幻想郷にしては平和な生活を送れたな。長くは続かないだろうけど。

…あぁそういや鈴仙についてだが、

「ご主人様、起きてますか～？」
「今起きて着替えてるとこ～。」
「そうですか。食事の準備は済んでますので、着替え終わったら来て下さいねご主人様♪」

とてとてと鈴仙が去って行く。

…こんな具合である。
最初は普通に私語で話していたんだが、ある事件のせいで
俺に好意を抱くようになり、話す必要も無い敬語を俺に対して話すようになった。

何故敬語なのかは、多分「ご主人様」という呼称が原因だと思う。
主人に対する従者の口調を思い浮かべると良く分かる。
別にいいと言ってるのに俺を喜ばせる為とか言って聞かんのよ。

…まぁ、もう諦めたが。

取り敢えず飯だ。ぱっぱと着替えて行くことにしよう。

――――――――――――

朝食は、白飯・味噌汁・漬物・豚肉と緑黄色野菜の炒め物・シソをのせた豆腐だった。
はっきり言おう…全部うめぇ！日本人って感じがするわ本当。

「蓮也、今日は薬の配達をしてくれない？」

配達とな？今まで竹林の外にも出させられなかったのに、突然だな？

「配達？何処に？」
「多分知ってるでしょうけど、紅魔館（こうまかん）に行って欲しいのよ」
「あぁ…なるほど届け先の奴って、『パチュリー』だろ？」
「えぇそうよ。ほんとよく知ってるわね」
「まぁな」

紅魔館ってのは妖怪の山の麓にあって霧の湖の近くにある建物で、そこには主人の『レミリア・スカーレット』・その妹の『フランドール・スカーレット』・メイド長の『十六夜咲夜（いざよいさくや）』・門番の『紅美鈴（ほんめいりん）』・地下の大図書館に居る『パチュリー・ノーレッジ』・司書の『小悪魔』・他多数の妖精メイドな

どが住んでいる。

「…という所で良いよな？」
「えぇ、正しいわ」
「あなたって、一体何処からそんな知識を得たの？」
「企業秘密」
「企業って何処の？」
「もちろん俺の世界の」
「凄いですねその企業！いつか私も行ってみたいです」
「あぁ…うん、そうだな」

実際は企業とかは無くて、ググりゃ誰でも解るんだけどな。

「んで？届けた後は、人里行って薬の販売か？」
「えぇそうよ。行く時は鈴仙と一緒に行きなさい。貴方、道解らないでしょ」
「それだけじゃ無いだろ？俺一人じゃ紅魔館には入れないし、人里で商売も出来んしな」
「…ほんと、貴方は説明する手間があまり無くて助かるわ。食事が終わったらお願いね」
「ほいほい」

たわいもない話をしながら、朝食が終わった。

―――――――――――――

食器の後片づけをし、鈴仙と食器を洗っていた。
その間に輝夜は、団子屋に仕事しに行った。働き始めて四日経つが結構うまくいってるらしい。良かった良かった。
取り敢えずこの茶碗を洗って拭いたら行く……良し終わった。

食器を、食器棚にしまい、伸び伸びと背筋を伸ばす。うーんまだ少し眠ぃ。

「準備良いですか」
「おう、良いぜ」

薬の入った箱を背負い、鉄パイプを入れた袋を右肩に掛け、財布と携帯電話をポケットに突っ込み、履き慣れたスニーカーを履く。

よっしゃ行くか。

――――――――――――

竹林を抜け、広めの道に出る。ここから先は道が分からんから鈴仙の行く方向に行く。
土地名・建築物・東方キャラの人名を知っていても、実際に行った事が無いから道なぞ分からん。
地図はもらったんだが、地理だけは苦手なんだ…故に読めん。後で能力使って読めるようにしよう。

「鈴仙、紅魔館まではどの位掛かる?」
「ここからはそんなに掛からないと思いますよ。ってその位なら聞かなくても分からないですか?」
「実際に行った事無いから分からんのよ」
「そうなんですか?」
「そうなんよ」

しかし、あまり掛からないか…なら何事も無く行けるかな。
そのまま話しながら歩き続ける。あぁ何も無いってほんと幸せ。
誰にも遭遇しないよな…大丈夫大丈夫どうにかなるt、ん?あれは…

俺の視界に二人の女性が写った。一人は妹紅だ、だけどもう一人は誰だ？
少なくとも東方キャラの一人では無い。よくよく見ると俺の世界で見たことのある格好をしてる。
白のタンクトップに青のスパッツ、手には…バンテージを巻いてる
何故？髪は短めのポニーテールで黒色だ。身長は１７０はある様に見える。
もしや俺以外の幻想入り者か？まぁ幻想入り者はいっぱいいるから一人が何だって話ではあるが、
妹紅と一緒に仲良さそうに歩いてる時点で普通の人じゃないだろうな。だってほらあんなにベタベタと体をくっ付けてるところが特に…

「だからくっ付かないでって言ってるでしょ！何回言えば分かるの！」
「も～妹紅ったら照れる事は無いのに～、くっ付く位良いじゃないの」
「くっ付いたらそのまま襲う気のくせに、何を言ってるのよ！」
「当たり前じゃない！人は性なる愛無しには生きられないのよ！」
「はっきりと言うな！真顔で言うな！」

…仲…良いのかな…

「な、何なんでしょうあの人は？」
「分からん。多分新手の変態だろうな」

よりにもよって初めて会う幻想入り者が変態女とは…しかし美人なんだよな、畜生…残念美人かよ！
しかもこのルートだと確実に遭遇するぞ、と、取り敢えず脇道に逃げるか？

「鈴仙！一旦脇道に入って逃げるぞ！」
「…無理です、こちらに気付きました」
「なん…だと…」

ほんとだ、こっちに向かって手振ってるよ。…最悪だ、変態を避けられなかった。

――――――――――

「やっ鈴仙。元気にしてた？」
「えぇもちろん。妹紅も元気そうね。」
「えぇまぁ…ね。で…何で貴方が鈴仙と一緒にいるのよ？」

そう言ってこちらを見る。気のせいか怪しい物を見る目で見てる気がする。

「まぁあの後色々ありまして、永遠亭に住ませてもらってるんですよ。」
「…ふぅん。」

やっぱ怪しい物を見る目で見てるよ…もしかしてあの時の嘘がバレたか？

「ところであｎ「ねぇ妹紅！この人達誰！」」

変態女が目を輝かせながら会話に割り込んできた。おいおい凄い目光ってるぞ。

「え、えぇと、こっちが鈴仙・優曇華院・イナバで…えぇと。」

「高宮蓮也です。宜しく。」

「…うん、うん、良い！凄く良い！」

鈴仙と俺の体を、隅々見ながら頷いている。

「…えぇと何が？」

「勿論、顔・胸・尻・容姿に決まってるじゃない！」

「「はい？」」

何がもちろんだ、何が決まってるだ、俺達が分かってることを前提に話すな！

「…えぇと」

「あっ！失礼、私は『遠命零奈（とうみれいな）』。年は17、ピチピチの高校生よ。」

…ピチピチ？久しぶりに聞いたぞその言葉。つーか徐々に近づいて来んな。

「…妹紅さん、何処でこいつ拾ったんすか？」

「貴方を送った帰りに拾ったわ。…それより聞きたい事があるのだけれど」

「…何ですか」

「単刀直入に言うわ。竹林に入る前に話した事、嘘でしょ？」

やっぱりバレてたか…もう嘘付く理由も無いから正直に答えるか。

「…はいそうです。騙してすいません…」

「いや、騙した事は別に良いのだけど…どうして嘘を付いてまで永遠亭に行こうとしたの？」

ん？そっち？なら理由は簡単だ。

「一人で入ったら確実に迷いますし、ただ単に行きたかった…ただそれだけです」

「…嘘は言ってないみたいね。分かった、信じるわ。それと呼び捨てで良いわよ」

「ん？そうか、なら遠慮なく。」

「ね～、話終わった？なら私ともお話しましょうよ～。」

…何だろう、今凄くメンドくさいって思っちまった。

適当に話逸らして、さっさと紅魔館行くか。長く話すのは商売上不味いしな。

「えぇと…そうだ、何で妹紅とこんなとこを歩いてたんだ？」

「デートと地理確認、後良さげな男女をナンパしようかと思ってね」

そう言ってさらに近づいて来る。だから来んな。つーか幻想郷でナンパとか、妖怪しか引っかかんないと思うんだけど…。ヘタすりゃ喰われるぞ。

「あーそう、こっちは薬の配達途中なんでな、それｚ」

「まぁ待ちなさいって。」

そう言って俺のＹシャツの首襟を引っ張る。断る、このまま逃げてやる。

思い切り地をふみ逃げようとする。だが、その引っ張った力は尋

常ではなく、気が付けば俺は、宙に投げ出されていた。なんとか飛んで体制を立て直したが、何て筋力してやがる、その細い腕で７０ｋｇはある人を、何で片手で投げれるんだ。

「ふふ、やっぱりなかなかやるようね」
「はぁ？つーか何しやがる！ヘタすりゃ死んでたぞ！」
「いや、大丈夫の筈よ。あなたはそういう『体』だからね。」

……！な…まさか、見破られてるのか俺の能力漬けの体を…。

「ふふ、隠さなくてもいいわ。私はそういうのが解るの」
「・・・」
「霊力・魔力は良いとして、普通の人が妖力・神力を持ってるなんて考えられ無いものねぇ？」
「・・・！」

やっぱりこいつ、解ってやがる…これでも隠してたんだけどな。妹紅も顔には出してないが、多分分かってるだろうな。妹紅は実力者だしな、ニコ動とＷｉｋｉｐｅｄｉａから得た知識を持つ俺には分かる。つーかあの零奈って奴も只者じゃねぇよな、投げた時の力といい、俺の四力を見破った事といい。

「ふふふ、実に良い相手を見つけたわ。性的にせよ、死合い的にせよ、ね♪」

零奈は満面の笑みでその場で踊る。

…あぁ嫌な予感がしてきた。

「…まさかとは思うが、今この場で俺と戦う気か？」
「Ｅｘａｃｔｒｙ（その通りよ）」

何故そこでダー○ーが出る。

「…鈴仙。」
「了解しました、荷物をお預かりします。そして全力でご主人様を応援します。」
「おう、頼むぞ。」

ほんと、鈴仙は話が早くて良い。最近じゃ、一声掛けたら大体分かってくれるしな。

「零奈ー！やりすぎないでよー！」
「分かってるわよー！心配しなくても、半殺し程度で済ませるからー！」
「恐ろしい事を言うな！」

全くなんて女だ。まぁいい、能力の訓練をした成果を発揮する時だ。やってやるぜ。
鈴仙と妹紅は脇の方へ避難する。そして俺は、鉄パイプを出し、構え、零奈と距離を離す。
零奈も同様に、拳を構え距離を離す。

「準備は良いな！」
「えぇ！もちろんよ！」

良しそれじゃあ・・・

「「行くぞ（わよ）！！」」

第七話　凡人と怪力娘（後書き）

やっと二人目を出せました。これから、他の幻想入り者もどんどん出していきます。面白みに欠ける小説ではありますが、質問・意見・感想を書いて頂けると、ありがたい上に作者が狂喜乱舞します。

第八話　平原の死闘

突然だが、ピンチだ。本当に不味い、ヤバい、勝てない。

目の前には余裕の顔をして堂々と立っている零奈がいる。奴は得意顔をしてこちらを挑発している。

つーか全く攻撃が当たらない、どうすりゃいいんだ。

戦闘を開始し、攻撃を仕掛けていたのだが、こっちの動きが分かってるかの様にひらりひらりと攻撃や弾幕をかわし、躊躇無く俺の急所を攻撃してくるもんだから、常人基準で二十回程死んでるよ…。再生能力が無かったら、今頃映姫様に説教されてるとこだよ。何なん？あいつ…どう考えても人間じゃねぇ。

零奈の基本戦闘姿勢（スタイル）は格闘のみだと思ってたが、木とか岩とか投げてくるもんだから、

飛びながら遠距離攻撃で安全に行ける筈だったのに、投げまくられて、５・６回は死んだ。

近づけば、多彩な武術に圧倒させられ、攻める事が出来ずに１０回は死んだ。

その為、まともに戦っても勝てないことは確定したので、何か策を練る必要がある…。

けどあいつ、能力を使ってないでどうしてここまで強いんよ？こっちは能力使いまくってんのに…。

スペカ三枚、全部破られたよ、ほんとイヤになる。どうすりゃ良いんだ…？

「ねぇ！もう終わり！？項垂れてないで、さっさと次の手を出して

よ！」

…全く何であんな笑顔なんだ？そんなに楽しいのか？こっちはしんどいんだけどなぁ…。

…まぁまだ行けるけどな。そして今策を練り終えたぜ。
実戦で使った事が無いからうまくいくか心配だが…他に手はねぇ。

自分の頬を叩き、気合を入れる。そしてあるイメージをする。
純銀の体、鍛え抜かれた筋肉、頭に付けた小さな盾、そして鎖を巻いている人――俺の幽波紋（スタンド）のイメージを描く。
そして強く念じる……出ろ……

「（いつまで待たせる気？まさか諦めたの…？）」
「…メタルオブガードナー…！」
「（！霊力が上がった？……来る！）」
「硬化槍（コーティングスピア）！」

出現した幽波紋（スタンド）――鋼鉄の守り手は、多数ある岩の形を槍状に変え、槍を鋼の様な硬さに変え、
零奈の方へと飛んでいく。そのスピードは目安だと時速１００キロはある様に見える。常人ならば、
反射的に避けることはできないだろう。だが零奈は、飛んで来た槍を右へ左へ素早く避けている、
こいつ妖怪なんじゃないか？普通の人間がこんなの避けれるとは思えん。

「なかなか！やる！じゃない！うわっ、危な！」

…おいおい冗談じゃねぇぞ！なんで一発も当たんないんだよ！チ

ートかこのやろー！
くそっ…だが奴が化け物じみた強さを持っていても疲れは来る。それまで攻め続けてやる！

鋼鉄の守り手により、剣・ナイフ・矢等多数の武器が作り出され、飛んでいく。零奈はうまく体を捻ったり、反らしたりしながら避けている。だが疲れてる様子を見せない、化け物じみた強さというより、化け物そのものなんじゃないか？…畜生、埒があかねぇ、さっさとけりをつけてやる！

武器投げの嵐を鎮める、そして零奈を見、飛んだ武器の間にいる事を確認する。

…今だ、今ならいける…！

「（攻撃が止んだ？今度はなにをする気？）」

零奈はこちらの異変に気付き、身構える。だが身構えただけじゃ、これは避けられないぜ？
何故なら今からやる事は、攻撃じゃないからだ。いくぞ――鋼鉄の守り手

「硬化結界（コーティングドーム）！」

突き刺さった武器郡が溶解し、ドーム状に形を作る。ドームは零奈を囲み、前方に人が一人通れる
程度の穴を残す。俺は素早く前方の穴の前に降り、立ち塞がる。これで逃げ場は無くなった。

「へぇ…本当に色々出来るのね？ピンチになっちゃった」
「…お前全然困ってる顔してないぞ。実はそこまでヤバいって思ってないだろ？」
「うん、まぁね♪」

…やだ…何この女…いやマジで何なん？この状況で笑顔って…何か怖くなってきた…。

「…さーて、そろそろ能力使うとしますかね～」

ここにきてやっと能力使用か。つーか持ってたんだね能力。

「貴方には楽しませてもらったわ。でもそろそろ終わりにしましょ」
「言ってくれるじゃねぇか。だが今は俺の方が有利だぜ？どうする気だ？」
「ふふ♪この程度で有利と思うなんて、ちゃんちゃらおかしいわ！」
「んな…！？」

この状況を覆せる自身があるのか！？…やべぇ凄く不安になってきた。

「私の美しき能力（ちから）を、貴方に見せてあげるわ！」

そう言った途端、ドーム中に夥しい妖気と全身で感じられる発生し、俺のＳＡＮ値を削っていく。
ヤバい、これは死んだかもしれん。畜生ヤケクソだ！やってやる！やってやるぞ！（島〇兵風に）

「やらせるか！硬化巨大槍（コーティングビッグスピア）！」

ドーム内に岩を集め、巨大な槍を作り出す。弾速は遅いが当たればひとたまりもない。
しかも今は密閉空間、避けることは出来ん…筈だ。
槍は零奈目掛けて飛んでいく。頼む…これで終わってくれ！

「その程度の大きさじゃ、私の触手には勝てないわよ！行きなさい、あなた達！」

零奈の声の後に巨大で紐のような生物が数体、槍に向かって特攻を仕掛けて来る。そして次の瞬間、
槍は粉々に砕かれ唯の石の塊とかした。そしてその生物はドームを貫き、砕き、いとも簡単に破壊してしまった。

「な…んな馬鹿な…！」

嘘だろ…あのドームや槍は鋼鉄で作られてたんだぞ…そんな簡単に破壊できるわけが…
・・・って！落ち込んでる場合じゃねぇ！奴が、零奈が仕掛けて来る！

「残念♪身構えたとこ悪いけど、後ろなのよね～」
「…え？」

振り返った瞬間、目の前に大量の口。そして何かを発射しようと力を溜めている。

やば、ガ、ガードを！ガードしなければ！

だが時既に遅し。零奈はスペルカードを掲げ、高らかに読み上げ

た。

触手「触手達の挽歌」

触手と呼ばれたその生物達の口から、大量の光線（レーザー）が発射される。
発射された光線（レーザー）は寸分の狂いも無く、俺めがけて飛んでき、直撃する。幸い、鉄パイプのガードが間に合った為ダメージは減らせたが、それでもかなりくらい、しかもそのまま勢い良く落下してしまった。腕・足・首・肋骨・鎖骨・背骨…ほぼ全ての部分が重症となってしまった。

再生能力があるからこの位問題無いが、体が動かん、血を流し過ぎたなこりゃ。

しかし、さっきの奴は触手なのか？俺の知ってるのと大分違うな…だってあんなに大きかったり、小さかったり、しかも光線出すなんて聞いねぇよ…。つーか零奈の能力って…。

思考を働かせているうちに、零奈が近寄ってきた。

「お～い、生きてる～？」
「…げほっ、なんとかな…」
「いや～ほんと丈夫だねぇ。能力って凄いわねぇ」
「…つーか、さっきの触手はお前の能力なのか？」
「えぇそうよ。私の能力の一つ『触手を操る程度の能力』よ」

…一つ？まさかまだあんのか？…何だかなぁ。

「ところで、降参の意思を見せてないけど…まだ続ける？」

そう言って、拳と触手を突き出す。

……あー、もう無理。

「…はぁ…降参だ。」

「…ふふ、ＯＫ私の勝ちよ。」

…やっと終わったか。はぁ…。体中がずきずきするよ、ったく…

「よっと。大丈夫？」

あれ…？零奈？いつの間に俺の横に…って俺担がれてるし。

「おいおい別に担がなくてもいいんだぜ。どーせ治るんだし」

「まあまあ、良いじゃない？この方が早く二人の所に行けるんだし」

「でも…何か悪いような…」

「迷惑なんて思ってないわよ？だって友達なんだし」

「…へ？」

一体いつの間にお前の友達になったんだよ？

「友達って…おま…」

「私が今勝手に決めた事だけどね。嫌だった？」

「…いや、そんな事は無いんだけど」

「そう、それは良かったわ♪それじゃ大事な友達を運びますよ～」

「・・・。」

…何かよく分からない女だな、ほんと。

…でも良いやつだって事は分かった。
拳を交えたからか、気に入られたからかは知らんが、でも何か嬉しい気がする。

そういえば、長らく友達と言われた事が無かったな…それが原因かな？

「あっ、そうだ。完全に治ったらヤラせｔ「させるかアホ」ちぇー…」

…良い奴なんだと思う。けれど…けれど変態ってどういうことなのよ…。

…何かもう諦めた。こいつはこういう奴なんだって、割り切ろう…うん。

向こうの方に鈴仙と妹紅が見える。あー…鈴仙には何て言おうかな、負けた事。

取り敢えず、「すまん、負けちった。」かな。

第八話　平原の死闘（後書き）

零奈の「触手を操る程度の能力」は全ての触手を操れるある意味羨ましい能力です。例えば、属性攻撃を行ったり、魔法を吸収したり等、様々な事を別々の触手が行っています。ちなみに零奈の触手は、零奈の背中から出ています。想像すると怖いですね…。後、零奈は触手をエロ目的にも使っています。なんたって彼女は変態ですから。

質問・意見・感想を書いて頂けるとありがたいです。

第九話　ゆっくりお話しを

「お前ってさ、手加減って言葉知ってんの？」
「あら、知ってるわよ？さっきのだって本気の三割程度しか出してないし」
「…マジすか」
「マジよ」

死合いが終わり、俺は怪我が酷く、直ぐ鈴仙と妹紅の所まで運ばれたのだが、超再生能力のお陰で手当てする必要も無く、あっという間に治っていた。
この事で妹紅が不老不死と勘違いしたが、話したらちゃんと分かってくれた。ほんと物分りの良い妹紅だよな。ちなみに零奈は全然動じてなかった、何なの？分かってたの？ほんとお前何者なの？
鈴仙は俺の再生能力を知っている筈なんだがすっごい心配された。畜生困った表情が可愛い！

それにしても、あれで本気じゃないってどういう事よ。恐ろしい人が幻想入りしてしまったものだ。
全く幻想郷は面白とんでも怖い所だよな～うん。そういや妹紅って零奈の本気見たことあんのかな？

「あー…妹紅？こいつ（零奈）の本気って見たことある？」
「いいえ無いわ。ただ、十トン位の樹を片手で持ち上げてたのを見たことがあるわ。」
「…あー…うん、色々と無いわ。」

十トンっておま…どう鍛えたらそんな細腕で持つことができんの？あんた本当に人間？

「しっかしあんたって、能力も性格も色々と変よねぇ」
「嬉しい事言ってくれるじゃない…でも蓮也も色々と可笑しい思うけれどね～。主に能力が」
「ご主人様の能力は、凄いから別に良いの」
「いや、その思考はおかしい。とゆうかその呼び方私たちの前じゃやめない？」
「謹んでお断りします」
「何で！？」
「…羨ましい（ぼそっ」
「零奈。羨ましいとか言わない」
「むー…」

…いや～こんなに可愛い奴らの会話を聞いてると、幸せになるね！

「…あっ、そうだ」
「ん？どうかした？」
「色々と話したい事があるんだけど良い？」
「…あー、時間大丈夫かな？」
「あっ、一・二時間なら大丈夫だと思います」
「そう？じゃあ話すわ」

そう言ったあと、零奈は地面に座り込み、俺達に座るよう促した。
取り敢えず座り、俺は能力で茶と湯呑を出し、全員に配った。
零奈は茶を飲み、一息ついたところで口を開いた。

「話したい事は、主に蓮也の事。取り敢えず重要なのは二つかな」

そう言うと零奈は俺の鉄パイプに視線を向ける。

「一つは、蓮也の持ってる鉄パイプについて」
「鉄パイプ？これがどうかしたのか？」
「えぇ、その鉄パイプには神力が宿っているの。そこそこのね」
「はぁ？」

なにそれ、どういう事なの？いやいや、ありえないだろ流石に。

「…信じられないだろうけど、本当なの。だから、他の力に比べて神力が弱いのよ」
「…はぁ」

確かに永琳の診断結果で、神力だけ『大』じゃなくて『小』だったけど…本当なのか？

「…証拠は？」
「…そうね、ちょっとこれ借りて良い？」
「良いが…何する気だ？」
「まぁ見てて」

そう言うと、零奈は鉄パイプを手に取り、俺達から距離を離し、地面に鉄パイプを置いた。
そして、一呼吸した次の瞬間、鉄パイプに拳を振り下ろした。
鉄パイプに拳が当たると、音をたてて地面が揺れて、地割れが起きた。
地震の様なソレは、たった数秒で収まった。周りの樹には、あまり被害が無かったようだ。

「…ふぅ、あ～手痛い」

零奈は手を振りながら、鉄パイプを持ってこちらに来た。

…鉄パイプは無事だった。嘘みたいだが、零奈の手には全く傷の付いてない鉄パイプがあった。

「どう?これで理解してくれた?」

「…あぁ理解した。ついでにお前の怖さも」

「れ、零奈!何今の!?というより手は大丈夫なの!?」

妹紅は心配して零奈の方に駆け寄っていく。妹紅も今のヤツは知らなかったようだ。

三割程度しか力を出してないってのは本当だったのか…末恐ろしいなおい。

妹紅が零奈の手を見ているが、どうやら無傷のようだ。…なんで無事なん?ありえん。

「心配しなくても大丈夫よ妹紅。ただ下の方は痛くて熱くて仕方ないけどね♪」

「…はいはい、心配した私が馬鹿でしたよ~。後、さりげなく人の体を触ろうとしない」

「…く、バレてたか」

「馬鹿やってないで戻るわよ。」

零奈と妹紅カムバック。

「えーと…大丈夫?」

「えぇ、大丈夫よ♪ただ、慰めてくれる相手が欲しいな~なんて♪」

じりじりと鈴仙に近づこうとする零奈

「おいこら鈴仙を襲おうとするんじゃない。さっさと次話せ。」
「も～せっかちね～。分かったわよ、二つ目を話すわ。」

零奈は、また茶を飲み、一息つき、真面目な顔になる。

「二つ目は…何だろう？この匂いは」

零奈は俺のズボンの右ポケットをじっと見て…匂いを嗅いでる仕草を見せる。何してんだ？

「…金属の匂い。だけどあまり強くない…とすると小さい物かな？じゃあ多分…」
「おい零奈。何やってるんだ？おm「ごめん、ちょっと話しかけないで」はぁ？」

ほんと何をやってるんだこいつは。俺のポケットに入ってる物を当てる気か？無謀すぎだろ。

…そういや右ポケットに入ってる『小さい金属の物』って確か…

「…『指輪』ね。多分そうだと思う」
「…何故ばれたし。」

俺は右ポケットから、あの時紫からもらった指輪を取り出す。つーか何で分かった。
嬉しそうな顔してるけど、取り敢えずどういう嗅覚してんだ、とツッコミたい。

「ふふ♪私ね、三年間ずっと山篭りしてて自給自足の修行生活してた事あるから、視力とか嗅覚とか結構鍛えられてるの。」

「凄い事…なのかな？」

「まぁ凄いと思うけど…幾つの時にしてたんだよ？」

「九歳の時に始めたわね。その間の勉強は既に両親に教えてもらってたから、問題無かったわ。」

「…恐ろしい家庭だな、色々と…。」

「そう？って今は話したいのはそうじゃなくて、指輪の事よ！」

「…まぁ売ったらなんぼになるかは知らんが、高値で売れそうだよな。」

「そうじゃなくて、その指輪に封印されてる力の事よ！」

「…は？力？」

力たって、どう見てもただの指輪だよな？某指輪物語の指輪じゃあるめぇし。

「どういうものかは分からないけど、四力全てがとてつもない位に大きい。ただ、コレ単体じゃ何も出来ないみたいだけども。」

「…ふーん。」

紫も変な物くれやがったなぁ。あいつの事だから分かってるんだろうけど。

「ご主人様、その指輪はいったいどこで？」

「これか？幻想入りする時に紫からもらったんだ」

「紫…？というと、境界を操るとても綺麗な妖怪さんの事？」

「あぁ。…つーか零奈は紫に連れられて幻想郷に来たんだろ？」

「え…何で解ったの？」

「あいつのいつもの手口さ。気に入った奴を徹底的に幻想入りさせるから、どうかと思うんだけどな。後、零奈が紫の事知ってる事で、完全に把握した」
「…何だかいつも見ているような言い草ね」
「…まぁ似たようなもんかな。」

ニコ動とか東方ＳＳを見たりしてるから、大体分かるんだよなぁ。ほんと俺は東方厨だぜ。

「私の事も知ってたようだし…貴方、何者？」
「まっ、俺はそういう奴だって事にしといてくれ。な？」

妹紅はうーんと頭を首を傾げている。まぁ無理もないさ、初対面の相手が自分の事を知っていたら疑問が沸く筈さ。けど、質問されても答えることはできねぇよ。だってこの世界の住人が、俺の世界じゃゲームのキャラだなんて、言ったって信じられねぇからな。

「…妹紅。細かく考えちゃだめよ。『幻想郷は全てを受け入れる』から、こういう人も居るって考えた方が良いわ」
「…そうね。そうするわ」

零奈…すっかり幻想郷に染まっちゃって…まぁ俺としては良かったんだが、その考えを自分の世界に持ち込むなよ？変人と思われるからな…あっもう変人だった。

「…さてと、これ以上引き止めてたら悪いし私たちはもう行くね」
「ん？もう良いのか？」
「まぁもっと話したい事はあるけれど、人里に薬売りに来たらまた会えるでしょ？だから良いの」

…なんて切り替えと話の終わりを理解してる奴なんだ。…大人だなぁ、変態だけれども。

「…何つーか…大人だよなお前。変態だけど」
「あら♪二つも褒め言葉をくれるなんて…私に気があるの？」
「無い、それは無い」

まさか変態は褒め言葉なのか？…とんでもねえ奴だ。

「むぅ…まぁ良いわ、人里でまた会いましょう」
「おう、じゃあな」
「じゃ、妹紅またね」
「えぇ、また」

別れの言葉を残し、俺と鈴仙は鈴奈と妹紅と別れた。

さてと、紅魔館に向かうとするか。

第九話　ゆっくりお話しを（後書き）

二週間ぐらいまた間が空いてしまいました…どうしてこうも忙しいんでしょうねｏｒｚ

前回、零奈のスペカについて説明してなかったので、ここで説明します。

触手「触手達の挽歌」
このスペカの名称は、デュエルマスターズの「獣達の挽歌」というカードの名称を変えただけです。
…なんとなく良さげな名前だったものでついｏｒｚ
今度はもう少し意味を考えたスペカにします…。

今回からＲ１５のチェックを入れました。理由としては、これから先そういう場面が出る事になってるので、早めに付けました。

次は紅魔館です。お楽しみに。

質問・意見・感想を書いて頂けるとありがたいです。

第十話　凡人と巨兵～紅魔館・門前にて～（前書き）

夏バテにやられて、投稿が遅れました。夏はほんと駄目だｏｒｚ

第十話　凡人と巨兵～紅魔館・門前にて～

やぁ。どうも蓮也です。自分は今紅魔館への道を鈴仙と共に歩いているところです。
周りは木々が生い茂っていて綺麗ではあるのだが、動画とかで見たことのある風景なので何だか新鮮味が無い。…まぁ俺の世界基準だったら、凄く新鮮味があるんだろうけど。
さっきの戦闘はほんと疲れた…能力で疲れの取れる早さを上げてなかったら、今頃倒れてたと思うよ実際。でも別れ際の零奈の様子は疲れてる様には見えなかったんだけど、どういう事なの…ほんまもんの化け物ちゃうかあいつ？…って何で関西弁？

「ご主人様～大丈夫ですか？」
「ん？…ＨＡＨＡＨＡ大丈夫大丈夫！」
「本当ですか…？疲れてるって顔してますけど…」
「へ？マジで？…あー…うん、やっぱ大丈夫じゃないかもな～」

身体の疲れは取れても精神的な疲れは取れてないな…まぁ納豆食えば治るだろ。

昼飯として自分で作った一口サイズの納豆巻を取り出す。一つ掴み口の中に放り込む。…あぁこの味、この感触、そしてこの匂い、たまらんな！某蛇の台詞を使うなら、美味すぎる！最高だ！ってやつだ。
…やはり一つじゃ足りんな、もう二個程食うか。口にひょいっとな。
…うめぇ。
…おし気力ゲージが完全に復活したぜ。やはり納豆は良い食べ物だ。心が落ち着く。

「おれは　しょうきに　もどった　！」
「…おぉ、清清しい顔になってますよご主人様！」
「あぁ納豆のお陰だ」

しかし、これから人と会うのにこの匂いはいかんだろうなぁ…水飲んどこ。

ぐびぐびと水を飲みながら歩いてる内に、大きな赤い建物を見つけた。
あれが『紅魔館』か…でけえなおい。一般の高校の校舎と同じ位の大きさなんじゃないか？
…まぁ俺の勝手な見解だが。

「…デカいなぁ…紅魔館」
「？知っているならそこまで驚く事もないと思うんですけど…？」
「いや～どういうのか分かっていても、実際に見たことは無いからな～。驚く事もあるんよ」
「そうなんですか…」

驚きって重要なんだぜ鈴仙。驚きの無い人生は面白くないからな、必要な事なのさ。
まぁそれは置いといて、このまま進めば『紅美鈴（ほんめいりん）』に会うだろうが…寝てるだろうな絶対。

『紅美鈴』は紅魔館の門番で、『気を使う程度の能力』を所持している。妖怪で武術の達人で、戦闘能力は万能型。仕事中なのに寝ている事が多い（二次でね）。服装が中国風だからといって中国って呼んじゃ駄目。

さてさて起きてるかな～寝てたら猫ヒゲでも書いてやろう。肉は

…いいや。

鈴仙とてくてく歩いて、紅魔館の門が良く見える位置まで来た。
さーてどうかなっと。

門には例の如く紅美鈴がいた……あれ？他に誰かいる？…うわぉ
男だ！紅魔館に男が居る！

えーと服装は…某蛇のスニーキングスーツの袖なし上半身の様な
…ランニング？と、昔はやったパンタロンだっけ？そんな感じの茶
色っぽいズボンを身に着けている。身長は２ｍ近くある様に見える。
後は全身の筋肉が凄いのと髪の色がブラウンって事と背中にそいつ
の身長以上（といっても２０ｃｍ位しか違わなさそうだが）の大剣
を背負っているという事か。

…東方にあんな奴はいないから、多分幻想入り者だろうな。つー
か紅魔館で門番してるって…予想としては美鈴や咲夜より強いと思
う。そうでなきゃ紅魔館で門番なんてしてねぇよ。

…そういえば

「鈴仙？紅魔館にあんな奴いたか？」

そう言って門の男の方を見る。鈴仙を見たことがあるか無いかで
あらかじめ情報を得られるかどうかが変わる。得られる情報は得て
おいて損は無いからな。

「…いえ、初めて見ましたあんな人。三週間位前に来た時は見なか
ったのですが…」

鈴仙も見なかったと…

うーん…確か輝夜の就職活動期間が俺が幻想入りした一週間前から始まっていたから…その一週間位前に見なかったって事は…って何難しく考えてんだ。ようは鈴仙が紅魔館に行かなかった時期に幻想入りしたって事だろ？何で難しく考えるんだろうな俺って…

…まぁ良いや。どのみち行かなくちゃならんのだから、とやかく考えてもしゃーないよな。さっさと行きますかね。

――――――――――――

「今日は珍しく寝ずに仕事してるのね門番さん？」

「最初の発言がそれってどうなんですか…いつもいつも寝てるわけじゃないですよ！」

「でも基本寝てるんじゃ？」

「そ、そんな事は無いです！ちゃんと仕事してます！…って誰ですか貴方？」

「最近永遠亭に住まわせてもらってる高宮蓮也っていいます。宜しく紅美鈴さん」

「え？何で私の名前を…あぁ鈴仙さんに教えてもらったんですか」

「いやそうじゃなくってね」

少女説明中…

「へぇ…変な人もいたもんですね。私や他の方の事を知っていたなんて」

「まぁ細かい事は気にしないでくれ。気にされるとこっちが困る」

「まぁこういう場所ですし、そういう人もいるって事で認識しときますよ」

「そうしてくれ」

この美鈴、頭が柔らかいな。お陰で面倒な質疑応答をせずにすんだ。

…まぁそれはともかく

「そちらの人は俺の記憶が正しければ、紅魔館に居る筈の無い人だと思うんだが…」

そう言いながらでかい男の方を見る。

どうでも良いが真近で見るとすげぇ迫力があるな…でかいせいか？

「・・・」

…うーむ、無言のせいで話しづらいな…つーか迫力ありすぎ、怖ぇんすけど…

「えーと…あのー…」

「・・・」

…駄目だ！迫力負けする！ど、どうしよう…

言葉に詰まってわたわたしてると、美鈴がその男に声をかけ、小さい声で話し始めた。

何話してるのかは知らんが、今の内に迫力負けしないように気合を入れねば！

というわけで、んー！んー！（気合を溜めてます）

「…何をしているのかは知らんが、取り敢えずいいか？」

「ふぇ？」

あら？もう話終わったの？早くね？…溜めきれてないんだが（気合）

「名前を言ってなかったな。ジェイル・シャドウだ。宜しく」

「あ、はい、宜しく…」

握手を求められたので握手しとく。取り敢えず手ぇでかいよ！これ握手になってんの！？一方的に握られてるような気がしてならないんだけど！？

「さて…ここには何の用で来たんだ？」

「薬の配達です。『パチュリー・ノーレッジ』さん宛てなんですけど…」

「あぁ、その事でしたか。すみませんけど直接パチュリー様に渡してくれませんか？」

「え？何で？」

「…今『咲夜』さんが…その…色々と忙しくて、受け取れないんですよ。私たちも…門番やってるので手が離せないといいますか…」

「それ単に面倒くさいだけなんじゃ…」

「へ！？い、いや！そんな事は無いですよ！」

図星だったのか身振り手振りで誤魔化そうとする美鈴。何戯けた事を考えてんだこの門番。せめてどちらか片方が案内役になるとかさ、それくらい考えろよ全く…

「…どちらか片方が案内した方が良いんじゃないか？そうしないとこいつらが侵入者になってしまうぞ？」

「…あっ」

あっ、じゃない！アホか！その位分かれよ！今まで門番やってたんだからさ！つーかジェイルだっけ？ちゃんと考えてくれたね！？今お前をまともな人だと確信した！うん！

「…どちらが案内するか…の前に、確かめたい事がある」
「確かめたい事？」

…えーと…確かめる事って何かあったっけ？…まさかと思うが俺の実力を知りたいから、今この場で戦え！って事じゃないだろうな？そうだったら俺オワタなんだけど…

「…蓮也…だったか？…ふむ、能力はそっちの兎の耳を付けた奴に比べて高めのようだな。しかしあまり実戦経験はない…といったところか…」

…何ぞ？何を言ってるんだ？…いやまぁ俺の事なのは分かってるんだけどもさ、一体今から何が始まるんです？第三次大戦だ！…コマ○ドーネタやってどうする。

「…ふむ、大体の実力は分かった。これなら迎撃出来るだろうな」
「は？迎撃？」

迎撃っておま…一体何を…ってあぁ『あいつ』か？あいつを迎撃しろと？無茶言うぜ…

「迎撃って…まさか『あの人』ですか？…流石に無理じゃないですか？」
「結果を先読みするのはあまり良い事では無いぞ？何が起こるか分からんからな」

「ですが…」

むう…美鈴は俺が『あいつ』を迎撃出来ないと思ってるのか…確かに『あいつ』は強いが…それはあくまでスペルカード戦のみの話だ…いやまぁそれでも強い事には変わらないんだけどさ。

「…やっぱり無理ですよ。妖怪の私でさえ簡単にやられるのに…」

「美鈴。妖怪かどうかは関係無い。負けたのは単に実力不足だからだ。自分の視野で人を軽く見てはいけない。お前だってこいつに宿ってる能力は見ただろう？」

あのー…俺と鈴仙放置されてるんですが、それについてはどうなんですかね？えぇ？

「…じゃあ彼が勝ったら私が案内します。負けたらジェイルさんが…そうしませんか？」

「…あぁ良いだろう」

…あれ？何でそういう話になった？どういう事だよもう…

そんな事を考えてたらいつの間にか二人がこっちを見ていた。おうビックリ。

「…さて、お前には実力を示してもらうために、これから来る奴の迎撃をしてをもらう…どんな奴かは分かっているな？」

あっ分かってる事前提なんだ。まぁこっちが色々と知っている事説明したし、当然か。

「あぁもちろん。対処法も心得てる。」

「それは頼もしい話だ。…後、３０秒後に来る。備えておけ」
「…え？３０…？」

え？何でそんな事分かんの？え？それが事実だったら不味いじゃん！

「…後２０」

えｗちょｗおまｗ待って！まだ心の準備が！

「後１０、９、８、７…」

あｗちょｗ時間ねぇｗちょおまｑあｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ

「…３、２、１、来るぞ」

ジェイルが来るぞと言った瞬間に、物凄い速さで何かがこちらに迫ってくるのを感じた。その迫ってくる何かは俺の横を通り抜け、俺の目の前に着地した。

古風の魔法使いを連想させる服を着た少女…間違い無いこいつは『霧雨魔理沙（きりさめまりさ）』だ。

『霧雨魔理沙』はいわゆる普通の魔法使いだ。幻想郷じゃあまり珍しくない『魔法を使う程度の能力』を所持している。男っぽい口調が特徴。蒐集癖があり、その上死ぬまで借りると言って物を盗っていく盗人である。『森近霖之助（もりちかりんのすけ）』と仲が良い。『博麗霊夢（はくれいれいむ）』とは…友人では無かった筈…

「ジェイル！今日こそお前に勝って本を借りていくんだぜ！」

「借りるとは良く言ったものだ。返す気がなければ結局は盗人ではないか」
「死ぬまで借りるだけなんだぜ！だから盗人じゃないんだぜ！」
「借りるのならば持ち主の許可がいるではないか。許可もなく借りていくのは立派な盗みだ。いつもいつも屁理屈ばかりこねてるんじゃない」

…俺空気。何この状況、どうすりゃいいの？

「あぁもういちいち五月蝿い！とにかく負け続けはごめんなんだぜ！さっさと構えるんだぜ！」
「生憎お前の相手を何回もしてる程暇ではないのでな。代わりに後ろの奴と戦ってくれ」
「後ろ？」

その言葉を聞き、魔理沙は後ろ…まぁつまりこっちの方を振り返った。

「お？鈴仙じゃないか。それと…誰だ？」
「どーも、高宮蓮也っていいます。宜しく『霧雨魔理沙』さん？」
「！何で私の名前…はジェイルが言ったか。苗字知ってるんだ！？」
「…鈴仙、説明よろ」
「了解しました」

少女説明中…

「はあはあ、成るほど、まぁどうでも良い！」
「おいコラ」

説明したのにその反応はないんじゃない！？つーか魔理沙、何か

様子おかしいぞお前！毒性のある魔法のキノコでも食ったのか！？
血気盛んなのはなんか魔理沙のキャラじゃないよね！うん！

「まぁとにかくこいつを倒せば良いんだな！？」
「あぁそうだ。お前が勝ったら戦ってやるよ」
「よし！そうと分かればさっさと戦うんだぜ！蓮也！付いて来るんだＺＥ！」
「…はいはい分かりましたよ…ったく」

どう考えてもテンション高すぎだろこの魔理沙…いやまぁ多分キノコが原因だと思うけど…それにしたって面倒くさい。例えキノコが原因だろうがこのテンションは付いてけんわ…

まぁいい、こうなりゃ意地でも勝ってやる。魔理沙に勝ったという偉業を成し遂げてみせるわ！

…偉業はないか。

そんなわけで、魔理沙に付いていき空に上がった。

第十話　凡人と巨兵～紅魔館・門前にて～（後書き）

今回は特に補足はありません。しいて言うなら、あらすじをちょっとだけ変えました。変えた部分は一行目のところです。召喚士と帝国軍の将軍の紹介順を入れ替えました。理由は、単純に出番順に並べ替えた方が分かりやすいかと思った。ただそれだけです。

まぁこんな小説ですが、質問・意見・感想を書いて頂けると、作者が喜んで地面を転がり回ります。

第十一話　ｖｓ魔理沙～紅魔館・上空にて～

ただいま紅魔館・上空、目の前に血気盛んな魔理沙がいます。私は取り敢えず鉄パイプを構え戦闘体勢で待機しております…何だこの説明口調？何で私？…まぁいいや。

取り敢えず俺は魔理沙をさっさとぶちのめして、薬をパチュリーに届けねばならん。そうしなければ仕事に差し障りが出るからな。さっさと終わらせよう。三分位で。

…とはいえ相手は仮にも多作品で自機を務めた強者だ、勝てるかどうか…

…まぁ俺の能力的には勝てる筈が無い！…の方が正しいんだろうけど。

取り敢えず、勝つ為には最低でもまず魔理沙の十八番ともいえる『マスタースパーク』を打ち破る必要があるのだが…まぁ対抗策はあるっちゃあるんだけど…これスペカ戦に使って良いんだろうか？傍月抄（ぼうげつしょう）でも使われてはいたんだけどさ、同じ様なの。

「おーい！何ぼさっとしてるんだー！スペルカードは三枚だぞー！おーい！」

…おっといかん集中せねば。

「すまんすまん集中力切れてた」

「…私に勝つのは余裕だってか？むかつくぜ…」

…え？何でそういう事になる？普通そこは「全くしっかりしろよ」とか「ぼーっとしてたら私には勝てないぜ」とか、そんな感じじゃ

ない？やっぱり魔理沙変なキノコ食ったろ絶対。
　でも魔理沙って『魔法の森』のキノコの事は大体分かってると思うから、そんなにホイホイキノコを口にする様なマヌケじゃないと思うんだけどな～…ってまた集中力切れかけた！取り敢えず俺集中しようＺＥ！

「えーと…被弾一回したら負けで良いんだよな？」
「そうだぜ！それじゃあ今から始めるんだぜ！さっさとはじめるんだＺＥ！」
「分かった。分かったから少し落ち着け」

　全く…面倒くさいったりゃありゃしないよもう。つーか「ぜ」言いすぎモチツケ。

　まぁそんな訳で魔理沙とのスペルカード戦が始まった。

　始まって直ぐ星の弾幕が多方向から飛んで来たが、そこまで濃密なものでは無かったので右へ左へひらりひらりとちょん避けをする。そこまでスペカ戦の練習をしていなかったものの、東方シリーズを旧作以外全てルナティッククリアしていたので相手が東方キャラならば全然問題無しだ。
…まぁ能力の恩恵があるからこそこんなに余裕ぶれるんだけれども。

　しかし、何というか魔理沙の弾幕が美しさに欠けるなぁ…相手をさっさとぶちのめそうとしてるせいで本来の弾幕の美しさが消えてるんだよな～そのせいか凄く避けやすい。つーか楽すぎイージーで

すかこのやろー。…まぁその方が俺としては良いんだけれども、さっさと終わるし…あれ？思考が一緒じゃね？

まぁいいや取り敢えずこっちは通常弾を一定間隔でばらかしながら、あっちがスペカ使うまで粘るとしますかね。

魔理沙との攻防が続く。全く当たりそうもない弾幕を避けて避けて避けまくる。何だか作業ゲーになってきたな…おーい魔理沙、『ミルキーウェイ』でも『スターダストレヴァリエ』でもなんでもいいから何かスペカ使えよ！通常弾だけじゃ俺は倒せないぞ！うん！

「あー！もう！いい加減に当たるんだぜ！」

「そんなイージー弾幕に当たってたまるか。もっと本気で来いよ！」

「くっ…！」

お？何かちょっと挑発したら怒りを顕にしてきたぞ？よし、ならばもっと！

「来いよ魔理沙！通常弾なんて捨てて掛かって来い！弾を撃ち当て、俺がピチュルさまが見たいんだろう！」

「・・・！」

あと一押し…！

「来いよ魔理沙！怖いのか？」

「…怖くなんかない…怖くなんかない…！」

魔理沙は今の言葉で完全にキレたようだ。やったぜ！これなら確実にスペカを使ってくる！さっさと全部避けて、一発ぶちかまして抑えてやる！

それにしても簡単に引っかかったな？多分いつも通りなら軽く流

したんだろうけど、さっきからしつこく考えてるキノコ（まぁそれが何かは分からんが）を食ったのが原因でまともな思考が出来なかったのが要因だろうけど。何にせよこれで倒しやすくなったのは確かだ。だが油断は禁物。例え思考がまともでなくとも、スペカの厄介さと強力さは変わらんから注意せねば。

「…私を完全に怒らせたな…！もう後悔しても知らないんだぜ！」
「後悔するなら最初からこんな事言わんわい。で？どうする気だ？」
「こうするんだ！光撃『シュート・ザ・ムーン』！」

魔理沙がスペル宣言をすると、星の奇数弾幕が向かってくる。さらにその星弾幕がいきかう中、魔法陣が配置され、そこから多数の光線（レーザー）が固定で発射される。

つーかよりにもよってそれ？いや実はこれ…魔法陣の近くでちょん避けしてたら簡単にいけるんだよね何故か。正直下位の筈の『アースライトレイ』の方がつらいんだよね…まぁもはや慣れてしまったから関係ないんだけども。

そんなわけでほぼ動かずに弾幕と光線（レーザー）を避けていく。ちなみにまだ一度もこちらから弾を撃っていない。つーか撃つ必要が無い…あ、耐久時間切った。

弾幕が消え、俺が次に見たのは魔理沙の怒りまくりの顔。怒っちゃやーよ、そんなに怒っちゃ可愛い顔が台無しだＺＥ。まぁ今の状態じゃ聞き耳持たんだろうがね。

「あー！もう何で当たらないんだ！」
「ＨＡＨＡＨＡ！その程度の火力と範囲の弾幕で俺を落とせると思ったら大間違いだ！」

また挑発っすかｗいやほんと今の魔理沙にはこれが一番良い。簡

単に引っかかってくれるからな。
さてそろそろマスパ来るかな？つーかはよ使え。頼むから。

「…火力…範囲……なら…！」

魔理沙は被ってた魔女帽子を脱ぎ、八角形の道具を取り出した。
『ミニ八卦路』ｋｔｋｒ
『ミニ八卦路』ってのは、『森近霖之助』が作ったマジックアイテムで、魔力を燃料とする小さな火炉らしく、一晩じっくり煮込むようなトロ火から山一つ焼き払える異常な火力まで調節が利くらしい…っていう感じなのをｗｉｋｉを流し読みしてた時に読んだな～まぁそういうことなんでしょ？多分。

…って何暢気にミニ八卦路の説明思い出してんだ。魔理沙がミニ八卦路を取り出したって事は…
つい『マスタースパーク』発動か？

「これならどうだ！恋心『ダブルスパーク』！」

魔理沙のスペカ宣言と共に、ミニ八卦路に魔力が溜まり始める。
ついに来たな！思ってたのと違うやつだけど！さてこっちもスペカ宣言するとしますかね、零奈戦を経て新たに創りだしたほぼチートスペカを！

俺は魔理沙の『ダブルスパーク』が発射される前にスペル宣言を行った。

反射「ミラーシールド」

高らかにスペカ宣言をすると、俺の目の前に複数の盾が出現した。
大きさは１００ｃｍ程で名前の通りに鏡が盾に付いている。俺はその盾群を魔理沙の方に向け、ガード体勢をとった。

「盾で私の弾幕を防ぐ気か？甘いぜ！そんなちゃちな盾じゃ防ぐことなんて出来ないぜ！」
「…さぁ？それはどうだろうな…？」
「私にハッタリは通用しないぜ！勝ちはもらった！いっけえええぇぇぇ！！」

魔理沙の声と共にミニ八卦路から極太の光線（レーザー）が二本撃ちだされる。
光線（レーザー）は弾道が狂うことなくこちらに迫ってくる。普通なら回避・あるいはスペカで相殺するのが妥当なんだろうが俺は盾を構え待機している。異様ではあるが、今の俺にとってはこれが一番安定した対処法なのだ。

そうこうしている内に光線（レーザー）は俺の目の前まで接近し、そして盾に直撃した。
そして……目論見達成。光線（レーザー）は盾に当たった瞬間反射し、魔理沙の方に突っ込んでいった！

「な…！」

魔理沙は自ら放った弾幕がいとも簡単に反射し、自分の方に向かってきたことに驚いている様だ。
驚く事もないだろうに…月で同じ事をされたのだから「あぁあれと同じ原理のやつか」って軽く流してさっさと避けろよな、マジでキノコに冒されすぎ。

だけどそんな事考えてる場合じゃないんだよな、このままだと例えキノコに冒されていても普通にかわされるだろうな…流石にそこまでパーにはなってないだろ。

だからこそかわす事が出来ないようにこちらからも弾幕を張る必要がある。

だが放たれたマスパは普通の弾幕じゃ速すぎてカバー出来ないだろう。

だが俺にはマスパのスピードに追いつけるスペカがある。というわけでいくぜ！

迅雷「駆け抜ける衝撃」

スペカ宣言後、雷の様に素早い弾幕と光線が直線的に飛んでいく。魔理沙がかわそうと横に動いたその瞬間、弾幕と光線が魔理沙の真横を突き抜ける。間一髪身を引き弾幕と光線を回避したが、時既に遅し反射したマスパが魔理沙のすぐ近くまで接近……そして……

マスパが直撃し、辺り一面にピチューンという音が鳴り響いた。

…ふう、俺の勝ちだ。…さて、落ちていった魔理沙を縛り上げて門番に突き出すとするか。

第十一話　ｖｓ魔理沙～紅魔館・上空にて～（後書き）

また二週間近く経ってしまったｏｒｚ特に忙しいわけじゃないんですが…しいて原因を言うなら夏という存在が一番（主に精神的に）効いたせいだと思います。早く秋来い。

今回の補足
反射「ミラーシールド」
これはゼル伝に出てくるミラーシールドが元ネタです。
…捻りが無いですね…すいません今度はもう少し良いのを考えてきますｏｒｚ

質問・意見・感想を書いて頂けると、作者のテンションが有頂天になります。

第十二話　再び紅魔館・門前にて（前書き）

今回は早めに投稿出来た…よね…

第十二話　再び紅魔館・門前にて

「良い戦いだった。なかなかの実力だな」
「お褒めの言葉ありがとうございます」

魔理沙を叩きのめした後、魔理沙を魔法で縛り上げジェイル方のとこへ戻ってきた。
反応はそれぞれ違って、美鈴は口を開け呆然とし、鈴仙は喜びのあまり抱きついてきた。
美鈴の反応は正直笑った。だって分かり安すぎるんだもん。鈴仙は…少し落ち着けと思わずツッコミを入れてしまった。結構圧勝だったからって喜びすぎじゃない？初めて会った時と変わりすぎワロタ。ジェイルに関してはさっきの通りである。どこが良い戦いだったかは分からんが。
さっさと魔理沙を引き渡そうと思うんだが、その前にやる事がある。

「こいつ（魔理沙）引き渡す前にちょっと良いですか？」
「そいつ（魔理沙）の事を調べるのだろう？別に構わん」
「えぇそうです…って何故分かったし」

本当にその通りである。持ち合わせている道具を使い、こいつのこの異常なテンションの原因を調べて何とかなりそうだったら治そうって思ってたんだけど…何故分かったし…いやマジで。

「…最近様子がおかしかったのだ。魔力に乱れは生じている上にやたら好戦的…来られる側として見れば変だという事が一目瞭然だ。」
「なるほど」

さて…理解したところで早速調べましょうかね。
俺はバッグから双眼鏡の様な物を取り出す。もちろんこれは双眼鏡ではない。
某蛇が主人公のゲームに出てくる『アナライザー』という物だ。
ゲーム中では兵士や捕虜のランクを調べるための物だが、俺のは違う。
調べる相手の身長や身体能力・魔力や霊力などの能力・固有の能力・健康状態・掛かってる魔法や呪い等等、ゲーム中の物よりさらに高性能な物となっている。
何故持ってるかというと、ゲームの中から最高ランクの物を取り出し、能力を使って魔改造をした結果がこれだよ！っていう事。
では早速…スチャっとな。
アナライザーを構え、検査スイッチを押す。ランクが最高の物なのでわずか三秒で検査完了、早すぎだねうん。まぁ良いや検査結果はっと……

…案の定キノコっすか…しかも何か狂気による発狂状態って出たんすけど、どんなキノコ食ったんだよ魔理沙…
もし旧作設定だったら魅魔様が泣くぞ？色んな意味で。
まぁともかく取り敢えずは魔理沙の中の魔力を正常に戻すのと、狂気状態を何とかする必要があるってわけね…うん問題無し。余裕で治る。

「れいせ～ん。ちょっとこっち来て」
「はい、何でしょう？」

とてとてとこっちに鈴仙が来る。鈴仙に細かい事を話し、狂気の治療をしてもらうよう頼んだ。

「…分かりました。その位お安い御用です！あっでも魔力はどうす

るんですか？」
「安心しろ。俺がなんとかする」
「…分かりました！」

鈴仙は魔理沙の前に来て『目』をあわせようとする。魔理沙はじたばたと抵抗したんで、俺が首を絞めながら抑えました。いや暴れないで、絞まるよ？すっごい絞まるよ？
そんなこんなしている内に発狂状態から普通の状態まで戻すことが出来た。そしたら何故か魔理沙が気絶した。いやほんと何で？まぁそれは良いや、取り敢えず魔力をどうにかせんとな。では早速…

『力の乱れを正常に戻せる筈が無い』

…コレデヨイ。いやア○ツキネタは良いから。
魔理沙の額に手を沿え、乱れが治るイメージをしながら力を込める。すると、薄く光が放たれ魔理沙の体を包む。それから十秒位経って光は収まった。
そんでもってまたアナライザーを構え検査する。…うん全て元通り…気絶した事以外は。
…にしても何でこうなったんだ？…まぁキノコが原因なのは分かりきってるんだけど、取り敢えず聞いてみるだけ聞いてみるか……
そのうち。
…まぁまずはとっとと引き渡すとしますかね。

「終わりましたよ～。後は煮るなり焼くなり好きにして下さい。」
「了解した」

気絶している魔理沙をジェイルに引き渡す。魔理沙がこれからど

うなるかは知らんが…まぁ今までやった事を考えればそれなりに酷い事をされそうだね、うん。

「…ふむ、元に戻っている……なかなか強い能力（ちから）を持っているのだな」

「えぇまぁ結構使えますかね……へ？強い？」

強いって表現は何かおかしい気がするんだけど…つーかそれ以前にこの人さっきからあまり理解できない事言ってるんだけど…どういう事なんですかね？

「あのー…さっきから『良い戦い』とか『強き能力』とか意☆味☆不☆明なんですけど…つまりどういうことなんですか？」

「…ふむ、説明しないと分からんか…」

「えぇ。ちょっと理解出来ないんですよ」

「…そうだな。ではまず『良い戦い』について話しておこう」

「はい」

「これは、お前が相手の状態を理解し、相手に対応した戦いを見せたからだ。気持ちが昂っている相手に挑発を仕掛け、技を使わせる。発動した技を相応の対処法で対処する。その際も常に冷静に行動をしていた……素人では出来ん良い戦い方だったからこそ『良い戦い』と言えたのだ」

「…なーる」

…うーむ…そんな風に見られていたのか…うーむ、そういうもんなのかね？…まぁ狙って挑発したのは当たりだけど。

「そして『強い能力』についてだが……理由は三つある」

「三つ？」
「うむ。まず一つ、魔力を元に戻した事」
「え？」

えっそれ？マジで？案外簡単に出来ちゃったからそこまで意識してなかったんだけど…

「それのどこが理由の一つなんすか？」

「…他者の魔力操作は普通の魔術師には出来ぬ芸当だ。一時的に上げ下げする事は可能だろうが、他者の乱れた『力』…これを元に戻すには長き修行を経て力を付けた魔術師のみが出来るものなのだ。それをまだ二十にも満たぬ者が簡単に戻せる筈がない。故に『強き能力』と言える理由の一つとなった。」

「そーいうもんなんすか？」
「そういうものだ。後お前は魔力以外の能力も元に戻せるのではないか？」
「…うーむ何でこう悉くバレるんだろうね」

まるで心を見透かされてるみたいに。さとりじゃあるまいし。

「長く戦場に身を投じていると、人の心理というのが容易く読めるようになる。それにお前は俺の知る中では分かりやすい部類だと思うぞ？かなりな。」
「…何か…ショックだ……」

…ん？今戦場って言わなかったか？もしかして軍人さん？…でも銃持ってないよなぁ……
ファンタジーとかそっち系統の世界から来たのかな？魔法使いの事

を前々から知ってる様な感じだし。
…といっても独自の設定なのかもしれんが。

「さて次だが、これはお前の使っていたカードが理由だな」
「カード？…あぁスペカか」

スペカの事と理解した俺は、なんとなくさっき使っていたスペカ等を出す。今持ってる総数は四枚…
…少ないよねうん。

「あぁそれだ。…それに含まれている力……それはかなりの量の力を含んでいる。上級の魔術師の扱う量に匹敵するものだ…攻撃系のものは、普通の兵士がまともに食らえばほぼ瀕死に追い込める程の力を持っている。反射効果のあるその盾は、光線のみならずある程度の魔法・霊術・妖術…弱い神力を含むものも返すことが可能だろう。」

「…うそーん。」

そんなに強力なもんだったの？蓮也びっくり。…冗談抜きで。

「うーむ…何か恐ろしい能力を得てしまった気がする…」
「確かに恐ろしいものかもしれんが、お前がちゃんと扱えば危険では無いだろう……詳しくは知　らんがな」
「むー……」

…そういえば零奈に俺の能力教えてなかったな。…まぁ人里にいるらしいから直ぐ教えられるだろうけど。

「さて最後……それはお前自身に備わっている力だ」

「…んーと、魔力とか霊力とかか？」
「そうだ……何故これだけの力を持っているか…それはお前の能力が原因だろう……そこで聞くが、お前の能力は何だ？答えられるのなら、答えてもらいたい」

ついに来たか……まぁ別に教える事を拒む気はないしね、教えちゃいましょう。

「…良いぜ。俺の能力は『幻想を実現する程度の能力』だ」
「…ふむ……『幻想』というと？」

「簡単に言えば、俺が有り得ない・出来るはずが無いと思っている事。俺の能力はそれを『実現』させる事が出来るんだ。さっき出した物も能力で創り出した物だし、このスペカも全て能力で　創り出した物さ……便利過ぎて怖いけど。」

「ほう……なかなか良い能力だな」
「良いっちゃ良いんだけど…過信しすぎると後が怖いんすよ。色々と」
「うむ。その考えは正しい。自らの能力を過信しすぎると、身を滅ぼすからな」
「仰る通りですよ」

ほんと使えすぎて困るよな。俺の能力。今はまだ完全に使いこなせていないけど…これヘタすりゃとんでもない異変のきっかけになりそうだよな……一歩間違えたら。

「…そういうところだ。…さてあまり引き止めておくのは好ましくない。美鈴。案内してやってくれ」
「……ふぇ？…あぁはい！分かりました」

…美鈴……今絶対寝てたよね？涎付いてっぞ。

「…美鈴…お前また……」

「い！いや！寝てませんよ！ただぼーっとしてただけで！」

「それでも悪いわ！馬鹿者が！」

ジェイルが叫ぶのと同時にジェイルの影が動き浮かび上がったと思うと、鋭く剣の様な形に変わり美鈴の頭を刺した。さくっと綺麗に刺さり、痛い！と言いながら地面を転がり回った。

つーか何今の？何かハガ〇ンのプラ〇ドみたいな感じのものが出たよ！？しかもびっくりしてアナライザー落としちゃったよ！耐久性能は上げてあるけど、壊れてないよね？ねぇ！？

落としたアナライザーを拾い上げ土を払う。良かった…壊れてないみたいだ……ってあら？検査スイッチ押ささっちゃった様だ。ジェイルを検査しちゃったみたいだ。

……別に見ても文句言われないよね？

どれどれ……年齢２５、若いな。健康状態・異常無し、病気持ちではないと、んで魔法・呪いは……

ん？呪い有り？えーと何々……え…弱体化？どういうこと？

…幻想入りする前に掛けられたのかな？…詳しくは本人に聞くしかないけど。

…まぁその本人が今説教中で聞けなさそうだけど。

「全く！何故そう隙あらば寝ようとするのだ！門番としての自覚はないのか貴様！」

「ジェ、ジェイルさん…それ前にも聞きました…」
「貴様の意識が足りんから何度も言っているのだ！大体貴様は……」
…何か怒って言葉や迫力が怖くなってるんだけど……あぁこれ長くなるな。
「…鈴仙」
「…何でしょう？」
「…お茶でも飲んで待ってますか」
「…そうですね」
そこら辺に能力で創ったシートを引きお茶と湯呑を出し、二人分注ぐ。
……あぁ美味い。さていつ頃終わるかね～なる早で終わらせて欲しいね。
俺と鈴仙はお茶を飲みながら終わるのを静かに待つことにした。
あぁ……空が青いなぁ。

第十二話　再び紅魔館・門前にて（後書き）

どうも作者の連夜です。今回はいつもより早く投稿出来ました。本当に良かったです！…まぁ相変わらずの文章力ですがｏｒｚ

今回の補足

「アナライザー」

元ネタはＭＧＳＰＷです。面白いよねＰＷ。

ジェイルの能力は…言っちゃいますと「影を操る程度の能力」です。…実はこの能力は設定として既にあるんですよ…左城宮則紗っていう公式ではない釣りキャラの能力として。執筆中にある動画で見つけてどうしようか悩んだんですけど、もう良いやこのままいったれ！って、ほぼやけくそでこの回を執筆してました。則紗に関しては適当なとこで絡ませりゃ良いかなって結論に至りました。もし則紗のファンがいたら、すいません変更せず突っ切りますｏｒｚ

質問・意見・感想を書いて頂けると、作者が鬼人化して狂喜乱舞します。

第十三話　凡人と紅魔館の人達と召喚士と（前書き）

お久しぶりです。かなり間が空いてしまってすみませんｏｒｚ

第十三話　凡人と紅魔館の人達と召喚士と

「も～ジェイルさん…容赦無しに刺しすぎですよ！もう…」
「いや俺らに言われても困るんすけど…」
「だって愚痴を聞いてくれる人が誰もいないんですよ！？こういう時にこぼさないとやってられませんよ！」
「ほぼ自業自得じゃないの…貴方…仕事と睡眠のどっちが大事なの？」
「……も、勿論仕事に決まってるじゃないですか！」
「「何今の間？」」

…はぁ…全く呆れるな…この怠惰な性根には。
さて俺は今、紅魔館・内部にいるわけだが…美鈴の愚痴が五月蝿いよもう。
あの後ジェイルの説教が一時間程続き、このままだと終わりそうに無かったので取り敢えず止めて案内してくれないか？と言って止めてもらった。正直あのままだと三時間位説教続いてたんじゃなかろうか？真面目だね～美鈴と違って。
それとあの影が動いた件と弱体化の件について聞いてみたところ、影については「影を操る程度の能力」を所持してるからと言っていた。どうやら幻想入りする前から使えたらしい。弱体化については詳しく教えてはくれなかったが、幻想入りする時に力の殆どを奪われたとだけ教えられた。誰に？と聞いたが、まだ信用があまり無いせいか教えてはくれなかった。まぁしょうがないか、詳しい事はもうちょっと俺が信用に値する人間だと認識してもらえるまで我慢しますか。

…それにしてもこの館綺麗だよな。細部の隅々まで手入れが行き

届いている…流石は咲夜さんまじ瀟洒。

ただ……メイド妖精仕事しろ！箒で遊ぶな！走り回るな！ってうおい！いま壺が落ちそうになったぞ！？危なねぇっての！全く…幾ら妖精とはいえ流石にどうなんこれ！？

…あれ？待てよ？もしかして咲夜さんが忙しいのってまさか…

色々とぶつぶつ考えてるうちに調理場と思わしき所に差し掛かった。そこで誰かの話し声がした。穏やかな感じではなく、説教してるような声で誰かが喋っている。…あぁこりゃ予想通りかもしれん。

「…咲夜さん、まだ説教してたんだ…」

…やっぱりか。

俺と鈴仙と美鈴がひょいっと中を覗いてみると、白髪でメイド服を着た女性が粉を被った三人のメイド妖精を説教している。間違いない。『十六夜咲夜（いざよいさくや）』だ。

『十六夜咲夜』は紅魔館でメイド長をしている紅魔館の唯一の人間（ジェイルは人間だけどスルー）。『時を操る程度の能力』を所持している。ナイフ投げが上手く頭にリンゴを乗せた妖精の額に命中させることができる程の腕前。完璧に見えて抜けてるらしいそして犬なのに猫舌っていうね。ＰＡＤ長言うな。

…しかしまぁ、そんな理由で忙しいと言うのはどうなんだろ？オブラートに包んで伝えたかったんかね？

…まぁ「説教をしていて忙しい」ってのはどうかと思うし、正しい

言い方なんだと思うけどさ。
その内に叱られてるメイド妖精の一人がこちらの存在に気付き、手を振ってきた。緊張感無さすぎだろおい。
咲夜さんはそのメイド妖精をナイフで刺し、ついでに他二名も刺しこちらに近づいてきた。

「美鈴。貴方職場を離れて何をしてるのかしら？」
「こちらのお二方をパチュリー様の所まで案内しようとしていました」
「…それは独断？」
「あっいえジェイルさんの意向で…」
「…そう…なら良いわ」

咲夜さんはそう言うとこちらを向き、ぺこりと一礼をした。

「大変見苦しいところをお見せいたしました。パチュリー様にはどのようなご用件で？」
「えーとですね…」

少年説明中・・・

「…申し訳ございません。私が受け取りに行けば良かったですね…」
「あー…いや、別に良いですよ。何か大変そうですし…」
「…先程の事はお気になさらないで下さい。それよりも薬をお届け致しますので渡して頂けますか？」
「あっはい。鈴仙」
「はい」

鈴仙は籠を降ろし、吐息用の薬の入った袋を取り出し咲夜さんに渡す。咲夜さんは中身を確認し、合っているか確かめる。合ってい

ると判断し袋を閉じる。

「それでは、お届け致します。暫くここでお待ち下さい」
「了解です」

咲夜は去ろうとする。が、足を止めこちらを振り返った。

「高宮さん…でしたっけ？貴重なお話有り難うございました」
「え？……あぁ…いえいえどういたしまして」
「…美鈴。後で私の部屋に来なさい」
「（ビクッ）はっ！はい！」

咲夜さんは俺と鈴仙に一礼して、能力を使ってその場からいなくなった。

…にしても笑顔が怖かったな…これはやっぱり…

「……何で」
「ん？」
「何でさっきの事全部話したんですかーー！！！」
「いやーやっぱ咲夜さんにも言っとかなきゃ駄目でしょ？お前の失態」
「これで二人分の説教が来るじゃないですか！うわーーーん！！！」

…まぁ俺が言わなくてもそうなったと思うよ。うん。
まぁ自業自得だ。諦めろ。…まっ取り敢えず戻って来るのを待つとしますかね。

―ｓｉｄｅ　咲夜―

美鈴はどうして居眠りを繰り返すのかしら…確か休憩時間の時に仮眠を取っている筈なんだけど…

…これは本人に直接聞くしかないわね。…それでもし下らない理由だったらいつもより多めに刺すことにしましょう。…それで居眠りしなくなったら苦労はしないのだけれど…

…とはいえジェイルが来る前に比べたらかなり減っているわよね。あの頃は２４時間寝てる時もあったから…その時に比べたら大分マシになったわ。ほんとジェイルには感謝しないとね。

…いや、美鈴の件だけじゃない。多くの面で彼には感謝している。彼のお陰で魔理沙が盗っていったパチュリー様の本を全て取り返すことが出来た。妖精メイドも戦闘面や仕事面が少しかましになってきた。

掃除の手伝いもしてくれるし料理も作れる…しかも美味しいのよね。どう稼いでいるのかはしらないけど紅魔館の資金も賄ってくれる。本当に感謝しているわ。

…ただもう一人は…少し問題ね。幾らパチュリー様が気に入っているとはいえ…お嬢様に対する言動の数々は許せないわ。悪い人ではないけれど…私はあまり好きになれないわ。

……はぁ…っと着いたわ。やっぱり物思いに耽るのは、時を止めている時に限るわ。止まっているから幾ら耽っても時間は変わらないもの。

能力を解除し、扉を開け図書館の中に入る。相変わらずカビ臭いわ…どうにか風を通さないとパチュリー様のお体によろしくないわ。

こつこつと歩いていき、いつもの席に座っているパチュリー様の所まで行く。相変わらず蝋燭の僅かな明かりで本読んでいらっしゃ

る。いつぞや魔法の光の方が見やすいのでは?と聞いたのだが、「そんな事に使うのは魔力の無駄。それに明るすぎて読みづらいだけ」と言って使わない。
私としては魔法の光の方が良いと思うのだけど…でもパチュリー様がいいと言っているのだからあまり細かくは考えない事にしよう。

「パチュリー様」

私の声を聞いたパチュリー様は此方を振り返り、「何の用?」と言った後、私の手元にある袋に気付き「あぁ」と納得なさると席を立ち、その場をお離れになられた。そして数分も経たずにお戻りになり、お金の入った袋を手渡された。

「それじゃあ頼むわね咲夜」
「かしこまりました」

時を止め移動しようとした、その時

「あん?咲夜じゃねぇか。三日ぶりに図書館で見たな」

…あまり見つかりたくないのに見つかったわ…

「…言っておくけど貴方が見てないだけで、私は毎日掃除しに来ているのよレクト」
「あぁそういやそうか。まぁ会う理由がなきゃ、わざわざ会う必要なんてねぇわな」

…彼がもう一人来た人、『レクト・ラックマン』だ。性格は効率主義で興味の無い事にはやる気を出さない面倒臭がり屋。パチュリー様が魔導書の中から見つけた魔法陣により召喚されて、パチュリ

ー様を命の恩人だと言い、パチュリー様の頼みごとはほぼ全て聞いているが、それ以外の人の話は聞く耳を持たない。

……ただ何故か小悪魔の頼みごとは聞いている。多分パチュリー様の使い魔ということで、少しか聞く気が出来たのだろう。…分かりやすい差別ね。

むかつく人ではあるが、実力は相当なもの。魔力の強さがパチュリー様よりも高く、『召喚を制御し操る程度の能力』という能力を持っている。聞いただけではよく分からないが、精霊や使い魔を召喚したり、魔獣・幻獣を呼び出したりするだけでなく、召喚したものの力を自分の意思で力の強弱を変えられたり、魔法陣を描かなくても好きな位置に呼び出す事も出来るらしい。物も召喚可能だそうで、魔導書を見つけては片っ端から召喚を繰り返して研究しているそうだ。

…恥ずかしい話、彼には一度戦って負けている。スペルカード戦だったのだが、彼には時間を制御出来る神が憑いており、そいつのせいで私のスペルカードは全くの効果を発揮しなかった。ナイフを投げればゴーレムとかいう魔獣に防がれて当たらないし、密度の濃いスペルは使われるしで、あっという間に負けてしまった。…正直あれは酷いと思う。

今彼は、パチュリー様の喘息を治す為に魔導書やその他の本から見つけ出した魔法や薬を研究しているが、良い実験動物（モルモット）がいないそうだ。…そこら辺にいる鼠でも良い気がするのだけど。

因みにジェイルの身長は１９８ｃｍだが、レクトの身長は１６２ｃｍで私より低い。小さいと言ったら凄く怒った。貴方に言ったんじゃないわよ…まぁ小さいとは思っているけど。ついでに女の子にしか見えないけど。

「…おい、今すげぇむかつく事考えなかったか？」

「いえ、別に」

…何で人の心の中で言った事に反応してるのよ…
何もそこまで身長を気にしなくても良いと思うのだけれど…

「…気のせいか。そういやまたあの泥棒女(魔理沙)が来ていたようだな。懲りないよなぁあいつ」
「…そういえば五月蝿い音がしてたわね。またジェイルが抑えたんでしょ咲夜?」
「いえ、今回は別の方が抑えられました。」
「別って…んだよジェイル負けたのか?」
「いや、そうじゃなくってね…」

少女説明中・・・

「…ふーん、薬師ん所の居候ねぇ…パチュリー達のことを知ってたってのはどうも信用ならねぇな」
「事実よ。私が猫舌ということを知ってたもの。そのことは永遠亭の人達は知らない筈だから」
「ふーん……まぁそれは良いとして、そいつ、魔法や薬の実験台に出来ねぇかね?」
「貴方ねぇ…赤の他人に対してその発言はどうなのよ…」
「実験台まではいかなくても、血のサンプルだけは回収したいわね…そいつの能力にも興味があるし」
「しかしでs「さーくやー!居るー!」あら…この声は…」

声のした方に行くと、我が主『レミリア・スカーレット』様と『フランドール・スカーレット』様が居た。相変わらずの可愛さ…じゃなくってカリスマを放っていらっしゃる。

「どうか致しましたか?」
「どうかしたじゃないわよ!呼んでるのに来ないからわざわざ探し

に来たのよ！」
「すみませんお嬢様…立て込んでいたもので…」
「またメイド妖精の説教してたの～？最近そればっかだよね～」
「すみません…あまりにも見苦しかったものですから…」
「…はぁ…まぁ良いわ。紅茶を入れてくれる？」
「はい…あっ、すいませんお嬢様。お客様が来ていらっしゃるので、もう少しお待ち頂けますか？」
「お客さん？誰が来てるの～？」
「永遠亭の兎とそこの居候の方です。」
「…あぁパチェの喘息の薬か。…ところで居候って？」
「あぁ、はいそれは…」

少女説明中・・・

「へぇ…そいつ、私たちの事を前々から知ってたの？」
「はい。私が猫舌という事も知っていましたし」
「わ～面白そうな人だね！一度会ってみたいな～」
「私も同意見よ。咲夜、連れて来て頂戴」
「…かしこまりました。」

…高宮さん、ごめんなさい。貴方はお嬢様と妹様の暇つぶし用の遊び道具として選ばれたようです…
そしてパチュリー様とレクトの実験台（モルモット）として…

…行きましょう。可愛そうな人を迎えに…

―蓮也視点―

「…ぶぇっくしょん！！…あぁ」

「大丈夫ですかご主人様？風邪ですか？」
「…いや、今のは誰かに噂された感じだ……何か嫌な予感がしてきた…」
「はは、何言ってるんですか？気のせいですって」
「…あぁ…これは来ますね」
「へ？」
「あぁ。すっごいフラグを感じたよ…」
「はい？フラグ？」

美鈴は俺と鈴仙の会話が理解出来ず、きょとんとしている。…まぁ幻想郷の人には理解出来ないだろうな。フラグつっても何なのか分かんないだろうし。鈴仙が理解して普通に言ってるのは驚きだけど。

しかし今の悪寒は気のせいじゃないよな…ここ一週間、フラグが立つと必ず回収してたからな～絶対何かあるぞこりゃ。

とか考えてる内に、咲夜さんが戻ってきた。手には何か重みのありそうな袋を持って。

「遅くなりました」
「まぁそんなに待ってないですけど。…それが代金で？」
「はい。……払うのは少し待って貰えないでしょうか」
「はい？」

何で？払えるなら払って欲しいんだけど……まさか俺に用事か？

「…レミリアお嬢様とフランお嬢様、パチュリー様が貴方に用事があるのです」
「ほう…俺にか…」

これはテンションを上げずにはいられないな！
…俺はロリコンじゃないからな。

「何故か嬉しそうだけどあまり喜ばない方が良いですよ？なにせ…」
「言わなくていいよ、大体予想出来る。どーせ暇つぶし用の道具とか、血を飲みたいとか、薬の実験台にしたいとか、血を採って研究材料にするとかそんなとこだろ？」
「…そうです」

やっぱりねー。そんな感じはしたよ、うん。

「分かっているのなら話は早いですね。一緒に来てもらえますか？」
「いいですとも！」

メテオは降らないから。

「それではこちらへ…美鈴。貴方は仕事に戻りなさい」
「あっはい、分かりました」
「…後、ちゃんと私の部屋に来るように。…逃げようなんて…思わないこと…いい…？」
「（ビクビクッ！）はっはいいいい！！分かりましたあぁぁ！！」

美鈴は直ぐ様方向転換し、フルスロットルで走っていった。
美鈴…見えるだろう…あの死兆星が…！いや殺そうとするなし。

「それではこちらへ…」
「あっちょっと良いっすか？」
「？はい何でしょう？」
「…こんな事を言うのも何ですけど、もうちょっと砕けた感じに喋ってもらえないですか？…何だかムズ痒いんですよ。何と言うか…

落ち着かないというか…」
「…そうね…」

咲夜さんは顎に手を当て、考える仕草をした後、こっちを見た。

「…良いっていうなら有り難く砕かせてもらうわ。」
「うい」

うん。ようやく自然に接しやすくなったぜ。あの話し方だとこっちから話しかけずらいんだよなぁ…
…咲夜さんって何か妙な威圧感があるから、話しやすくしなきゃな。

「じゃあ改めて、付いてきて」
「了解です」

少年と少女二名移動中・・・

…地下図書館に着いたぞ！…いやまぁ別に主張しなくても良いんだけどさ。
取り敢えず扉前での感想。何か湿っぽい…そして微かにかび臭いっていうね。
…何か酷いな。まぁ情報通りだけどね。

「さて…入るけど……貴女、今この場には必要ないわよね」

そう言って鈴仙の方を見る。
…まぁ確かに呼ばれたのは俺だけだから、必要ないといえば必要ないんだが…

「ご主人様に何かあったら困るから、誰が何と言おうと一緒にいる

わ」

「…そう。まぁ別に良いけれど」

あっ良いんだ……ってあれ？何か鈴仙に被害が及びそうな予感が…

…っとそんな事考えてる内に咲夜さん中に入ってっちゃったよ。

しかもおぜう達呼んでるし。

…取り敢えず集まったのは、レミリアおぜう・フランちゃん・パッチェさん…で知らん男。またか。

まぁまず男は無視して、一人一人の情報を思い出してみよう。

まずおぜう。

『レミリア・スカーレット』は紅魔館の主で吸血鬼のお嬢様。『運命を操る程度の能力』を所持している。やはり主というだけあって、実力はトップレベル。でも最強最速っていっても力じゃ萃香がいるし、速さじゃ文がいるし、器用貧乏になってますよおぜう様。妹に『フランドール』友人に『パチュリー』がいる。そしてカリスマブレイク時のうー☆は有名だよね。

次フランちゃん。

『フランドール・スカーレット』は『レミリア』の妹で、少し気が触れており、そのせいか地下に幽閉されていたが、紅霧異変後は外にも出るようになった。『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を所持している。おぜう同様に吸血鬼の身体能力を持つが、一説によるとおぜう以上だという話もある。

フランちゃんうふふ。

そしてパッチェさん

『パチュリー・ノーレッジ』は紅魔館の地下図書館に住む魔法使い。『火水木金土日月を操る程度の能力』を所持している。魔法使

いというだけあって魔法…主に精霊魔法や属性魔法を得意としており実力はあるが、喘息のせいでまともに詠唱出来ないということもある為、色々とどうなんだかね。ビタミンAが不足しており、虚弱である。パチュマリは定番だよね。ムキューは有名だよね。

…っとまぁこんな感じで紅魔館の人は全員……ってこあいねえし。何処だ。

えーと……あぁ何か奥の方で忙しそうに動き回ってるわ。

こあってのは『小悪魔』の事。大妖精と同じで名前は無いし、能力も無いが、一応悪魔。

中ボスだからそんなに情報が無いんだよね…大妖精の時もそうだったけど。某G○A動画に出てる小悪魔はカッコいいわ。

…よし。今度こそ全員だ。…でそこに居る奴だけど…

薄い青の横に緑色のラインの入ったローブを着ており、銀色のサークレットを着けている。髪は金色、目つきが悪い、んでもって細身のような感じがする。…いやまぁローブ着てるから分かんないけどさ。

身長は俺より低く（俺は１７８ｃｍ）見下ろせそうだ。そして腰に剣を差してるのが見える。

…ジェイルも顔立ち良かったけど、こいつも結構良いな…チクショウm……いや、むしろ良すぎて女に見えるぞオイ……あれですか？萌え要素の一つである『男の娘』ってヤツですか？

「良く来たわね。私がここの主、レミリア・スカーレットよ」

「フランドールだよ～！よろしくね～。」

「…まぁ知ってると思うから自己紹介は省くわ」

「えぇまぁ。高宮蓮也です。宜しく」

…あぁ…生おぜうと生フランちゃんと生パッチェさんは最高だ…コスプレでは分からぬ可愛さが滲み出ておる…はぁ……だからロリコンじゃないって。

「そこ吸血鬼二名。相手は知ってるんだから、自己紹介しなくて良いじゃねぇか…まぁ俺は知らねぇだろうから自己紹介しとく。レクト・ラックマンだ。」

「あぁはい宜しく」

…何か態度のデカそうな奴だな…背は小さいのにねぇ…ついでに男の娘なのにねぇ…

…それにしてもおぜうとフランちゃんを、『吸血鬼二名』で呼ぶとは…従者じゃないんかね?

「…おい今小さいとか考えなかったか?」

「…へ?…えーと……いや?そんな事は考えてませんよ?」

「…何か歯切れが悪ぃなオイ。…まぁいい」

…成る程。身長に劣等感を得ているらしい、こいつは。そして多分、口には出さなかったけど、顔も気にしてると思うなこれ。だって完全な男の娘だし。

…そしてどうでもいいが結構声高めだな…

「さて、自己紹介はこの辺にして、とっとと本題に入るぞ」

「暇つぶしの道具と実験台だろ?やる事は分かってるから直ぐに始めましょうか」

「あ?分かってたのか?なら話は早ぇな。とっとと実験するからこっちに来い」

…うーん…何か会って直ぐ実験ってのもどうなんだろ?…まぁ良

いんだけどさ。

「ちょっとレクト。私達の本題が先よ。」
「そうだよ！血を吸うのが先だよ！」

あぁやっぱりそうなん。

「あ？知るか。血が不足した状態で実験したら、正確な結果が出せねぇんだよ。ちったぁ我慢しろ」
「実験やった後の血は余計なものが混ざって美味しくないじゃない！私達の方が先よ！」
「あ？やんのか？あぁ？」「「そっちこそ！」」

…何か騒がしくなってきた…蓮也ですが、部屋の空気が最悪です（文字通り）

「はぁ…また始まったわ…」
「…図書館で暴れないで欲しいのだけど」

…何か咲夜さんとパッチェさんが保護者に見えてきた。何この状況、新鮮。
これはまた待たされるフラグか？…やめて欲しいんだけど。
…ならば俺が止めに入るしかあるまい。逝くぞ！（誤字ではない）

「おいあんたｒ「あー！もう！構う時間が無意味だ！ゴーレム！そいつを抑えろ！」え」

ゴーレム？一体どうゆう…ってあれ？何かでっかい手に掴まれたような…
体が動かないので首だけ回して後ろを見ると、全身が岩で出来て

いる巨人がいる。
…うん言った通りゴーレムだね。ゲームでもよく見るヤツ。つーかまさかの強制連行かい。

「後ついでにそこのウサ耳女も連れて来い！」
「何故に！？」

俺の疑問発言を他所にゴーレムは鈴仙も捕らえてしまった。あぁフラグを回収したな…
鈴仙は驚いているが、逃げようとはしない。あれか？ヤケクソか？

「ちょ！レクト勝手に持ってかないでよ！」
「早い物勝ちだ。そこでじっとしてろ」
「うー…」「も～レクトずる～い！」

ぐは！そ、その落ち込み顔と怒り顔ヤメテ！も、萌える！
…って、ん？何か手足縛られてない？え？何？縛ってやんの？ちょｗいやいやｗ逃げねぇってｗだから
外してｗって鈴仙も縛られちょるｗあっやっぱタンマｗ待って！何かその薬禍々しいんですけどｗ
むっさぼこぼこいってない！？ちょ待って！嫌！ＮＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！！！

第十三話　凡人と紅魔館の人達と召喚士と（後書き）

三週間ぶりの投稿になってしまいました。すいません、また忙しかったですｏｒｚ。これからは忙しくなる時は、予め書いておきます。

さて、四人目が登場しました。彼は本文にも書いたように、効率主義者で面倒臭がり屋です。しかし、本当は情に弱い良い人何です。咲夜さんがパチュリーと小悪魔以外の頼みは聞かないと言っていますが、彼は信用における者と親しい者の頼みしか聞かず、自分がやる必要の無い頼みは面倒臭がってやらないだけなんです。

彼の『召喚を制御し操る程度の能力』は、本文で説明したので省きますが、出てくる精霊や魔獣等はＦＦやらのゲームや、オリジナルで考えたものが出ます。多種多様能力を持ったのものが出るので、レクト君は無駄に強いって事になります。

因みに精霊や魔獣等々の方々は喋ります。その事もこれからの物語に組み込んでいこうと思います。

さて、次回から他の幻想入り者を主軸にした話を書こうと思います。

これでようやくタイトル通りに幻想入り者達にスポットを当てていけます。

この小説は七人の幻想入り者が主人公なのです。蓮也が主人公と思った方、すみませんｏｒｚ

次回は零奈を主軸とした話となります。

更新が不定期で安定しない小説ですが、質問・意見・感想をして

頂けると、作者のやる気が滝登りします。

第十四話前編　怪力娘と人外娘達（前書き）

今回は零奈が主役です。変態発言に注意！

第十四話前編　怪力娘と人外娘達

蓮也と鈴仙が紅魔館で地獄を味わっている頃、零奈と妹紅は霧の湖に居た。
零奈はその日、幻想郷の有名所を知る事と…良い男と女を探す事を目当てにしていた。
有名所を知る事は、行動する上で場所を知らなければ動く事が出来ないから。
男女の探索は…ヤる事が目当てで探しているから。因みに今日の収穫は０。
彼女は、幻想入りしてから、里での仕事が無い時に多くの有名所を巡り、徐々に行動範囲を広げ、今では殆どの場所を覚え、そこでの危険植物・危険な妖怪・注意点等を完全に把握する程となっている。
そういうわけで彼女達は今、特に理由も無く、後回しにしていた霧の湖に足を運んだのであった。

―ｓｉｄｅ　零奈―

「ここが霧の湖ね。へぇ…名前の通り霧に覆われてるわね」
「見通しが悪いから、足元に気をつけて…まぁ分かってるとは思うけど」

霧に覆われた湖か…私の暮らしてた付近じゃあまり見られない光景ね。せいぜい見れるのは、
近くの川にヒグマが水浴びに来てるとこくらいよね。そういえばそのまま街中に出て大騒ぎになった事もあったな～。まぁその時は私がさっさと抑えたんだけどね。

ま、それはいいとして、妹紅が言うように見通しが悪いわねここ。しかも霧のせいでこの湖が大きく見えるわ。話によると三十分位で一周出来る程度の大きさらしいけど…霧って凄いわね。

…それにしても、良い男女が見つからないわ～昨日は妖怪の娘四人とヤったんだけどな～。

いや～まさか巨乳の娘があんなにも淫乱だとは思わなかったわ。お陰で凄い楽しめたけどね。

ん～……何か水場があると泳ぎたくなるわね。水着着用中だし、泳いで行こっかな？

「…ってちょ！零奈！何いきなり脱ぎだしてるのよ！」

「んー？泳ごうかなと思って」

「いやいや何でいきなりそうなる」

「水場があれば泳ぐのは基本でしょ？それに泳ぐのって全身の筋肉を使うから、体を鍛えるのにも良いのよ」

「…別に今やらなくてもいいと思うんだけど」

「駄目よ妹紅。泳げる時に泳いどかないと、健康な体は保てないわよ？」

「私は不老不死だからあまり関係無いけどね…」

何か妹紅が何か言ってるけど別に良いわ。泳ぎましょう。じゃあまずは準備体操を……ん？

誰かがこっちに近づいてきてる。…二人ね。霧でよく見えないけど、右から歩いて来てるのは分かる。…気配から察するに妖精かな？でも普通の妖精より強い力が感じ取れる。

…そして森の方の茂みに三人いるわね。感じからして妖怪かな？何だかコソコソとしてるな。

妖精と妖怪、何らかの繋がりがるのかな？流石にこう並ぶ様に近づいて来ると、妖怪が妖精を

狙ってるのか。それとも妖精と妖怪は仲が良いのか。そう思う…う

ーん仲が良いのは無いかな？
まぁどちらにせよ、こっちに近づいて来てる事は事実だし、どんな奴か見ておきましょうか。

「…？どうかした？同じ方ばっかじーっと見て」
「…あっちの方から妖精が二人来るわ。気配からして普通の妖精じゃないと思うんだけど…」
「妖精？……あぁそういえばここら辺だったっけ」
「？　誰だか知ってるの？」
「えぇ。多分知ってるわ」

妹紅が知ってる妖精ねぇ…どんなのだろ？…まぁどんなのであろうと、可愛いならば性的に襲う手は無いわね。例え普通のより強いとは言え、妖精である事に変わりないから苦労せずに抑えられるでしょ。それでも油断する気はさらさら無いけどね。三人組の妖怪もいるし。
…っと来たわね。さーてどんな奴でしょうね…って、ぶは！よ、幼女だと！？
一人は水色の髪に水色のワンピを着ていて、頭に青い大きなリボンを着けている。羽の形は氷の結晶みたいなデザインだ。もう一人は緑色の髪で青と白のワンピを着ていて、頭と胸元に黄色のリボンを着けている。羽は上側面に黄色の線を入れたデザインだ。
それにしても幼女サイズの妖精がいるとは思わなかったわ～。普通の人間の女性サイズのなら見たことはあったんだけど。…ふふふ、幼女ねぇ…私の世界じゃ許されなかったけど、幻想郷（ここ）なら別にヤっちゃっても大丈夫よね！ましてや相手は可愛い妖精。別に咎められる理由も無いわ！

「あぁやっぱりね。ここらで妖精って言ったら貴方達しかいないものね」

「あ！あんた確か…えーと……」
「妹紅よ。まぁあまり寺子屋に顔出してないから、覚えてないのも無理ないわ」
「寺子屋？前に軽く話しは聞いていたけど、人間以外にも教えてるってのは本当だったの？」
「えぇそうよ。…と言っても寺子屋の事は慧音（けいね）にしか分からないから、もっと詳しく聞きたいなら慧音に聞いて」
「ＯＫ。分かったわ…ところで貴方達は誰？」
「あたいは最強の妖精のチルノだ！覚えとけ！」

…うーん、最強ねぇ…そんな感じはしないのだけど、力からして。自称最強の間違いじゃないのかしら。まぁ多分妖精の中で最強って意味なんだと思うけど。
…でも「能ある鷹は爪を隠す」っていうからね～もしかしたら本当に強いのかも。

「大妖精です。宜しくおねがいします」

…大？…あぁ妖精の中でも強い部類だから、大って付いてるのかな？安直な気がするけど、可愛いから関係ないわね。…あぁ早くヤりたい。

「遠命零奈よ。宜しくね。『最強の妖精』さん？」
「おー！よろしくー！」

…何か気を良くしたみたい。満面の笑みで答えられたわ。ふふ、このまま褒めたてて好感度ＵＰも良いけど、その前に…

「ところで『最強の』チルノさん？他に仲間はいるの？」
「今はいないよ。今日は大ちゃんと二人だけ」

「へぇ…そう……本当かな～大ちゃん♪」
「はいそうです。今はチルノちゃんと一緒に散歩してました。他の娘とは会ってません」

…うん、嘘が上手ねこの娘達。言い慣れてるってのが良く分かるわ。でも残念、私に嘘は通じないわよ？なにしろ嘘を多く見てきたからね。嘘を見抜くのくらいお手の物よ。
その証拠に、嘘をついている時に微かに体がピクッってなったわ。本当に微かだから普通じゃ分からないだろうな。まぁ私には関係ないけど。
一回の行動で判断するのは早いだろうけど、今までの経験に当てはめて考えたら…これは嘘をついていると見て間違いないわ。ふふ♪それじゃあ本題と行こうかしら。

「ふーん…そう……じゃああそこの森にいる妖怪は誰だろうね？」
「え？妖怪？何言ってるのよ、あそこには妖怪がわんさかいるじゃない。別に気にする必要はないわよ」
「気にする事は無い…ねぇ……」
「そうよ。気にすることもないわ。別に重要じゃないでしょ？」
「…そうでもないわよ？もし妖怪がこっちを襲おうとしてるなら、早めに対処した方が良いわ。その方が余計な怪我を負わずに済むし。『最強』の貴女ならその位分かるわよね？」
「えっ、あ、う、うんそうね。でっでも襲ってきたら皆で返り討ちにすればいいじゃない！だから気にしなくてもいいわよ！？」

…ふふ♪この反応は黒ね、言葉に動揺が見られるわ。対処って単語が出た途端、二人の顔色が褪せたから確実ね。顔色が褪せた…つまり森にいる妖怪はこの娘の友達でしょうね。何をしようとしているのかは知らないけど、隠れて行動するなら気配と力を隠す事と草むらを静かに移動する事が出来なきゃ簡単にばれるわよ？

…さてとそれじゃ早速ご登場願おうかしら。触手カモン！
背中から触手を出す。今回は地面に潜って行動するタイプを選んだわ。この子を地面に潜らせて、妖怪をこっちに連れて来る。そんでそのまま強姦って流れで行くわ。…むふふ♪どんな奴かしらね～♪

「…えーと、零奈？今から何する気？凄い嫌な予感がするんだけど…」

「森の方にいる妖怪をこっちに連れて来るの。その後は……ふふ♪」

「…貴方達今すぐ逃げなさい。逃げないと後悔する事になる。」

「ええ！そ、それはマズいわ！」

そう言うとチルノは森の方を向き、

「リグルー！ミスチー！ルーミアー！今すぐ逃げてー！！」

と叫んだ。

うん、仲間想いね。そういう娘は私大好きよ♪でもバラしたら駄目じゃないの。これじゃ何の為に隠れてたのか分からないじゃない。まぁ大いにバラしてくれた方がこっちとしても嬉しいけどね♪

まっとにかく捕獲する事にしましょう。

触手を地面に潜らせ、森の方に一直線に進ませる。触手が森に辿り着き、地面を出る。それと同時に

森の方から叫び声が聞こえ、弾幕が辺り一面に広がった。

私と妹紅は弾幕をひらりひらりとかわし、チルノと大妖精は上に飛びかわした。弾幕は収まり、しばらく様子を見ていると、触手が三名の妖怪の首襟を銜え戻ってきた。そして私が見たものは！

…またも幼女！

何これ天国？またも可愛い娘って私をヘブン状態に陥らせようというの？くー！もっとよ！もっと幼女を出しなさい！…いや幼女だけじゃ物足りないわね。スタイルの良い娘とか、胸が大きい娘とか、尻が大きい娘とか、高校生位の娘とか、熟女とか、
そういうのがもっと出てきてくれないかしらね！ほんと！
…あーでも性なる行為には女性だけじゃ駄目ね。男も必要だわ。筋肉質な男とか、スマートな男とか、背が低い男とか、背が高い男とか、息子が大きいとか小さいとか、そういう男達も必要だわ！
出し惜しみせずに出しなさい！もっと！もっと！そして揃ったらそのまま愛の育みをするの♪
…ふふ♪考えただけでムラムラしてきたわ！我慢？そんな事出来ないわ！
…だけど焦る必要は無いわ。まずはこの娘達に何をしようとしていたか聞く事にしましょう。
それからでも遅く無いわ。

というわけで、事情徴収と行きましょうか。

第十四話前編　怪力娘と人外娘達（後書き）

どうも作者の連夜です。一週間以内に投稿出来ました。いや～良かった良かった。

今回の変更点は、会話の間の行を詰めてみました。二行以上の会話の間を詰める事により多くなり過ぎた文字数を減らす事が出来ました。…でも他の方もやってる執筆方法だから何の感動も無いｏｒｚまだまだ素人ですよ本当。もう少し頑張らねば。

これを機に、他の話も同じ執筆方法に訂正しようと思います。これで少しかマシな作品になれたら良いなと思います。

どうでも良いのですが、活動報告コメントを書いてみようかなとか思ってます。書くとしたら、小説内で収まらなかった補足や日頃の愚痴などになると思いますけど…

まだまだ未熟者の作者ですが、質問・意見・感想をして頂けると、みなぎってキタキタ踊りを踊りだします。

第十四話中編　怪力娘ＶＳ人外娘達（前書き）

中編ですよー

第十四話中編　怪力娘ＶＳ人外娘達

目の前に展開された弾幕、空を飛び交う妖精と妖怪の娘達、美しく空を舞う姿はとても魅力的だ。
…といっても見惚れてる暇なんて無いんだけどね～今は弾幕ごっこ中だし、当たったら即終わりだし、
以外にこの娘達粘るし、気を抜いたらもうそこで終わりなのよ。
…本当……退屈しないわ！こんなにも臨場感溢れる戦いは何年ぶりかしら！
…本当に…本当に……ここ（幻想郷）に来て良かったわ！

―三十分程前―

「…で、そっちの黒い娘がルーミアで、そっちのマントの娘がリグル・ナイトバグで、そっちの鳥の娘がミスティア・ローレライで良いのね？」
「…はい」
「で、適当に通りかかった誰かを五人でボコボコにして、妖怪三名が食べようと思ったと」
「…はい」
「ただ襲い掛かるだけじゃ駄目だから、誰かが囮になって、残りのメンツで不意打ちを仕掛けようとしたと」
「…はい」
「で、記念すべき第一回の襲撃に私が選ばれた。しかし妹紅の存在に気が付かず、気付いた時には既にチルノが大妖精を連れて行ってしまったと」
「…はい」

「…間抜けな娘達ね～襲うならまず周りを確認して、尚且つ飛び出す時に音の出ない所にしないと駄目よ。例え私が気付いてなかったとしても、音が出る位置に居たら意味無いでしょ？音に気付けばどんなに鈍くさい人だって逃げ出す事が出来るのよ。貴方達、その際のカバーとか考えてた？」

「…いえ、全く」

「も～そんなんじゃ駄目よ。やるからには徹底的に抜かりの無いように、計算してやらなきゃ。そうすればきっと上手く行く筈よ。それに…」

「…零奈？」

「ん～？な～に妹紅？」

「襲おうとした相手に指南しなくていいから。後、服を着なさい」

「えー」

「えー？じゃない！さっさと着る！」

…もう妹紅ったら私の水着姿がそんなに気になるのかしら？…あ！もしかして綺麗だったから目のやり場に困ったとか！も～妹紅ったら恥しがり屋なんだから♪

さて、今はどういう状況なのかというと、触手で捕獲した妖怪と妖精に名前や能力、何の妖怪・妖精か等など色んな事を訊いていたの。その中で何をしようとしていたかを訊いて…まぁさっきのような事だと分かったわけ。因みに何故か訊いてる時のこの娘らの態度が、何故か正座で話を聞くという姿勢。

別に正座を強要してないんだけどな～……触手に威圧された？

それにしても一人一人面白い能力を持ってるわね。

チルノは冷気を操れて、ルーミアは闇を操れて、リグルが蟲を操れて、ミスティアが歌で人を狂わせれる。能力について深く考えてみれば、どれも恐ろしい能力だってのが良く分かるわ～。

冷気を操れるって事は、生物の体温を下げて行動に支障をきたす事も出来るし、
闇を操れるって事は、闇の中に生物を閉じ込めて逃げ出す事の出来ない不安と恐怖を仰ぐ事が出来るし、
蟲を操れるって事は、毒を持った蟲を使って毒殺が可能だし、
歌で狂わせるって事は、生物が混乱しているうちに捕食する事が出来る…
この娘ら結構えぐい能力持ってるわね…しかし私には関係ない！
冷気を操れる触手がいるし、闇の中でも気配は探れるし、蟲は苦手でも無ければ毒の中和が出来る触手もいるし、狂わされたとしても触手で何とかなるし、別に怖い事も無いわ。
…ほんと触手様々よね。幻想入り前から扱えたけど、本当に高性能よね～
……まぁ修行しなかったらここまで上手く扱えなかったと思うけどね。日々の鍛錬は重要よねほんと。
……よし、着替え終わり。水着も脱いでノーパン・ノーブラになったところで話の続きと行きますか。

「…ねぇ零奈。水着を脱ぐ必要はあったの？それじゃあ下着を何も着けてない状態じゃないの」
「もう、妹紅ったらそんな事も解らないの？」
「いや分かりたくない。訊いた私が馬鹿だった…だから教えないで」
「もちろんノー下着の方が気持ち良いからに決まってるでしょ？これでスカートを穿いたら尚良いわ！」
「力説しないで！頼むから自重して！」
「えー…」

もう妹紅ったらそんなに嫌がらなくてもいいじゃない…
…そんな事したら……そんな事したら……！

興奮するじゃない！！

…っと危ない危ない、話の続きをしようとしていたのに逸れちゃったわ。
でもこの話題のままで行くと結構時間が掛かるわ。それはちょっと困るから、別の話題で行きましょう。
……うーん思いつかないわ。話す事ってさっきの話位で、他には無かったわ。どうしましょ…

……あっ、そうだ。

「ねぇ貴方達。唐突だけど弾幕ごっこしない？」
「「「「「え？」」」」」

…五名全員、同じ反応をしたわね～仲がよろしいこと。
弾幕ごっこの提案に驚いた五名は円になって話し合っている。まぁ突然こんな事言われたら驚くし、受けるべきかどうか考えるわよね。誰だってそうするでしょうね……単細胞な子以外は。

弾幕ごっこ…正式名スペルカード戦は、私の知っている戦い方とは全く違い、武術は全く使用せず、魔法・札・ナイフ・岩・弾丸・レーザー等を利用し『弾幕』にしてお互いに撃ち合い、体力が尽きるか、スペルカードが尽きる事によって勝敗が決まるという『遊び』だそうだ。
このルールならば、どんなに弱小な生物でも鬼を倒すことさえ出来るっていう話。

しかもこれで負かした相手に追い討ちをかけて殺したり捕食したりしてはいけないそうだ。

最初聞いた時は驚いたわよ。だってどんなに力がある人でも、このルールの前では全く関係無しっていうのが驚きでしょうがなかったわ。

だって、プロレスだってボクシングだって力や技が無きゃ意味が無い。それらの実力は格闘技では本当に必要なもの、しかしこのルールではそんな事は関係無い。必要なのは、精神力と体力、これさえあればどうにでもなる。何という面白ルール、ほんと凄いわ。

妹紅にやり方を教わって直ぐ、スペルカードを作った。大体5・6枚位だったかな?

一通り使ってみたけど、本当に感動ものだったわ~今まで経験してきた格闘技とはまた違った喜びを味わったわ。

いっつも触手は化け物を退治する時に力を借りてたんだけど、こんな事で力を借りることになるとは思わなかったわねほんと。ほんと何もかもが規格外な世界よね、幻想郷って。

「…良し!話はまとまったわ!さぁさっさと始めるわよ!」

「ちょっと待ってチルノ。対戦形式とか、スペカ枚数を決めてないよ。まずはそこを決めないと」

…へぇ~リグルは結構しっかり屋なのね。舐めまわしたい。

「えーとじゃあどうする?」

「貴方達全員でかかってらっしゃい。スペカ制限無しで、全員一回被弾したら終わり。これでどう?」

「え…それじゃあそっちが不利じゃないの?言っておくけど全員でスペカを使ったら簡単に終わるよ?大丈夫なの?」

ミスティアは良い娘ね~心配してくれるんだ。体中弄りたい。

「えぇ大丈夫よ。何も心配しなくて良いわよ」
「…凄い自身だね。…確かにそれだけの力があるなら問題ないかな…？」

…ん？ルーミア私が隠している力に気付いた？
……へぇ…この娘、力が封印されてるわね。それもかなり強い力で…でも解けかけてるみたい…
…うん、あのリボンに強い力を込めて封印しているみたいね。でも時代の流れのせいで、力が弱まっているようね。…面白いものを見たわ。丸裸にして性的に弄りまわしたい。

「零奈。私が手を貸さなくても大丈夫よね？」
「えぇもちろん。問題無しよ」

「決まった！？じゃあ直ぐ始めるわよ！」
「自分が言った言葉を後悔させてあげるよ！」
「私の歌で惑わせてあげる！」
「暗闇の恐怖を味あわせてあげるよ！」
「宜しくお願いします！」

「…ふふ。相手をしてあげるわ可愛い娘達…」

―現在―

…まさか開始数十秒で、ミスティアとリグル落としちゃうとは思わなかったわ。
真正面だったからつい行ってしまったわ～。回避させる余裕を与え

ずにとっととスペカ使ったからね～
でもまさかこんなに早く落ちるとは……少しやり過ぎたかな？まぁ気にしてないけどね。
逆に開始して直ぐ、一人でも多く落とさないとしんどいのよね…五対一だし。
…それにしても残った三人はかなり粘るわね。二枚目も回避しきったし。
ルーミアはこぼれている力から大体理解できるけど、チルノと大ちゃんはイマイチ良く分かんないのよねぇ…どう考えても妖精が少し強くなった程度の実力しかないと思うんだけどねぇ…
何故か妙に強く感じるのよね…巧妙に隠してるようには感じないし、でも戦い慣れてるって感じはするのよね～…なんだろこの微妙な感じ？
うーん…確かに魔力があるのは分かるんだけど…一体どうゆう…

「ほらほらぼさっとしてたら当たるよ！」

…っと弾が飛んで来た…っと今度は右方面から…って後ろ！？危な！
危ない危ない当たる所だった…ってあら？囲まれてる？…あらあら不味いわね。まぁ問題無いけど。

「…うーん…なかなか当たらないな…」
「次は別の位置から撃つよ！直ぐ移動して！」
「「分かったわ」」

へ～なかなか良い感じに連携出来てるわね。お姉さん惚れちゃいそう。
妹紅や慧音とも連携したいな～今度お願いしてみましょ。
そしてそのまま布団で……むふふ♪

まぁそれはこれが終わってからね。今は目の前の戦いに集中しないと…

というわけでフルスロットル！

炎を扱う触手を四体出し、地面に向ける。触手から炎を発し、一気に上昇する。

この飛行法はロケットの打ち上げを参考に編み出した方法で、普通に飛ぶより2．5倍のスピードが出るから便利なのよね。ただ飛んだ後地面が焦げるから、植物が近くにある時は使えないのよね。だって花とか樹とかが燃えたら、それらが可愛そうじゃない。

触手のジェットで残った三人より上に上昇したら、広範囲に弾幕を放つ。ただ均等に撃つのではなく、誰か一人だけ密度を濃くしたりしながら撃ちまくる。幾らスペカ枚数の制限が無いからとは言え、ポンポン使うのは、ただ頼っているだけで意味が無い。出来るとこまで使わないで行った方が良い経験を紡げる。それに残しておいた方がいざって時に使えるからね、そこの所考えて動かないとね。

「ほ～らほらどうしたの？そんなんじゃ私を落とすことは出来ないわよ？」

ここでちょっと煽ってみる。チルノは話した感じ色々と分かりやすい娘だってのが分かったから、挑発したら乗ってくるんじゃないかな、と考えてみる。成功したら直ぐ落とすわ。

「ふふ、妖怪や妖精ってのはその程度なの？そうだとしたら残念ね、張り合いが無いわ。」

「…うぎぎ」

お？歯軋りしてるわ。引っかかったわ、これは行けたかな？

「…むかつくけど突撃何かしないわよ。前にやられたばっかだし」

「…良かった…チルノちゃん覚えてたんだ」

「ふっふっふ！昔と違ってあたいはがくしゅーのうりょくが高いのよ！一度やられた事は忘れ無いわ！」

「…あら、以外に知性があったのね。お姉さんビックリ」

「ふっふっふ！驚いたか！驚いたついでに食らえ！」

雪符「ダイヤモンドブリザード」

チルノがスペル宣言をすると、氷の弾とつららが出現し広範囲に広がっていく。

氷の弾幕は不規則に多方向に飛んでいくから、動きづらい。

ていうかがむしゃらに撃ち出してる様な感じの弾幕ね。結構直線的だから、落ち着いて避ければ問題無いでしょ……でも徐々に密度が増してるわね…集中しないと直ぐに落ちそうね。

まぁでもこの隙に弾幕を撃ち込めば行けるでしょ。

さーてじゃあ早速……ん？後ろに気配…？

…まさか

後ろを振り向くと、そこにはルーミアがいた。私が気付くのは想定の範囲内だったのか、

慌てずスペカを翳しスペル宣言をした。

夜符「ミッドナイトバード」

スペル宣言をすると、緑色の弾が撃ち出されこちらを追いかけてくる。つまり追尾弾。
…あ～面倒ね。二つ分のスペカは密度が半端ないわ。二人して息があってるもんだから、
私が逃げた先に回りこんで避けれないよう色々と工夫しながら動くから、こっちが攻撃する隙が無い。
どうしようかな…っと大玉が追加されたわ。更に動きづらくなったわね…
…って何かまた弾増えたわ。しかもあっちらこっちら色んな方向からポンポンと。
これは大ちゃんね…成程テレポートが出来るのね。やるじゃない。

「ルーミア！チルノ！大ちゃん！頑張って！」
「もっと右の方攻めて！」

やられたリグルとミスティアも応援してるわね。いや～可愛いわ～その姿があまりにも可愛い。

「零奈ー適当なとこで終わらせなさいよー」

妹紅は応援しているのか分からないわ。あまりにもやる気が無い様な…あっひょっとしてツンデレ？
表には出してないけど、実はやられないかとハラハラしていて、私の事を心配してる。
だけどそれが今にも表に出そうで、でも出したら私に気を遣わせてしまうからなんとか抑え込んで
素っ気無い表情で応援しているの。そして私が勝ったら「まぁ勝つとは思ってたけど」と素っ気無い言葉を掛けるけど、実は心の中では勝って良かったと私の勝利を喜んでいるのよ。

…はぁはぁ、燃えてきたわ！絶対に……勝つ！

弾幕飛び交う中、一気に上昇し三人を視界に捕らえる。そしてスペカを掲げ、宣言する。

触波「波を描きし美しき触手」

スペル宣言をすると大量の触手が出現し三人をの周りを囲む。そこに追尾型の弾幕が撃ち込まれ、
相手を追い詰める様に飛んでいく。
チルノとルーミアは必死に避け、大ちゃんはテレポを使い避けている。
甘い甘い！ここからさらに激しさを増すのよ！
三人を囲んでいた触手は、時間が経つに連れて揺れだし、次第に激しくなっていく。
そうこれは波。見ての通り触手の波よ。ただ囲むだけじゃ簡単に避けれるわ。
でもその囲んでいる部分が揺れだしたら？そしてそこに追尾弾が飛んできたら？

…つまり

「うわ！？揺れだした！？まっ！マｚ（ピチューン）」
「あっチルノちゃん！？あ、きゃあ！（ピチューン）」
「…っく、流石に不味いね…はっ追い詰められた！？（ピチューン）」

こういう事よ。

第十四話中編　怪力娘ＶＳ人外娘達（後書き）

毎度毎度更新が遅くて申し訳ないですｏｒｚ
話の構想は大体頭の中で出来てるんですけども、気だるさに襲われて執筆してませんでした…
すいませんｏｒｚ

今回の補足

触波「波を描きし美しき触手」
これは海の波を触手に置き換えました。追尾弾は魚が寄ってくる感じを表現しました。…何か別の能力で使った方が良かったかもしれません。チクショウメ

この小説がＲ１５なのは基本零奈のせい。

地味に他の話も訂正してるので、見てみて下さい。

質問・意見・感想を書いて頂けると有り難いです。

→のコメントのネタが尽きたｏｒｚ

第十四話後編　怪力娘の里戻り（前書き）

後編です。

第十四話後編　怪力娘の里戻り

はぁ…良い匂いね…甘く心地よい匂い……幼女…幼女…ハァハァ…大ちゃんは良い娘ね私に惚れたから…まぁ私の能力も関係してるでしょうけどそんな事はどうでも良いわ！今は私の膝の上で満面の笑みをしている大ちゃんを愛でるのが先よ！
ハァハァ…くんくん…ハァハァ…さわさわ…ハァハァ…

「…零奈」
「ん？どうかした妹紅？」
「…いい加減それやめないと燃やすわよ？」
「…妹紅…もしかして……羨ましいの？」
「そんなわけあるか！！いいからさっさとやめる！そろそろ戻らないと慧音が怒るわよ！？」
「…あら、もうそんな時間？……後五分だけ…」
「良　く　な　い　わ　よ　！いいからさっさと行く！」
「足りぬ！まだまだ足りぬわ！！だからせめて一回…」
「…いい加減にしないと本気で怒るわよ？」
「も～そんなに目をヒクヒクさせないで。分かった分かった行くってば」

もう妹紅ったらこういう時はこの後の流れを読んで黙ってるものなのよ？
…そうこのまま深く淫らな愛の育みをする…そんな場面は黙って見守るものなの。
少なくとも私はそう思ってるわ。ていうかそれ以外にどうすれば良いか思いつかないわ！

スペカ戦が終わってテンション上がりまくりだった私は、五人を

能力で堕とそうとしたの。
私触手を操れる以外に能力があるのよね。
能力名は「”美”を操る程度の能力」幻想入り後に得た能力なの。
「美」それはどんな生物にもどんな物にも宿っている個性。世間一般からすれば良い気持ちにはなれない生物や物でも、一部の人からすればそれは美しい…つまり「美」。私はそれを操る事が出来る。
例えば、AとBという物があったとする。ある人はAを美しく思い、ある人はBを美しく思う。
互いは相手の物を美しくないと思うわけよ。
でもその歪みを私の能力を使い、AもBも同様に美しくする事で無くす事が出来る。Aが美しいと思った人はBも美しく思い、Bを美しいと思った人はAも美しく思う。素晴らしい能力よね。
だけどこれだけじゃないのよ。ちょっと文字掛けをする事で、この能力の範囲を広げる事が出来るわ。
例えばピアノの技術。ピアノは練習しないとまともに弾く事が出来ないけど、この能力を使えば
例えピアノが下手でも、そこから流れる音色の「美」をちょちょいと弄ってやれば、あっという間にベートーベンと同格の演奏をすることだって出来る。
まぁ私には必要無いけど。ピアノなんて幼稚園の頃に友達の家でマスターしたからね。
今でもちゃんと弾ける。知らない曲も、楽譜読めるから問題無しね。
…まぁようはそういう能力で五人を堕とそうとしたの。
結果は大ちゃん以外には掛からなかったっていう結果になっちゃったけど。
結果は残念だったけど、はっきりした事がある。
それは能力持ちには私のこの能力は通用しないという事。掛かるのは能力を持ってないのだけ。
…でもこれは仕方ないと思う。だってこの能力を得てからまだ一週間しか経ってないのよ?

その程度じゃ力は身に付かないわよ。普通は二・三年位修行する事でようやく力を得られるからねぇ…

…っとまぁそんなわけだから大ちゃんでハァハァしてたってわけ。…あぁ…物足りないわ～。もっともっと深い所まで探りたいんだけどねぇ…しょうがない、後の楽しみに取っておこう。

…まぁ後って言っても、仕事が済んだらすぐヤるけどね！

「全く…何で終わったらすぐに能力使うのよ！お陰で一時間も経っちゃったじゃない！」

「まぁまぁそう言わないの。楽しかったから別に良いでしょ？」

「それは貴女だけ！…あぁもう早くしないと不味いわ…」

…あらぁ…ちょっとエンジョイしすぎたかしら？そんなに経ってるなんてね～。驚きね。

早く帰らないと慧音の頭突きを貰いそうね。

…どうせなら頭じゃなくて尻を重点的に突いて欲しいものよね。

その方が幸せ。

まぁとにかくさっさと帰りましょ。

「…とにかく飛んで早く帰らないｔ「妹紅ちょっと触手に掴まってね♪」え」

触手ジェット二十本セット・エネルギーオールクリア・角度微調整……発射準備完了！

目標地点：人里…ＯＫ何時でも行けるわ！

「…えっと…まさかこれで行くの？」
「急がなきゃ駄目なんでしょ？ならこっちの方が手っ取り早く着くわ」
「…ねぇ普通に飛んでかない？これは…ちょっと…」
「も～そんなに心配しなくても良いわよ♪三分以内に着くから♪」
「そっちの問題じゃない！」

ふふ…妹紅ったら…そんなに慌てなくっても大丈夫よ♪これは使いこなしてるから安心して。
…とあえて心の中で言ってみる。
何故かって？…慌ててる妹紅の顔を見てハァハァするためよ！なんせ私はSでもMでもあるからね。
相手の困ってる顔を見てヘブる事だって可能なのよ。私の性癖は豊富よ♪
…あっそうだ

「貴女達一緒に来る？」

そう妖精・妖怪娘達に話しかける。どうせこんな所に居たって面白くないから、人里にでも連れて行ってあげようかな？って言う気持ちがあったのよね。こんな所よりは、何か面白い事が見つかるでしょ。

「…えーと……どうする？」
「別に良いと思うよ。」
「そうだねー」
「零奈さんに付いて行きます！」
「何か面白そうだからあたいも行くよ！」

ＯＫ満場一致ね。なら行くとしましょうか。

「ところであたいたちはこのうねうねに掴まってれば良いの？」
「そうそう。…あっ落ちる危険性については安心して、ちゃんと触手が絡み付くから」
「…あの……その言い方は色々と誤解を生むような…」
「ふふ…安心して、エロ的な意味での絡み付くでもあるから」
「それ何の解決にもなって無いですよね！？」

そもそも解決する必要が無いわ。だって人里の仕事が終わったら性的に襲う予定だから。
私は嘘を付くのが嫌いなの。だから自分の気持ちを素直に出すし、誤解だとしても事実なら否定しないわ。私はそういう人間なの。
…まぁ良いわとにかく離陸よ。とっとと行って仕事を終わらせましょう。

「全員掴まったわね？じゃあ行くわよ！」

地面を強く蹴り一気に飛び上がる。こうして勢いをつけることで、スムーズに飛ぶ事が出来る。
最高飛距離まで来たところで触手ジェットを点火する。二十本もの触手が一斉に炎を吐き、空中に停止する。よし成功。後はこのまま人里までひとっ飛び！
でもその前に。

「これからかなりスピード出るから、口を閉じて静かにしててね♪」
「え？そんなに早いｎ「チルノ！静かにしてて！本当に危険だから！」へ？」
「行くわよ…フルスロットル！」

――人里入り口前　ｓｉｄｅ　慧音――

…はぁ……またか。こうも連続で続くと流石にむかつきを通り越して溜め息が出てくるな。

前々から言い聞かせているのに何故いつも遅いのだ。間に合ってはいるものの、あまりにもだらしないのではなかろうか？全く…帰ってきたらまずは頭突きだな。

…零奈はだらしなく、変態ではあるが頭が良い。私より教えるのが上手いし、子供達の相手の仕方を良く理解している。授業の質もとても良い…正直完璧だ。

私が教えてる時と、零奈が授業をしている時とでは生徒の視線が違う。私の時は、真面目な生徒以外はこちらを見ていない時がある。寝ている生徒もいた。

しかし零奈の授業の時は生徒達の視線が真っ直ぐ黒板の方を向いている。これは零奈の授業の分かりやすさとたまに交える話が面白いからだろう…しかも話はそこまで長く話さない。

故にたった一週間であるが、子供達は彼女を好んでいる。能力を使わず、あれだけ子供達と仲良く接しれるのは、彼女の元々の才能のお陰なのだろう…羨ましい限りだ。

彼女には力もある。三日前のあの事件のせいで燃えた家の修復の為に、材木運びを行ってくれた。

あの時は…正直目を疑った。何故ならただの人間である彼女が軽々と木々を持ち上げていたのだ。

妖怪ならまだしも…人間だぞ？何か術を使ったわけでもなく、素の力で持ち上げたのだ。驚く以外に何が出来る？出来るわけが無い。

出来る者がいるのなら、そいつも相当おかしいのだろうな。

…彼女は色々と私の知識から遺脱している。今までに会う事の無かった者…妖力は有るものの、それは彼女の触手の物であって、彼女の物ではない。そう考えると余計彼女という者が分からなくなる。あの細い腕で何故重い木々を持ち上げられるのか…謎だ。

…はぁ……改めて思い返すと、零奈は何者なんだ?疑問が募るばかりだ。

今は分からなくとも、後々分かるだろう。それまでは普段通り接するだけだ。

……それにしても遅い。一体何をしているんだ?…うーむ妹紅はどう考えても振り回されているのだろうが……遅い。全く何をしているんだ…

…はぁ…まさか空から来るんじゃないだろうな?まぁ急いで飛んで来るだろうからかなり雑な着陸にはなちそうだが…流石に轟音を立てて着陸する事はないだろうｎ

ズゴーーーン・・・

…まさか本当に立てて来るとは思わなかった。

「やっほーーー!慧音おー待たっせーーー!!」

「お待たせではないわ馬鹿者」

――零奈視点――

触手ジェットの旅は楽しかったわ～二分程度だけど。
着いた時に慧音と合流した。どうやら時間が迫ってるのに帰ってこないから探しに行こうとしてたらしい。やーんもう慧音ったら♪私の事心配してくれるなんて…嬉しいわぁ♪

慧音…本名『上白沢慧音（かみしらさわけいね）』寺子屋で教師をやっているの。
青白い髪に青色のワンピース、そして特徴的なトンガリ帽子。良い格好してるわぁほんと。
現在どうやって堕とし、ヤろうか策を練っているわ。なかなか難しいのよね。慧音の攻略。

「さて…ギリギリ間に合ったとは言え…あまりにもだらしない…一発食らって貰うぞ」
「ひゃっほう！どこからでも来なさい！あっでも尻の方を重点的にして貰えると嬉しいな」
「頭以外にはやらんわ！」

慧音振りかぶって…突いた！あふん！いった～い……でも……良い…！
…ふう……っとそうだ皆は大丈夫かしら？

「…あ…相変わらず恐ろしい…」
「あー凄かった！もっかいやりたい！」
「凄いですね零奈さん！こんなに早く着くなんて！」

こっちの三人は無事みたい……で？妖怪娘達は…って酔ってるわ。そんなにきつかったかな？
まぁ初めてだとこれが普通の反応かな。私もこれに慣れるのに一ヶ月かかったからね～

…そう考えると無事だった三人って凄いわね…妹紅はこれが三回目だったけどもう慣れてるし、
妖精の二人は……楽しんでいたから気持ち悪くなかったのかな?…
ってその理論はどうなんだろ……
酔ってる三人は無事だった三人に保護してもらって私は着替えて寺子屋の方に行くとしますか。
というわけで脱ぎ脱ぎ……素っ裸!…で触手にコスプレの女教師の服を出して貰って着る。

…あ、今回は下着着けよう。ガーターベルトのみだけどね!

「…突然服を脱ぐのはやめないか?色々とよろしくないぞ…」
「あら慧音、別に気にする事ないじゃない?女同士なんだから……ね♪」
「何が『ね♪』だ!…はぁ…もう良い。準備が出来たのなら一緒に行くぞ」
「はいはい一緒にイクわよ♪」
「…ねえ何か発音違くない?」

その通り。発音変えて言いました♪だが訂正はしない。それが私。

妹紅と妖精・妖怪娘達と別れて寺子屋の方に向かう。里の中は未だにあの事件の傷跡を残している。
少しずつ修繕されて来てはいるものの、完全に直ってはいない。材木は十分だから、後は大工さん達に任せるしかないわね…何時終わるかは分からないけど。
三日前のあの事件は酷かった。私・妹紅・慧音で何とか里の人達を守ることが出来たけど、里の建物はほぼ崩壊、建て直しをしなきゃならない所が多く出た。唯一の救いは畑や食料庫への被害があまり無かった事ね。これも里の人達が素早く行動したお陰ね。

寺子屋の被害があまり無くてほんと良かった。子供達の教育場が無くなる事は良い事じゃないからね。こういう時だからこそ、将来有望な子供達には勉強を教えなきゃならない。この子達が大人になって、

またこういう状況になった時に、直ぐ行動を起こせるように心を強くしてあげないとね。

まっそういうわけだからさっさと行かないとね。

人里をテクテク歩く。途中ですれ違う人に挨拶をしながら寺子屋まで向かう。

…ん？あれって確か…私の記憶が正しければ守矢の巫女さんよね。緑色の髪に蛙の髪飾り、何故か髪に巻いてる蛇…多分髪飾りだと思うけど、白と青で構成された脇出しの巫女服…うん当たりね。名前は確か…『東風谷早苗（こちやさなえ）』だっけ？

…へぇ……初めて見るけどなかなか良い娘じゃない。いや～触りたいわね…ってあら？他に誰か居る？…わ～お男よ男！彼氏かしら？なかなか良い男じゃない。

薄い緑色のツンツンした短い髪に緑色で構成された袴を着ている。履いてる者は雪駄ね髪の色以外はここの人とあまり変わりない格好ね…まぁ『力』と腰の武器を除いたらの話だけど。

彼も守矢神社の関係者かしら？だってかなり大きい神力を持っているもの…多少の魔力と霊力もあるようだけど。腰の武器は…剣ねそれも西洋風のが二本。交差するように腰に差してるわね。

ふむ…確か慧音の話だと守矢神社には、『八坂神奈子（やさかかなこ）』って神と『洩矢諏訪子（もりやすわこ）』って神、そして巫女の『東風谷早苗』が住んでるって話だけど…男は居ないって言ってたわね。って事は最近幻想入りした人かな？慧音の話に出なかったから十中八九そうでしょうね。

…うーん気になるとこだけど寺子屋があるからまた今度にしまし

ょ。そのうちまた会えるでしょ。
というわけで二人をスルーし寺子屋に行った。

―――――――――――――――

はい到着。というわけで早速中へ。

「とにかく時間だから早く行くんだぞ。子供達を待たせるのは不味いからな」
「分かってる分かってる。いつも通り魅惑の女教師を演じるから安心して」
「…魅惑はいいからさっさと行け」
「はいはい」

もう…良いじゃない女教師。この格好で子供達と接すればそのうち愛が芽生え、体育館裏の倉庫で禁断の愛を…でもここ体育館無いのよね残念。代わりに個人授業で手取り足取り…ふふふ♪
…それは後の楽しみに取っておきましょう。今は授業しないとね。
私は扉を開け、中に入った。

「みんなー！授業始めるわよー！」

第十四話後編　怪力娘の里戻り（後書き）

今回で零奈視点は一旦終わり。次は蓮也の視点に戻ります。…まぁと言っても直ぐに別の幻想入り者の視点になると思いますけどね。

取り敢えず今回の話で零奈がどれだけ変態か分かって頂けたでしょうか？

彼女の変態思考はこれからも出てくるので、こういうのが苦手な方は、ここら辺で止めた方が良いかもしれません…すいませんこんな小説でｏｒｚ

それでも見て下さる方には、これからも宜しくお願いいたします。

本当見て下さってる方には感謝感激雨あられです。

こんな変態成分を含む小説ですが、質問・意見・感想を書いて頂けると有り難いです。

第十五話　紅魔館出発～人里へ（前書き）

前回何気に五人目が出たのに、後書きで触れなかったとかどういう事なの…

第十五話　紅魔館出発～人里へ

…ちくしょう俺は実験ネズミじゃないんだからもっと優しく扱えよ！人間ですよ人間！

…はぁ……まぁ良いや生きてるし、つーか俺より鈴仙の方が心配だ。溶けてなかったか？あらぬ方向に首曲がってなかったか？そして一片も聞いた事も無い様な奇声上げてたんだけど…良く無事だったな……

本人にそれ聞いたら「師匠の方が酷いから大丈夫です」とか言っちゃったよ……泣ける。

俺はあの後、得体の知れない薬を鈴仙と一緒に飲まされ…死にかけた。

炎症起こすわ皮膚が腐りだすわ、おまけに人間卒業して化け物に入門しかけたよ！？どういう事何だろうね！ほんと！つーか大抵俺に超再生能力が無かったら死んでてもおかしくなかった症状ばかり起きたんだけど！何なんほんと！…畜生お前ら馬鹿だ…覚えてろよ…

因みに今は咲夜さんと共に廊下を歩いています。今から紅魔館（ここ）を出てようやく人里に向かう。…まだ十二時半の筈なのに何だかもう一週間も経った様な錯覚に陥ってるんだけど…

今日無駄に充実しすぎワロタ……笑えねぇよ！今日だけで二回も死にかけたよ！？こんな充実いらねえぇぇ！！某幻想殺しのあの人の台詞で言うと「不幸だ…」が一番合うよ！？

んっぎー！くおー！うっおーー！くっあーーー！ざけんなーーーー！！

「…えっと……大丈夫？突然頭抱えて呻き声上げて…やっぱりさっきの実験の後遺症が…」

「…はっ……大丈夫だ、問題無い。心配掛けましたね」

「落ち着いたようで良かったわ。何かあったら困るもの」
「すんませんほんと…鈴仙は大丈夫か？」
「大丈夫です、問題無い。さっきも言った通り師匠の実験の方が酷いんで、楽でしたよ。死にかけましたけど」
「…貴方達色々と鍛えられすぎじゃない？心身共にどれだけ頑丈なのよ…」

…うん確かにそうかもしれん。でもさ鈴仙は永琳の実験で鍛えられたけど、俺ってまだ能力を得てから一週間しか経ってないんだよな～……あぁおかしいな。普通の人間の神経じゃ耐えられない様な事ばっかだったのに…何故無事だし。俺の神経も大概変だよな…まぁ幻想郷じゃ常識に囚われてはいけないって事を既に理解してるから、何があろうと「幻想郷だから仕方ない」の一言で済ませられるってのが一番の要因だと思う。ていうか俺の超再生能力とか鋼鉄（メタルオブ）の守り手（ガードナー）とかその他諸々とか、それら自体がまずおかしいから。こんなん使えたら嫌でも強くなるよほんと。

そういや実験終了後、おぜうとフランちゃんに血吸われたんだけど。癖のある濃厚な味だそうで、美味いのかどうか聞いたら「美味い」と言ってくれちゃったよヒャッホウ。
…そういやおぜうってB型の血が好きだとかって話だったよな…俺Aなんだけど。
あぁまぁ理由は分かる。以前永琳の実験の際に「血液型変えて」とかぬかしやがったので、F○LLO○T3ご用達のどの人間にも使える万能血液パックと似た様な血にしてやった。そしたら「なかなか使える血液になったわね。ありがたく使わせて貰うわ」っていって5Lも抜きやがりましたよチクショウメ。
つーか俺何で死なないんだよ。そんなに抜かれたら死ぬよね？絶対死ぬよね？何なん俺？
…あぁそういやパッチェさんから俺の血は珍しいものだって言っ

てた。何か過去に微かに見たことがある程度の血液らしい何じゃそりゃ。他にこんな血液を持った奴は居るのか？って聞いたら、ジェイルとレクトが該当するって言ってた。何それ色々と凄い。何かのフラグじゃないよね？

…あぁそういやレクトに色々と話を聞いた。彼はなんでも召喚士らしいマジかよ。まぁそれならさっきのゴーレムも分かるわけで、ようはＦ○の幻獣とか魔獣を従えさせる事が出来る能力だってのは理解した。が、当の本人に聞くと『召喚を制御し操る程度の能力』って言ったから何かパニくった。

普通に召喚を操る程度の能力で良くね？とか思ってたんだけど、どうやらレクトの能力はただ召喚するだけじゃなく、契約した召喚獣の力の強弱を操ったり、一度に複数の召喚獣を召喚・制御が可能らしい。更には召喚獣を呼び出すのに呪文詠唱をする必要もなく、名前を呼べば出るという親切設計だそうだ。ゲームより高性能だなおい。どうして紅魔館（ここ）に居るのか聞いたら、パッチェさんが魔導書から見つけた召喚魔法を発動させて、その時に来たそうだ。羨ましい奴め。何だかむかついたのでアナライザーで検査してやったら俺より年上の１８歳だったｍｊｓｋ。因みに力は霊力・大、妖力・無し、魔力・測定不能、神力・無しだった。魔力測定不能とかないわーどう見てもチートです本当にありがとうございました。

まぁ…何だ…背は低いが力はあるって事は分かった。なんだか凄いのが幻想入りしたなぁ…零奈と言い、ジェイルと言い…ってそういや零奈アナライズしてなかったな、後で頼んでみよう。

そういやジェイルについても聞いてみた。雇った本人とか、メイド長とか聞ける人はまだまだ居たからね～。というわけで聞いてみたら。

「なかなか使えそうな人間だったから」とおぜうから雇った理由。

「弾幕ごっこしたら凄く強かった！楽しかったよ～」とフランちゃ

んから実力についての感想。
「かなり良い仕事ぶりよ。館の仕事を大抵こなしてるし」と咲夜さんから働きっぷりを聞いた感想。
「図書館の本取り返してくれて助かったわ」とパッチェさんから本人に対する感想。
「…クソッ何であんなにデカいんだよ！」とレクトのどうでも良い感想。

とまぁ結構良い評価で、紅魔館の人達から信頼されてるのが良く分かる。そーいや小悪魔に話を聞かなかったな～機会があったら話をしたいな。
凄いよなほんと。話を聞いた限り高性能っぽいし、元兵士っぽいし、何なんだよもう…
だってあいつの力の測定結果、霊力・中、妖力・特大、魔力・大、神力・無しだぜ？神力は無いけど…この強さは…ねぇ…？どうしてこんなチートを二人も持ってんだここ！てか確かジェイルって確か弱体化してんだよな！？それでこのステータスってふざけんな！いやマジで！え、何！？てことは本来の力が戻ったら測定不能が普通に出るようになるわけ！？もういやーーーー！！！

「…ねぇ本当に大丈夫？やっぱり実験の後遺症が…」
「大丈夫よ、基本こんな感じだし。だけどそこがまた良いというか…」
「…貴女…色々と変わったわね。昔はそこまで男に熱意を入れてなかったと思うのだけど…」
「ご主人様以外の男には興味無いわ。ご主人様だから熱意を込められるのよ」
「…何と言うか……言葉が出ない」

…はっ……いかんいかんまた自分の世界にトリップしてた。さっ

きの実験が終わってから、なんかテンションがおかしい……もしかしてあの魔法薬、興奮作用も含んでるのか？だとしたらなんちゅう薬や、もうただの兵器やん、なんつーか…あれだ……そう細菌兵器のような。

そういやあの薬はレクトがパッチェさんの吐息を治す為に魔導書から探して見つけたやつだったらしい。だとしたら治せてないよ？逆に悪化したよ？治すべき物を探していたのに悪化させる物を見つけてしまった感。まぁ知能ある生き物は間違えて学ぶものだから落ち込む事はないさ。むしろ落ち込みたいのは俺。鈴仙はどうか分からんが、俺は落ち込む。全力で。ほんともうジャンピング土下座しろよマジで。

…ってあれ？もう出口？俺どんだけ考え事しながら動いてたんだよ。

「…さて、出口に着いたから私は仕事に戻るわ」
「ありがとうございました。お仕事頑張って下さい」
「ありがと。…あっそうだ。誰か知り合いが出来たら連れて来て」
「血を吸ったり抜いたりですね？分かります。誰かと知り合ったら連れて来ますよ」
「多分連れて来なくていいのは理解してるだろうし、細かくは言わないけど、取り敢えずお願いね」
「あいあい」

玄関の扉の取っ手に手を掛ける。

「あっそうそう。私の事も呼び捨てで良いわよ」
「えっ、そうっすか？……ｏｋ了解した」

俺の返事に少し笑って、「それでは」と言い、能力を使いその場から立ち去った。

…はぁ……ようやく配達完了。これでようやく人里に行けるな。…だからまだ一時にすらなってないんだってヴぁ。

――――――――――――――――――――

外に出て直ぐ門に向かう。逃げてるわけじゃないんだけど…精神的にね、色々としんどかったから、とっとと人里に行って少し休みたい。ほんと何でこうヘビィなんだよコンチクショイ。俺涙目。大体…

「用事は済んだようだな」

また俺がスーパー思考タイムに突入する時にジェイルが紅魔館内部にある木の影から顔を出し、話しかけてきた。高枝バサミを持ってるから、木の手入れをしていたんだろう。話通り色々やってんのね。

「えぇ、今届けたところ……えーと…あー…」

どう呼べば良いんだろう?なんか呼び方によっては不味そうだよな…いやほんとあの巨体から発せられる威圧が恐ろしすぐる。おっかないってレベルじゃねーーぞ!

「…どうかしたか?」

「いや…その…どう呼んで接すれば良いのかな?って……その…思いまして」

「歯切れの悪い返事だな……別に呼び捨てで構わん。その方が話しやすいからな」

「あっそうですか…了解です」

…はあああぁぁぁ……考えて損した。余計に考えてかなりしんどいお。まぁでもこれで話しやすくなったから、親しみやすくなったな。今のうちに仲良くしておいて協力関係を築けるようにしよう。

「これから帰るのか？」

「いんや人里に向かうんよ。そこで薬売ってから帰るってとこ」

「成る程な……取り敢えず道中気をつけて行け、この世界は何が起こるか分からんからな」

「あぁありがと。幻想郷(ここ)はそういう場所だってのは理解しているから問題無い」

「…ならばいい、ではまたな」

そういうとジェイルは直ぐに仕事に戻った。ほんと真面目だぬぇ～…居眠り門番とのこの差は何なんだろうなほんと。取り敢えず分かれを告げ紅魔館を出る。その際美鈴が寝かけていたので銀〇より抜粋の腿ぱーんをしとく。結構痛がってた、反省しろよほんと。

まぁ取り敢えず人里行くか～…あっそうだ

俺…人里で薬売り終わったら……永遠亭に帰るんだ……

…よし！これでいつでも死ねるな！フラグは建てるもの。これ常識ね。

…そんじゃまぁ行きますかね人里に

第十五話　紅魔館出発～人里へ（後書き）

どうも作者です。最近寒くなってきましたね～。こういう時期は風邪になりやすいので皆さん健康の為にも体温調節をしっかりと行って下さい。…まぁそんな事を言ってる自分が一番危ないんですけどねｏｒｚ

今回は特に補足は無いです。

今更ですが幻想入り者は七人全員チートです。能力何か特にチートです。

今回は特に何も書かなかった作者ですが、質問・意見・感想を書いて頂けるとありがたいです。

第十六話　凡人と兵士～人里にて～（前書き）

この話を投稿したら暫く投稿出来そうにないです。申し訳ないｏｒｚ

第十六話　凡人と兵士～人里にて～

ここがあの女の住む里ね。って着いて最初の感想がこれってどうなの…言っといて何だけど。

あの女ってのは零奈の事。原作キャラで言ったら『上白沢慧音』や『稗田阿求（ひえだのあきゅう）』の事。後は命蓮寺の方々かね～。

まぁそれはともかく、いやー着いた着いたようやくだよほんと。どうしてあんなに苦労しなきゃならなかったのかね～…たかだか薬を届ける→人里行く→置き薬の売り上げ確認→直接薬を売る→終了→帰還という簡単なお仕事の筈だったのに…どうしてこうなった！どうしてこうなった！ニッポンポン！ニッポンポン！駅のホームでスッポンポン！って何を考えてんだ俺は。取り敢えず落ち着いてまずは自分に与えられた仕事をこなそう。

んーとまずは置き薬の売り上げ回収、その後薬を売る…だけど、その前に俺の金換金しないとな。このままじゃ全く使えねーんだよな～十五万あんのに使えないとか洒落にならんわ。

そういう分けで鈴仙に付いて行き行動開始だ。時間を掛けずにちゃちゃちゃっと済ませましょうかね。

人里の中を歩く。やっぱり皆昔の旧い格好をしている。動画で見た事はあったが近くで見るとやっぱり違和感を感じる。普段着慣れている服と里（ここ）での服、全く違うねほんと。服装だけじゃなく、生活風景、人と人との繋がり、建造物の種類、人工の機械の有無ｅｔｃ…あぁ凄い田舎。だけど色んな店や色んな人達、見ていて何だか浮き立つものがある…何故かは分からんが。

…いやー歩いていて面白い。ビルやら何やらで囲まれてる俺の世界に比べたら、便利じゃ無くても幸せの様なものを感じる。何つーの？開放感みたいな？何かそんな感じの感情に包まれる。

うーん…良いね……ってあっ、寺子屋だ。となると慧音居んのかな？行ってみたい…けど…

…うーん……覗いてみたいけど、今授業やってる可能性もあるし俺が行ったら邪魔なだけだな。

というわけで今はパスだな。後々行ってみよう。

――――――――――――――――――――

…はい換金完了！置き薬の代金代回収完了！里の中もある程度見た！だいたいやりたい事は済んだ！

おしおkだ。ぱぱぱっと済ませたので一時間も掛からなかったぜ。

後は薬を売るだけだが……

あれ？結構売れるな？っておいもう半分かよ！ってあれもう三分の一！？…売り切れたーーーー！！

あ、あれ？こんなに薬って売れたっけ？一体何で……ってあぁそうか『あの事件』か。あれは酷かったもんな～怪我人も多く出たんだろうな～…そりゃあ売れるわ。

『あの事件』…今から三日前に起きた、中小妖怪が凶暴化し幻想郷全体に被害を齎した事件。

他の所の被害状況は分からんが、まるで戦争の様な事件だったって事は分かる…永遠亭も例外じゃない。

竹林のいたる所が燃え上がり、永遠亭が半壊した。壊れた永遠亭は鋼鉄の守り手（メタルオブガードナー）の硬化能力とハガ〇ンの錬金術で元以上に頑丈な屋敷に復活させたから良かったが、妖怪兎の多くが暴走し重症を負った。

永遠亭のメンバーにも被害が出そうになったが、俺が体張って守ったので無傷に済んだ。そのお陰で十数回位死んでる気がするけどな

！でも生きてる！不思議！

…っとまぁこういう事があった。ほんとあの事件は死ぬかと思った。あんなガチ戦闘は生まれて初めてだったよ……まぁ戦ってる時はネタ度ＭＡＸで戦ってたから死ぬっていう恐怖が全く無かったけどな！

…っとそんな事考えてたら片付けが済んじゃったよ。まだ三時なのに暇とかこれいかに。
しゃーないまたその辺回ってみっか～まだ見てないとこがあったかもしれんし。

「…という訳だから回ろうＺＥ鈴仙」
「分かりました。まだ紹介してなかった所もありましたし、見て回りましょうか」

良しこれである程度暇は潰せる筈ＤＡ。つーか帰るのって六時過ぎ位だし、それまで見て回る位しないとあまりにも時間が余りまくリング。というわけだから行きますか。

―――――――――――――――――――――

「へ～あんな所にアクセサリー屋があったのか。あっちには服屋か、ほんと色々あるな～」
「あっちには外の書物を売っている本屋もありますよ。一度寄ってみてはどうです？」

「んー…そうだな。後々寄ってみますか」
「分かりました。あ、後あそこは……あっ」
「ん？どうかしたか？」

鈴仙が何かを見つけたらしく、ピタッと止まってしまった。一体何だ…？

鈴仙の見ている方向に俺も目を向けてみる……っとあれは『東風谷早苗』ではないか。
そしてその隣に居るのは……男か…また幻想入り者かよ…もう良いよ…

男は上条さんに似た髪形で色は薄緑色。背は見た感じは俺よりちょっと小さい…だから１７５・６ｃｍ位かな？緑色のラインの入った袴を着ており、そしてその格好とでは違和感のあるカットラスの様な剣を二本腰にクロスさせる様に差している。

それにしても今日はよく原作にいない奴に会う日だ。どうなってるんだろうねこれ。俺何かトラブルに巻き込まれやすい体質にでもなったのかな？……いやまぁまだそこまで厄介な事には巻き込まれてはいないんだけどさ。これから先に起こりそうで怖ぇよマジで。
さーてどうしたもんかね。今までの流れだと確実に遭遇→互いに自己紹介→何かあるって流れだったからな～今回もそうなんだろうね……いいぜ…てめぇがそんなフラグを建てるってんなら…まずはそのふざけたフラグをぶち壊す！というわけでとっとと直進！

「鈴仙…気になるだろうが今回はスルーｄ」
「おーい早苗ー！「ちょ」ご主人様！話相手が出来ましたよ！「おま」これで時間を潰せますね！「オイ」それでは行きましょう！「オイイぃぃ！！」」

鈴仙は良い子です。だから俺がフラグブレイクをしようとした事を責めるつもりは無い。

だけどよりにもよって守矢の人と接触するのはどうかと思うんですよ。

だって宗教の勧誘されるのが目に見えてるもの。あーやだやだ。

「何があったか分かんないけど…あんま落ち込むなって。きっと良い事あるからさ」

「…ありがとう。でも勧誘しようとしてる人が言うとあまり信用が無い」

「ひでぇ！でも良いじゃん別に入教の一つや二つ。減るもんじゃないし」

「いやまぁそうなんだけどさ…あっそうだ早苗さんの脇触らせてくれたら考えるわ」

「それはお断りだ。なぁ早苗？」

「すみません。そういうサービスは行ってないんですよ。あっでも入ってくれたらちゃんとしたご利益が付きますから安心して下さい！」

「…なんだかね」

えー…はい見ての通り勧誘されとります。まぁ…あれだ最初は軽く自己紹介をしてお互いの事を聞きあってたんだけど、何故か突然入教の話になっちゃったよ。いやまぁ『東風谷早苗』や『八坂神奈

子』や『洩矢諏訪子』といった神様方の宗教であれば入りたいですよ。そして毎日脇を触りたいですよそりゃあ。でもそうしたら『守矢神社』まで一々足を運ばないといけないわけですよ。それは流石に勘弁して。妖怪の山に行くとか人間にとって死亡フラグだろ…

…さてここで軽く目の前の緑髪の巫女さん『東風谷早苗』について説明しよう。

『東風谷早苗』は守矢神社の巫女で風祝で現人神。『奇跡を起こす程度の能力』を所持する現代っ子。『八坂神奈子』や『洩矢諏訪子』という神様と暮らしている。天然っ子で真面目な性格だが、妖怪退治を楽しむという色々とおかしいところが多々ある。有名なのは『この幻想郷では常識に囚われてはいけないのですね！』という言葉。

二柱の方はまた後日。というか今重要なのはそこだけじゃなくてこっちの男の方だよ！というわけで聞いた話を掻い摘んで説明。

名前は『トシキ・スピードスター』どうやら幻想入りして山の中で倒れてた時に、早苗さんに助けられて守矢神社に居候しているらしい。

何で山の中に居たんだよって聞いたら、どうやら魔法陣に無理やり押し込まれ飛ばされたらしい。その際に押し込んだ奴らにズタズタにされて、幻想郷に着いた時にはもうボロボロだったそうだ…オデノカラダハボドボドダ！って感じだね。まぁだから倒れてたそうで。更に話を聞くと、彼は反乱軍の兵士だったらしい。だった、てのは今現在は反乱軍にいないのでだった、らしい。何だか大変な所に住んでたんだぬ。

因みに見た感じはそこそこのイケメンだがレクトよか普通だ。まぁ性格で言ったら正直こっちの方がマシなんだけどさ。

さて能力はというと『速度を操る程度の能力』だそうです。どうやら速さという概念を全て操れるものらしい。詳しい事は…こいつの説明が大雑把なのと説明が下手なせいでよく分かんなかったが、多分足の速さを速くしたり、物の動きを遅くしたりする事が出来るんだと思う。後思いつく事と言ったら、呪文詠唱を速くしたり、時間の流れを遅く出来たりかね…ってあれ？大体一緒じゃん。まぁようはそういうものだと思う。

…つーか速さを操るって凄いよな。自由自在に速さを変えれるって便利だよなぁ色々と。…はいはいチートチートっと。

さてこいつの説明は大体こんな感じだ。いや～ほんと羨ましい能力持ってる奴多すぎだろ幻想入り者。こんなにチートが多いとかやってられんわ。まぁ東方ＳＳにはもっとチート能力持ってる奴がいるけどな。具体的には力を操ったり、過程と結果操ったり、『不』と『無』を操ったり、不可能と可能操ったりとかさ、あれはどう考えてもチートだろ…話が面白いから関係ないけどな！これからも頑張って欲しいね！

…まぁそれはいいとして、どう話を終わらせるかな～このままだとこっちが入るって言うまで絶対終わんねぇぞおい。どうしたもんか……

「入れば得しかないから入っとけっｔ…（ピクッ」

「ん？どうかしｔ（テキーン」

…感じるぞ。俺のニュータイプとしての才が呟いている！三時の方向、何かが来る…！

どうやらトシキも同じく向かってくる何かに気付いたらしいな……なら取るべき行動はたった一つ！

「早苗！」　「鈴仙！」

互いに一緒に居た女性を抱き（なぜかトシキはお姫様だっこ）、即座にその場から離れる。
そして離れたと同時に飛んでくる何かは地面に激突し、一面に砂が舞った。
一体何だ…？何が飛んで来たんだ……？
落ちた後に舞っている砂埃が徐々に消えていく。するとそこには一つの人影があった。砂埃が消えていき、容姿が良く見えるようになったところで正体に気づいた。…気付きたくなかった……

「…ふぅ…少し勢いが強すぎたわね……おっと…ハロー親愛なる男女諸君。貴方達のアイドル、遠命零奈のご登場よ！！」
「待ってねぇからとっとと帰れ。おとなしくオ○ニーでもしてろ」
「あら…こうやって会えたのにそれはないんじゃないの？後、オ○ニーは既に終了済みよ」
「うっせーよ。分かったから自分の巣に帰れ零奈」

…遅かれ早かれ会うだろうとは思ってたけど…よりにもよってこのタイミングかよ。もうちょっと空気読めや。つーか何か格好変わってね？なんか女教師みたいな格好してっぞ。もしかして寺子屋勤務？

「え、えーと…どちら様で？」
「遠命零奈！年齢１７！変態よ！」
「自分で変態宣言しないでよ気色悪い…」
「気色悪い…Ｍの私には最高の言葉ね！（ぬぎぬぎ」
「喜ぶな。そして脱ごうとするな。公衆の面前の前に裸を晒そうとすんな」
「ふふふ…恥ずかしがらなくて良いわよ？手取り足取り夜の営みを教えてあげるわ♪」

「どうしてそういう発想になった…」

あー面倒臭い変態の相手は面倒臭い。入教よりもやばい問題が浮上しちまったぞおい。

どうするか……

あっそうだ。トシキに擦り付けよう。

「零奈。俺と鈴仙と早苗さんは駄目だがそっちの奴は襲っても良いぞ」

「は？」

「ただしこいつは逃げるからそれを捕獲出来たら、の話だが」

「えっいや勝手に決めないでくｒ」

「へぇ…でも良いの？本人了承してないけど？」

「そうだ！だからお前がやｒ」

「安心しろ。こいつには予め許可を取ってある」

「えっいや聞いてねぇｙ」

「……そう♪なら遠慮なく」

「ちょ！おい！ふざけんな！人の話を聞け！」

「おしトシキ。後は任せた。あっ早苗さんは見とくから安心して逝ってこい」

「え、えええええええ！！！？！」

「ふふ♪ト～シキ♪直ぐに捕まらないでね？面白くないから♪」

「…えーい畜生！オレも男だ！こうなったらやってやる！！」

そういうとトシキは即座に逃げ出した。つーか走るの速！もう入り口まで行ったよ！確か５００ｍ位離れてなかったか！？

「あらあら速いわねぇ。でもこの私の領域（人里）からそうそう簡単に逃げられると思ったら大間違いよ！」

そう言って零奈は入り口に触手を出現させる。トシキは出現した触手を難なくかわし里の内部を目にも止まらぬ速さで走りぬけた。

零奈もそれを追うように触手を這わせ、追いかける。

…なんつーか……レベル高ぇ。少なくとも僕にはとても出来ない。

…まぁ良いや。二人を誘って輝夜勤務中の団子屋にでも行こうか。

第十六話　凡人と兵士～人里にて～（後書き）

はい、どうも作者です。今回は余計な話は無しでとっとと補足いってみよう。

今回登場した五人目のトシキは熱血漢です。そしてそこまで頭が良くありません。彼は色々と騙されやすいですが、人一倍優しいです。本文中、蓮也を心配していましたが、あれは本当に心配してたりします。宗教の勧誘は入教すれば困っている人を救えると思っているから熱心に行っています。助けてくれた恩返しでもありますが。まぁ彼はそういう人です。

蓮也は東方ＳＳも読んでいる為本文のような発言をしております。詳しい名前は出しておりませんが、もし問題があるようでしたら、修正します。

次はジェイル視点に入ります。こうやって他の幻想入り者の話も書かないと飽きられるかもしれませんし。

こんな微妙な作者ですが、質問・意見・感想を書いて頂けるとありがたいです。

第十七話　巨兵とスキマ妖怪（前書き）

作「祝！１万ＰＶ越え達成！」
蓮「１万程度じゃ満足できねぇぜ…」
零「私のＨシーンを入れなさい！さもないと握り潰すわよ？」
ジ「まだまだ未熟だな。もっと精進しろ」
レ「高だか１万で付け上がってんじゃねぇよ糞作者」
ト「とりあえずもっとスピーディーに執筆しようぜ！」
？「私の出番はまだでしょうか？」
？「クックック…これは集中砲火を食らって終わりだな作者」
作「望みが絶たれた！」

第十七話　巨兵とスキマ妖怪

トシキが零奈に追い掛け回されている頃の紅魔館。
今現在そこではメイド妖精の戦闘訓練が行われている。
その様子を、上空から見下ろしている妖怪がいた。

八雲紫――

彼女の視線にあるのは、三週間前より紅魔館に就いたジェイル・シャドウだ。
彼女はメイド妖精に訓練指導を行っているジェイルの様子を見てクスッと微かに笑った。

――予想以上に早く力を取り戻している――

彼女はその事を口にするとまたクスッと笑いスキマの中に入った。
そして彼女は思った。
やはりあの人の見込み通りだ、と。

――ｓｉｄｅ　ジェイル――

紅魔館…現在己（おれ）は妖精メイド達の戦闘訓練を行っている。何故行っているか?それは単純明快、妖精共が弱すぎるからだ。
妖精は覚えが悪く、知能があまり高くないため臨機応変に仕事を行う事が全く出来ない。命令されればまともに動くが、目を離せば遊びほうけるは、勝手に台所の食料は食うは、挙句の果てには予定外の仕事を増やしてくれて、結局は己れと咲夜が後始末を行うはめ

になる。
仕事をする時はするのだが、しない時はとことんしない。お嬢様や咲夜に話を聞いたところ、紅霧異変の時の妖精はそれなりに使えたのだが、現在は役立たずが増えたとの事。

幻想郷（ここ）の妖精というのは、異変や力のある者のが待ち構えているとその場の危険度に比例し、力を増すようだが、現在はこれと言った異変が起きたわけでもなく、力の強い者が待ち構えているわけでもない。故に弱い。

この状況を見かねた己は妖精達の訓練を行う事にした。紅魔館内の全員から同意を得て、二週間前より行い始めた。紅魔館内の仕事がある程度終わらせて出来た時間を利用し、戦闘の基礎や魔法知識、武器の扱い、仲間との連携を徹底的に教え込んだ。

妖精は事を忘れやすいらしい。ならば体に直接叩き込むまでだ。己は妖精共と二週間前より模擬戦闘を続け、体に直接『戦闘』というものを叩き込んだ。そのお陰か今では少しか抗ってくるようになった。…己に攻撃を当てる事さえ出来んがな。やはり弱いものは弱い、たった二週間で抗う事が出来るようになっただけマシだろう。

現在は妖精同士で模擬戦闘をさせている。弱い者同士で戦ったところで身につくものなぞ無いが、己が随時指導を行っているので問題は無い。偶に腑抜けている奴が居るが、そいつにはそれ相応の『教育』を行い、腐った精神を叩き直してやった。お陰でサボろうとする者は消えた。完全では無いがな。

この訓練で戦闘面のみだけでなく、日頃の職務態度も叩き直してやろうと思うが、正直直るかは分からん。何故か？理由は簡単どうあろうと妖精という性（さが）は変えられんからだ。

とにかく、今は少しでも妖精達が使える状態になるよう指導していかねば。いざ緊急事態に陥って己や咲夜等の従者が居なかった場合は、下手をすれば妖精共のみで対処しなければならん可能性もあ

る。最悪の事態は起きない事が望んではいるが、現実そうはいかん。
三日前のあの事件…あの時の様な状況が今後起きてくる事も考えられる。その為にも妖精達には力を付けて貰わねばな……

…ふん……どうやらさっきからこちらを見続けていた妖怪が屋敷に侵入したようだ。どうやら己を御指名のようだな。ならば行ってやろうではないか。

妖精達に暫く此処を離れる旨を伝え、妖精がサボらぬよう影で分身を創り見張らせる。そして紅魔館に向かい、歩き始めた。

―――――――――――――――――――――――――

紅魔館内、一階の妖精達の共同寝室近くの廊下、侵入者の気を辿り此処まで来たが誰も居ないな…
いや…正式に言えば居ない様に『見える』だけだな。どうやら侵入者は着いた時点で身を潜め、己の様子を見ているようだ。全く…用があるのならばさっさとすれば良いものを……まぁ良い、何処に居るかは既に『分かっている』からな。

大剣を背中の鞘から抜き、影・霊力・魔力を纏わせ更に闘気を付加する。後方の何も無い空間に剣を構え、一気に振り下ろす。すると目の前の空間が裂け、無数の目が見える隙間が出現する。
…どうやら空間を裂く事は出来たが、この空間に住む者を裂く事は出来なかったようだ。元々裂くつもりも無かったがな。

「危ないわね。当たったらどうするのよ」

後方に気配と共に声が聞こえる。振り返るとそこには、金色の長髪に赤いリボンの付いた帽子を被り、手には扇子、六十四卦の沢地萃なる紋様の描かれた服を着た女が居た。
気から察するにこいつで間違いないだろう。

「侵入者を排除するのが仕事だからな。だが、最初から空間を裂かれる事を想定して己の後方に隙間を予め用意しておいた者が何を言うか」
「あら、じゃあそれが分かっていてわざわざ目の前の空間を裂いた貴方は何なのかしら?それも手加減をして…ねぇ?」
「ふん…裂く必要も無いのに本気を出すと思うか?」
「まず無いでしょうね。自分の力がどれだけなのか悟られない様にしていた者が、こんな所で本気を出すことは有り得ないわ」
「そうだ。だからこそ二週間も前から己を見張る者に悟られぬよう現在(いま)の力を隠し通し、逆にお前について調べてやった訳だ」
「本当に隠すのが上手かったわ。『あの事件』の時も私に注意しつつも、見事に敵を殲滅していたんだもの…驚いたわ」
「ふん…この位出来ねば戦場で生き抜く事など出来んわ」

「そうだろう……八雲紫」

己の言葉に紫は口元を緩ませふふっと笑う。

「本当に面白いわね貴方」
「御託はいい。とっとと用件を言って貰おうか。生憎こちらも暇では無いのでな」
「…そうね。私もあまり時間を掛けたくないから」

そう言って紫は手に持っていた扇子を閉じる。己も剣を下げ逆手

に持つ。鞘には収めない。いざという時に直ぐ斬りつけられるようにしておく。これは昔からの癖だ。

「貴方に…幻想郷を守護する役目を行って欲しい」
「…それは博麗の者と管理者であるお前の役目ではないのか？」
「…確かにそう。ただ私と霊夢が動けない時だけ…その時だけお願いしたいの」
「お前の式神では足りんのか？」
「…いつもならそれで済んだわ。でも状況が変わりつつある」
「…幻想郷に居る筈の無い魔物の出現、中小妖怪の増長…そして妖怪同士での戦争……それが原因か」
「そう…全ては『あの事件』…あれが始まり…そしてこれからも起こる可能性がある。その際に幻想郷の住人だけでは足りないのよ」
「…成程な」

こいつが言いたいのは幻想郷に住む者達では対処しきれない。だから外の世界から来た者の力を借りたい…そういう訳か。
単純な話ではあるが、分からんでもない。何故なら己の世界に居た筈の魔物がこちらに来ているからだ。あれらは幻想郷（ここ）の住人のみでは対処出来ん……だが

……奴の仕業なのか。己を追放し、力を奪い、仲間を奪い…それでもまだ足りぬとい　うのか…
もしそうだとするのならば……あの畜生をこの世から消さねばならん…
奴は……奴だけは……生かしてはならん…！
その為にも力を取り戻し、何としても己の世界に戻らねば…

「…お願いできるかしら？」
「…良いだろう……やってやろうではないか」

…だが己の為だけでは無い。
…現在（いま）の我が主…共に仕える者の為にも彼女らの住むこの地を守ってみせよう。
己を受け入れた者達の為にもやってやろうではないか。

「…ありがとう」
「礼は異変を解決出来てからにして貰おうか。今はまだ何もしておらぬからな」
「…そうね、そうさせて貰うわ」

紫は自らの後方に隙間を出し、その中に入る。そして紫は上半身のみを出した状態で己の方を向き口を開いた。

「一つ、言っておく事があるわ」
「…何だ」
「幻想郷には貴方以外に六人の幻想入り者が居る。一人は此処に住む者。一人は貴方が今日会った者。一人は貴方が『あの事件』の際に遭遇した者…貴方が面識あるのはその三人だけだけど、いずれ他の三人とも会うでしょう…」
「・・・」
「他の幻想入り者…例え相容れぬ存在であったとしても…親交を深めておいた方が良いわ」
「…つまりそいつらと共に異変解決を行う可能性があるから、相反せずに協力し合える関係になれ、という事だろう？承知した」

「（…それだけじゃないのだけれどね）」
「む？何か言ったか？」
「いえ…何でもないわ。それじゃ異変が起きるその時まで…幻想郷（ここ）での暮らしを満喫しなさい」
そう言って紫は隙間の中に入り、そして消えた。
…己が承知の言葉を放った時、紫が何か言っていたが…良く聞き取れなかったな…
…一体何を……
「ジェイル」
後方から呼びかけられる。咲夜だ。
「今のは…紫よね？何を話してたの？」
「…異変が起きた際に解決に乗り出して欲しいという話だ。どうやら己の実力を見込まれたらしいな」
まぁそれだけでは無いのだが…別に詳しく話す必要はないだろう。
「そうなの？貴方もまた嫌なのに目を付けられたわね」
「…嫌…か……ふーむ…具体的にどういう所が嫌なのだ？」
「あっいや嫌いって意味じゃなくてね。変って意味だったんだけど…」
「変？…どこがだ？」
「あぁそれわね…ってあまり話し込むと不味いわね」
…そういえばまだ妖精達の訓練最中だったな……サボってはいないようだ。

あまり長く放置するのも不味い。取り敢えず戻らなければ。

「…そうだな。己も妖精の訓練指導に戻る。有事の際は呼んでくれ」
「大丈夫よ。今までも大体私一人でやってきたんだし」
「それもそうか」
「そう。だから大丈夫よ。あ、一つあったわ」
「…美鈴の事ならば任せておけ。奴も訓練に参加させる」
「…そう、お願いね。少しでもまともに仕事出来るようにしてね」
「了解だ」

咲夜は振り返り、能力を使用し仕事に戻った。

さて…己も訓練指導をしに戻るとするか。

――ｓｉｄｅ　？？？――

「どうだった紫？」

「そうね。異変解決には否定しないで快く受け入れてくれたわ」

「そうか。観察し続けた感想は？」

「貴女が言った通りね。表情に全く感情というものが見られなかったわ。笑顔一つ見せないから驚いたわ」

「そうだろう？あいつは人が持つべき感情の殆どを無くしてしまっている。あいつの力を完全な物にするには、まず感情が顔に出るように戦いで荒んだ心を解さなくてはならない。中々に大変な事だ」

「どうするの？」

「今は特に何も考えてないが、その内ちゃんとした対策を考えるさ」

「そう…分かったわ。それじゃあ次に行ってくるわね」

「次は…召喚士の男か」

「ちゃんと報酬も用意したから、多分釣れるでしょ」

「そうだな。…それじゃあ私は凡人の男と私の子孫、反乱軍の兵士…そして私の古い知り合いに接触するとするか」

「それが終わったら…」

「ククク…今日は寝かせんぞ」

「ふふ…楽しみにしてるわ」

第十七話　巨兵とスキマ妖怪（後書き）

二週間も更新がなくて申し訳ないですｏｒｚ
こんなに日が開いたのは９月以来な気がします。もう忙しい時期は過ぎたので、一週間に一つ更新出来ると思います。待ってくださった方々には、感謝と謝罪の言葉を送らせてもらいます。

さて今回は会話ばっかりだったり、何かむっさフラグ立ちまくった回になりました。前々から作中で言われている『あの事件』については、幻想入り者が全員出てから三・四話経ってから書こうかなと思っていますので、見て頂けると幸いです。

それと連絡です。最初の第一話から改めて見直した結果、あれでは蓮也が主人公みたいになってしまいましたので、急遽プロローグを製作する事になりました。それでなんとか蓮也は主人公の一人にすぎないという事が理解できるように、何とか執筆し投稿していきたいと思います。これで矛盾が消えれば良いとは思いますが…なにせ自分なんで、あまり期待しないで下さい。

次回はレクトの視点になります。

駄文だらけな作品ですが、質問・意見・感想を描いて頂けると幸いです。後、軽い気持ちで良いのでポイント評価も押して頂けるとありがたいです。

第十八話　召喚士とスキマ妖怪（前書き）

どうも～作者です。意外と早く更新できて良かったです。
…色んな意味で進歩してませんけどｏｒｚ

第十八話　召喚士とスキマ妖怪

紫がジェイルに接触してから半刻後・・・
現在、紅魔館地下図書館の一室に召喚士・レクト・ラックマンが居る。
彼は、先程蓮也と鈴仙に使用した薬の研究書類を纏めている。
その傍には魔法の縄で拘束された普通の魔法使い・霧雨魔理沙が居る。
彼女は一時間前に目が覚め、どうして自分が図書館に居るのか？
どうして拘束されてい　るのか？
訳も分からずに、今からレクトの薬の実験台にされようとしている。
早く解放しろと訴える魔理沙とそれを無視し、研究書類を纏め、実験を行おうとしてい　るレクト。

その様子をスキマの中から覗く紫。
今、彼女がレクトを見て思った事は、

ジェイルと比べて、何もかもが正反対ね。

彼女はたったそれだけを思い、スキマに入る。
早く済ませて戻ろう。そう思いスキマに入ったが、それ以外にもう一つ思う事があっ　た。

それでも…やはり、あの人の言う通りだな、と。

――ｓｉｄｅ　レクト――

…はぁ…大体纏まったか？流石に二十個分の新薬の資料整理は面倒だぜクソが。ダルいったりゃありゃしねぇんだよ…ったく…

…まぁそれにみ合った結果が得られたから良しとするがな…って言っても面倒なのは面倒なんだよ全く…

それにしても昼間のあいつらはマジで良い実験動物（モルモット）だったな。大抵の副作用にも耐えたしよ。また来てくんねぇもんかね。もし来たら更に強いのでも試してやるか……

…それにしてもこの反応、こりゃあ永遠亭の所の薬師も良く実験台にする訳だ。ここまで良い実験動物（モルモット）はそうそう居ねぇ。世界的に役立ちそうだなマジで。

…まぁ今度来たら何かやるか。貰いっぱなしじゃあ不公平だしな。何も報酬を出さねぇで恨まれる事になる方が非効率的だし面倒臭ぇ。悪いがそういう常識が無きゃ、世の中生きていけねぇんだよ。効率良く生きる条件は、ギブアンドテイクの精神と面倒事には首を突っ込まない。これが重要だろうな。

……まぁ報酬によっては変わるだろうが。

…さーてと……大体片付いたか？散らかってる状態で実験するのはあまり好きじゃないんだ、出来れば周りに魔力反応を起こす物を置かない方が一番良い。魔力反応で新たな可能性が生まれる事が有るだろうが、それは薬の基礎データが取ってからやるのが一番効率的だ。二度手間は嫌いなんだよ。

んじゃまぁ早速薬をっｔ「おい！いい加減ほどけよ！私は今日は何もしてないだろ！？」…ぎゃあぎゃあ騒ぐな鬱陶しい。

「うっせえよ、いちいち喚くんじゃねぇよボケが」
「いやだってこの状況はおかしいじゃないか!?最近の記憶が朦朧としてて困ってるのに、説明一つしてくれないでこの始末は無いんだぜ!?」
「テメェに説明する事なんざねぇよ。おとなしく薬の実験台になりやがれ」
「ぜっっっったいに嫌だ!!」

…あーうるせマジでうるせ、一片その口縫い合わせてやろうか？まぁやらねぇけど。

…あー……魔理沙(こいつ)に使う薬どれにすっかねぇ…あまり劇薬だとこいつの体がもたねえから何投薬するか悩むな……どうすっかな本当に……

……

……

……あー面倒臭ぇ、もうこの薬で良い。

えーとこれは確か、五大栄養素を今必要な分を瞬時に補充し、更には一思考・ダルさ・脱力・イライラなどの気持ちに関わる症状や、欝や幻覚・被害妄想・ＰＴＳＤなど精神に関わる病気や、中度の外傷や内傷を治す魔法薬だったか？まぁこれで良いだろ。作ったは良いが、試して無かったから丁度良い。

…まぁ…あれだ、何か結構辛そうだしよ…何か見てるこっちが辛くなってくるんだよ…さっさと治して、貸し作って、とっとと帰して、その後は安静にしておとなしくベッドででも寝てやがれボケが。

魔理沙からの視線がかなり突き刺さるがそんな事は気にしない。今から試す魔法薬の詳細資料と魔法薬を準備して……ってまだかなり散らかってるし…あー畜生！無我夢中に研究に没頭してたのが不味かった…せめて少しずつ整頓しとけばこんな面倒臭くならなくて済んだのによ！

…はぁぼやいてもしゃーねぇとにかくとっとと片付けねえと。

「召喚『シルフ』・『ウンディーネ』」

俺の真横に召喚陣を発生させ、風の精霊『シルフ』と水の精霊『ウンディーネ』を召喚する。俺の右横に出した緑色のワンピに首に巻いている緑色の大きなリボン、そして緑色の髪、肌の色以外全て緑尽くしの８歳位の幼女がシルフ、俺の左横に出した水色のドレスにドレスに付いている水色の大きなリボン、そして水色の髪、シルフ同様肌の色以外全て水色尽くしの１５歳位の少女がウンディーネだ。

シルフは明るく活発な性格で、ウンディーネは淑やかな性格だ。真反対な性格ではあるが、親友同士で、最初に契約しようとした時もお互いに片方だけ契約しないで二人ともしてくれって言って聞かなかった。まぁ俺はどっちも欲しかったから関係無かったけどよ。

「なにか用？レクト」

「どのような御用でございますか？レクト様」

まぁこんな感じだ。召喚獣として契約した奴は、俺を呼び捨てし

たり敬称を付けたりとバラバラだ。まぁ何でそうなったのかと言えば俺が好きなように呼べって言ったのが原因だ。なんつーか呼称を一つに絞るより、本人が呼びやすいように呼ばせた方が楽で良いだろうよ。俺基準で考えて。

「そこら辺散らかってるから適当に片付けといてくれ。終わったら子悪魔に『実験結果纏めるから手伝え』って伝えておいてくれ」
「分かったよ！」「分かりました」

二人はそそくさと片付けに入る。こういう時召喚獣は便利だ。一人じゃこなせない事も、召喚獣と一緒にやれば大抵すぐに片が付く。俺だけじゃどうしようもない時、召喚獣は本当に役に立つ。こいつらのおかげでどれだけ命が救われた事やら。

…っとそんな事はどうでも良い。早速実験を始めるとするか。さーて魔理沙？覚悟は出来たか……あ？

薬の投薬を行おうとして振り返って見た所には誰も居ない。一瞬這いずって逃げたか？と考えたが、体を引きずる音はしなかった。なら転移魔法か？いや違う。使ったとしたら魔力痕が残る筈だ。じゃあ一体何で……

一つ一つ可能性を考えているうちに、何かの視線と強力な妖気に気付いた。…誰だ？何時の間に部屋に入った？どうやって俺に気付かれずにここまで来た？一体……待てよ

もしかして今来たのか？…だとすると考えられる奴は…ただ一人。

…シルフとウンディーネは……クソ、部屋の外に行ってやがる。あー畜生！面倒臭ぇが相手しなきゃならねえか。あー畜生！クソが！俺に何の用だよ！

視線のする方、ふっと上を向き睨む。そこには薄気味悪い空間に座る、金髪の女が居た。

…聞いた通りだな。見事に胡散臭さをたっぷり漂わせていやがる。こいつが幻想郷を創ったとか言われてる妖怪の賢者…八雲紫か。

「何の用だテメェ…こちとら今から新薬の実験をやろうと思ってたのによ」

「ふふ…別に急ぐ必要も無いでしょ？少し話をしないかしら？」

話だ…？知るか。テメェの都合なんか知った事じゃねえよ。テメェの都合なんかより俺の都合を優先してぇんだよ。何の利益にもならなさそうな話を持ってきそうな顔しやがって……顔は関係無いか。

「…物凄く嫌そうな顔してるけど……もしかして聞く気無い？」

「良く分かってんじゃねえか。ならとっとと帰れ。話なら別の奴にでもしろ」

「つれないわね～…だけど貴方は聞かざるを得なくなるでしょう」

「…は？」

こいつ何言ってんだ……あ…まさか…

「魔理沙をお探しならもう見つけられないわよ？私のスキマに放り込んだからね」

「…マジかよ」

この野郎……クソッ！どうやら話を聞かなきゃならねえようだな…あー面倒臭え。

「…ハァ……聞きゃ良いんだろ聞きゃ…」

「ふふふ♪それで良いわ」

あー畜生。何かこいつの手の平の上で踊らされてる気分。

「…さて。貴方は三日前の事件を覚えてるかしら？」

「三日前？…紅魔館が中小妖怪と俺の世界で見た覚えのある魔物に襲われたあの事件か？」

「そう。貴方は見てないでしょうけど、襲撃は他の所にも有ったのよ」

「ふーん…で？それがどうした」

「…あの事件を切っ掛けに、今まで動く事の無かった弱小妖怪達が、力を付け動き出そうとしている。それもとてつもない速さで…」

…あ、すっごい嫌な予感がしてきた。

「この事態には、私や霊夢だけでは対処しきる事が出来ない」

これってどう考えても…

「だから私は……」

面倒事に…

「貴方を含む幻想入り者に協力を求めようと思ったの」

巻き込まれるぞ絶対！？

「どうかしら？幻想郷を守って頂けないかしｒ「きゃっかあああ！！！！」あらひどい」

何でだよ！？何で俺だよ！？そんな事他の奴にでも任せておけば良いだろうが！何でそんな面倒事頼もうとしやがった！？ふざけん

な！やるか！絶対やるか！幻想郷にはまだそれなりに実力者がいるだろうが！そいつらにでも頼めよ！つーか俺を含む幻想入り者って言ったよな！？何？昼会った奴とジェイル以外にまだ居んの！？なら尚更俺いらねえじゃん！アホか！アホかあああああ！！！！！

「…そんなに嫌かしら？」

「嫌だよ！だいたい何で俺がそんな利益にもならないような話に乗らなきゃなんねーんだよ！？」

「貴方の実力を見込んでの事なんだけど」

「あーそうかい！じゃあそれは間違いだ！とっとと帰れ！」

俺は紫に背を向け、扉の方に行こうとする。ったくロクデモない事で時間を取りやがって……もういい。薬の実験は止めだ。代わりに新魔法の製作だ。あーくそ効率悪ぃ…

「…ふふ、間違い？間違いねえ……契約さえすれば神をも従えさせる事が出来る能力を持っているのに間違い？…面白いことを言うのね貴方」

「ッ！」

足が止まる。あまりの事実に俺の体は冷や汗で汗ばむ……何でだ。何でそれを知ってるんだお前は…！？その事は幻想郷じゃ俺以外に知っている奴はいない筈なのに…！

「…貴方が拒否する事位想定済みよ？そのために…ここに『良い物』があるわ」

そう言って紫は机の上に紫色の液体が入ったビンを置く。

…紫色…そしてこの古臭いビンは……まさか…！！

「これは『賢者の秘薬』なのか…？」
「…えぇそうよ。貴方の世界で生まれた万能薬。わざわざ探したのよ？」
「…ご苦労なこって」

『賢者の秘薬』…大賢者・シリウスによって生み出された幻の秘薬。あらゆる病気を治療し、あらゆる魔法を打ち消し、逆に生み出し、挙句の果てには世界を乗っ取る事さえ出来てしまう秘薬だ。これを巡り戦争が起き、金が流れ、世界の秩序を全てぶち壊した程だ。この秘薬に関わる事件は３００年以上続いたが、ある日を境に事件は起きなくなった。

薬が忽然と消えてしまったからだ。

薬を求む者達は死に物狂いで薬を探した。だが何処にも無かった。そうして徐々に薬の存在は人々の頭の中から少しずつ、少しずつ、消えて行った。

…それがまさかこんな所にあるとはな……何処かに隠され、そして人々から忘れられて行った結果幻想郷に流れ着いたってところだろうな。どう考えても紫（こいつ）は外に出て探した訳じゃねぇだろう。こいつは絶対幻想郷で済ませる……と思うんだがな…何か怠惰な雰囲気も出るし。

「…交換条件か」
「えぇそうよ。幻想郷を守ってくれればこの薬をあげましょう。どう？今の貴方なら喉から手が出る程に欲しい代物の筈。悪い条件じゃないと思うわ」
「…一つの世界守った代償がこれか……確かに吊り合うな」

この薬があればパチュリーの吐息を治すことが出来る。いや、それ以上の恩恵が得られるだろうな。
俺にとってこんな薬、とっととこの世から消えてもらいたいところだが、有効に活用して消えてもらった方が効率的だろう。

「…報酬があるなら別だ。受けてやる」
「…ふふ」

紫は持っていた扇子をこちらに向け、微笑む。

「解りやすいわね貴方…ジェイルと違ってね」
「…は？それって一体どういう……ってそんな事はどうでもいい。魔理沙返せコラ」
「（…まだ理解は出来ないか……）」

紫は一瞬何か神妙な面持ちになったが、すぐに笑顔になり「えぇ返すわ」と言ってスキマを開き、ベッドの上に魔理沙を落した。魔理沙は何が起きたのか分からない…って感じの顔をしていた。

「それじゃあ私は帰るわ…あぁそうそうこれだけは言っておくわ」
「…何だよ」
「…他の幻想入り者とは仲良くしておいた方が良いわよ。後々の事を考えてね…」
「…あっそう」

紫はスキマを開き、その中に入っていく。体が完全にスキマの中に入り、スキマは閉じた。
…何なんだ一体。『他の幻想入り者とは仲良くした方が良い』？異変解決時にそいつらとは関わらなきゃならねえって事なのか？…それ以外に思いつく事がねえな……

…まぁ良いか。薬の実験と行こうかね…ってあれ？資料がねぇ…？床に落したか？

机の下や近くの床を探したが何も無い。そこら辺の本には…挟まってねぇよな……俺は机の上に置いたんだし。

「…なぁレクト」

「あ？何だ？」

「…この紙に書かれてる事って…本当なのか？」

「は？紙って…一体何の事…だ……あ」

魔理沙が手に持っていた紙。それは俺がたった今探している薬の詳細資料だった。

「な、何でお前がそれを！？」

「あ、いや、紫から渡されたんだけど…」

「何だと…！！」

…あんのクソアマあぁぁぁ！！！余計な事しやがって！これじゃあ計画がパァじゃねぇか！魔理沙を騙して家に帰して一晩寝たら完全に復活していて、昨日は疲れてただけだった…って思わせる計画がああ！！

「な、なぁレクト？これに書かれてる事って本当なのか？」

「ち、違ぇよ！それに書いてる事は全部嘘だ嘘！」

「え…でもこれに載ってる薬のラベルと、その机の上にある薬のラベル…一緒じゃ…」

「あーーー！！！じれってえええぇ！！！クソが！飲めやーーーー！！！！」

無理やり魔理沙の口に薬のビン先を捻じ込み、薬を飲ませる。も

うヤケクソだ。こうなったら飲ませてやる。突然ビンを突っ込まれ驚く魔理沙は、慌てて俺を引き剥がそうとするが、ただの女の腕力で男に勝てるわけがない。薬はあっという間に無くなり、空になったビンを机の上に置く。

「げほっ！げほっ！はぁはぁ…何すんだぜ！こ、殺す気か！！」
「別に死んでねぇんだから別に良いだろ」
「け、けどなぁ！！」
「あーはいはい。外まで転移するからそこ動くなよ～」
「な！ま、まだ話はおわってｎ」

魔理沙が何か言いかけたところで、転移魔法を発動しうるせえ魔理沙を紅魔館の外に出す。少し強引だがこれで良いだろ。
…はぁ……ようやく静かになったな。はぁー…これで少しか休めるぜ。
ベッドに横たわり、だらんとする。流石に三日もまともに寝てねぇと体に来るな…あー眠てぇ。

コンコン

…あーまだやる事あった。はぁ…ダリぃ…
重い体を起こし、扉に向かう。扉を開くと、赤髪で司書服を着て羽を生やした女が居た。

「来たか」
「えぇ来たわ。あまり時間をかけたくないんでしょ？なら早く始めましょ」
「あぁそうだな」

実験した二十種類程の薬の詳細試料を持って図書館に向かう。

…もう少し……頑張るとすっか。

――ｓｉｄｅ　？？？――

「どうだった紫？」

「そうね…結構楽だったわよ？効率主義なのが玉に瑕だけど…まぁ受けてくれたから別に良いわ」

「ククク…それは何よりだ」

「そっちはどうなの？何時動く気？」

「そろそろ動く予定だ。それなりに時間が掛かるだろうが…まぁ早めに終わらせるさ」

「…じゃあ終わったら……」

「ククク…お楽しみの時間だ」

「ふふふ♪それじゃあ準備しないとねぇ…」

「ククク…」

「ふふふ…」

第十八話　召喚士とスキマ妖怪（後書き）

早い更新だぜひゃっほう！なのに進歩が無い！不思議！
…何でだｏｒｚ
前回と書き方が一緒ってどういう事なの…まぁ次話にはいつも通りに戻りますんで。

今回の補足

こぁの口調が敬語じゃないですが、あれは間違いじゃなくて、単に友達なので親しみを持って接しているという意味で本文の様な口調になってます。パチュリーと話す時は敬語ですよ？もちろん。

『賢者の秘薬』はオリジナル設定のアイテムです。つまり賢者もオリジナル。召喚獣に関しては、オリジナルだったり、ＦＦだったりと色々なのが出ます。もしかしたら読者様が知っているのが出るかもしれません。
…まぁ自分なんであまり期待しないで下さい。

まぁこんな感じです。設定や本文での質問に関しては、何時でも受け付けてますので、気軽にして下さい。
その中で、感想を頂けると嬉しいです。

後、自分の小説のレベルはどんなものか知りたいので、ポイント評価をして頂けると、とてもありがたいです。

第十九話　談話ＩＮ団子屋（前書き）

まだ一日の出来事ってどういう事なの・・・

第十九話　談話ＩＮ団子屋

――ｓｉｄｅ　蓮也――

ハロー美しき幻想郷よ。こちら高宮・リー・エデン大統領だ。話をしよう。あれは今から二時間…いや、一時間前だったか…まぁ良い、人里にて変態ｖｓ兵士の鬼ごっこがあった。現在の時刻は四時半。夏の筈なんだが、もう夕暮れ時になっている。

…つーか夏じゃないよね今。だって暑くないもん。逆に涼しいもん。しかも桜咲いてるもん。どう考えても春。おかしいな？外と幻想郷は大体季節が一緒の筈なんだが…だって結界やら境界やらで区切ってるだけなんだからさ。違う筈ないよね、うん。

まぁそれは追々考えるとして、さっきあった鬼ごっこについてだ。何なんだよあいつら、里の中をあんな縦横無尽に走り回って…どう考えても迷惑なんだが、訓練された里の人達に隙は無かった。そんな状況を娯楽として楽しんでやがった。幻想郷マジパネェ。俺の世界じゃ絶対有りえねぇよな～。

…まぁ何でそんな話題を出してるかと言うとだな…

「お前ら何で息切れしてないわけ？」

走り回っていた張本人二名は一時間もノンストップで走り続けたのに、全く疲れた素振りが見られないからだ。いや～ビックリした。ほんと驚いた。ＨＡＨＡＨＡ…で済ませられるかい！

「たかが一時間程度走った位じゃあ疲れねぇよ。体力には自信があるからな」

「まぁ基本触手で追ってたし、あれ位の事じゃ疲れないわよ。私を疲れさせたいなら夜這いでもする事ね。何時でも相手してあげるわよ♪」

「ありえん（笑）」

おかしいだろお前ら。普通の人間が、屋根を伝って飛び回ったり、人を避けながら物凄い速さで走り回ったり、それを一時間も続けてたら普通酸欠で倒れるだろ。おかしい、どう考えてもおかしい。

…まぁ俺が言えた義理でも無いけど。

今俺たちは、人里の『三玉だんご』という団子屋に来ている。創立八十六年というかなり古い団子屋だ。付近の人の反応は良く、結構なお客さんが店内に居る。俺たちは微妙な時間だったお陰かあまり人が居ない時に店に入ることが出来た。

まぁ何でこの店にしたかと言えば…

「みたらし、餡子、ごまお待ち！」

まぁここが輝夜の働く団子屋だったからなんだけどね。いやー見事に真面目に働いてるわ～…でも俺の思ってる輝夜像とあまりにもかけ離れててワロタ。

「それにしても…君（輝夜）がこんな所で働いてるとは思わなかったぞ？よく永琳さんが認めてくれたな」

「まぁ最初は反対されたんだけどね。私の熱意を伝えたら許してくれたわ」

「それにしてもあの輝夜さんが働いてるなんて…イメージと全く違ってビックリです」

「そんなに私って働かないイメージなの蓮也？」

「何で俺に振んの…まぁ仮にもモノホンの姫さんだしね～そう見られてもおかしく無いんじゃないの？まぁ俺からすりゃ世間を知らない我が儘な女でしかないけど」
「グハッ！こ、心にグサっと来るわねその言い方」

…何というか…まぁそんな風に痛がる辺り、お前はまともな方だとは思うけどな。個人的に。
世の中には何言われても聞かず、しかも向こう見ずな輩の方が多いからな。そこから考えりゃ輝夜はまともな部類だろう。少なくとも自分の欠点を理解してるし。

「まぁ良いわ。私はまだまだ仕事があるからこの辺で。それじゃ！」

輝夜は盆を持って走っていく。それにしても普段のおもっ苦しい格好と違って、軽やかなあのエプロン姿の仕事着は…凄く…かわいいです。やっぱ本物の東方キャラは良いわ。基本美人だし、スタイル良いし、何着ても大抵似合うし…良いわ～マジで良いわ～幻想入りして良かったわ～。ほんと眺めてるだけでも幸せになれるって良いよね！

「蓮也～あんな可愛い娘と知り合いだったなんて…羨ましいわ～」
「何で女のお前が悔しがるんだよ。何ですか？レズなんですか？」
「私は男も女も平等に愛す、両刀使いなの。プレイは責めも受けも可。Sにもなるし Mにもなる。個人でもヤるし、多数でもヤる。あらゆるテクニックで相手を満足させる…それが私」
「はいはいワロスワロス」

本当に変態だな。え？俺？ち、違うよ！仮に変態だとしても変態という名の紳士だよ！

「なあ…SとかMとかどういう意味だよ。何かの暗号か？」
「えっ…お前年幾つ？」
「え、二十歳だけど」
「…何故知らぬ」

お前…何で知らんの？流石に二十歳にもなればその位知ってると思うんだけどな～…これが住む世界の違いなのか…テラオソロシス。

「…なー早苗？SとかMとか知ってなきゃならない言葉なのか？」
「え！？え、えーと…だ、大丈夫だと思いますよ？知らなくても生きていけますし」
「ふーん…」

まぁそうだわな。逆に知ってたからって何かあるわけじゃないしな～…まぁ人それぞれだな。

「NO！断じてNO！そんなわけ無いでしょ！知らなくてもいい知識なんて何処にも無いのよ！！」
「お前はそうだろうけど他の人は違うだろうに。押し付けは良くないぜ」
「知ってもらわないと寝込みを襲った時に大変じゃない！」
「いやそっちかよ！？」

なんという変態魂。ある意味凄いわほんと。

「…それにしても、幻想入り者多いですよねご主人様？」
「あぁ全くだ。何でこんなに来んのかね」

今日会った奴と俺を含め五人。それも短期間に幻想入りしている。原作崩壊ってレベルじゃねえぞ！

こんなに来たら神主困るだろうが！神主様、お許し下さい！ってそれだと神主爆破しちゃう！いかん危ない危ない危ない危ない・・・

（兄貴ボイスで）

…とまあネタはこんなもんにして、恒例行事（？）はっじめっるよー！ヒャッホイ！アナライザーセット！検査開始！

気付かれないように…するわけねぇだろオメェ！あえて大胆に曝け出すぜヒャッホウ！

アナライザーは一人にしか効果が及ばなかったが、俺のは違う。最高三人まで効果が及ぶという高性能さ。しかしゲームのよりも大きい。仕方ないね（兄貴ボイスで）

…っとまた暴走している間にも検査終了ＤＡ！ちなみに調べたのは零奈とトシキな。さーて結果の程はなんじゃらほい。

……

……

……はい？

――ｓｉｄｅ　トシキ――

オレは今団子屋に来ている。早苗が言うにはこの世界のお菓子を作って売っているとこらしい、その場で食う事も出来る場所だそうだ。甘いものが好きなオレとしてはどんなお菓子があるのかワクワクしてしょうがない。最近甘いもの食ってなかったからな～久しぶ

りの甘味に胸を膨らませながら待機中。
今ここにはオレと早苗、さっき知りあった蓮也、ウサギの耳を付けた鈴仙、ついさっきまでオレを追いかけ回してた零奈、寺子屋っての先生の慧音の六人だ。
こんな大勢で話しながら食べるなんて久しぶりだ。今までは戦ってばっかでそんな暇もなかったからな～毎回毎回何かあったら出撃してたし。まあ食べる機会はいくらでもあったけどペチャクチャ話しながらってのがなかったんだよな。あいつら飯の時くらい何か話せばいいのに、何も話さねーから面白くなかった。

まあそれはいいとして。何か蓮也から疲れてねーの？って聞かれた。
何でそんな事聞いたのかよく分かんねーけど、普通に体力に自信あるからって答えた。そしたら笑いながら「ありえん」とか言い出した。何で？

そんな感じに話を進めたら、何か零奈がSとかMとかよく分かんねー事を言っていたから暗号か？って聞いたら何か年齢聞かれて、答えたら何で知らねーみたいな事言われて戸惑った。えっ？何？そんなに有名な事なの？って思って正直混乱した。知ってなきゃならねーの？って早苗に聞いたら、別に問題ないとか言われた。でも零奈はいるって言ってるし…どっちが正しいのか全く分からん。頭が働かねーよ。
…そーいや零奈が寝込みを襲うとか言ってたけど、どういう意味だ？…思いつく事と言ったら夜襲して殺すとかそんな事しか思いつかないんだけどどうなんだろ。つーか蓮也の「そっちかよ！」ってツッコミの意味も分かんねーし。
…前々から思ってたけど、この世界はオレの知る常識とか、そういうものを超越してんのかな？だって会話に出てくる単語が全く分からねーんだもん。どうしろと。

そんなこんなで運ばれてきた団子っていう菓子にかぶりつきながら他愛もない話をしていると、何か蓮也が妙な道具を出して、オレと零奈に向けた。一瞬警戒したけど、魔法が飛んでくることもなく三秒くらいで下げた。何なんだよ一体。

蓮也はそのよく分かんねー道具の中を覗いたら何か驚いてた。鈴仙も覗いたが同じ反応。何なんだ？つーかその道具はどういう時に使うもんなの？全く分かんねーよ。

「何これチート？まただよ（笑）」

「またですか（笑）もう良いでしょうに…」

…へ？ちーと？ど、どういう意味なんだ！？何かの病気か！？で、でも二人は笑ってるし…何なんだ一体！？

「チート？プロア○ション○プレイの事ですか？」

「んー？もしかして無駄に強いって事？あらあらそこから攻めて来るの～うふふ♪」

…早苗と零奈分かってるんだけど。え、何？もしかして『外の世界』とかいう所の常識だったの？分かるか！そんな事分かるかー！

「零奈…何で妖力・特大なわけ？お前ほんとは人間じゃないんじゃないの？」

「あら失礼ね。私はれっきとした人間よ？その機械でその事も分かる筈」

「あー…まぁ分かるけどさ。あの力といいこの検査結果といい…人間とは思えねぇよ」

「まぁそうよね」

…妖力？何で人間なのに妖力が……さっきの触手といい、おかしな奴だ。

「トシキ～？お前現人神だったの？何この神力。特大だよ特大」
「えっ」
「えっじゃなくてさ。お前現人神だったのかって聞いてんの」

…は？あら…ひと…がみ…？…えーと…どゆこと？

「え！トシキさん現人神だったんですか！？」
「いや知らなかったの！？…その様子だとトシキも知らないみたいだし…貴方達、二柱の…神奈子と諏訪子…で良いのよね？二人に話されなかったの？その事」
「「いや全然」」

つーかオレにそんな力がある事自体知らなかったぜ。何で神奈子様と諏訪子様は教えてくれなかったんだ？

「わざとだな」「わざとね」「わざと以外考えられない」
「どう考えてもわざとです。本当にありがとうございました」
「何でそんなはっきり言えんのお前ら！？」

何で全員同じ意見何だよ！た、単純に忘れてたとかじゃないのか！？

「さ、早苗！わざとは無いよな！？な！？」
「…あの二人ならやりかねない」
「さなえーーー！！？！」

早苗まで言い切っちゃったよ！マジなの？本当なの？

「まぁ取り敢えず。お前には霊力・中　魔力・中　神力・特大　が宿ってるから」

「あ、あぁ。分かった」

返事に困る。突然の通告にまともな言葉が出ないんだが……これは喜ぶべきとこなのか？

「…あ、そうだ。蓮也の能力聞いてなかったわ。というわけで教えて♪」

「何故今…まぁ俺も言おうと思ってたし別に良いけど…」

「あ、じゃあオレｍ「貴方は大体分かるからいいわ」ひでぇ！」

いいじゃん別に言うくらいよぉ！何なの？そんなに単純な能力だっけオレのって！？

「で？な～に？」

「『幻想を実現する程度の能力』それが俺の能力ＤＡ！」

「…へ？幻想？…どういう意味だよ」

「あ～ｋｗｓｋ言うとだな」

少年説明中・・・

「…人の事チートとか言っておきながら、そっちもチートだったじゃないのよ」

「チートつったってまだ一週間程度しか使ってない力だぞ？チートというにはまだ早い」

「…えーと、つまり大体何でも出来る能力って事か？」

「何でもつったって、世界征服とか考えただけで人を殺せるとか、

そんな事は出来ねーよ」
「如いて言うなら器用貧乏ってとこかしら？」
「はいその通り」
「……あー…えー…んー…つまり出来る事は多いけど、何かに突出してるわけじゃないって事か」
「そういう事。その場で瞬時に色々と出来るようになるけど、それ以上に磨く事が出来ない。とてもとても面倒な能力なわけだ」

…オレには絶対合わねー能力だな。使う時に『ありえない』って思わなきゃいけないってのは…正直そんな事出来るかい。

「まっそういうわけだ。慣れないと本当に使えない能力だよ」
「OK理解したわ。…あっそういえば私のもう一つの能力について言って無かったわ　ね」
「えっ、まだあんの？」
「あるわよ～名づけて『，美，を操る程度の能力』！凄いわよ～この能力」
「…えーと、よく分かんねーけど…どんな能力？」
「この能力わね…」

少女説明中・・・

「…それも充分チートじゃん。自分の好きなように誘導出来るなんて…よくもそんなキ○ガイ能力を！」
「ふはははは！羨ましがっても無駄よ？この能力は私のだから！」
「いや羨ましくは無いけどさ。お前みたいな変態に渡ると世の老若男女の貞操に被害が…」
「良いじゃない。それで皆幸せになるなら」
「いやいやいや」

…話について行けねぇ……ダメだ頭がパニクッてきたぜ…

「…ん？トシキ君どうかしたか…っておい！頭から湯気が出ているぞ！？」

「そんなベタなネタがあるか…ってほんとだ！ちょｗおまｗｗ水！水持ってきてー！」

「触手が冷気出せるから大丈夫よ。というわけで涼しい風をプレゼント」

……あー気持ちいい…って何か妙に強くね？何か寒くね？あれ…何か眠気が…

「わー！零奈さんストップストップ！トシキさん死んじゃいますよ！」

「お前は何をしているんだ零奈！？やりすぎだ！止めろ！」

「ヤりすぎとな？私にヤりすぎなんて言葉は通用しないわよ！私の性欲を舐めないことね！」

「あんた絶対わざとやってるでしょ！？やめてやんなさい！ほんとに死ぬわよ！？」

「その幻想をぶち殺す！オラー！零奈やめろやー！」

「自分から来るとは良い心構えね！相手をしてあげるわ！かかってらっしゃい！」

…何なんだコレ。寒さで眠りかけるわ、何か蓮也と零奈がケンカ始めるわ、何がどうなってんだよ…もう訳分かんねーよ……

ホント…何なんだよ…

―約一時間後　ｓｉｄｅ　蓮也―

…あー疲れた。ただ話すだけで終わる筈が零奈と乱闘したり、鈴仙のスカートの中が丸見えになったり、それを見たトシキが鼻血を出して倒れたり、それを助けたり、零奈と早苗とメアド交換したり、もこたんｉｎしたお！だったりと何じゃこりゃって言いたい状況だよ全く。

つーかトシキは何でパンツ位で鼻血出してんのかね。しかも漫画みたいにさ。おかしいよなあいつ、色々と。

後、零奈は何で頭良いわけ？俺の持ってた問題集を五分で解いたぞおい。零奈曰く「この程度は問題の内には入らない」だそうだ。ちくしょうふざけんな；；

まぁそんな訳で今は帰路に着いてるわけだが…

「ホント信仰しといた方が良いって！信じる者は救われるだぞ！」

何故かトシキが付いて来てます。永遠亭にまでその信仰を広げようと、熱心に…そりゃあもう熱心に勧誘してきてるわけだが…

正直帰ってほしい

「いい加減諦めなさいよ。私達はどうあったって信仰しないんだから」

「だとしても、いざと言う時の心のより所って必要だぜ？早めに確

保しててもバチは当たらねーと思うんだけどなあ？」
「だから私の心のより所はご主人様なんだって。まだ分かんないの？馬鹿なの？死ぬの？」
「ひでぇ！馬鹿ならまだしも死ねはひでぇ！」

…何だかなー。そろそろ面倒になってきたよ。強制的に帰そうかな…能力使って。

現在・霧の湖　六時台のせいか辺りは結構薄暗い。しかも霧。歩きづらいです。

…はー…何か今日は散々な一日だったな。身も心もボドボドダ！ってね。ネタ言える余裕があるからまだ大丈夫だなうん。
空は暗く、街の明かりが無いから星が見えます。ヤベェすげぇ見える。都会のもやしっ子だった俺には縁の無い夜空の筈だったのになー。こうも綺麗に見えるとはな。
しわよせ↑間違いでは無い

はぁ…このままこの夜空を見ながら帰りたい……あっあれは流れ星かな？見事に流れてるな～…

…あれ？何か迫ってきてない？…やっぱこっち来てる！？やばばば！！逃げないとととと！！
…ってちょっと待て！あれは星じゃねぇ！

あれは……人間だ！しかも女！

ザボーン…

湖に女性が落ちる。お、親方！空から女の人が！ってネタどころじゃねぇ！助けないと！

あーもう！今日は厄日だわ！

第十九話　談話ＩＮ団子屋（後書き）

蓮也視点に戻りますた。やっぱネタを書きまくれるのは良いね。

今回はトシキの視点も入れました。
これでトシキがどんな奴か、分かって頂けたかと思います。

今回の補足

蓮也はネタ成分豊富。
零奈は変態で天才で強い。
トシキは頭が弱い。

…って補足じゃないし。まぁいいや。

あっそれと残念なお知らせ。
皆の嫁の慧音先生は、既に零奈にＮＴＲてます。
慧音ファンの皆様…お許し下さい！

だから補足じゃないってコレ。

次回、新たな幻想入り者登場。お楽しみに！

第二十話　月夜の湖と落ちてきた女（前書き）

何か今回妙に早いな（投稿）

第二十話　月夜の湖と落ちてきた女

――ｓｉｄｅ　蓮也――

女性が突然落ちてきたでござる。あまりの事態に驚きでござる。って言ってる場合じゃないよねコレ！？はよ助けんとヤバイよね絶対！

三秒間のフリーズ。正直最初は何が起きたか全く理解出来なかった。俺は兎に角事態を把握する事に必死になっていたんだが…

「サクラ！」

トシキは違った。サクラと呼ぶその女性が湖に墜落するのと同時に、腰に差していた剣を捨て湖の中に飛び込んだ。

それと同時にニュータイプの力を得ていた俺は上から何か来ることに気付いた。

動体視力とかやら何やらを底上げしていた俺の目に映ったのは『射命丸文（しゃめいまるあや）』だ。

『射命丸文』は鴉天狗。『風を操る程度の能力』所持しており、『文々。新聞（ぶんぶんまる）』という個人新聞を発行している新聞記者だ。生真面目で融通が利かず、相手の力の強弱で口調を変える傍から見りゃむかつく女。しかし千年も生きてる大妖怪。頭脳明晰、非好戦的、頭が良くて思考速度は人の何倍も速い。／射命丸／

何であいつが？あの女性はどう考えても原作キャラじゃない。第一あんな必死な顔をするなんて・・・俺の知ってる文と大分違うぞ・・・つーか文が誰かと一緒に行動してるとこなんて、二次で椛と一緒に行動してる事意外、動画でも見たこと無いんだけど……

って今はそんな事どうでもいい！文まで湖に飛び込んじまったぞ！？これはあれか！？俺も飛び込むべきなのか！？畜生！行けばいいんだろ行けば！

湖に飛び込もうと息を整える。呼吸完了。いざ湖へ……ってうお！？何か出てきた！？

突然出てきた何かは俺の後ろに着地した。振り返って居たのはトシキと文だった。二人は落ちた女性を抱え、そこに居た。

「は、はえーなお前ら…」

「関心してる場合じゃねぇ！早く助けないとマズいんだよ！」

…は！そうだ息してんのか！？水の中に落ちたら、水を吸って危険な状態になる。こんなもん常識だ。……だからこそ心配だ。

女性の顎を引き気道を確保する。首元に背負ってたリュックを置き、女性の口元に耳を近づける。

……息して無いぞ！？つーことは……心臓も止まってる！やっぱりかよ！これは人工呼吸と心臓マッサージしなきゃ駄目だな…

「鈴仙！人工呼吸と心臓マッサージをする！手伝え！」

「はい！」

鈴仙はすぐさま女性の胸の真ん中に手を当て、マッサージの準備をする…女性の胸が大きくてやりづらそうだ。おいおい。

俺もすぐさま口元に人工呼吸用の紙を取り出し、女性の口元に乗せる。こうしなきゃ色々と不味いからな。

女性の口から息を吹き込む。一秒かけて息を吹き込む。女性の胸が上がるのが見える。流石にそれでは息を吹き返さない、なので鈴仙が心臓マッサージをする。一、二、三、と一定のリズムで胸を押す。三十回押し、様子を見るがまだ吹き返さない。

俺が息を吹く。鈴仙がマッサージをする。それを繰り返す。
そして三回目のマッサージの時、

「けほっ！けほっ！」

女性は水を吐き出し、息を吹き返した。

「…はぁ…何とかなった…」
「そうですね…」

俺と鈴仙は安堵する。正直こんな事をした事が無かったから上手く行くか心配だった。だけど上手く行った。保健の授業真面目に受けといて良かった・・・

「サクラ！大丈夫か！」
「サクラ！」

トシキと文が女性に近づき声を掛ける。余程サクラという女性が心配だったんだろう。だって助け出すのに十秒も掛かってなかったもん。
まぁ兎に角まずは…

「…取り敢えず永遠亭に連れて行こう。そこでならちゃんと治療を受けられる」
「…そうですね。かなり衰弱してますしね……ッ！」

鈴仙が突然言葉を切り、空を見上げる。それに釣られ俺も上を向く。
そこに居たのは中小妖怪の大群だった。

「なっ！何だ！何なんだ一体！」
「…あれは私の里を襲った奴ら！何でこんな所に…！」

トシキも文もそれに気付く。どうやら文は知っている連中らしい。
それもお友達とかそういう風の知り合いじゃなく、関わりたくない知り合いのようだ。

「おい文！あいつら何だ！」
「あいつらは天狗の里を襲った連中よ！あの時全て倒した筈なのに…！」
「な、何か凄い殺気だってね！？もしかしなくとも殺す気全開なのか！」
「そうじゃなきゃこんなに来るわけないでしょ！馬鹿！」

…くそ！この数は流石に無理だ！
こっちは四人、しかも怪我人抱えている。
相手は少なくとも千は居る。しかも万全。

どう考えても無理ゲーだ…俺がどれだけチートでも数の暴力には勝てねぇ…

「…どうする？話し合いでもしてみるか？」
「それで済んだら苦労しないわよ…」
「ど、どうするんだ！？このままじゃ…！」
「それを今考えてんの！いちいち騒がないで！」
「で、でもよ…！」

…皆良い策が無い様だ。俺だって無い。
…どうする……どうする…！

そうこうしてる間にも相手は動こうとしている。
…早く……早く策を…！

「ウオオオオオオオオォォォ！！！！」

リーダー格と思われる妖怪が雄たけびを上げる。ヤバイ！来る！
確実に来る！

「くそ！何とか逃げるぞ！」
「逃げるたって何処に！」
「何処だっていい！兎に角逃げるしか…！」

…それしか方法が思いつかない。駄目元でもやってみるしか…！

「大丈夫ですよ皆さん。私が居ますから」
「え…」

声のした方、そこには先程倒れていたサクラと呼ばれる女性が居た。

「サクラ！大丈夫！？」
「えぇ大丈夫ですよ文さん。先ほどは大変ご迷惑をお掛けしました」
「そう…良かった…」

思わず飛びつく文。あのーそれどころじゃないんですが…

「嬉しいのは分かるけど今はそれどころじゃないでしょ！？今私達は囲まれてるのよ！？」
「いや鈴仙？流石に少し抱きつかせるくらいいいんじゃ…」
「馬鹿は黙ってなさい！」

「な！て、テメェ！さっきから人の事馬鹿馬鹿言いやがって！何様のつもりだよ！」
「五月蝿い！馬鹿を馬鹿って言って何が悪いの！？」
「また言いやがったなこのヤロウ！斬るぞこのヤロウ！」
「ｏｋ取り敢えず黙れお前ら」

何だかカオスになってきたので止める。何か俺がツッコミになってるな…別にそんなつもりも無かったんだけど…

「…で？サクラさん？あんたが居れば大丈夫ってのはどういう事だ？」
「あ、はい。それはですね…」

サクラは体にしがみ付いてる文を離し、妖怪達の前に出る。
何をするつもりだ…？

サクラは大きく息を吸い、妖怪達の方を見る。
そして…

「皆さん！攻撃しないで下さい！『お願い』します！」

サクラがこう言い放つと、攻撃をしようとしていた妖怪達は、動きを止めそのまま動かなくなってしまった。
何だ…？ただお願いされただけで動きを止めた…？
…まさかこれがサクラの能力？バイ○ショックで似たような聞いたぞ。確かあっちもそんな感じで英語版だと「Ｗｏｕｌｄ　ｙｏｕ　ｋｉｎｄｌｙ～」だっけ？日本語で「～してもらえるかな？」だな。
…今はそんな事どうでもいいよ。

「皆さん！自分の住んでいる場所に帰って休んで下さい！『お願い』します！」

その言葉と同時に妖怪の大群は散り始め、あっという間にいなくなってしまった。

「…うわお」
「…何？今の…」

俺と鈴仙はただただ呆然とするしかなかった。

「もう大丈夫ですよ皆さん」
「相変わらず凄いわね…」
「そうだな。言葉一つで操るってのがすげぇよほんと」
「いえいえそんな……私は皆さんが傷つくのが嫌だっただけですから」

…うわーお。凄く嬉しい言葉出たよ。普通の人じゃ言えないよ？その言葉。幻想郷じゃあそんな事言えるのひじりん位じゃね？あの人人間と妖怪の共存目指してたし。…あ、ひじりんは人じゃなくて妖怪だった。

…あ、そういえば

「サクラさん。体の方は大丈夫ですか？」
「あ、はい。大丈夫ですよ～…ふにゃあ」

気の抜けた声と共にサクラはその場に座り込む。
つーかふにゃあって……萌えた。

「ちょ！大丈夫！？やっぱりまだ駄目なんじゃ…」
「あはは…すいません、腰抜けちゃいました…手を貸してくれませんか？」

やっぱり駄目だったんねー。何かそんな気がしたんだよ、足ちょっと震えてたし。

「全く何やってんのよあんたは…ほら」
「ありがとうございます文さん。やっぱり優しいですね」
「な！何言ってんのよあんたは！」

…あれ～何でそんな顔を赤らめてるのかな～ツンツンしてたの？そうなの？可愛いな～いや～モノホンは可愛い。

「…何ニヤニヤしてんのよあんた」
「いや～別に～。なあ？鈴仙？」
「そうですね～うふふ」
「…何か気持ち悪いわね……ってそういえばあんた誰よ。何であんた私の名前知ってるのよ」
「まあそれはそっちの人を永遠亭に連れてってから教えるよ」
「何でそうなる」
「まあまあ。じゃあトシキ。運ぶのヨロシク」
「ああ分かった…って何でだよ！」

そんなこんなで俺たちは永遠亭に二名追加で戻る事になった。道中、文に色々と質問されたが、後でを連呼してなんとか凌いだ。文が敬語じゃないところはあまり見られないから嬉しかった。だって生の射命丸だぜ？某添い寝サークルのメインパーソナリティーだぜ？文花帳主役だぜ？＼射命丸／だぜ？あややだぜ？嬉しいじゃねーか。

…あ、因みに俺は全キャラ好きだから。誰か一人について語れって言われたら、全員分語れる自信がある。例え名無し娘でも、こーりんでも、雲山でも、旧作キャラでも、語れって言われたらいける。絶対いける。妄想しろって言われてもいける。俺は全東方カップリング肯定だぜ！百合最高！異性同士の恋愛も良いが、やっぱ百合最高！

あ、どうでもいいけど。ガチホモとＢＬが駄目でも、男の娘ならイケる。問題無くイケる。

…いやだから変態じゃないって、紳士だって。そこを理解して欲しい。

…はい到着。竹林も慣れたもんだ。普通の人間なら一ヶ月以上掛けないと慣れないところを、俺は二日で慣らした。流石チート能力、これ位なら余裕だぜ。

…まぁ行くだけなら飛べば良いだけの話何だけどさ。うん。

さてと…取り敢えず入るか。まずは永琳に事情を話して、そんで持ってサクラを休ませて、薬の売り上げ渡して……やる事多いな～。

そんじゃま行くとしますか。

第二十話　月夜の湖と落ちてきた女（後書き）

どうも作者です。何か今回調子が良かったんで早めに更新。今後もこういう事があるかもしれません。

今回新キャラのサクラが登場しました。
彼女は幻想入り者の中では癒し的な存在です。天然さんです。
彼女が本文で使用した能力についてはまた違う話で説明されます。

…と言っても次は零奈の視点なんで、まだ分かりませんけど。

今回の補足

本文にて、サクラの容姿を説明してなかったのでここでします。
髪：長いようで短い中途半端な長さで、青色　黒の髪留めをしている
服：文が着ている服と同様の物、ただし襟が黒でタイも黒
身長：１７７ｃｍ
他：短い槍を背負っていて、右耳に黒色の、左耳に白色の宝石が付いたピアスをしている（穴を開けずに挟むだけでいいタイプ）
ちなみに美人さん。

こんな感じです。本文に入れづらかったからってここに書くのもどうなんだ？って思うが仕方ない。

次回は零奈視点で、ちまちま出ていた謎の人物登場！お楽しみに！

第二十一話　現代の遠命と過去の遠命（前書き）

ようやく幻想入り者全員出るよ…
あまりにも遅すぎるでしょう？

第二十一話　現代の遠命と過去の遠命

――ｓｉｄｅ　零奈――

…はぁ……慧音の胸柔らかい…さわさわ、さわさわ…マシュマロみたいに軟らかい……むにゅむにゅ…むにゅむにゅ…谷間に蹲って…挟まれて……さい……こう……！

「…零奈」
「な～にけーね？」
「…そろそろ離れてくれ……流石に人目が…」
「つまり人目が無ければＯＫってわけね？」
「いや…そういう問題じゃなくて…」

顔を赤らめながらも、実は内心喜んでいる慧音。可愛いわ～凄く可愛い。

そして横でもじもじする大妖精こと大ちゃん。いやん！もう！そんなに可愛いと撫で回したくなるじゃない！

「零奈さん！」
「どうしたの大ちゃん？」
「胸は必要ですか！」
「無くても私は一向に構わないわよ？どんな胸であろうと、私は受け入れるわ」
「なら私も！」
「ヤりたいと？よし来なさい」
「はい！」

大ちゃんダイブｉｎ私の胸。あぁ…やっぱり良い匂い……しかも可愛い！そして私の変態センサーがこの娘は近い内に大きく成長すると察知したわ！ほんとこの娘は将来が楽しみね。

蓮也やトシキと別れた後、私は団子屋でしばらくもこたんと慧音やさっきの娘達と話をしていた。私はリグルやミスチーの妖怪娘や、チルノや大妖精の妖精娘と楽しい楽しいお話をしていた。

内容？それはもちろんエロばなですことよ？事細かい描写や、声を変えて話をしてたんだけど…

もこたんが途中で止めちゃったのよね～しかも良い所で…もう！止めちゃだめでしょ！話の腰を折るのは止めて欲しいですわ！…あ、昔の口調が出てる。興奮しすぎると偶に戻るのよね～…

あ、ヤってる時は出ないわよ？出るのは怒ったりした時とか、話が盛り上がっている時とかかな？

あ、さっきから妹紅の事を『もこたん』って呼んでるけど、これは蓮也が言った妹紅の愛称で、何か凄く気に入ったから使ってるの。もこたん可愛いよもこたん……うん！やっぱり良い！

そういえば……早苗逃がしちゃったな……慧音に負けないあの胸は是非揉みたかったんだけどな～…そのついでにヤりたかった。あの娘奇跡的な速さで逃げたんだけど……奇跡を起こす程度の能力って凄いわね。その能力で私の心と体にも性なる奇跡を起こして欲しかったわ～。あ、起こす時は貴女の体でお願いね！…って言いたかった！そしてヤりたかった！そのまま里の男連れて皆でヤりたかった！

世の中ってそんなに上手く行かないものね……だからこそ面白いのよ！

上手く行かない事を何とか上手く行かせようとする。その為に苦労するのって素晴らしいと思わない？だって頑張れば大体何とかな

るもの。努力って必要よ?色んな面でね。

え?何で今慧音の胸を揉んだり、大ちゃんをさわさわしてるかって?

それはもちろんエロスの補充をしたかったからよ。夜は盛るのが定番でしょ?

まあ私には関係ないけどね♪

あ、それとルーミアは不在。今は里の外に行っている。

暗闇の妖怪という名の通り、夜の時は食料(人間)を探す為に動きが活発になる。食料ってのは性的な意味じゃなくて、夕食的な意味で。

…性的に食べるでいいじゃない、その方が幸せになれるし。

そういえば…ルーミアは何かの匂いに反応して動いたのよね。方向的には蓮也とトシキが行った方。

…偶然よね?何か高級料理を目の前にした時の様な顔してたのだけれど……そんなわけ無い…かな…?…いや、やっぱそうだ。

…となると蓮也とトシキのどっちかが確実に襲われるかもしれないわね……

まあ大丈夫でしょ。二人ともそこそこ強いし。

「…ねえ零奈」

「な～にもこたん？」
「そのもこたんっての止めて。そろそろ店を出るべきだと思うんだけど…他の客の迷惑　になるし」
「迷惑？具体的に何が？」
「…今貴女がやっている行為は他の客の目のやり場を困らせる行為よ。目に毒だわ」
「逆に目の保養でしょ？こんな状況そうそう見られないから、男の人は嬉しいと思うけ　ど」
「その他の客には迷惑でしょ！ほら！さっさと会計済ませるわよ！」
「わ～んもこたん襟首引っ張らないで～」

妹紅に強制的に引っ張られて店の外に出る。やーんもう…折角良い所だったのに～…何で妹紅は邪魔するの？どうして？
……もしかして嫉妬？もしそうだとしたらいけないわ。ちゃんと夜這いしてあげないと！嫉妬に駆られた心を癒すのも私の役目よ！
さあ！私に抱きついてきなさい！その嫉妬心を癒してあげるわ！

「嫉妬してないわよ！何言ってるのよ貴女は！」
「え～そんな馬鹿な～……嘘はいけないわよもこたん？」
「…一片燃やしてあげようか？そうすれば少しか解るわよね…？」

もこたん怖い。そんなに怒らなくてもいいじゃないの。軽いジョークなのにね♪

外に無理やり連れ出された私は、服に付いた土をほろいながら何となく今日の事を思い返してみる。
今日会った蓮也とトシキ…彼らは私が会った中ではかなり異質な部類だ。

私の友達にもそんなのがいっぱい居るが、正直規格外。
あれだけ殴ったり、レーザーで撃ち抜いても死なない人間は見た事が無い。
あれだけ走っても息を切らさず、尚且つあんなに速く走れる人間は見た事が無い。
強い弱いは抜きにして、あれは可笑しい。

『あの事件』で会ったあの大男もそうだ。
どうしてあれだけの力を持っているの？しかもあれは本当の力じゃない…あれで弱まっているというのだから少しだけ嫌になる。
私の世界では私は異質で、強く、規格外で、どれだけ鍛えたとしても、どれだけ技を極めたとしても…誰も私には勝てなかった。例え人間でなくても私に勝てる奴なんて誰一人として居なかった。

…だったのになぁ……

何かスッキリしない。負けたわけでもないのに…何かスッキリしない。
……色々とモヤモヤとしてる。何だかな～…

釈然としない気持ちを取り払い、私はいつものタンクトップとスパッツに着替える。
まあその内スッキリするでしょ。軽いだろうけど、こういう時は大体後で何とかなるものだからね。あまり考えすぎても意味が無いわ。

さーてと…このスッキリしない気持ちを何とかする為に慧音と大妖精を襲おう。それじゃあ早速♪いっただっきまー……す…ッ！

突然強い威圧感に囚われる。それはまるで蛇に睨まれた蛙の様な、そんなつよい感触。嘘…さっきまではこんな強い感触は全くしなかったのに…！

それこそ私は周りの気と力をちゃんと把握していた。何が近づいてこようと解る程に…それがどういう目的で近づいて来たのか察知出来る程に……！

私は威圧を感じた方…私から見て左の方を向く。

そこには、いかにも怪しいですと言わんばかりの黒いマントを被った『誰か』が居た。

何時の間に…！少なくとも、私が妹紅に引きずられて店を出てきた時には誰も居なかった。例え隠れていたとしても、微妙に発せられる霊力で気付く筈なのに…！一体どうして……！

私はそれ以上考える事は出来なかった。

考えるような時間が、もう無かったからだ。

そいつの口元が微かに動き、笑いと思われる表情を出し…そいつは腰に差していたのであろう刀に手を掛けた。

私は咄嗟に反応し、

「皆伏せて！」

そう叫び、それに反応した妹紅と慧音は直ぐ様しゃがみ、反応しきれなかった妖怪・妖精娘達は触手で強制的に伏せさせた。頭上を通り過ぎる剣閃。少しでも遅かったら斬られていたわ…！

「危ないですわね！人里で刀を扱うとはどういう了見でございますことよ！」
「れいなー戻ってる戻ってる」
「おっと」

いけないわ…感情が昂って、口調が戻りやすくなってるわ。少し落ち着きましょう。

軽く深呼吸をし、目の前の不届き者と対立する。
今の剣閃…只者じゃないわ。私でさえ避けるので精一杯だったもの……これはかなり集中しないと不味いわね…

「どういうつもり？人里（ここ）では戦ってはいけないという暗黙の了解があった筈よ。それを　破ろうなんて…何が目的？」
「・・・」

そいつは返答をせず、沈黙をしている。
…返答は望めないか……だったら…！

「返答しないというのなら……力ずくで行かせてもらうわ！」

先手必勝、一気に近づき腹に向かって右ストレートを放つ。そいつはそれをいなし、何時の間にか仕舞っていた刀を抜き出す。右一閃、左一閃、右斜め一閃、左斜め一閃、切り上げ、切り下ろし…それらを連続で繋げる。それらを瞬時に見切り、かわす。最初の一撃以外に攻撃を加えられない…どうする……けど相手は間髪入れずに斬りだして来る。まともに攻めるのはまず無理だ。
私は出来るだけ回避行動を小さく行う。かわすだけでもかなり体力を使う。それをなるべく抑える為に、剣閃のすれすれの位置で回避する。回避、回避、回避、回避…このままじゃ不利だ。ならば次

の一閃を避けたところで、懐に潜り込んで強い一撃を…！
その時、突然剣の嵐が止む。突然の事に驚いたが、直ぐに集中し相手をずっと捕らえ続ける。何のマネ……？

「…ふむ、やはり見込み通りだな。今のところ全く当たっていない」

！　喋った!?いやそれより今の声女性だったわよ!?どういう事!?

「ククク…悪いな突然。いやなに咄嗟の状況に対応出来るか確かめたかったものでな」
「…どういう事？」

そいつは口元を緩め、微笑した。

「突然だが、先程の質問に答えよう。目的は…お前だ。遠命零奈」
「！　何で私の名前を!?」
「ククク…それは後で話してやる。それより…二人だけで話がしたい。付いて来て貰え　るかな？」

…何なのこいつ。色々と怪しいわ。付いて来いなんて、そんな誘いに……普通なら乗らないでしょうね。こいつの話というのが戦いの事だとしたら、人里（ここ）のままだと周りに被害が出るから危険なのよ。だから今は大人しく付いて行くしかないわね…

「…良いわ。行ってあげる。これ以上人里（ここ）で暴れるわけにはいかないからね」
「ククク…それは結構。ならば付いて来い」

そいつは振り返り、里の外の方に歩き出す。何があるか分からない…充分警戒しないと。

「…零奈」
「な～にけーね？」
「…大丈夫なのか？一人で行くなんて…」
「そうね…せめて一人位、後から付いていった方が…」
「…安心しなさい。私を誰だと思ってるの？」

「私は『美しき怪力娘』遠命零奈よ？そうそう簡単には負けないわよ」
「…そうか……気をつけてな」
「何かあったら直ぐに呼んで。直ぐに駆けつけるから」

妖怪・妖精娘達も口々に揃えて「気をつけて下さい」と言う。
…皆心配性ね～私はそこまで弱くないから大丈夫だって。ふふふ…

…さて……取り敢えず目の前を先行している『誰か』に付いて行くとしますか。

―――――――――――――――――――――――――――――

「ここら辺で良いか」

目の前を歩いていたそいつは人里からかなり離れた位置に来たと

ころで足を止めた。

「さて…それでは用件を…」

「その前にマントを取りなさい。話をするときに顔を隠しているってのは嫌いなのよ」

「それもそうだな」

そいつはマントに手を掛けると、勢い良く脱ぎ捨てた。

黒と白で彩られた袴、大きく靡く長髪、そして明かされた顔を見て私は驚愕した。

そこには今生きている筈の無い人間が居た。少なくとも百年以上も前に死んだ筈の人間が…そこに居た。

私はこいつを知っている。だってこいつは…私のご先祖様だもの…！

「これで満足か？」

「…何で生きているの……貴女は江戸の時代に死んでいる筈……！」

私は私に言い聞かせるようにそいつの名前を言った。

「遠命神那女（とおみかなめ）…！」

神那女は改めて私を見て、不適に笑った。

「ククク…確かに可笑しいかもしれないが、私の日記を見ていたのであれば少しか理解　出来る筈だがな…？なあ零奈？」

「…確かにあの日記を読めば今の状況を少しか飲み込めるかもしれない……でも…！」

「夢物語でしかないと思っていたのか？なら違うな。あれに書いた事は全て本当の事　だ」
「…何で貴女がこんな所に……？」
「それを今話そうとしていたのだ…が、その前に…」
神那女は刀に手を掛け、斬る体勢となる。
「お前がこの技を防げるかどうか…確かめさせて貰うぞ」
刀と掛けていた手が消える。いや厳密に言えば消えてはいない。消えたのではなくて、既に抜き出したのだ。私は刀を抜き出した瞬間のコンマ０．３秒の間に取るべき行動を思考していた。
回避？防御？反撃？……いや違う。私の行動は……
その全てだ！
放たれた連撃を掠りそうな位置でかわし、そして放たれた剣閃を触手で受け止める。私は上に跳び、触手を自らに叩きつける。勢い良く落下していき、神那女を捕らえる。拳をまるで獣の口の様な形にし、接近した神那女に対し、上と下から潰す様に拳を振り翳す。
名づけて、『牙獣撃』　食らった者は頭と顎の両方からの挟み撃ちにより、潰れたトマトの様に砕け散る。
当たれ…！確実に捕らえ、武器も押さえた…これで当たらない筈が…無い！

放たれた拳はその顔を砕いたと思った。

…だがそこには誰も居なかった。そこに居た筈の神那女は何時の間にか私の後ろに回りこんでいて、武器を押さえていた筈の触手は、何故かぐったりしていて、私の首には刀の刃が掛けられていた。

「…本に書かれていた通りね。本当に…強い…」

「ククク…今のは良かったが、まだまだ詰めが甘いな」

…本当にそう。全く歯が立たない…こんなに強いなんて……

やはり『遠命家最強』と言われるだけあるわ。あまりにも…強すぎる。

「…合格だ。これならば問題無いな」

「…そう……でも…」

「ククク…そう落ち込むな。お前はまだまだ伸びる。徐々に頑張れば良いだけの話だ」

そう言って神那女は肩をバンバン！と叩いてくる。

その時に見せた笑顔は、無邪気なもので、全く悪意というものを感じなかった。

「さて…腕試しは終わりだ。今回お前に会ったのはには理由が有る」

「理由って？」

「それはな……」

数分後、私は告げられた事に驚く事となった。

第二十一話　現代の遠命と過去の遠命（後書き）

どうも作者です。前置きにも書きましたが、ようやく全員出ました。本当に時間掛かりすぎだよ…

今回出てきた神那女ですが…はっきり言おう。チートです。しかも幻想入り者の中でも最強と言われる程の。

彼女については、別の話や、これから先投稿予定の小説にて話されるので、気長に待っていて下さい。

零奈の口調に関してはそのうち話します。後、地味に二つ名発表っていうね。

今回の補足

牙獣撃
元ネタ無し。完全なるオリジナル技です。

神那女の放った技には名前がありますが、それはまた別の話の時にでも話します。

早苗さんの奇跡を起こす程度の能力は、ちょっと強化されてます。起こせる奇跡の種類も多くなっています。
こんな感じに東方キャラの能力も、若干強化されたり、変わっていたりします。細かい事については、別の話か近々投稿予定の小説にて明らかとなりますので、それまでゆっくりしていってね！！

何だかガールズラブのカテゴリを追加すべきかと考え始めた今日

この頃。つーか多分付ける。絶対付ける。

そんなわけで次回は多数のキャラの視点で進みます。お楽しみに！

最近書いてなかったですが、質問・意見・感想は随時受け付けていますので、どんどんお願いします。

第二十二話　魔物娘と剣豪～永遠亭と湖にて～（前書き）

今回は長いです。
そして、無駄に会話シーンだらけです。

第二十二話　魔物娘と剣豪～永遠亭と湖にて～

――ｓｉｄｅ　蓮也――

へいどうも蓮也ですよ。今は何処かって？永遠亭の中だよ。今はサクラの治療…じゃない検査をしている。最初は傷付いた箇所の手当てだけの筈だったんだが、文が色々と調べて欲しいとか言ったんで、調べる事になった。そんでもって今は機械使っての精密検査中。何で文があんな事言ったかは知らん。だって言ってくれないんだもん。解りようが無い。

「…どう？痛むところは無い？」
「はい、大丈夫です。ありがとうございます永琳さん」
「お礼なんていいわ。お陰で貴重なデータが取れたもの」

ん？どうやら終わったようだな。意外と早いな、後一時間位掛かるかと思ってた。

「終わったわ。もう入っても良いわよ」

では遠慮無く…なわけねぇだろオメェ！レディファーストだよ。まあ俺が入る前に文が先に入ったからなんだけどね。
何かここの幻想郷の文、何か他と違うな…これも幻想入り者が原因か？どんだけ影響及ぼしてんの俺ら？…まあそれはいいや。兎に角入りましょ。

部屋の中に入る。中では永琳と文が話をしていた。話してる内容は多分サクラについてだろうね。
当のサクラは……あ、居た。うわお…むっさくつろいどる。気の

抜けた顔してるし。

「サクラ大丈夫か？」
「あ、はい大丈夫ですよトシキさん。至って元気です！」
「いや～良かった！何とも無くて！」
「はい！これも皆さんのおかげです！」

ははははと楽しそうに会話している。
…あ、やべぇ。入る所無くなった（笑）タイミングしくった…チクショウメ。
あー…どうすっかな～……そうだ茶入れよう。能力で出したヤツじゃなくて、ちゃんと茶葉から作ったヤツ。よしそうすっか。

「あー俺お茶持って来るわ」
「あ、一緒に行きますよご主人様」

俺と鈴仙は部屋の外に出る。因みにお湯は沸かさない。既に魔法で暖めたのを使う。だってそうしないと時間掛かるんだよ。時間掛けてたら、三人とも帰っちゃうだろうが。
まあそんな訳で台所に行くとすっか～。

――ｓｉｄｅ　文――

「…魔力が上がった？」
「えぇ。前の受診の時よりも…ね」
「・・・」

またか。二週間前の時も同じ事を聞いたような気がする…その時は妖力だったか。どちらにせよ、着実に力を付けている事に変わり

は無い。
…でも今までの時はこんな事は無かった。精々、少しボーっとしている位だったのに…いきなり気を失うなんて……
これもサクラが言っていた『誰かの記憶』というやつが原因なのだろうか？サクラの力が上がる時は、いつも『誰かの記憶』を見たと言う。自分ではない『他人の記憶』。それがどうしてサクラに…？
サクラはその『記憶』の内容をよく覚えてないという。なんでも、見た記憶の全てにもやが掛かっていて、思い出そうとするとそのもやに邪魔されるらしい。…でも、一つだけ解っている事があった。それは『全ての記憶に人間が出ず、魔物しか写っていない』という事だ。
魔物というのは最近幻想入りした妖怪達の事だ。それらは既に幻想郷に居た妖怪達と全くコミュニケーションを取らず、逆に襲ってくる礼儀知らずの連中だ。私の里を襲った連中の中にも居た。弾幕ごっこも知らないあいつらと戦うのは面倒くさい。なにせ弾幕ごっこと違って、死ぬか生きるかのどちらかしか無いんだから。
…まあそれはいいとして……サクラが言うには「その記憶を見ると、何だか落ち着く」だそうだ。実際に見ていない私としてはどんな物だったのか位知りたかったが…聞く事が出来ない。お陰で私には打つ手なし。どうする事も出来ない。全くどうすりゃいいのよ……

「…ふふ」
「？　何か有りましたか？」
「ふふふ…いえ、まさか貴女がここまで真剣になるなんて思って無くてね。新聞と山の事意外で、そこまで真剣になる事なんて無かったんじゃない？」
…確かにそうだ。今までの私とは思えない程に真剣になっている。何で？

仲間の事であったとしてもそこまで深くは考えてなかった。だって仲間は妖怪。何か有ったとしても深く気にする事は無かった。…けど

どうしてここまで真剣になっている？どうしてこんなに頑張っている？どうしてそこまでサクラを気に掛ける？…恋とはまた違う感情。それが私の中に有る気がする。

…何ていうか……放っておけないのよね。何故かは知らないけど。

「貴女も彼女（サクラ）の能力に飲まれたのかもね」

「能力…？それって『人外を統治する程度の能力』の事ですか？私は飲まれてませんよ。私は能力を持っているのですよ？影響なんて無いと思うのですが…」

「甘いわね。彼女は人外を統治するのよ？なら知らず知らずの内に人外を惹きつけるカリスマの様な物を発している筈です。それに長く触れていれば、能力を持っていようと関係無いわ。…特に貴女なんかは彼女の能力を一番受けているでしょう。今こうしているのがその証拠」

「・・・」

…確かに私は影響を受けているのかもしれない。自分が思っている以上に……

サクラを妖怪の山で見つけてからというもの、いつもいつもサクラと一緒に居た。最初は只監視したり、助手として使ったりして何の感情も持ってなかった。

…けど、最初の記憶の再生（フラッシュバック）の時、私は何故かサクラを心配していた。未だに何故あんなに必死になっていたのか解らない。どうして永遠亭に連れて来たのかも解らない。気が付けばそうしていた…そ

う言うしか無い。
…これがサクラの能力の影響だとするならば、私はとんでもない奴を拾ってきてしまったのかもしれない。あの時サクラの妖力に気付いてなければ、私はいつも通りだったのかもしれない。…いや無いわね。私は天狗よ?その天狗が同類かもしれない妖怪を助けなかったとすれば、天狗の名に泥を塗っていた。私はそれを避ける為にも彼女を拾っていたでしょう。
…はぁ……結局変わらないじゃないの。

…そういえば。

「体の方に何か変化は有りましたか?」
「…そうね、しいて言うなら……」

永琳さんが言葉を言いかけた時、

「ちゃーす。緑茶持ってきたよ~」

蓮也が入ってきて、そして…

「神那女さんを知っていますか?」

サクラがトシキに質問した。

その時……私はその質問に驚きを隠せなかった。

――ｓｉｄｅ　サクラ――

私は今、永遠亭に居ます。私はここでいつも通りの検査を受けて、椅子に座ってふにゃあとしながら、トシキさんとお話をしています。文さんは永琳さんとお話中。蓮也さんは鈴仙さんとお茶を汲みに行きました。私はトシキさんとお話をしながら、文さんのお話が終わるのを待っています。

「…でさぁ、なぜか追いかけっこみたいな感じになってさ。もう大変だったぜ……あのウニョウニョがしつこくてしつこくて……」
「そんなに大変だったんですか？」
「あーもう大変大変。でもまあ俺からすりゃあ、あれ位どうってことない。能力使わなくても余裕だったぜ！」
「凄いですトシキさん！追いかけてた零奈さんも凄いです！今度取材しに行ってみたいです！」
「そうだな。あいつ意外とフレンドリーだから、快く受けてくれるかもな」
「わ～楽しみです♪」

お話の内容は、トシキさんが人間の里に行った時のことです。蓮也さんのことや、零奈さんという人のことや、お団子屋での出来事をお話してもらいました。とてもワクワクして、なにより文さんが喜びそうなことだったので面白かったです！やっぱり幻想郷ってすごいな～私の世界と違って、魔物さん（ここでは妖怪と言うらしいです）と人間が仲良くしているんですから。

…でも『あの事件』の時の魔物さん、何であんなに血気盛んだったのでしょうか？確かここの魔物さんは人間を襲うことはあっても、同じ魔物さん同士では戦うことはあまり無いと言っていた筈なのですが…どうして天狗の里を襲うなんてことを…？…分かりません。

本当ならお互い仲良く協力しなきゃならないのに、あんなことっ

て……何があったのでしょうか？お腹が空いていたという訳でもなさそうですし…どうしてなんでしょう…？

…どうしてかは分かりません。でも私は魔物さん同士で戦うのを見るのは嫌です。どっちが悪いとかそういう訳でもないのに戦うなんて間違っています。もっと仲良くすべきだと思うんです。必要の無い戦いなら、しない方が良いです。その方が皆さん幸せになります。

「…そーいやサクラ。今回はどんなのが見えたんだ？」

「あ、はい。今回は今までと違って鮮明だったんですよ！」

「え、本当か！？」

「はい！今までのもやが消えて、はっきりと見れたんです！」

今まで見続けてきた、魔物さんの姿が…とても鮮明に……

森。深く広がる木々。それらを差す光。楽しくお話をしている魔物さん達。そして…

湖の水面下に写った雄雄しい魔物さん。今まで見続けたのはこの方の記憶。

その方がゆっくりと歩き出し、それに連なり歩く魔物さん達。

違う種族の方たちであっても、この方と一緒に歩いている。

この方は魔物さんを従えるリーダーだったのでしょう。歩く音がたくましい。

そして……

そこで記憶が途切れました。

「…という感じです」
「…うーん……やっぱお前、そいつの血が入ったんじゃないか？お前の言う…魔物病だっけ？それの原因のさ」
「…そうなのでしょうか？」
「それ以外考えられねーと思うんだけど…」
「…うーん」

私にはよく分かりません。魔物病の原因がその方だとしても、魔物病は魔物さんから攻撃を受けてから一ヶ月以内に発症するのが普通でしたから、それは無いと思うのですが…少なくとも物心ついた頃に怪我を負わされた事なんてなかったですし、第一私は気が付けば魔物病を発症してましたし……どういう事なんでしょう？

「まあそれは追々分かんだろ。ゆっくり考えればいいさ」
「そうですね…」

…トシキさんは本当に良い人です。初めて会った時から、私を気にかけてくれて…そのおかげで助かっていることも多いです。まるで神那女さんのよう……

そういえば神那女さんどうしてるのでしょう…？あの時助けてもらってから、ずっと会えてなくて寂しいです……もし会えるのなら…もう一度…お礼がしたいです…

…そうだ。トシキさんに神那女さんのこと聞いてみよう。もしかしたら知っているかもしれませんし。

「…トシキさん。一つお聞きしてもよろしいですか？」
「ん？どうした、急に改まって」

「はい……実は私、ある人を探しているのですよ…」

「神那女さんを知っていますか？」

「神那女…？うーん…聞いた事がねぇな」

「…そうですか」

トシキさんは知らなかったですか……

やっぱり、あの人を見つけることはできないのでしょうか……

これから先も…ずっと…ずっと…

「サクラ。あんた今、神那女って言った？」

「文さん？…ええ言いましたが…それが何か…？」

文さんは驚きの表情をしている。…もしかして文さん……神那女さんを……？

「…何であんたが神那女を知っているのよ！？」

「ふえ！？あ、文さんどうしたんですか！」

「どうしたもこうしたもあるか！今、神奈女は何処に居るの！？教えなさい！」

文さんは私の肩を掴み、思いっきり揺らしてくる。

「お、おい何やってんだバカ天狗！病人を揺らすんじゃねぇ！」

トシキさんが止めに入る。

「おいばかやめろ！お前らこんなとこで喧嘩すんあ！やるならちょっと表出ろ！」

更に蓮也さんも止めに入る。文さんは、お二人に引き離され、地面に押さえられる。

文さん…まさか文さんも神那女さんに何か……？

「…全く何してんだよ……色々事情があるんだろうけど、いきなり掴みかかるのはよくないぜ？」

「ぜえー…ぜえー…て、天狗押さえんのは一苦労だぜチクショウメ。今のがマジ喧嘩じゃなくて良かったな？マジ喧嘩だったらお前死んでるぞ？」

「・・・」

文さんは、地面に顔を下げたまま何も言わない。多分、焦って動いた自分自身に後悔してるのかもしれません……大丈夫ですよ文さん。私は分かっていますから。

「なあ文？神那女ってヤツに何かあんのか？今のお前…異常だったぞ」

「…ごめん。ちょっと興奮してたわ……ごめん、サクラ」

「いいんですよ文さん。私は文さんの気持ちがよく分かりますから」

「…ていう事はあんたもあいつに……？」

「恩があります」

「…私は恩というより、文句ね。一言言ってやりたかった事があるのよ」

「そうなんですか…」

神那女さんの話は本当だったんだ。色んな世界を巡って、色んな人に会って、色んな触れ合いをしたって事が。

「…神那女って……確か鈴仙の…」

「敵です。絶対に打つべき敵」

「だったよな～。なー永琳？神那女ってどんな奴だったんだ？」

「…そうね……話しておきましょう。神那女について…」

――ｓｉｄｅ　零奈――

遠命神那女…遠命家最強の人間であり、最高の知能を持つ女。長い黒髪を靡かせ、黒と白のみで構成された袴を着、愛刀の『龍桜花（りゅうおうか）』を腰に差して歩く姿は、まさしく剣士――いや彼女の場合は剣豪と言うべきだろう。彼女は凄まじい剣筋と恐るべき集中力で、弾丸をも切り裂く居合いの達人だ。居合いだけでなく、剣道・薙刀・棒術・銃技術……あらゆる武器を使いこなす、武器のプロ。彼女と戦い、勝った者は、書物には記されていない。

彼女は異能なる力を持っていた。幻想郷風に表すと『武器の真の力を解放する程度の能力』と『世界を巡る程度の能力』、そして『力に抗う程度の能力』の三つだ。

『武器の真の力を解放する程度の能力』…これは、あらゆる武器に宿る「力」それを引き出し、思うが侭に扱う事が出来る能力らしい。書物には、刀の力を解放して炎を出した…と、書いてあった。

『世界を巡る程度の能力』…これは、世界と称される所ならば、

行く事が出来る能力らしい。書物には、この能力が原因で、人生が大きく狂いだした…と、書いてあった。

『力に抗う程度の能力』…これは、あらゆる事象に関わる力の影響を受けない能力らしい。これだけは、遠命家の女性ならば、全員扱える能力らしい……私には無いが。書物には、この能力が歴代の遠命家中、最も強かったせいで、年を取る運命の拘束力にさえ抗ってしまい、年を取らなくなってしまった…と書かれている。

彼女は大政奉還の数ヵ月後消息を絶ち、その一ヵ月後、何もかもが変わった彼女が帰ってきたそうだと言う。

私の読んだ書物は、当人――――神那女により書かれた物。最初は夢物語かと思ったが、自分に宿る触手の事を考えて、有り得るかもしれない、そんな事を考えた。

何時かの日か、神那女という女性に会ってみたい。そう考えてはいたが……

まさかこんな形で会う事になるなんてね。

「…まあこんな感じだ」

「ＯＫ分かったわ。ようは予測される脅威から、幻想郷を護るのを手伝って欲しいって事でしょ？」

「そういう事だ。頼めるか？」

「いいわ。やってあげましょう。…もしかしたらヤりがいのある子が見つかるかもしれないしね♪」

「ククク…中々の変態ぶりだな」

「ふふふ♪もっと褒めてくれても良いのよ？」

しかしねえ…この人、身長高いわね～もしかしたら１８０ｃｍ有

るんじゃないかしら？外国人並ね。
…うーむ、何処から見ても、やっぱり美しいわ……プロポーション良すぎ。胸は……私の変態サーチから判断して、Ｅね（因みに私はＤ）。
…完璧ね。流石、歴代最強の女性ね。戦いの腕だけじゃなく、容姿も良い。

「…さてと。私はそろそろ行く」
「あら？もう行っちゃうの？もう少し話しましょうよ。ついでにそのままベッドｉｎしない？」
「ククク…嬉しい誘いだが、生憎、私も暇じゃないんだ。またの機会にでもお願いしようか」
「あらら…まあいいわ。またの機会ね。今度会えたら、直ぐにしましょう」
「ククク…いいだろう。何時でも相手になってやる」
「ふふふ…戦いで勝てなかったから、せめてベッドの上では勝ってやるわ」
「ククク…そう簡単にイクかな…？」

「ふふふふふ…」「ククククク…」

顔を合わせ、笑いあう。何だか相性が良いわ。同じ遠命家の人間だからかな？
…ふふふ♪神那女と性なる愛を深めましょう♪ふふふ♪ふふふふふ♪

過ぎ去っていく神那女を見送り、私も人里に帰る事にした。慧音や妹紅や子猫ちゃん達を、これ以上持たせたら悪いものね。

ふふふ♪じゃあ、行きましょう。

――ｓｉｄｅ　トシキ――

「…という訳で、私よりも年上。経験も知能も実力も、彼女の方が上よ」
「…何だよそれ……強すぎるじゃねえか！！」
「どう考えてもチートです」「本当にありがとうございました」
「…まさか、あいつがこんなに幻想郷住人と、深い関係を持っていたなんて…」
「す、凄いです神那女さん！本当に凄いです！」
「…つーか永琳。何でお前そいつの嫁やってたんだよ…全く羨ｍけしからんな！」
「おい今うらやましいって言おうとしたろ。絶対言おうとしたろ」
「何の事かな？」
「…はぁ」

色々とありすぎて、頭が吹っ飛ぶかと思ったぜ…つーか理解出来なかった。
…えーと、ようは神那女ってのは強くて、頭良くて、長生きしていて、色んな世界に行ったりしていて、永琳はそいつの彼女だと。
…さっぱり分かんね。

「…ていうか、零奈ってその…神那女の子孫なんじゃね？苗字一緒だし」↑蓮也
「どうかしらね…苗字が一緒なだけで、赤の他人って事も有り得な

くもないわよ」　↑永琳
「うーん…どうなんでしょう？」↑サクラ
「まあそれは本人に会えば解るでしょ。…ところで、永琳さんは神那女の場所をご存知で？」↑文
「いえ、知らないわ。彼女とは、数百年前から会ってないもの」↑永琳
「それは月で？それとも地上で？」↑文
「地上ね」↑永琳
「…となると、会える確立は低くはないか……つーか鈴仙落ち着け、対戦車ライフル出すな。怖いから」↑蓮也
「あ…す、すいません…」↑鈴仙

…あれ。オレ話に入ってねぇ。ヤベェ！このままだと空気になる！…と、とりあえず、話題を変えよう。

「あー…うん。神那女って人の事は、会えた時にでもしようぜ。もしかしたら、会えるかもしれないしさ」
「何を根拠にズンドゴドーン！」
「ず、ずん？」
「そんなことって言ってるわよ」
「あ、そうなの……いや、まあ、幻想郷だし、会えるんじゃないかな～と」

…流石に無理があるかな……

「…確かにな。幻想郷だし、有り得なくも無いか」
「あんた、偶にはちゃんとした意見を言うのね」
「あややや…そういえばそうでした。幻想郷なら有り得ますね」
「そうなんですか？」
「…彼女は、八雲紫に次いで幻想郷を愛している。…可能性はある

わね」

全員納得したぞおい！え、なに？そんな感じでいいのかよ！？

「んじゃあ。神那女の事は、一旦置いとっか～……あ、そうだ。俺、サクラのフルネームと能力知らねーや。おせーてちょ」

…切り替え早いな。まあオレの方が早いが。

「あ、そうでしたね。私は『サクラ・オールドキング』です。能力は『人外を統治する程度の能力』と『技を盗む程度の能力』です♪」

「…うわーお。人外統治とか、チート臭しかしないんだけど…技を盗むのは、某有頂天動画で見た事有るから、大体分かるけど…人外をｔ（ｒｙはどんな能力なんだ？」

「はい。具体的には、人外さん達と仲良くなれるんです！『お願い』も聞いてくれるんです！」

「…つー事は、さっきのはその能力によるものだと？」

「はい！そうです！」

「ふーん…」

蓮也は少し考え込む。数秒考えた後、蓮也はオレと零奈にも向けた道具を向ける。

「？　何ですか？それ？」

「気にスンナ」

「…うし終わり。さーて予想通りか…？」

蓮也は、団子屋の時と同じ動作で、道具を覗き込む。そして、あーやっぱり、と言う声を漏らし、顔を上げ、サクラを見た。

「…お前、半分魔物か？」
「え！どうしてそれを！？」
「こいつのお陰さ……それより睨んだ通りだぜ。魔力：大　妖力が測定不能だ。まるで魔王だな」
「魔王？」
「あぁそうだ。――人外を統治するのは魔王。そして魔王は、統治する為に力を要する。この結果を見れば、魔王と同じだと捉えられる。――お前に宿る魂が、そうなの　かもな」
「はあ？宿ってるって…何がよ」
「検査結果。それによると、サクラのステートが「憑依」となっていた。だとすると、サクラの能力も、力も、魔物病ってのも――――サクラが見た『誰かの記憶』も、何もかも説明がつく」
…おい。今、『誰かの記憶』って言ったか？……って事はまさか…！
「悪いな。話を聞かせてもらった」
「…悪趣味ね」
「ゴシップ記者のお前が言うな」
…何なんだよコイツ……零奈といい、サクラといい、何なんだよ一体……
「…ありがとうございます。蓮也さん。少し…分かってきた気がします」
「おう。そうかい……ところで、サクラ？あんたって魔物化とかって出来るのか？」
「はい、出来ます。…でも」

おいおい、待て！今は駄目だ！今やったら、体を壊しちまう！

「あーいいっていいって。体に負担掛かるんでしょ？ならいいよ」

「え……何でそれを？」

「……適当に言っただけだったんだけど」

勘で当てたぞこいつ。っていうか何でさっきから心の中だけで話そうとしてんだ。バカかオレは。

「…まあ、ともかく。取り敢えず、貴方達は帰りなさい。もう遅いから」

「あややや…もうこんな時間ですか。それじゃあ帰るとしますか」

「そうですね。永琳さん、蓮也さん、鈴仙さん。今日はありがとうございました」

「ういうい。お大事にな～」

「はい。それでは」

「あー、じゃーな」

オレと文とサクラは永遠亭を後にした。

そして帰り道。そこでオレ達は――――――神那女に会った。

第二十二話　魔物娘と剣豪～永遠亭と湖にて～（後書き）

どうも作者です。モチベが上がらず、投稿が遅くなりました。
申し訳ないｏｒｚ　しかも駄文。どういうことなの…

今回は、サクラと神那女についてをメインに書きました。何故かまとめきれずに、長くなっちゃいましたけど。
ほんと、字数を一定させたいぜ…

今回の補足

『魔物病』とは、この小説における、オリジナル世界の設定です。
ムーンライトラビリンスとバイオハザードを知っている方なら、直ぐに想像出来ると思います。
知らない方に言いますと、ようは魔物から攻撃を食らったら魔物になります。以上。　…ほんとにこれしか言えませんｏｒｚ

神那女の刀は、今はそこまで重要じゃないんで、割合。

神那女はレズです。だから紫や永琳を嫁にしています。
彼女は、能力補正のおかげで、どれだけ嫁を増やしても妬まれません。羨ましいぜ…

今回はちょっと気力が出ないんで、補足は短めです。
疑問に思う点は、感想として書いてください。

次回はトシキ達が神那女と接触します。そしてあの人が何と…！

それではまた。

第二十三話　月夜の夜は・・・（前書き）

今回は比較的シリアスです。
そして予め謝っておきます。
鈴仙ファンの皆様。お許しください！

第二十三話　月夜の夜は・・・

――ｓｉｄｅ　蓮也――

「あー…疲れた……」

自室で一人、ボソッと呟く。今日は本当に疲れた…まさか最初の幻想郷巡りが、こんなに疲れるものになるなんてな……どうしてこうなった。

俺はあの後、夕食の支度をする事になった。疲れてはいたが、当番はちゃんと守るべきものなので、真面目に飯を作った。かなり上手くいった。良かった良かった……どうでもいいな。

今日はとにかく疲れた。ニコ動を見る気力も無い。いやマジで疲れた。ほんと疲れた。もう何も考えたくねえ……よし寝よう。

今日、里で買った寝巻きに着替える。俺の世界にあった物と似たようなのがあったので、それを買った。因みに色は紫。理由は…鈴仙が選んでくれたからだ。実際、気に入ってるし。

パパっと着替え、布団の中に潜り込む。今日はぐっすり眠れそうだ……

トントン。

…誰だ?こんな時間…て言っても、まだ九時位だけどな。

「どちらさん？」
「鈴仙です。入っても宜しいでしょうか？」
うわお鈴仙か。何の用だろうね？
「いいぞ。入っていきんしゃ～い」
「ありがとうございます」
ガラっと障子を開け、鈴仙登場。まだ寝巻きに着替えてなかったのか、いつものブレザー姿だ。
「どったん鈴仙？俺に何か用か？」
「あ、はい。それはですね…」
鈴仙は言葉を出そうとしたところで、言葉を濁す。その時見せた顔は、辛そうな顔と恥かしそうな顔だった。
「何だよ。そんな顔して……相談があるなら、幾らでも受けるけど？」
「あ、いや、そうじゃなくてですね…」
まただ。またそれか。…こういう場合は、待ってるだけじゃ何も進展しない。こちらから、声を掛けてかなきゃな。
「…もしかして、神那女の事か？」
「・・・」
「そうなんだな」
「…はい」
当たりだ。全く…まだ引きずってんのかよ。…やれやれ。

「…あの時言わなかった事がある」
「…何ですか？」
「…そいつにお前のプライドを傷つけられたのかもしれない。そして、そいつにどう頑張っても勝てなかったかもしれない。そして…そいつのせいで、月に自分の居場所がなかったかもしれない」
「・・・」
「だから何だ？今のお前はそんな事を気にする必要があるのか？無いだろ？なら気にしなくていい。余計に考え込みすぎると、心が病んじまうぞ」
「・・・」
「そんなお前は見たくない。俺が見たいのは、笑っているお前だ。俺は恨みがましい事でごちゃごちゃするのが嫌いなんだ――――あの輝夜と妹紅でさえ、仲良くなった。それがどれだけ凄いか分かるか？」
「・・・」
「もう過去に囚われる事は無くなった――――まぁ、完全に消し去る事は出来ないだろうけどよ。…でも仲良くなった。逆に過去を気にする必要が無い位に、今の生活を楽しんでる。それも、恋仲にまで発展しそうな勢いで…」
「・・・」
「お前だって、今の生活が楽しい筈だ……まぁ……永琳の薬の実験台にされたり、てゐの落とし穴に落ちたりする事もあったろうさ。――――でもお前は今の生活を楽しんでいる。そうじゃないか？」
「…それは……」
「そうなんだろ？だったらもう気にすんな。お前は今が楽しい。それで充分じゃないか。…過去の恨みを気にする必要なんて無い」
「…ご主人様」
「それでも、忘れられないっていうなら、それでもいい。――――だけど……せめて、せめて俺の前だけは……笑っていてくれ……」

「・・・」

暫しの沈黙。時計の針が動く音だけが、周りに響く。

…俺は何も言わなかった。鈴仙が話すのを待っているからだ。

俺は鈴仙の答えが知りたい。今のこいつがどう思っているのか…

…その答えを……

俺はじっと鈴仙を見つめる。威圧せず、軟らかい目で。

「…ご主人様」

鈴仙が口を開く。ついに出るか…

「…ありがとうございます。――――お陰で、伝えたい事が言える気がします」

「伝えたい事？」

はいっと言って、鈴仙は俺を見る。その瞳は、とても力強く、その顔は、迷いを断ち切り、決心をしたという顔だった。

「…私は……私はご主人様の事が好きです。私に掛けてくれる言葉も、仕草も、何もかもが好きなんです」

「・・・」

「優しすぎるんです……ご主人様は……だけど…それがとても嬉しかった」

「・・・」

「会って数日しか経ってない…しかもただの妖怪に対して、そんな言葉を掛けるなんて…」

「…まぁ、お前だったからな」

鈴仙は下を向く。そして、何かを呟く。

「…から…しは…」
「…ん？」
「…だから私は…！」

ふいにこちらを見る鈴仙。その顔はかなり赤かった。

「…ご主人様」
「何だ？」
「……ちょっと…下を向いてもらってもよろしいですか…？」
「？　あぁいいが…」

俺は言われるが儘に下を向く。何だ一体…？

「…ご主人様……失礼します！」
「え？ってちょ！むぐ！」

鈴仙は、俺の首に腕を巻き……そして……

キスをした。

それも、飛び切り濃厚な、舌を入れる方の。
突然の事に驚いたが、俺は拒まなかった。逆に鈴仙の体を抱き、舌を入れ返したくらいだ。
コレ何てエロゲ？こんな事ってあって良いのかね？まぁ俺は一向に構わんが。

しばらくして、お互い口を離す。

それにしても…これってどう考えても……

「…ご主人様……私…」
「…まさかとは思うが……まさかとは思うが…！」
「…ご主人様！」

思いっきり押され、布団に倒れこむ。…どう考えてもエロゲのパターンです。本当に（ｒｙ

「…ご主人様……私…初めてなので…優しくして下さいね…」
「待て！落ち着け！冷静になれ！つーか何!?処女?処女なの?なら尚更もちつけ！！」
「…ご主人様！！」
「ちょ！おま！アッー！！！！」

月夜の夜。永遠亭の一室から喘ぎ声が響き渡った。

――午後八時程　ｓｉｄｅ　トシキ――

「ふはは！！やるではないか！もっと打って来い！！」
「何なんだよお前！何でそんなテンション高いんだよ！！」
「ククククク…！それは教えてやれんな！さあ、御託はいい！もっと来い！！」
「くそっ！言われなくてもやってやるよ！！」

オレは二本の剣を両手に持ち、一気に接近する。右は斬り上げ、左は斬り払いを中心に、連撃を叩き込む。それをアイツ――遠命神那女は、かわしたり、刀で払ったりしている。オレの連撃を簡単に払うなんて…何なんだよコイツは！本当に人間か！？速さの制御も出来ねぇし！ふざけんな！！

カキンッ！と刃と刃が重なり合う。二対一…剣の本数で言えばこっちの方が有利だ……なのに…

神那女はそれらを、息をするかの如く捌いていく。オレは一旦距離を置き、能力で走るスピードと剣を振るスピードを上げる。そしてまた一気に接近する。今度はさっきよりも２．６秒速く接近出来た。その早まった時間を利用し、懐に飛び込む。そして、剣を逆手に持ち替え、胴体に二十の連撃を叩き込む。だがそれも捌かれ、神那女は一閃を放つ。それを回避しきれず、剣でガードするが、あまりの衝撃に剣が吹き飛ばされる。

「剣が無くなってしまったな！さあどうする！」
「いちいちウルセェんだよテメェは！」

迫る神那女を蹴り飛ばし、素早く剣を回収する。蹴り飛ばした神那女は……全然ダメージ無しって感じだなチクショウ！…ならも

う一度だ！

一時間前、オレ達は竹林の外で神那女に出会った。サクラや文が会いたがっていたヤツ。オレの第一印象は、オレより背ぇでけぇなって事だった。

サクラは再会のあまり、涙を流し、文は直ぐに神那女に文句を言い出した。確か、よくも面倒を擦り付けたわね～とか、そんな事言ってたと思う。あんま詳しく聞いてねーから分かんねーんだよ。だって難しそうな内容ぽかったし。

で、オレを蚊帳の外にペチャクチャ話してたんだけど、何か突然神那女がこっち来て、ちょっと戦えっていきなり言い出してさ、何でだよって聞いたら何となくって返されるし、訳分からん。

まあそんな訳で今に至る訳だ。

それにしても本当につえぇ…話で聞いた以上じゃねコレ？…オレ勝てんのか…？

「ふはははは！勝敗の安否をしている暇があったら、剣を振るうんだな！」

「な！何でバレた！？」

「顔にくっきりと出てたのさ！解り易い奴だなお前は！」

え、そんなに分かりやすかったのオレ！？そ、そうか！だからいつもポーカーやってて勝てなかったのか！ようやく理解した！って今はどうでもいいわ！！

とにかく剣を打ち込む。だが、あっちの方が腕力も技術も上。このままだとマジで押し負ける。どうにかしないとならねーけど……でもどうすりゃいいの？正直何も思いつかねー……クソッ！せめて強化魔法使えりゃいいんだがな…オレにそんな技術は無い。ていうか魔法が使えないんだよ！チクショウ！技術以前の問題だなオイ！

「ははははは！その程度か！？足りんぞ！もっと私を満足させろ！！」

「無茶言うな！」

チクショー…いっそ助けでも呼ぶか？ちょうどそこに二人居るし……

…でも流石にそれは卑怯だよな。一対一の戦いに助けを呼んだら、ただの負け犬じゃねーか！それは嫌だ！

…クソッ！何かなかったっけオレ！？何か…何か……

……あ、そうだ。

確か団子屋で、蓮也が神力がどうとか言ってたな…その神力を使えば、少しかマシになる筈…！えーととりあえず、力一杯念じる！

力を込める。とにかく込める。込める。込める。込める……！

すると剣に光が迸る。それは薄く、緑色をした光が。何だか知らねーが来たぜ！とてつもないのがな！

「ほう……神力を纏わせたか…初めて使った割には良く出来てるじゃないか！」

「ありがとよ！そしてぶっ倒れろ！」

距離を一気に離し、極限までスピードを高める。これで終わらせてやる！

「うおらー！倒れろー！」

目にも止まらぬ速さで神那女に突っ込む。マッハと言っても良いほどの速さ。避けれるものなら避けて見やがれ！

「…ふむ。確かに速いな。感動的だ」

オレは神那女のすぐ目の前まで接近する。

「だが無意味だ」

神那女は刀を鞘に納め、引き抜いた。刃が放たれたと思ったら、いつの間にか、オレの体は宙に浮いていた。

何が起きたか全く分からなかった。オレは神那女に接近していたと思ったら、次の瞬間宙に浮いてたんだからな。

それでも一つだけ分かった。それは……

体が痛いって事だ。

オレは地面に落下し、悶える。かなりの痛みに声も出なかった。

「こんな処だな」

神那女は刀から手を離し、こちらに近づいてくる。

「ふーむ。流石にやりすぎたか？まあ直ぐに治すから別に良いのだが」

そう言うと、神那女はどこからともなく、別の刀を取り出した。

そして、それを引き抜きこちらに構えた。

「動くなよ」

その声と共に、剣先から放たれる光。その光がオレに当たり、光はオレの体を覆っていく。そして数秒程後、その光は消えた。

何なんだ、と思った矢先、神那女から動いてみろ、と言われる。

痛みがあるから動きたくないんだけどな…とか思いながらも体を動かしてみると、驚く事に痛みを感じなかった。どうやらあの光はヒーリング効果のあるものだったらしいな。おかげで体が軽い。

「はあー…何だったんだよほんと」

「大丈夫ですかトシキさん？」

サクラが心配してくれるが、そこまで心配している様には見えないな。何で？

「やっぱり大丈夫ですね。やっぱり凄いです神那女さん！」

「ククク…もっと褒めてくれても良いんだぞ？」

…なるほどね。信用してたってわけね。納得。

「まぁやっぱりこんなもんよね…相変わらず甘くないアンタ？」

「甘いとは心外だな。私は何時でも真剣にやっているが？」
「…真剣を使っているのに流血試合にならない事が甘いって、いつも言ってるでしょ。何で毎回、峰打ちで勝とうとするのよ」
「だからちゃんと刃で斬っていると、何度言えば解るのだ！私は峰で戦った事など一度も無い！」
「はいはい、そういう事にしといてあげるわよ。――どうせ、アンタには人を殺す勇気なんて無いでしょうしね」
「それは嫌味で言っているのだな？」
「当たり前でしょ。昔っからアンタはヘタレだったからね」
「おや…じゃあそのヘタレに一度も勝てていないお前は何だ？負け犬か？」
「ッ！アンタね…！」

…何だか知らんが、いやーな雰囲気になってきたぞ……止めるべきか？

「まあまあ、お二方共落ち着いて下さい。――神那女さん。私達に伝えるべき事があったのですね。だから私達の前に……」
「…あぁそうだ。正式にはお前とトシキにだけどな」
「そういや…何でオレの名前知ってんだよ。オレはお前にあったこと無いぞ？」
「ククク…それはだな……」

「私が教えたからよ」

声と共に上から女が降りてくる。妙にハデハデな衣装を着た二十歳くらいの女性だ。…誰？

「あ、紫さん。こんばんは」
「こんばんはサクラ。体調は宜しいかしら？」

「はい。おかげさまで……それにしても、覗いてたのですね」
「まあね。神那女に幻想入り者の状況を伝えなきゃならなかったからね」
「何で紫さんが、神那女さんにそんなことを伝えてたのですか？」
「頼まれたからやってたのよ――だって神那女は私の愛人だし」
「へーそうなんですか」

…え？ちょっと待て。今、愛人って言ったか？愛人って言ったのか？

「どうしたのよトシキ……あぁ、神那女は紫とも愛人なのよ。…全く、どんだけ愛人蔓延りゃせりゃ気が済むのよね」
「いやそこじゃなくて――女性同士で…恋人ってとこだよ！」
「今更そこ？…アンタ永遠亭で何を聞いてきたのよ」
「え……えっと…神那女は長く生きてて、強くて、頭が良くて、それから……えーと…」
「…話くらい聞きなさいよこの？」
「は？？ってどういう意味？」
「…あんたの馬鹿さ加減には、ほんと疲れさせられるわ…」
「何だよそれ！」
「言葉通りの意味よ」

…何なんだよ全く……意味分かんねーよ…

「コントはその辺にしておけ。それより、重大な事を伝える」
「コントじゃねーよ！……で？重大な事って？」
「それはだな……」

剣豪＋少女（？）説明中・・・

「…分かった。幻想郷を護り抜けばいいんだな？」
「あぁそうだ。やってくれるな？」
「もちろんだ！守矢を踏み潰そう輩が来るってんなら、全て瞬殺してやらー！」

そうだ。守矢の神様達から受けた恩に報いるためにも、絶対に護り通す。それがオレの、恩返しだ！

「ククク…良い威勢だ。…サクラはどうだ？」
「…やります。私を助けてくれた方々が殺されるなんて絶対嫌です！」
「…そうか。そう言ってくれると、此方としても助かる」

サクラもやるのか…だったら尚更頑張んなくちゃな。絶対に殺させねえ。

「はあ…アンタ一人でもやれるんじゃないの？アンタは幻想郷で最強なのよ。出来ない訳が無いじゃない」

おいコラ馬鹿天狗！余計な事言うな！空気読めよお前！

「それが出来るのならば、こうやって頼みに来んわ」
「…まあそうよね」

…ははは。馬鹿な事聞いたらしいな。発言に気をつけろよお前。

「…さて。私はそろそろ行く」
「もうですか？もう少しお話がしたかったのですが…」

「ククク…此処（幻想郷）に居る限り、何時でも話せるさ。――――さて、それでは私は行く事にする。行くぞ紫」
「えぇ。――――それじゃあ皆さんさよ～なら～」

気の抜けた言葉と共に、妙な隙間が出現し、その中に神那女と紫は入っていく。そして隙間は消えた。

…はあ……何か疲れた。さっさと帰ろう。

「んじゃあオレらも帰るか……ってあれ？」

辺りにはサクラと文の姿が無い。一体どこ行った？

「トシキさん！上ですよ！上！」
「え？」

上を見上げると、そこには大きな翼を生やしたサクラと、同じく羽を生やした文が居た。

…ていうかサクラ、羽生やして大丈夫なのか！？

「大丈夫ですよ！羽だけなら問題無いです！」
「そ、そうか……えーと、先帰んの？」
「はい！写真の現像をしなければならないので！それでは！」

サクラと文は、翼を羽ばたかせ、妖怪の山まで飛んで行く。相変わらず様になってるよな…飛んでる姿がなかなか良い。

…でもオレ、置いてかれたよね？はぁー…何だかな～……

…まあ良いや。パパっと帰ろう。早苗の飯が待ってるんだ。すぐ

に帰らねーとな！

妖怪の山方面まで、一気に走り出す。さっさと帰ろう。あー腹減った。

第二十三話　月夜の夜は・・・（後書き）

どうも作者です。そろそろ今年も終わりですね…
さて今回はシリアス＋戦闘といった感じになりました。
まあ細かい事は「今回の補足」にて

今回の補足

鈴仙は蓮也君が美味しく頂きました。羨ましいぜ…
蓮也が言っていた「あの時」ってのは、もちろん「あの事件」です。
とりあえず「あの事件」は、第二章で書く予定なので、気長に待ってて下さい。

トシキ君はかなり速いです。多分クーガーの兄貴のラディカ（ｒｙやグラハムさんのトランザム、レイズナーのＶ－ＭＡＸより速いという事になってます。そう考えると速いなほんと…

神那女と文の関係は、また後ほど語ります。

こんな感じですね。質問・意見・感想は随時募集中なので、気軽に書いていって下さいね。

多分次回で第一章は終わると思います。　ではまた。

第二十四話　それぞれの思い（前書き）

今年最後の投稿となります。
なのに駄文なのは許してね！
またちょっとHな表現があるけど大目にみてね！

第二十四話　それぞれの思い

――ｓｉｄｅ　蓮也――

淫らに乱れる月の兎・鈴仙。その姿はあまりにも可愛すぎて、エロ過ぎて、もう理性吹っ飛んじゃって、その姿をもっと見たくて、俺は更にキスをする。それは甘くて、でもほろ苦くて、癖になりそうで……もう遠慮なんてしなかった。

「鈴仙――好きだ」

「私もです――ご主人様」

二人の吐息が、夜を溶かしていく。甘く、甘く、深く、深く……

「って事があったのさ。いやー夢じゃないんだね」

「夢じゃないさ――お前達は、確かに愛を誓った。ククク…おめ

でとうと言っておくべきか」
「うん。ありがとう――――神那女」
「ははは！ようやく呼び捨ててくれたな？全く、遠慮する必要など何処にも無いのにな！」
「いやー…だってねぇ。目上だし、俺より背ぇ高いし、何より強者だし、敬っとかないと不味いっしょ？」
「ははははは！世の中を渡るルールを良く分かってるではないか！――――だが此処は幻想郷。その必要はあまり無い。遠慮していては、楽しめんぞ？」
「まぁそうだけどさ。最低限の礼儀と常識は残しとかないとね。幻想郷とは言え、それが出来なきゃ馬鹿野郎としか見られないしな」
「ククク…よいよい。その心がけに私は敬意を表しよう！」
「フ○ゴですね。分かります」
「Ｅｘａｃｔｌｙ（その通りだ）」
「ダー○ー弟ですね。分かります」
「ククククク…ネタが通じるのは良いものだな…」
「うん。それ凄く分かる」

今現在、俺は夢の中に居ます。嘘じゃないぜ？ほんとだぜ？だって目の前に居る――――遠命神那女に夢だってはっきり言われたんだもん。…え？そんなんで信じるのかって？お前は此処を何処だと思ってるんだ？幻想郷だぞ？某東方ＳＳでも、ゆかりんが主人公の夢の中に入ってたんだぞ？この幻想郷でも起きるに決まっているだろ！↑何の脈略もないとこが入っている。
で、何で神那女が俺の夢の中に入り込んできているかと言いますと……単純に用件を伝えるのが目的だったんよ。あまりの事実に、夢の中なのにすっ転んだよほんと。
因みに用件ってのは『かくかくしかじか』なんだよね。――――ん？分からないって？気にスンナ。多分予想つくと思うから。

…それにしてもこの人には驚かされたな……正にチートを絵に描いた様な人なんだもん。正直泣いた。俺はまだまだチートじゃないな……俺はガ○ダムにはなれないのか……ガン○ムになるっていったらあの人だよね。ばあぁくねえぇつ！ゴッド！フィンガー！！だよね。そしてヒィィト・エンド！だよね。それか、超級！覇王！電影だぁああん！！だよね。

…おっと話がズレた。神那女の話だったな。――何処が凄いかと言えば、「かくかくしかじか」「これこれうまうま」で話が分かっちゃうって事だね。…まぁ多分俺とかゆかりんとかさとりんとかにしか通じないと思うけどね。

後、凄い事は…何とこの人、肉体を持ったまま夢の中に来ちゃったって事ですよ！とんでもないね！でもやれちゃうんだね！仕方ないね（兄貴ボイスで）。

神那女曰く、『世界を巡る程度の能力』に掛かれば、どんな所にも行ける。故に夢にも行ける、だそうです。凄いね。世界巡れるなんて、とんでもないね。俺も他のアニメや漫画、ラノベやゲームの世界に行きたいお…そして原作キャラと戯れたいお……

あ、でもホラー系とかグロ系は勘弁な。

「…さて……さっきの話の事だが、協力してくれるな？」

「ｏｋ任せろ。夢にまで見た俺の桃源郷だ。絶対に護ってやるぜ」

「ははは！桃源郷か！嬉しい事を言ってくれる！」

神那女は高笑いをしている。何かテンション高いよねこの人。この状態から更に、スーパーハイテンションになったらどうなるんだろうな…攻撃した際のダメージが上がるのかな？

…まぁどうでもいいか。

「それでは私は帰るとしよう♪」

…そういや妙にご機嫌だが、何かあったの？

「これから紫と大人の時間なのさ。久しぶりだから、思わず昂っいるのだよ」

「あぁなるほどね」

…ゆかりんと肉体関係とは羨ましいな……まぁ俺には鈴仙が居るから別に良いが。

…ん？何で神那女がゆかりんと体関係を持っている事にツッコまないかって？簡単な話。もう本人から聞いてたから。

いやー最初に聞かされた時はマジで驚いたわ。突然、ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人が襲ってきた時位驚いたわ。うん。

まぁ、でも、幻想郷故致し方無し。その位想定の範囲内ですよ。

逆に百合展開にｗｋｔｋだよ！百合は良いよね！俺も女だったら、百合プレイしたかった…

「これ以上紫を待たせられんので、お暇するぞ」

「ういうい。それじゃ」

…神那女は帰っていきました。となると、夢も終わりか。ここからは本格的な睡眠タイムだぜ。ゆっくりやすんでいってね！！ってゆっくりが居たら言ってたろうな～……まぁいいか。

それにしても……幻想郷防衛か……厄介な事に巻き込まれた感。果たしてこれから先どうなる事やら……取り敢えず、それまでは

なるべく平和に過ごしたいぜ。俺は基本、平和主義なんＤＡ。だから出来る事ならあまり面倒は起きないで欲しいＺＥ。

…まぁ多分無理だろうけど。はぁ～…分かっちゃう自分が憎いぜ……

もういい寝よう。夢の中だけど寝よう。明日もあるんだ。レム睡眠じゃ疲れは取れないからな！

それじゃあお休み。明日は平和でありますように……

――ｓｉｄｅ　零奈――

「さてっと…こんなものかな？」

トントンと書類を纏め、改めて確認する。うんＯＫ、良い感じに仕上がってるわね。このテスト用紙。やっつけにしては良い出来だと思うわ。

あの後、妹紅と慧音達の元に戻った後、私はテスト作りに追われる事になった。白紙から作るのはかなりしんどかったけど…流石私、見事な出来栄えね。即席とは思えない仕上がり様。

さーてと…それじゃあ慧音の所にでも行きますか。

私は立ち上がり、部屋を出ようとする。だけどそこで、トントン

と障子を叩く音がする。どうやら慧音が直接来てくれたようね。もう…我慢出来なくて来ちゃったの？可愛い子ね…♪

「零奈ー？出来たかー？」

「出来たわよ～。さぁ入って入って♪」

がらっと障子を開けて、慧音登場。いやんもう♪相変わらず可愛い♪

「取り敢えずコレね。ざっと見て頂戴」

そう言って慧音にテスト用紙を渡す。慧音は用紙を目に通し、凄いなと言葉を零す。

「ほんとに即席か？その割にはかなり良い出来なんだが…？」

「ふふふ♪私の手に掛かれば、テストなんてあっという間よ」

「…うん、うん、良い出来だ。よし、じゃあ明日のテストはこれで問題ないな。――それじゃあ私は寝るから。お休み」

そう言って慧音は出て行こうとする。――だけど、それはいけないわね。

私は慧音を抱き寄せ、両手でしっかりと抱きしめる。

「れ、零奈？」

「――まさか私の部屋に来て、何もせずに戻れると思っているの？」

「なっ、ま、まさか…」

「これからは性なる夜の時間。そして愛を確かめ合う時間よ。――さあ慧音。愛を確かめましょう……」

「ま、待て零奈！止めるんだ！」

慧音は私の腕を振り解こうと、暴れる。――しかし、それは明らかに弱い。これはつまり……

「…慧音、ほんとは嬉しいんでしょ？」

「ばっ！そ、そんな訳ないだろ！？」

「ほんとに嫌なら、もっと暴れるんじゃな～い？あまりに弱すぎよ？」

「そ、それはお前の腕力が強いから……」

「私は全然締めてないわよ？むしろ慧音なら余裕で抜け出せる程」

「なっ！あ、いや！だから…！」

…ほんと、可愛いわ。会った時から目を付けてたけど、やっぱり良いわ。良すぎて、今にも襲っちゃいそう♪

…貴女は素直に行けない娘なのね。なら私は……無理やり貴女を襲うわ。

私は慧音を布団に押し倒し、じっと慧音を見る。

「なっ、何をするんだ！？」

「…どうやら貴女は無理矢理の方が良いようね。――だったら無理矢理して上げる」

「んな！や、やめ…んむ！」

拒もうとする慧音の口を、キスで塞ぐ。甘く、深く、とろけそうなキスを。

私はその時、考えていた。

この先の事や、己の事を……

――私は弱い。まだまだ弱い。もっと強くなりたい。私のハーレムを作った時、それを絶対に守れる位の強さが……

幻想郷（ここ）でなら、それだけの力を得られるかもしれない。誰にも負けない…そんな力を。

その力を得る為にも、もっと努力しよう。もっと技を身に着けよう。

もっと戦おう。

そして――仲間を作ろう。私と共に歩んでくれる仲間を……

それは簡単には手に入らないかもしれない…でも、私はその全てを得るまで戦い抜こうと思う。

そして護り抜こうと思う。たとえ血に濡れる事が有ろうとも……

戦いましょう。この…美しき幻想が飛び交う世界で……

…ふふ。頑張りましょう……明日のハーレムの為に！！

…ふふふ♪それじゃあまずは、目の前の可愛い娘を食べちゃいましょう♪

今夜も、楽しい夜になりそうだわ♪

――ｓｉｄｅ　ジェイル――

「…４９９７……４９９８……４９９９……５０００！」

ふう…終わりだ。これで今日のメニューは終了だな。…うむ。良い感じの疲労だ。これで夜もぐっすりと眠れるだろう。

紫と別れた後、己（おれ）は妖精達の訓練を終わらせ、粗方の日課を済ませ、睡眠前のトレーニングを行っていた。腹筋・背筋・腕立て・ダンベル…それらを毎日行う。常日頃やっておけば、後々の戦闘に影響を及ぼす。地道な努力というのは、かなり重要だ。

因みに、美鈴への説教は終了済みだ。――全く、あいつは何時になったら居眠りを止めるのだ。劣悪な環境では無いのだから、いい加減仕事に集中して貰いたいものだが……

さて、部屋に戻るか。今現在、己は外に居る。故に部屋まで距離が有るが、影を伝えば一瞬だ。

影に入り戻ろうとするが、後ろに気配を感じ、振り向く。其処には花壇の花を見ている美鈴が居た。…何をしているんだあいつは……

「…またサボりか。美鈴」
「あっ、ジェイルさん。サボってませんよ。さっき代わってもらったんです」
「む。そんな時間か。…しかし、お前は花壇で何をしているのだ」
「最近、花の調子が良くないんで、たまにこうやって見てるんですよ。枯れそうなのがあったりしますし」
「成る程な」

…こういう細かい処はしっかりしているのだが、それでも仕事はまともにこなせていない。不思議なものだ。
…だがしかし、己の居た帝国では、仕事も碌にこなさず、トラン

プばかりやっている奴も居る。しかもそいつは、戦いの時には必ず居ず、賭け事ばかりしている腑抜け物だ。そいつに比べれば美鈴はまだ仕事をしている部類に入るだろうな。……まぁ微妙な差では有るが。

「それで、花の様子はどうなのだ？」
「今日は調子良かったみたいです。明日もこうだと良いんですけどねぇ…」
「そうそう事は上手く運ばんだろうな。何が起こるか解らんのが世の中だ」
「…そうですね。まぁ何かあったら、幽香さんにでも頼みましょう」
「幽香……確か花を操る大妖怪だったか？確かにそいつなら問題無いが…大丈夫なのか？」
「大丈夫ですよ。花の事なら、快く引き受けてくれますし、何よりこちらから刺激しなければ問題ないですよ」
「ふーむ。そうなのか」
「そうですよ。だから大丈夫ですって」

…こいつの大丈夫は、あまり信用ならんな……普段のこいつから判断すると、余計信用出来ん。厄介な事にならなければいいが…

…しかし、己もお人よしになったものだ。同僚の心配をしているのだからな。今まででは考えられん。今までなら、戦場で部下が死なぬように考えるだけで、こんな身近な事に気を配っている余裕など無かったからな。かなりの変わり様だ。
幻想郷（ここ）に来てから、己の中の何かが変わってきている……そんな感触に蝕まれている。
それが何かは解らんが、今に解るだろう。理由は解らんが、――

―何故かそんな感じがするのだ。

今更、勘に頼ろうとはな。全く、可笑しな話だ。…だが悪くない。

この世界で、己を変える。それが吉と出るか、凶と出るか……

それは己の努力次第だ。

…だが一つだけ確実に言える事は、与えられた任務は確実にこなすという事だ。たとえどんな敵が襲ってこようと、己が居る限り、全て倒して見せよう。この美しい大地を、自然を、人を、今の己の帰るべき場所を、盗らせはしない。絶対にだ…！

兎に角まずは睡眠だ。英気を養い、明日の糧としよう。明日も仕事だ。休める時に休んでおかないとな。

取り敢えず、美鈴に寝るよう促すか。そうしたら、とっとと寝てしまおう。

明日も紅魔館の平和の為に、働くとするか。

――ｓｉｄｅ　レクト――

「…はぁ……ようやく終わったぜ……」

薬の整理、その詳細資料の整理、そして途中でパチュリーに頼まれた本の整理、そして何故か頼まれた図書館の掃除…ようやく終わりだ。…ったく何でこんなに任されたんだよクソが。もう夜だしよ

……ったくツイてないぜ…

俺はあの後、書類の整理をしていたんだが、途中でパチュリーに色々頼まれて、予定以上の仕事をするハメになっちまった。しかもシルフがヘマやらかして、崩れた本棚の整理までするハメになっちまったし…あーもう！とんだ一日だったぜ畜生！

…まぁそのお陰で、新たな魔導書が見つかったから、別にいいんだけどさ。そうでなかったらキレてたぞオイ。

「あー…うん、ゴメン。レクト」

「はぁ…お前さ。物運ぶなら、一編に運ぼうとするんじゃねぇよ。それで落して、拾ってる時間が無駄だろうがよ」

「ううう…」

「泣くな。泣く位なら、反省しろ。ったく…」

コイツは変に頑張りすぎるところがある。そのせいでどれだけ迷惑を掛けられた事やら……

…まぁその頑張りは認めるけどよ。

「とにかく！自分の出来る範囲以上の事はするな。お前はお前の力量の範囲内で動け。それ以上は望まねぇから」

「…うん。分かった」

「…それと、ウンディーネ？お前にも言えるからな。出来ない事はすんなよ？」

「…はい。承知しております」

「うし。それじゃあ戻すから。明日こそは、ちゃんと仕事しろよ？」

「うん！」「はい」

二人を魔法陣中に戻し、俺の『召喚獣収容空間』（まぁ長いんで

『世界』と呼ぶ）に送る。…これでようやく終わりか。はぁー…ダルかった……けどようやく休めるぜ……。

それにしても、幻想郷を護れ…か……何でそんな面倒な事を引き受けたんだろうな、俺は。わざわざそんなモン受けなくたって、薬位奪えば良かった気もするけどな。

…俺もまだまだ情に弱いな。こんなんじゃ、まだまだ完璧な効率性を生み出せねぇ……もっと非情になるべきかね…まぁメンドイからやらねぇけど。

…あークソ！何だかやるせねぇな…何だってこんな気持ちになるなきゃなんねぇんだよ……クソ面倒臭ぇ…マジで面倒臭ぇ…

こんなに面倒臭ぇのにどうして俺は幻想郷を護れだ、パチュリーの吐息を治すだ、やってるんだ？必要性も無い事を行う事自体が非効率なのにな……はぁ。

全く、人間ってのはどうしてこうも弱いんだろうね…こんな事止めちまった方が楽なのにな……

…どうやら完全な怠惰を受け入れる程、俺も怠け者じゃなかったって事だな。何だかねぇ…

…はぁ。受けちまったモンはしゃーねぇ。やるしかねぇか。ったくどうしてこうなったんだか…

まぁいいさ。敵は全てぶち殺せばいいだけだ。数と卑怯戦術で、全て潰してやる。敵に情けなんかいらねぇ。やるなら徹底的に、だ。覚悟しろよ…俺がやる気を出したからには、確実にやってやる。塵も残さずになぁ！

…まぁ取り敢えず寝るか。今日はマジで疲れた。お陰でとてつもなくダルい。ダルい。兎に角ダルい。と言う訳で寝る。

明日は、もっと効率的に動ける様に務めるか…はぁ……面倒だ。
意味は無いけど面倒だ。

全く、明日はもう少し楽してぇぜ…ほんとによ……

――ｓｉｄｅ　トシキ――

「…よ、ようやく帰ってきた……」

何で帰り道で妖怪に襲われなきゃならないんだ！おまけに崖に落ちかけるわ、突然木は倒れてくるわ、もう散々だ！チクショウ…オレが速くなきゃ、今頃深夜だぞチクショウ！

オレはあの後、急ピッチで神社まで戻ろうとしていた。けど、そこに妖怪の群れ。妖怪の山で妖怪退治するわけにもいかないし、結局逃げるハメになった。逃げてる最中、色々とイベントがあって、おかげで死ぬかと思ったぜ……速くなかったら、今頃死んでたな。全く…不幸だぜ……

「ただいま帰りましたー」
「あ、お帰りなさい。トシキさん」
「お、お帰りー。遅かったねぇ」
「いや～…ちょっと色々ありまして……あれ？神奈子様は？」
「酒を呑みまくった挙句、寝ちゃったよ。あんなキツイ酒呑むから

だよ…」
「ははは…あ、早苗。飯残ってる？こんな時間だけど腹減ったよ」
「あ、ラップに包んで台所に置いてますので、食べて下さい」
「りょーかい」

手を洗って、台所に行く。そして飯発見。…うん、飯に汁物は無かったのは、冷めたら大変だからだろうな。他のが美味そうだから別にいいけど。
というわけで頂きます！……うん。美味い。早苗の飯は、やっぱり美味いな！つーかこの『らっぷ』だっけ？凄いよなコレ。飯の温度とか、色々と守ってくれるんだからな。すんげぇ便利だ。

「そういえばトシキさん。色々って何が？」
「んあ？…えーとな……」

青年説明中・・・
巫女＋幼女解明中・・・

「…大体解った。それにしても神那女か……久しぶりにその名前を聞いたね」
「？　神那女を知ってるんですか？」
「一寸した古い縁でね。私も神奈子あいつと戦って負けてるのさ」
「！　ほんとですか！？」
「ほんとほんと。しかも弾幕ごっこじゃなくて、本気の殺し合いでね」
「…何と言う……」

諏訪子様や神奈子様を負かしただって…？…やっぱとんでもない奴だったんだなアイツ……そりゃオレも負けるわ。

「ま、良い経験になったんじゃない？アイツと戦うと、自分に足りない所が良く解るからさ」
「…そうですね」

確かに負けた事で、自分に足りない物が分かった様な気はする。
速さとか、力とか。

「…それにしても、神那女さんか…懐かしいですね……」
「ん？早苗も知ってるのか？」
「はい。私がまだ中学生の頃にお世話になりました。霊力の扱い方とか、護身術とか、色々と教えてくれたんですよ」
「へぇ～そうなのか」

早苗に色々と教えたとはねぇ…マジで何なんだアイツは。どう考えても普通の人間じゃないよな。あの光と言い、あの剣筋と言い…何モンだ？
…まぁ別にいいか。今はそんなに気にする必要もないだろ。それよりも飯がうめぇ。

「食べ終わったら、桃〇しようよ。暇だしさ」
「そうですね。…でもオレ、まだその『げーむ』ってのにな慣れないんですよね。例えばコン〇イの謎ってのとか」
「あれはしょうがないって。誰がやったって難しいもん」
「そうなんですか？」
「そうですよ。大体弾が小さいんですよ！そのせいで当てづらいし！飛行機の敵は一回倒したと思ったら、もう一回来るし！もう大変ってレベルじゃないですよ！ていうかステージ９のループなんですか！？あんなの抜けられないでしょう！？」
「…ははは。相変わらず早苗は元気だね～」
「…そうですね」

取り敢えず食べ終わったらやろう、と言って、諏訪子様は早苗を連れて『てれび』の方に行く。…ははは。早苗がまだ熱く語ってら。ほんと元気の良い子だよな、早苗は。勧誘も熱心だったし。ああいう一つの事に熱心になれるヤツって凄いよな。オレも見習わないと。

…この人達には、ほんと礼をしても仕切れない程に恩を受けてしまっている。迷惑の筈なのに、オレを受け入れてくれた。凄く感謝している。

…だからオレは、幻想郷を乗っ取ろうとか考えるヤロウをぶちのめす。幻想郷を乗っ取るって事は、守矢神社を乗っ取る事と同じ事だ。そんなの絶対に許さねぇ！オレは…オレは絶対護り通す！

どんな事があろうと……絶対にだ！！

まぁそれは今はいい！とにかく今は飯を食って、早苗や諏訪子様と一緒に『げーむ』をしよう。何だかんだで面白いんだよな。アレ。模擬戦闘が気軽に出来るとことかが特に。

…まぁオレじゃないから、あまり実感が湧かないんだけどさ。

じゃまあ、飯の旨みを噛み締めながらも、さっさと食ってしまおう。

じゃなきゃ穣子様に叱られるからな。

…はぁ……飯が美味い。

――ｓｉｄｅ　サクラ――

「文さ～ん。現像終わりました～」

私の手には数枚の写真。そこにはトシキさんと神那女さんが戦っている様子が映し出されている。

この写真は、私と文さんで撮った物。文さんは、ほんとに凄いです！私の撮った写真と比べたら、とても綺麗で、素晴らしいです！私もこんな写真撮ってみたいです！

「はいはい今行くわよ～…って何ではたてまで居んのよ」

「あら、別にいいじゃない。私、サクラに写真頼んでたのよ」

「はあ！？サクラ！一体どういう事！？」

「え？今朝頼まれたのですよ。『良い写真撮れたら頂戴♪』って」

「なん…だと…」

「あ、コレですはたてさん」

私ははたてさんに数枚の写真を渡す。最近起きてる瘴気の発生元や先ほどの戦闘などの写真です。はたてさんに渡す物だと言う事で、はりきっちゃいました♪

「…ん～♪良い感じね♪動きのある写真はまずまずだけど、静止画の方は文より上手いじゃん！アリガトねサクラ♪」

「はい！喜んで頂けて幸いです！」

「ちょ！ちょっと待ちなさい！」

「あら？な～に文？負け犬の遠吠えでもする気？」

「私は鴉です！どっちかと言えば犬は椛でしょう！？そんなんじゃないわよ！アンタ、人に任せて自分では撮りに行かないなんて、ど

ういうつもり！？」
「あら、これも列記とした取材よ？私は情報提供者から情報を貰っただけの話よ」
「あぁあぁ成程！自分じゃ良い写真撮れないから、人に頼るんだ！所詮アンタはその程度よね！どうせ念写するしか能がないんだからね！」

「ッ！言ったわね！ただじゃ済まないわよ！？」
「そっちこそ！ただで済むと思わない事ね！？」
「死にさらせゴシップ記者が！」「そっちこそ死ね！時代遅れの記者が！」

少女乱闘中・・・

…ふふ♪文さんもはたてさんも仲が良いですね♪こんなにじゃれあって…仲が良い証拠です♪それじゃあ私は、写真が傷つかないように保管しておきましょう。しばらくすれば文さんもはたてさんも落ち着くでしょうし。
…そうだ！お二人に渡す写真を分けておきましょう。そうすればお二人にちゃんと写真が行き届く筈です！それじゃあお箱にお二人の名前を書いて、写真を詰めて……おっけーです！

「サクラー？見回りの時間だよー…って何これ…」
「あ。椛さん！見回りですね？行きましょう！」
「いや…これはどうなってるのよ…？」
「親睦を深め合ってるのです！お気になさらないで下さい」
「は、はぁ…？」

槍を持って、スペルカード持って、夜食の唐辛子を持って…よし！準備完了！それでは行きましょう！

私は今、とても楽しいです。あの時に比べたら、私を憎む人達も居ないですし、私を殺そうとする人達も居ないですし……ユートさんもユーリさんも居ないですし……

あの世界は苦しみしかありませんでした。でも何時かは戻らねばならないでしょう……

…でも今じゃなくてもいいですよね？まだ…ここに居てもいいですよね？ここには…大切な人達が居ますから……だから…少しくらい、遅くたっていいですよね……

…この世界は、闇に埋もれようとしている。そう…神那女さんは言っていました。

私にこの世界を護れるだけの器があるか…分かりません。

でも…それでも……護りたい人達が居るのなら…大丈夫ですよね……

…護ります。私はどこまでやれるか分かりません…だけど私は護ります。

…絶対に…護ります。

…さてっと。それじゃあ行きますか。椛さんを待たせたら悪いですしね。

文さん、はたてさん。行ってきますね。

さあ！今日も、お勤めを果しましょう！

――ｓｉｄｅ　神那女――

「…ふむ。ようやく地盤が固まったな」

これで幻想郷に、何時、何が起きても問題無いだろう。今、幻想郷には七人の猛者が居るのだからな。勿論、私を含んでいるから七人だ。自分を猛者と言うのは自惚れ過ぎ？クックック…事実なのだから仕方なかろう？

「…さて、これからどうなるのかしらね」

「さあな。何が起こるのかはまだ解らん。パラレルで見た光景が広がるかもしれないし、また違う展開になるかもしれない…だが、何が来ようと、全て斬り伏せるのみだ」

「…相変わらず頼もしいわね。でも…どうせなら未来を知っておいた方が良いのでは？その方が、事前に対処出来るでしょうし」

「ククク…それは違うな。――結局変わる未来を知った処で、何の意味も無い。そうだろ？」

「…ふふふ。貴女は何時でも私の期待に答えてくれるわね」

「ククク…この位では、まだまだよ。これからもっと期待させてやるさ……そう……布団の上でもな…」

紫の上に覆い被さり、口付けを交わす。千年以上も前から続く私達の関係も、もう、当たり前の事…夜を共にした数は幾らになるだろうか。…ふ、考えた事も無い。

私達は共に愛し合っている。そして共にこの幻想郷を護っている。それはとても素晴らしい事だ。私は何時までもこの人生が続けば良いと思う。何時までも…何時までも…

…その為にも、私達の愛した幻想郷を奪おうという輩を、全て斬り伏せる。たとえ相手が軍隊でも、死霊の群れでも、不死の者共であっても、私は只…斬り伏せるまでだ。

さて、幻想入り者諸君？お前達の実力は把握した。この世界を護るに相応しい力だ。この世界を護る為にも、頑張ってもらおう。頼りにしているのだからな。

だから…私を……失望させないでくれよ……？

ククク…あの頃を思い出すな……あの頃に比べれば、人数がかなり少ないが、あの頃とはスケールが違う。だから問題は無かろう。

さあ…ショーの幕開けだ。彼らは異変が起こるまでの期間、何をして過ごすのだろうか…

…ククク、自由に過ごせば良い。何せ此処は幻想郷…楽しまなければ損だからな！

というわけで、私も楽しむとしよう。永く行われてきた、この夜の宴を……

第一章　幻想郷に招かれし者達　完
第二章　幻想の日々と回想、そして蠢く闇　始動

第二十四話　それぞれの思い（後書き）

し、しんどかったぜ…何で俺は３１日の深夜１２時頃に投稿しようなんて考えたんだ…お陰で頭がパーンしそうだよ…
…どう考えても自業自得なんだけどね。チクショウメ。

今回の補足

そんなものは無い！つーかしようにも、どれを補足すりゃいいのか分からん！

「そんな補足で大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題ない」

というわけで今年ももう終わりです。という訳で皆さん！
良いお年を！

幻想入り者紹介（前書き）

人物紹介です。今後のネタバレ（？）があるので注意！
そして常時追加されるので、たまに覗いてくださいね。

幻想入り者紹介

＊これより先にステータスと力が表示されております。その見方を予めここに記しておきます。

ステータス

筋：筋力　頑：頑丈さ　速：速さ　知：知能　術：術等使用時の威力　精：精神の強さ

生：生命力　運：運の良さ

E：常人以下　D：常人　C：常人よりそれなりに高め　B：常人よりかなり高め

A：チート　S：もはや意味☆不明

力

霊：霊力　魔：魔力　妖：妖力　神：神力

無：里の人間クラス　極小：道中の妖精クラス　小：1・2ボスクラス　中：3・4ボスクラス

大：5・6ボスクラス　特大：EX・Phクラス　測定不能：チートクラス

能力のレベル

0：普通（文字通り・例：紅葉を司る程度の能力、千里先まで見通す程度の能力）

1：中間（使いようによっては強い・例：水を操る程度の能力、花を操る程度の能力）

2：強力（利便性及び精度が高め・例：狂気を操る程度の能力、距

離を操る程度の能力）
３：尋常（チートに成りうる：例：時間を操る程度の能力、あらゆる薬を作る程度の能力）
４：異常（見て分かるチート：例・境界を操る程度の能力、白黒はっきりつける程度の能力）
５：論外（もうどうにでもなれ：例・東方二次創作のチートな主人公達を見ると良く分かる）

それでは幻想入り者紹介をどうぞ！

＊１月１５日：零奈と神那女の趣味が追加されました。一応後々の複線を兼ねてます。
＊４月８日：能力レベルと神那女の説明を追加しました。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

高宮蓮也：怪しげな外来人⇒『　　』

年齢：１６　身長：１７８ｃｍ　体重：６７ｋｇ
趣味：パソコン、ゲーム（種類は色々）、工作　好物：納豆
住処：永遠亭　職業：永遠亭の居候

どこにでも居るような普通の高校生。講習に行く途中で八雲紫の罠に掛かり幻想入りしてしまう。
東方厨・ニコ厨・たまに話し方が電波・変態という名の紳士である

など、かなりの奇人変人ぶりであるが、中途半端に常識人であるが故によくツッコミをしている事が多い。
ゲームが好きで、全ジャンルのゲームをやる程のゲーム好き。一つ一つのゲームをやり込む主義で、隠し要素や称号コンプリートなどを平均五日で全て揃えてしまう程のゲーマーっぷり。そのせいかかなり腕が良い。
幻想入り者達にかなりの変人として見られており、たまに暖かい目で見られる。
自己犠牲の精神が強く他人の身代わりをする事があるが、隙を見ては逃げ出すというずる賢さを持つ。そしてやられたら倍返しにする主義でもある。
三年前に妹を事故で亡くしており、その事で思い悩む事がある。

ステータス
筋：Ｂ　頑：Ｓ　速：Ｃ　知：Ｂ　術：Ｃ　精：Ｂ　生：Ｓ　運：Ｄ
力
霊：大　魔：大　妖：大　神：小

能力：「幻想を実現する程度の能力」能力レベル：２

装備：鉄パイプ（神力付加）、Ｙシャツ、スラックス

幻想郷での目的：平和な生活を送る

―――――――――――――――――――――――――――――――

遠命零奈：美しき怪力娘⇒『　　』

年齢：１７　身長：１７１ｃｍ　体重：５４ｋｇ　胸：Ｄ
趣味：ナンパ、十八禁の行為、妄想、コスプレ　好物：酸味のあるもの、苦味のあるもの

住処：人里　職業：寺子屋の先生

普通とは少しかけ離れた生活をしていた女子高生。八雲紫に連れられ幻想入りを果した。
運動神経抜群・頭脳明晰・全国ミスコンでトップになれる程の美貌を持っているが、かなりの変態で性なる愛と称しては男女問わずに襲う事が多い。性癖もヒドく、SであったりMであったり、個人に対してだったり、集団だったり、場所が関係無かったりと完全なる痴女である。
身体能力が化け物染みており、十トンの木を片手で軽々と持ち上げる怪力持ちで、更には多数の武術を会得しており、普通の人間では彼女には勝てないだろう。
幻想入り者達を、よく（性的な意味で）襲う事が多いが、大抵流されている。
「家族」の事になると周りが見えなくなり、一時間も説教する程「家族」という概念をとても大切にしている。
両親はある事件に巻き込まれ他界、現在は祖父と共に暮らしている。

ステータス
筋：S　頑：C　速：A　知：S　術：D　精：A　生：B　運：B
力
霊：無　魔：無　妖：特大　神：無

能力：「触手を操る程度の能力」能力レベル：3
　　”美”を操る程度の能力」能力レベル：3

装備：バンテージ　タンクトップ　スパッツ　たまに他の格好（コスプレ）もする

幻想郷での目的：自分専属のハーレムを作る

『ジェイル・シャドウ：冷然なる影巨兵⇒』

年齢：２５　身長：１９８ｃｍ　体重：１０８ｋｇ
趣味：筋トレ、武器の整備　好物：卵料理（卵単体でも食べる）
住処：紅魔館　職業：紅魔館の執事兼戦闘員

とある帝国に所属していた将軍。ある事件により魔法陣を介して幻想入りを果した。
冷静沈着で仕事熱心、おまけにリーダーシップがあり、メイド妖精の指導を任されるなど人からの信用を得るのが上手い。しかしその風貌のせいか他人からは怖い・朴念仁といったイメージを抱かれたりと人に誤解されやすい。
長い間戦場に身を置いていたせいか怒り以外の感情がかなり欠乏しており、表面にもあまり感情を出さないなど、どこか人としての何かが欠けているところがある。
幻想入り者達の中でも一番頼りがいのある存在で、リーダーとして務める事が多い。
人一人の生命を重んじており、過去に人を道具のように扱うという行為を行った者を生き地獄に遭わせた事があるという程に人の生命というものを意識している。
過去の事件が原因で恋愛に関しては、あまり触れないようにしている。

ステータス
筋：Ｓ　頑：Ａ　速：Ｂ　知：Ａ　術：Ａ　精：Ｓ　生：Ａ　運：Ａ
力
霊：中　魔：大　妖：特大　神：無

能力：「影を操る程度の能力」能力レベル：４

装備：残投影剣　パンタロン（戦闘仕様）
　ハイスーツ（ハイネックとスニーキングスーツを足して２で割った様な物）

幻想郷での目的：失った力を取り戻し、元の世界に戻る

―――――――――――――――――――――――――――――――

　レクト・ラックマン：面倒臭がり屋な召喚士⇒『
』

年齢：１８　身長：１６２ｃｍ　体重：４３ｋｇ
趣味：読書、魔薬実験、魔術や霊術などの開発　好物：茸類
住処：紅魔館・地下図書館　職業：図書館の司書（？）

魔大戦と呼ばれる戦争の英雄である祖父を持つ召喚士。ある者達からの逃走の際に時空転移を使用し幻想入りした。
面倒臭がり屋で、普段からどうすれば効率良く行動出来るか、どうすれば楽を出来るかという事しか考えてない程。しかし、暇を見つけては魔法の開発や魔力・霊力の強化訓練を行っているなど、努力家な一面もあったりする。
かなり運が良く、犬も歩けば棒に当たるかの如く金を拾ったり、賭け事に参加すれば賭博場の金を全てかっさらって行ってしまう程。
そのお陰で生き残った場面も多々。
彼の見た目や声は完全に女の子と同等で、女装させてしまうと完全に女の子になってしまう。そしてそれに劣等感を抱いている。
幻想入り者達によく弄られる事が多く、反撃しても大抵失敗する事が多い。
効率を重視する主義であるが、何をやるにしてもギブアンドテイク

の精神をモットーにしており、これのお陰で今まで恨みを買わずに効率的に過ごせた。

両親は既に他界しており、唯一の家族である弟とは決別している。

ステータス

筋：Ｄ　頑：Ｄ　速：Ｂ　知：Ｓ　術：Ｓ　精：Ａ　生：Ｄ　運：Ｓ

力

霊：大　魔：測定不能　妖：無　神：無

能力：「召喚を制御し操る程度の能力」能力レベル：３

装備：蛇腹剣（魔法付加）・マジックローブ（特殊性）

マジックパンツ（特殊性）銀のサークレット

幻想郷での目的：パチュリーの喘息を治す

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

トシキ・スピードスター：光速の兵士⇒『　　』

年齢：２０　身長：１７５ｃｍ　体重：６２ｋｇ

趣味：彫刻制作、走る　好物：甘いもの、果物

住処：守矢神社　職業：守矢神社の居候

反乱軍・突撃部隊に所属していた兵士。仲間の裏切りに遭い、その仲間に時空転移を発動され、幻想入りした。

近くに居るだけで熱くなれそうな程の熱血さと強いポジティブを持っており、周囲を明るくさせる才能がある。しかし、話が頭に入らなかったり、話を上手く伝えられなかったりと、かなりの馬鹿。そして女性の生肌を見ただけで鼻血を出してしまう程に女性に対する耐性がかなり低い。そして不幸体質。

彫刻が得意で、金槌とのみさえあれば動物や建物、そして人に至るまで、あらゆるものを本物と同等に彫れるという高い技術を持っている。意外と芸術的センスは高いようだ。
幻想入り者達の中で一番馬鹿だが、ムードメーカーとしてかなり頑張っている。
彼自身、かなりのお人よしで、困っている者が居れば人間じゃなくても助けてしまう。そして見返りを絶対に求めないという正に正義のヒーローを絵に描いた様な人間だったりする。
拾われた子供であった彼は、自らを産んでくれた本当の両親を今でも探し続けている。

ステータス
筋：Ｂ　頑：Ｃ　速：Ｓ　知：Ｅ　術：Ｃ　精：Ｂ　生：Ａ　運：Ｅ
力
霊：中　魔：中　妖：無　神：特大

能力：「速度を操る程度の能力」能力レベル：３

装備：カットラス×２　緑の袴　金槌とのみ

幻想郷での目的：守矢の人達に恩を返す。

―――――――――――――――――――――――――――――――

サクラ・オールドキング：人と妖の繋がり⇒『
』

年齢：２３　身長：１７７ｃｍ　体重：６２ｋｇ　胸：Ｆ
趣味：色々な生物と話す、空中さんぽ　好物：辛いもの
住処：天狗の里　職業：見習い新聞記者

魔物に変身する「魔物病」を患っている女性。ある者達から逃走してるうちに幻想入りした。
温和で、あまり人を怒るという事をしない優しい性格。誰これ構わず仲良くなろうとするせいか、たまに危ない人達と仲良くなりかける事があったという経験がある。超天然さん。
動物と話す事が出来、蟻から象に至るまで様々な種類の動物と話す事が出来る。そしてすぐに仲良くなるという適応能力の高さを持っている。
彼女の体は害的なモノが体内に入った際に、それを完全に除去する事が出来る特殊な体質になっており、それのお陰で毒物が全く通じなかったり、何を食べても体を壊さなかったりするが、その反面薬が全く通用しないという不便さも兼ね備えている。
幻想入り者達の癒し的な存在で、その天然な性格で幻想入り者達の心を和ませている。
平和主義で、何事においてもなるべく話し合いなどの穏便な解決手段で収めようとしたり、相手が人外ならば能力を使って戦わないようにしたりなど、戦うという事をあまりしないようにしている。
自分の魔物病の発症原因をおっており、それに関係するであろう夢の記憶の正体を探ろうとしている。

ステータス（人間時）
筋：E　頑：E　速：C　知：B　術：A　精：S　生：D　運：C
ステータス（魔物時）
筋：A　頑：B　速：A　知：B　術：A　精：S　生：B　運：C
力（共通）
霊：無　魔：大　妖：測定不能　神：無

能力：「人外を統治する程度の能力」能力レベル：４
「技を盗む程度の能力」　能力レベル：２

装備：天狗の槍　鴉天狗の服（サクラ仕様）黒の髪留め　黒と白の宝石のピアス

幻想郷での目的：自らの魔物病の発症を知る。

――――――――――――――――――――――――――――――――

遠命神那女：永劫なる時と世界を巡りし剣豪⇒『

』

年齢：？　身長：１８２ｃｍ　体重：６６ｋｇ　胸：Ｅ

趣味：旅、修行、嫁を弄る、武器収集　好物：和風料理

住処：不定　職業：幻想郷の守護者

幻想入り者の中で、最も謎で、最も強い剣豪。幻想郷の創立に深く関わっており、しばらく異世界に居たが幻想郷の危機と聞きつけ、幻想郷に戻ってきた。

時と場合によって性格が変わるため、性格が定かになっていない。ふらりと現れたかと思えば、必ずと言っていい程に意味深な言葉やアドバイスを残す、ある意味お節介焼きなのかもしれない。

女性にしては女性っぽくない口調で、乙女チックな部分も少ない。しかしその分カリスマに溢れており、女性が惚れる女と言って良い。そして彼女は同性愛者で嫁が多数居る。

幻想入り者達の中で何事においても一番おかしい存在。あの八雲紫や四季映姫さえも屈服させ、嫁にしてしまう異常な存在。原初の妖怪を倒し、嫁にしたという異常な歴史がある。

彼女は一つ一つの「世界」を愛しており、その世界の崩壊を齎さぬようにアニメや漫画の主人公と接触し、彼らに助言し、世界の安定を行おうとする。正に縁の下の力持ちである。

彼女は過去に色々とあったらしいが、その事実を知る者は極僅かしかいない。

ステータス

筋：Ｓ　頑：Ｃ　速：Ｓ　知：Ｓ　術：Ｓ　精：Ｓ　生：Ｓ　運：Ｓ

力

霊：無　魔：無　妖：無　神：無

能力：「武器の真の力を解放する程度の能力」能力レベル：４

「世界を巡る程度の能力」　能力レベル：４

「力に抗う程度の能力」　能力レベル：５

装備：龍桜花　須臾の袴　その他武器多数

幻想郷での目的：幻想郷を護る。

幻想入り者紹介（後書き）

後書き？人物紹介で書く事も無いだろう。
本編は気長に待ってくださいｏｒｚ

第二十五話　幻想の日々？：人里にて（前書き）

長らくお待たせして申し訳ないですｏｒｚ
言い訳ですが、テスト勉強してまともに執筆出来ませんでした
ほんとすいませんでしたｏｒｚ

第二十五話　幻想の日々？：人里にて

あれから一週間が経った。彼彼女らは平凡な日々を送っている。
紅魔館。今回はそこから物語は始まる。

――ｓｉｄｅ　ジェイル――

「買い物に付き合ってくれない？」

己（おれ）が廊下の掃除をしている時に咲夜にそう言われた。
どうやら食糧の備蓄が尽きかけているらしい。そういえばそろそろ尽きそうだったな。肉は有るが――人肉だ。吸血鬼であるお嬢様方は良いとしても、それ以外の紅魔館住人は普通の豚肉や鶏肉を食す。人肉は食わん――なので買いに行かねばならない。
…只、己は仕事に就きたての頃に人肉を食わせられたことが有る。レミリアお嬢様が、咲夜に言い、己の料理に人肉を混させたのだ。どうやらお嬢様は、人肉を食ったと知った時の反応を見てみたかったそうだ。
普通、そんな物を食えば吐き気を催すものだが、己は既に可笑しな肉を食い続けていたので人肉を食った位では動じなかった。…お嬢様は反応の薄さに落胆していたが。
正直、人肉程度全く問題無い。それよりもオーガの糞を食わせられる羽目になった時の方が恐怖だったわ。あれを食った日には……もはや大抵の物では動じなくなる。それだけ恐ろしかったのだ。
さて買い物の件であるが、荷物持ちとして来いという事だろう。
それ以外は道中の安全の確保か。

近頃は己の世界の魔物が入り込んでいる。幻想郷（ここ）の住人は奴ら（魔物）の対処法など知らん。つまり咲夜も知らん。だからこそ知識の有る己が必要なのだろう。

己は快く引き受け、珍しく寝ていなかった美鈴に館をしっかりと守る様言い聞かせ、人里へ買い物へと出掛けた。

――――――――――――――――

紅魔館を出発して十五分。魔物出現。意外と早かったな。

敵は二十程、そして全てコボルトだ。

コボルトとは、顔が犬、体が人間という…まあ要は獣人だ。平均身長１６０、身のこなしが軽く、手にした槍を振るい獲物を狩る、魔物の中でも頭の良い部類だ。しかし他に比べれば弱い。最弱のゴブリンと戦い、辛うじて勝つという程の弱さだ。弱点は頭部。

…あぁそれと頭が良い部類とは言ったが、言語は介せない、単純な罠に引っかかる等、案外馬鹿なのでそこまで脅威ではない。遠距離武器を持っていたのなら只のカモだ。

正直飛んでいたので相手をする必要も無かったのだが、咲夜に己の世界の魔物を知らせる必要が有ったので、現在相手をさせようとしている。

「…なるほどね。それじゃあナイフを頭目掛けて投げれば、簡単に終わるというわけね」

「そういう事だ。まあ只投げるだけでは避けられるが、お前の場合は時を止めて投げているのだから、そうそうしくじる事は無かろう」

「ＯＫじゃあさっさと終わらせるわ。貴方は手を出さなくていいわ」
「了解。それでは周囲の警戒を行うとしよう」

己は影を展開し、周囲を偵察しつつ咲夜の戦いに目を向ける。
咲夜はナイフを構え、投げる。時を止めて投げたナイフはコボルトの頭上に落ち、あっさりと沈黙。文字通り一瞬で片が付いた。

「…弱すぎない？」

咲夜は、投げたナイフを回収しながら呆れ気味に言う。気持ちは解らんでもない。実際弱すぎる。幻想郷の野良妖怪の方がまだ強いだろう。こいつらは下手をすれば毛玉にさえ負けてしまうしな。

「所詮この程度だ。群れているから面倒ではあるが、制圧力の高い武器や、遠距離武器を使用すればとっとと方が付く。結局は数に頼った雑魚でしかない」
「…確かにね。でも普通の人間からすれば、充分脅威なんでしょ？」
「その通りだ。戦う事の出来ない者からすれば、ゴブリン一体でさえ脅威。まあ仕方の無い事だ。どう足掻いても只の人間に魔物は倒せん。それが己の世界での常識だ」
「…貴方の世界の人達、弱すぎない？」
「逆だ。幻想郷（ここ）の住人が強すぎるのだ」

神が存在しない神社が有る、戦いが娯楽となっている、異変が定期的に起きるｅｔｃ…
この世界はかなり可笑しい。この世界に馴染んでしまったら、大抵の事には動じなくなるだろうな……それ位この世界は可笑しい。
…まあ仕方が無いか。神や悪魔が普通に存在し、共存している世界だ。そんな世界に居れば、嫌でも精神面が強くなるだろう。

…改めて考えて見ると、とんでもないな……この世界は……

「この程度なら問題ないわね。さっさと行きましょう」

「了解だ」

巨兵＋少女移動中・・・

「そういえば、レクトが朝から慌しく出かけていったけど……何かあったのかしら？」

「…そういえば、確かに慌しく見えたな。…ふむ。実験材料を仕入れに行ったのではないか？もしくはパチュリー様に何か頼まれたとか」

「なるほどね。それなら解る気がするわ。…となると人里で会うかしら？」

「可能性は泣け石にもあらず、だな。まあ別に如何（どう）でも良いだろう」

「そうね」

――――――――――――――――

人里に到着。相変わらず賑わっているな。活気が有るのは良い事だ。己の世界では、活気の良い街は平和であるという理念が有る。だからこそ活気の良い場所を見ると、此処は平和なのだな、と感じられる。その事がある意味己の安らぎとなっているのだろうな。

おっと、和んでいる場合では無いな。買い物をしなければ。

「今日は買う物が多いわね…」

「暫く何もしていなかったからな。仕方あるまい」
「そうね……うーん…結構時間掛かりそうね……」

買う量の多さからか、少し頭を抱える咲夜。小まめに買いに来れば良かった…とでも考えてるのだろうな。
まあ仕方あるまい。最近は『あの事件』の影響からか、あまり館を出歩く事が無かった。出歩いた途端に、己あるいは館が襲撃される恐れが有ったからな。不用意に出歩けん状況というのも、難儀なものだ。

まあそれはいいとして、あまり悩まれると困るので、一つ提案と行こう。

「二手に別れて買いに行くというのはどうだ？」
「…あぁ……確かにそれなら早く済むわね。それじゃあ私が肉・野菜・果物類を買うから、貴方は穀物と魚類をお願い」
「了解した」

―――――――――――――――

「…これ位で良いか」

米、小麦等の穀物類。鰯、鮪等の魚類。大体必要な物は買ったな。それでは咲夜と合流するか。買い終わったら団子屋の前で集合。解りやすいものだ。

良し。それでは行くとするか。

巨兵移動中・・・

む…見えた。あれか。……ほほう、中々に繁盛している所のようだ。
まあそれはともかく、咲夜は何処だ……む、居た。どうやらあちらも気付いた様だな。

「これで買い物終了ね。…どうする？ちょっと時間潰してく？」
「別に良いだろう。わざわざ行くような所も無いだろうしな」
「まっ、そうよね。…じゃあ行きましょうか」
「了解」

己達は人里の入り口に向かおうとする。そんな時。

「ちょっとそこのお二人さん！今から私とヤ　ら　な　い　か　？」

と、訳の解らん言葉が聞こえたので振り向く。そこには白のタンクトップと青のスパッツを穿いた半裸の女が居た。

…何処かで見た様な気が……

「も～…呆けてないでヤりましょう……あ」
「……あぁお前か」

思い出した。『あの事件』の際に遭遇した触手を操る怪力女か。

「あああ！！！あの時の！！まさかこんな所で会うなんて！いやそんな事はどうでも良いわ！ヤらせｎ」

「黙れ」

頭上目掛けて手刀を振り下ろす。直撃した怪力女は若干痛そうにしている。

「も～酷いじゃない！突然チョップするなんて」

「お前がふざけた事をぬかしたからだ。何がヤらないかだ。お前は売婦か」

「売婦……良いわねその響き。ＩＫＫリストに追加しておきましょう」

「ＩＫＫ？」

「Ｉ（言われて）Ｋ（感じちゃう）Ｋ（言葉）の略よ♪」

「……何なんだこいつは……」

もはや言動が理解出来ん……己の世界にも売婦は居たが……何故だ、こいつはそれ以上な気がするぞ……

「ジェイル…こいつと知り合い？」

「知り合いというべきか……『あの事件』の時に会った事が有っただけだ」

「も～そんな水臭い事言って♪貴方と私の仲でしょ？隠さなくてもいいじゃｎ」

「誤解を招く発言をするな」

二度目の手刀。見事に直撃。

「いった～い！…でも……気持ち良い！」

「…気持ち悪い……」

「だな」

「ひゃうん！」

何故か悶えだす怪力女。あれだな。こいつは変態でMなんだな。己の隊にもそんな奴が居たな……

「……ふう。そういえば名乗ってなかったわね。私は遠命零奈。此処、人里にて寺子屋の教師を務めてるわ」

「今の『ふう』は何だ……まあいい。己の名はジェイル・シャドウ。紅魔館の執事兼戦闘員だ」

「十六夜咲夜よ。宜しく。……ところで『あの事件』で会ったってどういう事？」

「あぁそれはだな……」

話そうとして、ふと思い出す。そういえば咲夜には『あの事件』の事を、詳しく話していなかったな……

…丁度良い。序でに話してしまおう。

「…そうだな。それでは、まず『あの事件』の日の事から話すとしようか……」

第二十五話　幻想の日々？：人里にて（後書き）

今回から日常編となります。幻想郷での普通じゃない普通の日々…幻想入り者達はどう過ごすのか？って感じの内容になってきます。たまにｇｄｇｄなところもあるかもしれませんが、温かい目で見ていただけるとありがたいです。

今回の補足

コボルト：元ネタは、ドイツの民間伝承に由来する醜い妖精、精霊といったものです。（ちなみにグッた）

…この話はあまり補足することもないなぁ。一番補足したのは次の事件回想だね。

さて次回は事件回想です！最初はジェイル！彼の視点での『あの事件』の回想となります！

…でも結構シリアスになっちゃったな～……まあ詳しい事は次話を見てください。

事件回想？前：ｓｉｄｅ　ジェイル（前書き）

というわけで事件回想はっじっまっるっよー！

事件回想？前：ｓｉｄｅ　ジェイル

『あの事件』…それは力を持たない中小妖怪による『幻想郷襲撃』の事である。
中小妖怪達は、幻想郷に存在する大妖怪・吸血鬼・神・幽霊・鬼ｅｔｃ……今まで起きた異変に関わる者…つまり博霊の巫女『博霊霊夢』や普通の魔法使い『霧雨魔理沙』などによって退治された者達を消し去ろうとしていた。計画の邪魔となるからである。

『事件回想』…それは幻想入り者達が、この事件を解決する為に動いた時のそれぞれの回想。
新たに歴史に刻まれた、幻想入り者達の戦い。
各々の視点で、『事件』を覗いていこう……

月夜の夜。妖怪というのは満月の日に強き力を発揮するらしい。まるでワーウルフだな。奴らも満月の夜に力を発揮するからな。つまり全妖怪がワーウルフの様な状況になるのか？
……正直この世界の奴(妖怪)らの方が恐ろしいがな。この世界は、己の世界のよりも遙かに危険だ。色々とな。

今己はレミリアお嬢様に紅茶を持っていこうとしている。茶菓子も付けてな。
これは本来咲夜の仕事なのだが、お嬢様が己の事を指名したらしい。珍しい事も有るものだ。
ティーカップとティーポット、茶菓子のクッキーを盆に載せ、お嬢様の所へ向かう。途中、サボっていたメイド妖精を叱りつつ月夜

に照らされる廊下を進む。吸血鬼は日の光が弱点だから、館に窓を付けるのはどうなのだと聞いたが、苦手なだけで別にそこまで気にする必要は無い…只長時間浴び続けると不味いが、と言われた。どうやら己の世界の吸血鬼よりか強いようだ。

それはともかく、早く向かうとしよう。長く待たせては機嫌を損ねるからな。

巨兵移動中・・・

お嬢様がおられるテラス前の扉に到着。ノックし、声を掛ける。中からレミリアお嬢様の声が聞こえ、中に入るよう促される。己は扉を開け、お嬢様の座っているテーブルまで行く。

ティーカップに紅茶を入れ、お嬢様の前に出す。お嬢様はそれの匂いを嗅いだ後、くいっと飲む。そして見せる笑顔。どうやら好評だったようだ。

さて、紅茶が御好評だった処で一つ聞いておきたい事が有る。

「何故、今日に限って自分なのですか？」

普段、お嬢様の紅茶を入れるのは咲夜の仕事。己が指名される事など全く無かったのだが…

「それには理由があるわ」

お嬢様は、ティーカップをテーブルに置き、真剣な表情になる。

「今から幻想郷に大きな異変が起きる」

「異変？それはどう言ったもので？」

「そうね……しいて言うなら、全ての者に災厄が訪れる……そんな

異変よ」
「災厄……つまり自分にその異変を解決しに行けという事でしょうか」
「そういう事。話が早くて助かるわ」
お嬢様はクッキーを一齧りし、口を開く。
「貴方は今から異変を解決しに行き、何か土産を持って帰ってきなさい」
「ふむ……つまり暇潰しの為に動けと？」
「そーゆーこと。あ、美鈴と一緒に行ってね」
「…何故？」
「何となくよ。別に良いじゃない美鈴の一人や二人くらい」
「別に嫌という訳では無いのですが……それと美鈴は一人しか居ませんよ」
「そういうとこは気にしちゃ駄目よ。そろそろ起きると思うから、行ってきて頂戴」
「了解しました」

影に潜り、門まで移動する。さて美鈴を回収するか……
門の扉を開け、美鈴を探す。何と珍しく寝ていなかった。
…珍しくという表現もどうなのだろうな……

「あ、ジェイルさん。どうしたんですか？」
「仕事だ美鈴。異変解決に向かう。一緒に来い」
「へ？異変？…ていうか何で私なんですか？」
「お嬢様が直々にお前を指名したのだ。有難く思え」
「お嬢様が！？……これは気合が入ってきました！」

お嬢様の直々の指名、という単語がこいつの心に火を点けたらし

い。その火を仕事の時にも燃やしてくれると、かなり有難いのだがな……

「それじゃあ早速行きましょう！よ～し頑張るぞ～」

「その威勢が持てば良いのだがな……」

己はそう言って、虚空を見る。――どうやらまだ監視をしているようだ。…全く……いい加減止めて欲しいのだがな……一々隠し通すのは面倒なのだぞ……

…む……？…何だこの妙な違和感は……何だ……

己の頭の中に突如、詳細不明のイメージが流れ込んでくる。そして不意に浮かんだ『消える』と言う言葉。

「何かが……消える……？」

その妙な言葉が浮かんだと思えば、己は無意識に空を見ていた。先程から見ている綺麗な空……だ……！？

月が消えている。そこに有った筈の美しい月が、まるで最初から無かったかの様に消え去っている。一体……これは何だ！？

「どうしたんですかジェイルさん？空に何かあったんですか……ええ！？」

美鈴もこの異変に気付く。

…そうか。これが異変の始まりを告げる……鐘なのか……

だとすると……悠長に構えてられんな。

「な！何ですかこれ！？何で月が消えてるんですか！？」

「…異変が始まった……そういう事だろう」

「…という事は」

「呆けてる時間は無いな……美鈴。今すぐ行動を起こすぞ」

「は、はい！」

己と美鈴は空を飛び、先へ行こうとする。そこに立ち塞がる妖怪。

「おっと待ちな。そこの二人」

「何の用です？こっちは忙しいんですよ。用件なら後にしてくれない？」

「そうはいかねぇな。アンタら、異変解決に乗り出そうとしてるんだろ？」

「それが何か？」

「こちとらそんな事されると迷惑なんでな！今すぐ此処で死んで貰おうか！」

妖怪は弾幕を撃ち出す。己と美鈴はそれを避け、眼前の妖怪を睨む。気が付けば、周りは似た様な力を持つ妖怪共で囲まれている。

「…どうやらお前達はこの異変の関係者のようだな」

「は！そういうこった！長年夢見た俺達の計画。邪魔させはしないぜ」

「…ふん、知った事か。我が前に立ち塞がるというのなら……殺す

だけだ」
「カッコつけてんじゃねぇぞ！今の俺達は、只の妖怪じゃねぇ。大妖怪にも太刀打ち出来る妖怪さあ！」
「何よ偉そうに。高だか中小妖怪の分際でいい気になってるんじゃないわよ」
「その台詞…こいつを見ても吐けるかな！？」
妖怪は霊弾を美鈴に向かって発射する。見た目普通の霊弾と変わらないが……
「何よその弾。そんなのかる～く弾いてやるわよ」
美鈴は迎撃体勢をとる。美鈴なら簡単に弾けるだろうが……何故だ？何故奴は余裕の笑みを浮かべている？一体何故……
！　霊弾の霊力が上がった！？不味い！
「美鈴！」
「どうｓってうえぇ！？」
影で強制的に美鈴の体を引き、己の方まで手繰り寄せる。目標を失った霊弾はそのまま地面に落下。すると五メートルにも及びそうな、大きな爆発を起こした。
「え、えええええぇぇぇ！！！？？」
「…成程な。奴ら、とんでもない力を身に付けた様だな……」
あの霊弾。あれは正に大妖怪の撃った弾と大差無い程の強き力を持っていた。奴ら…一体何処でこれ程の力を…？

「ハッハー！見たかこの力！これがの力があればもはや敵無しだ！」

「…ふん、自惚れるなよ妖怪。所詮付け焼刃で得た力。その様な力でこの世界（幻想郷）を乗っ取れるとでも……」

「それが出来るのさ……この力を得たのは俺達だけじゃねえ。中小妖怪の約四分の一はこの力を手に入れた。幾ら大妖怪といえど、この力と数で攻めればお陀仏よ！」

「…まだ解っていないようだな……」

「あ？何がだよ」

「…それはな」

「お前達の目の前に居る敵は、お前達の想像を遙かに超えた力を持っているという事だ」

「……は？何言ってんだ…？てめえの何処が…「ギャア！！」！何だ！？」

妖怪が振り向くと、そこには自らの影に襲われている妖怪達が居た。

「な、何だコリャ！？」

「それこそ己の力。そしてお前達では到底太刀打ち出来ない力」

「な、何だと……ってな！俺の影まで実体化した！？」

「『実体化』？違うな。影は最初からそこに『存在している』…お前達の見ている影と違う、お前達自身を…完全に模した形でな……」

妖怪の影が妖怪の体を裂き、そして喰らう。影に喰われた者は、永遠にその存在を消し去られ、そして永久に影となり生き続ける。これが己の影を操る力……世界に禁忌として定められた力だ。

影となった者は己の影として操る事が出来る。己の影の範囲は限られているが、これを利用する事で、影の範囲を広げる事が可能だ。他の使用法としては、壁にする、武器を作る、己の大剣に宿す、他の影に潜り込ませ周囲の偵察等、用途は広い。

取り入れた影は一生己の影として扱う事が出来ると同時に、取り入れた影の実力によって、己の影を強化する事が出来る。影を取り入れれば取り入れる程、影の精度・威力・技量・性能・範囲等を底上げ出来る。己は今まで強者を数千、数万と取り込み、その結果、大陸一つを簡単に滅ぼせるまでになった。

…しかし今では、紅魔館半分をやっと飲み込めるまでの力しかない。徐々に戻してはいるが、完全な復活には早くて三年、下手をすれば十年は掛かる。全く……困ったものだ。

「ジ、ジェイルさん！」
「む？どうかしたか」
「今の何ですか！？」
「影だ」
「いや、それは分かってます！今の技は何なんですか！？スペル宣言も無かったですよ　！？」
「それはそうだ。してないからな」
「え……い、いやでも…！」
「…美鈴」

己は徐に美鈴の肩を掴み、その目を見、言い放つ。

此処はもはや戦場だ。――今までの様に一々宣言していれば、敵の不意打ちに遭い――死ぬ」
「・・・ッ！」
「己達の任は異変の解決――その為には死ぬ事は許されない。――確かに此処でのルールに乗っ取らなければ、異端と見做される

だろう――だが、死ななければそんな事は如何でもいい」
「・・・」
「死んでしまえば――そこで終わりだ」
美鈴の肩から手を離し、紅魔館を見る。
「お前はまだ、レミリア・スカーレットに仕えたい筈だ。――だったら生きろ。生きる為に戦え。――自らの主の下へ帰る為にもな……」
「・・・」
美鈴はその場で沈黙する。己の言った事を、改めて考えているのだろう。
美鈴は共に戦場を駆けるであろう戦友(とも)となるだろう。――ならば死なれては困る。何時かは己の背を預ける事になるだろうからな。
「…分かりました。――ただ、これだけは言わせて下さい」
「何だ？」
「…一応はスペカ使いましょうよ」
「…何故だ？」
「いやだって……それが普通でしたし」
「…己の言った事と矛盾してないか？」
「ジェイルさんの言い分は分かってるんですけど……やっぱり……」
…何なんだ一体……己の言った事は間違ってないと思うのだが…
……
「…やっぱり、乗るべきルールには乗るべきだと思うんです！」

「スペルカード戦がそうだと？」
「はい。――今までの異変だって、それで解決してますし…」
…何故そう悲しそうにする。泣き落としか？…己には通じんぞ。
「…それに……ジェイルさんが……のは……ですから……」
「む？己が何だって？」
「え！？い、いや！にゃんでもないれす！！」
「噛んでるぞ」
「あ、い、いや！と、とにかく早く行きましょう！そうしましょう！！」
「…了解だ」
…美鈴の言葉の殆どが聞こえなかったな……まあまた後で聞けば良いだろう。
兎に角、今はこの異変を解決してしまおう。月が消えるなど、有ってはならんからな。
己は美鈴を引き連れ湖の方へと飛んだ・・・

――――――――――――――――――――

霧の湖――普段から霧が掛かって見通しが悪いというのに、月明かりが無いせいか、更に見通しが悪くなっている。全く、面倒な事になったものだ。早い内に目を慣らさなければ、夜襲に遭った際に対処出来んな……己は既に慣れたが。
「どうします？とりあえず魔法の森辺りでも行ってみますか？」
「そうだな。取り敢えずはそうするか……む、あれは……」

ふと、湖の方に目をやると、目と舌の付いた奇妙な傘を持った少女が、先程の妖怪と同類の連中に襲われているのを見つけた。傘を持った少女は傘の弾幕で応戦しているが、多勢に無勢。徐々に押されていっている。このままではやられ、殺されるだろう。あるいは性的暴行(レイプ)か。

…全く。短時間だというのに、被害がどんどん拡大しているではないか。これは本気で解決しないと不味いな……

だがその前に、襲われている少女を助けるとするか。気配から察するに妖怪だとは思うが――放っておくのは気が引ける。

「美鈴。あの妖怪の少女を助けるぞ」

「はい、分かりました！」

己と美鈴は少女と妖怪の群れが居る所まで一気に飛ぶ。丁度その時に少女は被弾し、墜落してしまった。不味い、早く行かねば……！

◇■◇■◇

「よ、寄らないでよ！あっち行け！」

「そういう訳にはいかねえな……確かお前、博霊の巫女と戦(や)りあった事があんだよなぁ…？」

「あ、あの時の事！？だから何だってのよ！？そんなんであちきは襲われなきゃならないの！？」

「あぁそうさ。――博霊の巫女と戦りあった奴は、大抵強い。――あのお方の計画の邪魔になる可能性もある。だからさっさと消すのさ」

「何よそれ！あちきは人を驚かす事しかしないよ！第一あんたらが何やってたってそんなのあちきの知った事じゃないわよ！！」

「…これ以上の無駄話はイラネェな……さあ。殺してやるよ！」

妖怪は傘を持った妖怪の少女に、その手に持った棍棒を振り下ろそうとする――――だが、

「それはあまり望ましくないな」

声が聞こえた刹那、少女は黒い物体に飲まれ、消える。そして妖怪が声がした方向を振り向くと、そこには長身の男とチャイナドレスを着た女性が居た。――――ジェイルと美鈴である。

「何者だお前ら！」

「貴様等に名乗る名など無い」

「ここに居た女を何処にやった！？」

「あぁそれか？それなら……」

そう言ってジェイルは、自らの影の中から、今しがた妖怪が殺そうとした少女を出した。

「！　そいつを渡せ！！」

「ふん…貴様等の命令なぞ聞かん――――己が聞くのはレミリアお嬢様とフランお嬢様、そして御友人のパチュリー様のみだ」

「そんな事知るか！…返さねぇって言うなら力ずくだ！」

「ふん……させるか」

妖怪達が弾幕を出す前に、ジェイルがスペルカードを翳し、唱えた。

「『投影「鏡の中の己」』！」

ジェイルがスペル宣言をすると同時に、妖怪達の影にジェイルの影が侵入する。そして妖怪達の影が実体化し、妖怪達に襲い掛かった。

「な！」　「どうなってんだ！？」　「くそっ！応戦しろ！」

妖怪達は自らの影に攻撃を仕掛ける。しかし、影には彼らの攻撃は通じない。幾ら攻撃しようと、直ぐに再生、攻撃、再生…この繰り返し。元より只の弾幕では影に傷一つ付ける事すら出来ない。ましてや爪や棍棒など、持っての外だ。

妖怪達は、次第に影に押され、そして飲み込まれた。一人、また一人と妖怪は影に飲み込まれていく。そしてリーダーと思わしき妖怪を一体残し、妖怪は全滅した。

「そんな馬鹿な…俺達はあのお方のお陰で強くなっている筈なのに……」

「ふん……所詮は貰い物の力。貴様等如きでは十二分の力を発揮する事さえ叶わぬだろう……つまり――貴様等は所詮その程度だという事だ」

「…クソッ！クソッ！！クソオオオォォォ！！！！！」

妖怪は遂にやけくそとなり、ジェイルに突撃した。しかしそれよりも早く、ジェイルが侵入した妖怪の影が妖怪を切り裂き――飲みこんだ。もはやそこには妖怪達の跡は無く、あったのは――帰るべき場所を無くした妖怪の影だけだった。

◆□◆□◆

…片付いたか。全く、今日だけでかなりの影を手に入れたぞ……雑魚を幾ら集めても意味など無いが――まあ無いよりはマシだろ

う。…まあそれは良い。それよりもこの少女だ。

少女はすっかり怯えきっており、妖怪の居た場所をずっと凝視している。

…取り敢えず宥めるか……

「おい」

「！　な、何!?あちきは喰ってもおいしくないよ!!」

「別にそんな気は無い。――それよりも、大丈夫か?怪我はしてないか?」

「へ…?…心配してくれてるの?」

「して悪いか?」

「…いや、ありがと。――怪我はしてないわ。あちきは妖怪だし」

「ふむ……そうか。それは良かった」

妖怪というのはつくづく丈夫な生き物だ。死ぬ様な怪我を負っても、次の日には全快している。恐ろしいものだ。現にこいつも、あれだけの弾幕を食らいながらも、服が汚れているだけで済んでいる。こいつ自身が上手く避けていたのか、或いは単に丈夫なのかは知らん。しかし、こいつからはそれなりの妖力を感じる。あれ位の弾幕ならば、問題は無いだろうな。

…さて、少女の無事を確認出来た処で、聞いておくべき事がある。

「お前……名を何と言う?」

「多々良小傘(たたらこがさ)だよ。あなた達は?」

「ジェイル・シャドウ。紅魔館に勤める執事兼戦闘員だ」

「紅美鈴です。同じく紅魔館に勤める門番よ。よろしくね」

「うん、よろしく」

「…さて、自己紹介を済ませた処で聞きたい事が有る」

「なに?」

「お前はどうして襲われていた？」
「…何かね。魔法の森に見たこと無い妖怪が居たから、面白半分で驚かしに行ったら、突然弾幕撃たれてね。慌てて逃げてきたんだけど……」
「敵の追撃に遭ったと」
「そういう事。いやー危なかったわ。まさか名無しの妖怪があんなに力を持ってたなん　てね」
「…ふむ、成程な」

小傘の話から考えるに、異変の首謀者が魔法の森に居るかもしれないな。――確証は　無いが、行って見る価値は有るだろう。

「魔法の森ですか……行ってみますか？」
「あぁ。もしかすれば、異変の首謀者が居るかもしれん。――行くぞ」
「あ！ちょっと待って！」

己と美鈴が行こうとした時、小傘に止められる。…何なんだ。

「…何だ」
「…一緒に行っちゃダメ？」
「…何故だ？」
「…だってこのまま帰ったら、また襲われるかもしれないし……怖いんだもん……」
「・・・」

…全く……どうしてそうなるんだ……。正直断りたい処だが、確かにこのまま放置するのも気が引けるな……仕方ない。

「…勝手にしろ」

「！　ありがと！勝手に付いてくね！」

「…ジェイルさん……良いんですか？」
「仕方ないだろう……あのまま放置すると、また妖怪に襲われる危険が有る。――こうするのが最善の手だ」
「…ジェイルさんって……意外とお人良しですよね」
「お前に言われる筋合いは無いがな」

己達は、新たに小傘を引きつれ、魔法の森まで飛んだ・・・

事件回想？前：ｓｉｄｅ　ジェイル（後書き）

さて事件回想。本当は一話分で済ませたかったんだけど……長すぎて分けましたｏｒｚ
…何このｇｄｇｄ感……嫌になっちゃうね。

今回の補足

投影「鏡の中の己」
鏡は対象を逆に映す。つまりいつもの偽っている本当の顔を映し出す（ようは真と偽って感じね）そんなイメージで考えてみた。
…ただそれだけなんだけどねｏｒｚ

影の力がチート過ぎる件について。でも仕方ないのよ。ジェイル自体をかなり特殊な設定にしてしまったからおのずと強くなっちゃうのよ。うん。
因みに本編中にてジェイルが言っていた「『実体化』？違うな～お前達自身を…完全に模した形でな……」という文ですが、変と思ったでしょう？でもこれにはちゃんと意味があります。
ジェイルは影から人の感情を読み取る力を持っています（本編では使ってませんでしたが）。それを発展させていくと、影を伝って人の負の感情を操作する事が出来るようになります。その際に負の感情を出す『負の影』が見えるようになります。『存在している』とはその『負の影』の事。なので全く問題ないです！

…自分って説明下手だなぁ……

ちなみに、何故中小妖怪が強くなっていたのか？それは今は秘密にしておきます。後々解明されていくので、ゆっくりまっていってね

!
!

事件回想？後：ｓｉｄｅ　ジェイル（前書き）

後編ですよー

事件回想？後：ｓｉｄｅ　ジェイル

「…という訳で、なんでか知らないけど驚かないんだよね～……なんでだと思う？」
「…そんな手段で驚く奴は居ないだろう……というより、それが原因でやり返しされているのではないか？」
「んー…そうなのかな～……確かになぜかあれはダメだったんだよねー。…あ、あれは成功したな。顔をトマトまみれにして人前に出たの。あれはかなり上手く行ったわ」
「…それは驚いてるのでは無く、怖がってるのだと思うぞ」
「あ、な～るほど。…でもまあ、満たされたから別に良いや」
「そういう問題なのか…？」

魔法の森に行く途中、小傘の事を聞いた。当人曰く、小傘は捨てられた傘が元だと言う。雨風に晒され、時間が経つに連れ、妖怪と化したそうだ。普段は人間を驚かして生きているそうだが、全然驚いてくれなくて困っているそうだ。
小傘は人間を驚かせた際の心を食べているので、人畜無害。しかし驚かれないと、常に空腹なのだそうだ。妖怪の中にはそんな者居たのだな……

「…ジェイルさん……かなり気が抜けてません？」
「…む……あー…うむ。そうだな」
「しっかりして下さいよ。さっきの台詞は何だったんですか！」
「…しかしだな」

道中襲って来る妖怪は、影で簡単に倒せてしまう。少し強い奴が

出たとしても、剣の一振りで終わってしまう。美鈴と小傘の援護を加えると、もはや近づく事さえ出来ん。

つまり弱すぎるのだ。

…己の考えすぎだったか……？

…だがしかし、まさかここまで弱いとは思わないだろう。今まで他の妖怪とまともに遭った事が無かったが……まさかここまで弱いとは。

弾幕の威力だけは凄い……だが装甲が薄すぎる。幾らなんでも影の一突きで倒れるなど、存外――想像出来るか？弱い一撃で様子を見ようとすれば、直ぐに落ちる事など……普通は出来無いだろう？

今まで遭遇した奴らが強かったのか。はたまたあれは一時的な物だったのか……その真偽は定かでは無い。現に解っている事は――弱いという事だ。余所見をしていても如何にかなるというのは可笑しすぎる。

…イカンな。これでは気が乱れてしまう。集中せねば……

「…あ……ジェイルさん、見えましたよ！あれが『魔法の森』です」

「…む……あれが……」

眼前に広がる無数の木々達。それと同時に溢れる茸の胞子……あれが『魔法の森』か……

己達は魔法の森の真上を通る。彼方此方の木々に、爪で引っ掻いた様な傷跡が残されている。…どうやら此処で正解の様だな……

「小傘。お前が居た場所は何処だ？」
「あそこだよ――――あれ？」

小傘が疑う様な眼つきで一点を見つめる。

「どうかしたか？」
「…何かさっきより木が倒れてるような……」

己と美鈴もその場所を見る。大量の木々が薙ぎ倒されており、その一面と、更にその奥の方が更地と化している。倒れた木を良く見ると、どうも殴り倒された様なモノだという事が解った。

「お前が来た時は如何だったのだ？」
「…数本木が倒れてて、それ全部に爪で引っかいたような痕があったな～……少なくともここまでヒドくはなかったよ」
「…ふーむ」

…とすると、この爪痕を残した者が、更に暴れまわったか、或いはそれより強い者が此処らを荒らしていったか……となると、更に警戒せねばならんな。こんな事が出来る者だ。尋常じゃない強さを持っているに違いない。注意せねば……

…それにしても……まだ付いて来る気かあの女……いや己に特定して付いてきてるという訳では無いのだろう。現に付いて来ているのは奴の能力による物のみ。あの女自身は、今頃屋敷でじっくりとこの様子を観察しているのだろうな……全く……

…まあいい、それよりもこの異変の解決だ。己は警戒しつつ、

「美鈴、小傘。木々の亡骸を辿っていくぞ」

美鈴と小傘に進むよう促す。

「分かりました！」
「分かったよ！」

己達は森の奥へと進んだ・・・

―――――――――――――――

暫く進む。進む毎に、徐々に周りを取り巻く気配が重くなっていく。この異変の黒幕に近づいている証拠だ。

己達は低飛行でゆっくりと飛ぶ。そして崖の岩肌が見えた途端、付近に強い衝撃が走る。

「…！これは……！」
「な、何ですか一体！？」
「ひ、ひyむぐ！」
「静かにしろ……」

小傘が叫びそうになったので、咄嗟に口を塞ぐ。此処まで来て敵に見つかるなど、言語道断だ。

「…此処からは歩いていくぞ」
「え……何でですか？」
「飛んでいる時より身を隠しやすいからだ」

空を飛んでいる時は、微かながらも力を発している。霊力、魔力、

妖力、神力……飛んでいる時は必ずどれかが放出されている。微かでは有るが、その微かさえ見つける者も居るかもしれない……それを考慮すると、歩く方が良い。少しでも抑えれば、その分見つかる危険性も低くなる。この様な状況に置いてはこうする事が得策だ。

己達は徐々に進んでいく。すると開けた場所に出た。如何やら着いた様だ。崖は見えていたが…洞窟が有るとはな……

…む、あれは……

崖の方向、洞窟付近で戦闘が行われている。どうやら先程の衝撃はこの戦闘によるものだったようだな。

…む……あれは……女か？白の袖なし服に青の短ズボンを着ている――確かあれは『外の世界』と呼ばれる所にある服で、確かタンクトップとスパッツとか言ったか？如何にも動きやすそうな服では有るが、その分装甲が心配だな……己と違い、戦闘使用では無いからな。ダメージを諸に受けるだろう。

…それは良いとして、どうやらあの女は妖怪共と戦っているようだ。

…取り敢えず様子を見るか……

「な、何ですかあの女性（ひと）！人間なのに力が尋常じゃないですよ！？

…一々リアクションを取るな。そんな事は見れば解る……

…このままでは見つかるな……仕方ない。

「隠れろ」

「へ――――ってうえええぇぇ！？」

「きゃ！な、なnむう！？」

美鈴を隣の木に押し出し、小傘を叢に無理矢理しゃがませる。

「一体どうｓ「黙れ」！」

己は威圧する様に美鈴を睨む。美鈴も察したのか、直ぐに黙り込み、洞窟の方を見る。

戦いは女が圧倒していた。女の拳より放たれる一撃は、確実に妖怪を潰していく。力もさる事ながら、戦いのセンスにも優れていた。女は、その体を柔軟に動かし、前・横・後・上より飛んで来る弾幕や爪撃を華麗にかわし、見た事の無い拳法を使い、妖怪をどんどん潰す――――文字通りな。

そうこうしている内に敵の援軍が、洞窟より出現する。中には己の世界で見た事の有る魔物も混ざっていた。

奴らまでも幻想入りしたのか…？しかし忘れ去られる程、存在は薄くなかった筈だ……

――となると、何者かが意図的に幻想入りさせたのか…？一体何の為に……いやそれ以前にどうやって幻想郷（この世界）の存在を知った？幻想郷（この世界）と己の世界は全くの別世界。知る事など出来ない筈……クッ…！解らん事だらけだ……！

己があれこれ考えている内に、女は妖怪と魔物の群れの半数を――何だあれは？触手……か？触手が妖怪と魔物の体内に侵入しているのか…！？

あれはあの女の力なのか…？確かに妖力を感じてはいたが……まさかこれ程のモノを操るとは……なかなかやるではないか……

暫く女と妖怪と魔物の群れの戦いを見ていたが、その戦いも終止符を打ちそうだ。
女は、途中出現した巨大キマイラとの激戦を繰り広げ、一回も攻撃を喰らう事無くキマイラを追い詰めていった。

キマイラとは、ライオンの頭部と山羊の胴体、蛇の尾を持つ魔物だ。己の世界では魔物中でも危険な部類となっており、こいつと戦り合って生き残れた者は少ない。通常の個体は４ｍ程であるが、女と戦っているキマイラは軽く１０ｍは超えてるだろう。その巨体を軽々と殴り飛ばすあの女は何なんだ……本当に人間か？キマイラは通常でも３００ｋｇは有るというのに……あれだけ巨大だとすると、８００…下手をすれば１ｔは有るのではないか？――人間業とは思えないな。

女の攻撃は更に熾烈を極めていく。素早い連撃を打ち込み、倒れたところを触手より放たれた光線で追い討ちを掛ける。しかしキマイラはまだ死なない。悪足掻きとばかりか炎を大量に吐き出す。――しかし、それは女の触手に飲まれ敢え無く終わる。そして女がキマイラに近づき、その体を拳で貫く。キマイラは遂に倒れ、動かなくなった。どうやら死んだようだな。
しかしそこでキマイラの体が光りだす。その光は禍々しい気を放っており、その気は徐々に大きくなっていく。
その気に気付いた女は、徐にキマイラを観察し、そしてキマイラの体の中に手を入れた。入れて直ぐに女は手をキマイラの体から出し、その手に握る物を確認する。――あれは……石か？どうやらキマイラが放っていた光はあの石によるものだったらしいな……しかし…酷い気だ。
そんな事を考えていると、異様に禍々しい気を放つその石は、取り出されたと同時に更に強く光だし、周囲に負の気を放っていく。

女もそれに気が付いたのか、少し慌てだす。しかし次に瞬間、その石を――握り潰したのだ。

己は一瞬その行動に肝を冷やしたが、直ぐにその行動が正解だったと実感する。

女がその石を握り潰した途端、周囲の気が一気に弱まり、完全とは言えないが、周囲の負の気が消え去ったのだ。

「…周囲の気が弱まった……？」

「な、何かイヤな感じが無くなったよ！あの石が原因だったの？」

「どうやらその様だな……」

…しかしまだ終わりでは無いだろう……何故ならば、洞窟の先から禍々しい魔物の気を感じられる。どうやらまだ残っていたようだな。

…だが、奴に任せてしまってもいいだろう。己達は他を当たるとしよう。

「美鈴、小傘、撤退するぞ」

「え…何でですか！」

「これ以上此処に残る必要は無いからだ――後はあの女が始末してくれる」

「い、いいんですか？お嬢様への土産話が……」

「それは他でも何とかなる――此処に首謀者が居るという訳では無いのに、討っても仕方有るまい」

「…確かに……此処にはこんな事が出来る奴は居ないでしょうね。そこまで強い気を感じられません」

「そうだろう？――だったら直ぐに移動だ。呆けていたら見つかってしま…」

「残念。もう見つかってるのよね～♪」

！　しまった……！

「へ？今のなｎ「散れ！！」えっ…ってうえええぇぇ！！？！」

突然地面より出現した触手は己達に向かって牙を向ける。己と美鈴は直ぐに反応し、回避し、小傘は一瞬遅れて回避した。己達は、洞窟の前に着地する。そして眼前にはあの女。

「手伝いもせずに高みの見物とは良い度胸してるじゃない」

女の声は落ち着いてはいたが、しかし確実に怒りが込められていた。

「・・・」

「あら？だんまり？益々良い度胸ね。――もしかして貴方がこの異変の首謀者かしら？」

「・・・」

「…黙ってないで何か言ったらどう」

女は己達に威圧を掛ける。これは――闘気か。何と凄まじい闘気だ……此処まで強い闘気を持った者は初めてだ……！己は問題無いが……二人は……

美鈴は何とか堪えているが、小傘はすっかり怯えきっており、己の後ろに隠れている。…やはり小傘は駄目だったか……想像はしていた。

「…あら？私の威圧に耐えられるなんて、なかなかやるじゃない――益々何者よ」

これ以上黙り続ければ、戦闘になるな……しかし敵でないと言って簡単に信じるものか……仕方ない……

「…少なくとも」

「ん…？」

「少なくとも己はこの事件の首謀者ではない」

「…じゃあ何者？」

「…己は……この異変を解決しようしている者だ」

「…それは信じても良いのかしら？」

「信じるかどうかは勝手にしろ――それよりも聞きたい事が有る」

「何？」

「…何故己達の事が解った？」

「あぁそれ？…簡単な事よ」

そう言って女は右の人差し指を突き出す。

「匂いと声――そして第六感を働かせる事で、簡単に見つけられたわ」

そう言い、自分の鼻、耳、頭と指を当てていく。

…匂いと声……そんな馬鹿な…人間が嗅ぐ、聞ける様な距離ではなかったぞ…!?有り得るのか……!?更には第六感だと……こいつ本当に人間か……

「…さてと。疑問は解消した様だし……首謀者かどうか…吐いて貰うわよ」

「…己達は首謀者では無いぞ……」

「えぇそうね――でも嘘かもしれないでしょ？だからこそ、殴って

でも吐かせるの…ほんとの事をね♪」
「…どうやら戦るしかないようだな」

己は背中から剣を抜き出し、構える。それと同時に影を出し、一気に周囲を取り囲む。

「！　これは……！」
「…長引かせるわけには行かないのでな……早急に片を付けさせて貰うぞ…！」

影と共に一気に斬り込む。――しかし己の攻撃は、突如飛来した炎により中断させられた。

「零奈！」

声がした方向を見る。そこには炎の翼を付けた白髪の女が居た。

「あら？妹紅じゃない。――今取り込んでるの…用なら後で……」
「そんな事言ってる場合じゃない！――人里への攻撃が激しくなったのよ！私や慧音だけじゃ護りきれないわ！」
「…触手は！？」
「触手はまだ持ってるけど…それ以上の数で押し寄せられてるの！このままじゃ……！」
「・・・ッ！」

…どうやらこの世界唯一の街が襲撃されているようだな……ならば。

「行け」
「！？　何を…！」

「此処は己達が引き受けよう――だからさっさと行け」
「…貴方を信用してなんか「黙れ」な…」

一体何時まで長引かせる気だ……このままでは街が崩壊してしまうではないか……！

…それに早く行って貰わねば此方が困る……上に居る奴を誤魔化すのも疲れるのだぞ……

「…解ったわ」

零奈と呼ばれるその女は、妹紅と呼ばれる女の元へと跳ぶ――そして触手を背中から大量に出し、触手群は一気に炎を吐き出した。
…まさか……飛べないのか？能力持ちであるのにか？……まぁ確かに解るといえば解るが……まさかこうやって飛ぶとは……

「…言っておくけど……私は貴方を信用してないから」
「…解っている」

零奈は釘を刺すように言葉を放ち、妹紅と共に飛んで行った。

「…はあぁぁぁぁ……何ですかあの人！あんなに馬鹿でかい気は初めてでしたよ！」
「こ、怖かった…」

ようやく美鈴と小傘が動き出す。あの闘気の中ではまともに行動出来なかったからな…仕方ない。

…だが安心している時間は無い……何故ならば――

「グオオオオオオオ！！！」

とてつもない雄叫びが、周囲を取り巻く。気が付けば、己達の周りには大量のキマイラが居た。

「！　な……こいつ……死んだ筈じゃ……！」

「良く見ろ……こいつは先程のものとは違う――通常のキマイラだ」

「キマイラ？――ていうかジェイルさん、知ってるんですか！？」

「あぁ――己の世界に居たからな」

「…って事は……こいつらはジェイルさんの世界の――」

「――魔物だ。妖怪とはまた違う」

「…妖怪とどこが違うんですか？」

「…そうだな――」

己は剣をキマイラに向かって構える。

「如いて言うならば――」

影を展開する。

「妖怪と違って利口で無い処だ」

影を一遍にキマイラ共に突き刺す。何匹か刺さったが、大多数が回避をした。

「美鈴、容赦などせずにこいつ等を叩きのめせ！小傘、弾幕で援護しろ！」

「分かりました！」　「わ、分かったよ！」

美鈴は一頭のキマイラに接近し、気を込めた一撃を与える。キマイラは怯み、後ずさったが、それを追う様に美鈴の気弾が着弾する。完全に体勢を崩したキマイラに美鈴は一気に接近し、拳と脚による連撃を加え倒す。やはり美鈴は接近戦に置いては無類の強さを発揮するな……弾幕による戦闘はからっきしであるが。

…おっとこっちにも来たな。爪撃？ブレス？――甘い。そんなモノは己には通じん。一気に接近し、剣を振り下ろす。一撃でキマイラの首は飛び、体は倒れ、首はごろりと転がる。脆いものだ。

そのままの勢いで近くに居たキマイラの首を刎ね飛ばす。爪は避け、炎のブレスは影に飲ませる。

これらを繰り返している内に、気が付けば、辺り一面はキマイラの死体だけとなった。

「相変わらず強いですね…」

「強くなど無い。以前に比べれば、この程度……たったの十分の一だ」

「これで十分の一って……ジェイルさんは何者なんですか。今更ながら」

「前にも言っただろう？――只の帝国の将軍だ」

「将軍って時点で只じゃないと思うんですが……」

「…そんな事は如何でも良い――敵だ」

「！　…な……何こいつ……！」

洞窟よりゆっくりと、巨大な影が姿を現す。野生的な格好に大きな斧、そして頭には三本の角と大きな目。間違い無い――サイクロプスだ。

こいつもキマイラ同様危険な部類となっており、こいつの持つ斧より放たれる一撃は、一振りで地を砕く程だ。遭遇すれば、まず命

は無いだろう……人間ならな。

…しかしこいつも、先程のキマイラと同様に全長や風貌、そして何より、一本の筈の角が三本になっている事――これもあの石の影響なのか……

「じ、ジェイル～……ねぇ…こいつほんとに倒せるの？すっごく怖いんだけど……」

「…仮にもお前は妖怪だろう……そんな事ではこの先、一生人を驚かせないぞ…」

「なっ！そ、それは困るわ！――――が、ガンバル！」

…威勢は良くなったが……未だに言葉と体が震えているぞ……大丈夫なのか……

…まぁいい……今はそれで良い。威勢だけでも取って貰った方が、此方としても助かる。怯えられてばかりでは足手纏いだ。

己は改めてサイクロプスに視点を合わせる。まだ攻撃する素振りは見せていないが……ずっとこのままというわけにはいかんな……

「美鈴！小傘！戦るぞ――付いて来い！」

「はい！」「うん！」

己は影を剣に纏わせ、振るう。剣より放たれた影の波動はサイクロプスに向かって一直線に飛んでいき、そのまま直撃する。サイクロプスは攻撃に怯み、足を一歩引き摺らせるが、直ぐに持ち返し、その手に持つ斧を振るう。己は瞬時にその場を離れ、攻撃を避ける。すると己の居た地点が跡形も無く消え去る。威力が強すぎて地面に穴を開けた様だ。まともに喰らえば命は無いな。

サイクロプスが斧を持ち上げようとするその時に、美鈴が懐に潜

り込み、気を込めた連撃を浴びせる。しかし効いている様子は無く、サイクロプスは至って無傷で有った。
…それもそうだ。サイクロプスの体はそこ等の金属よりも硬い。まともにダメージなど与えられん――ではどうするか？それは……

「小傘！奴の目に向かって弾幕を撃て！」
「目！？…わ、分かった！」

小傘はサイクロプスにギリギリまで近づき、スペル宣言をする。

雨符「雨夜の怪談」

傘より放たれる一点集中型の弾幕。それがサイクロプスの目に直撃する。
するとサイクロプスは、声ならない叫び声を上げ、のた打ち回る。

「うっそ！？すんごい効いてる！何で！？」
「…そうか……体は頑丈でも目は脆いのか……」
「そういう事だ――だが安心するな……まだ終わってはいない」

サイクロプスは怒りを顕にし、暴れだす。サイクロプスの弱点は目であるが、それと同時に奴が一番大事にしている部分――そこが攻撃されたとあれば……怒り狂うだろう。

――だがそれが狙いだ。

己は、サイクロプスの影に己の影をぶつけ、そして捕縛する。当然サイクロプスも抗うわけだが――無駄だ。己の影が捕まえてい

るのはお前の負の気が多く詰まった影――己の影は、相手の影が負で有れば有る程その効力を増す。つまり相手が怒り狂えば狂う程、それに準じて己の影は強くなるのだ。

サイクロプスの影は徐々に己の影に飲まれていく。飲み込んでいく内に己の体にも力が湧いてくる。巨大な力を取り込んでいるという事で、一気に力が戻り始めているのだろう――ほんの僅かではあるが。

サイクロプスは徐々に、徐々に勢いを失っていく。もう少しだ……もう少しで終わる……！

「グワアアアア！！！！！」

サイクロプスは雄叫びを上げ、捨て身の攻撃を仕掛けてくる。己の真上から斧を振り下ろす。だがその刃が己に届く前に、自らの影が己の影に飲み込まれる。影は本体（サイクロプス）に逆らい、斧を振り下ろす手を止める。それは丁度己の数ｃｍ上で停止する――間一髪だ。

本体に逆らったサイクロプスの影は、そのまま本体を飲み込む。そして残ったのは、影となりながら未だに力を持ち続けている影とサイクロプスより摘出された石だけとなった。

「…おわっ……た……んですか…？」

「あぁ――終わりだ」

「…はあああぁぁ……疲れた～……」

美鈴と小傘は一気に腰を崩し、その場に座り込む。今回はかなりのものだった――疲れが来ても仕方ないな。現に己も疲れている。このまま帰りたい処だが……まだ無理だな。

月は依然として姿を見せない。どうやら今の奴が首謀者では無かった様だ……何となく予想はしていたが。

「…戻ってませんね」
「…そうだな……仕方ない、他の所へ――」
己が動こうとした途端、周囲に強い光が放たれる。その刹那、摘出した石に微かに残っていた負の気が消えて無くなり、只の石へと成る。
…一体何事だ？今の光は？何故石の気が消えた？様々な疑問が浮かび上がったが、その疑問は一つの『変化』によって全て消え去った。

「…あ！じ、ジェイル！月が！月が戻ってるよ！！」
「！　何だと…」

空を見上げ、夜空を確認する。――有った…月だ。見間違える筈が無い……あれは……本物の月だ……！

「…戻ってる……って事はこの異変は……」
「終わりだな――これで己達の役目は終了だ。帰るぞ」
「あっ、ジェイルさん！お嬢様へのお土産どうしましょ？」
「…此処に転がっているキマイラとサイクロプスでも持って帰るか――そうだ。小傘はどうするのだ？」
「あちきは妖怪の山に帰るよ。――異変が収まったから、多分帰り道も大丈夫だと思うし」
「そうか。気をつけてな」
「うん！ありがとね！いつも暇だけど、暇な時に遊びに行くね！」
「…出来れば勤務中に来るのは止して欲しいのだがな……まあいい。来たい時にでも来い――適当に相手をしてやる」
「うん！それじゃあね！」

小傘は妖怪の山に飛んで行った。…さて己達も帰るとするか。

己と美鈴は抱えれるだけ魔物の死体を抱え、紅魔館へと飛んだ。

――――――――――――――――

その後己達は、紅魔館の庭の手入れを行っていた。どうやら己達が行った後に襲撃が有ったらしく、かなり荒れていた。やれやれ…帰って直ぐに仕事とは……中々にハードだな。

…咲夜から聞いたが、どうやら紅魔館が襲撃された際にレクトがそいつらを迎撃し、それらを纏めてたリーダーを、魔理沙と共に倒したらしい。倒した奴からは謎の石が出たらしい、己の時と同じだな。兎にも角にもレクトが戦ってくれたお陰で紅魔館は安泰だったそうだ。良くやったレクト。

お嬢様にお土産も渡した。どうやらかなりお気に召したらしく、剥製にして部屋に飾った。因みにキマイラをレミリアお嬢様が、サイクロプスの方をフランお嬢様が貰っていった。結構死体が余ったのだが、それはレクトが貰って行った。どうやら薬の材料にするらしい。…あれで薬が出来るのか？かなり疑わしいな……

これで今回の異変――（いや、事件と言うべきか……？）は終了した。あの石は何だったのか？何故奴らは月が消えたのに衰退せず、逆に強くなったのか？それは解らない。

――だが、少なからずともそれは近い内に解るだろう……原因は必ず掴めるものだ。焦る必要など無い。これから先、探せば良い――だがその前に……

庭の舗装をせねばな……

事件回想？後：ｓｉｄｅ　ジェイル（後書き）

後編もオワタ。だけどこれから先もこんな感じに書かなきゃならないんだよね……もう　＼（＾ｏ＾）／な気分だよほんと……

今回の補足

キマイラ：元ネタはギリシャ神話からです（ググッた）
サイクロプス：こちらも同じく、元ネタはギリシャ神話からです（やっぱググった）

まさかの零奈登場。結構真面目な感じでしたが、零奈サイドで見ると……おっとこれ以上は言えないな。

見張っていた人は……今までの話を読んで来たのであれば分かるはずです。

…補足が面倒になってきたので、補足は終了。質問があれば送って下さい。

さて次はまた人里に戻ります！そして途中で視点が変わります。
というわけで（何が？）お楽しみに！

第二十六話　幻想の日々？：人里には色々います（前書き）

タイトルに意味は無い（キリッ

第二十六話　幻想の日々？：人里には色々います

「…そうだったの……美鈴…あの子ったら、説明不足な所が多すぎじゃない…」
「そうなのか？」
「えぇ……それにしてもそんなに酷かったなんてね……」
「・・・」

一通り話を終え、咲夜はかなり驚いていた。それもそうだ、咲夜はお嬢様方を護る為に館から出ることが出来なかった。つまり他の状況を知らない。話を聞けば驚愕するのが当たり前だ。

…それにしても……さっきから零奈が目を輝かせながら此方を見ているのだが……何なんだ…？

「サイクロプスって大きかったの？」
「あぁ。通常は３ｍ程度なのだが、遭遇したのは５ｍは有ったな――それがどうした？」
「…成程成程。となると通常は……うん、それ位か。だとすると変異したのは……」

何かを計算しているのか、ぶつぶつと呟きながら、空中に文字をなぞり考えている。時間が掛かるものかと思いきや、僅か五秒で終了。早いな。

「…惜しい人を亡くしたわ……」
「誰の事を言っているのだ……まさかとは思うが――サイクロプスの事では有るまい　な？」
「そうに決まってるじゃない！…あ～……惜しい人を亡くしたわ…

…」

サイクロプスは人では無く魔物だ…何を言っているのだこの女は

……

「…何でそんなに落ち込んでるのよ」

あまりの可笑しな発言に咲夜が問いだす。

…正直聞くべきでは無かった。

「だって変異型のサイクロプスって大きかったんでしょ？だったらそれだけのモノを持ってるに違いないじゃない！！」

「「・・・」」

…な？聞くべきでは無かったろう？あまりにも下らない……そして呆れて何も言えん……こいつは羞恥という物を知らんのか…

「羞恥なんてとうの昔に捨てたわよ」

「心を読むな。そして捨てるな」

「良いじゃない別に――代わりに快感を得られたんだから♪」

「・・・」

…駄目だ、こいつのペースに呑まれそうになる……この女の変態会話に付き合っていたら、此方までも可笑しくなってしまう…

「…咲夜」

「…解ってるわ――上手く逃げてよ」

「解っている――行くぞ」

「何処に？」
「お前の手の届かない場所だ」
咲夜は時間停止、己は影移動を使い里の外へと逃げようとする……が、
「おっと逃がさないわよ？」
己達が行動するのよりも先に、零奈が己と咲夜の腕を掴む。その力は想像以上に強く、抜け出す事が出来なかった。
「クッ…まさかここまで強いとは……」
「…時を止めても、抜け出せれなかったら意味無いじゃない……」
「ふふふ♪私の手から逃れようたって、そうは行かないわよ？――私の目に止まったからには、ヤらせて貰うわよ！」
「…ハァ」
あまりの変態行動ぶりに、思わず溜め息が出る。高だか性行為に此処まで命を賭けなくても良いではないか……
…しかしどうするか……腕は掴まれたまま――このままでは不味い。
…仕方ない、こいつ諸共影移動を行うか。そうすれば、少なくとも咲夜は逃げられる。
…良し、そうと決まれば直ぐに行動だ。こいつごと影で……
「あああぁぁ！！！こっち来んじゃねえええぇぇ！！！！」「待ってくださいよーーー！！！」
…何だ？向こうの方から声が聞こえた気が……

声がした方をじっと見ると、男が女に追いかけられている――というか男はレクトではないか。何をしているのだあいつは……

…女の方は見たことが無いな……鴉天狗の格好をしており、髪は青、背はそれなりに高めと言った処か……何者だ？幻想郷縁起で読んだ『射命丸文』や『姫海棠はたて』とはまた違う天狗なのか？

「ん？今声がしたような……ってうわ！」

零奈も気付き、振り返って見たのだが、運悪く二人がほぼ目の前に迫っていた時に振り返ってしまったが為に、飛んで来た二人に驚き、ジェイル達の手を離してしまった。チャンスではあったのだが、当の本人達は飛んで行った二人に気を取られ、そのチャンスを逃してしまった。

「…何でレクトが追いかけられてるの……？」

「…解らん。――しかし、女は鳥天狗の格好をしていた。もしかすると、射命丸文と同類の新聞記者だったのかもしれないな…」

「…成程ね。それでレクトを追ってた訳ね――ネタの為に」

「そうなるな」

…しかし……あの女から妙な気を感じたな。天狗の者とは比にならん程の気……あの禍々しい気は……魔の者達のそれと似ていたな……奴はその部類の者なのか…？

…もしそうなのだとするのならば――駆逐せねばなるまいな……

…しかし……もしそうでないのだとするならば……その気の正体を探る必要が有りそうだな……

「…どうしたの？」

「…む？…あー……いや、何でも無い」

咲夜が心配そうに声を掛けてきたので、平静を装う。どうやら少し、深刻な表情になっていたらしい……あまり心配を掛けてはいかんな。今はまだ…あの女の事は考えないでおこう。今はこっちの女《零奈》の処理に集中しよう。

「あ～…ビックリした！何だったのあの男の娘と巨乳っ子は！？――ハメたいわ！」

「あからさまに危険な発言をするな」

本日三回目の手刀。今回はかなり良い具合に入った様だ。

「～～～！！きっっっくううううぅ！！！！……ふう」

「またか。お前はソレを何回繰り返してるのだ…」

「一日に十回は軽く超えてるわね。お陰でパンツがグショグショよ」

そう言って零奈はスパッツを下げようとする。己は無言で拳を加える。今度は手刀では無く、拳骨だ。

「あうっ！？……ふう。――痛いじゃない！結構効いたわよ！」

「そう言いながら何をしているのだ……いやそれ以前に、公衆の面前で脱ごうとするな。女子（おなご）として恥かしくないのか？」

「あら？女の子だからって脱いじゃいけない何てルールは無いわよ？この世はＦｒｅｅｄｏｍ。自由に生きて何が悪いの？」

「それはお前の理屈だ――少なくとも、周りの目という物が有ってだな……」

「残念♪もう人里の人達は、私の変態行動に慣れちゃったわよ♪だから脱いでも問題ｎ」

「大有りだ馬鹿者！己達という人間の存在が居るだろうが！！それ位察さんか！」

「…おおう……もしかして……見られないプレイの方がお好みだ

った?だったらそうと言ってくれれｂ「黙れ」ぎゃふん!!」

二度目の拳骨。あまりの怒りにかなり力を入れてしまった……大丈夫か…?

「…ハァハァ……貴方……最高……!!」

…心配するだけ損だったか……どうやらこいつを心配する事事態が無駄な様だ……

己が完全に呆れ返っていると、零奈が突然不敵に笑い出す。今度は一体何なんだ……

「ふふふ…散々殴ってくれたから、そろそろ反撃と行きましょうか…」

そう言うと、零奈は体を前屈みにし、拳を構える。己は構えたその瞬間、無意識に体を護る様に身構える。零奈の放つ闘気が、己の防衛本能を駆り立てたのだ。

「…どうやら準備ＯＫの様ね。――それじゃあ行くわｙ「零奈さーーーん!!」…あら?」

零奈の攻撃を止めるかの如く、零奈を呼ぶ声。その正体は二人の妖精だった。

一人は緑髪で青のワンピース、そして黄色のリボンを身に付けた妖精と、水色の髪に水色のワンピース、そして髪に大きな青いリボンを付けた妖精だ。

二人の妖精は、零奈の前に降りる。緑髪の方は己と咲夜に一礼したが、青髪の方は己達の事が眼中にないらしく、真っ先に零奈に駆

け寄って行った。
…緑髪の方は、確か大妖精とか言ったか？青髪の方は……そうチルノだ。

「チルノと大ちゃんじゃない。どうかしたの？」
「レイナ！神社行こ神社！」
「神社？それって博麗？それとも守矢？？」
「博麗神社！暇だからイタズラしに行こうよ～！」
「暇だからって…霊夢も災難ねぇ……そんなんで妖精の悪戯の対象にされるんだから…」
「あはは……そうですね」
「…うーん……博麗神社ねぇ……そんなに用事無いんだけど……！」

突如、零奈が何か思いついた様な顔をし、うんうんと考えた後、微かに笑みを溢した。

「…そうね。私も丁度用事があったから、都合が良いわ――行きましょうか」
「うん！行こう！！大ちゃんいこ！」
「あっ、待ってよチルノちゃん！」

チルノはさっさと人里を出て行く。それを追う様に大妖精が追っていく。零奈はそれを見送ると、己達に向き直り、満面の笑みでこう言った。

「私、ちょっと用事出来ちゃったから行くわね。またねジェイル、咲夜♪」

零奈は地を蹴り、チルノ達の後を追っていく。それはとても速く、気が付けば、あっという間に入り口の方まで行ってしまった。

…良く解らんが、どうやら己達より重要な事が出来たのだろう。
有り難い話だ。これで己達も帰る事が出来るという訳だ。

「…何だったんでしょうね……あの変態は……」
「さあな……最初遭った時とはかなり違っていたが――――あの気は変わらなかった。やはり只者ではないな…」
「そうね…」

…さて……変態は片付いた処で、少し咲夜に文句が有る。

「…ところで咲夜？」
「何？」
「…何故己をサポートしてくれなかったんだ？お陰で大変だったのだぞ…」
「…入る余地が何処にあったのよ……」
「…それもそうか。――すまなかった」
「それはこっちの台詞よ……まぁ良いわ。行きましょう？」
「うむ」

己達は、再び人里の入り口に向かって歩き出す。無駄に時間を取ってしまった…早く帰らねば……

…だが、現実はそう甘くは無かった。

「待ちなさい、そこの大男」

…今度は誰だ……いい加減疲れてきたぞ……

己は怠惰を感じつつも、取り敢えず振り返る。そこには日傘を持った緑髪の女が居た。

…こいつは……まさか……

「『風見幽香』？一体……何の用？」

…やはりそうか……『風見幽香』…幻想郷の大妖怪が、何の用だ？

「貴女に用は無いわ――用があるのはそちらの大男の方」

「…何の用だ」

己がそう言うと、幽香は口元を緩ませ、微かに笑みを溢す。

「貴方…中々強い力を持ってるわね」

「…それがどうした」

「…ふふふ」

幽香は、持っていた傘を閉じると、それを己に向ける。

「私と戦いなさい」

「…何だと？」

突然現れては戦いを申し込む。――何を考えてるのだ…？

「私はね…強い相手と戦うのが好きなの――それが例え人間であってもね」

「…迷惑な話だ」

要はこいつは戦闘狂。こんな輩に絡まれるとは……己もツイていないな…

「…今すぐに殺り合いたい処ではあるけれど――今日は忙しそうだし、止めておくわ。そうね……明日の午の刻……その時間に『太陽の畑』に来なさい」

「…拒否権は無い様だな……」

「えぇ…その通りよ。逃がす訳ないじゃない――来なかったら紅魔館まで直接行くわ」

「…それは困るな……だが安心しろ。己は約束は破らん――必ず行ってやろう」

「…ふふふ♪その言葉……嘘じゃないと良いわね」

そう言って幽香は去ろうとする。しかしそれを咲夜が止める。

「…何か用かしら？」

「…今の話は無効よ。ジェイルとは戦わせない…！」

「…あら……雑魚の分際で私に指図する気？――良い度胸してるじゃない」

幽香は威圧する様に咲夜を睨みつける。しかし咲夜は動じない。

「貴女と戦って…彼が無事で居られる筈が無い……だからこそ…やらせるわけには行かないのよ！」

「…確かに無事では済まないでしょうね――だから？」

「・・・ッ！だからって…！」

「そんな事はどうでも良いのよ――私は只…戦えれば良いの……相手がどうなろうと、知った事じゃないわ」

「…貴女！！！」

咲夜がナイフを取り出し、襲い掛かろうとする。しかし、それを己が遮る。

「退いてジェイル！！こいつは私が…！」
「冷静になれ咲夜――お前では敵わん」
「！　な、何よ…！そんなのやって見なくちゃ…」
「落ち着いて考えろ……こいつは大妖怪……お前の「時を操る程度の能力」で有ろうと、こいつの力の前には――無力だ。そして此処は何処だ…？お前はこんな人だかりの多い場所で殺し合いを始めようと言うのか？」
「・・・ッ！」

咲夜はナイフをしまい、下がる。

「…悪かったな、機嫌を損ねてしまって」
「…いえ、別に良いわ。――貴方がちゃんと来てくれれば…それで良いわ」
「あぁ…行くさ。己に……恐れは無い」
「…ふふふ♪それでは…また御機嫌よう♪」

…行ったか……それにしても、中々に強い気だった……やはり大妖怪と言う話は本当だったようだな。…やれやれ、とんでもない事になってしまったものだ……

「…何で断らなかったの！？」

咲夜が急に声を荒げ、己に訴えかける。しかし、当然の疑問。己

は素直に答える。

「…遅かれ早かれ、何時かはこうなるとは思っていたのだ――――強者と戦う事をな」

「でも…！相手はあの風見幽香。勝てる筈が…」

「…咲夜」

己は咲夜の肩を掴み引き寄せ、体を屈み、咲夜の目を見る。

「な、何よ…」

「…己は負けん――――絶対にだ」

「何処にそんな自信が…」

「…己には帰るべき場所が有る…護るべき者達が居る…果すべき約束が有る……だからこそ……己は死なん」

「…じ、ジェイル……」

目を逸らそうとする咲夜を無理矢理己の方に向かせ、己は言う。

「己を信じろ咲夜。例えこの先何が有ろうと、己は死なん。そして必ずお前や紅魔の者達を護る……絶対にだ…！」

暫しの無言。咲夜は、その凛とした顔を赤くし、目を泳がせている。

――――だが己は離れない。咲夜からの言葉を聞くまで、己は咲夜を見続ける。

「…解ったわ……貴方を信用するわ……だから」

「…だから？」

「…は、離れて頂戴。――――か、顔が近くて…は、は、恥かしいの

よ……」
「…む……あー…すまん」

己は咲夜の肩から手を離し、離れる。咲夜は少し崩れた服を直し、荷物を持って此方を見る。しかし、何故か地面を向いたまま。

「…と、取り敢えず帰りましょうか！し、仕事もあるし！」
「あぁ、そうだな――それは良いとして、如何かしたか咲夜？そんなに慌てて…」
「べ、別に何でも無いわよ！ほら！早く行くわよ！」
「あ、あぁ…解った」

己と咲夜は、今度こそ入り口に向かって歩き出す。今度は何も無さそうだ…

…風見幽香……相手にとって不足無しだ。己の弱り切った影で何処までやれるか解らんが……だがやるからには負ける訳にはいかん……必ず勝って見せる……
己は決意を新たに、紅魔館へと飛んだ。

…何か…忘れている気がするが……まぁ良いか。

第二十六話　幻想の日々？：人里には色々います（後書き）

違うキャラの視点をやると言ったな？あれは嘘だ。
…すいません。字数の関係上入れられませんでした…
計画倒れもいいとこだよ…ｏｒｚ

今回の補足

零奈はドM。（何の補足だよ…）

Q：何で幽香がジェイルの住処を知っていたか？
A：零奈との会話を花屋の花を見ながら聞いてたからです。しかし、位置のせいで、ジェイル達の視界には入ってませんでした。

Q：咲夜のあの挙動不審は何だ？
A：ふふふ…後で判りますよ……

補足終了！というわけで次回予告！
レクトに災難到来！？レクトは一体どうなるのか！？
お楽しみに！

第二十七話　幻想の日々？：召喚士の受難（前書き）

前話を投稿した日に二万ＰＶを突破しました。
何だかんだで見てくれてる人がいて凄く嬉しいです。
これからも、「東方七人録～ある七人の物語～」をよろしくお願いします！

第二十七話　幻想の日々？：召喚士の受難

「あああぁぁ！！！こっち来んじゃねえええぇぇ！！！！」「待ってくださいよーーー！！！」

人里の中を、レクトは疾風の速さで通り抜ける。途中、知った顔が居た様な気がしたが、それを確かめている暇は無い。後ろから迫り来る者――サクラ・オールドキングを撒く為に、何処かに身を潜めなければならない……

しかし、そう都合よく隠れ場所がある筈も無く、右往左往と飛び回っていると、気が付けば人里の入り口まで近づいていた。

「（…こうなりゃ！）」

レクトは突如急降下をし、地面に着地。そしてそのまま人里の外まで走り出す。魔法で脚力を強化し、何を考えてるのか、そのまま人里の外まで出て、少しだけ出来た外壁を曲がる。

もちろん、サクラもそれを追って上空から壁に迫る。レクトが曲がった壁の反対側に着き、上からそっと反対側を覗く。魔力の反応があるから、間違いなくここにレクトが居る筈……だった。

覗けば、そこには何も居ない。魔力の反応はあれど、姿は見えず。おかしいな？とサクラが考えてると、そこに先輩新聞記者の文がやって来る。実は今回は、文と二人で取材に来ていたのだ。

「レクトさんは居ましたか？」

仕事モードで文はサクラに尋ねる。何故彼女が『居ましたか？』と聞いたか？それは追っていた影が消え、そして消えた影は、この

外壁の方に隠れた。だから彼女は『居る』と尋ねたのだろう。
サクラは首を振り、誰も居ないと答える。
――しかし彼女は、その言葉を放った瞬間、何故魔力だけが残されているのか。その理由に気付いたのだ。

「文さん文さん」

サクラは呼びかけるように文に喋りかける。

「どうかしましたか？」

文はそれに答える。そして答えた時、サクラの満面の笑みを見て、何か見つけたのか？という一つの疑問が浮かび上がる。何か見つけたのですか？と文はサクラに尋ねる。はい、と静かだが張りのある声で返事をする。

「レクトさんはどこに行ったと思いますか？」
「…えっ……それって一体どういう……」

疑問を投げかける前に、文はピン！っと何かを閃く。少し黙りこくった後、文は徐に一つの場所を指差す。そこは、サクラが覗いた外壁の一点だった。

「…あそこに居るんですね？」

文は静かに尋ねる。その問いにサクラは、その通り、と笑顔で答える。

「にとりさんのカモフラージュ…と言えば判りますか？」
「…成程。つまりレクトさんは、そこの外壁に何らかの方法で隠れ

ていると……そう言う訳ですね？」
「そうです♪――――多分、魔法による隠れ蓑……自らを完全に隠し尽くす、高等魔法でしょう……しかしそれならば、魔力も完全に隠せる筈です」
「そうなんですか？」
「はい……それなのに何故、魔力が漏れていたのか――――単純な話です。魔力が強すぎて覆いきれてないのです」

そう言ってサクラは、外壁の一点に近づき、魔力を感じ取れる部分を触る。しかし手応えは無い。それもその筈、レクトはサクラが触れようとした瞬間に、なるべく屈み、サクラの手が当たらないように、かわしていたのだ。当然の行動である。
サクラはその際の微かな魔力の動きを見逃さなかった。あまりにも繊細で…判り難いその動きを。
サクラはそっとその場を離れ、文の所まで行く。当のレクトは、この時サクラのこの動きに疑問を持つ。

「（あの女は俺の事が見えてない筈だ……だが何でだ？何であいつはあんなに真っ直ぐな……何かを確信した様な目をしてたんだ？）」

レクトはその疑問を空に投げかけるのと同時に、はっと、一つの結論を出す。
それはサクラが自分の魔法の存在に気付いていたのでは？という結論だ。

「（…もしそうだとしたら不味い……とっとと離れねぇと……！）」

レクトは咄嗟にテレポートを唱え、自らを森の茂みまで転移させる。とにかく一旦離れ、様子を見ようとしたのだ。

…が、それは間違いだった。

突如飛来する風の槍。それはレクトの頬を掠め、後ろの岩に着弾する。バレてる!?と驚くレクトだが、驚き続けている暇は無い。絶え間ない無数の風の槍がレクトに迫る。避け、守り、相殺し、何とかするも、限界が来る。風の槍がまた飛んで来た瞬間、レクトは茂みを転げる様に飛び出す。何とか止まると――――ずっと待っていたかの様に、文とサクラがそこに居た。そこでレクトは、自分は完全にサクラの策にハマったのだと気付いたのだ。

「随分と洒落た真似しやがるじゃねぇか……そこまでして取材してぇのか?」

「えぇ♪私はレクトさんにお話をお聞きしたいのです!」

「…仕事熱心なこって……」

はあっと溜め息を吐き、レクトはダルそうに二人を見る。体をぐっと伸ばし、コキコキと首を鳴らす。いかにもやる気の無い様子だが、次の瞬間、彼は意外な事を言い出す。

「しゃーねぇな…取材は許可してやるよ……」

その言葉に喜ぶサクラであったが、文はそのあまりの変わり様に、些か警戒していた。

そして、レクトは言う。

「俺と弾幕勝負して勝ったら……だけどな！」

その言葉の刹那、レクトは周囲に三つの魔法陣を作り出し、体の全てが岩で構成された魔獣『ゴーレム』、水を操る精霊『ウンディーネ』、心を操る魔女『マイン』を呼び出す。レクトはその三体の後ろでスペルカードを構えている。

やっぱり、と文は団扇を取り出し、戦闘態勢に移行する。サクラは何事か、と理解出来ていない。

文は、そんなサクラを一喝し、戦闘態勢に移行させる。――準備は整った。

「…全くよぉ……人が拒んでるのに付いて来やがってよぉ……こちとらイライラしてん　だよ…！」

「だからよぉ…テメェらに見せてやるよ……召喚士の実力をよぉ！！」

こうして、弾幕ごっこの火蓋が切られた。

――ｓｉｄｅ　レクト――

絶え間ない風の弾幕を俺は避ける。密度は濃いが、隙間は必ずあるから問題なく避けれる。避けつつ魔法弾を撃つ。魔法弾は文とサクラを掠める事さえ出来ないが、そこは召喚獣でカバー。ゴーレムの岩石とウンディーネの水弾、マインのレーザーを加え、回避の幅

を狭くする。しかしそれでも避けられる。…それもそうだ。そんな簡単に行く訳が無い。

奴らの妖力はかなり高い。つまりそれだけ長い時間を生きてきたって事だ。…そんな奴らなら、この程度の弾幕、簡単に避けれるだろう。…ったく面倒な事になったもんだ……

俺は只、魔法薬の材料が足んねーから人里に買いに来て、良い感じに集まったと思えば何か面倒なのに絡まれるし（サクラと文の事）。諦め悪ぃし。ダリぃし。面倒臭ぇし。何だってんだよほんと……

…愚痴言ったってしゃーねぇな。今は目の前の敵を、どれだけ効率的に攻略出来るか……それを考えねぇとな。

俺は牽制とばかりに炎弾を撃ち出す。しかし、それは文によって起こされた突風により、空しく散る。やっぱ駄目か……まぁ予想通りではあるけどな。

文は『風を操る程度の能力』を持っている。半端なモンじゃあ突風に吹かれて消えるのがオチだ。例えそうでなくても、あいつは天狗。身体能力は通常の妖怪よりも高い。幻想郷縁起じゃあ、自分を幻想郷最速と称してやがった……それを考慮すりゃあ、大抵の弾幕は簡単に避けられる。やるならド派手に……威力の高い弾幕を放つしかねぇ……そうなると――やっぱスペカしかねぇな。

俺は一枚のスペカを選択し、二人に見えないよう特殊な魔法で背中に貼り付ける。貼り付けた途端、スペカはすっと消え、俺の背中には何も無くなる。

これで良い…準備は済んだ。次は実行だ。

俺は更に濃く、変則的な魔法弾を撃ち出す。狙いは文。
文は弾幕の猛攻を浴びつつも、上手く隙間をぬって、かなりギリギリのラインで回避する。弾道の変わる変則的な魔法弾も危なげなく回避しつつも、しかしかなり辛そうな顔をしている。これで手筈は整った。――次のステップだ。

俺は弾幕を撃つ手を緩め、文に向かって退屈そうに言い放つ。

「マトモに反撃さえ出来てねぇなお前！それでよく今まで生き残ってこれたもんだなぁ　！？」
「ふん、この程度……まだ序の口ですよ。そちらこそ、スペルカードでも使ったらどう　です？」

減らず口を……まぁ良いさ。本命はここからだ。
俺は溜め息を吐くと、まるで見下すかの様に、文を睨む。

「…結局この程度か」
「…何ですって？」

文は俺の言葉にピクッとし、反応する。

「何が幻想郷最速だ？この程度の弾幕の回避に苦しんでたんじゃあ、意味無ぇよなぁ！？」
「な！何を！？――だ、弾幕の回避に速さは何も……」
「言い訳すんじゃねぇよウスノロ。どうせ…もう誰かに抜かされてんだろ？それもそうだよなぁ……その程度の動きじゃあ、直ぐに抜かされるに決まってるよなぁ！？」
「・・・」

文は俺の言葉に、急に黙り込む。うし……後もう少しだ。

「悔しいのか？どうなんだ！？――――悔しいなら、俺にテメェのスピードを見せてみろよ！『二番手』さん！？」

その言葉と同時に、何かが切れる音がする（比喩表現だけど）。その刹那、文から大量の妖力が溢れ出し、何処からどう見てもブチ切れてますって顔になった。作戦成功。

「…言ってはいけない事を言ってくれましたね……」

「あぁ？事実を端的に述べただけですけどぉ？それがどうかしたのか『二番手』さん？」

「…もう……許さん！塵と化してやる！！！」

…わーお、見事なキャラ崩壊だな。お陰で心の隙間が大量に出来たぜ。

「叩きのめしてやるわ！――――「幻想風靡」！！」

文がスペル宣言をすると、その瞬間、文の姿がふっと消える。そして俺に向かって飛んでくる超高速弾。

かなり速ぇが、魔法強化した俺の足なら問題なく避けられる。降り注ぐ大量の高速弾幕を、ひらりひらりと回避する。依然として俺に弾は当たらない。

…しっかしなぁ……口から出任せの挑発が、まさか成功するとは思わなかったぜ……もう少し罵るべきかと思ってたんだがなぁ……まあ良いか。勝てりゃあ何でもいい。

俺は未だ続く弾幕の中、マインに作戦実行の合図を送る。マインは俺の合図を受け取ると、他二名にも作戦決行の合図を出す。

…さーて、行動開始だ！

マインはスペカを取り出し、宣言する。

「行くわよ、精神「マインド・コンフュージョン」！」

マインのスペカが発動すると、文の周囲に蛇の様にうねうねとした弾幕が出現する。文は、突然の出現に驚きつつも、大きくバックし、弾幕の隙間に潜り込む。しかしそこからがこのスペカの真骨頂。隙間を抜けた先には大量のレーザーと巨大な魔法弾が、文を囲む様に襲いかかる。

一見そこまで難しくなさそうなスペカな訳だが、こいつは少し特殊で、相手の心に隙間が生じれば生じるほどに、相手はまるで混乱したかの様に、体の自由が利かなくなる。これがマインの能力『心を操る程度の能力』によるものだ。毎回思うが、かなり便利だよなコレ。

「ぐっ…」

文は苦戦しつつも、弾幕をどんどん避けていく。だが、文は徐々に体力を削られている。何故かって？心に余裕の無い状態で動き回ったら、疲れてくる……要は「病は気から」って事。焦りは余計な動きを生み、必要の無い疲れを生じさせる。見事なもんだろ？これが頭脳プレーって奴さ。

…さーて……追い討ちとばかりにもういっちょ行って見ますか！

「ウンディーネ、やれ！」

「承知しました！――水撃「アクアスプラッシュ」！」

ウンディーネのスペカ発動。これは、時間経過で周囲に炸裂する水弾を大量にばら撒くというものだ。兎に角大量の弾が飛んで来るから、かなり避けづらい。炸裂した日にゃあ、もうお陀仏するしかねぇだろうな。

「…っく……きっつ…って何!?新たなスペカ!?冗談でしょ!?」

只でさえしんどい処にウンディーネのスペカ。流石にそろそろヤバイだろうな。

「あ、文さん下がって下さい!このままじゃ不味いですよ!」

サクラが必死に声をかけるが、頭に血が昇った文にはその言葉は届かない。――そして届かせる気も無い。

「他人(ひと)の心配してる場合かよ!ゴーレムやれ!」

俺の言葉と共に、ゴーレムが雄叫びを上げる。そして宣言されるゴーレムのスペカ。

岩石「メガロックキャノン」

スペカ宣言と共に、ゴーレムの肩と腕が変形し、大砲の様な形になる。そしてそこから発射される巨大な岩石。見た目からかなり遅い弾幕だと思われそうだが、それは違う。こいつの速度は中々速い。鷹が水平飛行する速度と同等だ。そんな速度の大岩を喰らったら…

…まぁまず生きてねぇだろうな。

サクラは飛んでくる大岩を危なげなく避ける。これで余裕は無くなった。そして俺の予想が正しけりゃあ……

「ようやく…此処まで来れましたよ……」

首元に突きつけられる団扇。そして聞き覚えのある声。――やっぱりな。来ると思ったぜ……文！

俺はその事を口に出さず、驚いたかのような演技をする。

「…マジかよ……あの中をどうやって抜けてきたんだ…？」

「かなり…辛かったですよそりゃあ……でも……私は幻想郷最速ですよ…？この位……朝飯前ですよ……」

所々息を切らせているが、それでも声には力が籠もっている。よくやるよほんと。

俺は往生際の悪い奴の如く、負け惜しみ気味に言う。

「ま、まぁでも、お前もかなり疲れ気味だ……そんな状態で勝てると思ってんのか？」

「えぇそうですね……でも…ここで私がスペカを使えば……関係ないでしょう？」

召喚獣を通し、文がスペカを構えているのを確認する。…そろそろ頃合だな。ついでに言うと、この演技にも飽きてきた。という訳なんでとっとと終わらせる。

「…まぁ確かにそうだな……俺の負け――――――何て言うと思ったか！？喰らいやがれ　！」

俺はさっき消したスペカを出現させる。それに驚いた文は、咄嗟にスペル宣言をしようとするが……残念、俺の方が速いぜ！

集爆「ナローブラスト」

スペル宣言をすると、俺の後ろで巨大な爆発が生じる。こいつは、狭い器（スペカ）に詰め込んだ強大な爆裂魔法が、発動と同時に解放されるものだ。普通に使ったら周りが消し飛ぶが、スペカにしたせいか、かなり威力が落ちている。それが少し不満だが、一応スペルカード戦は『遊び』。遊びで簡単に殺しちゃあ不味いからな。

…まぁそれでもかなりの威力がある訳だが。現に後ろに居た文がかなり遠くまで飛ばされてるし。やっぱこいつは威力高ぇわ。

「あー！文さーーん！！！」

文が吹っ飛ばされた所を見たサクラが声を上げる。しかし、その驚いた勢いで止まってしまい、ゴーレムの岩石が命中する。岩石は割れ、その付近に土煙が舞う（岩が砕けて粉々になった）。

終わったな。

俺はそう思い、召喚獣を引っ込めてその場を去ろうとする……だが、

「魔符「魔人衝撃波」！」

その声を聞いた途端、付近に強い波動が降り注ぐ。俺は咄嗟にバリアを張り、その衝撃をガードする。…だが、威力が高すぎてバリアにヒビが入る。ヤバイと思い、魔力強化を行う。それが良かったのか、何とか防ぎきる事が出来た。

くそっ！一体何なんだ！？こんなに強ぇのはジェイル以来だぞ！？

俺は衝撃波が飛んで来た場所を見る。そこには、悪魔の様な翼を生やしたサクラが居た。

俺はその様子に驚いた。黒と白で構成された翼、顔に走っている赤い線、エルフの様に尖った耳、ハーピーの様な青っぽい毛で覆われた手…そして爪、服はさっきまで着ていた物と違い、赤と黒が強調された妙に派手なドレス、同じ奴とは思えない程の威圧感……

…本当にサクラか!?これじゃあまるで……魔物じゃねぇか!!

サクラはこっちを睨んだかと思うと、一瞬にして接近してくる。俺は危険を感じ、咄嗟にバリアを貼る……が、

サクラはこっちに来ないで、何処かへと飛んで行ってしまう。何なんだ?俺はそう思い、飛んで行った方を見る。そして思い出す。…あぁそうだ、あそこには爆発で飛ばされた文が居た。

程なくして、サクラは文を抱えて戻ってくる。…しかし様子がおかしいな。妙に焦ってるような……

「あ!れ、レクトさん!助けて下さい!」

「…はぁ?…取り敢えず、何を助けるか言え。そうしなきゃ解らん」

「あ、文さんが……」

「…?　文がどうした?」

「文さんが起きないんです!どれだけ揺すっても起きないんですよ!もうどうしたら良　いか…」

…まさか……威力が強すぎたのか!?そ、そんな筈はねぇ!どう考えても死ぬ様な威力じゃ無かった筈だぞ…!

俺は急いで文の容態を確かめる。一体どんな状態なん…だ……

…ちょっと待て。何か苦しそうなんだけど。まるで首を絞められてるかの様に……ていうか絞めてるんじゃねぇか！！馬鹿か！！！ほんとに馬鹿かあぁぁ！！！！

「文さん！文さん！起きて下さい！！文さん！！」

「ご、ごふ！ぐ…ぐるしい……」

「…取り敢えず…取り敢えず手を離せえええええええぇぇぇ！！！！」

第二十七話　幻想の日々？：召喚士の受難（後書き）

何か今回、レクトがやり放題やってくれたなぁ……
召喚獣がスペカって、ある意味凄くないか？…え？そうでもない？
…すいませんでしたｏｒｚ
今回初めてサクラが魔物化致しました。小説だと伝えきれないのですが、かなりカッコイイんですよこれが。今回はあまり活躍しませんでしたが、これから先活躍するんで、ゆっくりまっていってね！！

今回の補足

マイン
自分が考えたオリジナルの召喚獣です。ネーミングセンスが無かったんで、かなり単純な名前になってしまいましたｏｒｚ
マインド→ドを取る→完成。なんじゃこりゃ。

召喚獣のスペカとレクトのスペカは特に元ネタ無し。本文で説明してるんで割愛します。

サクラのスペカは…長くなるんで、次の機会、もしくは投コメで補足します。

その他諸々質問があれば、どんどん書いていって下さいね。

次回は…ちょっと未定。
もう一回レクト回になると思いますが……方針は決まってないです。

まぁ気長に待っていて下さいｏｒｚ

第二十八話　幻想の日々？：疲れは後からどっと来る（前書き）

この話を投稿したら、テストやら何やらでしばらく投稿出来そうにないです。気長に待っていてくださいｏｒｚ

第二十八話　幻想の日々？：疲れは後からどっと来る

…取り敢えず意識ははっきりしてきたな。やれやれ……助けるつもりが、殺そうとするなんて……マジで馬鹿かよ。…何でこんな奴に俺の魔法がバレたんだよ……確かに強いが…完全馬鹿じゃねぇかよ……

…まあ良いか。それよりもこいつだ。

「…大丈夫か？まだ苦しい所はあるか？」

「…何とか大丈夫。はー…死ぬかと思った……」

…おーし、大丈夫そうだな。これでお役御免だな。全く、面倒な事させやがって……何の利益も無いのに人助けとかしたくねぇんだけどな……

あっこいつ妖怪だった。人じゃねぇじゃねぇか。

体をぐっと伸ばし、溜め息をする。あぁかったりぃ。とっとと帰りたいぜ…

そんな感じにダルそうにしていると、サクラがこっちに近づいてきた。つーか早く元の姿に戻れよ……決行威圧感あるんだぞそれ…

「文さんを助けてくれてありがとうございます！何とお礼をすれば良いものやら……」

「礼がオーバー過ぎんだろ……つーか原因お前だからな？お前が首絞めたからこうなったんだからな？そこんとこ理解しろよな」

「はい…以後気をつけます……」

「そうしろ」

サクラはしゅんっとなって、また文に謝る。だからそれがオーバーなんだって。そんな謝る必要ねぇだろ。これで２８回目だぞ……申し訳ないと思うのは良い事だけどな……やりすぎたら、只の嫌がらせだから。解ってんのかこのでか乳は。

…あー…そーいや、サクラのあの姿は何なんだ？色々と気ぃ取られてて気付かなかったけど、妙におっかねぇ魔力を持ってるんだが……何つーか…あれだ。うちの爺さんが使役していた魔王とか言うのと、気色が似てんだよなぁ……いや、こいつはそれ以上な感じがするが。

…考えてても埒が明かねぇ。直接聞いてみるか。

俺は、さっきから文に謝っているサクラに近づく。サクラの様子があまりにも見っとも無いが、溢れ出す魔力のせいで、近づくだけなのに妙な緊張感を感じる。足は重く、何故か汗も流れる。

「…おい」

何とかサクラに近づき、声を掛ける。サクラは俺の声に気付き、何でしょう？と返事をする。

「…お前のその姿は何だ」

妙に低めな声で、質問をする。サクラは自分の体を見て、あぁと納得すると、俺の方を向き、口を開いた。

「これは私の罹っている病気によるものです」

「病気？…何の病気だよ」

「魔物病という、病気です」
「…聞いたことのねぇ病気だな。どんなもんなんだ?」
「これはですね……」

魔物娘説明中・・・

「…成る程な。つまり、お前はその病気の原因を探っていて、解決の糸口とも言える『誰かの記憶』を、何とかして思い出そうとしている訳だ」
「…思い出す…とはまた違うかもしれませんが、その見解で良いと思います」
「…何ともまぁ、大変そうなこって」
「えぇ…ですが、今申し上げた通り、記憶が徐々に鮮明になってきましたので、もう少し…そう、何かキッカケがあれば或いは…」
「…キッカケ……か」

…マインの能力を使えば、心の中にある魂の記憶を覗けない事は無いが……

どう考えても利益が無い。

見返りも無しに行動すんのはちょっとな……俺も善人じゃねぇんだ。他人の事情に一々関わってる暇はねぇ。

「…あー…悪いが俺は協力出来そうに……あ」

…そうだ。こいつら妖怪の山関係の連中じゃん。
つー事はさ。『俺が山に入る事を許可する』って事を要求すりゃあ良いんじゃねぇか!そうすりゃあ、妖怪の山にしか生えてねぇ、

珍しいモンが手に入るかもしれねぇし……
…そうだ、そうすりゃあ良いんじゃねぇか。何で直ぐに思いつかなかったんだ俺は。

「…？どうかしたのですか？」

そんな事を考えている最中に、サクラに話しかけられる。
…正直、駄目な気もするが……まぁ良い。当たって砕けろ。

「…ちょっとした取引をしないか？」
「…取引……と言いますと？」
「あぁ、それはだな…」

少年説明中・・・

「…という訳だが、どうだ？」
「どうだって……ちょっと待ってくださいよ！」

俺が説明し終わる頃に、文が介入してくる。

まぁ予想通りなんだが。

「そんな事は許されませんよ！人間の登山許可は、元より出ていないんですよ！？」
「んなこたぁ解ってんだよ。だから取引だつったろ？」
「ですが…！」

…やっぱり堅ぇな。しゃーない、口から出任せで行くか。

「…お前はこいつを助けたかぁねぇのかよ?」
「…何ですって?」
文は急に声のトーンを低くし、俺を睨む。…食いついたか。
「俺はこいつ(サクラ)の事は良く知らねぇけどよ。こいつは苦しんでる筈だぜ……訳の解らねぇ記憶と、見覚えの無い病気によぉ」
「・・・」
文は黙り込み、顔を少し下に向ける。どうやら本当だったらしい。俺すげぇ。
「こいつがこいつの世界に居た時は、その事で苦労した筈だぜ。何せこんな姿で、こんな魔力。…どうあったって避けられちまう」
「な、何で分かったんですか!?」
サクラは俺の言葉に驚嘆する。…マジで図星かよ。いや本当なのか?それとも演技か?……解らん。
…まぁ良い。続きを話すか。
「お前は俺より長くこいつと関わった筈だ……だったら解るだろ――こいつの思いっ　てヤツを」
「・・・」
だんまりだな。まぁそうだろうけど。
「…只許可を出すだけで、解決の糸口が見えてくるんだ。そう考えたら安いもんだろ」
「…ですが……」

…あーもう！煮え切らないな……

俺は溜め息を吐いて文を見る。文の目は、決断を戸惑っている目だ。あれじゃあ、駄目だな。幾ら待っても絶対に答えは出ねぇ。

…しゃーねぇな……少しばかし、優遇してやるか。

「…解った。だったらこれでどうだ？」

俺はそう言って、マインを召喚する。本日二度目の登場だな。久しぶりに出すから、二連続での召喚は止めておきたいんだが……そうも言ってらんねぇ。

「…何をする気？」

文が咄嗟に身構える。しかし俺は淡々と喋る。

「まぁ落ち着けよ……――マイン。サクラの心を覗け」

「えー…かなりメンド臭いんだけど…」

「んなこたぁ解ってるっつうの。少しだけで良いからよ……やってくれ」

「…はぁ……解ったわよ…」

マインはサクラの近くに行き、手を翳す。マインの手に黄色の光が集まる。

…これで準備は済んだ。

俺は二人に向き直り、言い放つ。

「今からマインが心を覗く。それで何かしら情報が得られたら許可を寄こせ。そうでなきゃあ寄こさなくて良い……これなら良いか？」

「…で、でｍ「分かりました。それで行きましょう」さ、サクラ！？そ、そんな簡単に…」

戸惑う文に、サクラは無言で真剣な表情で見つめる。文はそれを見て諦めるしかないと悟ったのか、溜め息を吐き、頷いた。

「…良し。良いぞマイン、やれ」

「…はいはい……それじゃあ動かないでね」

マインの手から放たれる黄色の光がサクラを包む。それはやがて複数の小さな光の玉へと変わり、フオンフオンと音をたて、サクラの周囲を回り始める。

文は未だ険悪な顔をしているが、サクラの顔は至って涼しいものだ。普通、警戒の一つでもするものだが、それをしていない。俺を信頼しているのか…それとも相当肝が据わっているのか……良く解らねぇな。

…ん？何かマインの表情が歪んでるな。何か嫌のモンでも見えたか？

「（…どうした？）」

召喚士の特権、召喚獣との心内会話でマインに問う。マインは若干言うのを躊躇ったが、俺に心を向け、答えた。

「（…この娘……心が二つもあるわ）」

「（二つ？…魂が二つあんのか…？）」
「（えぇ…でも変なのよ）」
「（主に何処が？）」
「（…一つは真っ白なの……赤ん坊かって位に真っ白。もう一つは…灰色……普通じゃ有り得ないわよ…こんなの……）」

…真っ白と灰色……何じゃそりゃ。
…そういやマインから、前にこんな事を聞いたな……

心というのは光と闇で構成されている。マインが言うには、心ってのは、円形状の中に二つの色を見せるそうだ。光は白、闇は黒、普通はその二色で、善人である…又は光魔法を扱う者だと、心は白く塗られていき、悪人…又は闇魔法を扱う者だと、心は黒く塗りつぶされていくそうだ。

完全に白く塗りつぶされるのは、赤子か動物のみだけで、そうそう塗りつぶされないそうだが、完全に黒く塗りつぶすのは、意外と簡単なんだと。マイン曰く、光より闇の方が心を侵食しやすい――何故なら、どれだけ光に身を委ねても、結局のところ、欲という闇には勝てないからだそうだ。

心を真っ白に染めるのは不可能。そして他の色が発生する事は有り得ない。『もし』でも絶対に有り得ない……て言っていたな。

まぁたった今、悉くぶち壊されたワケだが。

…それにしても……白は解るとしても、灰色って何だよ…

「（知らないわよ……あー…でも、一つだけ考えられる事はあるかな）」

「（そりゃ何だ？）」
「（――光と闇が混ざった……かな）」
「（…つまり混沌って事かよ）」
「（そうなるわね…）」

…成る程な。取り敢えず、こいつ（サクラ）は条規を遺脱した存在だって事は解った。それ以外は、こいつのもう一つの方の心の記憶を探るしか、知る手立てはねぇって訳か。

…何なんだよ全く……

――――――――――――――――――――

三十分位経った頃、サクラに纏わりついてた光が消えた。どうやら調べ終わったらしい。

「…それじゃあ、取り出した記憶を見せるわよ。頭出して」
「はい。どうぞ」

サクラは何の抵抗も無く、スっとマインに頭を出す。ほんとこいつは警戒って言葉を知らねぇのかよ。絶対こいつ騙されやすいタイプだ……

マインは、サクラの頭に手を翳し、さっきと同じ光を出す。光はサクラの頭をくるくると回り、徐々にサクラの頭の中に入っていく。
サクラは、入っていく記憶の一つ一つを、噛み締めるように見ている……様に見える。
一つ、また一つと光がサクラの頭に入っていく――――あ、全部入った。

サクラは目を瞑り、記憶を見ているようだ。偶に驚いたり、納得していたりしている。一々反応しなくてもいい気がするんだがなぁ……何？そんなに良い内容だった？

粗方記憶を見終わったようで、サクラは目を開けた。だけどよ…何であんな苦虫を噛んだ様な顔してるんだ？何か不備でもあったか？まぁ取り敢えず聞いてみるか。

「どうだ？いい物は見つかったか？」

「…あるにはあったのですが……」

そう言ってサクラは考え込んでしまう。何だよ一体…やっぱ何か不備あったか？

「…新たに分かった事が多すぎて……ちょっと混乱してるんです…役に立つかどうかは……この場では決められないです…」

「…マジか」

そんなに多かったのかよ。どんだけ引き出したんだよマイン。

「（灰色の方から使えそうなのが多かったのよ…だから、取り敢えず手当たり次第に）」

「（…成る程お前らしいな――灰色か…そっちが問題の心《魂》なのか？）」

「（でしょうね……探った記憶からして、真っ白いのがあの娘の物っぽかったし）」

…あー……色々と考える事が多くなってきたぞ……考えるのは嫌いじゃあねぇけどよ……多すぎると面倒なんだよ……

…つーか真っ白いのがこいつって……マジで何者だよ……聖母

か何かかよ…？
…いや聖母でも無理があるだろうな……
「…レクトさん」
考え事中の俺に、サクラは少し俯きながら話しかけてきた。
「…何だ？今ちょっと考え事中だから後にしてくr「許可の件…少し待って貰えませんか？」…はぁ？」
…情報が多すぎてどうしようもねぇってか。一体どんな記憶だったんだよ……
「…あー……まぁ待つのは良いけど…早めにして欲しいぜ……こっちにも都合があるんだからよ」
かなりダルめに発言する。正直、そろそろ疲れてきたんだよな…
…早く帰りてぇ。
「どの位までなら良いですか？」
「あ？…あー……まぁ、二週間位か。それ以上は待てねぇぞ」
「…そうですか……」
サクラはそう言って、少し考えるが、直ぐに顔を上げた。早いなおい。
「…明後日位はどうですか？」
「…はぁ？？？余裕一日しかねぇじゃん。そんなんで良いのかよ」
「大丈夫です。それだけあれば充分ですよ」

ニッコリと笑顔で返事をしてきたサクラ。…いやまぁ……そっちが良いって言うなら、別に良いんだけどよ……纏まんのかよそれで。

「…ちょっとサクラ、こっちに来て」
「？　どうかしましたか？」

突然、文がサクラを呼び、凄く小さい声で話し出す。まぁ多分、もうちょっと余裕を作るべきだ、とか、そんな直ぐに許可は降ろせない、とか言ってんだろうな。
サクラは、終始笑顔で返答している。何考えてんのか知らねぇけどよ、あいつは何であそこまで笑顔で居られるワケ？七割方位か、ずっと笑顔だぞあいつ。
…普通はもう少し深刻に考えるモンだと思うんだがなぁ……そろそろ、あいつは能天気何じゃないかとか思えてきたぞ……いやだってそうだろ？大体が即答、警戒心０、後の事をちゃんと考えてんのかって位の発言……どう考えても能天気の行動だろ……

「…だから大丈夫ですよ文さん。私を信じてください！」
「…あんたってさ、意外と頭良いよね。感心したわ」
「ありがとうございます！それでは言って来ます」

…何か知らんが話は済んだみてぇだな。何話してたのかは知らねぇけど……まぁ何でも良いか。こっちはさっさと帰れればそれで良いしよ。

「話は済んだか？」
「はい。先程と変更無く、明後日に…そうですね、霧の湖で会いませんか？」
「あぁそれで良い。文と二人で来いよ」

「分かってます――――あぁそうでした！」

サクラは何か思い出したらしく、懐からごそごそと何かを取り出した。どうやらスペカっぽいが……

……ん？何か見覚えあるぞそれ…何処だっけな……

「ありがとうございました！」

「何がだよ」

「スペルカードの模写（コピー）です。このスペルカードは、大切に使わせて貰いますね」

……は？コピー……だと……？…まさか……！

サクラはその手に持っていたスペカを、俺に見せる――――間違いない……俺のスペカ…集爆「ナローブラスト」だ。

……おいおいマジかよ……こいつ……スペカをコピー出来るのかよ……インチキ過ぎるだろクソが。つーか勝手にコピー済んじゃねぇ。返せコラ。

「それでは私達は行きますね――――文さん行きましょう！」

「はいはい……それではレクトさん。明後日お会いしましょう」

「あ、おいちょっと待……」

俺の静止の声が届くよりも先に、サクラと文はとっとと飛んで行ってしまう。持ち逃げされたぞおい……ふざけやがって…

…まぁ、取材を回避出来たし、これで帰れるから別に良いか。追

うのも面倒だしな。

「…ねーレクト？そろそろ帰してくんない？」
「面倒だから後でな」
「いや今しなさいよ」
「だから面倒だっつってんだろ。暫く浮いてろ」
「…ヒド」

文句を垂れてるマインは放っておくとして……いい加減、出てきて欲しいんだがな。

「誰が？」
「…今に解る」

俺は人里の壁の方を向き、言い放つ。

「ジェイル！居るんだろ？いい加減出て来い！」

俺の声が周囲に響き渡る。それと同時に、人里の壁に出来た影から、見慣れた巨体が出てくる。――ジェイルだ。
マインは、ジェイルの登場に驚いて、ポカンとしている。何してんだか。

「良く己（おれ）が居ると解ったな」
「は、それ位解るっつうの。――どうせ連れ戻しに来たんだろ？」
「あぁそうだ……が、他にも用が有ってな」
「…大方想像はつく……――サクラの事だろ？」
「その通りだ」

やっぱりな。あいつはジェイルの世界に居たらしい魔物共と気色が似てるからな……色々と疑ってんだろ。

「…で、お前はあいつを見てどう思ったワケ？」

「…害は無い事は解った……だが」

そう言ってジェイルは黙る。どうも、まだ疑ってる様な感じだな。まぁあんな姿されたら疑いたくもなるわな。

「…魂が二つ有る事が気に掛かる」

「えぇ!?何でそれを…」

まさか解るとは思わなかったのか、マインは驚きのあまり聞き返してしまう。

…実際俺も驚いてるんだがな。盗み聞きしていたにしては、あまりにも距離が離れすぎている。そう考えたら、解るのは可笑しすぎる。

「あぁ言ってなかったな。――己は心の影……つまり闇を見る事が出来る。それで覗いて見たのだが……まさか二つも有るとは思わなかったな」

「…おいおいマジかよ……お前どんだけ出鱈目なんだよ…只でさえ強ぇのによ……」

「…己からしたら、お前の力も出鱈目だがな」

…何だよ、お互い様とでも言いたいのか？冗談じゃねぇ。てめぇの出鱈目と俺の出鱈目を一緒にすんなクソが。

「…まぁそれは良い。それよりも、パチュリー様がお待ちかねだ。早く戻るぞ」

「はいはい……あぁ……しんど…」

変に疲れた。さっさと帰って休みてぇな。

…まぁその前にパチュリーの実験に付き合う羽目になるんだろうけどよ。

俺とジェイルは空を飛び、紅魔館に向かう。正直、ジェイルの影で一気に紅魔館まで移動すりゃあ良い気がするんだが、弱体化の影響で一人しか移動させられないそうだ。ったく…役に立たねぇな……

…このまま真っ直ぐに帰れば良いだけだったんだが、ジェイルが突然こんな事を言い出しやがった。

「『あの事件』の時の事を話してくれないか？」

…クソ面倒臭ぇぞオラぁ。思う事があるとか知るかボケ。

…ったく、しゃーねぇな……話せって言うなら話してやるよ。『あの事件』の事をよぉ……

「…俺はあの時……」

第二十八話　幻想の日々？：疲れは後からどっと来る（後書き）

気が付けば、お気に入り登録件数が１０件を超えてました。
そしてポイントも５０という、低いがキリの良い数字となりました。
作者は嬉しすぎて、思わず拍手しちゃいました。
いや本当にありがとうございました！

今回の補足

マインはレクトの相棒的な存在です。それ故に性格もとても似ています。

サクラの魂については、後々になって分かります。
：設定としては、かなりのものになっちゃいましたけどね！

サクラの「技を盗む程度の能力」が初めて使用されました。サクラは、今後東方キャラのスペカをどんどんパクっていきます。鬼畜スペカもパクっちゃいますよ。

ジェイルの影はかなり高性能です。弱体化してなかったら、紫なんて目じゃないって位高性能です。

次回はレクトの事件回想です！かなり長くなる事は決定事項なんで、かなーり時間掛かります。それと前書きでも書いた通り、テストやら何やらで忙しくなるので、次話は気長に待ってて下さいｏｒｚ

事件回想？前：ｓｉｄｅ　レクト（前書き）

お久しぶりです。ようやく出来ました・・・
遅いよほんとｏｒｚ

＊３／１５：作者の編集ミスにより、最初の文が抜け落ちておりました。そのせいで意味不明な始まりになってしまいました。大変申し訳ございませんでしたｏｒｚ

事件回想？前：ｓｉｄｅ　レクト

何故か地下なのにある窓。そこから浴びせられる月の光を背に、俺は魔法薬の製作の為に、材料と属性の組織構成表を作っている。高度な魔法薬であればある程、組織構成表は細かくなっていく。その中の一つでも違えば、出来る薬が変わっちまう。なんでこの作業はかなり重要。何があっても間違えられねぇから、俺は一つ一つ、狂いの無い様に書き込んでいく。

…三年前からやってたとはいえ面倒な作業だぜほんと……もう少し楽な方法はねぇのかよマジで。俺の神経擦り切れまくりなんだけど……

まぁ出来る物は良作ばっかだから良いんだけどよ…

「あぁ～…ダル」

体をぐっと伸ばし、肩を回し、軽く柔軟をする。同じ体勢で居ると血流が悪くなる。そのせいでダルくなる。研究も大事だが、息抜きも必要だ。

柔軟を済ませ、俺はまた机に向かう。この魔法薬の構成表は五枚目。大体全部無駄に細かかったから、無駄に時間掛かったの何のってな。昼に始めた筈なのに、もう真夜中だ。集中していると時間は速く過ぎ去って行きやがるなほんと…

俺は属性の欄に火、風、闇と書き込む。これらの属性の並びも重要だ。この並びが違えば、完全な別物が出来てしまう。もし出来たとしても、効能や得られる恩恵も違っちまう。はっきり言って面倒だ。細かく説明すると……正直長くなるからしたくねぇ。あれ、説明するとこ多くて面倒なんだぞ…

…誰に対して文句言ってるんだ俺は？

…まぁ良いか。後は材料を記入して……あーと…エゾテングダケと…ベニテングダケ……っと。

…うし終了。あー…長かった……でもまだ十枚位書かなきゃならねぇんだよなぁ……ダリぃ。

「相変わらず研究熱心ね」

ふと声のした方を向くと、そこには淡いピンク色のネグリジェの様な服を着た女が居た。――パチュリー・ノーレッジだ。

「まぁな……けど、面倒な事この上ねぇぜ？見ろよこれ。細か過ぎて見づれぇぞ」

「どれどれ……確かに見づらいけど、かなり出来が良い――貴方の世界の魔法技術は本当に凄いわね」

「そうかぁ？確かに良い物は出来るけどよぉ……労力に見合った量が出来ねぇんだぜ、これ」

「それだけの価値はあるでしょ？――なら問題ないわ」

「…そうかい」

どうもパチュリーが言うには、俺の世界の魔法技術はこの世界（幻想郷）に比べ、数百年先を行っているそうだ。魔法薬の製作は勿論、属性の数や魔法の製作法、魔術道具（略して魔具）に至るまで、全てにおいて上を行っている。

…正直褒められても嬉しくはない。普段から使っていた技術。あまりにも馴染み過ぎたこの技術でそんなに感心されてもな……色々と複雑だ。

「…うん、やっぱり凄いわ。何回見てもこの構成表は素晴らしいわ」

「…魔女の考える事は解らねぇ……まだ薬も出来てないのに感心してどうするんだよ」
「…解らないの？どれだけ研究しても作り出せなかった技術が目の前にある。どうあっても得られなかった物がここにある――――こんなに素晴らしい事は無いでしょう？」
「…まぁ解らねぇ事はねぇけどよぉ……目を輝かせる程かぁ？」
「いつも使ってるから解らないのよ。この技術を手放したら、どれだけ素晴らしい物だったか……ハッキリと理解出来る筈よ」
「…あっそう」

素っ気無い返事をして、俺は机に散乱した本の一つを手に取る。俺が持ってきた本。世界でも三冊しかないとか何とか言われてる本だ。こいつは、その噂に見合うかの如く多くの魔術知識が詰め込まれている。光然り、闇然り。

もはや見尽くした本の中をパラパラと捲っているうちに、腹が鳴り、喉が渇く。昼間から何も食ってなきゃあそうなるわな。

俺は、一人黙々と構成表に目を通し続けてるパチュリーに一言言い、紅茶を飲みに、図書館内にある給湯スペースに足を運んだ。

――――――――――――――――

さて給湯スペース。早速紅茶を飲もうとしたんだが、何故か子悪魔と接触。何となく丁度良かった。研究をし続けて体がしんどくなったんでな。気晴らしついでに、適当に話す事にした。
内容は他愛のない物だ。愚痴やら恋愛話やら、兎に角適当に話した。
俺は恋愛に興味は無いが、話すだけの知識はある。本に書いてあ

ったからな。実際には居ねぇけど。

「…レクトって恋人作る気無いの？」
「ダルいからいらねぇ。色々と面倒そうじゃんあれ」
「いやいやいや。居るか居ないかじゃ、全然違うわよ」
「例えば？」
「心にゆとりが出来るとか、毎日が幸せになるとか…」
「精神的にしかメリットねぇじゃねぇか。身体的にとか経済的にとかねぇじゃねぇか。――だったらいらねぇよ」
「…後で後悔するわよ」
「ハハ……ないない」

恋人とかほんと必要性あんのかね……役に立つのなら別に良いんだけどよ、役に立たないのだったら困るじゃねぇか。それなら別にいらねぇよ。俺には召喚獣が居るから、困る事なんか何もねぇし。

…第一よ。恋する事ってそんなに必要か？役にも立たねぇモンじゃねぇか。別に恋したって魔力が増えるワケじゃねぇし、知識が増えるワケじゃねぇし……ハッキリ言って、腹の足しにもならねぇ。邪魔なだけだ。

ほんと毎回毎回本読んでて思うけど、恋愛した奴の心理が意味不明なんだけど…胸の高鳴りとか、ときめくとかワケ解んねぇ。何なんだよその馬鹿らしいのは。理解出来ねぇ……マジで理解出来ねぇ……

…とか口に出したら、色々な奴から批判浴びるだろうなぁ……あー面倒臭ぇ……

「…ねぇレクト？」
「あ？何だよ」
「…いや、大した事じゃないんだけどね」
そう言って小悪魔はもじもじとし、少し下に俯く。…何だよ一体。
「…もし、レクトの知り合いがレクトを好きだって言ったら……どうする？」
…何だその馬鹿らしい問題。くだらねぇなオイ……
…まぁ、もしそんな事言われたら。
「お前の目は節穴か？って言うな」
「…え？」
俺の回答に、小悪魔がキョトンとしている。
「…何だよ。何か問題でもあんのか？」
「い、いや…その……それ相手に対して失礼じゃない？」
知らねぇよそんな事……事実なんだから別に良いじゃねぇか。
が、そんな事を言ったところで、またギャーギャー騒ぐ事は間違い無しなワケだから…
「…俺みてぇな合理主義者、選んだって何も良い事はねぇよ」
俺はそう言った。

「…それでも、相手が好きだって言ったら？」

…はぁ……何でそう食いついてくんのかね。

…まぁ、そうだとしたら、答えは一つだけだ。

「あっそ」

「…ハァ！？あっそって何よ！？それが女の子に対する態度！？信じられない……」

「うっせぇよ。元々恋愛なんざぁ興味もねぇんだ。そんなの一々相手にしてられっかよ」

「うわっ最低……」

「最低で結構。俺は元々最低だからな」

もう既に吹っ切れてるから。俺はそういうの早ぇんだ。

「…何それ開き直り？」

「別に。昔からそう思ってただけだし」

「やっぱただの開き直りじゃん」

「だから違ぇってのの」

「いやでもそうじゃん」

「だから違う」

「でもやっぱり」

「違うっつーの」

「でも」

「違う」

「・・・」

「・・・」

無駄なやりとり。そして沈黙。その沈黙を破るかの様に俺と小悪魔は叫ぶ。

「やっぱり開き直りでしょ！？」

「だから違うっつてんだろぉがあああああああぁぁぁぁ！！！！」

紅魔館内に響き渡りそうな叫び。悲痛でも喜びでもなく、只の叫び。誰かが聞いても、多分全員が「あぁ何かやってるな」としか思わない程度の叫び。

…まぁ要は意味が無いのだ。

「…何やってんだろうな俺ら」

「…知らないわよ」

はぁ……疲れてるせいなのか？こんな無駄な掛け合いをやってんのも、ダラダラと本棚の間を歩いてるのも、紅茶を飲もうと思ったのに結局飲んでないのも、全部疲れてるせいなのか？そうなのか？

…はぁ……ダリぃ……

くだらない事をしている。そんな事は解っている。幻想郷に来て、それが余計増えてるのも解ってる。何故かって？嫌でも毎日人と付き合わなきゃならないんだ。そうもなるだろ？

…まぁそんな事はどうでも良い。それよりこの後どうっすかなぁ

……このまま構成表を作んのも良いけど、魔法薬の製作にも入らねぇとな……！

俺の考えを妨げるかの様に、俺の頭に何かのイメージが流れ込んでくる。

『消える』…只その言葉だけが俺の頭を過ぎる。

……あ？何だ…？消えるだ……？一体何がだよ……？

不意に周りを見渡すが、特に変わったものは無い。

…気のせいか？疲れすぎてて、幻聴でも聞いたのか？

…まぁ良いか。さっさとパチュリーの所まで戻るとするか。

――――――――――――――――――――

「おーいパチュリー生きてるかー」

「…人を勝手に殺すな」

「お前は魔女だろ」

「まぁね」

あぁ大丈夫そうだ。前に本取りに行った、たった数分の間で喘息が発症して、とんでもない事になった事があった。それ以来、パチュリーの側を離れて戻ってきたら、思わず安否の確認を取るようになっちまった。条件反射って怖ぇ。

「…あ、そうだレクト。貴方に言う事があるのよ」
「あ？一体何だよ」
「今、月の光が差してないでしょ？」
「あ？…あーほんとだ」

さっきまで俺の座っていた椅子に、差していた筈の光が無い。月ってこんな早く隠れるもんだっけ？それとも雲か？

「何で差してないか解る？」
「…あー……雲に隠れたとかじゃねぇの？」

そう言うと、パチュリーはハァっと小さく溜め息を吐く。

「良く見なさい。あれの何処に雲があるのよ」

そう言って、俺を窓の真下まで押し出す。ダリぃとは思いながらも窓をチラリと覗く。するとそこには何も無い――――完全な闇なのだ。何じゃこりゃ。

「…どうなってんだこりゃあ？何もねぇぞオイ」

そう言った俺に、パチュリーは何気なく口を開く。

「これはね、幻想郷を大きく揺るがす異変が起きてるからなのよ」
「へぇー…今異変起きてんのか」
「えぇそうなのよ」
「ふーん」

ふーんそうかー異変かー大変だなそりゃあ。

…え？

「何でそんな軽く言ったんだよ」「何でそんな簡単に流したのよ」
「え」「え」

「「・・・」」

…え、何でお前がそんな驚くワケ？そして言いだしっぺがキョトンとしてるとか何だこれ。

「…まぁそんな事はどうでもいいわ」

あ、スルーしやがった。無視すんなやゴラァ。

「…多分、これから咲夜が来るわ。そうしたら、文句を言わないで付いて行ってね」
「あ、オイ！俺の意見は無視か……」

俺が言葉を言い切る前に、突如――――――『世界』が止まり出す。音が消え、周りの色が灰色に染まる。目の前で動いてた筈のパチュリーや、後ろでボーっとしていた子悪魔がピクリとも動かなくなる。

…咲夜か。あんにゃろ、マジで俺に用があんのかよ。面倒臭ぇなほんと……

…あ？俺が何で止まった時の中で動けるかって？そりゃあこいつのお陰だ。

俺の後ろに、白い衣を纏った女性が出現する。白い肌に白い髪、何もかもが白尽くしな女性。こいつの名前は『クロノス』時の神だ。時の神――時を司る存在。そのせいか、かなり高レベルな神らしい。まぁ時の神って言ってる時点で色々と出鱈目だけどな。

クロノスは神である為、俺の『世界』に縛り付ける事は出来ない。契約は行ってるから、俺に従順ではあるんだけどな……まぁそこは譲歩するけど。

こいつは普段俺の体に宿っている。当神曰く、俺の体は住み心地が良いそうだ。俺は家じゃねぇんだけどな……まぁこいつが体に憑いてるお陰で、俺は時に関する魔法や呪文は一切効かない訳だ。

…しかしなぁ……異変とか面倒なんだけど。関わりたくないんだけど。今からでも逃げられないかねぇ……

「それは許されません。貴方はこの異変を解決しなければなりません。それが運命です」

「…時の神が運命言うんじゃねぇよ。お前は時の事だけ考えときゃあ良いんだよ」

「それは間違った考え方です。何度言えば解るのですか？」

「一生解りたくねぇ」

そんな掛け合いをしていると、図書館の扉を開き、メイド服を着た一人の女性が入ってきた。――十六夜咲夜だ。

咲夜は俺の所まで来ると、少しだけ嫌な顔をして俺の手を引いた。

「一緒に来て貰うわよレクト。理由は……解ってるわよね？」

「…あぁ。解りたくも無いのに解っちまったよ」

…このまま拒否っても、クロノスが愚痴愚痴うるせぇよなぁ……

…はぁ…しゃあねぇ行くか。

俺は咲夜と共に、紅魔館の外へと向かった。

――――――――――――――――

「…何だよコレ……一体……どうなってんだよ!?」

これが俺の第一声。紅魔館の外に出て、妖精メイドがボロボロになってそこら中に倒れてたり、庭やら壁やらに、穴や亀裂が走っている。そして何故か居た俺の世界の魔物（モンスター）と妖怪の軍団。

俺は絶句した。このあまりにも有り得ない状況に、奴らの今までとはまるで違う魔力の大きさに、そしてその数に。

「…やっぱりもたなかったか……予想はしてたけど……早すぎよ……」

咲夜はこの事をある程度予想していたのか、そこまで驚いていなかった。

「…何であいつらが居るんだ……ゴブリンとかマザーボムとか何でこんな所に居んだよ……」

「知ってるの？」

「あぁ……――俺の世界に居たからな」

「…となると、あいつらは貴方に任せた方が良さそうね」

「あ？何でそうな……はいはいやりゃあ良いんだろやりゃあ」

正直、全く気乗りしないが、あいつらの対処法を知ってるのは俺だけ。何も知らねぇド素人に任せる位なら、俺がやった方が効率的か……はぁ……面倒臭ぇ……

俺はダルい足取りをしながらも、魔物共の前までコツコツと歩いていく。魔物共も俺の存在に気付き、俺を殺そうと、一気に攻め込んでくる。だがそれは、クロノスの時止めにより無効化される。俺はその間に召喚獣を召喚する。

今回召喚するのはこいつらだ。

赤い肌に赤い髪、常に炎を纏っているという上半身露出で筋肉質な炎の魔人『イフリート』

青い肌に青い髪、常に冷気を纏っている怪しげな雰囲気を放つ氷人『シヴァ』

同じく青髪だが肌は白、青いドレスを着た見た目１５歳位の水の精霊『ウンディーネ』

肌以外の服から髪に至るまで全てが緑、見た目８歳程度の幼女な風の精霊『シルフ』

巨大な体に出来上がった筋肉、見た目がかなりゴツくて怖い巨人『タイタン』

体の全てが岩石、ゴツくてデカいだけじゃなく無駄に硬い岩兵『ゴーレム』

そして時の神『クロノス』

…おし、ＯＫだ。奴らをリンチする準備は整った。絶望を与えようとして、逆に与えられるという驚愕と恐怖を思い知らせてやる！

「クロノス、時間停止解除！」

「解りました――――世界よ……動き出せ」

止まった時が――――動き出す。それと同時に全召喚獣に攻撃指示を煽る。

炎が舞い、氷塊が飛び交い、水柱が突き出て、竜巻が発生し、拳が宙から振り下ろされ、岩石が圧迫し、体の時が止まる。敵はその突然の状況に対応しようがなく、無数とも言える攻撃に呑まれて行く。

俺は召喚獣のパワー制御をしつつも、魔法を唱え、敵を完膚なきまで叩き潰す。切れることの無い無限の魔力を媒体に発動する魔法は熾烈を極め、留まる事を知らない。敵の一部が防御魔法を使用し耐え凌ぐものの、あまりに多すぎる攻撃の強襲に耐え切れる筈も無く、沈没する。中にはその攻撃を潜り抜け、攻撃を仕掛けてくる奴も居たが、んな事は全然関係ねぇ。俺は腰に差した蛇腹剣を引き抜き魔物の体に巻きつける。蛇腹剣の刃が体を切り裂く、だが俺はその程度じゃ済まさねぇ。蛇腹剣に雷を纏わせ魔物の体にブチ当てる。雷を喰らい、魔物は灰となり、儚く散る。そして俺はその灰を踏みつけ不敵に笑う。

例えどれだけ強くなろうと、

例えどれだけ魔力が増えようと、

俺には関係ねぇ。

敵が来たら、

全て、

ブチのめすだけだ。

気が付けばもう敵は居ない。全て俺と召喚獣によって潰された。
あっけないモンだ。所詮強くなってところで俺には勝てない。雑魚がどれだけ強くなろうが、結局は雑魚。何も変わらない。結局の所、蟻は象に勝つことなんざぁ出来ねぇんだよ。
咲夜は、このあまりの光景に呆然としていた。それもそうだよなぁ、今から殺そうとしていた妖怪が、何処からともなく飛んで来た炎やら氷塊やらで沈んじまったら、そうなるわな。

…さてと……雑魚を片付け終わった処で、敵の大将でも叩くとするかぁ！

「所詮は雑魚、召喚獣を率いる俺には勝てねぇんだよ！さぁ！さっさと姿を現しやがれ低能魔物！！」

俺は投げ掛けるように大声で叫ぶ。すると外壁の外から、二体の魔力を確認する。中々にでけぇ魔力だ。けど、俺やパチュリーには及ばないな。パチュリーの４分の３程度の魔力だ。
何だよ…大将がその程度とか、ふざけてるな。隠してるようにも感じられねぇし、所詮は雑魚か。
そんな事を考えている内に、魔力はこちらに迫り、姿を現す。俺はそいつらを見て少し驚く。そいつらはかなりレアな魔物だったからだ。

一体目は血霊『ブラッディ』、赤黒いハデハデなドレスに真っ赤なレイピアを持っている女。血を操る事が出来る。

二体目は番犬『ケルベロス』、三つの首とそれに着けられた棘の付いた首輪、こげ茶色の体毛を持つ犬。守る事に特化している。

…こんな所でこんなレア種に遭遇するとは思わなかったぜ……良い機会だ。こいつら俺の召喚獣にしてやるか。

…挑発したせいかかなり怒ってるけど、んなこたぁ俺には関係ねぇ。

「ちょっとそこのお前！今のは私とこいつが誰か知っての物言いか！？取り消せ！私は低能でｈ「喋ってる暇があんなら攻撃しろやボケ！『ライジングレイン』！」え、ちょ、ま！」

俺が呪文を唱えると、正面の二体に雷が降り注ぐ。雨の如く、細かく大量に降り注ぐ雷の雨は、容赦無しに二体を痛めつける。ケルベロスがブラッディを守ってはいるが、この雷、落ちたら周りに拡散するため、結局地面を伝ってダメージを受ける。

つまりどうなるかと言うと……

「ゲフッ……ひ、卑怯よ…不意打ち仕掛けてくるなんて……」
「…くぅーん」

はいこの通りボロボロになった訳だ。いやいや見事見事。流石俺。流石ライジングレイン。目の前の雑魚が簡単に沈没した。

さーてと……それじゃあとっとと契約を交わすとするか。

しかし、俺が二体に近づく前に二体は宙に浮き、逃げ出してしまう。俺はクロノスに時を止めさせようとしたが、何時の間にか増えた雑魚共に阻まれてしまう。あぁ鬱陶しい！雑魚の分際で俺の前に立ちはだかってんじゃねぇ！！

「邪魔だ！！とっとと消えｒ「恋符『マスタースパーク』！！」なぁ！？」

俺が魔法を唱えるのよりも先に、上空から舞い降りた巨大なレーザーが雑魚共を呑み込む。レーザーは辺り一面を一掃し消える。そこに残っていたのは、こんがりと焼かれた雑魚共と更にボロボロになった紅魔館の壁と庭だけだった。

…ていうか今のはまさか……

「残念だったなレクト。お前の獲物は私が貰ったぜ」

そう言いながら、エプロンの様な魔女服を着た女が箒に乗って降りてきた。――――魔理沙だ。

「別に獲物とか思ってねぇよ…逆に言えば得したしな」
「ん？得って何だ」
「魔力を無駄に使わずに済んだ」
「うわぁ…見事な合理主義者っぷり。相変わらずだな」

そう言った魔理沙の顔は少し苦そうだった。
別に良いじゃねぇかよ。効率を重視して何が悪いんだよ。
魔理沙はコホンと咳をして、苦そうな顔を直す。

「しかしまたどうしてこうなってるんだ?今飛んでったのと関係があるのか?」
「あぁそうだ……あ゛!」

そうだあいつらは!?今何処に居る!?
俺は遠視魔法を使い、飛んで行った方向を見る。まだ遠くには行っていない……けど俺の飛行スピードじゃあ間に合わねぇ……
…時を止めれば何とかなるかもしれねぇが……あれ疲れるんだよ。

…クソッ!どうする…!何か最善の策は……

「な、なぁどうしたんだぜ?あいつらってそんなにヤバイのか?マスパで撃っとくべきだったか?」
「うるせぇ!こっちは今考え中……あ」

あるじゃねぇか方法。俺の目の前に!

「魔理沙!!」
「な、何だぜ!?」
「箒に乗せろ!そんでもって俺の指差す方に全速力で飛べ!良いな!?」
「え、ちょ、ちょっとま「良 い な ! ?」…分かったよ」

俺は魔理沙の箒の後ろに乗り、魔法でガッチリと体を固定する。
魔理沙は少し嫌な顔をしていたが、まぁ関係ない。我が道を行くってな。

あぁ只行く前に、

「魔理沙。あいつらを召喚獣に出来たら、俺の世界の珍しい魔導書やるよ」
「え！？本当か？」
「あぁ。俺はギブアンドテイクの精神をモットーにしてるからな。それなりの代価は払うぜ」
「…よっしゃ！なら絶対に追いついてやるぜ！！落ちるなよレクト！」
「は！そうそう簡単には落ちねぇよ。さぁ……行こうぜ！」
「あぁ！」

…良し。やる気を出させる事に成功した。これなら全然問題無いだろ。

待ってろよ『ブラッディ』『ケルベロス』……必ず召喚獣にしてやるからな！！

俺はイフリートとシヴァ以外の四体を紅魔館の防衛に当たらせ、逃亡している二体を追った……

事件回想？前：ｓｉｄｅ　レクト（後書き）

読者皆さん、地震がありましたが無事ですか？
今回のはかなり酷いですからね・・・皆さんが無事であると祈ります。

さ～て暗い話は終わりだ！ここからは補足タイムだぜ！いくＺＯ！

今回の補足

クロノス：これはほぼそうだったり。ググったら出たんでそのまま使いました。元ネタって言うか、本人っていうね。

イフリート・シヴァ・タイタン：全てＦＦが元ネタです。ちなみに自分は６が一番好きでした。

魔物：レクトの世界の魔物は、基本的にＦＦのばかりです。それにオリジナルの魔物を追加しています。

さて次回は後編。レクトと魔理沙はどうなるのか・・・はまだ決まってなかったり。

まぁいつも通り気長に待っていて下さいｏｒｚ

事件回想？後：ｓｉｄｅ　レクト（前書き）

長らくお待たせしてしまって申し訳ございませんでしたｏｒｚ
言い訳させていただきますと、スランプでした。
これからは大丈夫だと思いますので、改めて暖かい目で見てくださるとありがたいです。

事件回想？後：ｓｉｄｅ　レクト

月の無い夜に弾幕が飛び交う。異変がから僅か一時間。たった一時間で、幻想郷は地獄と化していた。　そんな中を横切る二体の魔物と箒に乗った二人の人間。一体の魔物は血で出来た槍を投げつけ、もう一体の魔物は炎のブレスを吐き出し、追ってくる人間を振り切ろうとする。一人の人間は召喚した召喚獣で槍を凍らせ、炎を散らす。もう一人の人間は星の弾幕で二体の魔物を落そうとする。それの繰り返しだ。

そんな中、召喚獣を操る人間が下を見下ろし、この惨状を眼にする。あまりにも酷い現実を……

「…何だよこれ。どうしたらこうなんだよ…！」

二人の人間が見た光景はあまりにも酷すぎて、普通なら目を逸らしたくなるものだが、

彼は――――逸らさなかった。

苦しい現実だからこそ見なければならない。例え、そこに死体が転がっていても、例えそこに残虐な行為が広がっていても、見なければならない。

彼は、眼を背ける事は逃げる事と同じだと考えていたからだ。

その光景を頭に刻み、その感情を押し殺しつつも……内に怒りを燃やしていた。

こんな事をして何になる？犠牲を多く払ってでも獲られる程、この世界に価値はあったのか？もしそうだとしたら――――あまりにもくだらなすぎる。

「レクト！そろそろ追いつきそうだぜ！」

人間の一人がそう言った。

彼はチッと舌打ちし、目の前の敵に目をやる。兎に角今は奴らに専念しよう…彼はそう思い、変幻自在の剣…スラッシャーを片手に持ち、臨戦態勢に突入した。

◇■◇■◇

敵は未だに逃走中…か。あいつら……マジで戦う意思が無いのか…？あの逃げ腰は、あまりにも酷すぎる。

可笑しい。俺はそう思い、心を操る魔女「マイン」を召喚する。何故召喚したか？それは奴らの考えを覗き見る為だ。

マインはすぐさま二体の内のブラッディの方の考えを読み取る。理由は喋れるから。

しかしそこでマインは驚く。どうした、と俺が聞くと、マインは真剣な表情で答えた。

「（あいつの心の中、鎖の様な物が複雑に絡み合っているわ……そ

の一つ一つが禍々しいもので包まれていて……）」
「（…つまり、あいつは何者かによって操られていると……そういう訳か）」
「（えぇ……一応、思考は読み取ったわ……どうやらこの先の所に敵を多く潜伏させてるようね。奇襲を掛けるつもりだそうよ）」
「（そうか……上出来だ。後は俺が何とかする……暫く待機してろ）」
「（解ったわ）」

マインを俺の『世界』に戻した。
…さーて、どうシメてやろうか……俺はそんな事を考えつつ、来るであろう奇襲を警戒した。探知魔法を発動し、俺に敵意を持った奴を直ぐに見つけられるようにする。探知魔法に引っかからない奴の事も想定して、周囲に目を配る。完璧…とは言えないが、大体の敵はこれで見つけられる。
俺が警戒をしていると、魔理沙は突然スピードを上げだした。どうやらもうすぐ追いつくみてぇだな……ってか追いつくじゃん。

ギュン！という音を鳴らし、奴らの前に回りこむ。奴らは、突然目の前に出てきた俺らに驚き、動きを止めた。

「へへっ！この魔理沙様にスピードで勝とうなんて、百年早いんだぜ！」
「ぐ……もう少しで行けそうなのに…！」
「行けそう？何がだよ？」
「お前達になぞ言うか！こうなれば力づくでも押し通ってやる！」

ブラッディは、その手に血を溜め大量の玉を作り出す。

「喰らえ！」

ブラッディはその無数に近い玉を、俺達目掛けて投げつけてくる。

「魔理沙！俺は降りて奴らに近づく！だから援護を頼む！」

「任せろ！魔符「ミルキーウェイ」！」

魔理沙がスペル宣言をすると、敵に星型の弾幕が降り注ぐ。ブラッディは、ケルベロスに守られながら、こっちに向かって血の玉を投げつけてくる。俺はその全てをかわし、徐々に接近する。

近くまで接近すると、ケルベロスがこちらに顔を向け、炎を吐いてくる。俺はイフリートに炎を捻じ曲げさせ、逆に炎をお見舞いする。だが、流石に炎を吐くだけあるか、全く攻撃が通じず、若干苦労していた。

「チッ…喰らえ！『アクアプレッシャー』！！」

俺は水魔法、『アクアプレッシャー』を発動させる。こいつは敵の頭上に巨大な水玉を発生させ、落して圧迫させる魔法だ。こいつを落されれば、実力がある奴でもかなりのダメージを負わせる事が出来るが……

「ケル！頼む！」

「ウオオオオオオン！」

ケルベロスの三つの首が雄叫びを上げると、二体の頭上に巨大なバリアが発生する。俺の『アクアプレッシャー』はそのバリアと激突し、相殺された。

…やっぱケルベロスの防御能力は計り知れないな……流石は『地獄の番犬』とんでもなく頑丈だ。だがそれだけだ。奴自信の攻撃は

さほど怖いものじゃない。防ごうと思えば簡単に防げる。奴は防御に特化しているものの、攻撃はあまり強くは無いからだ。故にそこまで心配する必要も無い。

正直に言えばブラッディも怖くは無い。あいつの血を操る能力は、それなりの魔力を持っていれば抵抗できる。あいつの攻撃を喰らったら話は別だが。

まぁそんな訳だからこいつらは怖くも何とも無く、俺からすりゃあちょっと力を持った雑魚だ。だが、能力は使えるから召喚獣にしちまいたいんだよな～…使えるのは徹底的に取り入れて行きたいからな。後々の為にも。

「ククク……あーはっはっは！！」

！？　何だあの野郎…突然笑い出しやがって……

…あー……まさか……

「増援が来た！これでお前達を完膚なきまでに叩きのめせる！」

「ワオン！」

周囲には大量の魔物と妖怪。さっき戦ったのと同じ種族のも混ざって入るが、さっきのよりも魔力が高い。

普通ならここで色々と苦しくなるだろうが、

まぁ俺達には関係無い。

「うーわ…面倒な事になっちゃったぜ……まぁ問題ないけど」

「全く……数増やしゃあ良いって訳じゃねぇんだっての……所詮、雑魚は雑魚なんだからよ」
「こ、この期に及んで…何だその言い草は！お前嘗めているのか！？」
「あぁ、そうだけど？」
「なっ……」

俺の予想外の発言で、ブラッディは思わず絶句している。

「いやだって…なぁ？」
「あぁ……だって」

俺と魔理沙は、口を揃えて言う。聞いた奴の心に大きなダメージを負わせそうな言葉を。

「「お前らは俺（私）達よりも遥かに弱いからなぁ」」

その時、周りの空気が死んだ。そして変わりに怒気が生まれた。

「…弱い弱い弱い弱い弱い弱い弱い！！五月蝿いのよ！！私達は弱くない！その証拠を見せてやる！！！」

ブラッディはそう叫ぶと、突然、体が黒く光り始め、邪悪な気で満たされていく。すると、さっきとは比べ物にならない程に魔力が増加していく。それはケルベロスや他の奴にも発生し、それが原因で、周りにまで邪悪な気が満ちていく。何しやがったこいつ…？

「あはははは！力が！力が漲ってくる！！さぁ…これで私達を雑魚

とは言えなく……」
「うっせぇよ雑魚が。テメェがどんだけ強くなろうが、んなこたぁどうでも良いんだよ」
「…ぶっ殺す！！」

ブラッディは遂にキレて、血の玉を投げつけてくる。どうやらさっきのより大きくなっているっぽいが……まぁ関係ねぇな。
俺と魔理沙は血玉をかわし、背中合わせになる。

「…魔理沙。テメェは周りの雑魚を潰せ」
「報酬は？」
「…魔法構成式の上位版を三枚やる」
「やってやるぜ！」

魔理沙は俺の後ろから離れ、上空高くまで上昇する。そして宣言されるスペルカード。

星符「ドラゴンメテオ」

上空から、魔理沙のミニ八卦炉から放たれるレーザーが降り注ぐ。それは円を描く様に動き出し、周りの雑魚を片っ端から蹴散らしていく。

気が付けば、周りに居た筈の妖怪と魔物達は、全て消え去っていた。

「な！う、嘘！？そんな馬鹿な事が…！」
「余所見してる場合かよ。イフリート！シヴァ！」

俺はイフリートとシヴァを敵二体に向かって突撃させる。

「は！そんな奴ら、軽く捻って…」

「そうは行かねぇぜ！！」

俺は右手を突き出し、力を一瞬で溜める。

俺の無限に近い魔力を。

召喚獣の真の力を解放する『力』を。

「召喚獣『イフリート』『シヴァ』！力（パワー）３０％解放！魔力３０％注入！」

そう唱えた途端、二体の体が輝き、魔力が増幅する。

「な、なにコレ！？何だって言うんだ……！」

「ウウウウゥゥゥ……」

どうやらあの二体は、強くなったイフリートとシヴァに、かなり驚愕しているようだ。チャ～ンス！

「やれ！お前ら！あの馬鹿面下げた二体をぶちのめしてこい！！」

「応！」「了解よ～♪」

イフリートとシヴァの二体は、上昇した魔力を行使し、一気にブラッディとケルベロスに接近する。

そして放たれる必殺技。

「『地獄の業火』！」「『ダイヤモンドダスト』！」

二体の体から放たれる強力な炎と吹雪は、敵二体を呑み込む。
ブラッディは吹雪に、ケルベロスは炎に呑まれる。

「あああああああ！！！」「ウオオオオオオオン！！！」

二つの断末魔が聞こえた後、ブラッディとケルベロスは、力を無くしたかの様に地上に落ちていった……

終わったな……俺はそう思って、少し安心していると、奴らは地面に直撃する寸前で体勢を立て直しやがった！

「な…！」
「ハハハ…油断したな……！私達は無事だ…！」
「ガウ……」

…無駄に頑丈な奴らだ。それとも、その邪悪な力のせいか？

…まぁどっちでも良いけど。

「今回はこちらの負け……だけど次は必ず…！」
「は？次？――――お前は何を言ってんだ？」
「え……？」

ブラッディは、何を言いたいのか全く解らない、という顔をしている。

…だが、直ぐに解る。俺の言葉の意味がな……！

「お前達の『終わり』は……此処だぁ！！！召喚！『ラグナロク』！！！」

俺が高らかに召喚獣の名を叫ぶと、俺の背後に今までとは比べ物にならない、巨大な魔法陣が出現する。そしてそこから、巨大な旋風が吹き荒れる。そして姿を現したのは……

灰色の体毛、巨大な翼、見る者全てを簡単に屈服させる威圧感。尋常では無い力が溢れ、周りを覆っていた邪悪な気さえも、この力の前に呑まれてしまう。

こいつの名は『ラグナロク』。俺の召喚獣の中でも、トップクラスと言って良い程の力を持った召喚獣だ。

『ラグナロク』……こいつは、数多の世界を終焉に導いた魔鳥であり、数多もの世界の『救世主』であり、『破壊者』だ。
こいつはその経歴故か、様々な所に名が刻まれており、様々な形

で、様々な伝承が残されている。
　こいつの能力は、幻想郷的に現すと『あらゆるものを終わりに導く程度の能力』。あらゆる生物・現象・物・時代・そして世界に至るまでの全てを、終わりというものに強制的に導く能力だ。
　これは色々と使い道があってだな……

　…あー…説明するよりやった方が早いな。んじゃあ、とっととやるとするかぁ！

「…な、何でラグナロクなんて化け物が……と、兎に角早く逃げないと……」
「逃がすかって言ってんだよ！！ラグナロク！行け！」

　ラグナロクは、その大きな翼を羽ばたかせると、その巨体からは想像出来ないスピードで二体を追い越す。そして、再度羽を羽ばたかせると、突然気が倒れて道が塞がれ、何処にも行けなくなり、八方丸塞がりとなった。

「な、何で！？どうして突然倒れたりなんかしたんだ！！」
「ガウ！ガウ！」

　二体は、どうにかして木を除けようとするが、数が多すぎて、もはや自分達だけではどうしようも無いという事に気付かされた…

「…これが……ラグナロクの……能力……ふざけるな……可笑しすぎだろ…！」
「可笑しいワケねぇだろ？これがこいつの能力なんだからよぉ！！」
「！　…あ……あ……あ……！」

　ブラッディは、降りてきた俺と召喚獣を見るなや否や、恐怖で顔

を引き攣らせていた。

何故こうなったかって？それはラグナロクの能力で、こいつらの退路を終わりに導いたからだ。

周りの木やら何やら、それ全てに能力が及び、退路を絶とうとする。どれだけ逃げようが、それは絶対に達成される。

最早、世界に終わりを迎える運命が、そこに出来上がってしまったからだ。

…さぁ……これで終わりだ……！

「ラグナロク！あいつらの体に刻んでやれ――――お前の力を！」

灰色の巨体が空を舞う。美しく、そして恐ろしい存在である鳥が、巨大な力を込めた風を起こす。

その風に触れた途端、ブラッディとケルベロスは苦しみだし、あいつらに入り込んでいた邪悪な気が、消えだしていく。

更に、こいつらの中の邪悪な気が消えていく度に、周りに充満していた邪悪な気も消え去っていく。

そして遂に……

完全に邪悪な気が消え去った。

「…あれ？私は何をしていたんだ？」
「くぅん…？」

…どうやらこいつらはあの邪悪な気により、自らの理性やら記憶やら何やらを奪われていたようだな……誰がそんな事をしたんだか……

…まぁ正直、どうでも良いんだけどな。

俺は二体の目の前に降り立つ。突然目の前に現れた俺を見て、驚いているようだった。

「お、お前は……？」
「俺か？俺の名前はレクト＝ラックマン。召喚士だ」
「召喚士……もしかして……私とケルと契約を結びに来たのか？」
「あぁそうだ」
「…だが、実力の知れん奴に就くのは……」

…面倒臭ぇ…契約の際にはいつもしてた会話だからこそ、余計面倒臭ぇ……

「…俺の頭上のこいつが見えねぇのかよ？」
「頭上……な！？ラグナロク！！？ま、まさかお前が…？」
「…他に誰か居るか？」
「…いや。居ないな……――――良いだろう。ラグナロクを手玉に取るような奴なら、喜んで就いてやろう」

生意気な口利きやがって……まぁ別に良いけどよ……

「…んじゃあ、契約の儀を行うから動くなよ」

そう言って俺は、指で宙に魔法陣を描き出す。描き出された魔法陣は次第に大きくなり、ブラッディとケルベロスを包み込める位の大きさになる。

魔法陣は、ブラッディとケルベロスの真上に位置すると、上からスウッと二体を包み込み、そして消えた。

これで……『契約完了』だ。

「…良し。OKだ。これでお前らは俺の召喚獣となった。話しておきたい事が結構あるが……まぁそれは後で説明するわ。――――という訳で、これから宜しく頼むぜ」

「あぁ。宜しく頼む」

「ガウ！」

そう言うと、二体は俺の『世界』へと入っていった…

…うーし。目標達成。さぁて……帰るか……

俺は紅魔館に戻る為に、踵を返した。

だけどその時、俺の背後で微かな気を感じ、振り返る。そこには、見た目普通な小石が二つあった。何だこれ？

俺は小石を拾い上げ、じっと眺める。今言った通り、見た目は普通だ……だが、こいつには邪悪な気が込められている――――まぁ、微かにしか無いんだけどよ。

…これはブラッディとケルベロスが持ってた物なのか……？いや、どう考えてもそうだ。こいつの気と、あいつらのあの気は全く同じ。どうやら、これがあいつらを縛っていた拘束具みたいな奴なんだろう……こんなもん…誰が用意したんだか……

…しかしまぁ……どうしたもんか……利用出来るなら利用させて貰うが……何かあっても困るし……第一、こいつらに入ってる気は高が知れてるし……どうしたもんか……

俺がそんな事を考えていると、雑魚を殲滅した魔理沙が降りてきた。

「終わったぜ！気持ち良いくらいにぶっ飛んでったな～」
「あぁそう」
「む…何だぜその態度は。そんな素っ気無い反応じゃなくて、もうちょっと何か……ていうか、さっきから何見てるんだ？」
「これだけど？」

そう言って俺は、魔理沙に小石を渡す。

「…ただの石じゃん。これがどうしたってんだよ？」
「解んねぇのかよ」
「何が？」
「いや、だからだな…」

俺が魔理沙に説明をしようとした時、突然、周りが強い光に包ま

れた。ほんの一瞬、只それだけの光だったが、俺らを驚かすのには充分だった。

「い、今のは何なんだぜ！？」

「知るかよ……大方何処かの馬鹿が、光魔法でも使ったんだ……ろ……！？」

俺は、不意に見下ろした小石を見下ろして…驚いた。

何故なら、微かに残ってた筈の邪悪な気が、完全に消え去っていたからだ。

…今の光は、闇や悪を打ち払う聖なる光だったのか？けど、あんな一瞬で全て消し去るのは……いや……可能か……

俺の持ってた石は、もうほとんど気が無かった……消そうと思えば消せるだろうな……けど、一体誰が…？

「…おーい。レクトー？聞いてるのかー？」

「あ？…あー……悪ぃ。何だ？」

「いや、その石は結局何だったんだぜって聞いてたんだけど…」

「…あー……これな。これは――――邪悪な気を込めた石……だった」

「『だった』？何で過去形？」

「…消えたんだよ――――今の光で…」

「へぇー」

「…全然興味ねぇだろお前」

「まぁな」

「…ハァ」

本当にこいつは……まぁどうでも良いか。こいつはこういう奴なんだし。

…あ、そうだ。

「魔理沙。テメェに礼をしなきゃならねぇな――――ほらよ」

俺は魔理沙に、魔導書と魔法構成表を渡す。

「お！サンキュー♪これで私の研究も進むぜ！」

「おーそうかい。そりゃあ良かったな」

「あぁ！――――それじゃあ私は帰るぜ！また図書館に本を借りに行くからよろしくな～！」

「お前のは借りるって言わねぇ……って行っちまったよ…」

相変わらずとんでもねぇ速さだ。もうあんな遠くまで行っちまったし……

…ハァ……あー疲れた……無駄にしんどかったぜクソが。

…けど、まだ月の件が残ってるんだよな……

…ハァ……戻っててくんねぇかな……あ。

俺が空に目をやると、そこにはさっきまで消えていた月が、そこにあった。

…何だか知んねぇけど……異変は解決したんだな？はー……ようやく終わったぜ…ったく……

…それじゃあ、厄介事も片付いた事だし、帰るとすっか。

俺は空を飛び、紅魔館まで飛んで行った……

―――――――――――――――

紅魔館に帰ってきた俺は、何故か館の修繕をさせられるハメになっちまった。ダリぃ。

大体の仕事を召喚獣に丸投げにして、俺は図書館にて、パチュリーに事のあらましを説明した。因みに他の奴には説明していない。理由は面倒だから。

んで、パチュリーが俺が拾った小石について調べたいって言うんで、小石をやった。正直、無駄な気がしてならねぇんだけどな……もう何の力も無かったしよ…

そういや、ジェイルが大量の魔物の死体を持ち帰ってきた。どれもこれもかなり使える代物で、薬の材料には持って来いで、貰えるだけ貰っちまおうとしたら、吸血鬼姉妹に、一際デカいのを取られちまった……ムカツクぜ……

…しょうがないから、余りだけで我慢した。あの姉妹に譲歩するハメになるたぁ…ツイてねぇぜ……

面倒だった異変もこれで終了した。色々と疑問は尽きない異変で

はあったが、それ以上に面倒が多すぎた。得られた物は大きいが、ダルい事この上なかったぜ……

…これから先、こういうのが多くなると思うと、気持ちが萎えてくる。けどそうも言ってらんねぇんだよな……面倒事は勝手にやってくる。来て欲しくねぇのにやって来る。全く…どうしてこうなった……？

ハァ…もう良い。俺は寝る。疲れたんだよ――――だからよ…

誰も起こしに来んじゃねぇぞ……

事件回想？後：ｓｉｄｅ　レクト（後書き）

お久しぶりです。本当にお待たせして申し訳ございませんでしたｏｒｚ
こんなに遅くなるつもりはなかったんですけどねぇ…ハァ……
まぁ良いや。補足に行きましょう。

今回の補足

ラグナロク：北欧神話の世界における終末の日って言うのをグッたら出たんで、利用。『終末』を分かりやすく『終わり』に変えてみたのですが、どうでしょうか？（って聞いても返って来ないっての…）

召喚獣の能力（一応載せときます）
イフリート：『あらゆるものを燃やす程度の能力』
シヴァ：『あらゆるものを冷やす程度の能力』
ウンディーネ：『風を操る程度の能力』
シルフ：『水を操る程度の能力』
タイタン：『剛力を扱う程度の能力』
ゴーレム：『岩石を操る程度の能力』
クロノス：『時を司る程度の能力』
マイン：『心を操る程度の能力』
ブラッディ：『血を操る程度の能力』
ケルベロス：『守る程度の能力』

さて、次回は紅魔館からスタートです。

多分レクトの視点だと思います。はい。

あ、それと、新しく小説投稿しました。よければそちらの方も見てくださるとありがたいです。

それでは皆さん。また次の話でお会いしましょう。それでは。

第二十九話　幻想の日々？：運が良いのか悪いのか　（前書き）

スランプって怖いね。
こんなに投稿を遅くするんだもん。

…遅れてすいませんでしたｏｒｚ

第二十九話　幻想の日々？：運が良いのか悪いのか

「…とまぁ、そんな事があったって訳よ」

俺は事件の内容を全て話し終えた。正直、そこまで面白みのあるモンだとは思わなかったんだが、どうもジェイルにとってはそうでは無いらしい。時折考え込んでたしなぁ……俺の話で何かあったのか？

…まぁ、どうでも良いけど。

「…ふむ……成る程な……して、その石はまだパチュリー様が？」

「あぁ。未だに調べ続けてるぜ」

正直、無駄だと思うけどな。

何故かって？俺も調べてみて何も得られなかったからだ。俺の世界の技術以下の物しか持ってないあいつが、何かを掴めるワケねぇだろ？

…しかしなぁ……備わってた筈の妖力も無い。魔力も霊力も無い。ましてや神力も無い。それ以外の特殊な力も無い。本当に何も無い――本当に只の石に成っちまうとはなぁ……

あんな力を持っていた石が、突然只の石に成っちまった。謎ではあるが……原因は解ってる。

あの光……一瞬だけ周りを包んだあの光が、残っていた気を消し去った。

あの光は、事件の日の事を話していた時にも言ったが、闇や悪を

打ち払う聖なる光だったのか…もしくは、あらゆる付加効果を解除するものだったのか…それとも、邪悪な気だけを吸い取るものだったのか。考えれば、幾らでも可能性は出てくる。

その中で湧いてくる疑問は…それを使用した意味と目的は何なのか？

幻想郷を守る為だったのか…それとも自らの力を蓄える為なのか…

…ハァ……解んねぇ……情報が少なすぎんだよほんと……少ない情報の中から結論を導くのはしんどいんだそゴラァ。何をやるにしても、情報ってのがどれだけ大切か……解るだろ？

例えるなら、料理の初心者が料理を作ろうとする時に、料理本に頼って料理を作るみたいなモンだ。それと同じ様に、何も情報が無ければ行動なんて起こせねぇ。情報が無ければ何もかもが不可能。故に情報は大事何だぜ？えぇ？

「…何を一人で呟いているかは知らんが……着いたぞ」

「あ？……あー…着いたか」

俺は間抜けた返事をして、目の前の趣味の悪い真っ赤な建物の玄関に降り立つ。あぁ目に悪い。どうしてあの馬鹿吸血鬼（レミリア）は、ここまで赤いモンにしたんだか……

…あぁ、これ建てたのは馬鹿吸血鬼（レミリア）の親父だったっけ？センスの無さが滲み出てんな。もし会えたら馬鹿にしてやるか。

「そんな事をすれば命を失くすぞ……相手方の心の広さにもよるが……」

「…お前ってさ……読心術でも身に付けてんのか？俺の考えてた事解ってるよな？なぁ？」

「そんな事は如何でも良かろう……それよりも、早くパチュリー様の所に行ってやれ。お待たせするのは宜しく無いぞ？」

「チッ……言われなくても解ってるつーの！たく……」

俺は転移魔法を使用し、紅魔館の地下図書館へと向かった……

―――――――――――――――

…んで、着いたワケだが……

何故か真っ先に視線に飛び込んできたのは……

「…むきゅ～」

「う、動けない…」

本の中に埋もれたパチュリーと小悪魔だった。

「何してんのお前ら？」

「見ての通りよ…早く助けて……」

「…はいはい。召喚『タイタン』」

俺はタイタンを召喚し、パチュリーと小悪魔の上に載っている本を横に退かす。結構な量乗ってたらしく、二人共かなりボロボロのようだった。

「ふぅ……助かったわ」

「はぁー……重かった～…」

「…で？何でこうなったワケ？」

「…普通は先に心配するものじゃないの？…まぁ別に良いけど」

パチュリーは、本の中に埋もれていた椅子を直して座る。

「実はあの石について色々と調べていたんだけどね……結局何も解らなかったのよ」

やっぱり解らなかったか。そりゃそうだわな。

「それで、何としても何かを得たいと思って、小悪魔にありったけの魔導書や資料を持ってきて貰ったんだけど…」

「文字通り山積みになっちまって、小悪魔が新しい本を置いた途端に崩壊しちまったと」

「そういう事よ……」

……

……

……

……

……これは……あれだな……兎に角この一言に尽きるな……

「お前馬鹿だろ」

「ぐっ……う、五月蝿い！ただ単に研究熱心だっただけの話よ」

「俺だったら一冊一冊じっくり読んで、ある程度は紙に書き出して

から新しい本を持ってくるつーの。少しか考えろよお前」
「ぐう……」

俺の言葉に椅子の上に縮こまるパチュリー。いや、そんな落ち込まれても困るんだけど……自業自得だし。

…しっかしパチュリーも、偶には馬鹿な事すんだな。初めて知ったわ。完璧な奴なんて居ないっていう表れだな。ついでに、パチュリーのキャラ崩壊が見れたっていうな。

…お前さ…そんな上目遣いで恥かしそうな顔しても駄目だから。それで何もかも水には流せねぇから。ていうか、俺にその顔と仕草は通用しねぇから。

…つーかさ。そんなモンが通用すんのって居るのかよ？居るんだったら、直接会ってみたいわ。

まぁ……多分碌な奴じゃねぇだろうけど……

――永遠亭・実験室にて――

「フェックション！！！まもの。……あー……誰か俺の噂してないか？」
「あ」
「ん？どうかしたんえーりん？」
「…薬の投薬量を間違えたわ……」

「おいィ！？ちょとＳＹレならんしょこれは…？」

――博麗神社までの道中にて――

「くしゅん！…ふぅ……誰かに噂された気がしたわ……
…は！もしかして私にヤられたい子が、私の話をしたのかしら！？
そうだとしたら……ふふふ♪」
「どーしたのレイナ？何か楽しそうだけど」
「ふふふ♪何でもないわ♪さぁ、早く行きましょう♪」
「うん！」

――紅魔館・地下図書館にて――

…誰かがクシャミした気がするが……まぁ気にしなくて良いか。

「…あ、そうだ。レクト、目当ての物は買えた？」

突然話題を変えてきやがった……どう考えても誤魔化そうとしている風にしか見えねぇが……まぁ別に良いだろう。
俺は空間収納魔法で収納していた袋を取り出す。中身は実験用の道具や薬の材料。そして使えそうなモンを適当に見繕ってきた。
…何時仕舞ったんだって？物買ったその直ぐ後に決まってんだろ。

「しっかし驚いたぜ。あんなちっぽけな村なのに、売ってるモンは一流とはな……素直にビックリしたぜ」
「そりゃあ、あそこは外の世界の物や技術、果には魔導書まで売り出している所だからね。
基本的に無い物は無いわよ」
「…その言葉だと、売ってない物は売ってないって意味にもなるよな」
「無い物は無いからね。でも実際そうだからそれは仕方ないわ」
「…まぁな」

俺は袋から買ったモンを一つ一つ取り出しながら、ふと、散乱している魔導書類に目を落す。
随分とたくさん持ってきたよなぁ……こんな一杯持ってきて積んでたら、確実に崩れるって解りそうなモンだが……

…ん？何だこの本。一つだけ気色が違うぞ…？

俺はふと目に付いた赤色の本を拾い、何気なくページを開く。
パラパラとページを捲る。どうやらこれは召喚と錬金術に関わる魔導書らしい。
何かないかとページを捲っていく内に、あるページに到着する。

『英雄の召喚』

そのページにはそう書かれていた。

『英雄』

それは人・魔物・悪魔・神に関わらず、何か大きな偉業を成し遂げ、自らの種族に称えられた存在である。

『英雄』と呼ばれる者は総じて実力が高く、カリスマに溢れており、他種族から恐れられる。

『英雄』となる者は基本的に才能に溢れた者だが、中には底辺から上り詰め『英雄』となった者も居る。要は『天才』であったか『凡人』であったかの二つしか、『英雄』にはなってない訳だが。

『英雄』と呼ばれた者には必ず何か特出した能力がある。例えば魔法を一切使わず、己の肉体のみで一つの大陸を乗っ取ったとか、逆に魔法のみで何万もの敵を蹴散らしたとか色々とある。『英雄』にはそういう事を為せる能力がある。

しかし、それ故に世界から異端とされ消し去られてしまう事があるという事実もある。『英雄』ってのはそういうモン。成ったからっていって必ずしも凄いって訳でもなく、逆に言えば成ってしまったらそいつはもうまともに生きるなんて事は不可能。もはや何もかも終わりって言っても良いんじゃないかと思う。つーかそうだ。

まぁ…要は『英雄』は強い。だがその強さ故に世界から弾かれてしまった存在って訳だ。

…しかしなぁ……そんな感じのぶっ壊れた存在を召喚するだって？どんなぶっ壊れ性能だよ……色々と可笑しいだろ。

まぁでも……使える奴なのは確実だから、召喚出来るなら召喚してみるか……他にも色々と載ってたから、それらもついでに……

「…レクト。さっきから何を読んでるの？」

俺が本を読みながらそんな事を考えていると、パチュリーが話し

かけてきた。

「あーこれな――――何か色々とぶっ壊れた魔導書。それだけ」

俺はそう言いながら、開けた場所に魔法陣を描いていく。

「何それ。言葉が端的で解り辛いわよ……って何してるの？」

「あー？魔法陣作ってるだけだけど何か？」

「いやそれは見れば解るんだけど……

…もしかして……その魔導書の中から何か召喚する気？」

「あぁ……それもまた上級の奴だぜ」

「一体何よ？」

「それはな……『英雄』だ」

俺はその言葉を口した瞬間、魔法陣を発動させる。すると魔法陣の周りが赤い光に包まれ、恐らく召喚される奴の物であろう魔力が周りに広がっていく。

小悪魔はその魔力の大きさに一歩後ずさり、パチュリーはこれから出現する召喚獣に不安と期待を込めた強い眼差しで魔法陣を見つめる。

「さぁ……来い！俺の召喚獣共！！」

俺の言葉を皮切りに、魔法陣は一気に輝く。それは目を瞑らせる程では無かったが、それでも充分眩しかった。

魔法陣から発せられた光が消え、そこには四体の生物が居た。

一体目は、白い毛皮に巨大な蹄、一際目立つ長い角を生やした馬…聖獣『ユニコーン』

二体目は、巨大な体に炎によって燃え上がる大きな翼が特徴の鳥…

不死鳥『フェニックス』
三対目は、淡い青色の毛並みに鋭く尖った牙、足に枷の様なリングを付けた狼…魔狼『フェンリル』

そして最後……

漆黒の鎧に漆黒の兜、マントで自らを包み、全てを貫く最強の槍『グングニル』を携えた魔界の『英雄』…『オーディン』

…これはまた……凄い面子を召喚しちまったもんだ……こいつら全員上位、最上位クラスの奴らじゃね？良くもまぁそんな奴らを召喚しちまったもんだ。

上位とか最上位とか、初めて聞いた奴には解んねぇだろう。まぁ普通は解んねぇけどさ。

召喚獣にはその実力に比例して、『召喚位』って言うレベルが付けられている。
簡単に分けると、最下位、下位、中位、上位、最上位、規格外に分けられる。
因みに俺の『世界』に居る召喚獣を分けると

最下位：無し
下位：カトブレパス、ケット・シー、カーバンクル、ファントム、ゾーナ・シーカー、ゴブリン部隊、スカル部隊、スライム、ワイバーン
中位：シルフ、ウンディーネ、ゴーレム、セラフィム、ケルベロス、セイレーン、マザーボム、ミストドラゴン、サンドウォーム、サキ

ュバス、魔導アーマー部隊、デュラハン、ヒュプノス
上位：イフリート、シヴァ、タイタン、ブラッディ、ラムウ、マイン、クロノス、ジャボテンダー、ガーディアン、アルテマウェポン、アナト、オルフェウス、オネイロス、テフヌト
最上位：ラグナロク、リバイアサン、バハムート、タルタロス

こんな感じである。
そしてユニコーン、フェニックス、フェンリルは上位。オーディンは最上位だ。

歴代の召喚士は、ここまで大量に契約を交わす事が出来なかったらしい。理由は、召喚獣の維持に掛かる魔力の量。それに限界があったからだそうだ。
じゃあ何故、俺はこんなに召喚獣を扱えるのか？
それは……俺の魔力が『無限』にあるからだ。

有り得ねぇとか思うだろ？でも実際そうなんだから仕方ない。
何で無限なのか？それは俺にも解らない。何故なら、気が付いたら既にそうだったからだ。
何かと契約してそうなった訳でも無く。努力して得た訳でも無く。況してや人体改造された訳でも無い。最初っからこうだったんだ。
まぁ、そのお陰で召喚獣を維持するのに必要な代価も全く気にせず、使えそうな奴が居たら片っ端から契約して行けた訳だ。魔力無限万歳。

…さて……何かかなり脱線しちまったが、取り敢えずこいつらの契約に移りたい訳だが――問題児が混ざってるな。
今の狙いは……小悪魔か。

「小悪魔。今すぐそこから離れろ」
「へ……ってうえええええええ！！？」

小悪魔は飛んで来た攻撃を飛んで回避する。かなり際どかったのか、小悪魔の司書服に爪痕が微かに付いている。

「な！？小悪魔！無事！？」
「な、何とか……」
「レクト！！これってどういう事！？」
「落ち着けって……今の攻撃は、そこの馬鹿狼が放った爪による物だ」
「狼……？……な…！い、何時の間に…！？」

パチュリーの視線の先……そこにはさっき召喚した『フェンリル』が居た。

「全く……手間ぁかけさせんなよこの馬鹿狼が」
「…あれは友好的なタイプじゃなかったのね」
「あぁ。フェンリルってのは元々魔物の中でも狂った存在。獲物を見つけたら、それが何であろうと食い殺そうとする……危険な魔獣なんだよ」
「…そんなの……何で召喚しようと……？」
「あ？んなモン決まってんだろ……」

俺はケルベロスを召喚し、タイタンと共にフェンリルと対峙させる。

「使えそうだからに決まってんだろ！！！」

俺はケルベロスとタイタンをフェンリルに向かって突撃させる。
フェンリルはその鋭い牙でタイタンに喰らいつこうとするが、ケルベロスの頑丈なバリアによってそれを妨げる。攻撃を妨げられ、怯んだ瞬間にタイタンの剛力でフェンリルを無理矢理抑え込む。
フェンリルはタイタンの腕から逃れようと必死にもがくものの、力の差は歴然。抜けられないと判断したのか、フェンリルは暴れるのを止めた。

「よ～しよし。良い子だ。そのままじっとしてろよ？この馬鹿狼」
「グルルルルル……」
「睨むな睨むな。睨んだって何もねぇぞ？」

俺はフェンリルを適当に宥めて、魔法陣の上でじっとしている三体に声を掛ける。

「さて……お前ら。召喚したからには、俺の召喚獣になってもらう訳だが…」

そう言い掛けた所で、オーディンの口が開く。

「…その前に……名を聞かせて貰おうか」
「…あー……そうだな」

俺は三体の方に歩み寄り、自らの名を告げる。

「俺の名は。レクト＝ラックマン。召喚士だ」
「ラックマン……まさかお主……『クロム＝ラックマン』の家系の者か？」
「あぁ。クロム＝ラックマンはうちの爺さんだ」
「…成る程……クロムに似ているとは思ってはいたが、まさかその

血筋の者だとはな…」

『クロム＝ラックマン』

『魔大戦』を終結させた英雄。召喚士の中でも優れた才能と知識を持った、ラックマン家最強の召喚士。因みに、その嫁……つまり俺の婆さんの名は『リディア』。俺の母親の名前は『ティナ』って名前だ。

…うん。どうでも良いな。

「…クロムの孫……うむ……見事に似ている……」

「あー…そんなまじまじと見ないでくんない？恥かしいから」

「おぉ、これは失敬。…して……我等を召喚したという事は――契約の儀を…」

「交わそうと思ってる。まぁ…そうそう簡単に信用はされないだろうから……取り敢えず、こいつを見せておく」

俺は後方に魔法陣を出現させ、『あの事件』で活躍した『ラグナロク』を召喚する。

「！　ラグナロク……だと？まさかそやつと契約を交わしているとは…」

「へへ……どーよ？これで契約する気になったか？」

「…ふむ……どうやらお前は、クロムよりも上の実力を持っている様だな……

…良いだろう。お主と契約を交わすとしよう。お主達もそれで良いか？」

オーディンの呼びかけに、ユニコーンとフェニックスは頷く。フェンリルは不機嫌そうだが。

「うっし。それじゃあ契約と行こうかぁ！」

俺は宙に魔法陣を描き出し、いつも通りに四体を魔法陣で包み込む。

いつもの如く見慣れた光景。いつもの如く行われた光景。いつもの如く増えてく俺の召喚獣。

あぁいつも通りだ。いつも通りなのがとても落ち着くなぁ……

「…うっし。契約完了。そんじゃあ、これから宜しくな。四体共」

「うむ。宜しく頼む」

「「・・・」」↑黙って頷くユニコーンとフェニックス

「グルルルル…」↑警戒心たっぷりなフェンリル

四体を俺の『世界』へと入れた。

…ふぅ……晴れ晴れとした気分だぜ。まさかこんな短期間に大量の、しかも質の良い奴を召喚獣に出来るとはな。俺の名前通り、幸運だな。

さーて、それじゃあ研究の続きでも再開するとするk

「…レクト。ちょっと待ちなさい」

「あ？何だよパチュリー。俺はこれから研究を…」

「…周りを見なさい」

「周り？……あ〝」

俺が周りを見渡すと、本棚の一部が倒れてたり、テーブルが粉砕されていたりした。しまった……ちょっと暴れすぎた……

「レクト……責任持って、ちゃんと直しなさい。良いわね？」

「…あぁ」

結局、俺はこの後の数時間、本棚やテーブルの修理や本の整理をするハメになっちまった。畜生。

第二十九話　幻想の日々？：運が良いのか悪いのか　（後書き）

スランプって本当怖い。更新が遅くなるもの。
という訳でどうも作者です。遅くなって申し訳ないです。
誰か自分にやる気と気力を分けてくれｏｒｚ

今回の補足

レクトの保持している召喚獣
基本ＦＦ、だけどたまに神様が混じってます。
ついでにおかしなのも混じってます。
探してみると良いでしょう。

召喚された四体
全部、元ネタはＦＦです。一応神話とかの元ネタは調べたりはしてますが、基本的にはＦＦです。

レクトの家系
はい皆さん。ＦＦをやった事がある方ならすぐに分かるキャラが混じっています。
ちなみにそれは、『似たような人』ではなく『本人』です。
今更ながらに、レクトの世界は全体的に基本ＦＦです。
ただ、キャラと魔物が同じってだけで、場所は全く別です。
しいて言うなら、オリジナルの世界にＦＦのキャラが紛れ込んだみたいな感じです（分かり辛いかな？）

まぁいつも通り、分からない事があれば随時質問して下さい。

さて次回は蓮也視点に入ります。
凡人（笑）の彼はとある場所に赴きます。
そこは……次回のお楽しみ！

それではまたお会いしましょう。ノジ

第三十話　幻想の日々？ＰＡＲＴ１：博麗神社のある三人ｓｉｄｅ　蓮也（前書

特進クラスとかマジ勘弁ｗｗｗ

…お待たせして申し訳ございませんでしたｏｒｚ
何でこんな時間掛かるんだろうな……
聖生伝も何か執筆進まないし…
どうしてこうなった。

第三十話　幻想の日々？ＰＡＲＴ１：博麗神社のある三人ｓｉｄｅ　蓮也

ハロー皆さん、蓮也ですよー。自分は今とある場所に向かって歩を進めておりま～す。いや～何か久しぶりの登場な気がするぬぇ～（登場って何だよ）。

俺の隣には、我が嫁鈴仙が居ます。可愛いです。とにかく可愛いです。無茶苦茶可愛いです。鈴仙可愛いよ鈴仙。

…おっと、嫁の可愛さについ脱線してしまったぜ。反省反省。

さて、自分の現在地は霧の湖が見える道中。たまに襲って来る妖怪を、最近作ったＭ４カスタム（グレネードランチャー装備・改造型可変スコープ・鬼改造した強化弾装填・ＣＱＣ対応・因みに無限バンダナ装備だよ！）で蹴散らし、ふらりふらりと飛んでおります。

…しっかし長いなぁ～……流石、最東端に位置する場所だ。遠いね…マジで。こんなに俺の幻想（ゲーム等）とここの現実（幻想郷）で差があるとは思わなかった！こんなんじゃ俺……行きたくなくなっちゃうよ……

「ご主人様。霧を濃くしないで下さい。ただでさえ濃いっていうのに」

「流石嫁。俺の心の中を読んで、瞬時にネタに反応するとは……ジュースを奢ってやろう」

「ありがとうございます♪」

鈴仙は俺の奢ったジュースを美味しそうに飲む。ぐびぐびと喉を鳴らしながら飲む様は、可愛すぎて死ぬかと思った。まぁ死なないけど。俺、超再生能力持ちだし。

…あー……暇だ。あれから一週間。何の音沙汰も無かったから余計に暇に感じるんだろうなぁ……つーか、一週間前のあの日がおかしかった。あの日の充実具合が異常だったんや！そうに決まってる！ある程度のアクシデントはあれど、やっぱ暇だったＺＥ☆

因みに、今朝のアクシデントはこんな感じ。

――アクシデント１・俺の部屋にて――

ふぁ～……良く寝た。いやはやスッキリスッキリ。まさか早寝早起きするとは思わなんだ。

いやなに、幻想郷に来る前は夜中までゲーム三昧だったからなぁ……いやマジでめがっさ健康的にょろ！

さ～て起きるか～。今日はどんな事が起きるんだろうなぁ～。

俺は布団から起き上がり、右手を敷布団の上に置く。エロゲとかラブコメだと、そこに女の子が居て、むにっと胸を掴むってパターンだけど、そんな事は無いよね～。ＨＡＨＡＨＡＨＡｈ

むにぃ

…え？何この軟らかい感触。とてもスベスベしてて、とてももちもちしてて、とても触り心地の良いこの感触は、そしてこの硬く突

起した物は、一体なんｄ

「……あん……ご主人さまぁ……らめぇ……」

……

……

……は

「はあああああああああああああああああああぁぁぁぁぁ！！？？！？！！？？」

俺は文字通り、飛び上がり近くの壁までバックスッテポォ！する。

我ながらまるでギャグ漫画じゃね？並みの後退り方だったと思う。

「な、何で鈴仙が俺の布団に！？つーか何で裸！？え、ちょ、おま、くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」

我ながら見事な慌てようだったと思う。途中でもはや意☆味☆不☆明な言葉も出たし。

「…あぁそういえば……俺……昨日の夜は鈴仙と……」

シちゃってました。いつもの如く。はい。それでそのまま寝入ったんだっけ？

…何だかなぁ。

――アクシデント2・永琳の実験室にて――

「…本当に大丈夫何だろうな……その薬。突然、頭がパーン！とかならないよな？」

「私を信用しなさい。大丈夫よ（どうせ直ぐ治るだろうし）」

「今何か不吉な事考えなかったか？なぁ？なぁ？」

「はいはい煩い煩い。それじゃあ投薬するから、動かないでね」

「死にたくないんで動きませんです。はい」

俺は実験台の上で、地蔵の如くピシッとなる。永琳の薬はマジ死ねるからな。何度あの世に逝き掛けた事か……

まぁ、俺だったから全然問題無かったけど。

さてと……今日は何の薬なんだろうかねぇ～。場合によっては俺がまた突然変異しちまうよ。つーかさ。えーりん絶対楽しんでるよね。俺という名の実験台が見つかって以来、新薬の生産スピードがものっそい速いんですけど……俺を何だと思ってるんだか…

……あ、何かクシャミしてぇ。鼻がムズってきた……あ、出る。

「フェックション！！！まもの。……あー……誰か俺の噂してないか？」

「あ」

「ん？どうかしたんえーりん？」

「…薬の投薬量を間違えたわ……」
「おいィ!?ちょとSYレならんしょこれは…?」

クシャミしたのが原因か……つーか永琳。クシャミの一つや二つで投薬量間違えんといて!下手すりゃ死ぬからね!割と冗談抜きでね!

「…で?間違えたらどうなんの?」
「・・・」

…え?何で黙るの?黙らないでよ。怖いから黙らないでよ。いやマジで切実に。

「…あー……うん……悪い効果では無いわ。むしろ良い方ね」
「へ?そうなん?何だそれならそうと早く言ってくれよ~。編にビビっちまったじゃんか~(笑)因みに何ぞ?」
「ちょっと待ってて」

永琳はそう言うと、大きめのPCに向かい色々と入力をし始める。少しして、入力が終わったかと思うと、近くの道具などを入れてる棚から電気パッドらしきものを取り出し、コードをPCに繋げ、パッドを俺の頭に付ける。どうやらこれで検査をするようだ。

しばらくこのままで居ると、突然ピピピっと音が鳴る。永琳はその音が鳴ったと同時にPCに目を向け、結果をじっくりと見始める。途中途中で、何か苦い顔をしてたけど……どうなったんだろうぬ?

…どうやら見終わったらしく、永琳は椅子から立ち上がり、こちらに来てパッドを取り外す。取り外したパッドを元の場所へとしまった後、永琳はこちらに振り返り、口を開いた。

「…再生能力が細胞レベルまで分解されても再生出来るレベルまで

上がったわ。後、髪の毛でも何でも良いから、残ってたらそこから肉体を再生出来るようにもなったわ。
後は……色々と底上げされた事かしら？」
「…何その魔改造。怖い。…でもさ。そんな薬だったんなら、投薬しまくっても問題無いような……いや……待てよ？その分リスクもある筈だから……」

俺は考え込んで、とある一つの結論を出す。多分合ってると思う。

「…もしかして……俺の『一部』の潜在能力を『一時的に』引き出す薬だったのか？それもかなりの劇薬」
「…そういう事よ……小さじ一杯分なら体に全然影響が無いんだけど……厄介な事に、ビンの中身全部投薬しちゃったのよね……
…でも良かったわ。貴方が異常なまでに丈夫で」
「丈夫なのは関係あんのか？……因みに、全部投薬したらどうなんの…？」
「引き出された潜在能力が一生残る……けど、代わりに投薬して三秒で死ぬわ。そしてどう足掻こうと生き返れない。どんな薬でも、どんな魔法でも無理よ」
「え。何それ怖い。つーかなんちうモン投薬してくれてんねん！アホか己は！」
「生きてたから良いじゃない（これなら他の未使用の新薬を投薬しても良いかもしれないわね…）」
「…今……嫌な声が聞こえたんだが……」
「気のせい気のせい」

…不幸だ……上条さん以下だろうけど不幸だ……

――再び道中――

…という事があったのさ！凄いだろ！朝はエロイベント、その後はマッドイベント、充実してるよね！まぁ他にも色々あったよ？結構毎日。例えばルーミアに体を喰われたり、てゐの罠に地雷が仕掛けてあって死に掛けたり、零奈に犯されかけたり、トシキに入教させられかけたり、鈴仙とヤったり……

…あれ？俺、意外と充実した毎日を送ってるな……誰だよ一週間音沙汰無しだって言った奴。

「ご主人様です」
「ですよねー」

…そんなこんなしていたら、何時の間にか目的地の『博麗神社』に到着した！目的の場所ってここだったんだぜ？解ったか？

『博麗神社』とは！幻想郷の周りを囲う、幻想郷と外部を分ける常識の結界『博麗大結界』を管理している場所だ！因みにその管理を行っている『博麗の巫女』はここに住んでるんだぜ！

しかし！それよりも大事な事がある！

それは！

ここに！東方シリーズの主人公『博麗霊夢』が居るって事だぜえええええええええ！！！！！

ヒャッハー！新鮮な脇巫女だァー！貧乏じゃないよなァー！鬼巫女じゃないよなァー！ヒャッハー！！

「見事に叫んでますね！心の中で」

「おおともよ！俺のテンションが有頂天になった！このテンションはしばらく収まる事を知らない！うはｗｗｗおｋｗｗｗｗｗｗみｗｗなｗぎｗっｗてｗきｗたｗぜｗｗｗｗｗｗｗ」

「ブロントさんと内藤になってますよ。どっちもナイトですけど！」

「おｋ！それじゃあ早速Ｉ☆ＫＵ☆ＺＥ！」

俺は空を飛んで、無駄に長ったらしい階段を飛び上がっていく。これしきの階段で！東方厨である俺の進撃を止められるとでも思っていたのかぁ！？（ブ○リー風）もはや逃げられんぞぉ～！（ジ○ギ風）

進む進む俺の体。飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで。回って回って回って回る！

…どっかで聞いた事がある歌詞になったな。

そんなこんなで境内に到着ＤＡ！それじゃあ早速！

「霊夢！俺だ！脇枕してくｒ「そこの人！避けて！」ｗｈａｔ？」

俺が呆気に取られていると、何やら目の前に超高速で飛んでくる

何かが……

「え、なにご……へぶし！」

見事にどてっ腹にクリーンヒット。痛いです……

痛いんだけどね……無事なのよ俺……何か最近妙に頑丈になっちゃったらしくてさ。今の程度（多分３００ｋｍ／時は出てた気がする。目測でね）でぶつかったとしても、全然無傷です。おかしいよ俺。

…ところで、俺の体にシュウウウウウウウ！超！エキサイティン！した物は何だったんだ？妙に重みがあって、何か硬いモンが二本あるんだけど……

…ん？硬いモンが二本？それって角じゃね？

…つー事は……

俺は体に蹲っているものを体から離す。するとそこには！

腕の部分を無理矢理破ったようなシャツに、重そうな分銅（因みに両手・髪装備、色も形も違う）、結構立派な捻れた角を生やした幼女が居た。

こ、こいつは……『伊吹萃香』じゃねーか！（ライ○・ア・○イブのア○ラ風に）

説明しよう、『伊吹萃香』とは！

『伊吹萃香』は鬼である。それも山の四天王と呼ばれた強い鬼で『密と疎を操る程度の能力』を所持している。常時、前後にフラフ

ラとしている酔っ払いで、体も小さいが、かなりの怪力持ち。妖怪の山をも崩せると豪語しているらしい。因みに紫とは親友関係だったり。ようじょ！ようじょ！ツルペタようじょ！ようじょ！ようじょ！うわょぅぃ〝よっょぃ

…あれ？ちょっと待てよ？何で萃香が吹き飛ばされてんだ？こいつは高レベルの鬼の筈だぞ……それが吹っ飛ぶって……霊夢にでも蹴り飛ばされたか？それなら考えられるけど…

「誰かと思ったら蓮也じゃない。大丈夫？」
「あー…大丈夫だ、問題ｎ……へ？」

俺は寄って来た人物を見て目を丸くした。

だってそいつは……

「…何でここに居るんだよ……零奈」

そう。人里の変態こと遠命零奈だったからだ。こんな所で会うとは思わなかったわ…

「何でって……喧嘩しに来ただけだけど？」
「喧嘩って……このロリ鬼と？」

俺はそう言って、萃香を零奈の目の前まで持ち上げる。

「そうだけど？」

零奈は真顔で当たり前のように言い放つ。何それ怖い。つーかもしかしなくても、こいつ吹き飛ばしたのって……（萃香）

どう考えても零奈です。本当にありがとうございました。

俺と零奈が話していると、俺の手に居たロリ鬼こと伊吹萃香が、俺の手から離れ地面に着地し、俺の方に向き直りこう言った。

「う～…ロリ言うな～……これでも成長してるんだぞ～！」

…うん。無いな。萃香が成長するなんて有り得ない。胸がデカくて背が高い萃香なんて萃香じゃねぇ！何かそんな同人誌があった気がするけどそれは二次！これは現実！

「何言ってるの？ロリは需要あるのよ？それを捨てるなんてとんでもないわ！」

「それは一部の奴だけだろ！？私はもっと伸びたいんだよ！」

「胸デカのボインは勇儀姉さんだけで充分だよ。お前はロリでぺったんだから良いんだろうが」

「体関係で勇儀の話はすんな！悲しくなるだろ！……てか、誰？」

「おっと失礼。紳士Ｔｉｍｅ中で名乗るのを忘れてたぜ。俺の名前は高宮蓮也。永遠亭の居候です。宜しく……伊吹萃香さん」

「ん？何で私の名前を……あぁ！お前が紫が言ってた変な外来人か！一部の幻想郷住民を知ってるっていう！」

あ、ゆかりん俺の事話してたんだ。この分だとゆゆさまとかも知ってそうだな。ヒャッホウ！東方キャラが俺の事知ってくれてるぞ！何て幸せなんだ！

「…おーい。蓮也ー？すっごい顔がニヤけてるわよー？」
「おっと…これは失礼。いや何、東方はやっぱ良いな！って思ってさ」
「？　とうほう？地名か何か？」
「うんにゃ。気にすんあ」

東方は俺しか知らん事だ。いわゆる原作知識って奴だ。これがあるのは俺だけ。つまりこれは俺だけの特権。いやぁ～…何かしら特別な事があるってのは良いね！誇らしげに威張れるよ！

「…で？結局そうなのか？」
「おう。そうだぜ。何ならお前のスペカ全部言ってやろうか？」
「んー…後で良いや。今は――忙しいしね」

萃香はそう言って神社の中心ぐらいの所に行く。それに伴い、零奈も進んでいく。

「さぁ零奈！続きを始めるよ！」
「えぇ！さぁ！行くわよ！」

その言葉を皮切りに、一瞬二人の姿が見えなくなったかと思うと、ドゴォ！という音が鳴り、萃香が森の方に向かって吹き飛ばされる。そこにあった木という木を薙ぎ倒し、どんどん奥へと吹き飛ばされていく。

そして、数十本、木が薙ぎ倒された後に、萃香はようやく止まる。望遠鏡で見なければ分からない程遠くに吹き飛ばされて、当人がどんな状態になっているかは分からないが、何となく、笑っている事だけは分かった。

零奈の方を振り向くと、何と彼女も笑っている。まるで欲しかっ

たゲームを買って貰った子供の様な喜びの笑みを零し、零奈は萃香が吹き飛ばされた方向へと一気に走る。
萃香もそれに合わせ、零奈に向かって一気に走り出す。そして、零奈の右拳と、萃香の右拳が振り下ろされた時……周りに強大な波動が飛び散った……

…うん。あれは凡人が入り込んで良い領域じゃないわ。入り込んだら即殺される。あの空間には干渉しちゃいけないんだ。危険すぎる。うん。

「…何よあれ……おかしすぎるでしょ……」

どうやら鈴仙も追いついたようで、零奈と萃香の殴り合いを目の当たりにし、呆然としてしまったようだ。
…うん。正しい反応だよ鈴仙。あれはおかしい。どれだけおかしいかって言えば、ｖａｕｌｔ１０１のアイツ位おかしい。つまり人外です。本当に（ｒｙ

そんなこって、俺と鈴仙が呆然としていると…

「おーい蓮也！鈴仙！危ねーからこっち来いよ！」

と、そんな声が聞こえた。

声のした方を見てみると、そこにはトシキと早苗さん。そして何故かチルノに大ちゃん。そして……

お目当ての『博麗霊夢』が居たのだ！ヒャッホウ！ようやく会えたぞ！ガンdじゃなかった霊夢ぅぅぅうううう！！！

さて！それでは『博麗霊夢』の話をしよう（ル○フェルさん風に）。

『博麗霊夢』とは東方の主人公で、『空を飛ぶ程度の能力』を所持している博麗の巫女である。単純な性格であるが表裏が無い。喜怒哀楽が激しく、人間・妖怪を問わず惹き付ける不思議な雰囲気の持ち主である。誰に対しても平等である反面、誰に対しても仲間として見ておらず、異変解決の際は、紫やらなんやらと行動してても、常に一人という人間だ。才能はあるが努力はしない。それでいて幻想郷最強。チート巫女である。貧乏じゃないよ！ちゃんと異変解決してお金は貰ってるんだよ！後、鬼巫女とかじゃないと私は信じている。

遂に……遂に霊夢に会えたぞ！ならばやる事は唯一つ！

俺は韋駄天の如く超スピードで、霊夢達が居る神社の方へと突っ走る。

そして俺は叫ぶ。

「霊夢ううううううううううう！！俺だあああああああああああ！！」

霊夢達から大体2メートル位の地点に来た時に一気にジャンプする。

そして、空中で右手と左手を前に出し、足を曲げ膝を腹に付け、

体を縮こまめ、その体勢のまま地面に着地し、霊夢達の方へと滑り込み、あらん限りの魂を込め、言い放った。

「脇を触らせて下さいィ！！！！！」

見事なジャンピング土下座が決まった！これでかつｒ

「何だか知らないけど、取り敢えず落ち着きなさい」

その言葉が聞こえたかと思うと、俺の頭に強烈な衝撃が走り、視界が揺らぐ。

そして俺は……

「オウフ」

その声と共に意識を失った。

第三十話　幻想の日々？ＰＡＲＴ１：博麗神社のある三人ｓｉｄｅ　蓮也（後書

じっかんがかっかるよ♪やっほほーいやっほほい♪
どうしてこうなった♪どうしてこうなった♪

…スマソ。割とマジで切実に。

今度は大丈夫だよ！今度は……今度……は……

今回の補足

Ｍ４カスタム
元ネタはＭＧＳ４です。ＭＧＳは面白いよねやっぱ。

「今回補足が短くないか？」
「補足するものがほとんど無いんだもん。仕方ないじゃない」

しばらくは博麗神社での話が続くと思います。大体３～５話位かな？
なるべくｇｄｇｄにしないようにはしますが、何せ自分ですんで、
あまり期待はしないでね。

それじゃあまた次回お会いしましょう。それでは。

第三十一話　幻想の日々？ＰＡＲＴ２：博麗神社のある三人ｓｉｄｅ　トシキ

最近遅かったから速めに更新してみた。
最初っからこれぐらいのペースでやれよ…ｏｒｚ

第三十一話　幻想の日々？ＰＡＲＴ２：博麗神社のある三人ｓｉｄｅ　トシキ

澄んだ青空。涼しい風。暖かい日差し。
そんなものを浴びながら、オレは今、『博麗神社』にいる。

何でここにいるかというと……早苗が博麗神社にいる『博麗霊夢』に、色々とお裾分けしに行こうと言い出して、早苗がオレにも付いてきて欲しいと頼まれたからだ。
博麗神社ってとこにも興味があったオレは、快くその頼みを受けた。

まぁ……居候の身だから断る事は出来ないんだけどさ。

んで。早速神社に来たオレと早苗。山菜や果物のお裾分けをして、掃除を手伝って、何か米とかが不足してたから代わりに買いに行って、神社にいた小さい鬼の萃香から酒を一緒に飲まないかとか言われたけど、流石に朝っぱらから飲むのはどうなんだって理由で断ったりと、色々とやってたわけだ。

そんな時に、零奈がやって来たんだ。団子屋で会った妖精二名を連れて。

どうやら零奈は霊夢とは知り合いだったらしい。どうやら『あの事件』があった後、慧音だっけ？まぁそいつが異変が起きたというのに、霊夢が全く仕事をしなかったって事で、博麗神社まで少し様子を見に来た時に知り合ったそうだ。霊夢が言うには「相手にするのが面倒な変態」だそうだ。だから変態って何だよ？昆虫が進化する時の事じゃないのかよ？

んで、適当に話してると、零奈は突然、萃香に戦いを挑みやがった。スペカ戦じゃない、拳のみのケンカを。

オレはこの世界の『妖怪』を良く知らないから、鬼に挑むことがどれだけ無謀か、ましてや素手で挑むなんて持っての他だって事は全く知らなかった。でも、そんな奴に真正面から挑もうとするこいつの姿勢にオレは感動した。

だってさ、誰しも無理だとか言う奴に対して、相手の得意な戦い方で挑むってのはカッコイイと思わねーか？そんな勇気を持っている事がすげぇ！って思わねーか？

オレは馬鹿だからそんな思考しか出来ねーけどさ。でも熱いとは思わねーか？そんな戦いって何だかワクワクしねーか？オレは戦闘狂じゃねーけど……そんな戦いを見てみたいと思ったんだ。

だからオレは、無謀だと言う早苗を抑えて、その戦いを見届けようって思ったわけだ。

ちなみに霊夢は、どうでも良いって顔をしてた。それはそれでどうなんだよ……

そして、零奈と萃香のケンカが始まったんだが……

はっきり言ってヤバかったぜ。目の前で見てたけど……いや凄いぜ。拳と拳がぶつかる度に、周りに衝撃波みたいなのが走るんだ。そしてその衝撃波で、周りの木が今にも折れそうな位震えていたんだ。

パワーとパワーのぶつかり合い。鬼である萃香の力の凄さは話には聞いていたが……まさかこんなにつえーとは思わなかったぜ。だって普通に地面を叩き割ってるんだぜ？ビックリしたぜ……

だけど……零奈はそれを上回っていたんだ。振るう拳の衝撃で木が吹っ飛んで、オレ達まで吹っ飛ぶかと思ったぜ。

まぁ……オレが吹っ飛ばないように頑張ってたからなんだけどさ。

どうやって防いだか？それは簡単だ。要は衝撃がこっちに当たらなければ良いわけだ。だったら衝撃のスピードを操作して０にしてしまえばいい。そうすりゃ結果的にはオレ達へのダメージが無くなるワケだ。

でも、それは単純な事じゃねぇ。オレがそれを防ぐにはとある技を発動しなきゃならなかった。

『速度世界（スピードワールド）』それでオレは衝撃を防いでいた。

『速度世界（スピードワールド）』…これは、オレの周りに能力で形成された特殊な空間を展開し、空間に入ったもの全ての速度を操作を、自分が思うままに行えるというかなり強力な技だ。この空間の中では基本的にオレの力に抗う事は出来ない。操作最高速度はマッハ７（時速８５６８？、秒速では２３８０mだったっけ？）、最低速度は完全停止、つまり行動が起こらなくなるワケだ。それで衝撃を完全停止し、こっちに被害が及ばないようにしてたってワケ。

こいつは三日前に出来るようになった技で、空中にある物をその場で停止させられるから、それを応用して何か出来ないかな？って思って色々やってたら、たまたま神力を使っちまってこの空間が出来たんだ。要は偶然。これって使い勝手がかなり良いから結構多用してる。何回使っても疲れねーしな。

そんな感じで、零奈と萃香の戦いをぼけーっと見てた所に蓮也がやってきた。それも運悪く零奈が萃香を吹き飛ばした時に。

『速度世界（スピードワールド）』で萃香を止めようとはしたんだが、こいつの射程範囲は５m。蓮也の居た場所には届かない。

その時はかなり焦った。だって零奈の怪力＋鬼の異様な頑丈さ（もちろん早苗から聞いた）だぜ？まともに喰らったら……良くて全身複雑骨折…悪くて……死。それ位ヤバかったのに…

ダメージ0。おまけに吹き飛んでない。しかも平気な顔をしてる。ありえねぇ。

オレはその時かなり驚いたが、零奈を見ると「何だこいつか」みたいな顔をしてた。何なんだよ。

零奈は蓮也や萃香と軽く話した後、改めてケンカを再開して萃香を森の方に吹き飛ばしていた。そん時の零奈の顔に、オレは内心驚いた。

だって笑ってたんだぜ?それも大好物を味わう時の顔みたいに。あれが全く分かんねー。

あれは相手を見下す笑いなのか……それとも純粋に楽しんでる笑いなのか……まぁ後者な気はするけどな。

んでだ。蓮也となぜか飛ばずに登ってきた鈴仙が鳥居の近くに居たから、危なねーなとか思って声をかけたワケだ。

そしたらさ……蓮也がとんでもない速さでこっちに来たと思ったら突然ジャンプして、空中で何か土下座の体勢を作って……

霊夢に脇を触らせて欲しいと言ってきた。

その後すぐに霊夢のカカト落しが蓮也の頭に当たって、気の抜けた声を発した後に気絶した。けど三秒で復活した。何なんだよもう。

それで今は……

「お願いします!せめて!せめて脇を見せてくだしあ!お願いしま

すから！」
「いやだから何でよ！それに何の意味があんのよ！」
「意味なんてねぇ！ただの自己満だ！だから見せてくだしあ；；」
「ちょ、泣かないでよ！対応に困るじゃない！」

…こんな感じだ。

…何つーか……これが『しゅーるな光景』ってヤツか。良く分かったぜ。

…何つーか……まぁ……何となくこいつだったら仕方ないって気はした。だってさ、いつぞやの団子屋の時にも
「早苗さん！マジで脇見せて下さい！有り金全部出しますから！！」
とか
「けーね先生！頼む！頭突きしてくれ！白沢が無理なのは分かってるから！その状態で良いから！お願いします！！」とか、
「鈴仙可愛いよ鈴仙。そのウサ耳をほむほむしながらくんかくんかしてぺろぺろしたいお！！」とか
途中で来た妹紅とかに対しては
「もこたんｉｎしたお！おっしゃーもこたんの白髪をくんかくんかすっぞー！つーかさせてくだしあ！！」とか
「チルノオオオオオ！冷たいだろうけど！ぎゅっと抱きしめさせてくれえええええ！！」とか
「大ちゃん！中ボスでも名無しでも俺は君を見捨てないよ！だから頭撫でさせてくれえええええ！！」とか
「リグル！俺だ！男の娘とか言わんからその触覚をはむはむさせてくれ！！」とか
「みすちー！俺だ！鳥目にしてくれーーー！！そして歌を聴かせてくれーーー！！」とか

「るみゃ！俺を喰いたければ何時でも喰うがいい！つーか喰ってくれ！東方キャラに喰われる幸せを感じたいんだ！！」とか言ってたしな……

…そういえば零奈も酷かったな。

「鈴仙のウサ耳と制服良いわね！ねぇ？これから制服プレイしない？」とか
「早苗さん！その豊満な胸を揉ませて！大丈夫！私が気持ち良くしてあげるから♪」とか
「慧音はやっぱ良いわ～。胸も感度も一級品ね！今すぐヤりましょう♪」とか
「も～妹紅ったら♪構って欲しいならそう言えば良いのに♪さぁヤりましょう♪」とか
「ふふふ♪最強にして欲しいなら私の言う事をちゃんと聞く事！特にセ○○ス時にはね♪」とか
「大ちゃんの髪って良い匂いがするわね～♪これはヤってる時に更に興奮しちゃうかも♪」とか
「リグルって見た目男の娘に見えるわよね～。あ、そういうプレイも良いわね。私の触手で生やしてあげれば良いんだしね♪」とか
「ミスティアって歌が得意なのね♪私も歌は好きよ♪でももっと好きなのは……布団の上で嬌声という名の歌声を聞く事よ♪だからヤりましょう♪」とか
「ルーミア？人を食べるのも良いかもしれないけど、もっと良いものがあるのよ？知りたかったら今夜私の部屋に来なさい。手取り足取り教えてあげるわ♪」とか
「蓮也って性交の経験ある？無いなら私が今此処でみっちりと教えて上げるわよ♪」とか

「トシキ。貴方は知識が少ないわ。それじゃ駄目よ！私が布団の上でみっちり教えて上げるから、今夜私の部屋に来なさい♪」とか言ってた。

…どっちも意味が分かんねぇ。言ってる事が全く理解出来ねぇんだよな……オレが馬鹿だからなのかもしれないけどさ。

でもまぁ……何となくだけど恥かしい発言なんだなってのは分かる。だって二人が発言する度に早苗が顔を赤らめてるからな。よーく分かる。それに妹紅がその一つ一つにつっこみ？だっけ？それを入れてたからなぁ……あいつら恥かしいって感情がねーんじゃねぇのか？そんな気がしてならねーわ。

…何でオレはそんな事憶えてるんだろうな……分からん。

んでだ。蓮也がこんな事をするのは認めるよ。

…だけどさ

「いや本当にお願い！少し見せてくれるだけで良いから！お願い！ご主人様に見せて上げて！この通りだから！」

…何で鈴仙まで頭下げてるんだ？あいつが下げる必要ってあんのか？つーか一週間前に会った時と大分違う気がすんだけど。つーか会う度に何か知らねーけど色々と凄い事になってんだけど。土下座の形がキレーなんだけど。ふくらはぎが見えて鼻血出そうなんだけど。つーか出てるんだけど。どういう事なんだこれ……

「何であんたまで頭下げてるのよ！あんたが下げる必要は何処にも無いでしょ！？」
「ご主人様の為なら幾らでも頭を下げます！ご主人様を心から愛しているから！だから私は頭を下げるの！お願い！ご主人様に脇を見せて上げて！ついでに私にも見せて！！」
「何か答えがおかしいんだけど！？てか何であんたにまで見せなきゃならないのよ！」
「それが私の性（さが）だから！」
「答えになってない！！」
「お願いだ霊夢！いや霊夢さん！いや霊夢様！そのスベスベな脇を見せて下さい！」
「いい加減にしろおおおおおおおお！！！！霊符！！夢想封印！！！！」
「「アッー！」」

あ、蓮也と鈴仙が吹っ飛ばされた。まぁあれは怒っても仕方ない……

…あれ……ちょっと待てよオイ。吹っ飛ばされた方……確かあそこは……零奈と萃香が戦ってる場所で……しかも衝撃の直線状じゃ……

「ウボァ……生の夢想封印は結構効ｋ」
「いたたた……相変わらず効くわねこｒ」

二人の言葉が言い切る前に零奈と萃香の殴り合いで発生した衝撃が二人に直撃し、二人は宙に拭き束された。そしてそのまま木に激突した。

…何やってんだよ……霊夢も蓮也も鈴仙も……少し落ち着けっての……おけげで蓮也も鈴仙も吹き飛ばされて木にぶつかっちまったじゃねーか。ほんと何やってんだよ…

その後、オレは『速度世界（スピードワールド）』で二人を止めれば良かったと、蓮也と鈴仙が戻ってきた時に思いつき、自分の馬鹿さに少し泣きそうになった。

蓮也と鈴仙が戻ってきて数分位たった。二人は蓮也がどこからともなく出したお茶を啜っている。

つーかお前ら何で無傷なの？結構良い勢いで吹っ飛ばされたよな？その勢いで木にぶつかったよな？木、折れたよな？何でそんな平気な顔してんだよ……蓮也は分かるとしても……鈴仙がこんなに頑丈だとは思わなかったんだけど…

そんな感じにオレが唖然としてると、お茶を啜ってた霊夢が蓮也に話しかけた。

「…落ち着いた？」

「ｈａｉ！落ち着きますた！いやすまんすまん。霊夢に会えた事が嬉しくて欲望を抑えられなかったんだ」

「私に会いたかった？……変な奴」

「何故に？会うことが変っておま……まー確かにたった一人の人間に会う為にこんな所まで来んのはおかしいかもしれへんね」

「それもそうだけど……私の何処に引かれたのよ？」
「主人公。そして霊夢だから」
「…まともな返答をする気は無いの？」
「してるじゃん」
「いやいやいや」

…さっきはあんなだったのに、もう打ち解けてるし……あれを見た後だと少しか警戒しないのか？霊夢。それともう大丈夫だと思ってんのか？

…オレはまだダメな気がしてならねーんだけどなぁ……

オレが内心複雑な気持ちになって来てる時に、霊夢は鈴仙に話しかけた。

「…そういえばさ。あんた何でこいつを主人呼ばわりしてんのよ」
「え？ご主人様をご主人様って呼んで悪いの？」
「いやそういう訳じゃ無いけど……あんた永琳とか輝夜とか、そーいうのとかも居たじゃない。まさか師弟関係とか止めたの？」
「お師匠様との関係は変わってないわよ。姫様に対してもね」
「じゃあまた何で」
「そんなの簡単よ――――愛してるからに決まってるじゃない」
「…そういう事真顔で答える？普通」
「私はこれが普通だと思ってるけど？」
「あぁそう……じゃあまぁとやかくは言わないわ。個人の問題だしね」

そう言って霊夢はまたお茶を啜る。その後に近くにあった煎餅を一枚取って口に運ぶ。パリッと良い音を立てて煎餅は割れ、ボリボリと噛み砕かれる。美味そうに食うな。さっきから思ってたけど。

オレも煎餅を一つ貰いボリボリと食ってると、チルノが何かを思い出したような顔をして口を開いた。

「あ、そーだ。やいレンヤ！あん時は良くもやってくれたな！今度は負けないから今すぐ戦えー！」

「え。いきなりでビックリ何ですけど。まぁもちついて取り敢えずこれでも喰らっとけ」

蓮也はそう言って一枚のスペカを取り出した。

「ドリ符『信頼と実績の金ダライ』」

「うお！？いきなりスペカ宣言はずｒ（ガン！）ギャー！」

チルノは突然頭上から落ちてきた……タライ？だっけ？を喰らい、かなり痛そうに頭を抱えていた。

でもあれあんまり痛そうには見えないんだけど…

「良し。良好だな。ツッコミ専用スペカの具合は上々だぜ」

「ツッコミ専用スペカって……聞いた事がありませんよ。そんなスペカ」

「そりゃお前。俺が作ったんだからそうに決まってるだろ」

「え。どういう理屈ですか？全く意味が分からないのですが…」

「早苗。考えちゃ駄目よ。感じるのよ」

「どういう事ですか！？本当に意味が分からないんですけど！？」

「解らなくても大丈夫だ、問題ない」

「問題だらけですよ！何なんですか一体！？」

「何だも何も……そういうものですよね？ご主人様♪」

「あぁそうだ。そういうものだぞ？早苗さん」

「どういうものですか！？ほんと具体的に説明して下さいよ！！」

…早苗が物凄い声を上げてるんだけど……これが洗練された『つっこみ』ってヤツか。妹紅のも凄かったけど、早苗のも凄いな。良く分かんねーけど。

そんな感じに話してた蓮也だったが、何故か突然こっちの方を向き、話しかけてきた。

「なぁなぁトシキ。スペカ持ってる？」

「ん？持ってるけど……何だよ突然」

「いやね。此処に居る女性陣のスペカは大体解るけど、お前のは知らないなー…とか思ってな。俺のも見せっから見せてくんね？」

…こいつは何がしたいんだ？話題の切り替えが早すぎてワケ分かんねーんだけど……

…まぁ……別に見せるのは良いんだけどさ。

「あぁ。別に良いぜ」

「そうか。そんじゃあ……ほい」

蓮也はそう言って手持ちのスペカを出してくる。オレも自分の持ってるスペカを出して蓮也に渡す。

ちなみにオレが持ってるスペカは四枚。そんなに作ってなかったんだよな…

オレは蓮也のスペカを受け取って、まず最初に思ったのは数がすっげぇ多かったって事だ。えーと……十一枚か。結構作ってるんだな…

えーと1枚目は……

怒符「怒りの炎」

…怒り？何か物騒な名前だな……えーと次は…

吹雪「ノースブリザード」

…寒そうなスペカだな。次は…

迅雷「駆け抜ける衝撃」

…速そうなスペカだな！次は…

反射「ミラーシールド」

反射すんのか。そんなスペカもあんだな。次は…

ドリ符「信頼と実績の金ダライ」

今使ったヤツか。…そーいやドリ符って何だよ。これだけ明らかに他のと名前の雰囲気が違うんだけど……えーと次、

神器「パイプ・ザ・グングニル」

これはあれか？蓮也の持ってる武器を投げつけるスペカなのかな？よし次、

只符「怒りの田植え」

…只?只って何だ?……まー良いか。次、

偽只「デコイモア」

え。また只かよ……良く分かんねースペカだな。つーか只って何だ……あーまぁ良いか。次、

暴符「ゲッダン」

…暴れるのか?何か手強そうなスペカだな。次、

螺旋「超電磁ゲッタードリルブレイク」

…何だか知らねーけど……色々と混ざってる気がした。次、

魔砲「ディバインバスター」

…魔砲?魔法じゃないのか?ん?んんん?もしかして字が間違ってるのか?良く分かんねーなー…

…これで最後か。早苗から聞いたけど、スペカって本人の持ってる能力に関わるものが多いらしいが……何か共通するものが無いな。確か蓮也の能力って『幻想を実現する程度の能力』だっけ?ならこれ全部『幻想』とか『実現』とかに関わるスペカなのか?うーん……分からないな。

ちなみにオレのスペカはこんな感じだ。

瞬弾「ハイスピードブレット」
霊力と神力で構成された弾を超高速で撃ち出すスペカ。

瞬足「韋駄天走り」
身体強化系のスペカ。超高速で走り、超高速の弾を放つ。ついでに斬る。

瞬連斬「零」
これはスペカっつーか、ただの宣言用の紙だな。だってただ相手を超高速で斬り裂くだけだし。

「速度世界（スピードワールド）」
さっきの技を無理矢理スペカにしただけ。弾幕ごっこ仕様になって更に使いやすくなった。

…これだけだな。

…よくよく考えたら、何で蓮也はこんな大量にスペカを作ってんだ？確か一週間前に会った時は幻想入りしてから一週間経ったって聞いたから……まだ二週間でこんなに作ったのかよ！すげぇな…

……

…これ、一ヶ月ぐらい経ったら二十枚くらいになるんじゃねーか？とんでもないな……

「…ふんむ……大体が速度に関わるもんか……ラディカルグッドスピードとかトランザムとか、そういうネタを投入したら結構良さげだと思うんだけどなぁ…」

「Ｖ－ＭＡＸとかは？」

「あぁあれも良いかな……でもあれは俺がやるから渡したくないし

なぁ……」
「んー……だったらピオリムとかヘイストを教えてみるのはどうです？」
「あー速度強化呪文か。その手があったか。それならそこまで悔しく無いし良いかもな。つーか大分ネタが染み付いてきたなお前」
「ご主人様の趣味・趣向に合わせられるよう努力してるんです！もっとご主人様に喜んで貰いたいですし♪」
「その発言に全俺が泣いた。俺はめがっさ嬉しいぞ！」

そう言って蓮也は鈴仙の頭を撫でる。

「えへへ♪ありがとうございます♪」

撫でられた鈴仙はかなり嬉しそうだ。

本当に仲が良いんだな。仲良き事は……えーと……何だっけ？忘れちまった。

オレがぼーっと蓮也と鈴仙を見ていると、蓮也がこっちに気が付き「あぁ」という声を出してオレのスペカを差し出した。

「すまんすまん。見終わったのに返すの忘れてたわ」
「ん？あ、いや別に良いぜ。気にしてないからよ」

そう言ってオレも蓮也のスペカを返す。
蓮也は自分のスペカを一枚一枚見ながら、オレに話しかけてきた。

「俺のスペカどうだったよ？」
「ん？んー……どれも手強そうだったな。つーか数多すぎ。何でこんな一杯作れるんだよ？」

「俺のスペカは百八通りあるぞ」
「え!?マジで!?」

百八って……とんでもない数じゃねーか!こいつ……そんなにスペカを作ってたのかよ!何てヤツだよ……

「まぁ俺のスペカはネタの数だけあるからな。ゲームや漫画、アニメ、ライトノベル等など。色んな所からネタを持ってくるから、そん位は普通だぜ?まだ作ってねぇけどさ」
「あ、作ってはいないのか……でもすげぇな……オレはそんなに作れねーぞ…」
「んー……まぁ、おいおい作ってけば良いんじゃね?時間はあるんだしさ」
「そうだな……ところで、その手にある物は何だ?」

オレはそう言って、話してる途中から取り出した黒く長いずっしりとした物を指差す。

「スパスだ。セミオートショットガンのな」
「すぱす?せみおーと?しょっとがん?…何だよそれ」
「あぁ知らないか。世界が違うと結構面倒だな……まぁこれは俺の世界の武器だ。銃って言うんだ。お前の持ってる剣みたいな奴さ。早苗さんは知ってるだろ?」
「えぇまぁ……実物を見た事はありませんでしたが」

早苗の世界にあった武器なのか。それじゃあオレは知らないよな。
…しっかし武器ねぇ……剣や槍みたいに刃が付いてるわけじゃないのに戦えるのか?

「なぁ蓮也。それどうやって使うんだ?」

「知りたいか！見たいか！そうかそうか！それじゃあ見せてやんよ！」

蓮也は、オレが蓮也の持ってる武器の使い方を聞いたら突然テンションを上げてきた。何でそんな目を輝かせてるんだよ……

「んー……じゃあそこの木に向かってでも撃ち込んでみますか！」

そう言って蓮也は『すぱす』を持ち、何だか弓の打ち方に似てるような構えを取る。遠距離武器なのか？

蓮也は、『すぱす』の持ち手部分をしっかりと握り、その近くにあった突起を人差し指で引いた。

ズドン！と大きな音を立て、『すぱす』の恐らく口と言うべき所から大量の小さな鉄球が発射される。それは木に向かって飛んでいき、そしてぶつかった瞬間、木に大量の穴とヒビガ入りグラっと揺れたかと思うとゆっくりと後ろに倒れてしまった。

「んな…！」

オレは思わず驚きの声を上げてしまう。だってそうだろ？無数の小さな鉄球が当たっただけで、木が簡単に倒れちまったんだ。そりゃ驚きもするさ。

「ふっふっふ！どや！凄いだろ！通常の物より威力を2．5倍上げて、その威力に耐えられるように強度も改造！更には反動を軽減させる為にあらゆる手を施し最高の仕上がりにした！見事なもんだろ！」

「…本当ね。これはかなり危険な物よ……でもこれがあればそこいらの妖怪にも負けないでしょうね…」

「そういうこった。だがこれは俺のもんだ。他の奴にはやらんぞ？鈴仙は良いとしても」
「い、いえ……欲しいとは思いませんよ……無くても全然平気ですし」
「まぁそうだろうな。つーかここに居る奴全員いらないよね。充分強いし。
…あ！他のも見るか？まだ三つしか作ってないけどさ」

そう言って蓮也は小さめの『じゅう』と『すぱす』と同じ大きさの『じゅう』を取り出す。

…そーいやどっから出した？こいつの背負ってる袋の中に入ってたとは思えないんだけど……

「あの……蓮也さん？」
「ん？何だい大ちゃん？」
「…それって……どこから取り出したんですか？」

あ、大妖精が聞いた。

「M○Sでは良くある事」
「え」
「え」

…答えになってねぇ！MG○って何だ！？何かのイニシャルか！？

「…取り敢えず……あんたが変な奴だってのは解ったわ」
「変な奴とは失敬な。変な奴ってのはあそこで鬼とタイマン張ってる奴の事を言うんだz」

蓮也は突然言葉を区切り、馬鹿みたいに口を開けて唖然としていた。

「どうしたんだよ？一体何があったんd」

オレは何で唖然としてるのか気になって蓮也に見てる方を見ると、

そこには、

萃香とキスをしている零奈が居た。

…どうしてこうなった。

第三十一話　幻想の日々？ＰＡＲＴ２：博麗神社のある三人ｓｉｄｅ　トシキ

どうもです。何か今回は速かったなぁ……いつもこれぐらいのペースでやれれば良いんだけど……リアルが忙しすぎて…ｏｒｚ
せめて今月中には、もう一度くらい七人録か聖生伝のどちらかを更新したいなぁ。
…まぁ自分が頑張るしかないんですけどなｏｒｚ

今回の補足

・『速度世界（スピードワールド）』
トシキの奥義の一つ。ぶっちゃけ超チートな技。現段階だと神那女と、この小説のボス級の奴とかラスボスしか対抗出来ない。とんでもないね。
ちなみにこれは、トシキが成長する毎に射程範囲と効果範囲が広がっていきます。
最終的には時空とか世界も超えられるスピードまで上げられるようになる。うん。とんでもないね。

・スパス
ＭＧＳＰＷバージョンのスパス。蓮也はそれを実現して改造した。
ちなみに改造は能力も何にも使わず、元々持ってた才能を生かして行いました。蓮也はその気になればメタルギアも作れます。なので武器の改造も余裕なのです。

・蓮也が出した二つの銃
一つは前の話でも出たＭ４カスタムです。

もう一つは、バイオハザード：コードベロニカより、改造ベレッタ（連射型）です。
今の所、銃器はこの三つだけですが、その内ＳＶＤとかＲＰＧ７とかも出す予定。つーか蓮也自身、そうしないと弱いんよ…
ちなみに、蓮也は作中で出してませんでしたが、クレイモアやデコイ、グレネード、スタングレネード、スモークグレネード、チャフグレネード、白燐手榴弾（投げると燃える）などを実現化してます。
無限バンダナも実現化してますし、弾切れの心配はありませんね。

・蓮也のスペカ
分かる人には分かるスペカ群。今はまだ詳しくは説明しませんが、後々でちゃんと説明されますので、それまでお待ち下さい。

・トシキの動体視力
トシキは速度を操る程度の能力を持っている所為か、動体視力が異常です。普通銃弾を見ることなんて出来ません。トシキはそういう面では人間離れしていると言っても良いでしょう。
…でも蓮也とレクトを除いた四人は弾丸を見切れるんですよね……
何の強化も無しに。
何でうちの奴らは人間なのに人外な連中が多いんだ！

・鈴仙の頑丈さ
これは蓮也との交わりが原因だったり。
まぁこれも後々分かりますから、気長に待っててください。

今回の補足はこんな感じかな？何か今までで一番長かった気がするぜぇ……

さて次回。零奈はなぜ萃香とキスをしていたのか？喧嘩してたんじ

ゃないのか！？
その答えは次回！ではまた次回お会いしましょう。それでは。

第三十二話　幻想の日々？ＰＡＲＴ３：博麗神社のある三人ｓｉｄｅ　零奈

今回バトル要素多め、ちょっとエロ成分入ります。
気をつけろ！

第三十二話　幻想の日々？ＰＡＲＴ３：博麗神社のある三人ｓｉｄｅ　零奈

突然だけど『鬼』という種族をご存知かしら？
『鬼』と聞くと必ずと言って良い程、赤い皮膚に頭に生えた二本の角、鋭い牙、棘の付いた巨大な棍棒というのを連想するだろう。
それは一般的な『鬼』であって私の言っている『鬼』とはまた違う。
私の言う『鬼』というのは比較的人間の形に近い。例えば人間の女性に角を付けただけとかね。まぁこれは私が今まで退治してきた『鬼』とはかなりかけ離れている。私の世界での『鬼』は比較的空想の形に近いのだ。
それじゃあ私はどの世界の『鬼』について語っているのか？

それは私が今現在居る世界……幻想郷での話だ。

幻想郷に居る『鬼』は先程言ったように大抵が人間の形をしており、また顔やら何やらも人間に近い。
まぁ……幻想郷に居る妖怪とか神とかも人間に近い……ていうか人間なんだけどさ。

因みに幻想郷の『鬼』は酒好きで喧嘩好き。嘘を嫌い、正直で強い者を好むそうだ。
私は幻想入りしてこの世界における『鬼』の存在を知った時、何ともいえないワクワク感を憶えた。何故なら私の退治してきた『鬼』は全員人殺しを好むような外道集団だったからだ。それらを見続けて来た私は性格がまるで逆の『鬼』の存在に凄く興味が湧いたのだ。
私は『鬼』に戦いを挑もうとした。だけど名無しの『鬼』には挑まなかった。そんな実力の無い奴に挑んでも面白くないじゃない♪
だから私は名のある鬼に挑もうとした。

私が挑もうとしたのは『伊吹萃香』山の四天王の一人と呼ばれた『鬼』だ。四天王と言われるだけあって実力はかなりのもの。噂によると、自身の能力で月を破壊し、そして元通りにしたという話だ。中々に面白い話だ。もしそれが本当だとしたら私が挑むのにふさわしいだろう。私は心を躍らせた。

私は今日、チルノと大ちゃんと共に博麗神社に来た。『伊吹萃香』は普段、博麗神社に入り浸っているらしい。チルノが偶々博麗神社に悪戯をしに行くとか言い出したから、丁度良いと思い、一緒に神社まで来たのだ。

私は神社に来てまず、此処の巫女である『博麗霊夢』にちょっと変態行為を仕掛けようとした。これは闘う前に変態成分を補充すると同時に霊夢を犯すという大きな事を成し遂げようとしたからだ。

まぁ蹴り飛ばされて終わったが。

まぁ何はともあれ変態成分を補充出来た私は偶々そこに居たトシキと早苗と軽く話していた。どうやら二人は霊夢に山菜などをお裾分けする為に此処に来たらしい。そしてトシキは雑用をやってる。体良く使われてるわね～。まぁ本人も嫌がってないから別に良いけど。

トシキ達と軽く話し終えた私は、遂に『伊吹萃香』に戦いを挑んだ。ルールは簡単。スペルカード使用禁止、能力使用禁止の拳のみの殴り合いだ。

正直、能力を使われた所で負ける気はしないが、どうせなら此処の『鬼』の素の力という物を味わっておきたかったからだ。

萃香は私の提案に快く乗ってきた。どうやら拳のみの戦いを挑む人間が今まで全く居なかったらしく、その言葉を聞いた途端、彼女

は目をキラキラと輝かせていた。
私はそんな萃香と闘おうとしたが、早苗に止められた。無謀だと。
そんな事は知らないわ。私は闘いたいから此処に来た。それに無謀って言うのは私の実力を知らないから言えるのよ。後で教えて上げようかしら？

私が早苗に止めないよう言っていたそんな時、トシキが早苗の腕を引き彼女を抑えた。
トシキは「闘おうとしてるヤツに水を差したらダメだぜ早苗。こいつは本気なんだ……だから止めるのは悪い事だぜ」と言って早苗を無理矢理縁側に座らせた。こういう事に一番否定的な感じに見えたけど……案外こういう展開が好きなのかもね、こいつ。

私は早苗が落ち着いたのを見て、改めて――萃香との本気の喧嘩を始めた。

――――――――――――――――――――

萃香が此方に接近し右拳を繰り出す。それを軽くいなし、体を回転させ左肘で脇腹を突く。萃香は一瞬怯んだ様に見えたが、それはブラフ。隙を見て小さい体を生かし、私の懐に潜り込んで来る。
私は咄嗟にボクシングの構えを取り、萃香の拳をステップでかわし、左左右のワンツー・コンボで攻め立てる。
萃香はそれらをいなしたり、かわしたりして対処するが、何発かは顔と胸と腹に打ち込まれる。が、怯む様子は無く、逆にどんどん攻撃は激しくなってくる。
私はボクシングからムエタイの構えに変更し、強烈な蹴りの強襲

を仕掛ける。時に肘。時に足払いを加え、萃香に攻撃の隙を与えないようにする。

萃香はそれを避けて避けて避けまくって、攻撃に移ろうとするが、私が放ったミドルキックが脇腹にクリーンヒットし、勢い良く吹き飛ばされた。

しかしそこは鬼。空中で一回転し、何事も無かったかのように地面に着地する。そして間合いを取り、私の動きを注意深く観察する。

私は萃香が間合いを開けるのを見て、私は我流遠命流格闘術に構えを変える。ジリジリと萃香に詰め寄って、私は拳を放つ。

それと同時に、萃香も拳を放った……

◇■◇■◇

さて、突然だが『遠命流格闘術』について説明しよう。

『遠命流格闘術』とは、相手を無力化する事に特化した格闘術。構えは空手に似ているが、放つ技は違う。この格闘術は基本的に拳と投げ技を主体とした技で構成されているのだ。

蹴り技も入ってはいるが、それはあまり使うことが無い。基本的には、拳で相手を弱らせてから投げ技で無力化する。蹴りを使う場面は万が一の時意外は無い。それ故に一発一発の威力というのは乏しいものだ。投げ技を掛ければ幾らかはダメージを与えられるだろうが、やはり足の力には及ばない。いや、完全に及ばない訳では無いが、蹴りを放つ方がダメージを与えられるだろうと思う。私の考えだけど。

この格闘術は相手を無力化する事に関してはトップクラスだろう。だが、実戦で多数を相手にする時には正直使えないだろう。

そこで私は、今までの『遠命流格闘術』にあらゆる武術を組み合

わせ、我流の『遠命流格闘術』を編み出したのだ。
　この『我流遠命流格闘術』は、従来の戦闘方法を引き継ぎながらも、様々な武術から良点を取り込み、それを殺さず、絶対に生かす。普通じゃ出来ない事だけど私なら出来る。こういう事に関しては結構長けてるからね。
　『我流遠命流格闘術』の技は多種多様な武術と多種多様な技がベースとなっており、これらを上手く組み合わせ、様々なオリジナルの技や奥義を創り出した。以前神那女さんに放った技である『牙獣撃』もその一つだ。あれはかなり高威力を誇る技だ。私の怪力を存分に振るえる技だからね～。でも神那女さんには通じなかったけど。
　…おっとちょっと話がズレたわね。それでだ、『我流遠命流格闘術』の最大の特徴は『あらゆる状況に対応出来る』という事だ。様々な武術を取り込んでいるお陰か色んな構えを取る事が出来、四方八方、何処から攻撃が来ようと、どんな方法で攻撃しようと難なく対処出来るという優れものなのだ。
　只、それはつまりどれにも特化していないという事。どれだけ万能でもどれかに特出していないので特徴と言える特長があんまり無い。それにこれは私が使いやすいように改良した武術だからね～正直私以外は使えないわよ、これ。
　まぁ、私以外に使わせる気無いから別に良いんだけどね～。
　…さてと、こんな所かな。それじゃあ説明終わり。

◇■◇■◇

放たれた拳と拳がぶつかり周りに強い衝撃を与える。地面が揺れ、木が揺れ、空気が揺れる。あまりにも強すぎる衝撃にまるで歌っているかのように大きな音を立てる。私は直ぐさま回し蹴りを放ち、境内の方に向かって蹴り飛ばす。

そして……

やって来た蓮也に萃香がぶつかった……

――――――――――――――――

何やなかんやで蓮也と話し終えた私は改めて萃香との戦いを再開した。私と萃香は同時に走り出し、お互いに攻撃を仕掛ける。私はリーチ差を生かした蹴りで萃香を森の方へと蹴り飛ばした。ドーンドーンと木がどんどん倒れていき、何十本目かの地点で漸く停止する。停止した萃香は服がボロボロであったが、その顔は強敵を見つけた時に見せる喜びの笑顔を見せていた。

私はそれを見ると自然と口角が上がり、ニヤリと笑ってしまう。

こんなにも頑丈でやりがいのある奴は初めてだ！

私の知る『鬼』とは比べ物にならない！

こんなにも楽しく思えてしまう！

今までとは全く違う……そう、セ○○スと似た様な快感さえ感じ

させてくれる！
もっと！もっと私にこの快感を味合わせて！
もっとこの快感に酔い痴れさせて！！！！！

私は一気に萃香に向かって走り出し、萃香に向かって拳を振り下ろす。萃香もそれに合わせて拳を繰り出す。拳と拳がぶつかった瞬間、周りの木が揺れ、何本かはその衝撃に耐えられずに折れて倒れる。しかしそんな事はどうでも良い。今は殴り合っているこの瞬間の方が大事だ。どうせ本殿の方に衝撃が行ってもトシキが防いでくれてるから気にする必要なんて無いしね。
私は体を捻り手刀を繰り出す。萃香はそれを受け止め私を投げ飛ばす。私は難なく着地し、迫る萃香に飛び膝蹴りをかます。萃香はそれを両腕でガードし、右足で蹴りを放つ。私は咄嗟に後ろに回避し、再度彼女に接近する。そして行われる殴り合い（ラッシュ）。

「ハアアアアアアア！！！」
「ウラアアアアアア！！！」

凄まじい雄叫びを上げ、目にも止まらない速さで拳と拳の殴り合い（ラッシュ）が行われる。
殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。只ひたすらに殴る。殴り合っている間、お互いの顔は常に笑っていた。もはやこれはじゃれてると言っても良いだろう。それ程に、この殴り合いが楽しいのだ。

その内に、萃香の腹に私の拳がクリーンヒットする。それにより、初めて萃香は怯み隙を作ってしまう。

そしてその瞬間

「ハアアアアアアアアアアア！！！！！！」

私の大量の拳が萃香の体中に浴びせられる。萃香は神社の方へと吹き飛ばされ、勢い良く地面に激突する。私は萃香が激突した地点に走っていき、萃香の安否を確認する。

「…ゲホッ！ゲホッ！あー……くっそー……もう動かないや……」

どうやら無事のようだ。

「大丈夫？」

私は萃香に問いかける。

「あー……一応は大丈夫かな。体中が痛いけど…」

萃香は弱弱しく返事をする。流石に私の連撃には耐え切れなかったようだ。

…良し、それじゃあかる～く治癒して上げましょうか♪

「ちょっと動かないでね」

私は萃香にそう言い、背中から触手を出す。

「何する気だ…？」

萃香はちょっとだけ怯えている様子。まぁいつもの状態なら怯えなくても良いけど、今はボロボロだからねぇ。仕方ないか。

「安心して。貴女の傷を治癒するだけだから♪」

私はす言って触手を萃香の真上まで動かし、口から緑色の液体を出し、それを萃香に大量にぶっ掛ける。

「へ!?ちょ!?うぼぼぼぼぼぼ!」

萃香は突然降りかかった液体に驚き、逃げようとしたが、体中がボロボロだったせいか動く事が出来ず私の触手から出された液体を諸に浴びる事になった。

「ごぼぼぼぼぼぼ……ゲホッ!ゲホッ!何すんだよ!…ってあれ?体中の痛みが消えた…?」

萃香はすくっと立ち上がり、体を捻ったり腕を回したりして体の具合を確かめている。

「これはどういう事だ…?何だったんだ今の?」

「『治癒液』よ。触手だけが持ってる特殊な液体よ♪」

「『治癒液』?名前からして傷を癒したりするものなのか?」

「そうよ。これは触手が斬られたり千切られたりした際に、元通りに再生出来るっていう触手の能力の一つ何だけど、私がそれを他の生物に使えないか試してみたの。そうしたら見事に通用してね、体の傷だけじゃなくて内部の怪我や病気なども治してくれるのよ♪凄く便利よ♪」

「確かに便利だねぇ……それは千切れた腕とかの再生にも使えるのか?」

「それは流石に無理ね。触手は単純な構造だから千切れても再生できるけど……他の生物になると体の構造の関係上、ちょっと無理かな。出来て欲しいけど……無理なのよねぇ」
「ふーん……そうなんだ」
萃香は腕を組み、頷き加減にそう言う。
あ、因みに萃香には予め私の能力は伝えてあるわ。そうしないとフェアじゃないじゃない♪
「…しかしなぁ～……まさか喧嘩で人間に負けるとは思わなかったよ。これでも本気だったんだぞ？」
「あら、今ので本気？私は四割程しか出してないけど」
「はぁ！？あれで四割！？じ、じゃあ！本気を出したらどうなるんだ…？」
「さぁね。私にも解らないわ。まぁ少なくとも地球の破壊は軽く出来るんじゃない？」
「…とんでもない奴だな。お前」
「ふふふ♪有難う♪」
私はお礼を言いつつ触手を仕舞う。
…さて……これで戦いは終了。此処からは変態淑女、遠命零奈さんモードで行くわよ！
「ねぇ萃香？」
「ん？何だ？」
萃香は服に付いた土埃を払いながら返事をする。

「私……貴女の事がもっと知りたいな～♪ねぇ……ちょっと私と……キスしない？」

「へ！？な、何言い出すんだよ！わ、私はそ、そんな気はな、な、無いからな！」

ん？これはもしかして……キタ？

私は萃香の目の前に顔を近づけて問いかける。

「その気ってどの気かしらぁ～？私は只キスしましょって言っただけなんだけどなぁ～♪」

「！　え、あ、い、いや！な、なんれもにゃいよ！き、気にすんな！」

「噛んでるわよ♪これはもう明白ね♪」

「う……うぅ～……」

萃香は恥かしさを隠す為に顔を手で隠して蹲った。ヤバイ。可愛い。

「ふふふ♪恥かしがらなくても良いのよ♪私はそれを悪いとは言ってないでしょ？だから気にしなくても良いのよ♪」

「で、でもな～……仲間内にも言ってない事なんだぞ？その……女性好きって事を……」

「あら、私は男も女も大好きよ♪和姦、輪姦、何でもござれってね♪」

「い、いや…それとはまた違うような……」

萃香はまだ若干顔を赤くしながら、弱弱しくツッコんでくる。

ん～……やっぱりツッコミはもこたんの方が上かな～。もこたんは的確にはっきりとツッコんでくるしね♪

…と、話がズレた。何か最近良くズレるな私……

あ、昔からか。

「ねぇねぇ萃香？女性好きってそんなに恥かしい事？」
「え？……うーん……まぁ……神那女の前例があるからそこまで気にはならないかもしれないけどさ……」
「え……神那女さんと知り合いなの？」
「あぁ。あいつとは良く喧嘩したよ。と言っても、あっちは武器装備。こっちは何も無しの能力ありでの喧嘩だったからねぇ～正直、あまり楽しくは無かったね。寧ろ零奈と喧嘩してる時の方が楽しかったよ」
「それはどうも♪…ところで、私の事は気付いてた？」
「神那女の子孫だろ？苗字とか容姿とかからしてそうだと思ったよ」

気付いてたか。

…うーん……どうやらこの幻想郷で神那女さんを知らない奴は居ないみたいね。人里の人達も知ってたし。しかも私の苗字を聞いたら一部の人達は態度変えたしね～。お陰様で誰も嘗めてくるような奴はいなくなったわ。元々居なかっただろうけど。

「あー……ところで零奈？キスの事だけど……」
「ん？あ、はいはい♪それじゃあ持ち上げて上げるからしましょうか♪」
「え！？ちょちょちょちょ！ま、待て！」

萃香が静止の声を上げるがそんな事は関係無い。走り出した私の

熱い変態のパトスは止められないわよ！
私は萃香を抱き上げ、体に密着させる。私の顔と萃香の顔は文字通り目と鼻の先だ。
「れ、零奈！さ、流石にここじゃ不味いって！他の奴も見てるだろ！」
「あら？私は見せ付けてやろうとしてるんだけどな～♪」
「え、ちょ、おい！何言ってんだよお前は！」
「あ～もう、そんなに騒がないでよ。そんなに騒ぐ悪い子は……こうしちゃうぞ♪」
「え、ちょ！むぐ！？」
私は萃香の唇に私の唇を重ねる。萃香の頭を抑え、逃げないようにして、更に私は舌を入れる。
「ん……ちゅ……れろ……」
萃香の舌に私の舌を絡ませ、歯という歯も全て丁寧に舐め上げて行く。
「んん！？んー！んー！んー……ちゃぷ……れろ……」
その内に、萃香の目もとろんとしてきて私の舌に自らの舌を這わせてくる。こうなれば後は行為に移るだけ。
私は萃香のズボンの中に手を突っ込み、お尻を優しく揉み解す。揉まれている萃香は徐々に息を荒くしていく。
そして私は萃香の服を脱がそうとした……その時、
「霊夢！」
「解ってるわよ！ちゃんとやりなさいよ！」

「解ってるっての！行くぜ！」

声のした方を見ると、そこには鉄パイプを構えた蓮也とスペカを構えた霊夢が…

「神器『パイプ・ザ・グングニル』！！」
「神霊『夢想封印　瞬』！！」

とてつもない速さで鉄パイプが飛んできて、更には霊弾の嵐が……

私はそれを避け損ない、痛みという名の快感を身に染みながらも、よくも邪魔したなという恨みを憶えつつ、私と萃香は地面に落下した。

――――――――――――――――

「で？何でこうなったワケ？」
「何でって……それは簡単じゃない。愛し合っていたからよ♪」
「返答になってねぇぞおい。お前……それで良いのか！？」
「だって変態だし♪」
「おいィ……ご主人様……駄目だこいつ……早く……何とかしませんと……」
「腐ってやがる！遅すぎたんだ！」

「腐ってるって使い方おかしくね?普通生ものとかがダメになった時に使うんじゃねぇの?」
「ネタを理解出来ない癖に口出ししないでよ」
「ひでぇ!」

今現在私は何故か質問攻めにあっている。まぁ横道に逸れまくりなんだけどね。
因みに私は地面に正座、萃香も同じだ。
でも萃香は私の方をチラチラと見ては顔を赤くしている。完全に私に惚れたわね。あ~んもう!そんな顔で照れないで!キュン!って来ちゃうから!

「はぁ……何だかな~……ところで零奈?お前、チルノと大ちゃんとはどういう関係なんだ?」

あら突然の質問ね。まぁ良いわ。そんな事なら直ぐに答えて上げるわ♪

「ふふふ♪彼女達とは一線を越えた関係よ♪」
「一線……それってまさか……」
「早苗の想像通りよ♪チルノと大ちゃんの貞操と処女は私が貰ったわ♪」
「なん…だと……それはマジなのか!?」
「本当ですよ。私は零奈さんに体の隅から隅まで弄くられました♪」
「あーあれか。結構楽しかったよ!最初は痛かったけど!」

そう言って二人は満面の笑みで返事をする。流石私が可愛がっただけあるわ~徐々にだけど淫乱化が進んでるわね。慧音は既に出来上がってるけどこの子達も早い所淫乱化を進めないとね♪

そんな事を考えていると、蓮也が突然一枚のスペカを取り出した。
しかしそれは空白、まだ何も描かれていないスペカで何をする気なのか？

「このロリコンめ！よくも東方キャラの貞操と処女を奪いやがったな！貴様には死すらも生温い！喰らえ！即席で作ったスペカ！小五ロリ『ベアード様の有り難いお言葉』！！」

蓮也がスペカ宣言をすると、突然目の前に目玉だけの丸く黒い物体が現れこう言った

「このロリコン共め！！」

…へ？それだけ？あ、いや、弾幕は飛んできてるけどそこまで怖くはないっていうか……

「ぎゃあああああ！俺に精神的なダメージがあああああ！」

蓮也が何故か胸を抱えてのた打ち回っている。何これ。もしかして精神的なダメージを与えるスペカだったの？そんなの初めて聞いたわよ……

…ていうかさ。何かロリコンがどうの言ってたから、ロリコンに対してダメージが入るって奴なのかな？だったら残念ね。私はロリコンでは無く変態なので関係無い。私にそんなまやかしは通用しないわよ♪

そんなこんなで色々と凄い事になっていると、

「ぐはあああああ！わ、私にまでダメージがあああああ！」

何故か鈴仙まで悶え始めた。鈴仙もロリコンなの？蓮也に影響さ

れたわね…これは……。

私はふっと霊夢達の方を見ると、霊夢は完全に呆れていて、チルノはポカーンとしてて、大ちゃんは完全にSの目に切り替わってて、トシキはかなり慌てていて、早苗は少し引いているようだ。

因みに隣の萃香は私しか見て無いようで、蓮也と鈴仙がのた打ち回っている姿は完全に無視している。そんなに私が魅力的？もう…嬉しすぎて濡れてきたわよ！

そうこうしている間にもスペカの有効時間は終了し、蓮也と鈴仙はもはや虫の息であった…

「は……まさかこっちにまで影響あるとは思わなんだ」
「いや～……危なかったですね！ご主人様！」
「だな」

と思ったら直ぐに復活した。ほんと頑丈ね、貴方達。

…しっかしどうしましょうか。このままじゃ萃香を犯せないじゃないの……どうすれば……

あ、そうだ。

「ねぇ蓮也、トシキ。貴方達、『あの事件』の時はどうしていたの？教えて下さらない♪」

「何だよ藪から棒に」
「いやぁ何となくね。考えてみたらさ、幻想入りした七人……まぁ一人は元から幻想郷に居たようなものだけど……それは幻想郷を守るとか何とかって話になってるじゃない？だから貴方達の話を聞いたら、色々と解ると思ってね♪それが結果的に幻想郷を守る事に繋がるかもしれないし♪」
「おぉ！それもそうだな！お前頭良いな！」
「ふふふ♪もっと褒めてくれても良いのよ？」

因みに今の言葉は完全な捏造だけどね。即席で適当な事を言っただけよ。

「…俺は適当な事を言ってるだけだと思うんだけどなぁ……」
「同感ね」

うわお。この二人勘が鋭い。

「まぁそんな事はどうでも良いじゃない♪それより話して下さるの？」
「あー……まぁ別に良いか。時間は幾らでもあるしね」
「幾らも無いわよ」
「霊夢ーネタネタ」

…纏まりが無くてカオスねぇ……

まぁ良いわ。最初は……

「蓮也。お話して下さる？」
「何でお前は敬語なんだよ……まぁ良いか。んじゃあまぁかる～く

話すとしますかー」

蓮也は飲みかけのお茶を飲み干し、『あの事件』の事について話し始めた…

第三十二話　幻想の日々？ＰＡＲＴ３：博麗神社のある三人ｓｉｄｅ　零奈

ＧＷ中なのに一回しか更新できないとかそういう事なの…
ちくせう。課題やテストなんて全て燃えちまえば良い

今回の補足

・零奈の実力
正直こいつのパンチで世界を滅ぼせる。怪力ってレベルじゃねーぞ！
ちなみに零奈は普段戦うときは１～４割の力のみで戦います。
５割を超えると地球とかに影響が出ますからねぇ…
どうしてこんな設定にした。

・神器「パイプ・ザ・グングニル」
神力の籠もった鉄パイプを相手の腹に向かって投げつける。
つーか腹にしか飛んでいかない。
刺さると相手は鉄パイプから蒸気を噴出してしまう。どういう仕組みだよ。
元ネタは映画「コマンドー」です。

・小五ロリ「ベアード様の有り難いお言葉」
もはや説明不要だと思う。様はバックベアード様を召喚するスペカって
訳ですよ。それに大量の弾幕がつくだけです。
ロリコンキラー

・零奈と萃香の戦いの時の状況
蓮也やトシキ達に戦闘終了が伝わらなかったか？

それはトシキの「速度世界」が関係しています。
どうしてかは考えてみて下さい。

たまにこうやって謎を残すのもいいよね。

さて、次回からは事件回想を立て続けに行います！
順序としては蓮也→零奈→トシキって順番です。
合計六話分になると思いますが、なにせ学校のせいで時間が取れません……なので更新が遅くなる可能性があります。

もし遅くても許してくだしあ；
では改めて、次回お会いしましょう。それではｏｒｚ

事件回想？前：ｓｉｄｅ　蓮也（前書き）

ここからは事件回想が続きます。
多分六話分続くんじゃないですかねぇ…
三人分やりますから。

事件回想？前：ｓｉｄｅ　蓮也

突然だが諸君、『例月祭』というのをご存知だろうか？
『例月祭』というのは毎月満月の日に行う祭で、月の都から逃げ続けていた永琳・輝夜・鈴仙達三人が自分達の罪をＴＵＧＵＮＡＵ為に行っている行事なのだ。

え？何で償いがローマ字読みでそのままなのかって？細けぇこたぁ良いんだよ！気にすんな！

で、だ。この祭の為に薬草の入った餅を搗き、それを丸めて捧げ物にするらしい。
その為にこの日に限っては妖怪兎達が総動員して餅を搗くワケだが……

私こと永遠亭の居候、高宮蓮也は現、屋敷の庭にて在妖怪兎達と共に餅を搗いております。水に濡らしているとは言えかなり手がベトつくなぁ……
え？搗いてるのに何で手がベトつくんだって？
そりゃお前、俺が餅を丸める役をやってるからに決まってるでせう？それ以外に何があるってんだい？

…うん……まぁ俺もおかしいとは思ったさ。でもさ、鈴仙がさ、

「餅搗きの経験があるならそっち任せても良いよね？」

とか言ってさ。何故か成り行きでこうなっちゃった訳。なんでや

ねん。

…まぁ嫌では無いんですけどね。うん。こういう仕事は意外と嫌いじゃないんだよね。結構楽しいし。

…でもさぁ

「やっぱ男が揚く側ちゃうんかね?鈴仙さんや」

そう目の前で餅を搗く鈴仙に問う。

「慣れてる奴がやった方が良いでしょ。得体の知れない奴に任せるよりかね」

「…何か冷たくないかい?」

「別に」

別にっておま……そんな返答があるかい。どっかの芸能人じゃあるまいし…

…ハァ……こんなにも月が丸くて綺麗な夜なのに……この月兎はこうも無愛想だし……何か妙に冷たいし……これはあれかね?ツンデレなのかね?どうなんかね?鈴仙さんや。

…まぁ……別にツンデレでなくても良いんだけどね!俺は東方キャラと話せてるだけでも幸せだから!冷たくても相手にされてるだけマシだから!ていうか冷たくされると感じrゲフンゲフン。

「…奈に考えてるのか知らないけど、ニヤニヤしないでくれない?気色悪いから」

「オウフ……そんなニヤついてたか俺?」

「えぇ。とっても」

ぬぅ……これは恥かしい事をしてしまったな……俺のニヤケ面を見せてしまうとはな……

でも仕方ないじゃない！憧れの東方キャラと話せてるんだよ？今まで空想でしかなかった人物が目の前に居るんだよ？こんなにも…

…こんなにも嬉しい事は無い…！（ア○ロ風に）

「…またニヤついてるし……何なのよあんたは……」

「僕は高宮！フリーの紳士さ！」

「はいはい…」

鈴仙は呆れ顔で餅搗きを再開する。ネタをスルーするなんてとんでもない！それスルーされたら俺の存在意義が四分の一位無くなっちまうじゃあないか！せめて何かしらのツッコミは入れてクレヨン……

まぁそんな感じにｏｒｚな気分になってしまったものの、餅搗きを再開した……

で、三十分後。

「終わったぁ…」

餅搗き終了。これでようやく餅を纏める仕事から離れられるお……
そう思って俺はその場を離れ、自分の部屋に戻ろうとしたが…

「何処に行こうってのよ？まだ餅が丸まってないわよ」
「あ、それがあったね。すっかり忘れてたわ」

…ちくせう……あぁ……今度は餅を丸める仕事が始まるお……もう懲り懲りだお……
俺がまたｏｒｚな気持ちになっていると、縁側の方からギシギシと誰かが歩いてくる音が聞こえた。その音を聞いた俺は縁側の方に首を向ける。ギシギシと歩く音はやがてどんどん大きくなり、そして音が最高潮に達したと思われたその時！

「鈴仙、蓮也？餅搗きは終わったかしら？」

我らがえーりんが姿を現した！（ﾟ∀ﾟ）ｏ彡ﾟえーりん！えーりん！

「あ、師匠。餅搗きは終わりました。後は丸めるだけです」
「そう……じゃあ良いわね」

？　良いって何がだよ？

「蓮也。今から私の研究室に来なさい。ちょっと試して欲しい薬があるから」

あ、そういう事ね。

「了解っす。今から行くっす」
「その口調は何よ…」

「いや何となく」
「…ハァ……」

鈴仙は結構大きな溜め息を吐いた。何なんだよ一体。俺が何をした？この高宮蓮也さんが何をしたって言うんだい？

「…解りました。餅は私達で丸めときますね……」
「お願いね鈴仙。…それじゃあ行くわよ蓮也」
「Ｙｅｓ，ｍｏｍ」

俺はまるで軍人の如き返事をし、永琳に付いて行った…

―――――――――――――――

…さて……実験室に来たワケだが……どうも永琳の雰囲気が新薬実験をする時のそれでは無いな……何か妙にシリアスな雰囲気だ…

「そこに掛けて頂戴」
「ういっす」

俺は永琳座っているの椅子の目の前の椅子に腰を掛ける。
それを見て永琳は、俺を真剣な眼差しで見つめて来る。何ですか一体。一体何が始まるんです？第三次大戦だ！（ちげぇ

…しかしなぁ……冗談を抜きにしてもマジで何の用なんだ？こんな真剣な雰囲気の永琳は最初に会って以来だぞ…？

…ちょっと話しかけてみますか。

「…永琳。本当に薬の実験が目的で呼んだのか…？別に目的があるんじゃないのか？」
「…勘が良いわね。えぇそうよ。私は別の用事があって貴方を呼び出した」
「そりゃあ一体何だよ？」
俺がそう聞くと、永琳はほんの一瞬俯いたと思うと、直ぐに此方に顔を向け、異様に重そうに見える口を開いた。
「…貴方は鈴仙をどう思っているの？」
「…え？」
と、突然何だよ……真剣な雰囲気だったのに妙に気の抜ける質問だなオイ。
…しっかし鈴仙をどう思ってるかだと…？んなもん決まってんだろ…
「冷たいし、結構強がってたりするし、変な意地張ってたりしてるし、ちょっと子供っぽいとこもあるし、まぁ我が儘と思う奴が多いかもしれへんけど…俺はアイツが好きだぜ？何だかんだで永琳の実験の後にはタオルとかくれるしな。良い奴だよアイツは。それがどうかしたのかよ？」
俺がパッと鈴仙の事を挙げると、永琳は手を口に当て何故か黙る。何なんだよもう。
「…良く見てるのね……あの子の事」
「良く見れてるかは解らんけど……少なくとも俺はアイツの良点は見れてると思うぜ。悪点はまだ見つけ切れてないけどさ」
「そう…」

永琳は何処か寂しげな表情を浮かべ、月明かりの差す窓を覗く。
その姿は様になってはいたが、それと同時に何かに悲しんでいる様な様子にも見えなくは無かった。

俺がその様子を黙って見ていると、永琳は此方に向き直り、口を開いた。

「…あの子ね……月に居た頃は少し、病んでたのよ。精神的に……ね」

病んでた？そんな事、俺の原作知識には無いぞ…？

「…病んでたって……どれ位？」

「…思い込みで……仲間を殺そうとする位よ」

！　な、なぁ！？あ、あの鈴仙が仲間を殺そうとした？あの公式で臆病と言われてた鈴仙が？ど、どういう事だよ…？

「…鈴仙ね、自分を飼っていた私の弟子達（綿月姉妹）に凄く愛着があったのよ。それはもう自分から擦り寄ってく程にね……」

…それも俺の知識には無い事だ……やっぱこの幻想郷は原作改変が起きてるのか？

「…彼女はその生活がとても幸せだった。多少不自由にされたとしても、主人が居れば別にどうだって良いって思ってた位……でもそれは突如変わってしまった。
地上からやってきた人間、『神那女』によってね…」

「『神那女』？一体誰だよそりゃあ」

「…それはまた別の機会に話すわ。今は説明する必要は無いし」
「はぁ…さいで…」

俺は気の抜けた返事をして、椅子に座り直す。つーか何か重要そうなオリキャラが出たんですけど。なんですかこれ？何かそいつ東方二次ＳＳで言ったら絶対主人公ポジな気がするよ…

いやまぁ勘でね？

「…『神那女』は綿月の屋敷に住み着いた。元々綿月とは古くから縁のあった彼女は綿月姉妹に手厚く歓迎されたわ。彼女は屋敷で暮らしながら、依姫には剣術と神霊を宿す術の訓練を、豊姫には多くの知能と海と山を繋ぐ訓練をさせたわ」

つまりよっちゃんととっちゃんの師匠って事か？何モンだよそいつ……つーか古くからの縁って……どう考えても東方二次ＳＳの主人公ポジです。本当にありがとうございました。

「…彼女の訓練はかなり厳しいものだったけど、彼女は二人に慕われていた。とても…とても……ね……」

そう言って永琳はまた寂しげな表情を取る。

「…でもね、それは鈴仙にとっては好ましく無い事だった。今まで自分を可愛がってくれてた飼い主が自分よりも訓練の方を優先するようになった……全く相手にされなかったって訳ではないけど、彼女からしたら１０から１へ変わったようなもの。今までの幸せは崩れ、まるで自分だけ別の世界に閉じ込められたようにさえ思った…」
「・・・」

…俺は気が付けば黙りこくってしまっていた。その話に茶々を入れようにも、あまりにもシリアス過ぎて、何も言えない。

「鈴仙はその時思った。私がこんな不幸になったのも、主人が私を相手にしなくなったのも、何もかも『神那女』のせいだと。だったらあいつが居なくなればまたあの幸せが戻ってくる。でもあいつをどうやって追い出せば良い？追い出そうとすれば、あいつに侵された主人が邪魔をするだろう」

「…まさか……その『神那女』って女を殺そうとしたのか？」

「えぇ……彼女は月の最新兵器を無断で持ち出し、『神那女』を待ち伏せした。そして『神那女』が現れた時、彼女は何の躊躇いも無く兵器の引き金を引いた…」

…何の躊躇いも無く……何だかこの幻想郷の鈴仙はかなり病んでるんだなぁ……まぁそんな鈴仙も良いけどね。

「だけどそれは失敗に終わった。何故なら『神那女』は全て解っていたから。彼女は鈴仙の強襲を難なく凌ぎ、鈴仙を無力化した。そして彼女は綿月姉妹に鈴仙を差し出した。そして彼女は自分が此処に居れば迷惑を掛ける事になる。だから自分は地上に帰ろうと言った」

「…その『神那女』って奴は……自分の幸せよりも弟子の平和を取ったのか…」

「えぇ……でもそれは綿月姉妹にとっては好ましく無い事。自分達を指導してくれて、尚且つ自らの心に影響を与えてくれた人を手放したくは無かった。だから綿月姉妹は『神那女』を引き止めた。――そしてそれが鈴仙の壊れかけの心を完全に破壊する事になった」

…鈴仙……

「鈴仙の狂気を操る力はその時に覚醒したの。あまりの絶望的な光景に、鈴仙は……狂気に墜ちた。
鈴仙はその力を振るい、月の都を壊滅にまで追い込んだ。殺して、狂わせ、そして殺して。鈴仙の眼前には真っ赤な血肉しか広がっていなかった」
「…皆殺し……にした訳では無いにせよ……とんでもないな……」
「鈴仙は自らの主人である綿月姉妹に重症を負わせ、暴れるだけ暴れ、最後には脱出用のポッドに乗って地上に逃げた。その時、鈴仙は『神那女』に投げ掛ける様に言った。
『絶対殺してやる！絶対に…絶対に…！』と…」

永琳はそこまで話して、ふぅ、と息を吐いた。俺もそれに合わせて肩の力が抜ける。あまりのシリアス話に息が止まりそうだったぜ…

「…これは鈴仙に自白剤を投薬して解った事よ。まぁ…使った後は色々あったけど……それも薬で何とかしたわ」

どんだけ薬に頼ってんですかい。

「因みにこの話を私が知っている事は鈴仙は知らないわ。薬で記憶を消したから」
「…あんたどんだけだよ……流石に廃人になんやろ……」
「流石にちょっとやり過ぎたとは思うわ…――――でも、そのお陰で鈴仙の狂気は抑えられた。まだそれなりに残ってはいるものの、今話した程の狂気は見られなくなったわ」
「…そうか。…で？その話を聞かせて何を期待してんだよ？」

そう言うと、永琳はまた俯いた。そして顔を上げ、口を開いた。

「…何時鈴仙の狂気が覚醒するかも解らない。そしてもし、鈴仙の狂気が貴方に向けられた時――――貴方はそれを受け止められるかしら？」

「…狂気を受け止める……か」

…正直解んねぇよ。俺如きが鈴仙の狂気を抑えられるのかなんて……

…だけどさ……だからと言って逃げるのは俺のなけなしのプライドと東方厨としてのプライドが許さねぇ。そんな事をすれば……俺は鈴仙を否定する事になっちまう。そんなのは絶対に嫌だ。

俺はただの凡人だ。だけど、そんな俺だけど、何かを守れて何かを受け入れられるならやってやりたい。

昔……あいつを失った時……あいつを守る事が出来なかった……突っ込んで来たトラックからあいつを守ることが出来ず、逆に俺はあいつに守られちまった……そのせいであいつは死んだ……俺のせいだ。

俺はもう……あの時の二の舞をしたくねぇ……そんなのはご免だ。

鈴仙の狂気だろうが何だろうが俺はあいつを否定しない。絶対に受け入れる。絶対に守ってみせる。

鈴仙の体を、心を……絶対に……

あいつ……『恵理奈』を失った……あの時をまた、起こさせない為にも……

…はは……ガラにも無く真面目な事考えちまったぜ……俺らしくないな……もっと明るく行かないとな……

まぁ取り敢えずの俺の返答は…

「出来る範囲で受け止める。でも、俺は全てを受け入れるつもりで行く。だから心配すんな。俺はこう見えてもヤンデレも許容範囲内だから」
「…そう……」
永琳は体を机の方に向け、机に肘をつけ、手を顎に当てる。
「…鈴仙の事……宜しく頼むわね」
「おいおい……何かもう嫁になったみたいな感じの言い草だな……まだフラグも何も立ってないのに頼まれる事も無いと思うんだけど…」
「…何れ解るわ……何れね…」
？　何言ってんだ永琳は…？話し疲れて何言ってんのか解って無いんじゃねーか？何だかなぁ…
…まぁ良いや。取り敢えず鈴仙の所に戻るとするか。
「それじゃあ俺は鈴仙の所にもどっから。んじゃまた後でな」
「…えぇ……また後で」
永琳はパッとしない返事をする。いやマジで何なんだ？何だってんだよえーりん…
俺は永琳を気にしながらも、鈴仙の所に向かった。
部屋を出る時に
「…に呑まれない様に気をつけなさい」

という永琳の言葉を聞いて…

―――――――――――――――

俺は廊下を歩きながら永琳が最後に言った言葉の意味を考えていた。

「…に呑まれない様に気をつけなさい」

その「…」の部分。そこだけ上手く聞き取れず、一体何を言ったのか気になっているんだ。

一体永琳は俺に何を伝えようとしたのか？そしてそれが指し示す意味は？

俺は顎に手をつけ、その事を考えた。まぁ何も出てこなかったんだけどさ。

結局永琳は俺に何を伝えたかったのか……解らない。全くと言って良い程……解らない。

そんなこんなしている内に鈴仙達の下に戻ってきた。結局答えは出てこないまま。あー……俺にも清○やデュ○ォーみたいに答え（アンサー）を出す者（トーカー）の能力があったらなぁ……

まぁ無いモンはしゃーないよね。こればっかは今の俺には『実現』出来ない『幻想』だしな。

あ、どうでも良いんだが、俺の『幻想を実現する程度の能力』には実現可能な『レベル』がある。良くは解んないけど……どうやら

今の俺にはゲームやアニメ・漫画・ラノベと言ったのの設定という名の『幻想』は『実現』出来ないようだ。そりゃまぁそうだよね。だってこの能力が発現してから一週間も経ってないもの。それで出来てたらただのクソゲーだもん。

…とは言ったものの……この能力は一体どうやったら伸ばせるんだろうねぇ……よー解らんよ……

…ハァ……直死の魔眼を使いたい……ギアスを使いたい……ハガ○ン並の錬金術を使いたい……自分だけの幽波紋（スタンド）を持ちたい……鉄パイプ投げて蒸気を抜きたい……

「何物思いに浸ってんのよ」

「ん？…あー……鈴仙か……そーいや戻ってきてたんだった……俺…」

ちょいと欲望をぶちまけてたら鈴仙に話しかけられたで御座る。何かすっごい恥かしい。

「ちょっとしっかりしてよ……何？師匠の薬はそんなに辛かったの？」

「ゑ？あー……まぁ……そこそこ辛かったかな？」

「そこそこ？何か曖昧ね……本当に実験してきたの？」

「したした。まぁ鈴仙からしたらそこまで辛くは無いものだったな」

適当に言い繕う。鈴仙は永琳がさっきの話を知ってるという事は知らないからな。それならあんま言わん方が良いだろう。鈴仙の為にも、永遠亭の皆の為にも。

「…ふーん……そう……あ、お茶あるけど飲む？」

「お？良いのか？じゃあ遠慮なく」

俺は鈴仙との間にお茶を挟むようにして鈴仙から見て左側に座る。流石に真隣に座るのは色々とデリカシーが無さ過ぎだろ。

俺は鈴仙からお茶を貰い啜る。うん美味い。月夜に飲むお茶は格別だねぇ…

…しかし、このまま座っているだけじゃ何も面白くない。という訳で鈴仙に適当に話を振る事にする。

「そーいやさ。鈴仙は月に居たんだろ？どうだったよ、月での生活は？」

さっきの話を聞いてそれかよとか思われそうだが、あっちはその事を知らないので無問題。

「…別に……月には……良い思い出が無いしね…」

そう言って鈴仙は俯く。そしてその時、鈴仙が微かに震えている事に気付いた。月の事を思い出したのだろう。あまり穏やかな雰囲気では無い。やっぱ月の事はＮＧなんだな……これ聞きすぎたらその内ブチ切れるんとちゃうか？あー……怖いねぇ…

「…そうか。体を震わせる程、嫌な記憶しか無いのか…」

「…えぇ。あそこにはもう戻らない……絶対……そしてあいつは絶対許さない……あいつだけは…！」

…完全にお怒りですな。ここまで酷くイラつくとは思わなんだ…

…俺ビックリだよ……

…鈴仙は完全にお怒りモードだ。こんな時、俺は何をすれば良い？

答えは……簡単だ。

「…鈴仙」

「…何よ……ってきゃ！」

俺は鈴仙の肩を抱き、無理矢理引き寄せる。

「な、何よ…何なのよ一体…？」

鈴仙の質問に対し、俺は答える。

「…俺にはお前の過去は解らない。原作知識を持っていても、何処か違うから当てにならないしよ……だから俺はお前を完全に理解出来ないかもしれない」

「え？え？な、何よ突然…師匠の薬で頭でもおかしくしたの…？」

「俺は至って正常だよ……だからこそ……こうやってお前の肩を抱いているんだ。こうやってお前に問いかけているんだ」

俺は更に鈴仙を強く抱く。

「お前は月で何かあったかもしれない。それでお前は何を思ったのかは解らないよ。――でもさ……だからってさ……肩を震わせて、怒りを堪えてるお前の姿は見たくない」

「…な……こ、堪えてなんか…！」

「堪えてるさ。お前のそのヒビが入った湯呑がその証拠」

「ッ！」

鈴仙はバッと右手を上に上げる。そこにはヒビが入り、もはや壊れかけの湯呑があった。

「…イラつくんだろ?月の事を考えると」

「・・・」

だんまりか……まぁ別に良いけどさ。

「…お前がその怒りを堪え続けていけるワケがねぇ。何時かは絶対に折れるに決まってる…!」

「そ、そんなの……解らないじゃない!」

「解るさ!俺も経験してるからな!怒りは堪えきれるモンじゃねぇって事を!」

恵理奈を失ったあの日、あの時の怒りは……まだ消えていない。だから解る。こいつの怒りが…

「…あまり一人で抱え込むな……いざとなったら俺がお前の怒りを受け止めてやる!身体で!心で!受け止めてやる!」

いつもの俺とは思えない程に声を上げる。つーかどっかの少年漫画みたいな感じな台詞になってんな俺。

「だから何かあったら言ってくれ!俺はただの凡人だけどよ……それ位なら出来るからよ」

「…蓮也……あんた……!」

鈴仙は急にハッと顔を竹林の方へと向ける。するとそこには……

傷だらけの妖怪兎がふらふらと此方に歩いて来ていた。

「な！？ど、どうしたんだよあいつ！？何があったんだよ！」

「解んないわよ！でも……早く手当てしないと死んじゃうわ！」

「ですよねー！傷薬はあんのか！？」

「応急用だけどあるわ！今薬箱を取りに行ってる暇は無いからこれで間に合わせるわ！」

「解った！じゃあ俺はそこの井戸で水汲んでくる！手拭いは今そこにあった筈だからそれで間に合わせ……！」

俺の言葉は途中で切れた。何故なら俺の頭の中謎のイメージととある言葉が聞こえたからだ。

『消える』

俺の頭の中に響いたそれはたった一瞬の事であったが、俺に疑問を沸かせるには充分だった。

消えるって何だ？何が消えるんだ？俺はふとその疑問に囚われた後、周りがどうも暗すぎる事に気が付いた。

さっきまで月の明かりが差していて明るかった筈の周辺は、全くと言って良い程に何も見えなくなってしまっていた。

そして俺は気付く。『消える』ってのは……もしかして……！

俺は嫌な予感を抱えながらも空を見上げる。

そして、俺の嫌な予感は的中した。

「月が……無い……だと……！」

そう、つい今まであった筈の月が、そこに無い。あるべき空から消え、そこにあったのは……

『闇』だけ。

「何だよこれ……どうしてこうなった…！」

ワケが解らないよ！こんなの絶対おかしいよ！月が消えるなんて有り得ないよ！永夜異変とかとはまたレベルが違うよ！色々とおかしいよ！

…ってネタに走ってはみたものの……これ絶対異変だよな……まさか俺が異変に巻き込まれる事になるなんてな……まるで東方二次ＳＳの主人公みたいだな。何だよこれ。

しかしこれはマジでヤバイんとちゃうか？月が消える……てか隠れてんのかね？まぁどっちでも良いんだが……兎に角！月が無くなるなんて一大事だ！こういう場合は……

凡人は出しゃばらずに、霊夢と魔理沙の主人公の二人が異変解決してくれる事を祈りますか。それが良いよね。うん。

…てか、それより怪我した妖怪兎の手当てだよ！早くせんと死んじまう…！

俺はさっさと井戸に行き、井戸の近くにあった桶に水を汲み、それを持って鈴仙と妖怪兎の所へと向かう。

だが、その時に…

「キャア！」

鈴仙の悲鳴が聞こえた。

「な！？鈴仙！！！」

俺は桶を投げ捨て全速力で鈴仙の所に向かう。自分でもとんでもなく速いなとか思っていたが、そんな事考えてる場合か！と自分に喝を入れて、鈴仙の所へと向かう。

そして鈴仙の所に着いた時、俺が目にしたものは……

妖怪兎に囲まれた鈴仙の姿だった。

「鈴仙！！！！」

俺は咄嗟に縁側に置いておいた鉄パイプを取り、鈴仙に攻撃しようとした妖怪兎達を追い払うようにパイプを振る。弾幕は出していない。あれは任意で出せるからな。

「鈴仙！！どうなってんだこりゃ！？」

「解らないわよ！！突然月が消えたと思ったら何かいきなり襲ってくるし！しかも仲間を呼ぶし！しかもこいつら全員……狂気に侵されてるわ！！」

「！　なん……だと……！？」

俺はふっと妖怪兎達を見る。確かにこいつらの目は赤い。鈴仙の瞳と同じだ。

…一体どうなってんだ……？一体何なんだ……この状況は！！

俺は鉄パイプを構え、鈴仙は手を銃の形にし、背を合わせる様にして眼前の妖怪兎達を睨む。

俺達は今、

約三百ものの妖怪兎達に囲まれ、結構ピンチな状況に居た……

事件回想？前：ｓｉｄｅ　蓮也（後書き）

今回はシリアスになってしまった……どうしてこうｎ（ｒｙ

今回の補足

・鈴仙について

今作においての鈴仙は臆病者ではありません。具体的には作中の通り。

今作の鈴仙の能力の発症は心が壊れた事によるもの。というオリジナル設定になっております。しかも綿月姉妹を、過去ではあるものの倒しています。何かとんでもない仕様になっちまったな鈴仙……

…まぁこんな訳なんで、これから鈴仙はどんどん狂ってきます。蓮也はその愛を受けてどんどん強くなります。

でも……それを引き換えに……

まぁこれはネタバレだから言えんよ。

今回はそこまで補足する事は無かったかな？もしかしたら忘れてることとかあるかもしれませんので、もし何か質問が御座いましたら感想にてお願いします。

さて、次回は蓮也編の後編。戦闘が多くなります。

ついでに色々と謎も出てきます。どんなものかはまた次回。それで

は。

事件回想？後：ｓｉｄｅ　蓮也（前書き）

何か知らないけど無駄に長くなっちまった…
蓮也をひいきした訳じゃないんだけどなぁ…

あれだ。やっぱ鈴仙を話のネタに盛り込んだのが原因だ。
きっとそうだ。

…どうしてこうなった

事件回想？後：ｓｉｄｅ　蓮也

普段空に見える筈の月は無い。そこあったのは『闇』だけ。
それはまるで人の心の中に眠る『恐怖』を表しているかの様だった。
月の無い空の下、迷いの竹林では激しい弾幕が飛び交っていた。

大量の妖怪兎がある二人の少年・少女に向かって大量の弾幕を放ち、ある時にはその長い爪で二人の少年・少女を切り裂こうとした。

「くっそ！俺のそばに近寄るなああーーーーーーーーッ！」

少年は何処かの過程を飛ばす幽波紋（スタンド）を持った男の様な台詞を吐き、その手に持った鉄パイプから弾幕を放つ。

「くっ…！数が多くてキリが無いわ！」

少女はその手を銃の形にし、襲って来る妖怪兎を強力かつ精密な弾幕射撃で落していく。

二人の弾幕でどんどん妖怪兎達はノックダウンしていく……が、その数は未だに減る様子を見せない。逆に言えば、どんどんその数を増やしているのだ。

「くっそ！てゐは何処に行ったんだよ！！こんなくっそ忙しい時に！！！」
「どうせそこら辺でサボってるんでしょ！それよりこのままじゃ押されるわよ！！もっと攻撃してよ！！」
「やってるよ！！これでも目一杯やってますよ！！でも数が多くて

どうしようも無いんだよ！！」
「どうしようも無いとか言う前に何とかしてよ！！」
「俺だって何とかしたいよ！！でも辛いんだよマジで！！」
「…あー！もう！私だって辛いわよ！！解ってるわよそんな事！！
だからとっとと終わらせる！！！」

少女はスカートのポケットから一枚のカードを取り出す。

「波符『赤眼催眠（マインドシェイカー）』！！」

少女がカードに書かれた名前を叫ぶと、カードから円を描くように弾丸型の弾幕が発射される。それは妖怪兎達に直撃し、どーんどーんと吹き飛ばしていく。
そして弾幕が消えた頃には大半の妖怪兎が戦闘続行不可能な状態に陥った。

「うわお……見事に沈没したなぁ……」
「でもまだ残ってるわよ……気を抜かないで」
「わーってるよ。俺だってこんな所で死にたくは……！」

少年はハッと少女の近くに倒れていた妖怪兎に目をやる。するとその妖怪兎は立ち上がって少女を襲おうとしているではないか。

「鈴仙！！危ねぇ！！！」

少年は襲い掛かる妖怪兎の前に立ち、妖怪兎が放った爪を顔面から諸に喰らう。

「！　このっ！！」

少女は妖怪兎を蹴り飛ばし、追撃とばかりに弾幕を放つ。それは見事妖怪兎に命中し、妖怪兎は完全に沈黙した。

「大丈夫!?」

少女は少年の安否を確かめる。今の攻撃は完全に目や鼻を抉り取っていた。普通なら重症に陥る筈なのだが…

「大丈夫だ、問題ない」

少年は『無傷』だった。

いや、正確にはそうでは無い。彼は確かに目や鼻を抉り取られた。だが彼に備わる超再生能力のお陰で、抉り取られた目や鼻は再生したのだ。

「…そういえばあんたは再生能力持ちだったわね……てか、何か前より再生速度が上がってない?」

「そーいえばそうだな。どうやら俺の再生能力はやられればやられる程強くなるみたいだ。お陰で結構無茶が出来る」

「…あんまやり過ぎないでよ?もしかしたら突然再生出来なくなるかもしれないんだから…」

「大丈夫だ、問題ない。それ位理解しちょるよ。だから安心せい」

そう言って少年は周囲を見渡す。残っている妖怪兎は残り数体。しかもそのほとんどがボロボロだ。

「…この調子ならさっさと終わりそうだな。やれやれ一時はどうなる事かと……」

少年はそう言って溜め息を吐く。しかしその時、少女は竹林の奥

から何かが来るのを感じ取っていた。
少女は、それがとてつもない速さで此方に近付いているのに気付いた。
しかもそれは、少年に対して

「蓮也！！今すぐそこから離れて！！！」
「ゑ？一体何で……って、何ぞあｒ」

少年は自分に向かって来る『何か』に気付いたものの、回避にまでは至らず、『何か』が放った攻撃により……

下半身を吹き飛ばされてしまった

「がああああああぁぁぁ！！！？！」

少年は何が起きたのか解らないという顔をし、上半身だけ、地面に落ちる。当然この時点でほぼ死亡が確定するものだが…

「ガハッ……誰だよ一体！下半身が吹っ飛ばされたじゃねーか！俺の息子も一緒に消えちまったぞ！！」

少年は死んでいない。その身に宿す再生能力で、もう膝まで治ってしまっているのだ。

「おやおやまさか無事とは……中々厄介な力を持っているのですねぇ…」

ゆらりと現れる一つの影。それは里の人間と変わらない和服を着

ており、傍から見たらただの髪の長い好青年にしか見えない……そんな男だった。

「あんた誰!?兎達を狂わせた犯人!?」

少女は指を銃の形にし、その男に指先を向ける。

「おやおやもう決め付けられてるのですか?良い気分ではありませんねぇ……まぁ別に良いですけど――事実ですしね」

そう言って男はニヤリと笑う。その笑顔はまるで狂気そのもの。この男は完全に狂っているのだ。

「あんた……良くもっ!!!!」

少女は怒り、大量の弾幕を男に浴びせる。

だがそれは男には通用しない。振り上げられた右手で簡単に掻き消され、空しく散ってしまった。

「この程度の攻撃で私が倒せるとでも?まぁ今の貴方では何であろうと勝てないでしょうがね…」

「! それはどういう意味よ…!私は昔も今も変わらないわよ!!」

少女の言葉に、男は高らかに声を上げ笑う。それはまるで少女を嘲笑っているかのようであった。

「何が可笑しいのよ!!」

「クフフフ……いや何、貴女がそんな事を言うとは……月であれだけの事をした貴女がそんな事を?いやはやお笑いですねぇ!」

男は更に高らかに笑う。

少女はその様子を見て、体をプルプルと震わせる。手は強く握られて、表情に至っては先程までのものより険しくなっていた。

「…何なのよあんた……私が何をしたか知ってるって言うの！？」

「えぇ知ってますとも。それも全部ね」

「！　な、何者よあんた…！一体誰なのよ！！」

少女は男に怒声を浴びせる。怒声を浴びた男はその声に怯む事無く笑っていた。

「私をご存知無いとは……まぁそれもそうでしょう。あの時は人を見分ける暇なんて無かったのですからね。でも私は良く憶えてますよ……貴女が月で犯した罪をね！」

「なっ……まさかあんた……月の住民なの！？」

「えぇそうですよ。漸くお気づきになられましたか。やれやれ貴女も中々鈍いお方だ……まぁ別に良いでしょう」

男はその長い髪をさっと払い、先程までの笑顔から一変して真剣な表情になっていた。

「貴女には多くの罪がある。そして私は貴女に対して……恨みがある

――貴女に殺されたという恨みがねぇ！」

「な！？それっておかしいでしょ！？死んだ筈の人間がこんな所に居る筈が…」

「それがあっちゃうんですよねぇ！世の中ってのは広いのですよ…

…死んだ人間を生き返らせる事が出来る者が一人居たって可笑しくは無いのですよ！」

「な……そんな馬鹿な事が……」

少女は男に少しだけ恐怖を感じ、一歩後ろに下がってしまう。

そして男は……その一瞬を見逃さなかった。

男は少女に一気に接近をし、少女に向かって言葉を放つ。

「全部貴女が招いた事ですよ！此処に居る兎共やそこの小僧が被害に遭うのも！全て貴女のせいです！貴女が月で大量虐殺なんて起こさなければこんな事にはならなかったのですよ！」

「！　それは言うな！！！！」

「何故です？まさか罪の意識があるとでも？

…あぁあぁ成る程！そこの小僧に聞かれたくないからですか！成る程成る程！

だったらもっと言って上げますよ！」

男は狂気に満ちた笑みを浮かべ、少女の拒否を完全に無視し、あらん限りの声を上げ、叫ぶ。

「貴女は月で大量に月人を殺した！大人から子供まで！それも何の関係も無い者達まで！」

「…止めて……」

「嘗ては仲間だった者達も全員殺した！それも笑いながら！相手が死ぬ様を見るのを楽しんでいた！」

「…止めて……」

「果てには自らの主人まで殺そうとした！彼女達が苦しむ様を見て貴女は何て言いましたっけ？」

「…いや……」

「あぁあぁそうです！『良い様よ！もっと苦しみなさい！』でしたっけ！いやはやとんでもない事を言うのですねぇ！」

「…いや……」

「貴女はね！人を殺して悦ぶ殺戮者なのですよ！狂気に墜ちた只の化け物でしかないのですよ！
いい加減……その現実を受け入れなさい！！！」

「イヤアアアアアアァァァ！！！」

少女は座り込み、泣き叫ぶ。それは自らの罪に対しての懺悔か？いや違う。
彼女は自分の後ろに居る少年に、自らの罪を聞かれた事に対して泣き叫んでいるのだ。
聞かれてしまった。もう自分を笑っては見てくれない。きっと差別した目で見てくる。もう終わりだ。せっかく手にした幸せだったのに。

…もう……終わりだ。

少女は自らの指を自身の頭に突きつける。人生の終わり。

絶望に包まれた彼女の選択は――――

自殺だった。

彼女はその引き金を引こうとする。大きな涙の粒を目に溜めて。
そして彼女は引き金を引こうとした。

その時、

「鈴仙を……泣かせてんじゃねぇ！！！！！！」

少女の頭上を通り過ぎる風圧。それは男の頭に直撃し、男を吹き飛ばす。吹き飛ばされた男は竹を一本折り、その後ろの竹に当たって止まる。
少女は何事かと大量の涙を流しながら後ろを振り向く。

そこには、怒りを顕にした少年の姿あった……

――――――――――――――――――――

「鈴仙を泣かせるたぁ良い度胸してんじゃねぇか。死ぬ準備は出来てるか…！てめぇは今ここで俺がぶっ殺す！！」

俺はあらん限りの声を上げ、吹っ飛ばしたクソ野郎に向かって言い放つ。

あいつは鈴仙を泣かせたクソッタレだ。東方キャラを泣かせる様な奴ぁ……東方厨である俺が許さねぇ！！

鈴仙は未だに大粒の涙を目に溜め泣いている。

それで俺は、しゃがんで鈴仙の頭を撫でてやる。

「ほら……泣くなよ鈴仙。あのクソ野郎は今俺がぶっ飛ばしてやるからさ。だから泣くな」

俺は兎に角優しい声で鈴仙を宥める。こんなに泣いちゃって……そんな鈴仙を可愛いとは思うけど、……状況が状況だ。そうも言っていられない。

「…何で」

鈴仙は弱弱しく声を出す。

「何であんたは私を卑下しないの…！あれが作り話だとでも思ったの！？」

少しだけ力の籠もった声が俺に向かって飛んで来る。

…やれやれ。そんな悲しげな目で見るなよ……こっちまで悲しくなってくるじゃんか。

俺は少し間を置いて、鈴仙に言う。

「俺がお前を卑下するなんて有り得ないよ。俺は（東方キャラである）お前が好きなんだぜ？過去がどうであれど、俺はお前を見捨てたりはしない。第一、昔のお前が色々とやらかしたとしても関係ねぇよ。そんなもん、俺にとっちゃあ酒の肴にしかならんよ」

まぁ酒なんて飲んだこと無いんですけどね。未成年だし。でも幻想郷じゃあ未成年も普通に飲むよね。とんでもないね。うん。

「…でも！普通はあんな事聞かされてこうやって接しようと何て思わないでしょ！？だってそれが…」

「普通だってか？じゃあ俺は普通じゃなくて良いよ。そんな普通でお前を傷つける位なら……普通なんて辞めてやる」

「…どうしてそこまで……」

ハァ……まだ言いますかねこの兎さんは。

全く……そんなの決まってるだろ。

「お前だからだよ。お前だからこそ俺はこうやってお前の為に怒れるんだ。お前だったからこそ俺はお前の笑顔の為にキレたんだ。俺は……お前が幸せである為に……お前をこうやって……抱きしめるんだ」

俺は鈴仙を抱き締める。鈴仙の頭は俺の胸に当たり、俺は頭を手で押さえ、優しく抱き締める。

「少しだけ待っててくれ。俺があいつをぶっ飛ばしたら……妖怪兎達を治療して……月は無いけど、例月祭の続きでもしようぜ？」

「…蓮也……」

俺は鈴仙を体から離し、男の方へと歩き出す。右手に鉄パイプを携え、ゆっくりと近付いていく。

「果たしてこれから君はどうなるのか。
腹立たしいまでに外道である。
だがもっとも望ましい形に腐っているのはとても愉快だ。
鈴仙を泣かせた罪は
君の強い命を以って
ついに償われることとなる。
いよいよもって死ぬがよい。
そしてさようなら」

某鬼畜蜂のあの台詞を軽く改変したものを吐き、俺は一気にクソ野郎に接近する。
振りかぶった鉄パイプは男の頭を捕らえ、砕こうとする。

だが…

「そんなもので私を殺せるとお思いで！？」

ガキン！という音が鳴り、俺の鉄パイプの攻撃が男の手によって防がれる。
俺はその時少し驚いた。
何故なら男の手はまるでバイ〇ハザードのタイラントの様な鋭い爪を生やした巨大な手になっていたからだ。

「な！？何だよその手！お前月人じゃなかったのかよ！？」
「えぇ月人ですよ。でも私は私を蘇らせて下さったお方によって強く改造されたのです！この力があれば貴方如き恐るるに足らないのですよ！」
「でぇい！このタイラントもどきが！そんなもんで俺が怯むと思うなっ！！」

俺は一歩後ろに下がって鉄パイプから弾幕を放つ…が、

「下らないですよ！」

奴はその手をブンと振り、弾幕を瞬時に払い去る。こりゃあ厄介だな……あいつは恐らく戦闘経験豊富。それに引き換え俺の戦闘スキルはゲーセンのパンチングマシーンでぶん殴った事がある程度。…いや、まぁ不良に絡まれてそれらを鉄パイプで殴り倒した事はあったけど……正直そこまで経験にはなってない気がする。あれ二年前の話しだし。
…しょうがない……もう一度弾幕を放って払われた瞬間に一気に接近してぶん殴るか。それが一番妥当だろう。

俺はもう一度弾幕を放つ。奴はさっきと同じくその手で弾幕を払い去る。
そしてその瞬間、俺は一気に奴に接近する。俺は横から薙ぎ払う様に鉄パイプを振るい奴を吹っ飛ばそうとする。

だがそれは、突然生えてきた木によって防がれた。

「な！？何だよこの木！一体どうしてこんな早く……まさかテメェの能力か！！」
「えぇそうですよ！これもあのお方から貰った力の一つです……よ

！」

木の死角から振るわれた爪の一撃が、俺の腹に突き刺さる。

「がはっ！？」

俺は体に爪が突き刺さった状態で高く持ち上げられる。奴の手には俺の血が滴り、そして地面へと流れ落ちる。

「ははははは！良い様ですよ！このまま死んでしまいなさい！」

「がっ……がふ……くっそが……この程度の傷……で……死ねるかぁ！」

俺は鉄パイプを振るい、奴の頭を砕こうとする。

だが奴は、もう片方の手を同じく巨大化させ、降り注ぐ鉄パイプを弾き飛ばす。

「その位予想済みですよ！その位ね！」

奴は俺の体に更に爪を突き刺す。俺は口から大量の血を嘔吐し、少しずつ、意識が朦朧としてくる。

「幾ら再生するとは言えど、このまま血が大量に血を流せば死ぬでしょうねぇ！いやはやいい気味ですよ！」

「がふ……クソがぁ…！」

俺が徐々に動かなくなって来た事に奴はニヤリと笑みを浮かべる。

そして奴は口を開く。

「冥土の土産に教えて上げますよ！私の能力は『植えつける程度の

能力』！先程の木は地面に木の種を植え付け成長させたものなのですよ！この能力によって植えつけられた物は、一瞬にして成長を遂げるのです！」

「…つまり……妖怪兎達の…狂気も……お前が……植えつけた…って……訳か……」

「えぇその通りです！お利口ですよ貴方！だがもうそんな事はどうでも良いでしょうね！今から死に行く貴方には！」

そう言って奴は高らかに笑う。

「結局貴方の様な凡人には何も出来ないのですよ！下手な意地を張ってあの殺戮者を庇ったからこうなったのです！恨むなら……あの殺戮者を恨むのですね！」

ははははは！と奴は更に大きく声を上げ笑う。

そして……それに合わせ俺も……

「くふふ……くはは……アハハハハハハハ！」

高らかに笑う。

「おや？どうしたのですか？遂に狂ってしまいましたか？」

「ハハハハハ……違うね！お前があまりにも馬鹿だからつい笑っちまったのさ！」

「は？何を言っているのです？私の何処が…」

「それが馬鹿だって言ってるんだ！テメェが俺の武器があれだけだと思ってたのか！本当馬鹿だなお前！」

「な……どういう事です！？」

「それはつまり…」

俺はポケットから昨日改造を施したスタンガンを取り出す。

「こういう事だよ！」

それを俺の体に突き刺さっている腕にスタンガンを当て、スイッチを入れる。その瞬間強力な電流が俺と奴の体に迸り、衝撃を与える。

「があああああああああ！！？」

奴はあまりにも強すぎる電撃に思わず俺を振り落とす。俺は竹に激突し止り、その瞬間腹の傷がとてつもない速さで再生しだす。これでまた戦える。

「こ、このクソ餓鬼がアアアアアァァァ！！！」

奴は怒り狂い、俺に向かって走り出す。
そして奴がその手を振り下ろそうとした…その瞬間、

「無駄無駄無駄ァ！喰らえィ！！」

俺は同じくポケットに入っていた催涙スプレーを取り出し奴の顔面に浴びせる。

「ギャアッ！？」

奴は催涙スプレーを顔面に諸に喰らい、顔を抱えその場でのた打ち回る。そんな効いたんかこれ。

…まぁ……永琳の作った特殊薬も含んでるから効くっちゃあ効くかもしれへんね。

俺はこの隙を見て鉄パイプを回収する。回収し、奴の方を見ると、未だに苦しんでいるようだった。なげぇなおい。

「…さぁてと」

俺はゆっくりと奴の方へと歩いていく。

そして俺は某バトラーの台詞を吐く。

「小便はすませたか？神様にお祈りは？部屋のスミでガタガタ震えて命ごいする心の準備はＯＫ？」

俺は奴の近くに立ち、鉄パイプを振り上げる。

「さぁ……死ぬがよい！」

俺は鉄パイプを一気に振り下ろす。奴は催涙スプレーのせいで動く事が出来ず諸に喰らってしまう。

そして俺は、殴られて怯んだ奴に向かって、乱打を仕掛ける

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！」

ただひたすらに鉄パイプを振り回す。バギバギと奴の体が悲鳴を上げるのを耳にする。

それを聞いた俺は更に乱打のスピードを上げる。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！」

もはや奴の顔面は原形を止めておらず、更に言えば本当にそれが顔なのか？と疑いたくなる程に変形してしまっているが、そんな事は関係ない。

「ドラララララララララララララララララララララララララ！！」

これ鉄パイプ折れるんじゃねぇのか？って位に至る所を徹底的に殴る。手加減なんてせず、俺はただ、鈴仙を泣かせた怒りをこいつにぶつけた。

「アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリ！！」

そしてそこにあるのは肉片。もはや人の原型を止めてすらいない。そして俺は最後とばかりにスペカを取り出し、

そして叫ぶ。

「怒符『怒りの炎』！アリーヴェデルチ！（さよならだ）」

巨大な炎の柱群が奴に直撃する。ゴウ！と炎が燃え上がり、奴の体は徐々に燃え尽きていった。

「…ハァ……ハァ……ハァ……」

俺は乱打のし過ぎで疲れてしまい、その場に座り込む。ここまで人……じゃないけど、ぶん殴ったのは初めてだ。もうこれ以上戦うのは無理だ……頼むぜ……もう起き上がってこないでくれよ……肉片にまでしたんだしよ…

俺はズリズリと体を這わせ、鈴仙の所に戻ろうとする。正直立ちたいんだが、もう体力が尽きてて立ち上がる気力すら出てこない。てか、体力なのに気力が切れるっておま…

「ハァ…ハァ…鈴仙……終わったぞ……もう…安心して良い……」

「！　駄目！まだ終わってない！今すぐ右に避けて！！」

は？一体何を言ってるんだあいつは……って、まさか…！

俺は右に転がる。その直後、突然横を突き抜ける巨大なレーザー。それは避けそこなった俺の左半身を巻き込み、そして……

永遠亭の半分を吹き飛ばした。

「ガアッ！？な、何だ！？」

俺は治っていく体を抱えながら、レーザーの飛んで来た方に目をやる。

するとそこには……

体中真っ赤な毛で覆われた角を生やした四足の化け物が居た。

「な……まさかあれ……あのクソ野郎なのか…？何だよこれ……完

全に別モンじゃあねぇか！」

俺は何とか再生した体を起こし、覚束ない足取りで奴を睨む。俺は今にも疲れで倒れそうだった。

「キサマラゴトキニコレヲツカワザルヲエナイトイウノガジツニハラダタシイデスヨ！！イマノハハズシマシタガ、ツギハカクジツニアテテアゲマスヨ！！！」

「ちょｗｗ片言過ぎだろｗｗｗ…って笑ってる場合じゃねぇよな…」

俺は鉄パイプを構え直して奴を睨む。まさか燃やし尽くした筈なのに生きてるなんてな……無駄にタフだなこの野郎。

「…マズハアナタカラケサセテモライマスヨ！レイセン！！」

「！　ま、不味い！鈴仙逃げろ！！」

俺は鈴仙に逃げる様促すが、その前に奴が鈴仙に接近しその巨大な角で鈴仙を刺そうとする。

クソッタレ！！こうなったら……俺が一時的に超スピードで鈴仙の目の前に行ける筈が無い！！

「シネェ！サツリクシャアアアアアア！！」

「させるかアアアアアアアアア！！！！」

俺は鈴仙の目の前に瞬時に移動し、両手を広げ鈴仙を守る体勢になる。

そして……

「ガハァッ!?!!」

俺の体に角が突き刺さった。

「なっ!?れ、蓮也!?」

「キ、キサマアアアアアア!!!マタワタシノジャマヲスルノカアアアアア!!!」

「ゴフッ……えぇしますとも……鈴仙は……やらせねぇぞコラァ……」

俺はポケットからスタンガンを出そうとする。

が、疲れが溜まり過ぎたせいか俺はそれを落としてしまった。

「ク、クハハハハハハ!!ドウヤラキサマモココマデノヨウダナ!モウウゴクコトサエママナラナイノデショウネ!!イヤハヤユカイデスヨ!!」

「クソが……これ位で……負けるか……」

「イヤ…モウムリデショウネ!ダカラサイゴノサイゴデアナタニゼツボウヲアゲマスヨ!」

奴はそう言うと、突然角が光だし、俺の体を包み込む。

「な、何しやがる!」

「アナタヲキョウキヲウエツケルノデスヨ!ソシテアナタガソコノサツリクシャヲコロスノデスヨ!クハハハハ!ジツニユカイ!コレデワタシノヒガンモタッセイサレマスヨ!!」

「! クソが…!やらせる……か…!」

「モウオソイ!オチロ!!!」

奴がそう叫んだ途端……

俺の視界は真っ暗になった。

――――――――――――――――――――

「…う……ん…？」

朦朧とした意識。っていうかそんな事を言ってる時点で朦朧としてないよね。

「…あれ…？俺は一体…？」

…えーと……確か俺は……あのクソ野郎に狂気を植えつけられそうになって……そしたら視界が真っ暗になって……それから……

…駄目だ。全然思い出せない……気絶してたのか？

…うぅ……体中がダルい……完全に疲れてるなこりゃ……

俺は体を起こそうとする。だがそこで、俺はどうも頭に軟らかい物が当たってる様な感じに囚われた。何だこりゃ？

「あ、目が覚めましたか？」
「え？…あー……鈴仙の膝だったのか……」
…ん？鈴仙の膝？
…え、ちょちょちょちょっと待って。もしかして今俺は、東方キャラに膝枕して貰ってるの？
何これ胸熱
「…えーと……俺は気絶してたのか？」
取り敢えず現状確認。膝枕の話はそれからだ。
「はい。あの時狂気に墜ちかけた貴方を私が能力で相殺したのですよ。でも貴方は疲れがピークに達して気絶してしまったのです」
「…成る程ね……何か情けないなぁ…」
まさかあんなカッコ良くしたのに、結局気絶するとか情けないよ……俺ってやっぱ凡人なんかな…
…あ。そういえば……
「なぁ鈴仙？あいつはどうなったんだ？」
「あいつですか？あいつなら――あそこですよ」
鈴仙が指差した方を見ると、そこにはただの肉片しか無かった。
「…まさかあれが？」

「はい♪私はあいつと戦ったのですが、やはり『ご主人様』の攻撃がかなり効いていたらしく、何発か撃ちこんだだけで死んじゃいましたよ♪」
「…肉片になるほど脆くなってたんか……所詮は小物だったか…」
「ですね♪」

…まぁこれでこの件は片付いた訳だ。これでもう鈴仙が泣く必要は無い……

…あれ?ちょっと待って?さっきの会話何かおかしくない?

「…なぁ鈴仙?お前今何て言った?」
「?　今ってどの事です?『ご主人様』?」

…

……

……ゑ?

「え、ご、ご主人様?ど、どうしたん鈴仙?頭でも打ったん?」
「ふふふ♪私は至って正常ですよ♪ただ私は……貴方に惹かれてしまっただけですよ…」

そう言って鈴仙は俺の頭をそっと抱きかかえる。
この状況に、俺の理性はフジヤマヴォルケイノした。

「れ、れれれれ鈴仙!と、とととと取り敢えず!え、永遠亭のしゅ、

修理をしないとな！こ、こののままじゃま不味いしな！！うん！！」
「はい♪解りましたご主人様♪」

…か、可愛すぎる！！その笑顔ヤメテ！俺の理性が更に狂っちゃうから！キュン！ってなっちゃうから！

俺がギコちなく歩いていると、鈴仙が突然止まり、ポケットを探り始めた。どうしたんだ？

「そういえばご主人様。あいつを殺したらこんな物が…」

俺は鈴仙が取り出した物を受け取る。
それは、何か普通とは雰囲気の違う光る妙な石だった。なんじゃこりゃ。

「…何だろ……これ？」
「見た所何か特殊な力が込められた石の様ですね……もしかしたらあいつを強くしていたのはこれかもしれませんよ？」
「あー……そういうパターンね。んじゃあこの石壊したら周辺にヤバイモンでも振り撒かれるのかね。…じゃあそっとしとくか…」

俺はポケットにその石を仕舞う。そして俺と鈴仙は戻ろうとする。

しかしそこで…

辺りに強力な光が散りばめられた。

「うおっまぶしっ」

俺は咄嗟に腕で顔を覆い隠し、光を遮断しようとする。その光は、そこまで長くは続かず、本当に一瞬で消え去ったのだ。何だったん？

俺はどうにも気になって、何となく空を見上げる。

するとそこには……

消えた筈の月があった。

「え、ちょ、マジで！？月があるんだけど！！」

「え！あ、本当です！完全に復活してますよ！」

…うわお……これは予想ＧＡＹでーす。まさか月が元通りになるとはねぇ……つまりこれは異変終了って事で良いのかな？やれやれ何だったんだよ……結局何が目的で起きたのか解らないじゃんか。何だかねぇ…

俺は若干腑に落ちない点を抱えていたが、取り敢えず永遠亭に戻らんと。永遠亭が悲惨な事になってるからな……

そんな訳で、俺と鈴仙は永遠亭へと戻っていったとさ。

――――――――――――――――

永遠亭に戻った俺と鈴仙は、案の定えーりんに命令され、屋敷の修繕を行うハメになりました。

しかしそこで俺は驚くべき変化を目の当たりにした。

なんと俺はニーサン並の錬金術が使える筈が無いという『幻想』を『実現』出来たのだ！しかも俺専用の幽波紋（スタンド）まで出現し、俺のテンションは有頂天となった。（因みに名前はメタル・オブ・ガードナーって名前にした）

そんで持って俺はその二つを行使して、永遠亭を前よりも頑丈に作り変えたのだ！フハハハ！やったねタエちゃん！能力が増えるよ！

んで持って、俺はその後妖怪兎達の治療に励んだ。手当たり次第にベホイミとケアルラをかけまくって治療しました。疲れたよ…

そしてその後は例月祭が再開された。色々とあったものの、兎に角ちゃんと行えて良かった良かった。

…え？てゐ？そこら辺でサボってやがりましたよガッデム。

今回の異変は俺にとっては害があったのかどうかは解らない。解っている事は、あのクソ野郎はこの異変の関係者だったのかもしれない、という事だ。

…まぁ結局の所、詳しい事は解ってはいない。だって異変解決に乗り出してないもん。解るわけ無いじゃない。ねぇ？

…でもそんな事はどうでも良いんだ。重要な事じゃあ無い。

兎に角今は……

例月祭を楽しむとしますかね。

事件回想？後：ｓｉｄｅ　蓮也（後書き）

と、取り敢えず疲れた……二日で書ききろうとしない方が良いね…
心も体も疲れるからね…

今回の補足

・敵の月人
所詮小物。なのに能力持ち。何だこれ。
まぁこいつはもう出ないと思いますよ。もしかしたら
後一回くらい出るかも知れないけど…

・蓮也の気絶後
これは手抜きって訳じゃないんです。これもれっきとした演出なのです。
蓮也視点だとこうなりますが、鈴仙視点だと…？

因みに、鈴仙には永琳との会話について話してないので、博麗神社でも話していません。話したのはそれ以外です。

さて次回は零奈編の事件回想です。次はいつになるかな……
リアルが忙しくなるからもしかしたら遅れるかもです。

それではまたお会いしましょうノシ

事件回想？前：ｓｉｄｅ　零奈（前書き）

最初に微エロがあるよ！
でもそれ以外シリアルだよ！
そこんとこ注意してね！

事件回想？前：ｓｉｄｅ　零奈

月夜の夜ってのはとても風流を感じさせられる。満月ならば尚更だ。月の下でお酒を飲んだり、お月見をしたり、宴会をしたり。月夜の夜にはそういう事をやる。

でもね。それも良いけど、私はもっと良い娯楽を知っている。それは…

「ん！んん！もっと……もっと○○て！○○○○○○にして！！」

「うぅ！す、すご……凄い○○…！」

はいそうです。今はセ○○ス中なのよ♪ふふふ♪やっぱ一日に五人はやっておかないとね～♪そうしないと満足出来ないし、触手の栄養も足りなくなるしね♪

…何だか自主規制が入ってる気がしてならないけど、そこはまぁ気にしないで良いよね♪

「くぅ……れ、零奈さん……俺……もう…！」

「わ、私も！もう……んん！」

私は男に抱きつきキスをする。舌と舌が絡み合うキスは私の脳髄を焼き尽くす。

そして…

「うぁ…○、○る！」
「んにゃ！？にゃぁああ！！！」
私と男は共に果てた…
「…ん～♪中々良かったわよ貴方♪初めてにしては上手かったわよ♪」
「は、はい！あ、ありがとうございます！」
「ふふふ♪それじゃあまたね♪」
「は、はい！それでは！」
男は私に別れを告げ、自分の家に帰っていった。ふふふ♪中々上手いな子だったわね～♪セ○○スが初めてだったにしては手の動きとか良かったもの。あれは将来彼女が出来た時、彼女さんが幸せになりそうね♪何だかんだで性格も良いしね♪ふふふふふ♪
それじゃあそろそろ慧音の所に戻るとしますか♪まだ四人としかヤってないけど……まぁ五人目は慧音から渡されるであろう仕事を終わらせてからで良いわよね？てか、そうしないと慧音が怒っちゃうもの……
まぁ仕事しなかったら怒るのは当たり前なんだけどね。
じゃあまぁ慧音の家に帰るとしますか♪そして早く仕事を終わらせて慧音の胸を揉みしだくとしましょうか♪

私は鼻歌を歌いながら慧音の家へと帰っていった…

―――――――――――――――

慧音の家の玄関に来たわ。という訳で早速行きましょうか♪

「慧音ー？帰ったわよ～。だからヤらせｔ」
「お前は少しか節操というものを知れ！！」

ブン！と投げつけられた巻物を避け、飛んで来た方に目をやる。
するとそこには……

胸が大きく、更にはスタイルの良い美人な女教師の慧音が居た！
相変わらず大きい胸ねぇ……あぁ揉みしだきたい……

「…お前絶対破廉恥な事を考えてるだろう。涎が垂れてるぞ」
「おっと失礼。あまりにも慧音の胸が大きくて形が良い物だから、つい揉みたくなっちゃったの♪だから揉ませて♪」
「断る！！そんな事を言ってないで早くこっちに来い！！仕事が山ほど溜まってるんだ！！さっさと片づけろ！！」
「はいはい♪それじゃあそれが終わったら揉ませてくれる？」
「お　断　り　だ　！馬鹿な事言ってないでさっさと仕事しろ！！」

むぅ……馬鹿な事とは酷い事を言うわね……これでも結構真面目なのにな～……私は仕事にも性欲にも常に真面目なんだから少し位良いじゃないのもう…
…まぁ良いか。半分真面目に仕事に取り組んで、半分真面目にオ

○ニーしましょう♪

という訳で私はテクテクと慧音に付いていく。途中、縁側のある廊下を歩き、そこから差し込む月の光に若干の風情を感じながらも、私は仕事が終わった後どうやって慧音を襲おうかを考えていた。

幻想入りして四日目。私の本当の力である怪力と触手はまだ里の人達や慧音、妹紅には見せていない。見せているのは幻想入りした際に得た『〝美〟を操る程度の能力』だけ。

…正直、怪力と触手はまだ見せるには時期尚早だと思う。私はまだ此処に来て日が浅い。そんな私を里の人達はまだ心を許してくれてないだろう。そんな時期に私の力を見せれば反って余計な警戒心を持たせる羽目になる。それだけは避けたいのよね～。

…てかね。私が拳だけで妖怪と戦えるって事さえまだ伝えてないの。だから慧音や妹紅は私を里の外に出してくれない。何故なら私は空も飛べないし、弾幕だって放てない。例え能力もちでも、そんな奴を一人で外に出すのは危険だと思っているのだろう。正直いらない心配なんだけどねぇ……まぁ仕方ないよね。私の力を見せてないんだから。

…そうこうしている内に、私と慧音は慧音の部屋の前に到着した。

「書類を取って来るからちょっと待っていろ」

慧音はそう言って部屋に入っていった。

そして私は廊下に残され暇になる。どうせ直ぐ戻ってくるだろうけど……慧音の出す書類の量は多いからねぇ……もしかしたらほんのちょっとだけ時間掛かるかもね。

私は暇そうに体をグッと伸ばす。そういえば最近まともに修行してないな……そろそろしないと不味いなぁ……

と、私がボーっとしていると、私から向かって右側の方から誰かが歩いてくる音を耳にする。

パッと音の方向を振り返ると、そこには何か物思いに耽っている妹紅が居た。

丁度良い時に来たわね。暇だから少し話し相手になって貰いましょう。

勿論、変態的な会話だけどね♪

「やっほー妹紅♪何物思いに耽ってるの～？」

「あ、零奈……居たんだ」

「居たんだって酷い！実の彼女に対してそんな発言するなんて……そんな薄情者には私から性なる愛の制裁を与えるわ♪」

「いらないわよ……何が悲しくて貴女と愛を深めなきゃならないのよ…」

「悲しいなんてそんな……あの時過ごした一夜は嘘だったの！？」

「一夜って何よ！私は何もしてないわよ！！」

「そんな！酷い！私を性処理の道具としか見てなかったのね！別にそれでも良いけど！」

「思ってないわよ！そして良いとか言うな！いい加減その変態発言を止めなさいよ！！」

「だが断る！！私の性欲は留まる事を知らないわ！！」

「留まれ！そしてもう一生留まって再発するな！！」

そんな感じにワーワーと楽しくお話をしていると、慧音の部屋の

襖が開き、慧音が大量の書類を腕一杯に抱えて現れる。

「五月蝿いぞお前達。近所迷惑になるからその辺にしておけ」
「むぅ……これからが盛り上がり所だったのに…」
「はいはい。こっちは書類が大量に盛り上がってるんだ。さっさと消化しろ」
「むぅ……解ったわよ。パパッと終わらせるから、そうしたらヤりましょう♪慧音♪妹紅♪」
「「やらないわ！！」」

二人して酷い……私をそんなに拒絶するなんて……
そんな事したら……そんな事したら……！

感じちゃうじゃない！！

「…零奈……」
「ん？なぁに妹紅？」
「…涎を拭きなさい……そしてその顔止めなさい…」
「お断りですわよ♪」
「何故に言葉を変えた！？」
「そんな気分だったから♪という訳でヤらせｔ」

私の言葉が全て放たれるその前に、
慧音が私の肩を掴んで、
頭を思いっきり振り被って、そして…

「いい加減にしろおおおおおお！！」

強烈な頭突きを繰り出してきました。

えぇ、勿論諸に喰らったわよ?そしてそのお陰で一回イけたわ…

…やっぱこの娘達と居ると幸せだわぁ……

―――――――――――――――

私は今、自分の部屋に居る。襖、箪笥、卓袱台と言った、実に昔の日本らしいスタイルの部屋だ。私の世界での部屋はテーブルとかベッドとかがある今時の女子高生の部屋ではあったが、こういう部屋も悪くない。風情があるって言うのかしら?まぁ兎も角、こういう昔ながらの部屋ってのは素晴らしいのだ。

…って、何で部屋について語ってるのかしら…?今そんな事を語る必要なんて無いんだけどなぁ……仕事しなきゃならないし。

…まぁ……この程度の量なら十分位で終わるしね。そこまで気張る必要も無い……って、それはそれでどうなのよ…?

まぁ別に良いけど。

私は山積みになった書類の一番上の紙を取り、卓袱台の上に置く。これは今日実地強いた算数の小テストの解答用紙。私はそれの丸付けをするのだ。

内容は簡単な掛け算と割り算。一問だけちょっとだけ難しい問題を含んでいるものの、ちゃんと勉強してれば全く問題ない物だ。因みにこれを作ったのは私。

私は中鋒筆を赤い墨汁に浸し、汁が問題用紙に垂れない様余分な

汁を事前に拭き、問題用紙に丸を付けていく。
丸、丸、丸、バツ、丸、バツ、丸…と、私は素早く、それでいて正確に解答をしていく。
偶に足してたり、引いてたりしてるちょっと間抜けなミスをしている解答もあったが、基本的に全ての問題用紙の正答率は三十問中二十四問って所だった。う～ん……まぁまぁかな？

私は黙々と丸付け作業をこなしていく。けれど、流石にこのまま続けるのは効率悪いよね、と考えて、私は背中から可愛い可愛い触手達を出す。
触手は筆を持って、問題用紙に丸を付けていく。丸を付け終わった問題用紙は、また別の触手によって一枚一枚丁寧に重ねられていく。いや、ほんと役に立つわぁ……この子達は本当に有能よね♪

触手の導入により作業効率はおよそ十倍となり、瞬く間に丸付けが終了してしまった。
しかしこれだけでは終わらない。今度は明日のテスト用の問題用紙と解答用紙を作らねばならない。
…と言っても、そんな時間掛からないけどね～。問題なんて一分あればパパパーっと完成させられるわ。
問題なのはそれの複製。幻想郷には電気がほんの一部しか通っていない。だからコピー機なんてある訳無いし、況してやプリンターがある訳でもない。だから専用の道具を使用し、作らねばならない。
…正直、この工程が一番時間掛かると思う。現代じ使われてない代物だしね。

まぁ、直ぐに使い方は憶えたけど。

私はさっさと問題を完成させて、問題の複製を行う。その間に触手に書類を纏めて貰う。

んで、およそ四分後…

完成！此処まで掛かった時間はおよそ八分。我ながら素早く、そして正確に仕事を終わらせたものだ。

…う～ん……余った時間は何しようかな？筋トレは地道にやってるから問題無いとして……誰かを犯そうってのはもう慧音に決まってるし……どうしたものか…

私はボーっと考えながら、窓の方に目をやる。そこからは月の光が差し込んでおり、除いて見ると満月が映っている。

…そういえば……慧音が今日は歴史の書物に正史を纏める日だとか言ってたなぁ……確かこの日に慧音に会うのは駄目なんだっけ？慧音の気が立っているから。

…そうだ。慧音の白沢時の状態を見に行こう。どんなものか見たこと無かったから気になってたのよね。里の人の話によると、角が生えて頭突きの威力がアップするとか言ってたなぁ…

…一度は喰らってみたいとは思ってたのよ。慧音の白沢時の頭突き。威力が上がっているのだとすれば……私が何回もイけるに違いない！

ふふふ♪これは楽しみになってきたわね！

待ってなさいよ慧音！今！貴女の愛しの人である遠命零奈さんが向かいますからね！胸を揉み解して待ってなさいね♪

私は触手を仕舞って立ち上がり、慧音の所へと向かった…

―――――――――――――――――――――

…さてと……外に出たは良いけど何処に居るんだろう…？まさか里の中に居るとは思えないしなぁ……となると里の外かな？

私は里の入り口の方を見て慧音が居るか確認する。しかし慧音の姿は見られない。入り口の横にでも居るのかな？

私は入り口の方へと歩き出す。取り敢えず会ったら最初にどう話しかけようか？どう怒らせようか？どう嬲って貰おうか？そんな事を頭の中で考えながらゆっくりと歩を進めていく。

白沢状態の慧音と会うのは早々無いから、出来る事なら最高の一撃を喰らいたい所だけど……そう上手く行くかな？

…まぁ……上手く行くように頑張るんだけどね！それが私！

テクテクと道を歩く。途中、里の人と遭遇したので軽く挨拶したり、偶々居た犬を撫でたりしつつ、のったりくったりと歩く。

その内に、私はふと空を見上げる。

相変わらず綺麗な月夜。私の世界じゃ到底見れなかったであろうその美しい空は、しみじみと、私の心に何か暖かい物を染み込ませ

てくる。
科学的な物では感じられなかった……そんな風情が。
私が月夜に深く趣を感じていると……
突然、頭の中に言葉と不穏なイメージが響く。それはあまりにも一瞬の出来事であったが、それは確実に私の中に響き渡っていた。
『消える』
消える？何が？私はその言葉に少しの疑問と、強い警戒心を抱き、臨戦態勢になって辺りを見渡す。里の人達の様子に変わりは無い。動物にも、辺りの雰囲気にも…
…ん？ちょっと待って……何か周り暗くない？さっきまで月の光が差してそれなりに明るかったのに…
…『月の光』？……まさか！
私は空を見上げてさっきまで月のあった方を見る。
するとそこには……
月が……無くなっていた。

嘘でしょ！？私は自分の目を疑った。だってそうでしょ？ついちょっと前まであった筈の月が完全に消えてるんだもの。疑わない方が可笑しいわ。

…しかしどうして……月を消すなんて真似を…？そして一体誰が…？

私は考え込むが、その時里の外から大量の妖怪の気を感知した。しかもこの感じ……どうやら穏やかでは無さそうね…

…あ、ちょっと待って……今、外に慧音が居るじゃない！不味いわ！このままじゃ……慧音が殺される！！

私は思いっきり地面を蹴り、里の外へと走り出す。

待ってて慧音……絶対に……殺らせたりなんかしないから！！

◇■◇■◇

月が消えるほんの数分前、上白沢慧音は歴史書を纏める仕事をしていた。

彼女は満月の夜に白沢と呼ばれる妖怪になる事が出来、その時にのみ使える能力である『歴史を創る程度の能力』により、歴史書に記された間違った歴史を正しい歴史へと書き換えているのだ。

しかし、この時の彼女はかなり気が立っており、下手に近付くと彼女の強力な頭突きを喰らう羽目になるのだ。
だから基本的には誰もこの時の彼女には近付かない。それが例え妖怪であろうと…

彼女が歴史書の修正作業をしていると、どうにも辺りが暗くなってきた事に気が付く。
夕立か?彼女は最初そう思ったのだが、しかしそうでは無い事に直ぐに気が付く。
何故なら彼女のハクタク化が解けてしまっていたからだ。

それはつまり月が無いという事。彼女のハクタク化は満月があってこそ効果を発揮する。
つまりそれが消えたという事は、空にある筈の月が消えてしまった事を意味しているのだ。

彼女は不穏な空気を感じ取り、ポケットからスペルカードを取り出す。何が来ても良いよう、臨戦態勢を整えているのだ。

そんな折、彼女の元に高速で接近する妖怪あり。大きな翼を生やしたそれは運悪く後ろを向いていた彼女に接近し、彼女を思いっきり蹴り飛ばそうとする。

だが、彼女はそれに気が付いており、攻撃を難なく回避。体勢を立て直し、目の前に居る妖怪を睨む。

「何者だ!この異変に関係がある者か!」

彼女は妖怪に向かってあらん限りの声を上げて問う。
その問いに妖怪は答える。

「えぇそうよ。私はこの異変を起こした者の手下。そして後から来たこの子達は私の同属」

そう言って妖怪は、妖怪の後ろからゾロゾロとやって来た妖怪達を差して言う。
それらの妖怪は見た所鬼に似たような風貌をしているのだが、しかし幻想郷の鬼と違い、体に赤や青の色素が混じっているのだ。

「…貴様等幻想郷の者じゃないな――外から来たのか」
「…フフ♪中々察しが良いようね。でも残念……私達はこの世界(幻想郷)の外から来た者では無いわ」
「…何だと？じゃあ一体何処から来たというのだ！」

彼女が大声を上げ問うと、妖怪はニヤリと笑い、彼女に対してこう言った。

「それは私達を倒せたら教えて上げるわ！」

妖怪は手から妖力で出来た大玉を精製し、彼女に向かって投げつける。
彼女はそれを難なく回避する。

彼女は霊力の籠もった弾幕を妖怪達に向かって撃ち出す。
ドドドドド、と撃ち出された弾幕は妖怪達を吹き飛ばす。弾幕を避け、迫ってきた周りの雑魚妖怪は格闘で叩き落とし、追撃ばかりに弾幕を撃ち込む。

ドーン、と雑魚妖怪に直撃した弾幕は弾け、辺りに土煙が舞う。
そしてその中から飛んで来る大玉。
「こんなもの！！」
彼女は瞬時に大玉に反応し、大玉の直線状から離脱する。これにより大玉は回避出来た…
筈だった
「ガァ！？」
避けた筈の大玉は彼女に直撃しており、彼女はそれによって多大なダメージを受ける羽目になってしまった。
「（な、何故だ…？今のは確実に避けた筈だ……なのに何故私はあの攻撃を喰らってしまったのだ…？）」
傍から見れば確実に彼女は避けていた。
だが彼女はこうしてダメージを負っている。
それはつまり……
「（…能力か…！）」
長年戦い続けた彼女の経験から、自らに起きたこの現象は能力によるものであると判断。しかしそれが何なのかは解らない。
彼女は能力の候補として幻惑系の能力持ちなのだと推定する。自

分に対して何かしらの幻覚を見せて、大玉の飛んで来る方向へと誘導されてしまったのだと、彼女は考えた。

彼女は更なる思考を重ねようとした……が、

「余計な事は考えない♪」

「！　ガァ！？」

妖怪が彼女の腹に強烈な蹴りを喰らわせる。

その一撃はメキメキと彼女の骨を砕き、彼女を吹き飛ばす。吹き飛ばされた彼女は十数メートル先まで飛ばされ、体中を叩きつけて停止した。

今の彼女は、満身創痍だった。

そんな彼女に、妖怪は近付き、追い討ちとばかりに更なる蹴りを加える。

「フフフ♪良い様ね……人里の守護者さん？」

「くっ……貴様…！」

彼女はボロボロな体を抱えながら、妖怪を強く睨む。

「あら……まだ余力が残ってるの？…ウザったいわね」

妖怪は自分の仲間を呼び、彼女の腕を抱えさせ、まるで十字架に貼り付けられたイエスの様な格好にする。

「…その目……気に食わないわ。まだ希望を捨ててないその目が…」

「…知らんな……お前が……望むような……形には……絶対にしな

い……ぞ…」
「――――ハッ。ハハハハハハ！そんなボロボロの状態でまだそんな事が言えるの！？お笑いね！」
妖怪は大きく口を開き、彼女の事を笑い飛ばす。
「アハハ……――――気に食わない。その気持ちが気に食わない！アンタ達！」
妖怪は同属の妖怪達に声を掛け、何か合図をすると人里へと向かい始める。
その様子に、彼女の顔から血の気が引いた。
「理解したようね……そうよ。今から私達は人里を襲うの……そして里に居る全ての人間を皆殺しにする。その時のアンタの顔は……どうなってるでしょうねぇ！！」
「！　や、止めろ…！私は……どうなっても……良い…！だから……里には……手を……出すな…！！」
「フフフ♪それは無理な相談ね……だってそうした方がアンタの顔を絶望で塗りつくせるんだからねぇ！」
「くそっ…！こ。この……外道が…！」
彼女はその言葉を口にした瞬間、目から熱い物が流れ出て来ているのを感じた。
それは涙。彼女の目から流れ出る……悲しみ。
彼女は自らの無力さに涙した。
守る筈の自分が、守るべき者達を守る事が出来ないという事に。
涙を流し、彼女はそのままうな垂れる。もはや彼女に戦う力、抗う力は残されていない。このまま妖怪達に里を攻められ……多くの

人が殺される。

妹紅が居ただろうが、彼女一人では抑えきれないだろう。あの数を前に、犠牲者を出さないというのは無理な話だ。

彼女の目には、もう希望は残されていない。とても薄暗い、濁った瞳。それは絶望を体現してるかのようだった。

そして……彼女の脳裏に一人の少女が浮かぶ。

遠命零奈――その姿を。

「…零奈」

彼女はふとその名を呟く。絶望で染まりきった彼女の最後の言葉は……

「…ご免……私……お前を……守れなかった…」

心の底から零奈に対して謝罪をする事だった。

謝っても、謝っても、心に湧いた罪悪感は拭えない。

謝っても、謝っても、零奈を失う悲しみは消えない。

謝っても、謝っても、苦しみが……治まらない。

謝って、謝って、謝り続け……そして気付いた……一つの確信。

それは……

彼女は零奈の事が好きだったのだと言う事。

「あ……あ……」

それを理解してしまった事で……彼女の悲しみは……更に強くなった。

「あ……ああ……！」

理解しなければ良かった。そうすればまだ悲しみは少なかったのに……

――――だが、もう、遅い。

「あああ……あああああああ……！」

もう、彼女の悲しみは、苦しみは、痛みは――――――消えない。

「あああああああああああああああ！！！！！！」

彼女は泣き叫んだ。ただひたすらに泣き叫んだ。

泣き叫ぶ言葉の中には零奈に対する謝罪が含まれている。

彼女が愛してしまった零奈という一人の少女を、彼女は失う。

それこそが真の絶望。

人里の人間を失うのも、人里を失うのよりも強い……絶望。

そして……彼女の絶望が彼女を完全に壊そうとした――――――その時、

ドゴォ

そんな音が聞こえ、それと同時に体の拘束が解け、地面にへたり込む。

何事か？そんな事を考えている時に、誰かの胸に抱かれる。

彼女はその暖かい温もりを肌で感じながら、虚ろな目でその主の顔を見る。

その主は……

「全くもう……私があれ位で殺されるとでも思ったの？本当に慧音はしょうがないんだから♪」

まるで聖母の様な明るく穏やかな笑顔を見せる、その主は……

「…安心して慧音。私は死んだりなんかしない。そして慧音を悲しませたりもしない。だから……安心して……ね♪」

彼女の愛した人――――遠命零奈だった……

事件回想？前：ｓｉｄｅ　零奈（後書き）

どうも、最近勉強が魔物に見えてきた作者の連夜です。
皆さんはいかがお過ごしでしょうかー？
自分？自分はあれだよ。模試に向けて勉強しちゃってるよ。
模試爆発しろ

今回の補足

・零奈のヤった人数
これ結構重要です。いや、エロ的な意味とちゃうからね？
零奈の生命に関わるって意味だからね？

・翼生やした妖怪
次回で名前と能力が明らかになります。
気長に次回を待て！

今回補足少ないな……まぁ良いか。

それでは次回は……後編です。
それ以外にいう事がねぇ…

ではまた次回お会いしましょう。それでは

事件回想？後：ｓｉｄｅ　零奈（前書き）

二週間以上間が空いてしまった…
テストなんてだいっ嫌いだ…

そして今回、一万八千字位に達しました。
どうしてこうなった

事件回想？後：ｓｉｄｅ　零奈

私の腕の中で慧音は普通の女の子と全く変わらない弱さを見せている。

目からは大量の涙が零れ落ち、いつもの堅い口調ではなく、普通の女の子と同じ口調で私に謝り続けている。

「大丈夫……大丈夫だから……もう泣かなくて良いのよ？ね？」

私は兎に角慧音を安心させようと慧音の頭を優しく撫で、優しい口調で宥める。

「ひっく……ぅぁぁ……ぁぁぁ…」

泣く声は徐々に小さくなってくる。慧音は泣き止み始めた訳では無いのだろうが、それでも少しか安らぎを得られて落ち着いてきてはいるようだ。

私はそんな慧音を体から離し、こう告げる。

「私は今からあいつらを倒してくるから。だから少しだけ待っててね。直ぐに戻るから♪」

そう言って私はニコッと笑う。笑顔は人の心を幸せにするだけじゃなく、人の心を落ち着かせる事が出来る。笑顔というものにはそれだけの力があるのだ。

私は立ち上がり、里の方へと向かっていた妖怪達を睨む。人里から出る際に粗方ぶん殴って潰しておいたけど……どうやらまだかな

りの数が居るらしい。

まぁ結局全部倒すから関係無いんだけどね♪

「れ、零奈……まさか……一人で立ち向かう……つもりなのか…？」

まだ若干涙声であった慧音が私に問いかけてくる。

そんな彼女に私は真剣な声で答える。

「えぇそうよ。あそこに居るのは全部私が倒す……その序でにこの異変も解決しましょうか♪」

「！　無茶だ…！只でさえ……あいつらの……親玉の能力が……解っていない……というのに……そんな無茶な真似……を……するな…！」

慧音は傷だらけの体を抱えながらも、私の事を心配してくれる。

…でもね慧音

「それはいらない心配よ。貴女や妹紅、人里の皆には教えてなかったけど……私はこう見えても格闘家なの♪だから弾幕が撃てなくても大丈夫だから♪」

「そういう……問題では……無い…！私は……お前の事が…！」

…やっぱ何も見せてないから駄目ね。このままだと傷だらけの体引き摺ってでも止めてきそうね……

でもあえて、私はこの言葉を言う。

「大丈夫よ」
「！　大丈夫って……何が…！」
「私は絶対に死なないって事。だって…」
私は握り拳を作り、指をパキパキと鳴らす。
「私――――怪力ですもの♪」
「…は？」
慧音のポカンとする顔を見て、私はまた笑う。そしてあいつらの居る所まで悠々と歩き始める。
そこに立ち塞がる、二体の怪物。
私の世界に居た――――『鬼』だ。
「貴様……話が同胞と元締めに何をした！？」
「え？普通に殴っただけだけど？」
「嘘を吐け！我ら『鬼』を殴り飛ばせる者がこの世に居る筈が…」
「あらあら♪その自信は何処から来るのかしら？根拠も無いのに……ねぇ♪」
そう嘲笑う様に言うと、一体の『鬼』は額に青筋を立て、プルプルと震える拳で私を掴む。
「貴様ッ！我々を馬鹿にしているのかッ！！下等な人間の分際でッ！！！」
「あら？下等？それは私に対して言ったのかな？」
「貴様以外に誰が居るとッ！」
…あらあら……言ってくれるわね。これでも貴方達『鬼』を徹底

的に叩きのめした張本人なんだけどなぁ……もしかして新入りさん？

…まぁ新入りでも無知でも何でも良いけど。

だってね、

結局は……

「下等な人間がッ！貴様等にそんな戯言を言う資格など…」

「黙れ。そして――――――消えなさい♪」

「は――――」

『鬼』が言葉を言い切る前に、私は『鬼』の拘束を抜け、作った握り拳が喋ってた無知な『鬼』の体を貫く。

グシャア、と効果音でも鳴りそうな良い具合に突き刺さり、私の右手に赤い液体が滴り落ちる。

「な…！き、貴様！！よくも我が同胞を！！」

「あら？別に気にする事無いじゃない♪」

『鬼』の体から拳を引き抜き、付いた液体をパッパと振って払う。

そしてそのまま抜いた拳をゴキゴキと慣らし、

「だって……貴方もあの子の後を追う事になるんだもん♪」

「な――――」

またも言葉を言い切る前に拳を繰り出す。それは『鬼』の顎に直撃し、『鬼』の顔を見るも無残なスプラッター状態になった。

あ～あ……また汚れちゃったわ……また触手から新しい着替え出さないとね。

そんな事を考えていると、私の周りにゾロゾロと大量の『鬼』が集結する。どれもこれも怒り心頭に発しているわね。『鬼』は仲間意識が強いから今のでかなり怒っちゃったかな？

まぁ別に良いけど♪

私はニヤリと笑い、『鬼』達に向かって軽く挑発気味に言葉を発する。

「あら？どうかしたのかしら？仲間を無残に殺されてショックなのかしら？」

その言葉に『鬼』達の怒りのボルテージは更に上昇する。

しかし更に追い討ち

「あらあらそうなの？まさか貴方達外道集団にもそんな心があったんなんてねぇ？ふふふ♪面白いジョークね♪」

更に怒りのボルテージは上がる。

だが緩めない

「まぁ？貴方達如きの仲間意識なんて紙くず同然よね。だって――――仲間が殺されたのにそんなに暢気にしてるんだからね♪」

プツン。

そんな音が……聞こえた気がした。

「――――ブチ殺せえええええええええええ！！！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

一体の『鬼』が雄叫びを上げると、それに呼応して他の『鬼』も雄叫びを上げる。それはまるで獣。血に飢えた……化け物の雄叫びだった。

『鬼』たちは一斉に私に襲い掛かってくる。怒り狂った眼差しを見せ、その手に持つ棍棒やら何やらは確実に私を完膚なきまでに叩き潰し、殺そうとしているのが明白だった。

…全く……元気なのは良いけど……私的に元気で居て欲しいのは主にヤる相手と○○○のみよ！人里の人達の健康状態とかそういうのじゃなくて、もっと性的な意味でね！

そんな事を考えてる内に『鬼』の一体が私に棍棒を振り下ろす。私はそれをひらりと回避し、『鬼』の横っ腹に回し蹴りを放つ。回し蹴りを喰らった『鬼』は超速で吹き飛び、近くに居た『鬼』達を巻き込みそのまま動かなくなった。

「あら？この程度なの？そんな訳無いわよね？もっと……私を楽しませてよ！！」

私は口角を吊り上げニヤリと笑う。
この感じだ……この緊張感……これこそ死闘。
死ぬか生きるかの戦い。
負けは許されない……それは即ち『死』に繋がるだからだ。

だが、その感触こそが快楽。それこそが至高。こんなにも自分の命を感じる時は無い。
私は死闘が好きだ。命を賭ける戦いが好きだ。死と隣り合わせである戦いが好きだ。
傍から見れば只のイカレた戦闘狂にしか思われないだろう。

だがそんな事はどうでも良い。私はこの短くて儚い人生をスリルのあるものにしたいのだ。
私は既に死んだ身。命を賭ける事に――――恐れは無い。

『鬼』達は私に密集する様に接近し、ありったけの力を込めて私に攻撃を仕掛ける

大量の棍棒や爪が私に猛威を振るう時……私は爪先立ちをし、右足だけ宙に浮かせ、回転を始める。そして私は……右足を超速の連続蹴りを放つ。
迫ってきた『鬼』達は私の連続蹴りに当たり、面白いように飛んでいく。
十体……二十体……三十体……四十体……五十体……ろｋ
「全員離れろ！！近付けばやられる！！」
…あらら。離れちゃったか……

『鬼』達は私から大体十メートル位離れ、私の動きに警戒している。私が何かするのを待って、霊力弾か何かで攻撃してくるつもり

なのだろう。

…でもね。遠くに離れた位で私の拳から逃れられるとでも思ったの？

もしそうなのだとしたら――――――甘い。

「――――フッ」

私は右足で思いっきり地面を蹴り、超高速を超えるスピードで一気に『鬼』の一体に接近する。

『鬼』はあまりにも私が速過ぎたせいか、行動にかなりのラグが出来てしまう。

その隙を衝き、私は手刀を構え『鬼』の体を真っ二つにする。

そしてそのままの勢いで近くに居た『鬼』の体も真っ二つにする。

その内に『鬼』の一体が私が近付くのを恐れて棍棒をブンブンと振り回しだすが、そんなものじゃ私を防ぐ事なんて出来ない。一瞬にして『鬼』の持っていた棍棒を粉々にし、体を捻って『鬼』の体をまた真っ二つにする。

それをどんどん繰り返す。私に襲い掛かってきた『鬼』が全て死ぬまで……繰り返す。

そして……私の体が真っ赤な液体で染まった時――――――私に襲い掛かってきた『鬼』は全て死んだ。

「…ふぅ。これでお終いかな？何か物足りない気もするけどなぁ…」

私はそう不満を漏らす。正直言って、『鬼』の数はもっと多くても良かった気がするのよね……だってたったの四百よ？そんなんじゃ全然満足出来ないわよ。

…ハァ……もうちょっとやりたかったな……久しぶりに臨場感溢れる死闘が出来たんだから、もう少し楽しみたかったのに……つまんないなぁ…

私は軽く溜め息を吐き、死体となった『鬼』達を踏みつけながら慧音の所に戻ろうとすると、私に近付いてくる妖気を感知する。

これは……さっき吹き飛ばした『鬼』のリーダー的な奴のかな？

意外と遅いお戻りねぇ。

ま、私が楽しめればそれで良いんだけどね♪

…お、来た来た♪バッサバッサと翼を羽ばたかせて到着ね。かなり驚いた顔をしてるけど……まぁこんな惨状を見たらそうなるわよね♪

…あ、降りてきた。こっちに来るわ。…うんうん！すっごく怒ってるわね！良いわその顔！凄くそそられる！お、犯したい……

「…私の同胞を殺したのはお前だな…！」

「おおう。いきなり決め付けられたわねぇ……まぁ合ってるけど♪」

「…そうかそうか……アンタ……『鬼』に手を出してタダで済むと思ってるの…！」

「別にぃ～貴方達を敵に回した所で何も怖くないしぃ～所詮雑魚だからどんだけ来ようが関係無いしぃ～ま、要はどうでも良いって事ねぇ～♪」

「（ピキッ）…絶対にぶっ殺す！！アンタ達！！そいつを抑えな！！」

『鬼』のリーダーがそう言うと、私の後ろの方に居た慧音の悲鳴が聞こえる。

私は直ぐに振り返り、事を確かめると……
そこには『鬼』に拘束された慧音の姿があった。

「…人質ってワケ？つくづく卑怯な奴らね…」
「ハッ！何とでも言いな！それが私達何だからね！！」
「まぁそうよね――――で？」
「…は？何言ってんの…？人質を取ってるって事は下手に動いたらアイツを殺すって意味だよ！！解ってんのか！！」
「はいはい解った解った」
「な……あ、アンタ……私達を嘗めてるのか！？」
「えぇ」
「即答！？こ、このクソガキ…！」

『鬼』のリーダーが怒りで体をプルプルと震わせている。
いや、まぁ、だって……ねぇ？こんな甘い手段じゃ……私を抑えられないもの♪

私は慧音と『鬼』の方に向き直り、慧音に向かって叫ぶ。

「慧音！！気をしっかり持っててね！！！」

それを聞いた慧音は一瞬何事かと言う様な顔をしていたが、直ぐに真剣な表情になる。
良し……ＯＫこれであれが使える。

私は体から赤色の様な黄色の様な色をした気を放出する。
これは『闘気』。真の強者にのみ使いこなせる特殊な『気』だ。
これには様々な使い方がある。自らを強化したり、怪我や病気を治したり、相手の意識を奪ったり……結構幅広く使える。
私はこれを使用したある技を行う。

それじゃあ早速やりますか♪

「……！」

私が『鬼』達を睨むと、『鬼』達は突然意識を失くし……倒れる。
近くに居た慧音は、若干息切れしている様に見えるが、私が言った通り気をしっかりと持ってくれてたお陰で意識を失くしてはいないようだ。良い子良い子♪

「な……い、今何をした!?」
「ん～？ちょっと闘気を当てただけだけど？」
「と、闘気!?てか当てた!?な、何者なのよアンタ!!」
「私が何者かなんてどうでも良いじゃない♪それよりも……殺らないの？
…あ！もしかして怯えてるの？」
「ッ！　だ、誰が！お、怯えてなんかいないわよ!!」
「ふふふ♪強がってる所が可愛いわね♪そして良く見ると……貧乳だけど良い体つきしてるわね♪」

私は満面の笑みを零しながら『鬼』のリーダーに近付く。
それに恐怖を覚えたのか、『鬼』のリーダーは顔を引き攣らせ、後ずさっている。

「な、何する気よ…！よ、寄るな……寄るなあああああ!!」

『鬼』のリーダーが叫ぶと、突然私の体が前に進まず、進もうとすればする程後ろに下がっていくのだ。
これがあの娘の能力ね。どうやら私の行動を狂わせる力を持つ能力のようだけど……なんだろう…？

私は進むのを止め、逆に下がってみる。
するとどうだろう。進まなかった筈の足が真っ直ぐ前に進んでいるのだ。

ふむ……これはあれかな？行動を逆にさせているのかな？でも、それなら何かしらの違和感を感じる筈だ。私はそういうのには鋭いから……
それに……何か自分の都合に悪い事であれば勝手に触手の害的干渉除去能力が働いてそれを無効化してくれる筈だ。それが働いていないという事は……
…これは私の行動系統を麻痺させて、私自身の体が考えてる事と逆に動くように促しているのか？
…いや。これは促しているというより……勘違いさせられている……つまり『錯覚』させられているのか。
確かにそれならば触手の害的干渉除去能力は発動しない。何故ならそれは私に対して影響を及ぼすものでは無いからだ。

…成る程ね。あの娘の能力は『錯覚させる程度の能力』なのね。
それならば、何も知らない慧音にはかなり分が悪い敵だったわね。

だけど……カラクリが解ればもうどうって事は無い。自分の思っている事と全く違う方に行動が働くというのならば、逆の方に事を考えて行動すれば良いだけの話。そして能力を解除してきたら普通に接近すれば良いだけ。ふふふ♪すっごく楽ね♪これならさっさと終わらせられそうね♪

私はどんどん『鬼』のリーダーに近付いていく。さぁて……どう調教して上げ様かしら？快楽調教は確実として……ＳＭ調教？それ

とも触手調教？あ、恐怖を植えつけて従順にしてから快楽調教しても良いかもね♪うーん……悩むわ～…

「な、何なのよアンタ……い、いや……来ないで…」

…ん？恐怖が増幅してる？あ、これは恐怖調教いけるかも。

それじゃあもうちょっと煽ってみますか♪

「あら？自分達から攻めて来たのに命乞い？――そんな都合の良い話があると思ってるの？」

私は闘気を少しだけ『鬼』のリーダーにぶつける。すると『鬼』のリーダーは、腰をガクガクと震えさせてどんどん後ずさって行く。恐怖が侵食している証拠だ。こうなってしまえば……堕ちるのは時間の問題だろう。

「ふふふ♪怖いんでしょ？怖いのよねぇ？でもね……貴女はそれ以上の恐怖を味わう事になるの……それが貴女が起こした行動の報い。貴女が犯した罪。そしてそれからは逃れられない運命（さだめ）にあるの……さぁ……罪を……償いなさい♪」

私はまるで狂った様な笑顔を作る。それによりリーダーの恐怖は更に増し、恐怖の重さでその場にへたりこむ筈…

…だったのに

「い、いやあああああああ！！！！」

…何で逃げるんだろ。てかまだそんな余力が残ってたの？意外とタフなのねぇ……うん。予想外だわ。

…まぁ……あの娘の翼には触手を潜ませておいたし、どれだけ離れても、何処に隠れようと、問題無く追えるんだけどね♪

さてと……取り敢えず慧音を治療しましょう。抱えた感じからして結構重症だったからね……悪化する前にさっさと触手の治癒液で治療して上げましょ♪

私はタタタっと慧音の元まで走っていく。途中、慧音の横に倒れてる『鬼』が起きてこないか若干不安だったが、私の闘気を喰らってそんな直ぐに起きてこれるほどこいつらは強くないか、と自己完結し、慧音の元へとやって来た。

「慧音……大丈夫？何処か痛む所はある？」

「体中が痛むな……弾幕が直撃したり……蹴られたりしたしな……それよりも……零奈お前……あんなに強かったのか…？いや、それもだけど……妖怪の頭を簡単に吹き飛ばす……あの力は……一体…？」

…やっぱりそれを聞くか……そうよね、あんなの見せられたらまず聞くよね。てか、逆に私に怯える様子を見せないって事がちょっと意外だったわ。

…近い内に私の事を話しておくべきだよね？これから付き合っていくからには……この体の事も……私の触手についてもね……

でも今はまだ、それは早いと思う。私は幻想郷に来てまだ四日しか経っていない……それなのに話すのはさっきも言ったが時期尚早

だろう。

話すのは……まだ一部だけで良いだろう。

私はふぅ、と息を吐き、座り込み、慧音の肩に手を置いてゆっくりと口を開く。

「…私ね……人と体の構造がちょっとだけ違うのよ。人より力が付き易いって言うか……何処となく人間離れしてるのよね。私」
「そうなのか…？妖怪とか……そういうのでは無いのか…？」
「違う違う。私はレッキとした人間。妖怪とか魔法使いとか――――況してや神何かじゃない。それは最初に会った時にも解ってたでしょ？」
「…確かに……お前からは妖気とか……そういったものは見られなかった……けど…！」
「慧音。その事はまた後で話すわ。それより今は貴女の傷を治療しないと」
「どうやってだ…？お前にそんな力は…」
「確かに私には無いわ。だけど私には――――この子達が居る」

私はそう言って背中から触手を出す。

「な……しょ、触手！？お、お前……人間なんじゃ……」
「えぇ人間よ。言ったでしょ？人とは体の構造がちょっと違うって」
「…これは違うって具合じゃ……済まないような…」
「まぁそうよね……もっともな意見よ。私もそう思うわ。それより慧音、じっとしててね」
「へ？なんd」

慧音が疑問を投げ掛ける前に触手の口から出された治癒液が慧音に降りかかる。
突然液体がかかった慧音は当然の如く驚き、のた打ち回っている。
そして、液をかけ終わり、ゼェーゼェーと肩で荒く呼吸をする慧音。
そして私の方に振り返り、大声で私に猛講義をする。

「れ、零奈！いきなり何をするんだ！！お前と言う奴は…！」
「あはは♪説教を垂れれる位に元気になったわね♪良かった良かった♪」
「話を逸らすな……え……体が痛くない…？それに擦り傷や切り傷も無い…？
零奈……これは一体…？」
「これは触手の治癒液って言うのの効果なんだけどね……っと、説明してる暇は無さそうね……」

私はスッと立ち上がり、人里の方を睨む。
そこには人里に攻め入ろうとしている『鬼』やそれ以外の妖怪の姿があった。

「な！？あいつら性懲りも無く…！」

慧音は霊弾を手に作り、それを妖怪の軍勢に投げつけようとする。
だがそれをすれば、周りの民家に当たってしまう。それは避けないと…！

「慧音駄目よ！今霊弾を投げたら民家に当たる！！」
「ッ！　クッ！どうすれば…！」

慧音は拳を握り、ギリギリと歯を食い縛る。

確かにこの状況は不味いだろう。弾幕は民家への被害を考えて断念。今から走って行っても間に合わない。普通ならこれは絶望的状況だろう……

まぁ『普通』ならそうでしょうね。でも私は『普通』じゃないから、これ位は想定の範囲内だ。

あれらを排除する為に……既に手筈は整っている。

だから安心して走っていける。

「慧音！行くわよ！！」

「しかし今からでは間に合わないぞ！？」

「安心して！あそこには私の可愛い子達が居るからね♪」

「は？それって一体どういう…」

慧音がキョトンとした顔をしている間に、妖怪達は人里の仲に侵入しようとする。

しかしそこで……地面から出現した巨大な触手の群れが妖怪達をどんどん喰らっていく。

突如出現した触手に妖怪達は驚き、慌てふためき、その隙に触手は妖怪達をガブガブ喰らう。

頭から、腹から、腕から、足から……喰らい方は様々だ。

偶に四肢を引き裂いてから腕と足を野菜スティックでも食べるかのように食す触手も居れば、体の中に侵入して腸（はらわた）を喰らってから体外に飛び出すエイリアンみたいな事をする触手もいた。

そんな様子を見て、慧音は唖然としていた。

まぁ初めて触手の捕食風景を見たらこんな感じになるよね。大体は吐くけど。

…さて……これで人里の守りは問題ないから…

「慧音！早く行くわよ！ほらほらボサッとしない！」

「あ、あぁ…」

触手の捕食風景に釘付けな慧音を引っ張り、私達は人里へと急いで向かう。幾ら触手があるとは言え、全てを防ぎきれる訳じゃない。空とかから攻められたら、対処がかなり辛い事になる。触手の中には弾幕を放てる子は居るが、人里でドンパチやるのはなるべく避けたい。周りの事もあるしね。

私達は五分も掛からないうちに人里へと到着した。中に妖怪が侵入した形跡無し。触手はちゃんと仕事をこなしてくれたようね……偉い偉い♪

「…なぁ…零奈…？」

「ん？どうかした慧音？」

「…この触手って……お前の体の中に入ってたのか…？」

「？　えぇそうだけど？」

「…明らかにおかしいだろ！？どうやったらこんな大きなモノが体の中に入るんだ！！」

「あら慧音ったら……大きいモノとか、中に入るとか、エロい思考してるのねぇ♪」

「何でそうなる！？そうじゃなくてだなぁ！！」

慧音がワーワーと騒いでいるが、そんな事をしてる状況じゃないのよねぇ……

だって……ほら

「慧音。頭上注意」
「…は？な　ｎ　うお！？」

空から降り注いだ弾幕は私と慧音に向かって飛んできた。
私と慧音は瞬時に避け、弾幕が飛んで来た空を睨む。

そこには……まぁ言わずもがな妖怪達が居たんだけどね。

「あれだけやられたのに……まだ居るのか！？」
「雑魚は幾らでも居るって事でしょ。いやいやかなり大変だわ…」
「確かに大変だが……それよりも人里の者達を逃がさなければ！戦うにしても彼らを巻き込む訳には行かないぞ！！」
「えぇ……それはそうなんだけど……」

何処か……可笑しい。

どうにも……静か過ぎる。

私は思考中に誰かがこちらに歩いてくる音を耳にする。
それは私達の後ろから、そして音を聞く際にクンと嗅いだ匂いは私の鼻には新しい……最近覚えた匂いだった。

「二人とも無事！？怪我とかしてないよね！？」

そう言って私達を心配するモンペを穿いた白髪の少女……

そう妹紅だ。

「大丈夫よ♪ほら。この通りピンピンしてるわ♪それより妹紅。人

里の人達は？」
「私が逃がしておいたわ。出来るだけ安全な所に逃がしたから安心して」
「そう……それは良かったわ♪」
これで心おきなく暴れられる訳ね♪ふふふ♪楽しくなってきたわ♪
「…て！零奈！！その血は何！？何があったの！？」
え？血？…あぁ……そういえばまだ着替えてなかったわ……早い所着替えないと…
「いやね。ちょっと妖怪達を殴り飛ばしてきただけよ♪」
「は、はぁ？殴り飛ばしたぁ？れ、零奈……それ……本当？」
「本当本当♪ねぇ？慧音♪」
「あぁ。私のこの目で見させて貰ったよ……いやはやとんでもない奴だよ……こいつは…」
「…そうなの……て、話してる場合じゃないわ！大変なのよ今！見た？あのおっきな触手と妖怪達が殺しあってる所！あの触手は私達に敵意が無いみたいだけど……何をするか解ったもんじゃないわ！早い所退治しないと…」
「あ、妹紅。触手は心配しなくても良いわよ」
「何で？もしかしたら脅威になるかもしれないじゃない！放置しておくのは…」
「大丈夫よ♪だってその触手――――私のだもの♪」
「…へ？」
妹紅は私の発言に口を開けてポカンとする。
何か同じ反応ばかりだなぁ……もうちょっと新鮮な反応が欲しいわぁ…

…って、話してる場合じゃないって！攻めて来てるんだって！倒さないと不味いって！
という訳でさっさと終わらせる！

私はスパッツのポケットから一枚のスペルカードを取り出す。慧音や妹紅には内緒で作った物だ。

「慧音！妹紅！ちょっと離れててね！！」

私はそう言ってスペルカードを発動する

「光線『大口径フィーラーレーザー』！！」

私がスペカ（スペルカードって言うよりこっちの方がしっくりきた）を発動すると、私の背中から巨大な触手が五本出現し、その巨大な口から極太のレーザーが発射される。それは大量の妖怪達を巻き込み、面白いように落ちて行く。逃げようとする妖怪も偶にいたけど、このレーザー、触手の向きを変えれば追尾も可能なのよね～いやいや楽しい楽しい♪

「…れ、零奈……す、すっごく楽しそうね…」
「まぁね♪それより妹紅。これから私は逃げた敵のリーダー格を捕まえに行くから、慧音と二人で人里の警護を宜しくね♪あ、触手は置いていくから♪」
「え、ちょちょちょ！勝手に話を進めないｄ」
「あ、妹紅。上」
「え？上……！」

上空から触手のレーザーを回避した妖怪が私達に襲い掛かってくる。
それを落すために、妹紅はスペカを取り出し、発動する。

不死「火の鳥　-鳳翼天翔-」

妹紅の手から炎で作られた鳥が妖怪達の元に向かって飛んでいく。
それは見事に妖怪達に直撃し、どんどん落していく。

そしてその間に……私は人里の外へと走っていく。

「あ！ちょ！零奈！！！」
「ごめんねー！後は任せたわよー！」
「ちょ、ま」

待てー！と、言う妹紅の声を他所に、私は逃げた『鬼』のリーダーを追いかけていった…

―――――――――――――――――――――

「…到着っと」

私は全速力（と言いながら、途中で触手のジェットで飛んでいたが）で逃げた『鬼』のリーダーを追って、怪しげな森へとやって来た。確か『魔法の森』とか言う所だった筈だ。こんな所に逃げ込んだの？茸の毒とか胞子とか色んな危険要素が存在するこの森に？
…嫌な所に逃げ込んだものねぇ……此処って結構広いし、暗いし、色々と居るから結構大変なのよ？私には触手が居るから問題ないと

は言え、それでも毒とかそういう危険要素に遭遇した時はかなり辛いのよ?

…まぁ……触手の害的干渉除去能力が働くから別に大丈夫なんだけどね♪

…あれ?言ってる事が矛盾してる…?てかチグハグ?

…まぁ良いか♪

さて……森の中に突撃する前に……真っ赤に汚れたタンクトップを脱いで……新しいのを触手から取り出して……序でに体も洗い流して……そして乾かして……良し!準備オッケー!

「さて……行きますか!」

私は地を思いっきり蹴り、森の中を走り出す。一体何処に行ったのかな?結構奥まで行っちゃったかな?それなりに時間は経ってるしね。

まさか入り口付近に居る筈無いよね~♪あはは~♪

ガサッ

…今、何か音しなかった?具体的に言うと……草叢が揺れた様な

音だったような……

…まさか

私は走るのを止め、音の鳴った方へと行って見る。

するとそこには……

「あ」

「え……あ゛」

『鬼』のリーダーが居ました。まさか本当に居るとは……

…まさかこんなに簡単に見つかるとは思ってなかったけど……けどこれってチャンスよね？襲うチャンスよね？そうよね？

…という訳で

「み～つけたぁぁぁあああああ！！！」

「いやぁぁぁあああああ！！！」

一目散に逃げ出すリーダー。それを追う私。

羽を目一杯羽ばたかせて奥へと逃げる彼女を、私は気を殴り倒しながら追いかける。

途中、木に爪痕の様な大きな傷があったけど……まぁそんな事はどうでも良いわよね！そんな事より目の前の女の子よ！早く捕まえて私好みに調教してあげないとね！

「あはは～待て待て～♪」

「いやあああああ！！誰か助けてえええええええ！！！」

悲鳴を上げながら逃げ惑う彼女を追いかけて、追いかけて、追いかけて……

気が付いたら、洞窟みたいな所に来ちゃいました。こんな所があったのねぇ～……知らなかったわぁ～♪

さて……彼女は今、洞窟の入り口付近の壁にもたれ掛ってるのだけれど……どうにも様子が可笑しい。追いかけてた時と同じ、切羽詰った顔の筈なんだけど……どうにも雰囲気が今までとは違うのよねぇ…

…罠かな。

彼女を囮にして私を此処に誘い出し、一気に潰してしまおうとか考えてるのだろう。現に大量の妖気を感じるしね。

…良く良く考えてみたら、あんな入り口付近に隠れてる事事態おかしかったのよ。だってそうでしょ？本当に私から逃げてたのならば、もっと奥深くの通常じゃ解らない所に隠れる筈だしね。

…んー……どうしたものかしら？このまま接近したら、きっと隠れてる妖怪達が襲い掛かってくるだろうし……序でに言うと……今気付いた、彼女の周りに張られた設置式の特殊な結界があるし……更に言えば洞窟の方から周りの妖気とは比べ物にならない禍々しい気を感じるし……

…貴方達……一人に対してどれだけ準備してるのよ……かなり無

駄でしょうに……そんな事に時間を掛ける位なら、私とヤってた方が断然有意義じゃないの。あれかしら？皆頭が弱いのかしら？アホの子も良いわよね、ヤりがいがあって♪

あ、話がズレた。まぁ兎も角、これが罠だって事は解ったわ。かなり解りやすくて簡単に打ち破れる罠だって事がね。

…良し。罠も確認出来た事だし、行くとしますか♪

私は壁にもたれ掛っている彼女に向かってスタスタと近付いていく。

そして私が彼女からおよそ半径十メートルの位置まで近付いた途端、彼女は口元を吊り上げニヤリと笑い、私に向かって叫ぶ。

「此処までご苦労様！短い間だったけど楽しかったわ！でももう終わりよ！私達の勝ちよ！！」

…言葉おかしくない？何か取り敢えず思いついた言葉を叫んでるようにしか思えないんだけど……

…やっぱこの娘……アホの子だ……

私が軽く呆れている間に、周辺から大量の妖怪が出現し、私に向かって大量の弾幕を放ってくる。

見た所、隙間という隙間が全て埋まっており、完全に逃げ場が無い。これは避ける事は出来ないだろう……

…何て思うのは大間違いよ！！

「……！」

私は闘気を３０％程解放し、周囲に拡散させ、飛んで来た弾幕に当てる。

すると、私に飛んで来た筈の弾幕が一気に消滅し、序でに彼女を覆っていた結界も消滅する。

「んなッ！？う、嘘でしょ！？弾幕も……結界も消えたなんて…！」

…どうやら、消されるとは思ってなかったらしく、かなり焦っている様だ。貴方達……私を嘗めすぎでしょ……あれ位の弾幕と結界で私を打ち破れると思ったら大間違いなのよ！

そんな嘗めまくりの彼女には、ちょっとハードな快楽を与えて上げるわ♪

それも一度体感したら、二度と忘れられなくなるような奴をね♪

私は背中から、人一人は軽く飲み込める大きさをした触手を出す。

それを彼女に向かって放つ。

そして…

「へ？な、なn」

グポォ

触手は彼女を飲み込んだ。
触手の中では彼女が助けを求める声が聞こえるが、それは私にしか聞こえず、他の妖怪達には聞こえない。何故ならこの触手の中では全ての音が吸収され、私にしか聞こえなくなるのだ。故に外からじゃ何も聞こえない。助けを求めた所で無駄っていう事なのよ♪

…ふふ♪これで彼女も私のハーレムに入れることが出来るわ♪とてもとてもエロスの溢れるハーレムにね♪ふふふ♪また一歩夢に近付いたわ♪

私が満足げに微笑んでいると、数対の妖怪が私に向かって攻撃してくる。
私はそれを軽々と回避し、ブン！と回し蹴りを放ち、吹き飛ばす。吹き飛ばされた妖怪達は他の妖怪を巻き込み死亡する。
見た所、どうやらかなりの数が居る様ね……と言っても、さっきの『鬼』の軍団よりも少ないけどね～今此処に居るのは大体あれらの半分位だろうしね♪

それじゃあ一丁……やっちゃいますか！

私は妖怪達に向かって走り、闘気を込めた拳を放つ。それによって放たれた衝撃は妖怪達を吹き飛ばし壁に叩きつける。グシャアと潰れ、周囲に大量の血が拡散する。私はその血を手で掬い、手刀を作り、ブン！と振る。すると、血は綺麗な三日月状になって妖怪達に向かって飛んでいく。それに当たった妖怪達は真っ二つになり、死ぬ。

…あぁ脆い。こんなに脆かったら面白くも無い。もっとやり応え

のあるのは居ないのかな？このまま続けるのはあまりにもつまらなすぎるんだけど…

そんな事を考えている時も、妖怪達の攻撃は止まらない。大量の攻撃が私に迫るがそんな事は関係ない。私はそれらを全て避け、拳を繰り出し潰す。が、正直このままこんなつまらない戦いをしてても、正直意味が無い。だから早く帰りたいな……

…ん…？何か『匂い』がするわね……これは……男かしら？それも筋肉質な……そして他に……女が一人……そして女の子が一人…女の方は格闘家固有の『匂い』が……女の子の方からは……無機質な物の『匂い』？何かしらこれ……むぅ……解らない……何だろう…？

…位置は……そこの茂みか……上手い具合に隠れてるわね……ふぅん……男と女……特に男の方はかなりの手練のようね……纏わり付いてる血の匂いや発せられている強力な気……間違いなく強敵…

…それも私以上の…

…戦ってみたい。

もし本当に私以上なのだと言うのなら……戦ってみたい！！

そして快感を味わいたい！強者と戦ってる時のみ感じる……あの快感を味わいたい！！

そうよ！こんな雑魚を相手にしてる時なんかよりも素晴らしいあの快感を味わいたい！！その快感で狂いながら悦びたい！！

私を……感じさせてッ！！狂う位感じさせてッ！！もう何も考えられなくなる程感じさせてッ！！

「グオオオオオ！！」

！　洞窟から新手！？

そんな事はどうでも良いのですわ！私はあの方と戦いたいのですの！！

だから！！私の邪魔を……するなあああああああああああ！！！

私触手を大量に出し、出てきた妖怪達を持ち上げ、貫き、引き裂き、叩き潰し、内部から腸をぶちまけ、原型も残さない。私の飽くなき戦いへの欲求を邪魔する方々は！全て！皆殺しにしますわ！！

そうこうしている内に、触手と私の拳法により、妖怪達は全て死亡した。

これで終わり……って訳じゃ無さそうね……

私は洞窟から出てきた巨大な化け物と対峙する。見た所、神話に出てくるキマイラって言うのに似ている気がするけど……本物じゃないわよね？まさかこんな所にそんなモノが居る筈もないし……まぁ何でも良いわ。例え何であろうと……私の邪魔をするっていうのであらば……

徹底的に叩きのめすのみ！！！

私は一気にキマイラもどきに接近し、拳の乱打を放つ。目にも止まらぬスピードで殴り、殴り、殴り、兎に角殴り、空中に打ち上げ更に殴る。

どうやら一ｔ位あるみたいだけど……その程度の重さが何だ！！

私は大型タンカー五十隻であろうと関係なく持ち上げられるのよ！！

そしてぇ！！

「ハァァアアアアアアア！！！」

更なる追撃を加え、キマイラもどきは倒れる。そこにすかさず触手の光線を叩き込む。これで死んだ・・…って訳でも無いの……辛うじて生きてるし……うわ！炎吐いてきた！…けど触手で吸い取ったから何も問題なし！

さて……往生際の悪い子は……即！潰す！！

私はキマイラもどきの体を拳で貫く。するとキマイラもどきは叫び声を上げながら倒れ、沈黙した。どうやら死んだようだ。やっとね…

さてと……さっさとあそこに居る人達を引き摺り出さないと……私は直ぐ離れようと思ったが……突然キマイラもどきが光りだしたから、そうも行かなくなった。

私はキマイラもどきをじっと観察してみる。どうやら中で何かが光っているようだけど……なんだろ？

私はキマイラもどきの仲に手を突っ込んで、グチャグチャ音を立てながら中を探る。

すると、かなり禍々しい気を持った石が出てきた。何でこんな物が…？

私が石に疑問を感じていると、突然石の光が強くなって、しかも負の気まで出し始めた！このままじゃ不味いわ！

私は咄嗟に石をグッと握り、潰す。何か潰さない方が良かったかな？とか思いつつも、もうバラバラにしちゃったから関係ないかぁ。

とか軽い気持ちになる。

まぁ実際問題無かったんだけどね。気は消滅したし。

さてと……これで全ての問題は解決したわね……それじゃあ…逃げようとしてるあそこの人達をこっちに来させましょうか♪

「美鈴、小傘、撤退するぞ」

「え…何でですか！」

「これ以上此処に残る必要は無いからだ――後はあの女が始末してくれる」

「い、いいんですか？お嬢様への土産話が……」

「それは他でも何とかなる――此処に首謀者が居るという訳では無いのに、討っても仕方有るまい」

「…確かに……此処にはこんな事が出来る奴は居ないでしょうね。そこまで強い気を感じられません」

「そうだろう？――だったら直ぐに移動だ。呆けていたら見つかってしま…」

「残念。もう見つかってるのよね～♪」

さぁ触手！彼らを捕らえなさい！！

私は触手を地面から出現させ、隠れていた三人に対して攻撃を仕掛ける。

だがそれは回避され、彼らは私の前に姿を現す。

一人は『匂い』での予想通り筋肉質な男。背中には巨大な剣を背

負っており、かなりの高身長だ。
女の方はチャイナ服を着ており、かなりの胸を持っている。揉みしだきたい。
そして女の子は一風変わった傘を持っており、オッドアイで比較的慎ましい胸だ。揉みしだきたい。
…まぁ胸は後で良いわ。それよりも……こいつと戦いたいわ。
私は擬似的に怒りを込め、三人に問いかける。
「手伝いもせずに高みの見物とは良い度胸してるじゃない」
三人はそれに対して何も答えず、黙っている。
「あら？だんまり？益々良い度胸ね。――もしかして貴方がこの異変の首謀者かしら？」
私は試しに軽く煽ってみるが、それでも反応を示さない。
「…黙ってないで何か言ったらどう」
私は闘気を込めて威圧をかける。
それを受け、女は苦しい顔をし、女の子は怯えて男の後ろに隠れる。
そして男は――涼しい顔をして立っていた。こいつ……かなり出来る…！
「…あら？私の威圧に耐えられるなんて、なかなかやるじゃない――益々何者よ」

私は静かに、それで居て落ち着いて質問する。
そして、どうやらそろそろ黙り続けるのは無理だと判断したのか、三人の内の男が口を開く。

「…少なくとも」
「ん…？」
「少なくとも己はこの事件の首謀者ではない」
「…じゃあ何者？」
「…己は……この異変を解決しようしている者だ」

…解決ねぇ……確かさっきお嬢様への土産がどうとか言ってたな。その為かな？

まぁ私にとってはどうでも良い事なんだけど。

「…それは信じても良いのかしら？」

取り敢えず適当な事を言っとく。正直さっさと戦いたいんだけどなぁ…

「信じるかどうかは勝手にしろ――それよりも聞きたい事が有る」
「何？」
「…何故己達の事が解った？」
「あぁそれ？…簡単な事よ」

私は右の人差し指を突き出す。

「匂いと声――そして第六感を働かせる事で、簡単に見つけられたわ」

そう言い、自分の鼻、耳、頭と指を当てていく。
山で籠もって修行してた私にはこれ位余裕よ♪

さて……そろそろ私も痺れを切らしそう……てか切らすから、さっさと戦りましょうか♪

「…さてと。疑問は解消した様だし……首謀者かどうか…吐いて貰うわよ」
「…己達は首謀者では無いぞ……」
「えぇそうね――でも嘘かもしれないでしょ？だからこそ、殴ってでも吐かせるの…ほんとの事をね♪」
「…どうやら戦るしかないようだな」

男がそう言うと、背中から剣を抜き出し、構える。それと同時に男の影が発現し、一気に周囲を取り囲む。

「！　これは……！」

何て巨大な力なの…！

これは……ゾクゾクしてきたわ！

「…長引かせるわけには行かないのでな……早急に片を付けさせて貰うぞ…！」

男は影と共に一気に斬り込んで来る。
私はそれを迎撃しようとしたが――突如飛来した炎によりそれは中断させられた。

「零奈！」

ん?今の声は…

私は声のした方をフっと見ると、そこには妹紅が居た。

「あら?妹紅じゃない。――今取り込んでるの…用なら後で……」

「そんな事言ってる場合じゃない!――人里への攻撃が激しくなったのよ!私や慧音だけじゃ護りきれないわ!」

…こんな時に…!

「…触手は!?」

「触手はまだ持ってるけど…それ以上の数で押し寄せられてるの!このままじゃ……!」

「・・・ッ!」

…これは……不味いかもね……私が戻らないと確実に人里はやられる。でも……私はこいつとの戦闘が…!

「行け」

「!?　何を…!」

「此処は己達が引き受けよう――だからさっさと行け」

…確かに行かないとならない……でも…!

私は戦いたい!貴方と戦いたい!戦いたいの!

「…貴方を信用してなんか「黙れ」な…」

…凄い真剣な表情……で良いのかな?何か表情がほぼ無いに等しいから何とも言えないけど……でも、真剣に人里の事を心配してく

れてるのは解る。私の第六感がそう囁いてるわ。

…解ったわ。私は人里に向かうとしましょう。

「…言っておくけど……私は貴方を信用してないから」

別にこれは言う必要が無かったんだけど、何かそんな流れにしてしまったからこうせざるを得なくなった。色々と後悔…

「…解っている」

男は相変わらずの無表情で返事をする。何か感情が無いみたいで何か変な奴ね…

…まぁそれは良いか。それより今は早く行かないと…

私は触手を背中から大量に出し、触手ジェットを使用し、妹紅と共に飛ぶ。

目指すは人里。早く行かないと…！

私と妹紅は人里に向かって飛び立った…

――――――――――――――――――――

私と妹紅は現在霧の湖の上空に居る。霧のせいで若干行動し辛く、足を捕られてしまっている。

あーもう！こんな所で立ち往生してる場合じゃないのに！早く行かないと慧音や人里が…！

私に徐々にイライラが募り始めていた――――その時、

周囲に強い光が発せられ、私と妹紅の視界を遮る。
私は敵の攻撃か!?と、疑い構えたが、それは直ぐに消え去り、視界も元に戻る。
一体何だったんだろうか?私はそんな疑問を募らせたが、それより早く慧音の所に行かないと!と、思い立ち、直ぐに飛行を再開する。

そして数分後……人里に到着……

…したんだけど……

「貴様等よくもやってくれたな!!私がハクタク化出来るようになったからには徹底的に叩きのめしてやるからな!!喰らえ!転世『一条戻り橋』!!」

慧音はスペカを高らかと掲げ、大量の弾幕を放つ。攻めていた妖怪はそれによってどんどん倒されていく。中には逃げ出すのも居た位だ。

…てか慧音がハクタク化してるって事は……

私は空を見上げてみる。するとそこには無くなった筈の丸い月があったのだ。

…何時の間に……一体どうして……あ。
私はついさっきの強い光の存在を思い出し、何となくそれが原因か、と理解する。

あの光がこの異変を解決する事になるなんてねぇ……誰だか知らないけど、首謀者を倒してくれたのかな？そうだと言うのなら感謝しないとね。

私は心の中で見知らぬ誰かに感謝し、妹紅と共に慧音を援護しに向かった…

――――――――――――――――

「零奈。今日は……有難う。本当に助かったよ」
「何言ってるの慧音♪困った時はお互い様よ♪」

私と慧音は今、私の部屋に居る。何で慧音が私の部屋に居るかと言えば、慧音が私にお礼を言う為に来たからだ。
因みに、今はハクタク化のままだったり。

あの後、私と妹紅、そしてハクタク化した慧音の攻撃により妖怪達は撤退。被害はあったものの、最小限に済ませられたのは良かったと思う。
妖怪達が撤退した後、妹紅は人里の人達を何処からか連れてきて、各々の家に帰して、そのまま竹林に帰っていった。

「しっかし今日は大変だったわぁ。かなり戦ったしね♪」
「あぁ……里の者達に被害が及ばなくて良かったよ…」
「本当にね♪あ、そうだ慧音」
「ん？何だ？」

…今回の異変の時のあの慧音の反応……自惚れかもしれないけど、もしかしたら…

「慧音って……実は私の事……好き？」

「ブフゥ！？なななななな何を言い出すんだいきなり！！わわわわわ私は！そ、その！えっと……あの……」

慧音は徐々に声を小さくしていって、途中からは完全にボソボソ声になっていた。

これは……黒ね！完全に私に惚れてるわ！だったら！だったらヤるしかない！！

「…慧音」

「え……な、何だ？」

「…私も慧音が好きよ。こうやって……抱きしめる程に」

私はそう言って慧音を抱き寄せる。

「れ、零奈…」

「ふふふ♪顔を赤らめちゃって可愛い♪」

「べ、別に赤らめてなど…」

…ヤバ……本当に可愛い……

あ、もう駄目。理性吹き飛ぶ。

「…慧音！」
「へ！？な、なん……んむ！？」
私は慧音の唇に自分の唇を重ね、下を入れる。
「んむ……れろ……んちゅ…」
理性とかそんな物を投げ捨てた私は慧音の口の中を丁寧に犯し尽くしていく。
慧音は最初は驚いて、何も出来なかったが、状況が理解出来ると、慧音は私の舌に自分の舌を絡ませてくる。
その時は一瞬の様な出来事だったけど、二人の愛を確かめるには充分だった。
「んちゅ……んはぁ……零奈…」
「慧音……ねぇ……しても……良い…？」
「…うん……零奈なら……良い……よ…」
慧音は頬を赤らめ、上目遣いで私を見つめてくる。
私は、そっと慧音を布団に横たわらせ、その上に覆い被さる。
そして私と慧音は、また……キスをした…
この異変は、結局何をしたかったのか。何が目的であったのかは解らない。正直興味も無いんだけど。ただ、どうして『鬼』がこの

幻想郷に居たのか。それだけは気になる。
彼らを幻想入りさせたのは誰なのか？『鬼』のリーダーに力を与えたのは誰なのか？何故彼らを選んだのか？疑問は徐々に募っていく。

まぁ今は考えなくても良いわよね。

それよりも、

慧音との長い夜を堪能しないとね♪

事件回想？後：ｓｉｄｅ　零奈（後書き）

はい。どうも作者です。
何だろうね。どうしてこんな長くなっちゃったんだろうね。
もうワケがわからないよ…

・零奈の奥義

作中で出た「周囲を蹴り飛ばす」「とてつもない速さで、手刀で斬り裂く」「闘気を当てる」には名前があります。
順に「円陣連舞脚」「瞬迅斬手刀」「闘気遠当て」
最初二つはオリジナル。「闘気遠当て」はパタリロ西遊記で出てきた「合気遠当て」が元ネタです

・『鬼』のリーダー
名前は後々発表されます。
ちなみに、彼女の「錯覚させる程度の能力」は理解すれば強いです。
ただし、彼女はアホの子だったので、完全に理解は出来ませんでした。

こんな所かな？解らない所があれば、随時質問を受け付けております故。

さて次回はトシキの事件回想編です……が
連続投稿なるものをやってみたいので、二週間程投稿されない予定

です。

気長に待っていただけると幸いです。

それではまた次回お会いしましょう。

事件回想？前：ｓｉｄｅ　トシキ（前書き）

遅れましたが、取り敢えず連投していきたいと思います

ただし、そんなに溜まってなかったり。

これ含めて３話しか溜まってないんよ…

意外と文字数多くて書き溜め切れなかった…ｏｒｚ

事件回想？前：ｓｉｄｅ　トシキ

満月の日の夜は周囲がとても明るく、歩いていてもあまり不便じゃない。ついでに言えば、火とか焚かなくて良いから進軍する際にかなり楽になるんだよ。松明持って歩くといざ戦いになった時に大変なんだよな……片手塞がってるようなモンだからかなり不便なんだよ。

まぁ、戦いとか抜きにして考えてみても、満月ってのは結構良いモンだと思う。良くは分かんねーけど……何か見てたら妙に落ち着いてくるんだよな……アレか？『ふうりゅう』ってのを感じてるのかな？それで落ち着くのか？

まぁ良く分かんねーんだけどさ。

そんな『ふうりゅう』な満月の下、俺は筋トレに励んでいた。ちなみに今はスクワット中。

「４８８７！４８８８！４８８９！４８９０！」

幻想郷（ここ）に来る前からやってた五千回・４セットを全筋トレ行う。オレは意外と筋肉が付きにくい体質なのかは知らねーけど、目に見えて筋肉質にならない。むしろ見た目スマートな程だ。

サボらないで毎日やっている筈なんだけど……どうもやればやるほど引き締まって来るんだよな。何でムキムキにならねーんだ…

あ、でも別にそうなりたいってワケじゃあねーんだ。ただ何となくどうしてだろうなーって思っただけ。

「４９９７！４９９８！４９９９！５０００！！」

うし。終わり！オレはふぅ、と息を吐き、グッと背伸びをする。いっつも筋トレが終わった後はこうやって気を抜いているが、この終わった後の達成感がたまんねーな。心身共に清々しくなるぜ。

オレは縁側に座り、水筒の中の水を飲む。汗を大量にかいた後の水はうめぇな！喉を通っていく冷たい感触がたまんねーぜ！

ゴクゴクと、水筒の中の水を全て飲み干し、オレは縁側にゴロンと横たわる。筋トレの後はこうする事で簡単に取れる。ずっとやってた事だ。

…それにしても……オレが幻想郷（ここ）に来て、もう二週間か……何だか早ぇなぁ……あの時早苗や諏訪子様や神奈子様に救われてから……もう二週間か……

守矢（ここ）神社の人達に助けられ、オレはその恩に報いようとやれるだけの事を頑張ろうとしている。なるべく守矢神社の人達が笑っていられるように、オレは頼まれた事や出来る事は全てこなしてきた。境内の掃除や布教、買い物や荷物運びなどなど、オレは兎に角守矢神社の人達が少しでも笑ってくれて、少しでも楽してくれれば良いと思い、ただひたすら頑張り続けた。

まだまだ返しきれてない……てか、一生返しきれないと思うが……オレはずっと返し続けようと思う。守矢神社の人達の笑顔の為にも…

あ、何か変にしんみりしちまった。そんなつもりはなかったんだけどなぁ……一度真面目に考え出すと上手く切り替えられないんだよな……オレ……

…うーん……やっぱ切り替えが下手なのは結構マズいんだろうか

？色んな事に臨機応変に対応出来ないのと同じだし。臨機応変に対応出来ないってのはマズい……んだと思う……いや正直良く分かんねーけど。

……うーん……ダメだ……考えれば考えるほど頭が痛くなってくる。オレに考え事はやっぱ向いてないらしい。現に今も答えが出ないで頭痛くしてるし……いやでも何も考えないのは流石にな……いや、でも…

「おやおや……そんな難しい顔をして考え事？」

そう言って、オレの顔をニヤニヤしながら覗き込んでくる変わった帽子を被った少女が居た。守屋神社の二柱の一人、洩矢諏訪子様だ。

「あー……いや、まぁ考え事っちゃあ考え事なんですけど……何ていうか……その…」

「ん～？な～に？もしかして……切り替えの下手さでも嘆いてた？」

「え！？な、何で分かったんですか！？」

オレがビックリしながら質問すると、諏訪子様はくすくす笑い、返してくる。

「それは私が神様だからだよ♪」

「え、ちょ！そ、それって本当なんですか！？」

「いや嘘」

「へ」

ちょっと待ってくれ。何か会話がおかしいぞ……今、諏訪子様は確かにオレの悩み……っていうか、考えてた事を見抜いたよな…？

なのに嘘って……どういう事だ？

「あはは♪困った顔しちゃって可愛い♪」

「可愛いって……こっちはマジで困ってるんですよ？それを可愛いって…」

「ははは♪ごめんごめん。何かトシキってからかい甲斐があるからさ」

からかい甲斐って……嬉しくねぇ…

「まぁ冗談はこれ位にして……何でトシキの考えてた事が解ったっていうとね――トシキがブツブツ喋ってたのを聞いてたからなんだよ」

「…え？喋ってましたか……オレ…？」

「うん。結構大きな声でね」

…マジかよ。思ってた事が全て筒抜けだったなんて……あ、ヤベ、すっげぇ恥かしい。

「まぁそういう訳だったんだけど……ってどうかしたの？頭抱え込んじゃって」

「…いや……何か恥かしくなってきただけです…」

いやマジで……恥かしくて仕方ないんだけど……あー……穴があったら入りたい……つーか何でそんなことにも気付かないんだよオレ……バカかよ…

「…あー……その……原因作った私が言うのもなんだけど……あまり落ち込まないでね？聞いてたのは私だけだし…」

「…すいません……以後気を付けます…」

「いや大丈夫だからね？そんな卑屈にならなくても良いからね？」
「…はい」

オレは大きく溜め息を吐いてうな垂れる。どうしてオレってヤツぁ……もう…

「あー！もう！何でそんなに落ち込むかなぁ……あ、そうだ。風呂にでも入って気分直ししたらどう？丁度全員上がったしさ」
「…そうします」

色々ともやもやした気分を抱えて、オレは風呂場へと向かった…

青年移動中…

良し到着っと。それじゃあ早速入るとするか。

オレはパパっと汗だくの下着と袴を脱いで、下着だけ洗濯カゴの中に入れる。あー……体中、汗でビショビショだぜ…

…そういえば……前から疑問に思ってたんだけど……この風呂ってどっから水を引いて、どうやって沸かしてんだ？裏に薪とか暖炉とかそんなモンもねーし……あれか？これも神の力なのか？
…だとしたらすげぇな……こんな事も出来ちまうなんてな……神ってすげぇ。

…うし、改めて神の凄さが分かった所で風呂に入るか。いい加減汗流したいしな。
オレは額から垂れてくる汗を拭き取りつつ、風呂場の扉に手をか

ける。
　…が、オレが開けるよりも先に風呂場の扉が勝手に開く。へー…
…自動で開いてくれるんだ……これも神の力か。マジですげぇな！
最初、扉が勝手に開いた時はそうとしか思わなかった。

だが次の瞬間、オレはそんな事をを考えた自分のお気楽思考を恨めしく思った。

「あ、神奈子様。髪留めならここ……に…」
「・・・」

…え？ちょっと待ってくれ。何で早苗が風呂場から出てくんだよ？あれ？確か諏訪子様はもう全員上がったって言ってなかったっけ？あれ？あれ？
…あ、そうか！改めて入り直したんだよな！そうだよな！まさか諏訪子様がオレを騙すなんて事する筈がないもんな！そうだ！そうに違いない！おいおい早苗！居るなら居るって言ってくれよ！心臓に悪いじゃねーか！ははは！ははははは！

「…あの……トシキさん？」
「！？　な！なななななな何だ早苗！？あ！そうか！ここに居たらダメだよなオレ！悪い！今すぐ出るから！」
「あ……いや、それは良いんですけど……あの……トシキさん…―
――私の裸を見ても大丈夫なんですか？」

…え？裸？
…あ、そうか。ここって風呂場だもんな。そりゃあ裸だよ……な
……

…え？

「おーい早苗ー？私の髪留め知らn「ゴブハァ！」…は？一体何だい……て！トシキぃぃぃいいいいいい！！！」

「きゃあああああ！！トシキさあああああん！！！」

二人の悲鳴と共にオレの視界が真っ赤に染まる。

あれ？何だコレ？何で視界が赤いんだ？何でオレは倒れてるんだ？何で二人は悲鳴を上げてるんだ？分かんねー……マジで分かんねー……

…あ、何か視界が眩んできた……あ、ヤベ……い……しき……が…

「…あー……死ぬかと思った」
「死ぬかと思った……ていうか本当に死に掛けてたけどな。良く無事だったよな……お前…」
「これも三人のお陰ですよ！ありがとうございました！」
「はっはっは。今度は気をつけなよ？」
「「お前（諏訪子様）が言うな（事じゃないです）！！」」
「あら酷い」

フフフと口を覆い隠してニヤニヤしている諏訪子様に、早苗と神奈子様の鉄拳制裁が下る。諏訪子様は痛い！と声を上げて悶えている。ついでに言うと、諏訪子様の帽子の目みたいな所に何か涙みたいなのが浮かんでいる。あの帽子って……本当にただの帽子なのか？まるで生き物だぞ…

オレはあの後、三人の神力を行使した治療により死なずに済んだ。
…いきなり死なずに済んだは分からないだろうけど、実際問題本気で死に掛けたんだよな……てか、あの真っ赤な視界ってどうやらオレの鼻血だったみたい。そりゃ早苗の裸見ちまったしなぁ……女性に対する免疫が低いオレにあんな綺麗な体は刺激的すぎるぜ……
…あ、考えたらまた鼻血出てきた。

「ていうか諏訪子様！トシキさんがどれだけ女性に弱いか分かって

てやったんですか!?何やってるんですか貴方は!!」
「いやこれはちょっとしたショック療法だよ。トシキに生の女性の裸を見せる事で免疫をつけて上げようかと…」
「トシキさんは純粋(ウブ)なんですからそんな簡単に治る訳がないでしょう!?何やってるんですか本当に!!」
「まぁまぁ落ち着きなって。後五・六回繰り返せば目を背ける程度には成長する筈だよ。だから早苗……もうちょっと見せてやってね♪」
「な!?なななな何でそうなるんですか!!お、お断りですよ!!」

早苗は顔を真っ赤にして必死に否定する。やっぱ裸を見られたのが恥かしかったんだな……何か申し訳ねぇ…

「おやおや……トシキの役に立ちたいとは思わないのかなぁ?」
「や、役に立ちたいとは思いますよ!そりゃあ!でも……これだけは駄目ですよ!!」
「あらら……そんなに拒否られると困るなぁ……主に早苗が」
「!?　何で私になるんですか!私は何も困りません!」
「それは本当かなぁ?」
「ほ、本当ですよ!第一見られなかったからって何に困るって言うんですか…」
「ん?聞きたい?」

諏訪子様はススス～っと早苗に近付き、早苗の耳元で何かを囁く。
すると早苗は突然顔を真っ赤にして、その場にへたりこむ。え?何?何言われたんだ?

「す、諏訪子様!!わ、私は決してそんな事は…」
「でも見られても恥かしがらなかったんでしょ?」

「う……それは……その……」

早苗は指をもじもじさせて、目を泳がせている。何か挙動がおかしくないか？早苗…？

「ふふふ～♪もう認めちゃったんだから、素直になっちゃいなよ！ほらほら！トシキを他の女に取られたくないんだろう？だったらもっと積極的に行かないとね！」

「せ、積極的って……で、でも…」

「諦めたらそこで試合終了だよ！私が後押しして上げるって言ったんだから頑張りなよ！」

「う～…」

早苗はトマトみたく真っ赤にした顔を両手で隠し、畳の上で身悶えしている。いやマジで早苗大丈夫か？

「はいはい取り敢えず諏訪子はいい加減にしな。早苗とトシキを困らせるんじゃないよ」

「えー。私は真面目に二人の将来を考えてただけなんだけどなぁ」

「アンタねぇ……まだトシキは此処に来て二週間しか経ってないんだよ？それなのにそんな話になるのは流石に早すぎだっての」

「むぅ……確かにそうかもしれないけど……早苗もあぁだしねぇ……それなら早い方が良いじゃん」

「早苗が良くてもトシキが駄目だろう？トシキはそういうのに疎いからな……今早苗にアタックさせても理解されない可能性が高いぞ？」

「あ、そうだった。う～ん……これは長期戦の予感がするなぁ…」

…長期戦？戦争でも起きんのか？てか早苗がオレにアタック…？弾幕ごっこでもすんのか？いやでも、そんな雰囲気じゃねぇしなぁ

……一体なんだよ？

「…取り敢えずこの話題は終了だ。本人の居る前で話すのも何か落ち着かないしね」

「そうだねぇ。んじゃあまた後でって事で……それと早苗ー？いい加減帰ってきなー」

「…は！わ、私は一体…」

「よーし戻ってきたね。まぁ取り敢えず服の乱れを直しな。またトシキが鼻血出すよ？」

「あ、あわわわわわ！す、すいません！」

早苗は慌てて服の乱れを直す（どうでも良いが、今はパジャマだったり）。直した後、早苗は未だ顔を赤らめており、時々何かを呟いている。早苗はホントどうしたんだよ……さっきから様子が変だぞ？

「ま、取り敢えず私は部屋に戻るから」

「は～い。んじゃあ私も戻るかな」

「…あ、はい。それでは」

神奈子様と諏訪子様は席を立ち、自分の部屋に戻っていった。

オレもそろそろ戻るかな～……んで寝るか。何か鼻血出しすぎたせいで、まだ何かクラってするしよ……ついでに言うと、未だに早苗の裸が頭から離れないんだよな……なるべく考えないようにはしてるけど……下手に想像すると……また鼻血が出る。

…取り敢えず……何も考えないようにさっさと部屋に行くか……

「オレも部屋に行くぜ早苗。また明日な」

「はい。また明日」

オレは席を立ち、襖に手をかける。
だがその時、オレの頭ん中に何かのイメージと意味の分からない言葉が過ぎる。

『消える』

その言葉が過ぎった時、オレは思わず何だ!?って声を上げちまう。正直恥かしいんだが……そんな事より、何が消えるのか?そっちの方が大事だった。

「どうしたのですか……トシキさん?」
「…いや……何かワケの分かんねー言葉やら何やらが頭ん中を過ぎって行ったんだよ…」
「言葉?一体なんです?」
「『消える』って言葉なんだけどな……何が消えるのか全然分かんねーんだよ」
「『消える』?うーん……何でしょう…?ちょっと解らないですn」

ドオオオオオン!

「!?　何だ!?何があったんだ!?」
「今のは……境内の方です!そこに何か居ます!」
「境内だな!分かった!オレが様子を見てくるから、早苗は今すぐ着替えて来い!その格好じゃいざって時動き辛いだろ!」
「解りました!気をつけて下さい、トシキさん!」
「おう!」

オレは自分の部屋からカットラスを速攻で回収し、境内へと走り……到着する。

そこでオレが見た光景……それは…

境内に弾幕によるものであろう穴がたくさん開いており、鳥居にはヒビが入り、空には大量の妖怪が居た。

何なんだこの状況……何なんだアイツら……何で守矢神社に攻撃してきやがったんだ!?

オレはカットラスを鞘から抜き、妖怪共に向かって叫ぶ。

「テメェら何の用だ!!何が目的だ!!」

しかし妖怪共はオレの問いには答えない。ただただじっとこっちを見ているだけだ。

あぁそうかい……そっちがその気だってんなら……テメェらに守矢神社をぶっ壊される前にテメェらをぶっ潰す!!

オレは地面を蹴って宙に向かって走り出す。オレには飛ぶ技術がねーから、『速度を操る程度の能力』を使用し、オレの落下速度を物凄く遅くし、空中に駆け出すスピードを超高速にする。それによってオレは空中で走る事ができ、空を飛べないっていうデメリットを克服することができるんだ。

妖怪共の目の前まで来たオレは、目にも止まらぬ速さで妖怪共を斬り裂く。オレから離れていた妖怪は弾幕でオレに攻撃してくるが、そんなトロい攻撃に当たるほどオレは遅くねぇ。弾幕を回避し、弾幕を放った妖怪に近付き、頭上からカットラスを振り下ろし真っ二つにする。

まだ残っていた他の妖怪共がオレに弾幕を撃ってくる。それらを回避し、オレは宙を大きく蹴り、一気に上昇する。そして一気に下

降し、妖怪共の間をカットラスを持った手を大きく広げ、一気に駆け抜ける。それはコンマ０．３秒の出来事。その一瞬の時間でオレは大体百近い妖怪を仕留めた。

…結構な数を速攻で仕留めたけど……まだまだ一杯いやがるぜ…

…何だってんだよマジで！何でこんな総力戦みてぇな数で守矢神社（ここ）を攻めてくんだよ！バカじゃねーのかアイツら！！

オレは一旦地上に降りて、妖怪共との距離を取る。アイツらは全然強くない雑魚だけど……流石に一遍に襲われたらかなり辛い事になる。やられる事こそねぇけど……それなりに傷を負う事は明らかだ。

…あれら全部を相手にするのはあまり良い気がしねぇ……こういう時は大抵リーダーを叩きゃあ大体何とかなるんだ。だからとっとアイツらのリーダーを仕留めてぇんだけど……

…妖怪共の中にはそれらしき力を持った奴はいなくて、あるのは同じ位の力を持った妖怪共の気配のみ。どこにいやがるんだ…？リーダーは…！

オレがカットラスを構え直して、目の前の妖怪共を睨んでいる所に、家の中から誰かが走ってきた。早苗か！

「トシキさん！大丈夫ですか！？」

「大丈夫だ！まだ傷一つ付いちゃいねぇよ！取り敢えず早苗！援護を頼む！結構な数仕留めたけどよ……まだかなりいやがるんだ！」

「！　な、何て数ですか…！…解りました。出来る限りの援護をします！」

「あぁ！頼りにしてるぜ早苗！」

「！！　は、はい！！」

オレは一気にジャンプし、妖怪共に接近し、また斬り裂く。そして斬り裂いた妖怪を蹴り飛ばし、他の妖怪共を怯ませ、その隙にまた斬り裂く。

…何だか地味に堅くなってきやがったな…！あまり堅いと刃が通らないからかなり辛いんだけどなぁ…！って文句垂れても奴さん聞いちゃくれねぇか！仕方ねぇな！

「早苗！一気にぶちかましちまえ！！」

「はい！」

早苗は懐から一枚のカードを取り出す。スペルカードだ。

それを空高く掲げ、高らかに宣言する。

「行きます！秘術『グレイソーマタージ』！！」

早苗がスペルカードの名前を叫ぶと、早苗の周囲から星型の弾幕が出現し、周囲に展開する。

展開された星型の弾幕は、展開途中で崩れ、薄い弾幕から濃い弾幕へと変貌する。

妖怪共は弾幕によりどんどん落ちていく。オレはその弾幕の間を避けながら走り抜け、弾幕を回避した妖怪の体を真っ二つに斬り裂く。そしてそこに弾幕の雨。これで生きてる奴はまずいねーだろう…

オレと早苗の連携攻撃が炸裂する中、一体の妖怪が弾幕から逃げ遂せてどこかに行こうとする。

それをオレが速攻で抑え、下手に動かねーようカットラスを突きつける。

「テメェら……何が目的だ……何の用があって襲撃してきやがったんだ！！」

「だ、誰が貴様なんぞに…！」
「グダグダ言ってんじゃねぇぞ!!とっとと言いやがれ!!首と胴が離れたくなけりゃなぁ!!」

妖怪はオレの怒声に煽られ、怯えた表情になる。これ位でビビるなんて……こいつ、結構下っ端の妖怪か？だとすると……何で襲ったのか知らねぇかもしれねぇな……
…取り敢えず……聞けるだけ聞いてみるか。

「おい！分かったんならとっとと話しやがれ！オレはなぁ……恩人の家を襲撃されて……すっげぇムカついてんだよ!!」
「ヒィ!く、くっそ!!話が違うじゃないか！ここには２Ｐと年増とロリババァしかいないんじゃなかったのかよ!!何でこんな奴が居るんだよ!!」
「ハァ？何言ってんだお前？『話』ってなんだよ…？」
「畜生！ニセモノと全盛期より弱り切った年増とロリババァ以外に居るって事を何で教えてくれなかったんだ！ふざけんな!!」
「おい……人の話聞いてんのか…？だから『話』ってなんだ…！」

オレは突如、とてつもない殺気を察知し、殺気のする方……オレの後ろを振り向く。
そこには――――笑顔で佇んでいる早苗と諏訪子様と、完全にブチ切れてますって顔をしている神奈子様がいた。
え、ちょ、三人共どうしたんだ？何をそんな怒って……

…あぁ……こいつ（妖怪）の今言った悪口か……それが原因で三人共怒ってんのか……怒るのも無理ないか……てかマジで怖ぇなオイ

「トシキさん♪」
「…な、何だ…？」

「ちょっと……横にズレて貰っても宜しいですか♪」
「…了解」

オレは素直に横に避ける。その途端、妖怪の体には弾幕と御柱と鉄の輪が突き刺さり、完全に消滅する。これが人の悪口を言った奴の末路か……おっかねぇな…

「全く……あまり調子に乗ってると痛い目に遭うよ♪」
「いや既に遭わされてます」
「全くですよ！少し手加減して上げましたけど……ちょっと酷くないですか！？」
「いや手加減してなかった気がするんだけど」
「どうやらこの襲撃の首謀者は私達の事を何も知らないみたいだね……弱体化なんて何時の話をしてるんだか……それと誰が年増だ」
「まぁ年増は酷いよな……普通に綺麗なのに…」

いやお世辞じゃねーよ？マジで言ってるからな？オレは嘘は言わない……ってか、言ってもバレるからな。

「…しかし……まさか守矢神社を攻めてくるとは……異変か？」
「そうだろうね～……――月も消えてるし」
「へ？月？それって一体どういう…！」

ふと、空を見上げると……そこには美しく、『ふうりゅう』を感じさせてくれる満月は無く、あったのは――闇だけ。
何だこりゃあ！？月がねぇじゃねーか！一体どういう……
…はッ！ま、まさかあの時の『消える』ってのは……こういう事だったのかよ！？ちょっと規模がデカ過ぎるんじゃねーか！？

「これは……どういう事なんでしょう…？何で月が…？」

「それは解らないね。だからこそ……原因を探る必要があるだろうね」
「あぁ……早苗、トシキ。お前達二人でこの異変を解決してくるんだ」
「トシキさんとですか？」
「あぁ。トシキは強いし、何よりトシキの『速度を操る程度の能力』は強力だ。今回の異変を解決する上で必ず必要になるだろう」
「成る程……トシキさん！」
「言われるまでもねーよ！」

オレは早苗を連れて境内を飛び出す。

「神社の方は心配しなくて良いからね二人共！」
「私達が守っているからな！」
「はい！解りました！行くぜ早苗！このワケの分かんねー異変を解決するぜ！！」
「はい！行きましょう！」

オレと早苗はこの異変を解決する為に空を駆け出した…

事件回想？前：ｓｉｄｅ　トシキ（後書き）

という訳で連投一日目。これから連投してみてどうなるか、色々とどうなるか。ちょっとだけ楽しみです。

今回の補足

・トシキの飛行法

飛行…てか、完全空中を走ってますね。
まぁ作中で説明された通り、トシキは飛べません。
故にこういう手段を取っております。

ちなみにうちの主人公で他に自力で飛べないのは零奈のみです。

あ、今回そんなに補足無い。
まぁでも、次話は多いけどね！

という訳で次はトシキの事件回想の後編です。

ではまたお会いしましょう。

事件回想？後：ｓｉｄｅ　トシキ（前書き）

今回で事件回想は一旦終了です。
残りはサクラと神那女の回想のみとなります。

てか、今回も長すぎた……一万六千文字相当ってどんだけよ…

事件回想？後：ｓｉｄｅ　トシキ

妖怪の山……普段は妖怪達が平穏に暮らしているこの山で事件が発生した。
それは能力を持った一部の妖怪、または神が襲われるという事件だ。
この事件の被害者となった者は、霊夢や魔理沙などの数々の異変を解決してきた猛者達と異変を通し、何らかの関係を持った者である。
この事件が発生してから十数分後、この時妖怪の山を逃げ遂せている三名の神が居た。

一人は鍵山雛。流し雛から神になった、厄を溜め込む神である。
一人は秋静葉。紅葉を司る八百万の神の一人である。因みに秋稔子の姉である。
一人は秋稔子。豊穣を司る八百万の神の一人である。因みに秋静葉の妹である。

彼女達は、先程から自分達に攻撃を仕掛けてくる妖怪達から逃げていたのだ。
彼女達は決して弱くは無い。以前に霊夢と魔理沙と弾幕ごっこを行った位だから、実力はあるのだ。
だが、妖怪側は彼女達の実力を上回っていた。それも満月が消えて、妖怪ならば確実に弱体化する筈なのに…
彼女達は自分達の実力では歯が立たない事を知り、弾幕で妖怪達の視界を遮りつつ、自分達の庭でもある妖怪の山の中を逃げ回っていたのだ。
走り、走り、走り回って。彼女達の足は徐々に限界に近付いていた。

「キャア！」

という声と共に、鍵山雛が前のめりに倒れる。彼女はぽっこりと出ていた木の根に引っかかって転んでしまったのだ。

いつもなら簡単に避けられたのかもしれない。だが、今回は走り回っていて足は震え、息は絶え絶え、こんな調子では避けられる筈も無い。

「雛さん！」

彼女が倒れた後、秋静葉は彼女を起こそうとする。

だが彼女はそれを突き放し、静葉を自らに近づけさせないようにする。

「私に構わず早く逃げて！！」

雛は目一杯大きな声を上げ、逃げる様促す。このまま静葉が自分を起こせば、私と一緒に殺されるだろう。だったら、私が犠牲になって彼女達を逃がそう。雛はそう思っていた。

「嫌です！貴女を置いて逃げるなんて出来ません！！」

しかし静葉は雛の思いとは裏腹に、彼女を助け起こそうとしている。雛さんは自分を犠牲にして私達を逃がそうとしている。そんなのごめんだ。雛さんも一緒に逃げなきゃここまで来た意味が無い。静葉はそう思っていた。

「駄目よ！このままじゃ貴女まで殺されちゃうわ！」

「私は殺されません！貴女も殺させません！絶対に！絶対に！！」

静葉は雛を助け起こして逃げようとする。
だが時既に遅し。彼女達に迫っていた妖怪の手が振り上げられ、彼女達に振り下ろされる。

もう駄目だ……殺される！彼女達は恐怖のあまり目を閉じてしまう。
そして彼女達に妖怪の腕が振り下ろされた……筈だった。

「…あれ？生きてる…？」

静葉は自らに振り下ろされた筈の腕が自分に当たっていない事に驚くが、それよりも……腕を振り下ろした妖怪が真っ二つになっていた事に驚いた。

「これは……一体…？」

突然の出来事に疑問を募らせる。だが、疑問を募らせている間も妖怪は襲って来る。
彼女達は急いで回避しようとした……が、その瞬間、妖怪達は先程の妖怪と同じく真っ二つとなり、只の肉片となり、そこらに転がる。

まただ。また、独りでに真っ二つに……一体……何が起こっているの？雛は目の前で起きている謎の現象に若干肝を冷やしていた。

「大丈夫！？」

稔子が心配をして駆け寄ってくる。その刹那、彼女達の目の前に一人の男が現れる。

緑色の袴を引き締め、両手には西洋風の剣が一本ずつ、勇ましい雰囲気と共に不幸というオーラを感じるその男は、悠然とその場に立っていた。

良く良く見てみると、その男は秋の二人が見た事がある顔だった。

「トシキさん!?」

「トシキ!?」

静葉、稔子の順に突然現れた知り合いに驚愕した。何故ならいつも会っている時とは全く別人の様な雰囲気を漂わせていたからだ。

「静葉様、稔子様、ご無事ですか?」

「う、うん。大丈夫…」

「そうですか……良かった」

トシキはホッと胸を撫で下ろすと、持っていた剣を鞘に仕舞い、未だ立ち上がれていなかった雛に手を差し伸べた。

「大丈夫ですか?…えーと…」

「雛。鍵山雛よ。貴方は?」

「オレはトシキ。トシキ・スピードスターです。えーと……神様…で間違いないですよね?」

「え?えぇまぁ…」

雛は掛けられた可笑しな質問に答えると、トシキの腕を掴み立ち上がった。

「いやぁ良かったです!神様が死ぬのを防げて!神様が死ぬのは嫌ですからね……!」

トシキはそう言うと、振り返り、仕舞った剣を一本抜き、虚空を睨む。

「…？　どうかしたの？」

雛はトシキの行動に疑問を感じ、彼に近付きつつ問いかける。

「…どうやらまだ奴さんは貴方達を諦めてないようですね…」

「え？それってどういう…！」

若干噛み合ってない返答に疑問を持つが、それは突如出現した妖怪達のせいで全て空に消え去る。

「う、嘘……まだ居るの…！」

「…あんだけ倒してもダメか……クソッ……こりゃあ洒落になんねーな…」

トシキはあまりの妖怪の多さに、思わず溜め息を吐く。神社で百数十体、ここでも百数十体殺って尚、妖怪達の数は衰える事を知らない。一体これだけの数をどうやって集めたのか？まるで使い捨ての駒ようにやられたら出てきて、やられては出てきてを繰り返す。どう考えても異常だ。トシキは自らの思考スピードを上げ、しきりに思考を巡らせる。この状況でどう動くのが最善か？どうすれば彼女達を傷つけないで済む？トシキの思考は加速する…

そして思考を巡らせる過程で、早苗と別れたのは得策では無かったかと後悔する。

彼女達を助ける前、トシキは早苗と話し合い、まずは妖怪の山から探していこうという結論に至り、早苗は天狗の里方面。トシキは

その反対側を探索する事となったのだ。
何故早苗と別れる事が得策では無かったか？それは彼女と共に居れば、三人の神を守ることも容易かったし、何より妖怪達を統率している大元を叩き易くなるからだ。
早苗に神様達を守らせ、その間にトシキが妖怪の山を隅から隅まで回る。トシキの能力を行使すれば妖怪の山を巡るのに三秒も掛からない。ほぼ一瞬に近い時間で妖怪の山中を巡り、怪しい者を見つけて叩く。居なかったら守りながら別の所に移動し、また能力を行使し探せば良いだけ。単純で古典的ではあるがトシキにとってはこれが一番だと思ったのだろう。

実際効果的ではある。幻想郷の隅から隅まで探していけばその内異変の首謀者、或いはこれだけの妖怪を操っているリーダー格を見つけ出す事は出来る。普通にやろうと思えば膨大な時間を食うだろうが、トシキの能力ならばそれが可能。トシキはその事を理解していた故にそう思考したのだろう。

しかし現在、早苗は天狗の里方面へと向かっており不在。それ故にこの作戦は使用不可。トシキにとっては不味い状況なのである。

「（…しゃーねー……こうなりゃこの神様達を守りながら大元を探す！
予定より時間は食うだろうが……この方達がやられるよかマシだ！）」

トシキの考えは纏まった。この間の思考時間……僅か０．３秒。

「…お三方。オレの後ろに居て下さい」
「え……どうする気なのトシキ？」

稔子が不安そうな顔で尋ねてくる。

「敵を蹴散らしつつ……突破します。かなり走ると思いますが…」

トシキは視点を妖怪達から逸らさずに稔子の質問に答える。

そこに雛が入り込んでくる

「ちょっと待って。走り抜けるのは無謀よ……妖怪達のスピードは私達を上回っている……どう考えても不可能よ！」

確かに雛の意見は正しい。スピードと量……妖怪達にはそれがあり、三名の神様にはそれが無い。普通なら抜ける事は不可能なのだ。

そう普通なら

「それについては安心して下さい。オレの能力を使えば何の問題もありませんよ」

「能力…？それって一体…」

「それは走りながら説明します。今はとにかく走りますよ。かなりハードなんで腹ァ括って下さいね」

「ちょ、ちょっとｍ「行きますよ！」待ってって言ってるのにいいいいぃぃぃ！」

トシキの合図と雛の叫び声で四人は走り出した…

「ちょ！ちょっと待って！本当に待って！木！木にぶつかる！」
「木はオレが取っ払いますから！安心して走って下さい！」
「安心出来るかあああああ！！うわ！また目の前に妖怪がああああ！」
「！　邪魔だオラアアアア！！」

目の前に下りてきた妖怪を能力を使って接近速度を上げて、近付いた瞬間に切断速度を上げ、速攻で切り刻む。その横から弾幕が飛んでくるが、これも能力を使い弾幕の着弾速度を０にし弾幕を止める。その間にオレと神様達はさっさとその間を抜けて再度走り出す。

…クソッ！予想よりヘビィだぞこりゃあ……敵の追撃を防ぎつつ立ち塞がる敵を切り刻み、更には神様達の速度を上げなきゃならねー……あー！クッソ！神経メチャクチャ使うじゃねーか！チクショウ！

「と、トシキさん！一体何処に向かっているのですか！？私にはガムシャラに走っているようにしか思われないのだけど！」
「えぇその通りですよ！とにかく走ってるだけなんです！」
「！？　ちょ！ちょっと待って！それ何の冗談！？」
「冗談なんかじゃねーですよ！本当に走ってるだけなんです！怪しい野郎を見つけるために……ね！」

目の前に転がってきた大量の岩を早さが高まった足で蹴り砕く。蹴り砕いた石の破片はそのまま石を転がしてきやがった野郎に蹴り返してやった。ざまぁみろ。

「ね、ねぇ！怪しいのを見つけるって言ったけど！具体的にどうす

るの！？」
「具体的にって言いますか！単純に探してぶっ潰すだけですよ！簡単でしょ！」
「そうじゃなくって！どうやって探すのかって言う話よ！まさか虱潰しって訳じゃないわよね！？」
「何言ってるんですか！そうに決まってるでしょう！？それ以外に何かあるんですか！？」
「ちょ！無茶でしょそれ！出来る訳がないわ！」
「んなこたぁやってみなきゃ分かんねーでしょ！？
ほら！ウダウダ言ってないで走って下さい！ボサボサしてるとやられますよ！」
「で、でも！」

…あー！もう！じれってぇ！頼むから黙って走ってくれよ！ただでさえ能力をもの凄ぇ使ってんのによ！

そうこうしている内にまた目の前に妖怪共が現れる。
いい加減にしてくれよ……どんだけ寄越せば気が済むんだよ！いい加減嫌になってきたぞゴラァ！

オレがまた目の前に現れた妖怪を蹴散らそうとしたその時、妖怪共に大量の弾幕が…おいおい一体誰だ？

「ふはははは！現人神嘗めると痛い目見る事になるんですよ！人と戦ってる最中に別の方に気を逸らすなんて……甘過ぎるんですよ！貴方達はあああああ！！」

…あー……早苗か……何かメッチャテンションたけぇなオイ。ストレスでも溜まってたのか？

…まぁ良いか。それより丁度良いときに来たな早苗。ちょっくら合流して一緒に妖怪共のリーダーまたは首謀者を探すとするか。

「おーい早苗ー！」

「あ、トシキさん！どうですか？見つかりましたか？」

「いや、全然見つからねーよ……っと、止まってるとヤベェな…

…早苗。詳しい話は走りながらする。だから一緒に来てくれないか？」

「えぇ。良いですよ……って！そうじゃなかった！今は駄目なんです！」

「？　どうしたんだ？何かあったのか？」

「はい！実は…」

早苗がオレに何かを伝えようとした途端、突然背後で爆発のような音がする。背中には火の粉が降りかかり、チリチリとオレの衣服を燃やす。

何だよ一体……何が起こったってんだよ！

「クッ……これはかなり不味いですよ……トシキさん！すみませんが一緒に来て下さい！」

「一緒にって……一体どこにだよ！？」

「天狗の里です！今あそこは他の妖怪に襲撃されてるんです！」

「！　んだと…？」

天狗の里が襲撃されてるだと…？って事は……サクラや文達の身が危ねぇって事か！ヤベェぞオイ！今すぐ助けに行かねぇと！

…あ、でも神様達はどうしよう……このまま連れてくか？危険な

気はするけどよ……ここに置いてくよりはマシか……良しそうするか。

「…分かった。天狗の里に行くぞ。静葉様、稔子様、雛様には申し訳ありませんが…もう暫く一緒ｎ」

「あー！御三方丁度良いところに！一緒に来て下さい！救援に向かいますよ！拒否権はありませんからね！」

「え！？ちょ！ちょっと！」

「さぁさぁ行きますよ！ほら！早く！早く！早く！」

「ちょ！急かさないｄ「えぇいじれったい！行きますよ！」え、ま、きゃあああああぁぁぁ！」

「あ、稔ｋ「貴女もですよ！」え、ちょ！いやあああああぁぁぁ！」

「さ、早苗さん！？ちょ、ちょっと落ち着いｔ「さぁさぁ貴女も行きますよ！」話を聞いてえええええぇぇぇ！」

…オレが言うまでも無かったか……早苗に無理矢理連れてかれちゃったよ……何だかなー…

取り敢えずオレは超高速で走って行った早苗を追いかけて行った…

―――――――――――――――――――――

「な、何だよこれ……どうなってんだこりゃあ！！」

天狗の里に着いたオレは里の惨事に思わず絶句した。

里中の家という家に火がつき、作物は焼き尽くされ、その近くでは負傷した白狼天狗が呻りながら倒れている。

オレはその白狼天狗に近付き、傷の治癒速度を早めてやる。する

と白狼天狗の傷はみるみる治っていき、十秒も経たずに全部の傷が治った。

「大丈夫か？」

オレは傷が治った白狼天狗に質問をする。

「貴方…山の神社の…え、えぇ……何とか…」

白狼天狗は肩で息をしながら返事をしてくる。

「そうか……じゃあちょっと聞かせてくれ。ここで一体何があったんだ？」

質問された白狼天狗は苦虫を噛むような顔をし、イライラしながらも質問に答える。

「…突然だったのよ。山でも見たことの無い妖怪が襲ってきて……アイツら椛隊長を狙ってたから……私達で隊長を守ろうと……けど全然歯が立たなくて……それで…」

「今に至るワケだな。椛はどうしたんだ？」

「…隊長はサクラと一緒に向こうへ行ったわ……でもそれと同時に他の妖怪共も向かったわ…」

「それは何時ぐらいだ？」

「…丁度今よ……貴方が来る直前に行ったわ…」

…て事はまだ戦闘になってないかもしれねーな……急げば助けられるか？

「…良し分かった。お前は取り敢えず安全な所にでも居ろ。それか

怪我してんのを避難させろ。良いな？」
「え、えぇ……分かったわ」

オレは白狼天狗を置いて椛とサクラが行った方に走る。とにかく無事である事を祈るけど……こんな状況じゃ何があるか分かったもんじゃねぇ。用心しつつさっさと行かねぇと…

二人が向かった方向に走っていくと、所々に弾幕で付いたと思われる穴があるのを見つける。どうやらかなりハデにやりあったらしく、かなり深い所まで掘られている。…こりゃあマジで急いだ方が良さそうだな……

オレは能力を使い、走っていく。そしてようやく椛とサクラを見つけられた……が、かなりヤバい状況になっちまってるじゃねーか……！

オレの視線の先には今にも二人に襲い掛かろうとしている巨大な妖怪と、右肩と両足を負傷した椛、そしてそれを守っているサクラ。マズい……このまま行けば確実にサクラはやられる…！そんな事……させてたまるかッ！

オレは走行速度を最大まで上げ、一気に走りこむ。そして妖怪の横まで近付き、超速を利用した強烈な蹴りを浴びせる。蹴りを浴びせられた妖怪は一瞬のうちに肉塊となり、血肉が周りに零れ落ちる。
オレは足を振って血を払い、周りに他の妖怪が居ないか確認する。誰も居ない事を確認した後、すぐに二人の元に走り寄る。

「大丈夫か！？特に椛！」
「大丈夫……じゃないね…結構深く抉られちゃったし…」

「マジか……サクラは！？」
「私は何とか無事です……それより椛さんの傷をどうにかしませんと！」
「あぁ……サクラ、治癒魔法！…は駄目なんだっけか…」
「はい……治癒魔法は何故か苦手なのですよ…」

サクラはそう言ってうな垂れる。正直、オレからすれば治癒魔法以外は簡単に使えるってだけでも凄ぇと思うんだけどな……オレはそういう才能全然無いし。

…取り敢えず椛の傷の治療はオレがやるか……止血速度と治癒速度を上げれば何とかなるだろうしな。

オレは椛の手を置き、椛の傷口の止血速度と治癒速度を最大まで上げる。速度最大……そうする事により、傷口が一瞬で塞がる。ついでに疲労回復速度も上げて……うし、これでＯＫだ。

「…相変わらず凄い能力だよね……トシキの能力って…」
「そうでもねぇよ。能力の有効範囲は１５ｍだし、しかも触れば一遍に速度操作可能だけど離れたらかなり神経使わないと複数操作できねぇし……まだまだ欠点だらけの能力だぜ」
「それでも凄いと思うんだけどね…」

おいおい、そんな褒めても何も出ねぇぜ？いやマジで。てか褒めるなよ恥ずかしい

「…どうしたの？顔赤らめて」
「え！？い、いや！何でもねぇよ！」
「？　そう…」

あ、危ねぇ……今ちょっと顔に出てたみたいだぜ……ヤベェヤベ

ェ……感情が顔に出やすいとかなり大変だぜ…

オレは照れ隠しをしつつ頭を掻く。正直、頭掻いてる時点でもうバレバレな気がしてならねーけど……それでも隠す。意地でも隠す。

そんな折、サクラは突然座り込み、花をじっと見つめている。また会話してんのか？

あ、会話ってのは、サクラが能力を使い人間以外の普通は話さない生物と話す事だ。まぁ……オレにも詳しい事は良く分かんねーけど……まぁ、要は話してんだ。うん。そんな感じで良いはず。

…てか、サクラって凄ぇよな……『人外を統治する程度の能力』だっけ？あれの能力の仕様上、動物や植物と話せるし、熊とか毒を持った蜂でさえサクラを慕うし、更に言えば様々な妖怪の社会に何の問題も無く入り込める。早苗曰く、余所者なのに天狗社会に入り込めたって事は凄い事らしい。天狗ってのは余所者を自分達の里には入れないからだそうだ。いや、天狗の社会とかは話を聞いても全く分からないんだけどさ。

「…分かりました。ありがとうございます」

花に一言礼を言うと、サクラはオレと椛の方を向き真剣な表情でゆっくりと口を開く。

「トシキさん、椛さん…そこの木の陰に……二人居ます」

「！　んだと！？」

他の奴らは集団で行動してんのに、二人だけ……って事ぁリーダー格のヤツか！！

「どうする…？こっちから攻める…？」

「…いや、その必要は無さそうだぜ」
「え?それってどういう…!」

椛は一瞬疑問が浮かんでいる事が良く分かる顔をしたが、ピクッと頭の耳が動くと驚いた表情に成り変わり、ツーっと汗が一滴頬を零れ落ちる。

分かってくれたか…そう……ヤツらは既に……木の陰から出てきている!
どうやら奴さん、自分の事がバレたんで観念して出てきたようだな……好都合だぜ!

出てきたヤツの一人は聖職者みたいな白い服を着ており、髪も白、靴も白と白尽くしの男だ。
もう一人は袴の様なくたびれた服を着ており、目が髪で隠れていて、何だか汚い印象を受ける男だ。

どっちがリーダーかは知らねーけど……どっちかはリーダーだろ。
だからどっちも倒せば良いだろ。

「…は!ようやくお出ましかよ!全く待ちくたびれたぜ……リーダーさんよぉ!」

オレは軽く挑発風にリーダー格ともう一人に向かって叫ぶ。
しかし、叫んだ瞬間バンバン!と肩を叩かれ呼ばれる。

一体何だよ……とりあえず能力使用して会話速度と行動速度を上げて……良し

「トシキさん!何を言っているのですか!?」

「は？何って……そりゃあ……何て言えば良いんだ？」
「いや、説明とかではなくて！『リーダー』ってどういう事ですか！？」
「あぁそっち？いやだって……あんな所に隠れてたんならリーダーだろ」
「いやそれは…」

サクラは俯いて少し唸った後、顔を上げて話し出す。

「…トシキさん……その考え方は間違っています」
「…は？」

サクラの発言に全く理解ができないでいるオレにサクラは質問をしてくる。

「良く考えて下さい。リーダー的存在であるお方があのようなな所に隠れている必要がありますか？」
「え？そりゃあ……リーダーがやられたらマズいから隠れて指示出してんじゃ…？」
「それは有り得ません。何故ならば、妖怪さん達の動きに全く変化が無いからです」
「…変化が……無い…？どういう事だよ？」

頭が回らず目が点になっているオレにサクラは説明する。

「先程から色んな方から情報を頂いたり、自分から観察しているのですが……どうも狙いが少数に固まっているみたいなのです」
「少数？それって一体…？」

話を聞いていた椛がサクラの説明に疑問を投げ掛ける。

「思い出してください椛さん。椛さんの部隊が妖怪さん達と戦闘を行った時……妖怪さん達は一番最初に誰を襲いましたか？」
「最初に襲ったの？それは私だけど……あれ、ちょっと待って。そういえば……私以外の白狼天狗って襲われたっけ…？…いや……襲われてない…！」

椛はピン！と耳を立て、強く言い放つ。

その言葉に更にオレは混乱する。

「いやそれはおかしいだろ。だってさっき会った白狼天狗は妖怪にやられて怪我したんだぞ？それで襲われてないってのはおかしくないか？」
「いや、違うのトシキ！怪我をした白狼天狗は私を守ろうとして怪我を負ったの……それ以外……私の隊の白狼天狗が攻撃を仕掛けたときは、基本的に全部無視されてたわ」

…無視された…？攻撃されてんのに無視するだって…？アホかそいつら。

…てか、そういえばあの白狼天狗……『椛を守ろうとした』って言ってたな……すっかり忘れてた。

「…恐らく妖怪さん達は今まで起きた異変に関わった方々を殺そうとしているのだと思われます……その証拠に文さんとはたてさんを里の外へと向かわせた途端、攻撃が緩くなり一部の妖怪に至ってはお二人を追いかけていった始末です」
「…マジかよ」

もしそれが本当だとするなら……何でまた異変に関わったヤツだけを狙うんだ？何の意味があってそんな事を…

…ん？ちょっと待てよ……その話が本当なら……早苗や神様達が危ねぇじゃねーか！ヤベェ！

「つまり、そこから考えるとどう考えてもあの方達はリーダーではない。指示を出してる訳でもなく、何か特殊な魔術を使っている訳でもない…」

「確かにそれを考えたら違うのか……サクラ、貴女良く分かったわね。しかもすぐに」

「いえいえそんな……ただちょっと気になったから調べてみただけです。大した事じゃないですよ♪」

「大した事だと思うんだけどねぇ……ん？トシキ？どうかしたの？」

「…ヤバいんだ……今里には……早苗がいる！」

「！　え！それ本当！？」

「あぁ……それ以外にも静葉様や稔子様、雛様がいる……このままじゃ襲われちまう！！」

「え、ちょ、ど、どうしよう！た、助けに行くべきだよね！？」

「ったりめぇだろ！今すぐ能力を解除して救出に…」

オレはすぐに能力を解除しようとする。

…が、

「待って下さい！まだ行動するには早いです！！」

それをサクラに止められる。

「何だよサクラ！早いってどういう事だよ！？」

「言葉通りの意味です！今行動を起こせば間違いなく私達は危険に晒されます！！」

「は…？ど、どういう事だよ…？」

相変わらず理解能力の低いオレに対し、サクラは一呼吸吐いてから話し出す。

「トシキさん。何故あのお二方は二人だけで行動してるのでしょう？」

「え…？そ、それは…」

…何だ……リーダーだからって理由以外に何か理由があるのか…？クソッ！分かんねーよチクショウ！

オレが頭を抱えて悩んでいる中、椛はふと何かを閃いたような顔をする。

「もしかして……能力持ち？」

「そう！それですよ椛さん！私が気にかけているのはそれなのです！」

サクラは椛にビシッ！と指を指し、そう言った。

能力持ち…そうか…その事をすっかり忘れていたぜ…

「…相手の能力は未だ未知数……そんな中で行動を起こすのはかなり危険なのです」

「…ＯＫ。ようやっと理解したぜ……まずは目の前のヤツらぶちのめす事が先決ってワケだ」

「そういう事になります……とにかく今はあのお二方と早々に和解し、早くこの不毛な戦いを終わらせませんと…」

…和解は……無理だと思うんだけどなぁ……こんな事になっちまってる時点で…

ま、口には出さない事にする。それ言っちまうとサクラの考えを否定しちまうからな……

戦いを嫌う……平和的な考えを…

「…分かった。それじゃあオレはあの聖職者みてぇな野郎を相手する。サクラと椛はもう片方を相手しろ」

「分かりました！」

「了解です！」

「良し……能力を解除するぞ…！」

オレは能力を解除し、オレ達の速度を元に戻す。この会話は能力のお陰でほぼ一瞬で終わった。

「良し……やってやるぜ……ん？」

オレはカットラスを構えた時、ふと聖職者が何かに怯えているような顔をして震えている事に気が付く。

何だ……あの野郎どうしやがったんだ…？

「…な、何故キサマが此処に居るんだ…！よりにもよってこんな所に……何故だ！！」

…あれ……オレに向かって言ってるのか？んん？オレはアイツを知らねぇぞ？どういう事だ？

「ま、まさか記憶が戻って私を消しに来たのか！？さ、させぬぞ！そんな事はやらせぬ！」

聖職者の格好をしたヤロウは森の奥へと逃げ出した。

あの野郎……何で逃げやがったんだ…？てか記憶って何だ…？一体何を言って…

…まさか……あの野郎……オレの過去を知っているのか！？て事はオレの本当の親の事も！

だったら尚更オレが相手をしないとなぁ！オレの過去を知っているんなら！洗いざらい吐いて貰うぜ！！

「待ちやがれオラァァアアアアア！！！」

オレは全速力で走り出し、聖職者風の男を追いかける。

絶対に……逃がしてたまるかよぉ！！

「クッソ！どこ行きやがった！！」

草木を斬り裂き、走り回りながらあの男を捜しているが……一向に見つからねぇ……あの野郎どこに隠れやがった！？

オレは感知速度と探索速度を上げて周囲を探索する。途中、焦り過ぎてるのを感じたので頭の冷却速度を最大まで上げ、落ち着いて探索を進める。

その内に茂みが微かにガサッと揺れたのを発見する。オレは即座に茂みの中にジャンプして入る。そして茂みの中にいるであろうヤツに剣を突きつける。

「オラ。いるのは分かってんだよ……ゆっくりと立ってこっちに振り返りやがれ」

茂みの中のヤツに威圧的に言葉をかけると、茂みが急に大きくガサガサと揺れだし、声が聞こえる。

「ま、待って！私！私よ！」

「あん？私って誰だ……あれちょっと待って……もしかして……雛様？」

「そう！雛よ！鍵山雛！だから頭に突きつけている剣をどかして下さい！！怖いから！！」

「あ、す、すいません！」

オレは剣を雛様から離し、茂みの中にいた雛様を起こす。

「はぁ……ビックリするから止めて下さいよ…」
「す、すみません……あれ？そういえば天狗の里にいませんでしたか？何でこんな所に？」
「…妖怪から逃げてきたらこんな所にいたのよ……死ぬかと思いました…」
「あー…それは……大変でしたね…」

…こんな言葉しかかけられない自分が情けないなぁ……この人は命からがら逃げてきたのに……もうちょっとかけるべき言葉がある筈だろ……あー情けねぇ…

「本当よ……どうしてこうなったんだか…」
「あはは……確実に自分のせいです。すいません……ところでこの辺りに聖職者みたいな格好をした男が来ませんでしたか？」
「聖職者風な男？あぁそれならあっちの木に…」

その言葉の次の瞬間、雛様が指し示した木からキラリと何かが光り、ヒュン！と矢が飛んでくる。
オレはその矢を瞬時に斬り払い、そのままの勢いで雛様が指し示した木もぶった切る。
するとその木の影から一つの影が現れる。それは正に今追いかけていた聖職者だった。

「ようやく見つけたぞゴラァ！知ってる事洗いざらい話せやぁ！！」
「知ってる事…？一体何の事…！あぁ成る程……記憶は戻ってなかったのだな…驚かせおって……焦ったじゃないか…！」
「はぁ？何言ってんだテメー……良いからとっとと話せよコラ」

そう言うと突然聖職者風の男は黙り込み、そして突然笑い出す。

「あ？何がおかしいんだよ？」
「クハハ……いや何、何も知らない男に怯えていた自分が馬鹿らしくなってねぇ！いや本当に愉快愉快！！」
…何かこいつ、勝手に焦って勝手に笑ってるんだけど……頭大丈夫か？
「そしてここでキサマを消せば私が『あの座』に座るのも容易になると言う事！クハハ！『あの座』は私の物だッ！！」
男は手に持っていたクロスボウを再度オレに向かって打ち出してくる。オレはそれを剣で払い、男に向かって走りこみ蹴ろうとする。だがそこで男は手を翳し、『何か』をしようとする。その『何か』はオレには分かんねーが、とにかく『何か』をされる前に近付いて蹴り飛ばせば良いだけの話だろ！
「ぶっ飛べッ！！」
その掛け声と共に男を空高く蹴り上げる。
そしてそこに追撃とばかりに発動する、オレのスペカ
「瞬弾『ハイスピードブレット』！！」
発動されたスペカから超高速の弾幕が放たれる。それは通常の人間の知覚じゃ見ることすら不可能なものであの早苗でさえ避けるのに苦労した弾幕だ。
男はそれを体に諸に浴びながら、更に空高く舞い上がる。

だがそこで、男は不敵に笑い出す。

「クハハハハ！これでキサマも我が能力の餌食となった！もはやマトモな攻撃など叶わないぞ！！」

…は？どういう事だよ……攻撃…？何が何だか分かんねーな……ま、所詮戯言だろ。気にする事もねぇな。このまま攻撃を続ける！

「瞬足『韋駄天走り』！！」

スペカを発動すると、その瞬間オレの足が緑色に光り出す。そしてその状態で空を蹴り一気に男に接近する。そして男の横を通り過ぎる時に超高速の弾幕とオレの剣撃を加え、地面に蹴り飛ばす。

しかし、蹴り飛ばされた筈の男の体は高速で落ちていかず、まるでシャボン玉が落ちていくみたいにゆっくりと落下していく。

これは今発動したスペカ、瞬足「韋駄天走り」の特殊効果だ。こいつが発動している時にオレの体が接触すると、接触したモノのスピードをかなり遅くするのだ。

オレは落下していく男に向かってまた走り出す。そして追撃とばかりに大量の蹴りを浴びせる。

「ゴ……フゥ…！？」

ゆっくりと声を上げてゆっくりと落ちていく。この時はダメージもゆっくり来るため、かなり精神的にくるそうだ。文に使ったらそんな事言ってた。

さて……そろそろ時間切れだ。

「超高速で落ちていきなッ！！」

男が地面に落下するのと同時にオレは決め台詞を言う。これは早苗に勧められたんだけど……どうも決め台詞があるとカッコイイらしい。オレには良く分かんねーけどな。

男は木々を薙ぎ倒した後に、地面に落下した。それを追ってオレも降下する。

地面に着地し、男の落ちた場所に行くと、男は体を抱えて悶えている。

「おいおいどうしたんだ？さっきまでのあの自信はどこに行ったんだ？」

男はボロボロの体を抱えて立ち上がる。だが、足元が覚束なく、すぐに倒れてしまう。

「ハァー…ハァー……何故だ……何故我が能力がかからない！？」

「さぁ？それは知らねーけど……少なくともテメー如きの雑魚の能力はオレには通用しなかったって事だろ。簡単じゃねーか」

「そ、そんな馬鹿な！有り得ない！現にそこの厄神は既に我が術中に嵌っているというのにッ！！」

「は？どういう事…」

オレはふっと後ろを振り返る。そこには雛様が居た。大きな音がしたから近付いてきたのか…

「雛様下がってて下さい。こいつはほぼボロボロとは言え、まだ何か隠しているかもしれません……だから一旦離れてくれますか？」

「…アハ♪」

「…へ」

「アハハハハハハハ！！何だか知らないけどすっごい楽しくなってきたわぁ！！アハハハハハハハ！！！」
「え、ちょ、えええええええ！！？」

な、何があったんだ雛様！？突然笑い出して……あ、ちょ、こっち来た！？

「つ～かま～えた！」
「は？ちょ、ま」
「てぇい♪」
「うおわ！？」

咄嗟の出来事で対応できず、オレは雛様に押し倒されてしまう。

「ちょ！雛様落ち着いて下さい！！何やってるんですか！？」
「アハハ♪何かすっごく気分が良いのよ～♪今なら幾らでもできる気がするわぁ！！」
「できるって何を！？ワケが分かりませんよ雛様！！」
「何って…そりゃナニに決まっているでしょう！？それ以外にあるの！？」
「いや何って言ってるのに何って返されても困るんですが！とりあえず離れて下さい！身動きが取れません！！」
「イヤよ！絶対離れないわ！貴方とヤるまで絶対離れない！！」
「ヤるって何ですか！？意味が分からないですよ！！あーもう！離れてくれー！！」

オレは無理矢理引き離そうとするが、どこから来てるのか分からない異様な力のせいで全然引き離せない。
クッソ……何が一体どうなって……！まさか……これがアイツの能力か！？

「ク、クハハハハハハ！これは良いぞ！予定とは少し違うが動きを止める事が出来た！実に良い事だ！！」
「て、テメー……雛様に何しやがった！！」
「馬鹿かキサマ！？そんな事をわざわざ教えるわけがないだろう！」
「チィ！クソッタレ！！」

オレは再度雛様を剥がしにかかるがやはり通用せず、そのままオレの肩が抑え込まれた。

「クハハ！絶景かな絶景かな！キサマを手玉に取れた事は我が生涯で最大の幸福よ！
さぁ！このままその神と共に死んでしまえッ！！」

男のクロスボウがオレと雛様の頭を捉える。このままじゃ……雛様が殺されちまう！！

…クソッ…！これだけはやりたくなかった……やりたくなかったけどよ……生き残るためにはやるしかねぇ！！

「雛様……すいませんッ！！」

ドスッという鈍い音を立てて雛様は上に吹っ飛ぶ。

クソッ……これだけはやりたくなかったんだぜ……神様を蹴り飛ばすなんて無礼はよォ！！

「厄神を蹴り飛ばしてその隙に攻撃を狙おうって魂胆か…だがもう遅い！！矢は既に！！キサマの目の前にあるッ！！」

「！　しまっ…」

男の言う通り、矢は既にオレの目の前まで来ており、もはやオレの能力を使おうにも――間に合わない。

オレは死ぬのか…？

こんな所で…？誰も守れずに…？

イヤだ……オレはまだ死ねないんだ……まだ守矢神社の方達に恩を返せてないのに……

それなのに…それなのに……こんな所で…こんな所で……！

こんな所で死ねるかッ！！！！！

ドクンッ…

オレの意識がフッと…途切れた。

◇■◇■◇

「勝ったッ！死ねぇ！！」

矢がトシキの目と鼻の先まで近付く、だが、そこで、トシキの雰囲気が変わる

「死ぬ？我がか？違うな……死ぬのは貴様だ……堕神」

トシキに飛んでいった筈の矢が、突如煽られた突風により明後日の方向へと飛んでいく。

「なッ…！？ば、馬鹿な何故今突風が…！？
…はッ！ま、まさか…キサマ…！覚醒して…！」
「頭上注意だ……小物」

ボキボキと、何かが折れる音がしたかと思うと、聖職者風の男の真横の木が突如男に向かって倒れてくる。

「なッ…！ま、マズ……ギャアアアアア！！」

男が逃げ出すよりも先に倒れてきた木が男を押し潰す方が早かった。男はそのまま木の下敷きとなり、そのまま動かなくなった。

トシキは男が潰れた瞬間、地に膝をつき、ハァハァ…と息を切らす。

「…な、何だこりゃあ……何があったんだよ一体！？」

トシキは事の状況が全く理解が出来ないという風に辺りを見回す。そして目の前の押し潰された男を見て、トシキは見て分かるように混乱する。

「（何でオレは脱出できたんだ…？何で矢が刺さってないんだ…？何でこいつが潰れてるんだ…？何が一体どうなってんだ…？分からねー……マジで分からねーぞオイ！！）」

トシキは微妙にボーっとする頭で疑問を浮かべる。
しかしその疑問は……雛の無事を確認するという事の方に意識が向いて消えてしまう。

トシキは急いで雛を蹴り飛ばしたと思われる方へと向かうと、雛は体中が傷だらけになって倒れていた。
トシキは直ぐに彼女に駆け寄り、彼女の治癒速度を上げる。傷は一瞬のうちに治り、ボロボロだった雛は目を覚ます。

「！　大丈夫ですか！？」
「ぅ……ん……ここは…？」
「さっきと同じ場所ですよ。少しズレてますが…」
「ん…そう……ところで……あの男は…？」
「木に押し潰されて死んでました……自分にも良く分からないんです……気が付いたらそうなってて…」
「…そう……とにかく終わったのね……良かっ…！」

雛の言葉は途中で途切れ、当の彼女は徐々に顔を真っ赤にさせていく。

「ど、どうしたんですか！？まだ何か…」
「と、トシキさん…？貴方は一体どこに手を乗せてるのかしら…？」
「へ……あ〝」

トシキはその情けない声と共に、顔色をどんどん青ざめさせていく。

それもその筈、彼の手は……

雛の胸の上に乗っているのだ。しかも揉んでしまっている。

「あああああああああ！！こここここここここれは！ふふふふふ不可抗力であって！べべべべべべ別にやましい事などけ、決して…」

「問答無用ッ！！疵符『ブロークンアミュレット』！！」

「ちょ、ま、ま！！」

トシキの静止の声も空しく、雛のスペルカードから放たれた弾幕は、トシキの体に全弾衝突した…

「ふ、不幸だあああああああああああ！！！」

トシキの嘆きは、空に吸い込まれていった…

◇■◇■◇

雛様の弾幕を喰らった後、オレと雛様は天狗の里に急いで戻ってきた。妖怪の襲撃で早苗やサクラ達がやられてる可能性があると思ったからだ。

しかし、オレが戻ってきて見た光景は……襲撃した妖怪に命令を下し、家々の修復をさせているサクラの姿とこんな状況下でも布教をしている早苗の姿があった。

他にも色々とあったんだけど……何かその様子が一番印象に残ってて他の様子が全然目に入らなかった。

サクラが妖怪を従えている事について文に話を聞いてみると、どうやらサクラの『人外を統治する程度の能力』が発現して、襲ってきた妖怪全てを操ってしまったのだそうだ。サクラ凄ぇ。

サクラ本人にも直接話を聞いたんだけど…サクラ曰く操ってるのではなく『お願い』をしただけだそうだ。うん、全然分からん。

その後も色々と話を聞いていて、どうやらあのボサボサ髪のヤロウはただの偵察で、リーダー格ではなかったそうだ。まさか本当に違うとは……

そしてどうやらオレが言った後、偵察のヤロウとは別にでっかい妖怪が出てきたらしい。サクラは戦いたくなかったそうだが……結局避けられなくて戦っちまったそうだ。

そしてその妖怪を倒して、悲しんでいた時、妖怪の角が光って、その角から色々とヤバいオーラを出して光っている石が出て来たそうだ。

オレは石と聞いて、ふと里に戻る前にあの男のクロスボウから出て来た石の事を思い出してサクラに見せた。すると突然石の光が強くなり周囲にヤバいオーラが充満し始めたんだ！

オレとサクラは咄嗟に持っていた石を地面に叩きつけて石を粉々に砕いてしまった。

すると石から発せられていたオーラが完全に消え去り、周囲に充満していたオーラも全て消え去った。

オレはホッと一息吐くと、突然辺りが強い光で包まれ、全く何も見えなくなる。

そして一瞬でその光が消えると、何と月が元に戻っていたんだ！

いやあれは驚いたよマジで。

どうやらオレがもたもたしている間に誰かに異変を解決されたらしい。だがオレはそんなに悔しくはなかった。何故ならこれで困っている人が確実に減るからだ。

確かに守矢神社の信仰を増やすためにも異変を解決して守矢神社を知らしめる必要はあっただろうけど、それより困っている人が早めにいなくなるほうが良いに決まっている。

ただ少し気がかりなのは、この異変が起きたワケとオレが知らない間にあの男が死んでいた事だ。

異変の理由も男が死んでいたワケも何も分からず、改めてそれを探ろうにももう終わってしまった事だからどうしようもない。

何だか最終的にモヤモヤとした感じしか残らなかったってのが色々とアレだが、まぁもう済んだ事だし、とりあえずは良しとしよう。

とりあえず今は…

オレに腕にしがみ付いて離さない雛様と早苗と背中から離れない静葉様と稔子様を、どうにか引き剥がそう…

事件回想？後：ｓｉｄｅ　トシキ（後書き）

何かそんなに話す事も無いんで、とっとと補足に行きます

今回の補足

・トシキの能力
結構使用用途が広いこの能力。やろうと思えば時を止めたり加速したり出来ます。
てか、概念に干渉可能なんだよね。この能力

・トシキのスペカ
瞬弾「ハイスピードブレット」
元ネタも何も無く、単純に『高速の弾丸』を直訳した感じです

瞬足「韋駄天走り」
これの名前の由来はスペカを見れば解ると思います。
てか、捻りが無いよね自分…ｏｒｚ

・聖職者風の男の能力
作中では話されませんでしたが、彼の能力は「感情を昂らせる程度の能力」です。
雛がえっちぃ感じになってたのはそのせいです。
何このエロ専能力

という訳で補足終了。次回は博麗神社でｇｄｇｄな会話がメインと

なっております。

それでは次回お会いしましょう。

第三十三話　幻想の日々？：長話の後の茶は旨い（前書き）

今回は戦闘無しのほのぼの（？）＋会話メインの回です。

そしてこれで連投終了。本当は五話分連続投稿したかったんだけど…

意外と事件回想に時間がかかったのと学校が忙しすぎたせいで無理でしたｏｒｚ

次連投する時は、もうちょっと多く投稿したいなぁ…

第三十三話　幻想の日々？：長話の後の茶は旨い

――ｓｉｄｅ　零奈――

「…ってなワケでオレの話は終わりな。あー……長かったぜー…」
「主にアンタが話すの下手なせいだったけどね」
「うっ…それは言うなよ霊夢……これでも頑張ったんだぞオレ！」
「早苗さんの補足が無かったら何も解んなかったケドナー」
「ひでぇ！チクショウ…事実だけど……ヒドすぎるぞチクショウ…」

トシキは地面に手を付けおろおろと泣きながら落ち込む。まぁ確かに解り辛かったって言えば解り辛かったかな？普通に解析出来たけど。

まぁそれは良いとして。取り敢えず聞いた感想を聞いてみましょうか♪

え？必要無いって？ノンノンそんな事は無いわ。こういうちょっとした事から導き出せる事もあるのよ？

まぁ本当はちょっと話を聞いてみたかったのともうちょっと萃香をさわさわしたかっただけなんだけどね♪

「はい！それじゃあ感想を聞きましょうか♪全員は長いから取り敢えず私達最近幻想入りした三人の感想だけ述べましょう♪」
「なぜーに？まぁ良いけど」
「ぅぅ……か、感想だな……良し！任せろッ！！」

「いやそれは別に任されるほどのものじゃないような…」

トシキの発言に大妖精がツッコミをいれる。

「それじゃあまずは……蓮也から言ってみましょうか♪」

「俺にキター！んー……一言で言うならなぁ……

……お前等チート過ぎワロタ」

…それ感想というより…文句言ってない？しかも自分を棚に上げて。

「それって感想か！？いや感想か……でも何か釈然としねーような…」

「…それって……どんなにズタボロになっても復活したレンヤが言う台詞じゃないような…」

「チルノに文句言われた！？俺……今すっげぇ幸せだよ…」

「いやなんで！？それはオカシイと思うのはあたいの気のせい！？」

「いや合ってるわよチルノ……てかホント何でそんな嬉しそうなの？」

「東方キャラに文句を言われるのが夢の一つだったから！罵られたかったから！だからすっごい嬉しいの！」

「意味が解らないわよ…」

ハァ…と、一息溜め息を吐き、霊夢はお茶を啜る。

そして私は萃香のお尻を揉む。

「じゃあ次私ね。あ、真面目バージョンと変態バージョンがあるけど……どうする？」

「いやどうするって…真面目なのだけで充ｂ「一番良いのを頼む」

おいコラ」

霊夢の意見に蓮也が割って入る。
あ、殴られた。

「い、痛いよ霊夢……幾ら俺がディフェンスに定評のある高宮だからって言っても痛いものは痛いのよ？」
「じゃあ割って入ってくんな。夢想封印するわよ？えぇ？」
「れ、霊夢さん…若干ヤクザみたいですよ…」
「ヤクザで悪かったわね」

霊夢はムスっと顔を膨らませていかにも不機嫌そうな顔をする。
あぁ……可愛い……怒ってる顔も可愛いわぁ…

…おっと話はズレた。感想、感想っと♪

「それじゃあ一番良いのを頼まれたから二つとも言うわね♪」
「え。いや、変態はいらｎ「それじゃあまずは真面目なのから行くわよ♪聞きなさいよ…」

霊夢の声が聞こえた気がするけど……まぁ気にしなくて良いわよね♪

「そうねぇ……まず思ったのが、三人共特化している所が違ったって事かな」
「特化している所？…あぁあれか。ＲＰＧでいう職業によるステータスの違いみたいな奴か？」
「まぁそんな所。私が力に特化してて、蓮也は頑丈さと生命力、そしてトシキがスピードって感じね」
「おぉ！見事に分かれてんな！凄ぇ凄ぇ！」

トシキは子供の様にワイワイと感嘆の声を上げる。
しかし蓮也は顎に手を当て、何処か悩ましい面持ちをして、素直に思ったのであろう言葉を放つ。

「でも実力的には俺が最弱だよね？」
「実力はね。でも色んな面で考えたらそこまで悲観的にならなくても良い位強いから、別に気にしなくても良いと思うわよ？」
「そういうもんかねぇ…」

頭を掻き、何だか釈然としないって風な顔をする蓮也。
でも実際そうだから本当に気にする事は無いと思うんだけどね。

「他は…そうねぇ……二人が気を失った時の事が気になる位かな？」
「気を失った時の事？トシキは解るとしても…俺のってそんな気になるか？」
「なるわ。気絶してた時とかの様子とかは鈴仙しか知らないんでしょ？ならそれが本当か確かめたいって思うじゃない♪」
「俺の嫁を疑うとは何事か」
「推理小説とかじゃあ親しい者でも疑うものよ。例えどれだけ怪しくなくても…ね♪」
「いやまぁそうだけどさ……今回に限っては違うと思うけどねぇ…」

…その根拠は何処から来るのやら……

ま、取り敢えず本人に聞けば解るでしょ。嘘を吐いてるかどうかわね…

「…で？本当の所どうなのよウドンゲ。アンタ嘘吐いてたりすんの？」

「も～霊夢まで疑っちゃって～私は嘘なんて吐いてないわよ？全く…酷いじゃないの」
「…何か馴れ馴れしいわよアンタ……」
「いやいつもこうだったじゃん」
「いや全然違う」

霊夢はビシ！と鈴仙にツッコミを入れる。そしてしらばっくれる鈴仙。

傍から見たら何の変わりもなく嘘を吐いてる様には見えないけど……私には解る。
彼女は嘘を吐いているって事が…

「（ねぇねぇ萃香萃香）」
「（んふぅ……な、なに？）」
「（鬼の貴女から見て……彼女（鈴仙）は嘘吐いてる様に見える？）」
「（…見える見えないじゃなくて……『解る』だね。鬼は総じて嘘を吐いてるヤツを見抜く事が出来るからね）」
「（へぇ……そうなんだ。それで？どうなの？）」
「（そうだねぇ……嘘を吐いてるね。あれは。何でそんな事してるのかは解らないけど）」

鬼の目から見ても嘘を吐いてるのね……なら確実ね。

「（どうするんだい？追求するのか？）」
「（…いや。止めておくわ。あんま追求しすぎてこの場の雰囲気を壊すのは嫌だしね♪
それに追求は何時でも出来るわ。何時でも……ね♪）」
「（そうか…まぁ零奈がそういうならそれで良いよ。
それよりも……もっとして…）」

「（ふふふ♪萃香はいやらしい娘ねぇ♪だがそれが良い♪）」

私は萃香のちっちゃな胸を優しく撫で回し、そのままお尻を揉む。

ふふふ♪悶えてる悶えてる♪性感帯を刺激されたから気持ちいいのね♪ふふふ♪可愛い♪

「…零奈ー？おーい。な～に夕べはお楽しみ状態になりかけてやがんだよコラァ。

話振っておいてそれは無いんじゃないの？」

「あ、ごめんごめん♪ちょっと萃香に熱中してて忘れてたわ♪」

「な、何てヤツだ……意味が解らないよ！」

「こんなの絶対おかしいよ！」

「おかしいのはアンタらの頭の中よ」

うわぁ…冷やかにツッコミ入れてるぅ……ヤバイ。私のMの心が揺さぶられるわぁ！あ、本当に濡れそう。

「…で？どうなん結局？」

「…ふぅ……ま、今のはちょっとしたジョークよ。だからあんまり気にしないでね♪」

「あの…その……人前で……くのは……止めてくれませんか…？」

もじもじと顔を赤らめ、私に懇願してくる早苗。やーんもう！可愛い♪

「…止めろと言ってんのにスルーですかい。そうですかい」

「いやだって可愛いし（ハァハァ」

「ハァハァすんあ！」

「てか、涎垂れてるわよ……零奈…」

「おっと失礼。ちょっと変態心が燻られたもので♪」

「変態心って何よ…」
「皆が平等に持っている心の事よ♪
あ、そうそう。まだ他にもあるのよね」
「他にもまだあんのか？凄ぇな……オレはそこまで思いつかないぜ…」

いや凄くはないと思うんだけど……この子の凄いの判断基準が解らないわぁ…

「他のってのはね。異変の際に皆の所に出て来た『石』の事なのよ」
「『石』？あーあの異様に禍々しいヤツか。確かにあの『石』に関しては色々と思う事があるよなー」
「そう！そうなの！思う事があるのよ！」

私は立ち上がり、言い聞かせる様に喋る

「考えても見てよ！（むにゅう）あんな禍々しい気を持った石を一体誰が彼らに持たせたのか！（もみもみ）況してやどうしてそんな事をしてまで霊夢や魔理沙と異変の際に接触した者を殺す必要があったのか！（さわさわ）そしてそんな事をして何の意味があったのか！（ぺろぺろ）結局あの異変の目的は！（つねりつねり）考えれば考えるほど謎でしかない！（ちゅっちゅ）今更調べようとしてもその手がかりであった石は私の手元にはもう砕け散って無い！（ちゅくちゅく）という訳で誰か持ってたらちょっと貸して欲しいんだけど！（零奈！もうらめぇ！）」
「言いたい事は解ったが……取り敢えずその手を止めてから話せええええええええ！ドリ符『信頼と実績の金ダライ』！！」

私の頭上からタライが落下！それを回避……しようとしたらテレポートして私の頭に直撃！頭が痛い！！序でに心も痛い！

「はうううぅ…これ意外と痛い……主に頭と心が…」
「だ、大丈夫ですか…？」

大妖精が心配そうに話しかけてくる。

「な、何とか……こ、これはチルノが痛がるのも解るわ…」
「でしょ！これすっごい痛いんだよ！何かこう……ガーン！って来るの！」
「表現が大雑把ねぇ……まぁそれはどうでも良いとして」

霊夢ー！？スルー！？何？放置プレイ？放置プレイなの？ヤバ…
…濡れ（ｒｙ

「お前は何時まで悶えてるんだよ……
それにしても石ねぇ……俺持ってないぞ……トシキ。お前持ってる？」
「いやねーよ。あん時に粉々に砕いちまったからな。一片のカスすら残ってねーよ」
「あらら……それじゃあ仕方ないね。悪いな零奈。俺ら二人共持ってねぇわ」
「むぅ……残念…もしあったならパパパーっと気を探って色々と解ったかもしれないのになぁ…」

ワキワキと手を動かし、萃香を弄りつつ自信たっぷりに言う

しかしそこに鈴仙が異議を言ってくる。

「それは無理じゃないの？だってあれ、砕けた瞬間ただの石に成ったわよ？

私も調べたけど……何の波長も感じられなかったわよ」
「むぅ……でも何かしら残ってると思うのだけれどねぇ…
あんな大きい力だったのだから、全てを消すのは容易じゃないと思うのよ」
「まぁ確かにね。ま、どっちみちそれを確かめようと思った所で意思が無いから何の意味も無いよね～」

鈴仙は手をヒラヒラさせ、軽い口振りで喋る。

まぁそうなのよね……確かめようにも、肝心な石が無いからどうしようもないのよね……ハァ……萃香さわさわ

「ま、結局どうしようも無いワケやね。仕方ないね」
「…ハァ……そうね。石の事はこれ位にしましょう。これ以上話しても無意味だしね。
さて！じゃあ次は私の変態的感想ｗ「じゃあ次トシキ行ってみよう！」邪魔しないでよ…」

私の変態的感想を邪魔するとは何事よ。犯すわよ？

「お、オレの番か…オレこういうの苦手だから……ちゃんと伝えられるかどうか…」
「取り敢えず、お前が思った事をそのまま言えば良いよ。という訳でセ～～～～イ！」

…何で最後英語にしたんだろう……強調したかったのかな？

ま、多分意味なんて無いのだろうけど

「うーん……そうだな……あ、一つあるな。すっげぇ些細な事だ

けど…」
「んー？何ぞー？」
「いやさ。話を聞いてて思ったんだけど……オレら全員能力持ちに遭遇したんだなーって思ってさ」
「…そういえば……確かに遭遇してるわね、私達」
「ついでに言えば俺達全員、謎のメッセを聞いたしな」
「『消える』…だったっけか…あれは月が消える事を指してたんだよな？」
「だろうな。ただ、少し疑問がある」

そう言って蓮也は腕を組み、右手の人差し指を立てる。

「何で俺や零奈、トシキは聞こえたのに他の奴らには聞こえなかったのか……不思議に思わねぇか？」
「…確かに……どうして慧音や妹紅には聞こえず、私には聞こえたんだろう…」
「…早苗は聞こえなかったんだよな？」
「はい。そんな事は全く知りませんよ。あの時は突然トシキさんが声を上げるものですから驚いたんですよ？」
「あん時は悪かった……でも本当にオレら三人以外聞いてないんだな……何でなんだ？」
「ゲームやアニメとかの場合……こういう共通点があるのには何か特別な力があったり、選ばれし者だったりするけど……凡人の俺には全く無縁の話のだよな……何で俺まで聞いちまったんだか」

…何を言ってるのかしら…？ちょっと意味が解りませんわ。

「それはお前が言う台詞じゃねーと思うぞ」
「蓮也さん……嘘は止めましょうよ」
「サイキョーのあたいの前で嘘が通じるとでも思ったか！」

「無いです。凡人なんて絶対有り得ないです」
「鬼の前で嘘を吐くなんて……良い度胸してるじゃないか」
「これは勘だけど……アンタが平凡なんて有り得ないわよ絶対」
「あらあら……蓮也が集中砲火されてるわねぇ……まぁ事実だから仕方ないわね♪」
「お前らー！俺は一超平凡人（スーパーノーマル人）だと、何度言えば解るんだ！」

…何度も言ったっけ？これが初めてな気がするのだけれど……

「ちょっとアンタ達！ご主人様を弄るのは私の特権よ！勝手に弄らないでよ！」
「怒る所チガウヨ！もっと別の所を怒るベキダロ！つーか庇ってヨ！」
「いや…事実だから仕方ないかな～って思いまして」
「ヒドイ！？私はアンタをそんな子に育てた憶えは無いよ！」
「いや、鈴仙はお前の子じゃねーだろ……何を勘違いしてるんだか」
「トシキーネタネター」
「それさっきも言った気がするわね。主に私に対して」
「所で…あたいお茶おかわり！」
「所での使い方が間違ってるよチルノちゃん！」
「あ、そうだ鈴仙さん。入宗しませんか？」
「だが断る。何故なら私は既にご主人様を信仰してるからね（キリッ」
「なぁ皆？俺の事はスルーなん？ねぇスルーなん？」
「んにゃあ！れいなぁ…そこらめぇ！」

…何このカオス。どうしてこうなった…？

私がこのカオスな状況に若干唖然としていると、蓮也が腕に着け

た時計……要は腕時計を見て、フッと立ち上がる。

「おっとっと。もう三時になってた件。何時の間にこんな経ってたんだかねぇ…」

「え？もうそんな時間？あー…そろそろ帰らないと…慧音にまたどやされるわ…」

「俺も用事あるんだよね。だからそろそろ帰るわ。

…でもその前に…」

蓮也はタタタっと賽銭箱の前まで歩いていくと、ズボンのポケットから財布を取り出し、三円（今で言う三万円相当）を賽銭箱の中に入れる。パンパンと手を叩き、手を合わせお参りすると、蓮也はチラっと賽銭箱の中身を覗く。

そして何故か若干驚いた表情を取る。どうしたのかな？

「…零奈ー？お前賽銭入れた？」

「んー？一円だけ入れたけど？」

「一円だけか……トシキはどう考えても入れないだろうし……じゃあ紫？いや、アイツがこんな多く入れるとは思えないし……第一、博麗神社だぞ？こんな辺鄙な所にまで来て……こんな多く入れてく奴って居るのか…？」

…賽銭の量で何かブツブツ言ってるなぁ……そんなに気になる事なのかしら？

「あぁそれね。何故か知らないけど……気が付いたら入ってるのよ。結構な量が。

紫が何か知ってるみたいなんだけど……白を切ってて解んないのよね」

「ふ～ん…紫がねぇ……一体何じゃろうね」

「さぁね。まぁでもその内絶対吐かせるわよ」
「そうかい」

蓮也はそう言うと、突然何かに気が付いた様な顔をして、キョロキョロと此処に居る人達を見回す。そして右手を顎に当て、左手で右肘を支える態勢になると、突然、こんな事を言いだした。

「…いやはや改めて見てみると……――男って俺とトシキだけだったんだな。ちょっとしたハーレム状態だな、こりゃ」

…あぁそういえば……確かにそうね。今此処には男二人、女七人という何ともアンバランスな状況が出来て、男にとっては涙を流して喜びそうな状況よね。私も悦ぶけど♪

ん？一人多くないかって？

も～ちゃんと居るじゃない♪私の触手の中に♪

「！　れ、蓮也さん！い、今！何て言いましたか！？」
「？　何って……ハーレムだけど？それがどうかしたん？」

何事か解らないという表情を取る蓮也に対し、早苗はダラダラと汗をかき、張り詰めた表情で蓮也に掴みかかる。

「な、何てこと言ってくれたんですか！！その単語はトシキさんの前では禁句なんですよ！？」
「は？禁句…？あ、もしかして……その単語聞いた途端、鼻血を大量に噴出すとかそんな感じか？

ははははｗｗ流石にそれはねぇだろｗｗｗ幾らなんでもそんな単語の一つや二つで鼻血噴出すなんて有り得ないってのｗｗｗなぁ？トシキ？」

そう言って蓮也はバンバン！とトシキの肩を強く叩く。

しかしトシキは、次の瞬間突然震えだし、ブツブツと何かを呟き始める。

「？　どうしたんだよトシキ？てか、何言ってんだ？全然聞こえないぞ？」

トシキの小さすぎる呟き声を蓮也は聞く事が出来ず、ポカンとしている。勿論近くの蓮也に聞こえないんだから、他のにも聞こえる筈が無い。

だが、私は聞こえる。化け物染みた聴力を駆使し、トシキの小さすぎる呟きをしっかりと聞く。

そしてそれを聞いた私は、その内容に耳を疑わざるを得なかった。

「…一杯…女性が一杯……露出度高い服を着る女が一杯…たまに風に煽られてパンツを見せるヤツが一杯……胸が大きかったり小さかったりする女が一杯……背が高かったり小さかったりする女が一杯……小さい女の子や大人なお姉さんが一杯……たまにオレに迫ってくる女が一杯……貧乏な女の子や貴族の女の子が一杯……良い性格の女や悪い性格の女が一杯……裸の女が……女が……女が……！」

…何これ怖い。私にとっては嬉しい事だけど……トシキにとっては災いなのかしら…？どんだけ女性が苦手なのよこの子…

トシキは呪詛に近い呟きを繰り返した後、ガタガタと大きく揺れだし……そして止まる。
そして止まった瞬間、トシキの鼻から大量の赤い液体が噴出し、近くに居た蓮也が大量に血を浴びる。

「きゃあああああああああ！！！トシキさあああああああああん！！！」

「ちょ！？トシキ！？なに！？一体何事よこれ！？」

「と、トシキ！？な、何か一杯出てるよ！？だ、大丈夫なの！？」

「どう見ても大丈夫じゃないよチルノちゃん！と、とりあえず止血しないと！」

「いや無理無理無理！これは止めれないっての！ベホイミかけて抑えられない事は無いけど……完全に止めるのは無理だぞこりゃあ！」

「ありゃりゃ。どうしましょ」

「あ、あんま軽い問題じゃないからな鈴仙」

「まぁじでぇ？」

「そこ二人！フザけてないで手伝いなさいよ！下手すると本当に死ぬわよ！！」

「「まぁじでぇ？」」

…またもカオスね……どうしてこうなるんだろう……しかも私と萃香置いてけぼりだし。少しか混ぜてよ。

…と、暢気な事を言ってる場合じゃ無いわよね。さっさとトシキの鼻血を抑えるとしますか。

「あわわわわ…ど、どうすれば…」

「はいはい退いて退いて。今から治療するからちょっと下がってな

さい」

私は早苗や他の子を下がらせ、触手を出す。触手の口から治癒液がダラリと垂れ、トシキの顔面に大量にぶっかける。

すると大量に吹き出ていた血がピタっと止まり、青ざめていたトシキの表情は少しだけ良くなっていた。

「と、止まった…？」

「えぇ。ちゃんとね♪でも、血まで再生出来た訳じゃないから、ちゃんと輸血しないと不味いわよ？」

「え！？でそ、それって永遠亭にでも行かない限り無理なんじゃ…？」

「あ、その心配は無いぞ？」

「え？」

蓮也はトシキに近寄り、以前私とトシキの情報を調べる時に使った双眼鏡型の機械を取り出す。

前と同じ通りにトシキに向け、スイッチを押す。

ここで三秒掛かる筈だったのだが……どうやらあれ以来また改造したらしく、スイッチを押した瞬間に検査が終わってしまった。どんな魔改造よ…

「…ふむ……O型か……何か想像通りだな。うし、ちょっと待ってろ。今輸血パックを出してやっからな」

そう言うと、蓮也は背負っていたバックの中をゴソゴソと探り、何やら銃の様な形をした物と中が真っ赤な血で満たされた輸血パックを取り出す。表面にはちゃんと「O型」と書かれていた。

蓮也は輸血パックを銃型の物に輸血パックを繋げ、トシキに近寄る。てか何時の間にか浴びた筈の血が消えてるし。何したのあの子？

「うっし。ちょっと腕を拝借…」

蓮也はトシキの腕を持ち、取り出した銃型の物をトシキの腕に向ける。そして引き金らしき所をグッと握ると、プシュッ！という音を立てて銃口に似た部分から細い針が発射される。それは微妙にクニャリクニャリと曲がりながらトシキの腕にサクっと刺さる。

そして蓮也は輸血パックを持ち、何故か近くの土を鷲掴みし、真上にフッと投げる。

「メタル・オブ・ガードナー！輸血する時のあの支え棒を作れ！」

蓮也がそう声を張ると、突如舞い上がった土が固まりだし、グニャグニャと形を変え、あっという間に支え棒が出来上がる。

それに輸血パックを取り付け、栓を緩める。輸血パックからチョロチョロと血が流れ出し、トシキの中に流れていく。これでトシキはもう大丈夫ね。

「ふぅ…これで大丈夫だろ」

「あ、有難うございます！零奈さん！蓮也さん！お陰で助かりました！」

「はっはっは！良いって良いって！気にすんな！」

「元凶の癖に笑うな」（ドゴォ

「グボファア！？」

霊夢のサマーソルトが蓮也の顎にクリーンヒットする。中々サマーソルトね……これは将来有望だわ♪

…おっと、こんな事をしてる場合じゃなかった。早く帰らないと慧音に頭突きされちゃう！まぁご褒美だけど！

「…取り敢えず落ち着いたみたいだから、私は帰るわね～
チルノ、大ちゃん、そして萃香。一緒に人里に帰るわよ～」
「「「はーい！」」」

三人は元気の良い声で返事をし、私の下に駆け寄ってくる。あぁ……幸せだわ…

「え、ちょ、何で萃香まで？」
「そりゃあ……ねぇ？」
「うんうん♪だって私達」
「「もう結ばれてますから♪」」
「…あっそ……」

霊夢は若干溜め息混じりの返事をすると、またお茶を啜る。そしてその足元で蓮也はモゾモゾと動き、フラフラと立ち上がる。

「オウフ……霊夢のサマソッ！は効くなぁ……流石は主人公だな」
「？　主人公って？」
「ん？あー…いや、別に気にすんな。ただの妄言だから」
「？？　そう…？」

霊夢は若干顔をしかめて返事をする。そんな霊夢の横では鈴仙がニコニコと笑っている。何だか馬鹿にしている様な気もしない感じだ。今にも「馬鹿じゃないの？」とでも言い出しそうだ。

「ふぅ……霊夢や様々な東方キャラと触れ合えた所で、そろそろ俺も帰るとするかぁ。行くぞー鈴仙」
「はい♪」

鈴仙は笑顔で返事をし、蓮也の腕にピタっとくっつく。それを見た大妖精と萃香が私の両腕にしがみ付いてくる。因みにチルノは頭の上。冷たくて気持ち良い♪

「それじゃあ帰るわ。また次の機会にお会いしましょ～」
「ふふふ♪次ぎ会った時は……必ずヤるから♪じゃあね♪」

私と蓮也は個々に別れの言葉を切り出し、それに続き帰る四人が別れを告げる。

そしてそれに返事をする二人の巫女さんに見送られ、私と蓮也は石段を降りていった…

第三十三話　幻想の日々？：長話の後の茶は旨い（後書き）

トシキの重症すぎる女性苦手体質。そして咲き乱れる赤い花（鼻血）
何だかシュールだねぇ…

今回の補足

・蓮也の銃型の物と輸血パック
銃型の物はＭＧＳ３やＰＷで登場したＥＺＧＵＮを魔改造した物です。
輸血パックはフォールアウト３の輸血パックです。

…あれ？それだと血液型知る必要なくないか？

…まぁどうでも良いかぁ（オィ

さて、次回は蓮也と零奈が去った後の博麗神社とある場所からの視点を同時進行で進めたいと思います。
多分、前後編に分ける事になるかと思われます。
ま、気長に待っていて下さい。

それではまた次回お会いしましょう。

第三十四話　幻想の日々？：向日葵と狂気（前書き）

また間が開きましたが更新です。
今回は事件回想並みの長さになってしまいました…
どうしてこうなった

あ、後、二つ視点を同時に行う予定でしたが、やってみるとかなりしんどかったので、結局別々にやる事にしました。

あーもう…グダグダだなぁ…

第三十四話　幻想の日々？：向日葵と狂気

―ｓｉｄｅ　蓮也―

『太陽の畑』…そこは一面が向日葵で覆われたとてつもなく広い所である。
そこは向日葵だらけのせいなのか、上空から見たら真っ黄色な絨毯が敷かれているようにしか見えないのだ。
太陽の畑には四季のフラワーマスターこと『風見幽香』が良く現れるのだ。

さて、ここで『風見幽香』について説明しておこう。

『風見幽香』とは『花を操る程度の能力』を所持した大妖怪である。幻想郷縁起においては唯一無二の人間友好度「最悪」。自らの生活を邪魔された日には、人間だろうが妖怪だろうが容赦なく、そして無慈悲に攻撃してくる上に、元の性格が相手の神経を逆撫でするのが好きという、何とも酷い妖怪である。
しかし、友好度が最悪とは言え、普通に人里に買い物に来たり挨拶したりする。これは大妖怪だからこそなのだろう。様々な某所での通称はゆうかりん又はＵＳＣ（アルティメットサドスティッククリーチャー）である。ゆうかりん可愛いよゆうかりん。

…とまぁ、こんな感じの奴なのである。

ん？最後のはいらないって？

気にするな！（某キ○ガイなアニメの魔王風に）

さて…何故俺が太陽の畑の名前を出したかというと……現在俺はその太陽の畑に来ているからだ。零奈とは軽く話した後、直ぐに別れたんよ。アイツ…萃香をモノにしたもんだから上機嫌だったよ。ちくせう羨ましいぜ…

…え？所で何で太陽の畑に来ているんだって？そりゃお前ゆうかりんに会いに来たからに決まってるでせう？それ以外に来る予定といえば向日葵を見に来る以外ないでせう？まぁそういう事だ。

最初行った時はゆうかりんはかなり苛立っていたようで、俺がゆうかりんに会えた事でテンションＭＡＸにして欲望に忠実に接していたら見事に肉塊にされちゃってねぇ……再生能力があったから良かったものの、かなりビックリしたようん。

俺はその時、ゆうかりんの怒りを静める為に、防御も何もせずにただただゆうかりんに殴られ続けた。

その結果、ゆうかりんの怒りは収まり、その気に乗じてゆうかりんとお話をして仲良くなったのだ！

ゆうかりんが何であの時あんなにイラ立ってたのかは知らんが、今となってはそんな事はどうでも良いんだ、重要な事じゃない。問題はその後、彼女が俺に対して若干のツンデレ行動を取った事が重要なのだ！

ゆうかりんのツンデレハァハァ…と若干賢者モードに突入してしまったものの、彼女が俺に寄せている好意に胸を熱くさせながら、今日！ゆうかりんは俺に思いっきりデレる！と、霊夢の勘並の勘が働いた事にｗｋｔｋしているのだ！

「その勘は当てになるのか？」

「なるなるものっそいなる。今までもそうだったし……って、ルーミアさん？人の頭ん中勝手に読まないで下さいませんか？」
「別に（ガツガツ）良いじゃない（ムシャムシャ）減るもんじゃ（ボリボリ）ないし（グチャグチャ）」
「うん取り敢えず人の体貪りながら言う台詞じゃないな」

俺の首に噛み付き旨そうに血肉を喰らっているルーミアを見ながらそう言う。だってそうじゃない。何かやりながら言う発言程信用性の無い発言は無いじゃない！ねぇ？そうでしょ？そこの君！

…ん？何時の間にルーミアと合流してたんだって？彼女とは博麗神社を出た後直ぐに遭ったんだ。俺を見つけるなり頭に齧り付いてきたから参ったよ。お陰で頭蓋骨と脳みそが喰われちゃったよ！ハッハッハ！

ん？笑い事じゃないって？そりゃお前俺だから笑い事で済んでるんだろ？それ以外の奴が喰われたら……もはやバイ○ハザー○やデッ○ライ○ングみたいな感じになっちゃうよ！つまりゾンビって事ですね解ります。

まぁ要するに俺に喰らいついたまま離れなかったんでそのまま連れて来たって訳ですよ。いやぁ…東方キャラに食われるのは中々…幸せが感無量だね！

…そういえばどうでも良い事なんだけど……ルーミアなんか背ぇ高くなってね？最初に遭った時よりも１０ｃｍ位伸びてる気がするよ……何これどういう事なの…？

しかも何故だか知らないけど、こいつをアナライザーで調べてみたら……何か「封印状態」って出たんだけど（汗）もしかしてＥＸルーミアフラグですか？そうなんですか？ヤダー！（泣）

お前アレだぞ？ＥＸルーミアって言えば様々な東方二次ＳＳ…その中でも有名所で結構出てんだぞ！例えば某力を操る幼女とか！某恐怖を操る幼女とか！その他諸々で出まくってるんですよ！？もしそんなのが覚醒してみろ、即乱闘だ乱闘パーティーだ（キョ○風に）じゃなかった！殺し愛だよ？恐ろしすぎるでせう！？

…ん？殺し合いの字が違うって？え？これで合ってるよ？何処もおかしくないなうん。

…さて、突然話は変わるが……俺の鈴仙を見てくれ。こいつをどう思う？

「もうルーミア…ご主人様の血が垂れてるじゃない……地面に落ちたらどうするのよ……もったいないわね……ん……ピチャ…ピチャ…ちう……フフ♪おいし♪」

…はい。どう思ったかはさておき、完全にヤバイですね。見事にヤンデレみたいな感じになってきちゃってますね。

まぁ。永琳から話は聞いてたから百も承知だったけどさ……いざやられると……とても可愛く思えてくるね！

え？感性がおかしい？うっせーエビフライぶつけっぞ。

良いじゃないヤンデレ。この下手すりゃ何時でも殺される感じがまたたまらないんじゃないか！しかも東方キャラだぞ？夢にまでみた東方キャラだぞ？素晴らしいじゃないか！東方ヤンデレｗｉｋｉや東方１８禁ＳＳやその他諸々の同人誌を見尽くした俺に隙は無かった！もはや俺に！生半可な常識は通用しないぜ！

まぁ！幻想郷で俺の世界の常識が通用する訳ねぇけどな！

…おっと。こんな所でボーっとしてる場合じゃなかったぜ。早い所ゆうかりんに会いに行かないとな。

「おーしお前等ー早速大要の畑…もといゆうかりんランドに乗り込むぞー＾＾」
「「おー＾＾」」

そんな軽い感じで俺達三人は太陽の畑へと入って行った…

―――――――――――――――――――――

「…で？また懲りずにやってきたワケ？貴方も物好きね…」
「物好きで結構！こうしてゆうかりんに会えるのならば何と思われようと関係ないね！」
「…花の栄養にされてるのに？」
「あぁモチロン！この高宮蓮也！花の肥料にされた位じゃあ怯みませんよ！むしろご褒美です！」
「いやそれは可笑しいでしょ。頭大丈夫？」
「頭は既にイカレてるから大丈夫だ、問題ない」
「大丈夫じゃないでしょそれ…」

ハァ…と溜め息を吐くゆうかりん。俺なんか変な事言ったかな…？いたって普通に紳士的な思考で発言しただけなんだけど…

「多分、それが駄目だったんじゃない？普通のヤツには理解出来ないわよソレ」
「ｍｊｄ？それは失念してたわぁ……って、読むな心を。てか、お前なんで読めるん？」
「フフ♪さぁね？」

ルーミアは口角を吊り上げニヤリと笑う。何だか怪しい笑いだなオイ。てか、最初に会った時と比べてかなり怪しいふいんき（何故か変換できない）も変わってるし。幼さが全く感じられないのはどういう事なんでしょうかねぇ…？

「…いい加減飽きないのかしらねぇ……昨日も一昨日も結局貴方は花の栄養にされただけで何の利益も得られなかったじゃない」
「利益ならあったさ！ゆうかりんに会えるっていう利益がな！それだけで……俺は満足だ！」
「ッ！　…そんな事言って……私を口説く気？」

スッと、差していた日傘を折りたたみ、俺に先を向けながら言う。

「そんなつもりはないですぜ。俺には鈴仙が居ますんでね。こんな堂々と二股する気はないんですわ」

本当は嫁にしたいけどな！でもそれやったら鈴仙に精神的に殺されちゃうよ！それだけはカンベンな！

「ま、そうでしょうね。さて今日はどうする気？またいつも通り栄養になる？」
「あ、ちょっと待って。試したい事があるから」
「？　試したい事…？」

頭に?が見えそうなゆうかりんを他所に、俺は髪の毛を一本引き抜き鈴仙に渡す。

「??　何をしているの貴方?」

「ちょっとした実験の前準備だよ……うし、それじゃあゆうかりん。今日は特別に俺の体全て肥料にして良いぜ!」

「…は?突然どうしたの?自殺でもしたくなったの?」

「そんな訳ねーですよ。ま、貴女は何も気にせず、いつもど~りにやっちゃってくだせぇ」

「…何か釈然としないけど……まぁ良いわ。そんなに言うならやって上げましょう」

ゆうかりんは傘を振り上げた……様子も見せず、気が付かぬ内に俺の腕と足をぶった切る。足の無くなった俺はそのまま地面に墜落する。

普通ならこの後再生が始まるのだが、俺は最近任意で再生能力を発動させないように出来るようになったのだ!そんな事…何の意味があるんだ?って思うだろうが、これは色んな所で使えるんだぜ?具体的には言わないけどな!

ゆうかりんは俺の肉体群を持てるだけ持ち、残りの持てない部分を鈴仙に運ばせる。傍から見たら恐ろしい光景だなこりゃあ……俺は良いとしてもかなり怖がられるだろうなぁ。

そして持ってきた俺の肉体群を向日葵とは別に生えた見た目からしてかなり危ない雰囲気の漂う花の根元の土に俺を乱暴に投げつけた。

「もうちょい優しく扱ってもええんじゃないの?ねぇ?ゆうかりん?」

「貴方がそう望んだのでしょ？」
「はいそうです。ただイッテミタダケー」
「…何かもう良いわ……さっさと食べられてしまいなさい…」

ゆうかりんが呆れた表情でそう言うと、花の根が俺の肉体群に絡みつき、ムシャムシャと喰らい始める。
どうしてゆうかりんはこんな花を育てているのか知らんが……まぁゆうかりんが育てる花だから別にいいかー謙虚なナイトに「お前…それでいいのか？」って言われそうだけどそれで良いんだよ。
それが俺だもの。
そうこうしている内に根は俺の頭にまで及び、俺の脳を喰らっていく。
勿論、こんな事されたら生きていられる筈も無く……

俺の意識は、そこで一時途絶えた。

◇■◇■◇

バリバリと蓮也が食人花に捕食されている様子を眺めながら、風見幽香は複雑な気持ちを抱いていた。　高宮蓮也と呼ばれる男は、三日前に太陽の畑に来た時に知り合った。その時の状況で考えたら遭遇したの方が妥当かもしれないが。
その時の彼女は何時ぞやの『あの事件』の関係で内心苛立っていたのだ。

『あの事件』…その時彼女はいつもの如く太陽の畑で優雅に紅茶

を楽しんでいたのだが、突然月が消え、何処の馬の骨とも解らない妖怪の襲撃に遭い、それらを撃退する羽目になったのだ。
襲撃した妖怪を撃退するだけならば、彼女は嬉々として行い、花の養分としていただろう。
だが、『あの事件』においてはそれが出来なかった。何故なら『あの事件』では月が完全に消え去っていたからだ。

風見幽香は妖怪である。それもかなり上位クラスの。彼女は妖怪である故に月…それも『満月』の出ている夜はその力が活発になる。しかし、裏を返せば『満月』が無くなってしまえば、彼女…いや、彼女だけでは無い。妖怪全ての力が一気に弱まってしまうのだ。
八雲紫の様な『満月』の影響を無効化出来る能力を持った妖怪ならば何の問題もないのだが、そんな能力を持った妖怪…況してや大妖怪は数えるほどしかいないだろう。因みに彼女の能力は『花を操る程度の能力』。故に弱体化に抗う力は持ち合わせていないのだ。

彼女は戦った。弱体化した体で抗えるだけ抗った。
だが…攻め入ってきた妖怪の数に押され、彼女は倒されてしまう。
ボロボロになり、動く事もままならなず、危機的状況に陥った…

だがそれは一体の妖怪の介入により、全て塗り替えられた。

後頭部に立派に生えた黒い二本の角に黒と銀を混ぜた様な長い髪。
真っ黒な和服に身を包み、袖より見える手からは長く鋭い爪が伸びているその妖怪……その名は…

原初の妖怪『夏峰妖華（かほうようか）』

彼女がこの状況に介入した事により、戦局は一気に幽香に傾く事

になる。

夏峰妖夏は二つの能力を持っている。

一つは『ありとあらゆるものを捻じ曲げる程度の能力』。物理的・精神的・概念的な干渉が可能な能力であり、彼女が原初の妖怪として生まれる要員となった能力である。

もう一つは『限界を操る程度の能力』。ありとあらゆる物質や生物・事象・概念等の限界を上下、創造、消滅を行う事の出来る能力である。

彼女は妖怪だ。故にこの状況に介入した所で、月の無い状況下ではマトモな力は出せないだろう。

しかしそれは普通ならばの話だ。妖華にはそんな常識は通用しない。

原初の妖怪である彼女だけは満月による力の変化を受け付けない。彼女の前では月が消えていようがいまいが関係ないのだ。

彼女は自身の持つ能力とありとあらゆる妖怪をも超える身体能力を遺憾なく発揮し、攻め入ってきた妖怪を完膚なきまで叩きのめしたのだ。

幽香は妖華と戦った事がある。当初の彼女は妖怪の中でも既に名の知れた大妖怪だったが、やはりそこは只の大妖怪と原初の妖怪の実力の差があり、彼女は妖華に能力を使わせる事さえ出来ずに負けてしまった。

自らを打ち負かせた相手に助けられた事で彼女は苛立っていたのか？いやそうではない。彼女はもっと別の理由で苛立っていたのだ。

別の理由……それは――――――

妖華が神那女の嫁であった事だ。

誰かの嫁である事は大した問題ではない。問題は……妖華を嫁にしたのが神那女だという事だ。

風見幽香は神那女を憎んでいる。何故なら神那女は幽香の生き甲斐を否定したからだ。

当時の幽香はとてつもない戦闘狂であった。出会う人間や妖怪・鬼・天狗果てには神にまでも喧嘩を売り、それら全てを完膚なきまで叩きのめしてきたのだ。

彼女が神を複数叩きのめした頃、彼女の住む花畑……現在の太陽の畑に神那女はやって来た。

目的は幽香の狂気の封印。彼女を叩きのめした上で幽香の狂気を完全に封印してしまおうとしたのだ。

当然彼女は抗った。そんな事をされるのは溜まったものではなかったからだ。

しかしそれは無駄に終わる。

何故なら……原初の妖怪を倒し、嫁にする様な異常な人間に幽香が勝てる筈も無いからだ。

幽香はいとも簡単に倒され、自らの持つ狂気をあっという間に封印されてしまった。それに伴い、彼女の元々持ち合わせていた『生命を生み出す程度の能力』も使用不能になり、代わりに『花を操る程度の能力』という、あまりにも能力のレベルの差が弱くなるとい

う意味で激しい能力を持たざるを得なくなってしまったのだ。

それ以降……風見幽香は遠命神那女を憎む様になったのだ。

彼女は『あの事件』にて屈辱を味わった。また神那女に弄ばれた、幽香はそう思い怒りを顕にする。しかしその怒りは何処にもぶつける事が出来ない。苛々とした日々が続く…

そんな最中に現れたのが蓮也だった。

只、幽香に会いたいという理由で太陽の畑まで来た彼は、幽香に会えた事で気分を高潮させ、自らの欲望の思うがままに彼女に接した。

しかしそれは、彼女の苛立ちを更に増させる材料にしかならず、怒り心頭の彼女に蓮也はズタボロの肉塊にされた。

しかし蓮也は死なない。自身の持つ超再生能力により一瞬で再生。再生後、幽香の苛立ちに気が付いた彼は……

只何も言わずに殴られ続けた。

幽香は最初、何の疑問も持たずに殴り続けていたが、少しずつ冷静さを取り戻して行く内に、何故蓮也は黙って殴られ続けているのか?何故初対面の私にこんな事が出来るのか?そんな疑問を得るようになったのだ。

殴り、殴り、殴り続け、漸く彼女が疲れでその場にへたり込んだ時、蓮也はそっと彼女に手を差し伸べ、まだ殴り足りないんなら休んだ後にまた殴っても良いんだぜ?と、普通では言う事の出来ない

台詞を吐き、彼女を安心させようとした。
幽香はその時は只の馬鹿だとしか見ていなかったが、蓮也の何かに惹かれ、少しだけだが好意を寄せるようになった。

そんな事があったからこそ、彼女は複雑な気持ちを抱いていたのだ。
本当に食わせるべきだったのか？幾ら彼の再生能力が凄いとは言え、流石にこれは…と、彼女が思っていた矢先だった。

「はぁー…初めての感覚だったけど……かなり楽しいなこりゃあ」

そんな声が聞こえ、彼女は思わず振り返る。
するとそこには……

つい今しがた食人花に捕食されたばかりの蓮也の姿があった。

「…何で生きてるのよ」

彼女は何かを考えるよりも先にそんな事を口走った。恐らく条件反射だったのだろう。

「そりゃまぁ……俺だから？」

ヘラヘラとした表情で蓮也は答える。

正直それは返答になっていなかった。

「…貴方って本当に人間？」

彼女の疑問。それはとても当たり前の疑問だ。

「人間だよ～こんなんだけど人間だよ～」

「…信用ならない…」

当然の反応である。

「信用ならないとは……まぁ良いか。それよりゆうかりん、今日はどうするんだい？また花の手入れでもしようか？」

「いや、今日は別に良いわ。そうねぇ……お茶にしましょうか。偶にはゆっくりと腰を据えてお話しするのも良いでしょう」

声を震わせないように気を付けていたようだが、若干顔が赤くなっている為あまり効果は無いと思われる。

「ほいほい。それじゃあ貴女のお家から貴女のお気に入りのカップと紅茶を持ってきますぬぇ」

そう言って蓮也は幽香の家がある方へと走って行こうとする。

しかしその時、幽香は鈴仙の出したサインに気付く。

それを見た幽香は今正に行こうとしていた蓮也を引き止め、蓮也に

「それと茶菓子もお願い…あ、あまり急がなくても良いわ。ゆっくりでも良いから」

と一声掛ける。彼はその願いを変だと思いつつも素直に受け入れ、鼻歌混じりに意気揚々と幽香の家へと向かっていった。

蓮也が離れたのを確認し、ふぅ…と幽香は一息吐く。
そして鈴仙の方に振り向き、先程までの比較的穏やかな雰囲気から、大妖怪特有の見た者恐怖を植えつける恐ろしい雰囲気へと変わる。

「…何か用かしら……狂気の兎さん？」

彼女は穏やかな口調でありながらも、威圧する様なオーラを出し、場の主導権を握ろうとする。相手が何をするか解らない以上、自分が何時でも行動を起こせる様にする必要があるからだ。

しかし、そんな彼女の威圧に対して、鈴仙はまるで自分には効かないとでも言っているかの様な雰囲気である。
鈴仙はフフッと微笑すると、ニコッと笑顔を作り軽快な口調で話しかけてくる。

「そんなに身構えないで下さいよ～私は貴女に危害を加えませんから♪」

そう言うと、自らの懐に隠し持っていた拳銃を取り出し、それを自らの足元にそっと置いたのだ。
しかし幽香は安心しておらず、自らの持つ傘を鈴仙に構え、下手な事をすれば殺すと言わんばかりに鈴仙を睨む。

「おぉう…怖い怖い♪フフ♪大丈夫ですよ…私はただ、お話がしたいだけなんですから♪」
「…話？」

チャキッと構える幽香の傘は、鈴仙の体を確実に捉える。こんな状況に陥ってしまったら、並大抵の妖怪や陰陽師では立っているの

さえ儘ならないのだが……

鈴仙は…何の身震いも見せず、只悠然とその場に立っていた。

鈴仙は依然その笑顔を絶やさず、先程と全く変わらぬ口調で問いかけてくる

「貴女……明日誰かと戦いますね？それもかなりの強敵と」

その言葉に幽香は思わず驚愕の表情を見せ、その場に硬直してしまう。

確かに彼女は今朝方、紅魔の巨兵ことジェイル・シャドウと死闘を行おうと約束を取り付けて来たのだ。

しかしそれを知っているのは紅魔の完全で瀟洒なメイドである十六夜咲夜と約束を取り付けてきた本人、ジェイル・シャドウ、そして自分のみだ。それ以外の者が知っている筈が無い。

幽香はこの事に頭を悩ませた。何故なら鈴仙の能力では自分の思考を読み取る事は出来ないからだ。それが出来るのは地底に居る覚妖怪の古明地さとりのみだからだ。それ以外に心が読める者が居るとしたら……それはスキマ妖怪の八雲紫のみになるだろう。いや、もしかすれば原初の妖怪である夏峰妖華も可能なのかもしれない。

だが、今はそんな事は重要では無い。最も重要なのは……只の月兎である鈴仙が、自分の思考を『読んだ』という事だ。

「フフ♪そんなに驚かないで下さい。私は単純に貴女の思考の波長を読み取っただけですよ♪」

鈴仙は変わらない軽快な口調で話す。思考の波長から相手の思考を読み取るなんて芸当が正直言って有り得ない事であるのだが、どうやら彼女にとってはそれは簡単な行為らしい。

鈴仙は未だ警戒を続ける幽香に対し、こんな事を告げた。

「それでです。私とご主人様は明日、貴女と相手の方と戦う時に…
…同席させて貰いますね♪」

突然の通達。突然の決定。その突然の出来事に幽香は戸惑った。

「ちょ、ちょっと待ちなさい。何故いきなりそうなるの？あまりに
も唐突で自分勝手過ぎるわよ」

口調こそ荒げては居ないものの、内心は訳の解らぬ発言に対し、
若干の苛立ちを憶えていた。

しかしそんな幽香の内心を知っているだろうが、知らない振りを
し、何食わぬ顔で彼女の意見に答える。

「フフ♪簡単な事ですよ……その時がとても丁度良いのです。貴女
にとっても…私にとっても……
そして何より――――ご主人様にとっても」
「…蓮也にとっても？　…一体どういう事よ」

幽香は傘を握る力を強くし、何時でも妖力を籠められる準備を整
える。話す理由によっては、鈴仙を消さざるを得ないからだ。

鈴仙はそんな彼女を尻目に理由を話し出す。

「…貴女がご主人様の元へと向かうチャンス。私の狂気を増大させ
るチャンス。
そして……ご主人様の狂気を改めて解放するチャンス。
この三つのチャンスが訪れるのですよ？これ程素晴らしい事は無い

のですよ！こんなにも素晴らしいチャンスを……どうして逃す事が出来ましょうか！」

先程までの落ち着いた喋りとは裏腹に、まるで長年自らの欲しかった物が目の前にあるかの様な子供みたいな喜びを、鈴仙は見せている。

そんな様子に、幽香は僅かながらに恐怖を憶えていた。

いや、何故彼女は恐怖を憶えたのか？この位ならば普通に考えても恐怖する必要が何処にあるのだろうか？いや、無いだろう。しかし彼女は恐怖を感じた。

では何故か。その理由は……

「（こいつ……昔の私と同じ……いやそれ以上の狂気を感じる！？一体…どういう事！？）」

そう…幽香は感じていたのだ。鈴仙の尋常ではない狂気を。

幽香は遥か昔封印された自らの狂気を未だ覚えている。だからこそ……鈴仙の狂気がどれだけ危険か、体全体で感じているのだ。

恐怖を覚えている幽香に対し、鈴仙は楽しげに笑い、幽香に近寄ってくる。

「ねぇ！良いでしょ幽香さん！幽香さんの願いも叶うんですよ！素晴らしい事じゃないですか！こんなチャンスまたとないのですよ！ね！幽香さん！！」

あまりにも馴れ馴れしく、勝手な事を良い続ける鈴仙に――――

――――幽香の苛立ちが爆発した

「…いい加減にしなさいよ……貴女…人の気も知らないで……良くも勝手なことを愚痴愚痴とッ！！」

「でも事実でしょう？貴女がご主人様を好きになりかけている事は！」

「ふざけるなッ！！私はあんなのを好きになった憶えは無いッ！！勝手な事を言うんじゃないわよ！！」

そう言った瞬間、幽香の傘の先に妖力が集まり、巨大なレーザー状となって発射される。

ゴウッ！と巨大な音を立てて発射されたレーザーは鈴仙に向かって一直線に飛んでいく。そのスピードは、スピードにおいて最高と言われた天狗の飛行速度にさえ追いつく。威力に至っては大きな山を三つ程消し去れる程。

そんなモノを喰らえば一溜まりも無い。あわや大惨事……

かと思いきや…

「なっ……私のレーザーが……消えた…！？」

そう…幽香の放った巨大レーザーが忽然と姿を消してしまったのだ。

幽香はその事に混乱したが、対して鈴仙は冷静だ。困惑する幽香の表情を眺め、ハァ…と溜めを吐く位の余裕がある。

「…やっぱり……狂気を戻してからの方が良いわね。その方がやりやすいわ」

鈴仙はそう呟いた後、幽香に対し狂気の瞳を発動させようとする。

しかしそこは大妖怪。彼女の目を見ないよう傘で視界を覆い隠し、死角から弾幕を放とうとする。

しかしそれは叶わなかった。彼女の視界が突然眩んだからだ。

これは狂気の瞳による症状の一つ。鈴仙の瞳を見る事で発動するものだ。

しかし幽香は鈴仙の瞳を見ていない。なのに何故彼女はこの症状にかかってしまったのか？

その答えは、あまりにも予想外なモノであった。

「フフ♪今まで瞳しか使わなくて良かったわ～……私の能力が瞳を見る事でしか発動しないと思い込ませれたんだもの！フフフ♪長年我慢してた甲斐があったわ～♪」

「な…まさか……貴女…！瞳なんか無くとも、相手が射程範囲内に居れば、問題なく能力を発動させれたの…！？」

つまりそういう事である。

鈴仙は偽り続けていたのだ。自らの能力の全てを。その事により、幻想郷全ての者達に

「鈴仙の能力は、その赤い瞳によってのみ発動される」

と、認識されたのだ。

自らを偽った事による『結果』。自らの思うように事が運んだ…

…最高の『結果』

彼女は歓喜した。自らの努力が実を結んだ事に。彼女は歓喜した。

自らのシナリオ通りに事が運んだ事に。

鈴仙は直ぐさま幽香の元に駆け寄り、視界が揺らぎ、足元が覚束ない彼女を押し倒し、両腕を片手で拘束する。

「クッ！離しなさい！！」

幽香は必死に抵抗するが、何故か力が入らず動く事が出来ない。

幽香が必死の抵抗を続ける中、鈴仙は彼女の耳元に顔を近づけ、そっと囁く。

「もう抵抗は出来ませんよ？私の術中に嵌ったのですからね……もう余計に抗うのはよしなさいな」

しかし幽香は抗うのを止めない。

鈴仙はハァ…と溜め息を吐き、囁く。

「だから無駄ですって。私の本当の能力である『万物全てを狂わせる程度の能力』の前には、貴女なんて赤子同然なんですよ？だから抗わない方が良いですって」

鈴仙の真の能力…『万物全てを狂わせる程度の能力』これはこの世にある全て……能力だろうが術式だろうが、秩序だろうが概念だろうが問答無用で狂わせる事が出来る能力。

彼女は自らを偽ると同時に、自らの能力も偽ってきたのだ。

こんな状況にも関わらず、鈴仙は笑顔を絶やす事が無い。

内に秘めた最凶の狂気が彼女を絶えず笑わせているのだ。

「…ぜ」

「ん？」

幽香の唇がプルプルと振るえ……彼女は叫ぶ。

「何故こんな事をするの！貴女がこんな事をしなければならない…いや！私が巻き込まれなきゃならない理由はなに！？貴女……一体何が目的なの！？」

その叫びは太陽の畑中に空気の強い振動と共に響き渡る。

その叫びは幽香の家にも届いた筈なのだが……

「そ～んなそ～びでダイジョブかぁ～♪だぁ～～いじょ～～ぶだぁ～も～んだいな～～～いぃ～～～♪」

当の蓮也は能天気にも歌を歌っていた。

幽香の問いに、鈴仙は今まで以上にニカッと笑い、自らの目的を話す。

「フフ♪これはね…『夢』と『復讐』を二つ叶えようとしているの♪」

「『夢』…？『復讐』…？それは一体…？」

「フフ♪『夢』は解らないだろうけど、『復讐』は解る筈よ……だって相手が同じだもの♪」

「相手が同じ…？それってもしかして私……！ま、まさか…！貴女の復讐相手って…！」

幽香はゴクリと唾を飲み、一呼吸置いてから鈴仙に問いかける

「…遠命……神那女……なの…？」

幽香の額からツー…っと一滴の汗が流れ落ちる。

彼女の問いかけに対し、鈴仙はニコッと笑い…

「えぇ…そうですよ♪」

肯定した。

幽香はこの瞬間、何ともいえない感情を抱いただろう。まさかこんな所に自らと同じく神那女に憎しみを抱く者が居るとは思わなかっただろう。

彼女は初めて会えたのだ

真の仲間というものを

鈴仙は、突如、幽香を見て満面の笑みで笑う。

「漸く良い顔になりましたね……幽香さん♪」

「？　何を言っているの貴女…？」

「フフ♪気付いていないのですね♪それじゃあ鏡をどぞー♪」

そう言って鈴仙は手鏡を幽香に渡す。

幽香は自らが気が付かぬうちに口角を吊り上げ、ニヤリと笑っていた。

それは狂気の生んだ笑み。遥か昔に、彼女がいつも行っていた笑みだ。

幽香は驚愕した。昔と変わらぬ笑みを浮かべているなんて、と。

彼女は只、驚くしかなかった。

「フフ♪どうやら封印も解けてきたようですね……あぁでも残念…貴女はまだアイツのせいで完全な狂気に堕ちる事が出来ない……あぁ何と悲しい事でしょう…狂気を解放出来ないのはさぞかし辛い事でしょうね…

でも大丈夫です！私にその身を委ねてくれれば、貴女の狂気を取り戻して見せますよ！どうですか幽香さん？なつかしの狂気を取り戻してみませんか！」

幽香はその言葉に心が揺れ動いていた。もしここで狂気を取り戻せば……この子と協力して神那女を殺せるかもしれない。あの時の

狂気を取り戻せば、今までの腑抜けた自分から脱する事が出来る！
幾度無く湧き出すこの渇きを癒す事も出来る！

戻したとして、自分がどうなるのかは知らない。だが、少なくともこの長年続いた苦しみから解放されるのは事実だ！

だったら……だったら……！

先程まで抵抗を続けていた幽香の動きが、突然止まる。

そう…それ即ち

「あら？抵抗がなくなりましたけど……もしかして良いのですか？」
「…勝手にしなさい」

狂気を受け入れるという事である。

鈴仙は満面の笑みを浮かべると、幽香の顔面に迫り、そして……

「…んむ……」

幽香にキスをした。

「んむ！？ん！ん……んむ……ちゅる…ちゅる…」

幽香は一瞬抵抗する素振りを見せようとしたが、直ぐに力が無くなり、恍惚な表情を浮かべて鈴仙からの濃厚なキスを受け入れている。

「ん…んちゅ……ちゅる……んはぁ…」

それは十数秒間続き、そして鈴仙は幽香から口を離す。

鈴仙はかなりご満悦のようだ。

「フフ♪狂気に染まりだした幽香可愛い♪さっきのよりも何十倍も良いわよ♪」

そう言って、幽香を抱え起こす。

「…それじゃあ明日、ご主人様と一緒に行くから。私の指示通りに動いてね……幽香♪」

「はい、解りました……――鈴仙様」

幽香の目には既に先程までの光は見られない。彼女の目に映っているのは狂気。

そう…彼女は今……遥か昔の自分を取り戻したのだ。

幽香は鈴仙の腕から離れると、地面に落とした自分の傘を拾い、それを広げ悠然と立ち尽くす。

その様はいつもの彼女だが、その中身は完全な別物。狂気を取り戻し、遥か昔の自分となり、それを引き換えに鈴仙の下に付く事になった……一人の狂人だ。

鈴仙は満足していた。自らと自らの主人である高宮蓮也の眷属を一人手に入れたからだ。
彼女は歓喜のあまりに鼻歌を歌う。新たな一歩を踏み出せた事に喜びを感じて。
そんな彼女に一人の少女が話しかけてくる
そう、蓮也に付いて来た妖怪のルーミアだ。
彼女は二人がやり取りをしている最中、おとなしく待っていたのだ。
しかしそれには理由がある。彼女は鈴仙に二人で会話している時は干渉して来ないでね、と約束を交わしていたのだ。
全ての会話が終わり、ルーミアは鈴仙に話しかける。
「…これで漸くスタートを切れたって所かしら？やれやれ…かなり遅いスタートね」
先程の口調以上に大人な雰囲気と口調に変わり、ルーミアは狂気を開花させた幽香を見ながら言葉を繋げる。
「貴女の言う通りに待って上げたわ。それで？この後はどうするの？」
ルーミアの疑問に鈴仙はフフっと笑い、答える。
「勿論、この後はお茶会を済ませた後、彼女（幽香）の家へと向かい、彼女

の魂に至るまで狂気を染み込ませるの♪フフ♪これで二人目ね♪」

二人目、という言葉にルーミアは若干不機嫌そうに反論をしてくる。

「私は貴女と蓮也の軍門に下る気は無いわよ。例えどうであろうとね…」

強気な口調で鈴仙に威圧をかける。

そんなルーミアの言葉と威圧に鈴仙は不敵に笑う。

「フフ♪それはどうかしらねぇ…？意外ともう……貴女は術中に嵌っているしれないわよ？」

「は、世迷言を……私の能力……『闇を司る程度の能力』の前では貴女の能力も通用しないわ」

『闇を司る程度の能力』…それはルーミアが魔神としての全盛期の頃に持っていた能力。生物や物質などの様々な闇をいとも簡単に操れ、しかも闇を生み出し万物全てに孕ませる事が出来る能力である。

ルーミアはその昔、暇潰しと称して自らの力を使い、世界を混乱の渦に巻き込んだ事があった。

彼女を殺そうとした幾多もの人間や妖怪等を簡単に蹴散らしてきた。

彼女は既に自分の敵はいないと思っていた。

そんな最中、彼女の力を抑えようとやってきた、一人の人間が居た。

只の人間であった彼女は自身の持つ能力と剣術と気合で、皆が恐れた魔神のルーミアをいとも簡単に倒してしまったのだ。

ルーミアを打ち倒した後、神那女は彼女の神としての力と『闇を司る程度の能力』を自らの持つ刀の真の力を解放し、一つのリボンにその力を籠めてルーミアの力を封印したのだ。

それによりルーミアは魔神から只の妖怪へと成り下がり、今の今までひっそりと生きてきたのだが……一週間前、一人の女性が彼女に話しかけてきた。

鈴仙だ。

鈴仙はルーミアが神那女に負け、力を奪われた者だと知っており、彼女はルーミアに、その封印を解いて上げる…だから私に協力しなさい、と言われ、神那女に再挑戦したいと思っていた彼女は、鈴仙に協力する事を決意したのだ。

鈴仙は強気な態度を取るルーミアに対し、その内解るわ、とだけ言い、地面に置いた拳銃を拾い上げ、クルクルと手の上で弄ぶ。

「ま、それは後でまたお話しましょうよ♪それより今は――――帰ってきたご主人様を迎え入れてあげないと♪」

そう言って拳銃を弄ぶのを止め、フッとある方向を向く。

そこにはティーセットや茶菓子等々の物を持った蓮也の姿があった。

鈴仙は彼の姿を見て、妖しく笑う。そしてそのままの笑顔でルーミアにこう告げる。

「フフ…これから楽しい楽しいお茶会の時間だよ♪さぁさぁ楽しみましょ♪」

「…そうね」

若干はぐらかされた感が否めないルーミアは、若干の不満を抱きつつも、意気揚々と蓮也の元へと駆け寄っていく鈴仙の後に続き、今までと同じく自分を偽り、幽香と共に向かうのであった…

第三十四話　幻想の日々？：向日葵と狂気（後書き）

いやぁ…何か長くなってしまって疲れたぜぇ…ちくせう

今回の補足

・蓮也の生存

今までの話を見てくれたならば解りますが、蓮也は体全体が捕食されましたが、髪の毛から体を再生させ、そこに死にかけた魂を入れたって感じになります。

ちなみに、今の状態では肉体の再生しか出来ませんが、その内魂の事故再生も出来るようになります。
何でこうなった

・原初の妖怪

自分の作品では、原初の妖怪がサブキャラとして出てきます。
原初という位だからかなりのチートなんですがねｗ

・東方キャラ三名の能力

これは完全オリジナル設定でございます。
東方キャラがこのままじゃ何か物足りない気がしたので、変更させました。どうして原作能力になったのかは作中の通りであります。
解り辛かったら質問して下さい。

・神那女の恨み買い率

結構高かったり。人に感謝される事もあれど、その分恨まれているのですよ。

さて補足終了。そして次回は博麗神社からのスタートとなります。
影の薄かったあのチートが大活躍（？）するかも
それでは次回またお会いしましょう。

第三十五話　幻想の日々？：二人の巫女と剣豪（前書き）

ようやっと更新…そして今回で話が五十部に到達しました
二年で五十…多いのか少ないのか解んないな…

第三十五話　幻想の日々？：二人の巫女と剣豪

これは蓮也や零奈が博麗神社から離れた直後の出来事である…

――ｓｉｄｅ　早苗――

…皆帰って一気に静かになっちゃったな…さっきまであんなに賑やかだったのに……

…でも今までも宴会の時以外はここはいつもこんな感じだったから、あまり違和感というかそんな物は感じない。さっきに比べたら寂しい気はするけど、ただいつも通りになっただけだからあまり問題ないように感じる……って、それは私の言う言じゃないか。ここの人間じゃないし。

…そういえば、霊夢さん今日は何だか楽しそうだったな。宴会でも無いのにあんなに人が集まって尚且つ賑やかだったのは久しぶり…いや初めてだったからなのかな？

まぁ…それを霊夢さんに直接聞く気はないのですが。何だか無下に扱われる気しかしませんし。

あぁ…それにしてもトシキさんはどうしてこんなに女性に弱いんだろう……そうでなければいつでも寝込みをおｓ…ゲフン、よｔ…ゲフンゲフン、一緒の布団に入って寝る恋人みたいな事が出来たのに……ハァ…

…『あの事件』の時、諏訪子様は私の為を思ってトシキさんの女性への苦手意識…もとい耐性をどうにかしようとして下さったけど

……やっぱり駄目でしたね…未だにハーレムという単語を聞いただけで鼻血を出して倒れちゃうから…

…ハァ……トシキさん…早く目を覚まさないかなぁ…気絶回復速度と治癒速度だけはいつも最高にしてあるらしいから、すぐに復活すると思うんだけど……起きないな。

やっぱりアレかな？今回女性が多すぎたのが原因かな？確かに多かったよね～…小さい子から高校生台まで、幅広く（？）居たからなぁ……ま、仕方ないか。

私はトシキさんを膝に乗せたままお茶を飲みつつ空を見る。いつもと変わらない空。でもあの時…『あの事件』はその空さえ無くなってしまった。あの時は夜だったけど。

あの時は明るく調子良さげに振舞ってたけど…正直あの時は凄く怖かった。

だって…異変に加担した妖怪達は全て弾幕を使わずに本気で殺しにかかってきていた。いつもの幻想郷の異変では考えられなかった事だ。

霊夢さんや魔理沙さんにも聞いたけど……スペルカードルールが導入されて以来、こんな事は初めてだそうだ。

異変に最も多く関わってきたあの二人が言うんだ…恐らく…いや本当に不味かったんだろう……

だって……

目の前で人が死んだのだから。

私はあの時、目の前で人の体がグチャグチャに弾け飛ぶ様を目撃してしまった。腕は裂かれ、内蔵が飛び散り、目玉がグシャグシャに潰されている……その様を。

幻想入りして、妖怪退治をし続けていたから、人の死体なんて見慣れたものだと思ってたけど……

全然、そんな事は無かった

私は慣れたと思い込んでいたんだ……幻想郷に来てもう数年も立って、この幻想郷という所を全て知った気になってたんだ。

でも…それは勘違いだったんだ。幻想に過ぎなかったんだ。

私は……浅はかでお気楽な考えでしかいなかった。何の問題も無いと思っていた…

だけど…結局それは間違いで……私は…目の前で人が死ぬのを見て……私は……動く事さえ出来なかった。

もし、あの時神奈子様と諏訪子様に助けて貰わなかったら、今頃……私はこの世に居なかっただろう。あの妖怪の爪が私を切り裂いていたとしたら……私は無残な姿となり、見る影もなくなっていただろう。

結局現人神も人間だ。人より秀でているかもしれないけど――――結局は人間だ。

目の前で人が死ねば恐怖するし、人が肉塊となっていく様を見れば吐き気だって催す。

奇跡を起こせた所で……それは変わらない。私は結局、人間でしかないのだから。

私は少しの間、妖怪退治が出来なかった。妖怪を退治しようにも…先に恐怖が働いてしまい、何も出来ないのだ。
こないだだってそうだ。妖怪に襲われてた人を助けようとしたけど……体が震えて何も出来なかった。あの時トシキさんが居なかったら、どうなってた事か…想像したくない。

私はその晩、トシキさんにその事を話した。その時、何でトシキさんに相談したのかは解らない。
気が付いたら……トシキさんの前に居て、無意識の内に私は話していたんだ。

何で話したのかは解らない。もしかしたら救いを求めていたのかもしれない。
この……恐怖という深く…淀んだ海から救い出して欲しかったのかもしれない。

私は…それ程までに弱りきっていたのだ。

トシキさんは何も言わなかった。何時にも無く真剣な表情をした後に――――

私を抱きしめた

私は一瞬、何が起きたのか解らなかった。抱きしめられているっ

てのは頭では理解していたけど……どうしてそうなっているのか、全く解らなかったからだ。

トシキさんが幻想入りして、知らず知らずの内にトシキさんを好きになって、何時かは抱きしめられたいと思っていた。だから…こうされて、私は幸せな筈なんだ。

どれだけ悲しくたって、夢が叶ったのならば全部吹き飛ぶ筈なんだ。私は昔からそうだったんだ。

だけど…今回に限ってはそうはならなかった。そうはならなかった代わりに――――

私は泣いていた

ただひたすらに泣いていた…トシキさんの胸の中で…普段出すことなんで無い、大きな声で…

トシキさんは、何も言わずにただただ抱きしめ続けてくれた。多分、何も言葉が浮かばなかったから、抱きしめるという方法で何とかしようとでも思ったんだろう。

でも……結局それが、その時の私に必要な事だったんだ。

私は泣いた。ひたすら泣いた。何十分泣いたかは今となっては解らないし、今更気にする必要も無い。

だってもう――――恐怖は消えたのだから。

私は泣いたあの日、決心したんだ。例え何があろうと…挫けないと。例え何があろうと…諦めないと。

恐怖を感じるのは当たり前の事なんだ。誰だって感じるんだ……
そんな当たり前の事を……一々引き摺っている暇は無い。
私は三つの大事を為さなければならない。

一つは守矢神社の信仰を更に強くする事
一つはあの異変を起こした真の敵……ゲームで言うラスボスを倒す事

そしてもう一つは――――

トシキさんを私の物にする事。

全て為して見せる…「……ぇ」絶対に為して見せる…「……え」私と守矢の明日の為に…！「……なえ」その為にもまず、トシキさんの女性耐性を上げないと！「…さなえ」ショック療法じゃどうにもならなかったから、今度は薬に頼ってみましょうか！「…早苗」媚薬でも投入して、トシキさんの気持ちが昂った所で既成事実を…！「早苗！！」

「…は！な、何奴！私を呼ぶ者は誰ぞ！？」
「何寝ぼけてんのよこのスットコドッコイ！いい加減目を覚ませッ！！」

そんな声と共に私の頭に思いっきり響き渡る激痛。私は一瞬、何

が起きたのか解らなかったが、次の瞬間に目が合った人物を見て全てを悟る。

あ、これ霊夢さんのチョップだ…と

「い、痛いじゃないですか霊夢さん！何するんですか！？」

頭を摩りつつ、霊夢さんに文句の様な疑問を言う。

「アンタが呼んでも反応しないから、仕方なくぶん殴ったのよ！そうでもしないと反応しない雰囲気だったし！」

霊夢さんはイラついているのか、声を荒げている。あぁ…ちょっと悪い事したかな…素直に謝っておこう…

「す、すみません霊夢さん！ちょっと考え事をしてたもので…」

「考え事？そこの馬鹿の事？」

霊夢さんはそう言って私の膝の上でスヤスヤと眠るトシキさんに一瞥をやる。

馬鹿って言わないで下さい！事実ですけど！それでも言わないで上げて下さい！

とまぁ、そんな事は言わず、私は笑ってそうですと答える。

え？何で言わなかったんだって？

ただの気紛れですけど何か？

「…ふーん……それにしてもそいつ…何時になったら起きるのかしら？確か能力で早く復活出来る筈よね？」
「その筈なんですが……もしかしたらたまたま解除してて、そのまま気絶しちゃった可能性も…」
「それは……無いとは言い切れないわね…」
「ですね…トシキさんですし…」

私と霊夢さんはクスッと微笑する。
トシキさんは馬鹿ですけど、愛すべき馬鹿なのよ。そんぞそこらの馬鹿とは違うのですよ！偉い人にはそれが解らないのです！

「ハァ…まぁ良いわ。お茶おかわりいる？」
「あ、お願いします」

私は丁度飲み干した湯呑を霊夢さんに渡し、お茶のおかわりを貰う。
そしてお茶で満たされた湯呑をグイッと傾け、ゴクゴクとお茶を飲む。いつもながらに霊夢さんの淹れたお茶は美味しいなぁ。

「…あー…ダルい。何か何もする気起きないわぁ…」

…突然何を言い出すんだこの人は……って、そういえばこの台詞、聞いた事があるような…？

「という訳で寝るから、掃除宜しくね～」

…あぁ…前にもされたアレだ。サボって私に掃除を任せるアレだ。
霊夢さん、これは止めて下さいよ…普通その神社の巫女がやるべき

事でしょうに……ホントそれで良いんですか霊夢さん…

「良い訳ないだろうな。仮にも博麗の巫女であるのだから、その位やらなくてどうするのだ」

「そうですよねぇ…やんなくちゃ駄目ですよねぇ……」

ハァ…と溜め息を吐き、うな垂れる私。

霊夢さんはホント巫女としての自覚を持って欲しいですよ…この人が言うように…

…あれ？そういえば私は誰と話してるんだろう？ここにはもう他に人は居ない筈だし……

…幻聴…？いや、そんな筈は無い。私は確かにこの耳でしっかりと聞いた。私の独り言にも返事したし、そう考えたら幻聴な筈が無い。それじゃあ一体誰が…？

私は恐る恐る声のした右側に目を向ける。

すると

そこには

見たことのある袴

見たことのある刀

見たことのある髪

そして…

見たことのある顔

数年間、見ていなかった懐かしい顔

あまりにも懐かしすぎるそれは

数年経っても変わらず美しかった

私が神奈子様と諏訪子様以外で真に尊敬した人

弱かった私をいつも救ってくれたあの人

神奈子様や諏訪子様を救って下さったあの人

あの人の……名は……

「…遠命……神那女……さん…」

あぁこれは幻想なのだろうか。私の目の前にまた、あの人が立っているなんて…
あぁこれは夢なのだろうか。あの人が、私の目の前で笑っているなんて…

「ククク…元気そうだな?早苗。私は凄く嬉しいぞ」

あぁこれは幻想じゃない。ましてや夢ですらない。
これは現実……真に起きている現実なんだ。

それが解った途端、私の目尻に何か熱い物が込み上げて来て……
私は……

神那女さんの胸に飛び込んだ

――ｓｉｄｅ　霊夢――

人生において乗り越えなければならない山場ってのは一年に一回、いや三、四回位あると思う。
それは避けようと思っても避けられるものではないし、避けられたとしても何時かは越えなければならない。
人間はその葛藤の中で生きていかなければならないそうだけど…正直私には関係ない。何故なら山場が来たら適当に乗り越えているからだ。だから葛藤なんてものも無い。
大体、葛藤なんてどうしてしなきゃならないのよ…面倒な事この上無いじゃない。そんな面倒な事してる暇があったらお茶でも飲みながらダラけてた方が何十倍もマシよ。
それと同じく、修行とか努力とかってのはやったって無駄で面倒な事だ。そんなくっだらない事に時間を費やす必要性が解らないわ……

私は昔からそう思っていた

例え誰に何と言われ様と、その考えだけは絶対に曲げなかった

だけど……

…アイツは私の言う無駄な努力と修行、そして葛藤を続けてきた

んだ…

この…遠命神那女という女は……

私の目の前で、アイツが地に足を付けて威風堂々と立っていた。
私は右手にお払い棒を、左手にはお札を持ち、目の前に居るアイツと対峙する。
私とアイツは動かない。お互いに様子を見ているからだ。

それにしても…これがアイツのオーラなの…？紫や幽香みたいな大妖怪とは桁外れじゃない…！

…ふん。けどそれがどうしたってのよ。

私は博麗の巫女・博麗霊夢よ。例えどんな奴が相手だろうと負ける気はないわ。

絶対に……ね

ヒューっと風が吹き、神社の屋根に止まっていたらしき小鳥の群れが一斉に飛び立つ。

それを皮切りに、私はお札を投げ、アイツは刀を引き抜いた…

―――――――――――――――

アイツは何時の間にかそこに居た。何の前触れも無く、誰にも悟られず、まるで空気の様にそこに居た。

早苗はアイツに抱きつき泣きじゃくっていた。どうやら早苗はアイツと会った事があるらしく、アイツとの懐かしく、楽しい日々の記憶が蘇り、自然と泣いてしまったそうだ。

私はアイツと『久しぶり』に話した。『久しぶり』というのは、私が物心付く前にアイツと過ごしてた事があるからだ。

勿論最初はそんな事は全然知らなかったし、知る気も無かった。でも私の母さん……『博麗霊砂（はくれいれいさ）』が私にある日突然そう言ったのだ。

突然姿を眩ました、その日の前に…

私は母さんに様々な事を教えられた。博麗の歴史・博麗の巫女というもの・博麗を生み出したアイツ…遠命神那女の事…

私は母さんが語った事全てを一字一句鮮明に記憶している。あの時の私はそうするべきだと思い、頑張って記憶しようと努力したんだろう……結局それが私の最後の努力だったんだけどね。

母さんは話している際にある重要な事を伝えた。

それは……

遠命神那女は私の祖母に当たる人物であったという事だ。

博麗の巫女は基本的に世襲制であるのだが、子の居ない状況で継いでいた者が死んだり、行方不明になったりしたりすると、紫が何処からか才能のある女の子を攫って巫女とし、ある程度成長した段階で神那女がその巫女を嫁にし、巫女に子を孕ませ、新たな博麗の一族とするのだそうだ。

私の祖母……『博麗霊樹（はくれいれいじゅ）』もその手によって博麗の巫女となった人間で、どうやら博麗の一族の中で一番神那女に好かれた女性だったそうだ。

まぁそれは良いとして。

私は母さんの話を聞いて気になるモノがあった。

それは『博麗の試練』と呼ばれるモノだ

これは遠命神那女が博麗の巫女となった者の実力を確かめる為に巫女と直接戦って実力を測る試練だそうだ。

この試練は、博麗の巫女となった者がこの先博麗大結界や幻想郷で起こる異変から幻想郷を守れるようにする為に、戦った巫女に助言を行い、修行をつけるんだそうだ。

歴代の博麗の巫女達は、神那女の強すぎる力の前に攻撃を当てる事さえ出来なかったそうだ。

私の母さんと祖母は当てられたそうだが。

この試練で負ければ確実に修行をさせられる羽目になる。私だって例外じゃない。

でも……そんな面倒で無駄な事をやる気なんてサラサラない。てかやりたくない。

今日、此処に来た目的がそれなのだというのならば……

私は……遠命神那女に勝つ

例え夢想天生のスペルカード化を解除してでも……絶対に勝つ

私は神那女を神社の境内の方に連れ出し、何の用か確かめる。

神那女の返答

「お前の考えているので合っているぞ。ククク…果してその程度の思考で私に攻撃を当てられるかな?」

…ムカつく。非常にムカつく。その余裕振ってる表情がとてつも

なくムカつく。
こうなったら本気でブチのめすしかないわね……剣豪だか何だか知んないけど！今まで通りに行くとは思わないことね！！

こうして、私はギャーギャー喧しい早苗を尻目に神那女と戦う事になった…

――――――――――――――――

最初はアレだけ意気込んでたけど……正直かなりキツイ。
アイツ……私のお札も針も飛んでくる物全て一太刀で落としちゃうから、ハッキリ言ってこのままじゃ勝ち目なんて無い。
出だしでスペルカード制限を解いた夢想封印を放ったけど……それも一太刀で落とされちゃうし……何なのアイツ、色々とおかしくない？

…あんなのに一撃当てた私の母さんと婆ちゃんはホント何者なの…？人間よね？私が人間だからそうよね？

…って、そんな事はどうでも良いわよ！それよりも…アレにどうやって攻撃を当てるか考えないと…！

私は空を飛び、神那女から距離を離す。神那女は魔力とか霊力とかを持ってないらしいから、空さえ飛んでしまえば、後はこっちの物……

…だと思うんだけど、何か私の勘が危機を察知してるから、更に距離を離す！

私は飛行速度を上げ、更に距離を離した後にスペカ制限を解いたスペカを発動する。

霊符「夢想封印　散」

スペカが発動した瞬間、大量のお札が神那女に向かって飛んでいく。これはさっき破られた夢想封印よりも上位の技……破れるものなら破ってみなさい！！てかまず飛んでみなさいよ！

「良いだろう。そんなに言うのならば飛んでやろうではないか。その序でに回避してくれる」

…へ？　今何て…

一瞬呆気に取られていたが、次の瞬間、私はとんでもない光景を目にした。

何と神那女が飛んでいたのだ。嘘でしょ！？

「フゥーハハハハハハ！重力に抗えば！この程度造作も無いのだァ！そしてェ！こんな弾幕如きで私に一撃当てられると思ったら大間違いだァ！」

神那女は展開した弾幕を目にも止まらぬ速さでかわしながら突き進んでくる。
ちょ！何なのよアレ！色々とおかしすぎでしょ！？てか何であんなテンション高いのよ！おかしいでしょ！！
クッ！このままじゃこっちに来るわ……急いで距離を離さないと…！
「だが無意味だ！」
「な…！？」
私は距離を離そうとするが、何時の間にか背後に居た神那女に蹴り飛ばされ、私は地面に叩きつけられた。
今のは…神那女の『世界を巡る程度の能力』ね…！
一度過去の世界に飛んだ後に自分の行きたい場所に移動し、そして現代に戻ってくる。そしてそのまま後ろから不意打ちなんてね…
…やってくれるじゃないの！！
アンタのイレギュラー性は良く解った……だったら…これで対抗するまでッ！！
私はお払い棒を両手で持って構え、詠唱と共に力を籠める。
徐々に私の体が透明になっていき、周囲には七つの陰陽玉とお札が展開し始める。
「…来るか…！」

神那女は刀に手をかけ、迎撃体勢を取る。

さぁ行くわよ…これから放つ奥義は文字通り無敵の技。打ち破れるものなら打ち破ってみなさい！！

「夢想天生」

私は目を瞑り、神那女の周囲を素早く飛び続ける。弾幕は自動的に発射され、陰陽玉と共に神那女に向かって飛んでいく。
神那女はそれを捌いているが、そう長くは持たないでしょ。

スペカ制限が解除されたこれは、どんな能力であろうと打ち破る事は出来ない。例え紫の『境界を操る程度の能力』でも映姫の『白黒はっきりつける程度の能力』でも…

さぁ…破れるモンなら破ってみなさいよ……私のこの最強の奥義を！！

「良いだろう…破ってやろうではないか――――お前の望み通りにな」

…は？今何て……！？

突如として答えられた神那女の言葉の後に、私の周囲を覆っていた七つの陰陽玉とお札が一斉に消滅する。

突然の出来事で何が起きたのか解らなかったが……だけどこれだけは解った――

私は今、かなり不味い状況に居ると…

私は咄嗟に夢境「二重大結界」を発動させるが、何時の間にか近付いていた神那女の一閃により簡単に破壊されてしまう。

クッ…かなり不味いわね…！これじゃあ私が発動させた全てのスペカが簡単に破られるわ……

…でもまだ大丈夫よ……こっちにはまだ『夢想天生』がある……これがある限り私は負けな…

「まだそんな幻想を抱いているのか？良いだろう……ならば！！」

神那女の姿が一瞬にして消える。何処…何処から来る…！？

ここは自分の勘に頼って……

…上！

私は真上に向かって神技「八方鬼縛陣」と宝具「陰陽鬼神玉」を発動する。

鬼さえも捕らえる結界と鬼神の如き強さを誇った霊力の玉。この二つが捉えた敵は絶対に逃がさないし……絶対に負けない。流石の神那女もこれは避けられない筈だ…

…当人の姿を確認してはいないけど……私の勘は居ると告げた。だったら居るに違いない。私の勘は……殆ど外れないから。

私は時空転移による不意打ちを警戒し、周囲に気を配る。

正直、夢想天生があるから何の問題もないのだけれど……アイツは何をするか解ったもんじゃないから、警戒しておくに越した事はないのよ。

私は負ける筈が無いと思っていた

夢想天生もあるし、スペカもまだ残っていたからだ

だけどアイツは…

「そ（その）！」

悉く…

「幻想を
げ！」

打ち破ってきた…

「ぶち殺す
ぶ！！」

夢想天生を発動していた私の体に、その強烈な拳が突き刺さる。

私はそのまま殴り飛ばされ、地面へと叩きつけられる。

割れた地面、体に響く痛み、私が叩きつけられた地面を見ると、その二つは正にイコールにでもなっているかのようにさえ思えてくる。

体は全く動かない。動かそうにも言う事を聞かないのだ。

そうこうしている内に神那女が地上に降りて私に近付いてくる。

そして私の隣に来て言った言葉。それは…

「６５点。もう少し冷静になって行動せんか。筋は良いとはいえ…解り易過ぎたぞ？」

…んな…事…知ら…ない…わよ…

―――――――――――――――――――

「…大丈夫ですか…霊夢さん？」
「…えぇ…もう大丈夫よ。もう動けるわ」

私は布団から体を起こし、体を捻ったり腕を回したりして体の状態を確認する。
…うん、大丈夫そうね

それにしても…あれだけの攻撃を喰らって、数十分で回復するなんて……私ってやっぱり遠命の血を引き継いでるのね……身体機能が人間離れしてるわ…

「ククク…元気そうで何よりだ」
「な～にが元気そうで何よりよ。こちとらアンタのせいで色々とボロボロよ。全く…」

溜め息を吐きながら、若干乱れた巫女服を調える。

「ククク…それを承知の上で自ら戦いを挑んできたのだろう？それで文句を言われては困るぞ」
「…まぁ確かにそうなんだけどさぁ…」

…それでも文句を言いたくなるわよ……あんなにあっさり夢想天生を破っちゃったしさ…

「あれしきの技に頼って私を倒せると思ったら大間違いだ。才能はあるのだから……後はダルいと思わずに修行しろ。そうでもしなければこの先生きのこれないぞ？」

「はいはいそうですね…」

私は説教臭い言葉を軽く流して、適当に相槌を打っておく

…さて…と…いきなりだけど…実はちょっと気になることが三つあるのよね…

「ふむ…質問か？良いだろう。存分にするが良い！」

…何でこんな偉そうなのよ…？意味が解らないわ…

まぁ良いわ。取り敢えず質問しましょ。

「…私が聞きたいのは三つあって――」

少女質問中…

剣豪返答中…

「…アンタホント何者？本当に人間？」
「聞き終わって直ぐの感想がそれか…人間だと何度も言っているではないか…いい加減解れ…」

解ってしまったら、それはそれでもう色々と駄目な気がするわ。

「酷いなオイ」

事実だから仕方ない。

まぁ取り敢えず…聞いた事と返答を纏めよう…

疑問その一・なんで心が読めるのか？

どうやら浄瑠璃の鏡（手鏡サイズ）を持っており、それを武器として解放する事で何もかもを暴いていたそうだ。因みにその鏡は映姫のと同じものだそうだ。てか映姫のが神那女のと同じらしいわよ？
…アレ…？って事は映姫って神那女の嫁か何かなの？
…嫁多すぎでしょコイツ…

疑問その二・どうやって夢想天生を破ったのか？

幻想殺し《イマジンブレイカー》っていう異能を殺す力を持ったのと類似したものを作りだし、その力で夢想天生を無効化したそうだ。ちなみに幻想殺しは右手のみだそうだが、神那女のモドキは体全体がそうらしい。しかもＯＮ・ＯＦＦが可能だそうだ。

…何これおかしい。どう考えても色々とおかしいでしょ…

疑問その三・早苗との関係は？

ただのご先祖様だって。

…アレ？ご先祖様？って事はつまり……

「…早苗と私って……親戚だったりしちゃう？」

「…うーむ…そういう事になるんだろうな」

…こんな身近に親戚が居たなんて……確かに服装やらなんやらに共感を持ててはいたけど……世の中って解らないわね…

取り敢えず疑問と回答はこんな感じ。かなり要約してるけど…多分大丈夫よね？

…はぁー……それにしても早苗が親戚だったなんて……世の中って解らないものねぇ

「そうですねぇ…私も驚きですよ」
「そうだなぁ…オレも驚いたぜ！」
「えぇ……って、トシキ？アンタ何時の間に起きてたのよ」
「ちょっと前にな。お前が神那女に質問しようとした辺りで目が覚めて、そのまま早苗と一緒に話を聞いてたんだぜ」
「あっそ…」

…ハァ……まぁ正直こいつが起きてようと関係ないんだけどさ…
…それよりも神那女よ。アイツ絶対何か言うわよ……主に説教的なヤツが

「そういう事を考えるな…マイナスに物事を考えても良い事はないぞ？」
「そうさせてんのはアンタでしょ！！」
「おっとそうだったな……まぁ別に良いのだが」
「オイコラ」

…何かもう……こいつと居ると調子が狂うわ……てゆーか狂わせられっぱなしなんだけど…何なのよもう……話で聞いていた以上じゃない…

「私が異常な変人って事か？全く…霊砂は余計な事を……お陰でからかう楽しみが減ったではないか」
「からかうつもりだったの…？ほんっっっっっとにアンタって変よね」
「あぁ…そうだが？」

「…何かもう良いわ…」

私は溜め息を吐いて、ゴロンと布団の上に寝転がる。

何だか今日はドッと疲れる日ね……変態が二名来るわ、萃香は変態(奈)に惚れるわ、うどんげは何かおかしくなってるわ、トシキはいつも通り鼻血を出すわ、神那女がやって来るわ……どうなってんのよ今日は…宴会の時よりも疲れるし……

…何か……楽しかったし……

…あー！もう！何だってのよ今日は！！なに？異変の前兆！？

「そんな簡単に異変が起きてたまるか……何かあれば異変という思考は止めろ…」

「うっさい！余計なお世話よ！！」

私はイラ立って近くにあった陰陽玉を投げつける

しかしそれは簡単にキャッチされる

「危ないではないか……当たったらどうする？」

「当てようとしてんのよ！！」

「当ててんのよ…じゃないのか…残念」

「神那女さん…相変わらず何を言っているのですか？」

若干呆けた顔をしている早苗が、呆れた感じ…しかし楽しそうに

尋ねる

「ネタだ」

「ネタ？蓮也が言ってるアレか？」

「そうだ。私は現代にも言った事がある故、そういうネタにも長けているのだ。凄いだろう？」

「早苗。それは凄いのか？」

トシキは理解不能なのか、取り敢えず早苗に尋ねている

「一部の人から見たら凄いと思いますよ……多分」

早苗は若干返答に困りながらも、何の文句も言われない妥当な返答をする

「へぇ…そうなんだ。じゃあオレも使ってみようｋ「お前には無理だ。中途半端な人間に使える筈が無い」ひでぇ！？」

…何が中途半端なのよ…？

「それは勿論、知識の量と強者か弱者かって意味でだ」

「だから心を読むな！」

私は封魔針を投げる

しかしキャッチされる

「全く危なっかしい…あ、そうそう。お前に一つ言っておきたい事がある」

「…何よ？説教なら聞きたくないわよ」

「いやそれもあるのだが…それより重要な事だ」

そう言うと、神那女は一呼吸間を置いて、口を開く

だが…

「これだけは言っておくぞ?」

その言葉は…

「お前はこのままでは…」

あまりにも…

「確実に死ぬ」

重すぎた…

「…死ぬ…？私が…？　…何でよ」

「簡単に言えばお前の意識の問題だ。お前の意識がちゃんとしていなければ――――――確実に死ぬ」

「…嘘でしょ？」

「私がこんなクソ真面目に嘘を言うと思うか？」

「・・・」

…何よそれ…意味が解らない……私が……死ぬ？まさか…異変で…？

…有り得ない……今までの異変で命の危機に晒された事なんて一度も無いのよ？それなのに死ぬだなんて……

…今まで？今までって……『あの時』の異変も含まれるの？

…含まれて…

「たまるか。あんな死者がいとも簡単に出た異変なぞ、今まで類を見ないものなのだぞ…？それを今までの異変と一緒にして貰っては困る」

…何よそれ……意味が解んないわよ……

「…なぁ神那女。『今まで類を見ない』って、どういう事なんだ？オレは最近幻想郷（ここ）に来たばっかだから、何がどう違うのかが全然分からねーんだ」

トシキが何時に無く真剣な表情で神那女に問いかける

その質問に、神那女も真剣な表情で返答する

「…今までの異変は……第三者の介入が無くとも問題の無い異変ばかりであった……霊夢や魔理沙…時に咲夜や妖夢、早苗などが解決に向かって、解決される。しかもスペルカードルールがあった故に死者は一人も出なかった……

…だが今回は違う……この異変の首謀者は……我々のルールなどお構い無しに殺しにかかって来ている。奴らにルールなど無い……あるのは幻想郷を乗っ取るという…ムカつく思考のみだ」

「幻想郷を…」

「乗っ取る…？」

…何よそれ……意味が解んない……ってさっきも言ったけど。マジで意味が解んないわよ…？

幻想郷を乗っ取る…？一体それに何の意味が…

「…私を……絶望に陥れる為だ」

「…は？何でよ…？」

神那女は少し暗い表情をし、若干俯き加減に口を開く

「…今回の異変の首謀者……ソイツは私を酷く溺愛し…その愛が過ぎた故に――私の力を奪っていった……奴の真の狙いは私を絶望

に陥れる事…そしてその絶望した瞬間に私の事を手に入れようとしている……」

神那女の表情は暗いものから一転し、怒りの表情へと変わる

「奴は自らの事しか考えておらん…奴は私を手に入れ、自らの物にする為に多くの『世界』を滅ぼしてきた……
しかし何より許せないのは――――――それが私の力によるものだという事だ！！！」

神那女は怒りのあまり、ダン！と拳で畳を殴る。
その畳は、手加減していたとは思うが、完全に割れてしまっていた

「私は…あんな下郎に自らの力を奪われた事が許せん…！奴の卑劣さと…私自身の弱さ……私はその二つに怒りを覚えている！！
奴に力を与えて解き放ってしまったのは私だ……責任は私にある…
…だがこれは私一人の問題では済まなくなった！幻想郷という一つの『世界』が危機に瀕しているのだ…！
私一人ではこの『世界』を守れん……だから私は異世界より六人の強者を招きいれた！紫の協力の元にな…
だがそれだけでは足りぬ…異世界より舞い降りし者達だけでなく、お前達の様な元から居る住人にも強くなって貰わなければならない…そうしなければ……この『世界《幻想郷》』は……終焉を迎えてしまう…！！」

畳を殴った拳が震える

「それだけは絶対にさせてはならぬ…絶対に…奴の思い通りにさせてはならぬ…
私はこの『世界』を愛した者の一人……私はこの『世界』を奴の物

にしたくはない……
私は幾千…幾万もの『世界』を守ってきた……敵は違えど、私は『世界』を終焉へと導こうとする者を……許す訳にはいかない……そういうライダーが居たが、そいつは別としてだ…」

最後のライダーってのが何かは解らないから無視しとく

「奴は私の力を持っているが故に強大……そんな輩と戦う為には…
…お前や他の幻想郷住人が強くなって貰わなければならないのだ…！
お前が修行や努力というものを無駄だと思っているのは知っている
……だが事はそう優しい物ではないのだ…！」

神那女はその強い瞳を私に向けて、真剣な声で言ってくる

「早苗、トシキ、お前達にも言っておく…お前達も強くなれ…！早苗…お前は私の子孫だ。故に死なれては後味が悪い…それにお前を好いてるしな…
トシキ…お前には尋常では無い力がある……今はまだ話せないが…
…お前は近い内に自らの存在の事で葛藤するだろう……だが負けてはならぬ…いや負ける事は許されないのだ…！」

神那女は熱くなるあまり、その手に握っていた陰陽玉と封魔針を粉々に握りつぶしてしまう。

神那女のその言葉と行動と、その表情に、トシキと早苗は心を動かされたらしく、真剣な表情をして、何かを決意したかのように口を開く

「…解りました神那女さん……私…強くなります…！それに…あの時みたいに震えているのは……嫌ですから…」

「へへ…オレに何があんのか知んねーけどよ！そんな事で一々負ける様なオレじゃねーぜ！任せときな……守ってくれと頼まれたんだ…絶対に守ってみせるぜ！！」

二人のその決心した瞳から放たれた思いは、神那女の心に伝わったらしく、上機嫌に二人の肩を叩く

「済まない…私はお前達に感謝する…！」

「そ、そんな大袈裟なものじゃないですよ！当たり前の事を言ったまでです！」

「そうだぜ！オレはありのままお前に気持ちを伝えただけだぜ！だから気にすんじゃーよ！」

二人は照れ臭そうに頬を赤らめる。

だけど…私は……

何故かその姿がムカついて…

「……い」

「…へ？」

「ウザいって言ってんのよ。何よアンタら馴れ馴れしくしちゃって…気持ち悪いのよ」

私は開いていた襖から外へと飛び出す。

「お、おい霊夢！てめぇいきなり何言い出したかと思えば…ちょっと失礼じゃねーか！？」

「うっさいわよ能無し。私はアンタに説教される義理は無い」

「な…！」

あまりに予想外の言葉に、トシキは目を丸くする

「…霊夢…お前…」

「…神那女……私はアンタの意見には従わない。何でかは解らないわ……でもこれだけは言える…」

私は更に上空に飛び、口を開く

「私はアンタが気に食わない……タダ気に食わない……アンタの事がね…」

「霊夢…」

…何よ…何でそんな悲しそうな目でこっちを見るのよ…？

泣き落としでもするつもり…？は…そんなモノは通じないわよ

「…霊夢さん…何かおかしいですよ！神那女さんに会ってからずっと！どうしちゃったんですか！？さっきまで……あんなに楽しそうだったのに！」

「…早苗…」

…確かにあの時は楽しかった……でも今は違う……

状況が……違うのよ…

私は神那女の方に向き直り、冷たい視線のまま、彼女に言い放つ
……否定的な言葉を…

「…私はアンタの意見には従わない……だから……私は私のやりたいようにやらせて貰うわ」

私は徐々に神社から離れていく

「私は今から一度離れるけど！戻ってきた時にアンタ（神那女）の顔だけは見たくない！とっとと私の神社から消えなさいよッ！！」

私は神社から離れ、空を飛ぶ。何処に行くとかは考えてないけど
……暫くはこのまま飛び続けましょ。気分も悪いしね…

私は飛ぶ。宛ても無く…タダ只管に――――私は飛ぶ…

頭に付いていた黒い結晶にも気付かないまま……

第三十五話　幻想の日々？：二人の巫女と剣豪（後書き）

今回は早苗と霊夢の二人の視点に合わせて書きました。
意外と心理描写がメンドかった…特に早苗

今回の補足

・早苗と神那女
二人は先祖と子孫の関係であり、早苗が幻想入りする前からの知り合いです。
実は神奈子と諏訪子を幻想郷へと招いたのは神那女
そして神那女が早苗の先祖という事は…？

・博麗霊砂、霊樹
この作品においてのオリキャラ。まだ名前だけですが、後々登場します。
ぶっちゃけチートですこいつらｗｗｗ

・霊夢の設定
これもオリジナルです。
霊夢は拾われて巫女になったってのが公式ですが、こっちでは一族として生まれた、博麗最強の巫女って事になってます

・博麗の試練
この小説におけるオリジナル要素の一つ。
博麗の巫女となった者は、必ず神那女と戦い、自らの弱点を知り、

それを克服する為に修行する…
まぁようは博麗の巫女であるための試練なんですよ、これ

・神那女の異常性

幻想殺しモドキをいとも簡単に扱えたり、刀の絶ちだけで技を打ち破ったり、重力に抗ったりと、もう異常すぎる…
どうしてこうなった

・霊夢の様子

これは後々の伏線となっております。
霊夢についていた結晶も同じく

今回はこんな所かな?解らない所があれば随時質問してください。
それではまたお会いしましょう

第三十六話　幻想の日々？：妖怪の山と彼女の嘘（前書き）

お久しぶりです。そして遅れて申し訳御座いません…
今回はサクラが中心の回となっております。
本当は前回書くべきことだったのですが……すっかり忘れてましたorz
色々とgdgdですみません…

それと、何時の間にか五万PVを突破していました。
これもいつも見てくださっている皆様のお陰です。
もしかしたら、五万PV突破記念とかやるかもしれませんので、もしやりましたら、温かい目で見てやってください

第三十六話　幻想の日々？：妖怪の山と彼女の嘘

妖怪の山――――そこは多種多様な妖怪が住まう場所…人が足を踏み入れてはならない禁断の地…

この地に足を踏み入れてしまった人間は、運が良ければこの山を実質支配している天狗に追い出されるだけで済むが、運が悪ければ凶暴な妖怪に捕まり喰われてしまう。

故に人間が立ち入る事などほぼないが、博麗と守矢の巫女や、少数の人間だけは、妖怪の山へ足を踏み入れても天狗に追い出される事も無く、凶暴な妖怪に喰われることも無い。

少数…と言っても、その種類は様々だ。

許可を貰っている者や無理矢理進入し続けている者、妖怪にバレないよう変装したり隠れていたりする者んなど、様々である。

そんな恐ろしい場所に、二人の少女の姿があった。

一人はこの地に住まう鴉天狗で、文々。新聞と呼ばれる新聞を作成している新聞記者の『射命丸文』

もう一人は、最近幻想入りしてきたばかりで、文の助手を務めている人間の『サクラ・オールドキング』

二人はレクトとの約束を取り付けた後に、様々な所に取材に行き、今現在、妖怪の山へと帰ってきたばかりなのだ。

さて、今回の話はその少数の人間の枠組みに位置する者である、サクラのお話である…

――ｓｉｄｅ　サクラ――

私は今、妖怪の山上空を文さんと共に飛んでいます。レクトさんと別れた後、私と文さんは新聞に載せるネタを探して幻想郷中を飛び回りました。

様々な所へ取材に行きましたが、収穫はほぼ０…結局得られたものは小さな事でしかありませんでした。

隅から隅まで懸命に探したのですが…どうやら今日は何事も無い平和な一日だったそうです。

私としては平和だった事は良いことだと思うのですが、文さんが仰るには、

「新聞を作る上で一番大変なのは、『変化が無い事』。これと言った大きな事が起きていないという事は、新聞記者としては芳しくないのよ。

そういう日は大抵話が作り物になるか、或いは作らないかのどちらかになってしまうからあまり良いものが出来ないのよねぇ…私はあまりガセを乗せた新聞を載せたくは無いんだけどね…」

と、溜め息を吐きながら話して下さいました。

確かに真実を伝える事が出来ないのは辛い事だと思います。その真実を伝える事で救われる人達もたくさん居るでしょうから…

故に文さんの仰った事は正論です。誰が聞いても素晴らしい事だと思うでしょう…

しかし…私は文さんの言葉を信じる事が出来ません。

何故なら……

文さんのその発言のほとんどが『嘘』でしかないからです

文さんは、私が新聞を捏造している時に、その事を注意すると先程の事を仰いました。

文さんは誤魔化すために私にそんな嘘を吐いたのですが……私にそんなものは通用しません。私の能力でそんな嘘は簡単に暴いちゃいます。

文さんはとても嘘が上手です。何故なら本当の事を話している時と嘘を話している時の表情や仕草、そして口調に変化が無いからです。

よくよく観察しても、文さんの行動に微かな変化さえ発見出来ないのです。

やはり天狗の中でもかなりの知将と言われているだけはあります。嘘の吐き方があまりにも上手過ぎるのですから。

ちなみに、椛さんやはたてさんは嘘を吐くことがほとんどありません。恐らく嘘を吐く必要が無いと思っているからなのでしょう。吐いたとしても、それは本当に知られたくない事にだけしか吐きません。故にお二方に対してかなり好感を持てます。

文さんが嫌いな訳ではありません。私が幻想郷に来たときや、何度か意識を失った時に何度も助けて貰っていますから、嫌いではありません。逆に好きな位です。

でも…だからこそ私は、文さんに嘘は吐いて欲しくないのです…

…と、思う事はいけないのでしょうか…？私としては、そうして欲しいと思い続けているのですが…やはり一ヶ月ほどしかお付き合いしていないと、完全に打ち解けあう事は出来ないのでしょうか…？

…はぁ…何度考えても分かりません…他人との関わりがあまり無かったせいか、コミュニケーションというのがよく理解出来ないのですよね…お陰で幻想郷に来た時は対話などに困りました…今でこそ大分話す事にも抵抗が無くなり、話せるようになりましたが…それでもまだ積極的に話す気にはなれません…何時襲って来るか…分かりませんから…

…あれ？何だかお話がズレた気がします…ま、まぁともかく！要は文さんともっと仲良くしたいのです！そういう事なのです！

…でも…それは無理なのかもしれません……

何故なら……

私自身も……嘘を吐いていますから……

「サクラー？何ボーっとしてんのー？早く行くわよー！」

「あ、はーい！今行きまーす！」

…いけません…少しボーっとしてしまいました…今は仕事中なのですから…しっかりしないと…

私は文さんの所へすぐさま向かい、一礼する。

「どうしたのよ？ボーっとなんてしちゃって」

「いえ…もう幻想郷（この場所）に来て、もう一ヶ月経ったんですね…とか考えてました♪」

「一ヶ月…もうそんなに経ったのね…早いもんねぇ」
「ですね♪」

私は笑顔で返事をする。

…改めて考えますと…もう一ヶ月も経っていたのですね……あの頃は追われてばかりで日にちなんて気にする余裕がありませんでしたから…

…本当に……ありませんでした……

…あれ？あそこに見えるのは……黒い霧…？何でしょう…？何か禍々しい気を感じます…

「文さん！アレは一体何でしょう？」

私は文さんを呼び、黒い霧を指し示す

「…アレって…もしかして…！」

どうやら文さんはあの黒い霧の正体を知っていたらしく、普段の明るい表情から切羽詰った表情へと変化させると、目にも止まらぬ速さで霧が発生している地点へと飛んでいってしまった。

文さんがあんなに慌てるなんて…もしかしてかなり危険なものなのでしょうか？だとしたら…早く行ってどうにかしませんと…！

私は思いっきり加速し、文さんの後を追いかけていった…

文さんを追いかけ、森へと降り立ちましたが……これは一体どういう事なのでしょう…？

私の目線の先には穴がたくさん掘られており、それはまるで幻想郷に来て読んだ本に書かれていた「クレーター」というものにそっくりで、あの黒い霧はそこから発生していたのです。

…一体何時の間にこんなにたくさんの穴が？そしてこんなにも濃い霧が？こんなものがあったのならば、私達が気付かない筈が無いのですが…

私は穴の中を覗き、中を良く観察する。穴の中には特にこれと言って何かがある訳ではなく、何の変哲も無い所から霧が発生していたのです。

…何なのでしょう…この霧は…？何の変哲も無い穴からこんなに出てくるなんて……霧を発生させている何かに不可視魔法でもかけているのでしょうか？しかしそれならばどこか一点から出ているのが解る筈なのですが…これはこの穴全体から発生しているように見えます。

となれば、この穴自体が何かしらの魔法や術式により作られたものである可能性が高いですね……ならばこの穴に解呪（ディスエンチャント）を施した後に穴を埋めて保護（プロテクト）を行えば…防ぐ事は可能です。

しかし…それを施そうにも数が多すぎます。それにこの穴が魔法や術により施されたものであるという保障もありません…もしかすると能力により作られた穴かもしれませんし、もっと未知の何かで作られた穴かもしれません……それがハッキリとしない限りは、どう処置すべきかが皆目見当がつきません……むぅ…どうすれば…

…そういえば……先行した文さんは何処に？周囲を見渡しても、文さんらしき影は見当たらないのですが……一体どこに…？

私は穴の観察を止め、文さんを探し始める。霧が濃く、視界を奪われ探すのが困難ではありますが、そんな事を言っている場合ではありません。もしかしたらこの霧のせいで文さんの身体が大変な事になっている可能性もあるのです。それを考えると……悠長な事を言っている場合では無いのです。早く文さんを見つけないと……

私は周囲を走り回り、木の陰や林の中など、居る可能性のある所は全て見ました。

その懸命な捜索が功を奏し、私は文さんを見つける事に成功しました。

文さんはかなり体力を消耗しており、喋るのもやっとという状況でした。

私は何とか回復魔法で文さんを治療しようとしましたが、回復魔法の技術に乏しい私にものでは、文さんを何とか落ち着かせる程度の事しか出来ませんでした。

私の能力を使えば、この位直ぐに治す事も可能なのですが……

…でも…使いたくても使えないのです……一度この能力を他人に対して使用すれば、今まで隠してきた意味が全くなくなってしまう…私の苦労が水の泡になってしまうのです。

確かに文さんの命の方が大切なのですが…それでも…これは…使えません…

私が思考を錯綜させている時に、重症だった文さんが目を覚ましました。

文さんに身体の具合をお聞きすると、文さんは「あまり良くない」

と答えました。
　どうやら文さんは、今現在発生しているこの黒い霧を多量に吸ってしまったのが原因でこうなってしまったそうなのです。私も一応吸ってはいるのですが…どうやら、私の特異体質と魔物病で頑丈になっていたお陰で効果はあまりないようです。
　更に詳しくお話を聞くと、どうやらこの黒い霧は『瘴気』と呼ばれるものだそうで、これを吸ってしまうと、微量であろうと３９℃の高熱を引き起こしたり、あらゆる病気にかかったりすることさえある恐ろしいものなのだそうです。
　瘴気の元は全ての生物の心の中にあるマイナスの感情…それが募りに募って実体化してしまったものなのだそうです。
　これの対処法は瘴気が発生した地点に住む方々にお話を聞き、彼らが持っている大きな問題を解決する事によって消す事が出来るそうなのです。

　しかし…この瘴気の発生原因はあの穴……文さんに瘴気の発生地点にあのような穴はあるのか聞きましたが、普通はあんなものはないのだそうです。
　となれば…考えられることは一つしかありません。

　そうそれは……あの穴が人為的に作られた物であるという事です。

　そんな事は普通に思いつくかもしれませんが…よく考えてください。とてつもない量の負の感情が集まって初めて発生するものが、人工的に作り出されるなんて事は有り得ないのです。それを考えれば…これがどれだけ恐ろしいものなのか…想像出来るはずです。

　…さて…語り部のように説明をして、何とか心を落ち着かせよう

としましたが……駄目です、全然落ち着けません……うぅ…早く何とかしなければ…文さん以外にも犠牲者が出てしまいます…何とか能力を使わずに解決出来る方法を…！

「さく…ら…」

「！　文さん！？駄目です喋っては！体力を消耗してしまいます！」

私は魔物化し、文さんを抱える。

落ち着いてください私…確かに瘴気を何とかしなければなりませんが、文さんを安全な所へと連れて行かないことには何も出来ないではありませんか…！とにかく…とにかく文さんを安全な所に…！

私が空へと飛び立とうとしたその時、文さんは私の手を強く握った。

「アンタ…一体…何処に行く気よ…」

「文さんを安全な所へと連れて行くのです！そうしないと…文さんの命が…！」

「馬鹿…！その間に…他の天狗…が…瘴気を…吸っ…たら…どうする…気よ……此処は…天狗の里の…近く…なのよ…？そんな事に…なったら…！ゲホ！ゲホ！」

「し、しかし…文さんが！」

困惑する私に、文さんは私のカメラを手に取り私の手に乗せる。

「見縊らないで…よ…私は…まだ持つ…それよりも…この情景を…カメラに収めなさい…！」

「！？　な、何を言っているのですか文さん！今はそんな事をしている場合では…！」

「フフ…アンタも…まだまだ青い…わね…こんな美味しいネタ…撮

っとかないでどうするのよ…！これを新聞の見出しにして…やれば…読者が釘付けになること…間違いなし…でしょ…！」

文さんは荒く息を吐きながら、私に強く力説をしてくる。

私はしかし、と反論するが、その言葉を妨げるように文さんは言葉を続ける

「アンタは…解ってないでしょうけど…一流の…記者ってのは…スクープを物にし…そして…仲間も守るものなのよ……まぁ…事を急いで…こんな感じになってたら…何の意味も無いんだけどね…」

「文さん…」

文さんは口角を上げ、微笑をしながら更に言葉を続ける。

「サクラ…私は…大丈夫だから…早く…この瘴気を…何とかしなさい…いい…わね…？」

…文さん……

…分かりました……私は……この瘴気を……――消します

本当はあの能力は使いたくないのですが…文さんの気持ちを無下にするわけには行きません…！

私は文さんを近くの木にもたれさせる。

文さんを抱えていては…あの能力は使えませんからね…

「さく…ら…？」

「文さん…少しの間だけ目を瞑っていて下さいね♪」

私は笑顔で文さんにそう伝えると、両手を前に出し、ただ一言…
…言葉を呟く

この瘴気と穴を――――

――――『虚無』と化せ…と……

――――――――――――――――――――

私は今、文さんの家で文さんを看護しています。文さんの容態は、瘴気から離れたことによりすぐに良くなりました。どうやら瘴気というものは発生源が消えてしまうと、すぐに体から抜けていくのだそうです。

あぁ…良かったです…文さんが治ってくれて…本当に良かったです…

「…ん…あれ…此処は…？」

布団が少し動き、文さんはゆっくりと目を開いて、自らの所在地の確認をする。

私はすぐさま文さんの近くまで寄り、文さんの顔を覗き込む。

「あ、文さん！目を覚ましましたか！」
「サクラ…？此処は…どこ…？」
「ここは貴女の家ですよ。あの瘴気と穴を消滅させた後にここまで運んできたのですよ♪」
「そう…なんだ……あ！写真は！？」
「大丈夫ですよ♪ちゃんと撮ってあります」

私はそう言って胸ポケットから数枚の写真を取り出し、文さんに手渡す。

「そう…良かった……はぁ…安心したら何か眠たくなってきたわ…」
「あ、お邪魔しちゃ悪いので出ますね。起きましたら写真の方をお願いしますね♪」
「ん…解った…わ…」

文さんはその言葉を言い終わると、すぐに寝息を立て始め、深い眠りへとつきました。

私は文さんを起こさないようそっと家を出て、扉を閉め、ふぅ…と息を吐く。どうやらあの能力はバレていないようです。良かったです…

さて…これからどうしましょう。文さんが起きた時にすぐに仕事を始められるよう準備でもしておきましょうか？

…よし、そうしましょうか♪

私は仕事の準備の為に、私の家へと向かおうとする。

しかしその時、私の背後から、誰かが私を呼ぶ声を聞き振り返る。
するとそこには……はたてさんが居ました。

「こんにちははたてさん♪どうか致しましたか？」
「文の容態の確認とサクラに伝言をね。文は大丈夫だった？」
「はい！問題ないです！今はグッスリと眠っていますよ♪」
「そう…解ったわ」

はたてさんはふぅ…と息を吐き、安堵の表情を見せる。

「ところで…私に伝言とは…？」
「えっとね…天魔様がサクラを呼んでるのよ。何か色々と聞きたいことがあるとか何とか」
「聞きたいこと…？そうなのですか…解りました、すぐに向かいますね」
「んー。じゃあ私は瘴気の探索とかするよう言われてるから。じゃあね」
「はい！気をつけて下さいね♪」

はたてさんは軽く手を振ると、瘴気があった辺りに飛んでいってしまいました。

さて…私も行くとしましょう！
私は天魔さんの館へと向かった…

―――――――――――――――――――

さて…天満さんの館に来たわけですが…相変わらずピリピリとした空気を感じます……いや…今日は今まで以上な気がします…

やはり瘴気が見つかったのが原因でしょうか…？良くは知らないのですが…紹介天狗さんの話によると、何百年か前に瘴気で天狗の里が壊滅に追いやられたという事があったらしいのですよ…どうやら天魔さんはその時の生き残りだそうで、その事件のせいか瘴気に対してかなり敏感になっており、瘴気が発生したと知るといつもこういったピリピリとした雰囲気にしてしまうのだそうです。

そんな空気の中での呼び出しとなると…多少の怒声は覚悟しておいた方が良いかもしれません……うぅ…怖いです…あの人何故か私に対しての風当たりが強くて、少しだけ苦手なのですよ…うぅ…大丈夫ですかね…？

私は天魔さんの部屋の前に到着し、扉をトントンと叩く。叩く時も恐怖心のせいか、若干小刻みに叩いてしまいました……怖いです…誰か助けて下さい～…

私が震えている内に、中から声が聞こえる。

「…入んなさい」

「は、はい！　し、失礼します…」

私はビクビクとしながら、他の家とは一風変わったドアノブ式の扉を開ける。

するとそこには……

私や文さんが着ている服に赤と緑のラインを入れた少し派手なデザインの服を、タイを外し、首もとのボタンを外しており、全体的にかなり乱れた感じになっており、ズボンはスカートではなく、黒っぽいスラックスを穿いている。座椅子に座り、若干乱れた黒髪を掻き分けながら、タバコを燻らせ、かなりイラついた様子であるボ

ーイッシュな雰囲気の女性が居た。

「何か…御用でしょうか…――――天魔さん」

そう…この人こそ、この妖怪の山を治めるお方である天魔さんこと『天川風魔（あまのかわふうま）』さんです。

…うぅ…やっぱり怖いです…いつもよりも怖いです……で、でも…話はちゃんと聞きませんと…

私は身体をカチコチと固めて、いかにも緊張しているのが目に解るような姿を見せる。どうにか緊張を解そうと深呼吸をしましたが…全然落ち着けません…寧ろ余計緊張してきましたよ……はわわわわ…どうしましょう…

そんなこんなしていると、天魔さんの口が微かに開く

「…かい」

「ふぇ？何かいいましt」

「…無駄にデカいのよ！この牛乳がぁぁぁあああああああああ！！！！！！」

「ふぇ！？な、何を言って……ふにゃあ！？」

唖然としている私の胸を、天魔さんは思いっきり掴む

「毎度毎度何なのよこの胸は！どうしてこんなにデカいのよ！無駄ってレベルじゃないわよコノヤロー！！」（もみもみもみ

「ふぇぇ！？何を言ってるのですかぁ！？止めて下さいよ～！」

ジタバタと体を動かし、何とか天魔さんを離そうとしますが、天

魔さんは離れようとしてくれません。うぅ…痛いです…

「て、天魔さん！お願いですから離れて下さい！胸は大きくなくても別に大丈夫ですよ！寧ろ大きい方が不便ですｓ」

「煩い！！お前に私の気持ちが解るのか！？１８３ｃｍという長身で！全く胸の無いことがどれだけ悲しい事か……お前に解るかああああああああ！！！！！！」（もみもみもみもみ

「ふぇ～ん！止めて下さいよ～！」

「止めない！私の胸が！育つまで！揉むのを！止めないッ！！」

天魔さんの胸揉みは更に激しくなる。

毎回天魔さんの所に来ますと、毎回毎回これをされているのです。これ、かなり胸痛くなりますし、次の日にはほんのちょっと胸が大きくなりますから嫌なんですよねぇ……早く止めてくれませんかね…

…あ、そうです用事。用事の事を言えば、流石の天魔さんも離れて下さるでしょう…

「て、天魔さん…用件とは何でしょう…？まさかこれをする為に呼んだのですか…？」

「用件？　…あ、すっかり忘れてたわ」

天魔さんは私の胸から手を離し、さっき吸っていたものを踏み潰し、改めて一本タバコを取出して吸い始めた。

…ふぅ…良かったです……何とか離れて下さいました……このままあの状態でしたら辛かったですから…

「あー…悪かったわね。デカい胸を見ると無償に腹が立ってくるの

よ…」
「あはは……えーと…それで用件というのは…？」
「あ、それは人が来てから話すわ」
…人？一体誰が来るのでしょう…？
「すぐには来ないと思うから、楽にして待っててよ」
「あ、はい。分かりました」
私は近くの壁にもたれて、今から来るであろう人物を待った…

――十分後――

ボーっとしていたせいか少しだけ眠たくなってきました……ふぁ…やはり春は眠たくなりますね……あふぅ…今にも眠っちゃいそうです…
私の瞼が次第に閉じかけてきたその時、扉がトントンと叩かれました。どうやら到着なされたようです。さて……一体誰なのでしょう…？
「おーい天魔ー？居るなら返事をしろー。答えは聞いていないがな！」
ガチャっと扉が開けられ、そこに居たのは…

「か、神那女さん！？」
「お、サクラ。一週間振りだな」

そう…私の命を何度も救って下さった…遠命神那女さんだったのです。

「はっはっは！元気そうだな！いやぁ良かった良かった！」
「は、はい！神那女さんもお変わりなく♪」

パンパンと肩を叩いてくる神那女さんに私は笑顔で応える。まさかこの人が来るとは思いませんでした……予想外でしたが、これは嬉しい誤算ですね！

「良し…それじゃあすぐにでも始めよう！　…と言いたい所だが、その前にサクラにこいつを紹介しておく。入って来い！」

神那女さんの呼ぶ声と共に、部屋の中に一人の女性が入ってくる。その人は黒と銀が混ざった長い髪をしており、後頭部からは立派な角を二本生やしている。真っ黒な和服を身に纏い、白の帯で腰の辺りをしっかりと締めている。私や天魔さん、神那女さんに比べると背が小さく感じます。ですが１６０台はあるのではないのでしょうか。かなりの美人さんで、何だかおとなしそうな雰囲気を感じます。一体どちら様なのでしょうか？

「紹介しよう。こいつは『夏峰妖華（かほうようか）』。原初の妖怪だ」

…原初の……妖怪……？
原初というと…つまり最初に生まれた妖怪と言うことですか？そんなお方が…何故神那女さんと一緒に？

「ん？どうかしたか？」
「あ、いえ……そのお方と神那女さんはどういったご関係なのかと思いまして…」
「何だそんな事か。何、至って普通の関係だぞ？」
「普通…となると友人関係とかですか？」
「いや嫁だが？」

…

……

……え？

「ちょっと神那女…アンタそういうのをサラっと言うんじゃないわよ。見なさいよ…アイツポカンとしてるじゃない」
「む？　…お、本当だ。うーむ…もうちょっと重めに言うべきだったか？『彼女は私の親愛なる嫁だ』とか」
「いやいやいや…大量に女を嫁にしてる分際で親愛なるとか説得力がまるで無いわよ」
「むむむ…しかしだな妖華。私はこれが当たり前なのだ。今更変えろなどと…」
「いや変えろとは言ってないわよ。言い方を何とかしなさいって言っただけよ」
「いやしかし…」
「おーい。お前等ーサクラをフリーズさせたままで放置すんなー」
「む？　おぉスマンスマン。うっかりしていた。大丈夫かサクラ？」

…は！わ、私は一体何を！？確か…神那女さんが妖華さんを嫁さんだと言った所から全く記憶が無いのですが……あれ？あれ？

「…大丈夫なのコイツ？」
「解らん。まぁ揺すれば起きるだろう…おーいサクラー？大丈夫かー？」
「…だ、大丈夫です……多分問題ありません…」
「お、そうか……って、いきなりその返事は可笑しい気が…」
「あ、えと…揺すられる前に…意識がハッキリしましたから…」
「そうなのか？なら良いのだが」

そう言って神那女さんは私の肩から手を退ける。

「さてと…コイツの意識も戻った事だし、とっとと始めるわよ」
「？　何をですか？」
「あ？何ってそりゃあ……『あの事件』についての意見交換でしょ？」
「ふぇ？私何も聞かされてないのですが…」
「…はぁ？　…あぁそうか…そういう事か…」

妖華さんの顔に青筋が入り、とても怖い表情になりました……って、え？何故そんなに怒っていらっしゃるのですか？

「天魔ぁ…確か言ったわよねぇ…？ちゃんと説明しておきなさいって！」
「…あ。そういえばそうだった。サクラの胸の大きさにイラだって忘れてた☆」
「あ〝ぁ〝？まだそんな下らない事気にしてたの？馬鹿じゃねーのアンタ」
「はぁ！？Ｄカップが何をほざきやがる！！こちとらＡだぞ！？お前のようなデカ乳とは違うんだよ！！」
「だから何よ！そんな事で呼び出した理由伝えてないとかばっかじ

ゃないの！？」
「馬鹿じゃないわ！少なくともお前よりは良い！」
「あ〝！？言ったなこのボケが！今すぐ此処でぶっ殺してやｒ」
「はいはい黙れお前達」

神那女さんが二人の頭を掴むと、無理矢理二人にキスをさせました。

って、えええええええええええええええ！！？何でキスさせているのですか！？私てっきりお二方の頭同士をぶつけるのかと思いましたよ！

「…良し、落ち着いたか？」
「…いきなり何すんのよ／／／」
「…あ…うん…凄く落ち着きました／／／」

お二方は顔を赤らめ、目を逸らす。

「…さてと。これで漸く事を始められるな」
「えっと…『あの事件』の事で情報交換するのでしたっけ？具体的にどうすれば？」
「何、そんなに難しい事ではない。『あの事件』の時に、お前は何をしていたのか、詳しい事を聞かせて貰えれば良いのだ」
「それだけで良いのですか？」
「あぁ。それだけでも充分情報は得られる。まぁお前は気にせずに

話してくれれば良いのだ」
「ふむ…」

…それだけで良いとは…それでは情報交換とは言えないのでは無いでしょうか…？確かにお話の中から何か掴めるものはあるかもしれません……しかし、それだけでなく、私自身にも何か気になる点とかを聞くのが普通でしょう…それをしないなんて…

それが真実かどうか判断出来れば良いのですが……神那女さんの能力の前では私の能力は全く歯が立ちません。故に何も見出すことが出来ません……

…とりあえずお話をした方が良さそうですね……何も見出せない以上、素直に話しておいた方が良いでしょうし。

「…分かりました。私のお話が参考になるかは分かりませんが……それでも良いのならお話しましょう」
「うむ。まぁ何だ。あまり力まず気軽に話してくれ。その方が私としても楽だしな」

そう言って神那女さんは壁に近くのもたれかかる。座って楽な姿勢になる。

私はお三方の様子を確認してから、『あの事件』の時の事を語りだしました…

第三十六話　幻想の日々？：妖怪の山と彼女の嘘（後書き）

色々と謎が更に深まった今回。そして色々と分かりづらかった今回。もしかしたら、質問しないと分からない所がそれなりにあったかもしれません。

今回の補足

・サクラの能力
前話にて二つしか語られませんでしたが、実は…？

・瘴気について
これは本来のものとは違っており、オリジナルなものとなっております。
ちなみにこの瘴気というのは実体として存在するものではなく、影のように見えているだけなので、風で吹き飛ばそうと思っても吹き飛ばせません。
文もその事は分かっていたのですが、里に瘴気のことを伝える事ばかり考えていたので、何の対策もなしに瘴気の中に突っ込んで、本編のような状況になってしまった訳です

・天魔
名前の由来は結構後の話にて説明されます。能力はサクラの事件回想が終わってから分かります。
あれ？あんまり説明する事なかった？

何だか、今回の補足は補足とは言い難いものでしたね…どうしてこ

うなった

さて次回はサクラの事件回想になっております。例の如く前後編仕様になっておりますが、また例の如く遅くなること必須ですので、気長にお待ちくださいませ。

それではまた次話にてお会いしましょう

連絡

今回は小説の更新ではなく、少しばかし重要な連絡があり、投稿させてもらいました。

現在連載中の東方七人録ですが、一時的に更新を停止することになりました。といっても1~2ヶ月程度ではありますが。

理由としては学校関係があまりにも忙しすぎる、別に更新中の東方聖生伝の更新があまりにも遅すぎるのでそちらに集中したいというのが主です。他にも一応理由はありますが…まぁそれは別にいいでしょう。

そんなわけなので、更新をお待ちして頂いている方々には大変申し訳ございませんが、次回更新は恐らく年明け前かクリスマス頃になると思います。

大変身勝手なことではありますが、何卒ご理解の程をお願い申し上げます。

それではまたおよそ2ヶ月後にまたお会いしましょう。それでは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2985l/

東方七人録～ある七人の物語～

2011年10月13日18時51分発行